



1 2 月 3 1 日

---

---

かもめ7440

---

## ある日の僕はそんな風にニヒルに笑った

---

思春期を境に生殖ホルモンを活発に分泌する、

というのは、どういうことだろうかと、昔、考えたことがある。

雪の性質だったもの、木の性質だったものが、

目の性質、鼻の性質となってゆくことだ、と、

とある年の春の僕は考えた。

花開く、ということである。

肉体が成長するというのは痛快無比な出来事であり、

これは、人間が動物であろうとすることを、

最大限に認められる契機だ。そしてまた、

歳を経るにつれ、成長を実感することが極端に難しくなることを、

知っている僕にはこういうことが、とても重要なのだろう。

種族維持本能の権化とも言えそうな蟻ですら、

女王蟻のために生きる。生殖能力がないのに、だ。

それまで不活性だった卵巣、精巣から分泌される性ホルモン、

すなわちエストロゲン、テストステロン分泌が活発となり、

身体各組織に作用する。

それにより女性、男性のそれぞれの特徴的な体型へと変化する。

ちなみにエストロゲンのみが増加する排卵前に、

〇.二～〇.三度低くなり、排卵後のプロゲステロンとエストロゲンがともに、  
増加する黄体期に〇.三～〇.五度高くなり、  
高体温期である黄体期は運動に不利であるとされている。

ちなみにこの体温は朝一番低く、夕方一番高くなる。

もちろん、運動、時間、気温、食事、睡眠、

感情の変化などにより変動しているが、

たとえば思春期、僕はこれをあえて三十六.〇度だと表現しよう。

三十代は下がっているのではない、四十代もそうだ、

おそらくもっと上がっているはずなのだ、夕方へ向かっている！

そしてそれゆえにもっと落ち着いているはずなのだ、と。

そしてこの微妙な温度ないしは体温のなかに思春期がある、と。

僕は時折じっくり真面目に考える。

ホルモンを作りだしているのは脳の指令なのだ。

人間の脳には怒ったり緊張したりするとノルアドレナリンという、

ホルモンが分泌され、願望などが実現され楽しい気分になると、

約二十種の快樂ホルモン物質が分泌される。

年齢とともに楽しいことが増えていくとすれば、

それは嘘である、目先が限定されているからだ。

そしておそらく体温はどんどん上がっていくのだ、

あたらしい夜、あたらしい朝を迎えるまで。

僕はこんな時、

熱くなりすぎた車のエンジン部について考える。

未来の不透明な性質に神がこびりついているように、

エンジン部もまた、長い距離を走るとき、

あるいは、運動能力を限界まで上げたとき、

体温が上昇するのだ、と。

より大きなものに結び付けられてゆくとき、

本質へと直結する。それが僕等のフォークロワな夕方である。

たとえばアメリカ人を四二.〇度だと定義する。

日本人はおそらく三七.〇度くらいではないか、と思う。

でもどうしてこんなことを思ったか、

僕は体温と夢の関係を人知れず思い描いたからだ、

経験に基づくが、いい夢を見ている時は目覚めの体温が心地いい、

逆に悪い夢を見ている時は体温が上がり過ぎているのだ。

氾濫している。そして眠れない夜は寒すぎるか、

逆に熱すぎる。下らないことだ。

でもこの下らないことを、

人はもしかしたら永遠に近い一生の時間、

考えているのかも知れないのだ。

ねえ、君それは何故だと思う。

僕はそれより人より多くの知識を得ていると思う。

われわれは思う以上に、

温度を欲しがっている生き物なのだ。

知ると言うことは、温度を減らしもし、増やしもすることだ。

そしてこれは絶対に永久不変の法則である。

黄金比率のように、

もっと快適な温度を探している、

そしてそれが恋の中にあるのか、

思春期の中にあるのか、

それとも仕事の中にあるのか、

家族の中にあるのかそれはわからない。

ただ、僕の詩が多くそうであるように、

その中でのプラットフォームを求め、

バックグラウンドを求め。

でも、詩の中で一番大切なものは多分、熱だ。

熱が僕の中の詩をフォーカスアシストし、

最適なフォーメーションを組んでくれる。

そしてそれは、思うに生殖ホルモンを活発に分泌しているようなものだ。

僕は詩の中で朝から夕方まで説明したいと思う。

僕は詩の中で絶頂から最下層まで滑り下りたり飛んでみたりしたい。

繰り返そう。

花開く、ということである。

熱を生み出すものは、石炭だ。紙だ。

それは日々の暮らしが、与えてくれる。

そして熱の最大の効果は、

あたたかさ、あるいは熱さと冷たさを明確に分けたことだ。

どうしてそうである必要があったのだろう、

僕は科学者ではない、研究者でもない、

ただ、僕の経験上、不必要に思えることには必ず、

快樂の要素が隠れていて、

そして知れば確実にのめりこむ常識を否定する何かがある。

繰り返そう、

人は温度を欲しがっている。

君が求めているのは快樂ではない、

常識を否定する何か、だ。

いく憶かの人に、

街は黄昏て、住所と名前が記されている、

国が認めた公的な書類みたいに、

*Oh...淫ら。*

*Uh...真夜中のエクササイズが始まるぜ、*

もう、あんな奴のことなんてもうどうでもいい、

フラストレーション、ぶつけるなよ、獣のダンスで興奮気味！

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

行きかう車のヘッドライトが徐々に強くなる、

ジグ SAW パズル・ヲヤスミさ、シネマのような背景に、

ヤニの詰まったパイプが転がる、

[\*猟奇殺人事件のレポートだった]

美しいクロールで何処までも行ける息継ぎをしながら、俯瞰、夕陽、

—Are you ready?

アイロンで服が焦げる、

さながらいと冷やき綾のいさよいのみづうみ。不思議な材質だと思う、

歯がゆいような、いてもたってもいられないようなこんな気持ち。

*Oh... サンドバアアッグ!*

Uh...パンチンググロオオオ!

平和と幸福な気持ちが焦げる、

夢をみる——不安の幹、ユメヲミル、

ゆめをみる...永遠にとても近い時間、

終わることのない暴力を垣間見る、

殴り倒されて反吐を吐き涙が流れても救われない、

だからやり返せ、ぶちのめすんだ、

夢を見よう——...

本当の夢を見るんだ——。

「あとはもう影です。」

「影絵です。」

メリイイゴウクラウドがまわり——だす...

つがいの骨を...探し出す——

ぬるっとした。感覚が僕の100000キロ、

愛を探す旅に終わりはない、絶体絶命の崖、安らかないのちのおわり、

原子爆弾や細菌兵器、テロリズム、倒産に転職、悪意、捕虜に、

後遺症、テクノロジーの幻想にガラス片、

——Are you ready?



ギガバイトのうねりのなかでプラスチック、

ファッション、アアアト、レヴェル…ピアニッシモな雨と、

シャドウボクサアア！

*Oh...* サンドバアアッグ！

*Uh...* パンチンググロオオオ！

ワンナイトスタンドカアニヴァル、偽の。

…退屈だった、嘘の、誤魔化しの世界では、

ダンシングナイトノンストップミュウウジイ、ぺらぺらの。

右耳から左耳への残像さえ残りはしない。

紙ヒコーキの跡、黄ばんだ孵化。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

捨てられた釘のような蟻がうごき出す、

【\*血圧を測定したんだ】

そして多くの人の笑いが強張ってゆく、

「接続されている。」

(されて——います…)

それでもエネルギーが音もなく流れて、

漫々として限りもなく、セブン、ローソン、ファミマ、

女性の胸のような、悲しい性だよ、欲望のオンザエッジ。

追い詰められた限界の死を覚悟するよりも、窒息を脱出して、

制限規定を破って、ルールを変えて底なしの地獄を変えてみたい。

ねえ、それができなくたって、百分の一の確率できこえるさ、

女たちの、やらしお、という硬質な声、

(虚無さ、女っていうのは、はてしなく誤解する生き物。)

(でも鋭いところもある。そうさ、誤解させておくのが男。)

やらしおハプニング、イエー、やらしおトラップ、

この丹念な手つきがきっと前戯だけ、なんてね、

もっと驚いて硬質な声を聞こう、馬鹿な男の一人として、

僕を処理してゆくのか、

どっちみち、男性の股間のようなふくらみが生まれてゆく、

そして今日僕はどんな女を抱くのか？

*Yeah...* オオマイヴィイイナス、待っている。

*Yeah...* オオベイビィィィ、僕が待っている。

「たとえば、スタートボタンを押しながらボタン決定で、  
気がつくと、バイソンを選んでいる。」

「ダルシムを選んでいるよりはいいんじゃないか？」

正確なメニューがあるわけではないのに、

対戦型格闘ゲーム『ストリートファイター』が広がっている。

えんどれすりぴいと。

からおけ、しながら、でゅえっと、しているみたいよ。あはは。

SELECT STARTすべきか、

GAME OVER受け容れるべきか。

にっこり微笑んで大きくウィンクする、欧米版では、

肖像権の問題で名前変えた、バルログ。

……だっしゅすとれえと……

…だっしゅあっぱあああ…

「細かい話だけど、蹴り技がないってのは変だよな。

あやつ、肘打ち、頭突き、ローブロー、掌底打ちをするぞもがな。」

「もがな。」

「馬鹿だけど守銭奴。」

「もがな。」

(でも、頭脳派だという設定の時もある。)

(それどころか、自分がチャンピオンになって、

黒人社会に夢を与えるという自分のアメリカンドリームについて語る時もある。)

(でもそんなの、僕は求めている。凸凹のパズルは、

いつだってじゃらじゃらする知恵の輪のように単純な回答を求める。

ほどけ。ほどく。)

「――ところで、全然関係ないけど、

ストリートファイターのキャラクターづくりの妙なたくましさみたいなものに、

俺は感心してしまう。」

「もがな。」

むちゃぶり。

いやいや、からまわり。そういうぼくらは、あめふりにつくられたみずたまり。

……ばいおれんすばっふあろお……

…だああていいぶるううう…

深い溝のなかへと、水が通ってゆく。力尽きて、止まる。

蟻がいたら、命拾いする。でもまた水が出てきて、蟻は呑み込まれる。死ぬ。

暑い夏の日、ねむるように水は流れてゆく。

愛撫そのもののようにやさしい死が忘れ去られながら、

自動販売機でジュースを買う。財布に百円玉がないので、五十円玉を入れる。

かしゅかしゅっと十円玉を入れる。入れる。さみしい音を入れる。

SELECT STARTすべきか、

GAME OVER受け容れるべきか。

「たとえば、スタートボタンを押しながらボタン決定で、

気がつく、バイソンを選んでいる。」

(あれ、そのセリフ、さっき、言わなかったっけ?)

(疲れているのかな、それとも、時間が戻っているのかな、わからないな。)

「たとえば、スタートボタンを押しながらボタン決定で、

気がつく、バイソンを選んでいる。」

(あれ、おかしいな、その、そ、そ、そのセリフ……)

(いや、勘違いだな、疲れているんだな、ユンケル飲みたいな)

「たとえば、スタートボタンを押しながらボタン決定で、

気がつく、バイソンを選んでいる。」

(…なんだろう、この強烈な減速をともなう、錯覚じみた、違和感。)

(—あれ、目の前に誰かいなかったっけ?)

や／めて／よ／して／

て／が／とどきそうな／きょり／に／

――フォッサマグナ。

――フォッサマグナ。

(つくられた―― 世界 …いたんでゆく―― 現在 …)

(つくられた―― リアル …とまりそうな… 呼吸 …)

会話が途切れるだけでいららする…メトロノオムみたいですよ 　――

会話が途切れるだけでいららする…キーボード入力みたいですよ 　――

――フォッサマグナ。

目を覚まして…って――どうして …

――フォッサマグナ。

目を覚まして…それで――何になんので …

――フォッサマグナ。

――フォッサマグナ。

( DREAM FEVER ) インディゴに染まるブラウザの小さなドット星空

( DREAM FEVER ) インディゴに染まるブラウザの小さなドット星空

遡れない歴史／繋がらない電話／奪い合う愛 / 貪り合う性／

遡れない歴史／繋がらない電話／奪い合う愛 / 貪り合う性／

悪魔は嘘つき／天使は正直／嘘は嫌なもの／正直なのは素敵なこと／

悪魔は嘘つき／天使は正直／嘘は嫌なもの／正直なのは素敵なこと／

--フォッサマグナ。

--フォッサマグナ。





黒い土が泡立つ想像力の時間だ。夜は、植物を生育させる、

僕等は眠る、でも、夜道なんかでは眼が段々、白内障みたいになってきて、

色んなことが、限定され——、継続して……、不確かな、曖昧な、

糸がもつれたままなんだ。

小石が蹴られる。公園。

塾帰りの少年が通りかかった。

ぱりん」」」

それは別に怖くはなかった。ちょっと驚いただけだ。

ヤンキーでもいるのかと思ったんだね。物騒なものね。カツアゲされた塾友達もいる。

力で言うことを聞かせるなんて野蛮だ。でも、八墓村のモデルになったような事件だって、

囚人しかいない島だって、あるんだよ。ちょっとロートレアモンの言い方だよ、

情報をどんどん巻き込んで気がつくともまったく別の次元に入ってしまう。

夜這いだってあったんだ。幽霊だって——人格を持って祀られていたんだよ……。

でもそんな人影はない。

なんだよ いったい！」」」

そう思ったんだ。

突然空間が破れて、またすぐに塞がったみたいな、静寂。

緊張の明暫なるオペラが終われば、すぐに夥しいほどの退屈に入りこむ。

高速道路の快適なドライブ。意識が冴えるスピード、速聴法の原理で説明されてるよね。

きっと脳波が安定しているんだ。あの、病院物で出てくるバイタルサインってやつ。

安堵だよ。でも安心すると、ひとまわりしたように、こうグルッとするものだから、

腑に落ちないことに思い到ったりする。

こういう到着の仕方って、たとえば新幹線で広島へ行きたいのに間違えて博多まで行っちゃうようなパターン。でもそれは違う意味で笑えないね。

でもほら、若者ってすぐ明るいことを考えられる。若いっていいことだよ。

何か嫌だなあとモヤモヤしたけど、こういう案件に吸い取り紙とか、

ゴキブリホイホイがあるわけでもない。よくあること、どうしようもないこと。

霊」」」

と、考えて、笑うんだ。

つのだじろうのインパクトありすぎる漫画を考えながら、

あれが真昼間にいるような想像をする。滑稽だよ、ゴルゴ13だって、

野球場にいたら変だよ。

馬鹿馬鹿しいよ。科学万能の時代に。

たとえいるとしていたって、靈感ゼロの自分がどうして、なんて思う。

そりゃそうだよ、経験はいつだってものを言う。

少ない経験でも数打ちゃあたる、それは違うか。

――でも金縛りを……思い出す……んだなあ……。

たとえば、まったく身動きできないままミイラになったような真夜中過ぎ。

時計がばっちり見える。二時十七分。嫌だ。地震が起こったら死んでしまうという恐怖を、

普通なら考えるべきなのに、実際何かの病気で動けなくなることもあるはずなのに、

多くの僕等は、こう思う。違う違う、これは金縛りというけど、明晰夢なんだ。

けれど、動けない。自分が動けないということで脂汗でも流れるような気持ちがする。

でも、誰もいない。物音もしない。でも、もしここで足音がしたら、もっと必死になる。

幽霊らしきものでも見えたら、形相はきつともっとすさまじいものになる。

けれど、信じれば岩をも穴を開ける。いわしを食えばキリストになれる。何の話だ。

動け動け動け」」」

ばりん」」」

ふっと、《現実》に――引き戻される…蟻地獄――のようにね…。

こんな時だから昔、やった悪いことなんかを思い出す。

受験勉強のストレスで万引きをやってしまったこと、

虫を捕まえては殺したこと…、

こういうのって非常に、自分という厄介な生き物を持て余す瞬間だと思う。

自分が善人だと思っている人はいない、自分が善人だと思える人間はよっぽど頭が悪いか、

よっぽど浮世離れした感覚に呑み込まれているかだ。

人は罪を犯しているからだ。みんなやってる、と誤魔化す人もいる。

中にはそんなの別にどうだっていいじゃないかと開き直る人もいる。

でも彼は心底悪人になれないタイプなんだね。

何かが割れるような音が自分の心に反応でもするように、鳴った、と思えたんだ。

まさかな、いや、そういうことって世の中にはわりとあるのかも知れない、と思う。

彼は少し足早になった。でも、パニックではなかった。

多分、勉強疲れのせいなんだ、と思う。さっき考えた厭なことのせいなんだ、と。

もしかしたら、バラバラ殺人なんていう物騒な事件が自分の町であったことで、

何かが起こるとでも思っているのかも知れない。

起こるわけがない！」」」

ばりん」」」

彼は本当に背筋が寒くなった。こころなしか、手がかじかんできたような気がする。

さっきまですごくお腹が減っていたはずなのに、もうそのことさえ、考えられない。

鳥肌が立っているのがわかり、毛孔が開いている状態なのがよくわかる。

後頭部が少し痺れるような感覚が襲った。首筋を何かに撫ぜられているような、

服の襟がさわるのが、いや、少し伸ばし気味の髪が触れるのが気持ち悪い。

誰かいる」」」

ずさっずさっ、公園を横切って歩く。

そうしたら、赤ん坊の泣き声が聞こえる。

猫だ」」」

ゴミ溜めか物置かわからないくらい物が詰まれている個所がある。

がさっ」」」

音がする。ごく——んん、と生唾を飲み込む。

視点をのがれたいけど、もう吸い込まれるように見てしまう。

緊張が高まる。

にゃあお」」」

なんだ、猫か」

(猫だね…。)

背後から、ハッキリ声が聞こえる。

確認しなくても、後ろに人がいないことはわかる。

足音もしなかったからだ。でも、確かに声が聞こえた。

幻聴だ、疲れてるんだ、と思いこむ。

猫が、僕の方を見て、尻尾を立てている。

何か見えているのか、それともただ僕を見ているだけなのか、

警戒する様子を見せながら、じいっと、

――じっと、こっちを見てる…。

誰だ！」「」」

シーンとしてる。真っ白になるという表現がふさわしいかもしれない。

あたり一帯が雪景色になったように静まり返っている。

まあただ、猫がずっとこっちを見てる。うーうー、と低い声で鳴き始めてる。

彼は正直少し泣きそうになりながら歩きはじめた。

なんで自分だけこんな怖い目に遭うんだ、他の奴だっていいじゃないかよ、と思う。

頭がふらふら――っと…する…。

そういえば、と、彼はようやく気付く。

公園の抜け道が一向に見えないんだ。

おかしい、おかしい、ようやく気付いてあわてて走り始める。

自分が閉じ込められたかも知れないって、異世界に入ったんだ、

でもそんなはずはない、と思いながら、それを確かめたくて、走る。

そんなはずはない、そんなはずはない。

彼はカールルイスより速く走っているような気持ちで走った。

必死だった。でも、おかしい。一向に辿りつけない。

なんなんだよ、これ！」「」」

(なんなんだろうね。)

うぎゃあ、とか、わぎゃああ、という少年の叫び声。

そして次の瞬間、がっちりと肩をつかまえられる。

ぎぎぎ、と振り返る。

そこには、もうひとりの自分がある。

鏡の中でしか知らない自分の顔は、しかし、

鏡の中で見るよりもずっと、嫌な笑顔を浮かべている。

貝、僕は、きみに、尋ねたい。

海はどんな所だったか、と。

編み目をたどるように、

冷えた階段を降りて、

海の松ぼっくりみたいな、

おまえを見つける。

腰を落として手に触れてみると、

とうの昔に落ちた流れ星のようだ。

耳に近づけてみると、

冬の雪がそのまま残っているような残響音がする。

短剣の如く光る夏のつらら。

線香のような煙。

波のうしろへ。まえへ。

奥へと銀の鈴のようにふるえながら。

貝、僕は、きみに、尋ねたい。

宿題を終えた中学生のように、

胸の下のわななきを、

魚の背のように浮かべていた夜のことばを、

おまえに彫られた何千と駆け抜けてきた時代に、

しずかに、触れながら、

海はやさしい、それとも、さみしい、と、

こんなめまいを覚える緑色のゆうぐれに、

泡のレース飾りにしか見えない、

心象風景としか思えない、こんな冬の日の波打ち際に。



ちいさきもの、みけんにしわをよせて、ねむる。

"slip"は「滑る、下降する」

「記憶から抜け落ちる」

亀みたいに、いじめられっ子みたいに、

色を幾つもちながら、過去はドールハウス、

過去は、溶けた後の厄介な水・・。

ゆめのなかで、ねこがぼくにいう。

「もういちどおねがい」と。

「いいよ。」

まどろむこともなく、眠ることもない。

うす桃色のあかり、あるいは、

夕方五時ごろの、ひかり。

「どうしてひとはあらそいをつづけるの？」

「ばかだからだよ。」

「じゃあ、あなたもばかなの？」

「みたまま、ばかだよ。」

…折れた翼みたいなものだよ、

オーバーな言い方だけどね、

歩いたそばから足音が消えてゆく、

足跡が消えてゆく、

そして君も僕のことなんて忘れる。

—一夜の盛り場が車の音と人の声でごった返す、その酔いにも似たさざめき。

濁り/muddiness

ヴァイオリン/驟雨/

計画ニ黙従スル切レ味ノスルドイナイフカクシナガラ

ノーテクスチャーアワムラサキスル

露出スル器官ハ優秀ナ陰影デアル

フランスパンニ色ガナイ

キャベツニ色/色/ガナイ/

レモン/色/艶ガナイ/

茨ガナイ/アアモンドガナイ/

魂ガ洗ワレルヨウナ実ニ愉快ナ一日

恨ミガ泡ノヤフニ頭カラ消エル

—光と音楽の色の銀のボタンのざわめきの洪水を掻き分けて、

去りがたい猿が、鉦脈になる、銭で売られる。

草ノ枯レタ崖ニ憂鬱ナ海蒼

インキ壺スル新鮮ナチイズスル

真理ノキャンバスヲ暴ク人形ヲオトシメル

破損シタ屋根窓カラ鳥ガ飛ンデユク

オオ/ウオオ/

カジツ/

磁石ハ白鳥ノヤフニ飛ンデシマフ飛ンデシマフ

牧師ガ天主ニイノルカラ僕ハ青ク苔ムシタ遊戯

アアモウ乞食ウルサイ

――ぜんうちゅうのこんていには、

じんちをこえた、しんれい、が、むげんのれいりよく、が、

そんざい、している。みえるものも、みえないものもふくめた、

ばんぶつ、の、こんげんとして、そんざい、している。

――がらんとして大きく庄しつけて来るように深い、静寂。

古代エジプトノ神秘主義

伝統/魂ノ底ヲ流レル/ハ/

(美学、エピックナ遠近法、時折ニハセンチメンタル)

ヘルメス思想/ギリシャ哲学/

方法ヲ発見スル/目隠シスル/

(眼球カラ失ナハレテユク月彗ノカゼ )

キリスト教/新プラトン主義/

居場所ヲ指定サレテイル/

ダカラ長椅子ニ座ル

(広場ノ中央カラ果テノナイ曠野ヲユク人類ノ模型)

グノーシス主義/カバラ/ヴェーダ/

(「愛とは何だ」)

(「知とは何だ」)

――くりかえすもの――

――くりかえしてやまないこの想い――

バラモン教/ヒンドゥー教/ヨーガ/

チンモク/ノ/声/透視力/

(土ニ根ヲ、値ヲ、モット、音ヲ)

仏教/ゾロアスター教/フリーメーソン/

破壊スル/表彰サレル/

(神ノ溜息ヲ拒ンデユクカステラノ粉)

薔薇十字団/魔術/錬金術/

(生ノ希望ヲ裏切ラレル理由、人が弱イ理由)

占星術/心霊主義/神話/

無邪気ニビスケットガ割ラレテユク

(ランプノ光ニ消サレルコトノナイ巨大ナ点ノオチバ)

回帰線/夜ノ鐘/

(「真とは何だ」)

(「生きるとは何だ」)

――くりかえすもの――

――くりかえしてやまないこの想い――

—葡萄ノ収穫ハ終ワッタ

ジャスミン/ミンミンノ蝉/妊婦/

ニヤホラハ飛ンデシマフ

シャボンハ飛ンデシマフ

ニンフモ飛ンデシマフ

ハカリ

天秤ニ色ガナイ

マボロシハマルボロノヤフニ色ガナイ

賞翫スル/彩色スル/

海岸線ハ長イノデ拋物線ノ曲線ヲオモイダス

アイコノグラフィ/イコノロジイ

イィ/ウイイ/

—神ノ不感症ハ終ワッタ

万物ノ一元性

ピアノノ中ニ金庫ガアル

絵ノ中ニパンフレットノ結論ガアル

(に、)よるのしょくぶつはせいいくする

宇宙ヤ文明ヤ人種ノ周期的ナ発生ト衰退

エトナガ噴火スル

運動ガ躍動スル古典的ナホドニ新シイ空腹

(に、) 石窟とじゃんぐる・していい

三位一体ノ顕現/太陽系ヤ人間ノ七重構造

レスする/ヴェエエルする/クリイムする/

無邪気ニ壊レヤスイ知性ニカクモ近ヅキガタイ魔術

(に、) 聴くこと学ぶことの突然の殴打

厳正な因果律/輪廻転生

「人は超えられないかも知れない。」

(でも超えられないなんて可哀想なこと誰が言うだろう?)

(に、) 幸福と不幸とをえらぶ者たち

太古ノ文明/超能力/高次ノ意識/

感情トイフ空想的ナ機関ガカブトガニヤフニアル

通過スル雨ヤフニ濡レテイル饒舌ヲコノマナイ彫像

(に、) 変化を物理的にも理性的にも感じる者たち

原子ヤ鉱物ヤ惑星ノ進化

君ハタダシイ/君ハマチガッテル/

デモ入口ハ同ジ出口/同ジ海港/同ジ街/

(に、) 水晶を発見する

生命体ノ進化ニ伴ウ天体間ノ移動

デテユカナケレバナラナイ秒ノ中ニ距離ヲ往復シナガラ

フルアウトスルマデノ衰退ヲ余儀ナクサレナケレバナラナイ

数学ノ形式的問題ノアマリニモオオクノ神秘

(に、) 輸血されるごとく継承される牧歌的な呼吸



蜘蛛が枝から枝へ糸を張る、有り余るほどの、

華かな彩りも 時の経過に消えるアラベスク。

ランナーズハイを追い求める、一一好意的なフェミズムの行き末。

蝶がふらふらと宙をさまよってきて、愛想のよい、

いかに広く美しく帆を張るかを競いすぎた船のように、

とても重要なものを見落としたまま、歯の浮くような思いをさせる、

考古学者、一一下劣な、フィナーレへと向かう。

まるで蟻地獄の図案のように、不規則な軌跡を描いて…。

気の狂ったような速度で、燧打ち石から打ち出される火花のように、急行列車の、

展覧会は始まった、一一鋭い印象を眼の底に残した。

アリア。空洞クモ膜下。加速する、時のアクセント。

本当は どんな形にも七変化する雲の形が、漏斗状になる月を呼び込む。

幽かな淋しい悩みのような、野原で見つかった骨のような、

在りし日は花でぎっしり目のつんだ刺繍のような、

廃園で。何に対して、何に対する結界を張る。百頭のいけにえを知らない。

抽象的な、非常識な、夢中にさせるアンブロシア。

注意深い後光。株式取引所的婚姻。湿疹。精密な、拒絶。

勇敢にもがくブローチ。褐色の気管支がもれでる。自

治都市に、しわくちゃにされるぼろきれ。

繊細な錯乱をする。告発しながら、依存する。

……どうにかしても、誰かのそれらになる、

半透明のダイヤモンドがノアの洪水に流される、

アテナの盾のエゴイスト。スクリーンに映る閣下。

知性の中の過去系。嫉妬深いそのカプセル。

ああお前は何をしてきたのだ、何を求めに来たのだ、

こんな辺鄙な地へ、このなまぬるい沼のような場所へ、

——お前はエナメルを解放を求めながら。

どうして こんなに 淋しい道なんだろう

どうして こんなに 人の道は淋しい

歩くことを 覚えた日から

帰ることと 出掛けることを覚え

話すことを 覚えた その日から

嘘と 本当を 覚える

でも即刻 錨を投げよう

こんなものは 海の混沌にでも

放り込んでおけば それでよかったのだから

犬の餌にでも してしまえばよかった

しかし消化不良を 起こしている

俺の腹の中で 暴れ狂っている

俺の腹の中で ナイフに変わる

気持ちを 軽く 運ばせようしたって

ルーレットの球は 悪戯に運動を続ける

最初の一步同様にさ 繰り返すほどにさ

最後の一步を まだ俺が 見極められずに

どうしてこんなに 不愉快でたまらない

どうしてこんなに 脚気の膝のように震える

歩くことで 生まれた道

進むことで 切り開かれる 世界が

それはそうであると 知りながら

それではそうでしかないと 知りながら

僕はまだ僕を知らずに 過ごしている

僕はまだ僕を知らずに 時を

不協和音。

ドアーにチェーンを掛けて。

曖昧な舌が引っ込む。交点、モノクロも七色も良さがある、

隔てた道、熱、そして返らない問い。

吐き気に逆らわないし、眠たきゃ寝ちまう、俺の家に、

インターフォンが鳴らされた、グッジョブ！

「何なりとお申し付け下さいませ。」

エクスプロージョン

と、夜の影。増殖。

喉の奥につのだじろうのとある漫画の大きな芋虫が、

引っかかってしゃべれない。

夜の影が――。

言うのだ……。

川は昨夜の雨で増水していた。

今日のニュースで、死者が出たことを知っていた。

僕はそこで魔法がかかったことを見抜いていた。

本当に強い願いは人にあたらしい世界を与えてしまう。

夜の影が――。

言うのだ……。

僕は可愛い女の子が欲しいと言う、

それを、ぬかるむ春の気配に取り残された、

忘れたはずの過去のしこりみたいな、

お前みたいな真っ黒な奴は駄目だ。

すると美人の女の子が――。

一回目でした。

「傍に置いてください。」

いや、駄目だ。手に余る程のデータを収集した電波塔気取りですか、

口説ければ何でもありの恋はゲームというつわもの気取りですね、

足蹴にするぞ、俺はいま、可愛いなどと言ったが、

可愛いだけの女など信用できるものか、お前はいま、俺を敵に回した、

お前はいまシャイニングスタア、何度願っても、

人をひきつけるそれは手に入らない奴に向かって、尊厳の放棄を仕向けた、

そんなのはファンタジーの逃避。

性格の悪さを感じさせないようなツンとすました女は、

それは大体狐なのだ。

「そんなつもりはありません。」

じわっと、涙が――…。

でも女の涙は宝石だっというような男と思うな。

泣いたって何の慰めにもならないから。

俺が泣いた夜は、

お前のように相手なんかいなかった。

「泣いてなんかいません。」

そうすると、適度に普通の女の子に。

僕はくらくときた。大体僕はブサイクでも美人でもない、

普通の女の子のなにかしら勿体ない感が非常に好きなのである。

だってブサイクだったら僕は悪い所を、

これも案外イケるのではないかと考えてしまう。

自分が好きかも知れないという点を増やしていく計算式は、

有効だ、人は大体、欠点がある方が長く深く愛せる。

ふた目と見れなかったら整形してしまえばよいのではないかと、思う。

あとは性格。もし仮に美人だったら、僕は評価を下げることを念頭に入れてしまう。

基本的に僕は美人が好きではないのだ。

そして玄関、上がりがまちなどというところで、

三つ指ついてお辞儀。僕のひそかな趣味を見抜いているのか、

この女、着ぐるみまでしていた。コスプレ好きに見せかけているのはフェイクだが、  
着ぐるみ好きなのは本当だ。単純にみるとこれは馬鹿だが、  
この女、思う以上に度量が大きい。

二回目でした。

「傍に置いて下さいまし。」

ぶんぶんぶんぶん、と首を振った。

いや駄目だ。そもそもお前、俺のことが好きなのか。

「好きです。」

…すきです。

…すきです。

…隙？

いや駄目だ。そんな口先のような、好きなら、

納豆喰いながらだって言えてしまう。

オーノー、女の子が納豆食べていたら可愛いと思う僕だが、

愛しているという場合にはすぐいません、愚か者。でも可愛い。

しかし可愛いと言っているからといってお前が可愛いと思うな、愚か者。

そんなのカポエラしながらだって、言える。サザンの勝手にシンドバッド状態で、

腰を勝手にくねらせていても言える。

うがいしながらだって、ごぼごぼ言えてしまう。



そんな奴は駄目だ。

「死ぬほど、好き。」

ちょっと、どきっとした。いや駄目だ。そんないきなり、死ぬほど好きと言われたら、こいつもしやストーカーではなかろうか、とってしまう。

幸せです、と、

心の底から言える一回を日々一回増やしてゆくことが、

明るい未来をつくりだす。

「し、幸せです。」

しつこくないか？ 律儀なのはわかる、でもそれは逆効果。

四分の一としての冬ではなく、四分の四としての一の人間でいてください。

「ストーカーではないけど、死ぬほど、好き。」

いや駄目だ。そんな注釈を付ける奴は、後ろ暗さがにじんでの、中島みゆきだ。

どうしてきちんと伝えないのだ。あなたは忍者ですか？

夜の街で別れ唄歌いの通り名を作るつもりですか。

平井堅のセンチメンタルでも歌うつもりですか。

手裏剣投げるつもりですか？ 投げるだろう、くの一！

そしてそんな奴は俺に不満があっても何も言わないに違いないのだ。

「不満などひとつもありません。」

一瞬くらっときた。そこまで言うならもうよかろうもんばい、と博多弁いいかけた。

何故博多弁なのかそれは誰にもわからない。

でも大体正常な独り暮らしの男はクッキングパパの胡散臭い話が好き。

じゃあ、上がれ、と言いきうになってしまう。

寒かったろう、コーヒーでも飲むかい、ごはんは食べたかい、

お風呂に入るかい、と、よもやトチ狂って言いきうになってしまう。

とある日、頭髪がフランシスコ・ザビエルになってしまうかもしれない僕は、

ある種の軟弱な妥協をしようとした。ハゲ、それは男性的な失望。

でも、愛は毛髪の死さえも恐れない……！

しかし僕はゆっくりと首を振った。視界の奥で零れ落ちそうなほど、

柔らかな感触に触れる。

いや駄目だ。不満がない女など、僕に向くものか。

にごった答えを優しく返す。この、うそつきめ。

「では不満を作ります。」

不満を作ってどうするというのだ。

さらさらかちかち、優しさは距離を縮めるアイテムで、

明るさは人を呼ぶためのアナウンス。

たかが地平線、されど地平線。

「わかりません。でも、望むなら従います。」

いや駄目だ。従っているのは奴隷と一緒にだ。

(あれ、昨日の記憶がない。)

(どうした、今日から君は僕のペットだよ。)

などという、鬼畜なことをさせるつもりか、やめてください！

打ちひしがれた肢体は、おお、歓喜に震える絶望のハーモニー。

奴隷にみずから志願するなど人間として実にけしからんけしからんけしからん。

マゾというのも、サドあつてのこと。

「では、兼ね備えます。」

あっぱれ、と言いきうになる僕が少し怖い。

いや駄目だ。そのように兼ね備えると非常に中途半端なものになってしまう。

勇者と魔王を合体させたらそれは三次元生物ですニーハオ！

それでは君の個性が生きてこないチャオ……！ 個性というのは、

もっと大胆不敵なアクロバティックサーカスしているものなのだ、ボルゾイ！

そうすると、アナウンスが止みます。

駅が、かろうじて液みたいな形で残っています。

流れることしかできない、

雲の世界とまだ繋がっているのです、

僕はまだ世界に触れているから。

布団の上にいるみたいに、

あんなにも柔らかそうな姿態で。

三回目でした。

「傍に置いていただければ、

あなたをきっと幸せにします。」

しつこいな、いい加減に諦めろ。

でも、目を輝かせてる女というのは素敵なものだ。

いやしかし駄目だ。俺は幸せにしたいのだ。

男というのは幸せにされると駄目になる生き物なのだ。

だから適度に不幸せになるのが重要なことなのだ。この悪魔め。

「調整します。」

いや駄目だ、そんな微妙なアメとムチがどんなに難しいかわかるまい。

お前のような女では何十年かかるかもわかるまい。

仮に俺が怒ったらどうするのだ。

「謝ります。」

いや駄目だ。そんな風に謝ったら、まるで俺は自分が正しかったと思ってしまう。

社会では七人の敵がいる以上、甘やかしてはいけない。ほらどうだ、

お前はもう、俺との約束のひとつさえ守れなかった。

「勉強させてください。いい妻になりますから。」

いや駄目だ。そんな妻目当てな女と付き合えるものか。

一緒に暮らしてゆくことなどできるものか。

しかし一瞬、そういう女の後ろ姿を想像してしまう僕は、

限りなく深く自分の中に落ちていく静寂の木の葉なのかも知れない。

「わたしは――・・・。」

魚ですか。

ピラニアですか？

ラザニアですか？

アンダアスタンド？

エレベーターですか？

エスカレーターですか？

――還る人はいい、

鳴き砂になりますから。

貧/血/症/の/複/雑/な/心/理/

(細いワイヤーロープみたいに) いつも何かに縛られてる

(言葉は嘘) でもきっと正しい

Here you go...I have you...

何処へ行く

—確かな解釈のしようもないおぼろげな場所

イミテーションがやたら鼻につくのがオリジナル

さみしさが欲しい...暗い夜 遠い宇宙の極て銀河のほとり

どんな憂晴らしをしてもバイオリンが鳴らなきゃ意味がない

You're crazy! (Oh...Mad! Mad! Mad!)

刃物でなくちゃ意味がない

## Are you done? # AVEN1089

---

———僕の…言葉は…

———僕の…言葉は…

Are you done?

Are you done?

(空のモノクロでブルーなライブラリー)

Are you done?

Are you done?

デジャヴ、

忘れたの？

正気なの？

Are you done?

いつ来ても歓迎します

You can do it because you are you

You can handle that, can't you?

One would not take you for anything but what you are

(気持ち悪い？)

One would not take you for anything but what you are

One would not take you for anything but what you are

One would not take you for anything but what you are

言うだけ無駄、野暮だよ・・・、You scream

それ見たことか、愚かだよ、くさくさするよ、You scream/You run away

ふらふらするよ、でも、

You are telling it second hand, aren't you?

You are telling it second hand, aren't you?



長針と短針の間に指を挟み、

本の一ページと化す。

すべての建物はおもちゃと化すクリスマス。

雪はしどろに、去りがてに、

小窓に身をば投げかくる……

小さいゼンマイのようなものが、

サンタクロースが見つめている――…、

都市に迷い込んだエルフは、

電球のフィラメントでバイオリンを奏でる、

（すきとほつて震へ出すくらい迄に。

すべてをわすれて泣いている心臓――）

血の底からわき起こっているような激流にも似た、

都市は五月蠅い。早鐘のように鳴り響く心臓が、

色合いの鮮やかなダダ的なもので塗りたくる。

ぬれそぼちにし夢の奥……、

回想するのだ――。

I am not afraid of the world ending...

「スキーをして、スケートをして、  
雪だるまを作って、おしゃべりをして、  
かまくらをして、それじゃいけなかったの、」

いけなくないわと、言うと、

でも甘いお菓子、ケーキ、と笑う。

...血と...が融合する...

不釣合いな印象が拭えない...夜の夢...

周囲を吹きめぐる。朽葉が、砂のように、ぱらぱらと、

容姿の幼さと考え方の気軽さでつくられているとしか思えない、

うつくしいその唄声は、耳のあたりのちいさな、あまくてなつかしい、

それでいて、ひどく柔らかくて驚くほど甘いカステラの粉。

ふわふわって、

フランネルが飛んでくるような、一一聲。

花の手のように、質の緻密な玉を硬度の高い金属では、

けして触れられない揺らぎをうみだすそのこえ。

雪はしどろに、去りがてに、

小窓に身をば投げかくる……。

I am not afraid of the world ending...

「パイプオルガンが奏でる不思議で歴史を感じる音色を聞いたか、

真夜中の不思議な壺の中にかくされていた蜂蜜を見たか、

南国の花が冬にも似合う水晶の短剣のような秘密を見たか？」

あらゆる民族に対する証言のために、神聖を放棄しよう、

星の世界でさえ変化する、——聲。

雪はしどろに、去りがてに、

小窓に身をば投げかくる……………。

夜光虫がほどけてゆく夢想燈、

コンデンスミルクの妄想。

そして、ぼくという、情炎のあやしい瞳。

感じられる重みに不思議と魅了された。カウンター。

喧嘩、繁華街。でも、白く、黒く、

この何だかえたいのしれない路地裏で。

――ふっと思った、空気途切れない浮遊。

拳をふりかざりしながら、

人は何故戦うのだろう、と。

修業――。それゆえに道を究めるため、

本能、性……、破壊の欲求を満たすため、

金のため、それとも地位や名誉、

あるいは個人的な世界における一つの趣味か、

あるいは本当の自分を見つけるため？

焦がれて暮れて待ちぼうけ――する…

頑なに形を得ようとはせずにそういう、

サイレントな黙想は求めて心を促す、

――アクセルとともに、大いなる存在に立ち向かう

不幸の抜け道を探すよりも、幸福という襟首をつかんで、

投げ飛ばす方が早い。ヒンジャクな、生命に、

…戦うことを――覚えたい…。

いま、ぼくのそばにいる、コトバ、は、

ポップなアイデアによる会話の、テンション、で、

ヘアトーングローションのうるおい。

ふりかえれば、そこにはなにもない、青い空。

カラヴァッジオ風の色調で、

すこしだけ世界が揺らいでるのを感じる、

――途中で抜けださない、投げ出さない、

やるなら最後までやる――やりぬく…

世界の謎は――びれいな衣裳をして…

ぷらんくとんで――あふれて…。

そうだ、たくさんの風船がいっせいに空に放たれるような、

劇的な、ジャーニーが、ここにはいくらでもあるから。

コロシウム・スタイルの椅子にでも座ろうじゃないか、

夜の公園でひとりでブランコが揺れるとき、

思い出をすこしずつ忘れていく、

オスカーワイルド似の男は艶なうすくれないの頬をして、

テリトリーに無断で入るように、箱庭へ、その、

内側のロードショーへ、ぎゅんぎゅんと、

苦水を欲しながら、甘水を欲する。

――ゼロオ…ファンンの翼で、

ゆるり、ゆるり、と流れていく。

また、目覚め、眠るのだ、カポーティ。

火と燃えると言おう、王国…！

夜だ。

死んだ人間でも構はない。

とはずがたりの病。

構ふものか一向に。

夜だ。

星は美しく草叢から雨の気配がする、

自分を取りまく感傷的なもの。

ろくろくと積んだ齢は均し崩し。

悲嘆傷心落胆絶望。

これは海か。

これも海だ。

なんだこいつも海か。

そしてこれもまた海なのか。

夜だ。

被虐的な快樂が暴かれ、あなたのためなら止まります、

摩天楼、ほれほれ仕上げ。

形式的完成という産的な蕩尽。

居眠りするエエテル。

夜だ。

口髭などをはやししながら、

俺はグツスリとねむりたい。

左腕を貸して欲しい。マネキンのように外してくれ。

そうするわ。ありがとう。あなたの右腕をお借りします。

と。おととと、何だそれは。

どやしたつけないほどに眠りたい。

夜だ。

油断している間に温かい湯ではないか。B e C o o L、

B e C o o L !

のびのびとしてしまふ。

象のやうだ。

ピノキオのやうだ。

俺は高いオペラの空気窓のやうな春の空気に酔ふ。

冬だ。

なんだ幻想ではないか。

青春波動の魔術でよろしく。



神サマたちに記憶を封印された、

理不尽。

その末のザマはない不道徳に不挙動。

おぢいさんのランプみたいなNY。

けれど、それが何だっていふ。

よくみがいたガラスのやうに透きとおって、

空気はなにかが猛烈に焼けている。

夜だ。

望みもしない内にオチが生まれ、

笑い話の内に愛してるが生まれる。

街の燈かりが奪はれてゆく。

言葉。

その結節。

その意味や理由。

その態度に。

俺はひねりを利かせて眩こうとして愚かに笑ふ。

何も思ひつきやしない。

何といふ非才。

一刻一刻。

少年のみづみづしい心を腐蝕してゆく中毒症の斑点。

才能とやらを信じた都市に完敗。

5 一行詩

頭の中に猿が一匹いて、尻っ尾どうした、とぼくに聞く

腕が攀った、ナスビのように見えた…！

白髪まじりの不精髯、ひと晩…、それも小さな足搔きのうちに。

かアテン、かアテン。

食管、乳液の結晶あかい絨毯をとおつてなまぬるく。

わざと触らない、——触れてくるのを待つ。

かべにむかってはなしていると、ひょうしぬけするな、といわれた。

机の上に二、三冊の本——失踪！

7分の神様

アジテーションの寵児、魂の傑作、恍惚の気化。

ち び た

クライミング 世界の果てに観客席

毛管にかたつむりが。

熱帯魚は井戸のなかでも棲めるのだろうか、しかし墓は？ 誰が…、梯子を？

どの頁をひらいてみても、小鳥がいたら、羽根をもぐ係と、嘴を折る係がいる。

地図は完璧を求めているが、蟻は穴をもとめている。

遅くなりますよ、遅 お く なります よ お お

雨を買う。

きょうは君の話聞く。あしたも君の話。その次の日も君の話、君 君 君、

死がふたつ、あった ら、鏡になるのかな？

ロールブラインドが、裳裾をひくように…、

蛇口をいっぱいひねる、空調を切る、網戸を少しだけあける。

もうキャパシティーオーバー。フワフワッと宙に漂い消えて行く

授業中、フランシスコ・ザビエルに角が生えた。

したたり落ちる水滴をぬぐう指先、嫉ましいい。ほど深く陽灼け-け。した

うん、そうだよ。気温20度以下で、霧のロンドンを歩きたくない。

ロッターリーやナンバー・ゲーム → カッターリーやナンパ・ゲーム

すじゅし い。す すじゅし い-い。す じゅすう-う い。

眉間のまゆ根のあたりから雨が嫌いになる。

体育の授業で使われるマットの上で、すこし黄ばんだバスローブが置かれ。

Right ワニのいない動物園は、洗濯バサミのない裏庭の風景。

カラオケは空っぽオーケストラという意味。カラマーゾフの兄弟が「桶」という。

腕時計が靴だったら、スイッチがいるとおもうな

もしぼくが座席に新聞を忘れて、その人が読んで、その人が忘れてたら・・・。

ゴールデンウィークにボーリングする。

・てっぼう ・てっぼうのたま ・おーばあこおと ・はきごこちのわるいながぐつ

とがったものはもたないでください

バーテンダー (28) にエ・ク・マルウォイ通り四番地はどこかと聞く

さびしそうに俯向くロボット 充電切れでしょうか？

クリスマス休暇に クレヨンのきいろになるつもりです

エスキモーが隣の家にすんでいるので、おーろらの話を、すこしききたいのだ。

一億万回 しんだ象を読んだ感想／すげー、輪廻転生 おれもすげー

まあるい耳を五角形にして、だえんのくちびるをいちもんじはやとにする。

きつつきのにせものがでまわったので、ハンマーを使ってはいけません。

七歳になるまで家族にモグリだと思われていた。

STOP！ ネコのなりすぎ にゃーの多様 あなたがいうほど犬は吠えません。

ぎゅゅゅゅゅゅゅゅ （枝が折れそうで折れない音）

ニワトリを手品師のように消した！ なのでぼくは卵を冷蔵庫からかすめた

いたみを感じる間もなく死んでしまう虫は、高度な文明よりイカしてるライター

アイスダンス・ショーでペンギンがすけーとぐつをはいてすべってる。

ウズタカク、マキヲツミアゲルト、ナカカラ、カクヤヒメガアラワレタ。

婚約した女、戦いに出て死んだ。船に乗った男、剣を佩かずに死んだ。

嗅覚の黄昏。

ぼくの大好きな子が、ショルダーバッグにいれていた、ゴキブリホイホイを買う。

オレの目玉をたべようとする。スプウンが。たぶん、スヌウピと呼ばれるものが。

殺虫剤をかける俺の地味な家。

1行×9連「ちいさ な気おくれ」

なんとなく、伝えたい こと、ばがあ、る

ひ、とに伝える のが、にが 手、

なんとなく、伝えたい こと、ば

詰ま、ると すぐにだま、ってしまうわた、し

…なん、となく。 —なん、となく。

しず、かだ。な の、に昏い…いち、日が

あり、がとうの重みをたわ、ませ——、

なん、となく。眼をとじ、て逃げたくなるよ、うな

——愛。

1行「はうっっ！ ああ、中庸ということですね」

はあはあはあはあふう…/縛られ好き/あ、締め方は強すぎず弱すぎず

ケンシロウの格好をしたユリアの開脚ください（2ちゃんねるでありそうなリクエスト）

1行「何を言っているのか分からない」

どうしたどうした、あざらしか、プリンか、それともこのメスブタめ！か…。

判決は棄却、油断も隙もならぬ浮き世でござる！ ストーカー裁判

徳川家康の首を斬りおとした同姓同名



お試しGET！ あなたの家にジェイソンが来ますよ、カカカ

1行「モテた」

まるで別の宇宙へ来たみたいに俺に牛があつまる

やっと乗れたタクシーでネクタイを緩めながら勤め人がぼうっと俺を見る

1行「ふしぎなアナウンス」

テープレコーダーみたいに走る声、繰り返す声、言い直さない声

「後世に認識された歴史」の深さと、“残らなかった”の難攻不落に骨が軋む

1行「(を)連れ去った」

信じるってむずかしいけど、忘れたってやさしすぎて、絵のなかでもっとも霊的

1行「変な理由を述べよう」

七光りというのがあるとして、同じ仕事をするなら本人の光

瓦を割ったら小指が折れた！ 燐寸を擦ったら家、ガス充満してた！

所得税を払おうとフウテンの寅さん、笑う

[インターフォン] あのお、千円あげるからおたくの猛犬に手を噛まれていいですか？

明細票に謎のKの文字のあと、ストラックアウトおれ三振したんだ

財産の差押さえを執行します！ と、税務官みたいに彼女はワルサーP38

主婦もビビッドな感覚がほしい！ ババアがいう、わたしやあ、ビビっとらんよ。..

ほんとうにしあわせについてかんがえたから焚き火する

1行「もっとも美しい姿」

無防備で、さらにギリシャ彫刻的に無防備にな つ てー

1行「スプラッタ」

[ラブホテルを見て、] ああ、女の子を喰べる音がきこえる。

女性のパンツと男性のパンツのひゞきくらべてみる

せくぐ

生きててよかった、女性が落し物をして踏むたび

税金は払いたい！ ただ、家出もしたい、っていう..。

## 雲の切れ間

空に深い穴が空いている

(見上げれば、) すっかり鰯がいる、猫は食べないだって奴等は肉食だから

1行「しかしそういう男に限ってモテないんだ」

役所の人も人の子さ、かわいい女の子を紹介したらきっと税金の納付待ってくれる

ふるさとはM78星雲という友達が死んだ、さようなら、あかるすぎるあの歌を一曲

1行「イメージでキャラクターが」

秋田県に飽きたは言えないよ、だって上司が秋田村出身の村長だから――

1行「いやプライベートな問題だから踏み込まない方がいいと思ってね」

総理、おかしくねえか？ おれの給料が少ないんだが・・・。

顔つき見てたら「いよいよ」――それがどうしたインポこわくないMOVEMENT

屈託のない笑顔で少年が訊く。「おじさん、無職？」

蟻が蝶を運んでいく、タンカーが麻薬を運んでいく、ぼくは牛の愛情を盗んでみせる

TOKYOと書いて“とこよ”と読み上げそうなぼくはきっと鬱なんだ

親のすねかじり！ かんてみる、おまえが狼ならな、ガルル

1行「夢の中で考えたいことがある」

うまれてごめんね、と福島原発くんがぼくの夢の中で泣きながら言った

ダム建設中止！ だって僕の心に水を貯めることなんてできやしないから

法に穴がある、屋根裏にはねずみがいる、しろいかべに幽霊の顔があるのでなくる

世界で一番有名なブランドはときかれたから、Chinaだってすぐオリジナルより多くなる

ブルガリがほしいという娘はスーパーに連れていくと本気でタバコ吸い始める

おまえはジャワ人か？ ちがいます、北京原人です、とぼく

日本人なめんじゃねえぞお、と言いながらマッチョ出てきて、声ちいさくなる

ビキハノシティ上空にきょう日本国民並の数のU F O大編隊が感動したと言いにきます

世界はひとつ、宇宙はひとつ、ぼくはひとり、きみはたぶん忍法つかいます

1行「ユーモアの挫折」

復興のために、鶴を助けなければいけないおまえどんだけ昔話好きやねん

棺桶はいれ！ 嫌だ、それならぼくは海でワカメする

1行「評論家が言いそうな台詞」

日本のサラリーマンは幸せになったか？

暖かい夕食より真昼の情事が好きだなこいつ、と映画観て楽しむ

日本縦断したい、北海道に飛んで沖縄にゆく日本人的な贅肉の削がれた発想

生肉！ 三度の飯より生肉！

フグ田さんはやっぱりほくろ田さんですこしホームベースに似てる

ワゴン車の“わ”くらいは強く頭をぶつけてみたい

大切なのは低燃費です、という人に言いたい「結局ガソリンいれるんじゃないか」

メーカーの責任だよ！ わかってる、でも、自動化をすすめたのだからメカの責任

消費税いれてください！ はい、募金箱にいられたはずなのでよろしくおねがいします

国はいつでも税金を引き上げたい！ さしづめ、お手本が必要やとあたし思うえ…！

1行「肉体など不要な時代は来るのかなあ」

自民も民主もやっぱり駄目だったから、今度は、電波参入、声無男選挙に出るか？

アンテナで発言が変わる、支持率調査⇒辞任率調査

1行「無神論者の現代なら、そういう防御性も妥当」

平和が好きだという人が、じゃあなぜ戦争映画なんて観る！ ..なぜ子供に馬鹿と言う

吹けば飛ぶような素直な凧、追い風じゃない、スタートの危機的状況！

何言ってんだ、回転寿司で胡瓜がまわって満足させられてる粗茶でごわす

あんぱんに牛乳というベタより、マーチの方でぼくら大人でも、はにかむのに

ヒャッハー！ ぶあっと、BLIZZARDな冷夏

不意打ちだ、ニュース番組がもう既に日曜劇場

朝の光線に水溜まりがかがやいている

水溜りは夜の吊鐘から落ちた涙だ



There are many fishes swimming in the water

a school of fish

ARTIFICIAL FISH REEF

the scales that cover the outer body of fish

most fishes have fins

Some fish fly

FISH DETECTION DEVICE

NITRIFICATION BACTERIUM-CONTAINING WATER

FOR REARING FISHES AND SHELLFISHES

——増殖する感丘では、Wntシグナル活性が細胞増殖を制御している。

魚の永続的なエラのように

あるいは魚類における

脂鱗の流体力学および系統学的見地

すなわち泳法における推進力

複雑な流れの精緻なコントロール

生態観測結果。

魚の行動モデルに従う魚群行動を

コンピュータ上に再現し、

そこでの広い範囲に及ぶ群行動の特徴を

分析する。各尾の位置座標を成分とする

時系列データに対してフラクタル解析を

適用した結果、軌跡の粗視化パターンの

形状比較から視覚的にとらえられる

挙動性質をフラクタル次元として

定量的に評価することができた。

「魚は性における精の純粋なモデル体の一つである」

狐に化かされているのだよ

あべこべの世界

胡瓜のへたが両方ついている

入口は出口ということをお忘れなく

即答して

頭の回転のよさをアピールするつもりが

何も考えていないと逆解釈され

結論を出しても

プロセスが大事であったりする

肯定するばかりで意見を言わない

腹に一物ある

そんなの思い込みじゃないか

所詮思い込みの世界だよ

道徳だか社会常識だか何処吹く風

コマーシャルのすれっからし

才能枯渇者の精神疾患状態の街だよ

おお！ トレビアン！

世界が綺麗だなんてチャオ！

美しいだなんて誰が言ったの

ベトベン、三重苦の前に性格直せよ

関係ないがね

狐に化かされているのだから仕方ない

世界は元々は綺麗ですよ

よごせば汚い

何もしなけりゃ猿の惑星

困ったら情報が多すぎて

ああそうですよ

狸が空飛んでるんだ

別に不思議じゃないよ

なにしろトキオの仕業だからね

こりゃこりゃこれは

狐はエリマキトカゲだよ実は

ぜんぜん変じゃないよ

たっぷりの辛子とわさびに

マスタードまであるからね

こりゃこりゃこれは

トンデモない

ブットンデない

こりゃこりゃこれは

錯綜している視神経の、

機能は――昨日・・

突きつけられた現実を目を背けるんだ！

混沌であろうが――飽和しようが・・

からまりあった編み目の間から、

戻ってくることはない……。

もしかして歪んでいるの、

硝子湾曲の世界――。

わけわかんねえ」

ねえ」

死と希望と金、たえ間なくコピー機の音が鳴っている、ああほらもう、

限界だ、くたくただ、面倒くさいのを乗り越えて死にたくなる、

どうでもいい、どうでもいい、

いい加減スタミナが切れた、とどめの瞬間を窺う野獣、

天使たちが歌う、精神錯乱の兆し、でも誰も傷つかないなら平和だ、

蟻だって十匹いれば一匹は馬鹿なんでしょ、

だから優越なんでしょ、いじめていいんですよ、邪魔な奴は殺してもいいんですよ、

正義という名のもとに、ハンバーガーを食べるんだ、

ひどく無神経なニュースが犯す、諍いが絶えない、

めらめらと炎をあげながらたゆたっている音をなくした波、強すぎる波、

俺はは幸福を具現化したようなさわり心地のリクライニングシートにもたれ、

すやすや眠りたいのにもう溺れることをやめたいのに、

耳が聞こえないほうがいい、気が遠くなるほど思う、吐いて捨てるほどに、

あらゆるものが次々に生まれるめまぐるしさのなかで、思う、思った、

ああ、俺、ぐちゃぐちゃになりたい。

希望なんて持てるの？」

失望に突き落された糞人間」

脱ぎ棄てる わ た し

脱ぎ棄てる わ た し

(見つめる、)

(でも、黙っているだまっている。)

(見つめる、)

(でも、きっと、黙っているだまっている。)

殺し殺され、

狂気の体温を知る、肉食動物、閉じ込めた回路のあざやかなヴィジョンは、

何故か迷子、妙に静まり返っている景色をうつしだして、揺れている、

何かをもう果てしなく失っているような気がする、

そしてもうそんなことがどういうものなのかもわかっていない気がする、

鋭く胸に突き刺さっている、

ゴミ砂漠を見つめるハッブル望遠鏡的視点。

スイッチの切れたラジオみたいなんだ、

瞳をなくしている、頭部をなくしている、心臓をなくしている、

腕がない、足がない、僕には心がない、魂がない！

琥珀になる、剥がれ落ちる、夏の残像に包まれている、

煽られている、身をよじっている。

し み

……叫びだ 灼熱 (の、)

—壊れそうだ、カンカン鳴らせドラム！

もっと！ カオス！

歪め！

…明け方のいかづち ……だった…だった…

……いいえ ……わたしです…わたしです ……





なめくじみたいだ」

疾走しろ博愛」

ゴールデンレトリバーが硬化する。

漫画喫茶だったネットサーフィンしている。

サイコパズルはどうだい。

人間を生きたまま焼く気持ちはどうだいフレアかい。

人間を裏表紙で見ているうすっぺらいお前の態度はどうだい。

レストランはラストオーダー。

お前はいつのまにか素っ裸になっている。

ハムスターは子供を喰う。

酒を飲んでいたような気がするでも前後の記憶がない。

何処に帰ればいいのかはわからない。

嫌な気持ちが続くからこれはもう何処かおかしいんだ。

でもおかしいってことに純粹に批判しているんだ。

求められているのは機械なんだ遠くに光るブレーキランプなんだ！

キリストを思い出すたびに、

嫌いな人間の顔を思い出す。

ああ人間の本性を見破ったんだ所詮フェイクなんだいかさまなんだ！

道化なんだうさんくさいんだでも血が流れてるんだ！

すべて を 思いめぐらし ながら

すべて を 思いめぐらし ながら

「あなたはきっと、愛を探していたのでしょうか？」

「あなたはきっと、愛を探していたのでしょうか？」

(愛とは藍ですか？ EYEですか、Iですか？)

「あなたはきっと——…」

「あなたはきっと——…」

し み

……燃えろ 馬鹿 (が、)

——烙印、でも気持ちいい！

もっと！ 死体！

無償！

…明け方のいかづち ……だった……だった…

………いいえ ……わたしです……わたしです ……

・・・気付いて ・・・気付いて・・・気付いて ・・・

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
一瞬で過ぎ去ってしまうそういうことが、  
、、、、、、、、、、、  
樹の中の魚、心の中の海。

迸る。壊れそうなんだ、

真夜中、地下室、モルグ街、

ああ樹海でひとりさみしくいるみたいだ。

鏡が割れる、粉々に割れる、

ない！ ない！ なあああい！

\*アイドリング中

\*アイドリング中

\*ラブドリンク注入中

ディージ、ディースィー……

---

気持ち悪いなまぬるい風が長いこと吹いた夜に、

わたしは、ふと思い当った――…。

ディージ、ディースィー……。

<呼んでる。>

夜明けを忘れた死に果てた星の観測。宇宙利用の拡大。

遠い昔の開拓に濁ったヴェールをかけながら、

発作的にうなずきおののく、

あたらしい生物を見守る根気のいる作業。

地殻変動を一センチメートル程度の精度で面的かつ稠密に監視する。

沙漠よりもっと無限の広い海に出たような、愛と沈黙、

てのひらの中心がくぼんでるような、

たった一瞬でおとずれた核の夜を越えて、

数百年の時の経過という戯れを受けた都市に――。

「人が死にすぎたんだ。

凍った地べたに、

さらさらした粉雪が降った。」

――降った。

ディージ、ディースィー……。

<呼んでる。>

ぐしゃーっつ、とのめりこんだ、

彩り鮮やかなブロックは、恒星の瞬き、

やがて来る、切尖のするどいもの、噴火。爆発。

いびつな格好に積み上げている破壊の痕跡。

底へと積もる天の脂肉の狂える軌跡。

あの蜜雲に閉ざされた暗い空は、

細かく刻みこまれている無数の皺は、

いつこの星に太陽を見せてくれるのだろう、

苦痛に身をよじっているように見える都市の残骸は、

溢れるような絵の具を水に溶いて、

冷凍庫でシャーベットにしてしまった。

ディージ、ディースィー……。

<呼んでる。>

.....高度なパーソナル・ナビゲーション。

(あるいは、その外縁をとりまいて散在するマイナスの思念。)

「あちこちに眺められたよ——」

思うがままに積み上げて、僕等は凍っちゃった。」

「氷っちゃったのね……」

湾曲する渚の白さをはるか越えて、

静かな森の中で立ち止まったまま時間が何十年もさかのぼった出来事を、

眺めていた、引き攣ったような顔を浮かべて。

蝶番がきしりながらひらいてゆく——。

天井から剥がれ落ちる石膏のように、灰いろに、

さながら途方もない大火を鎮火するための自然のシステムのように、

瞑想のさなかにふと垣間見た深海だけが、

黒い蒸気のような亡霊の町並みを作ってゆく。

(どうでしょう、昔の人が見たら、

世界はこんなにも大きく移動したのと、

泣くかしら?)

「月が見える場所に、

たくさんの嘘がこんなにも増えてしまった。

でも、月はもう見えない。われわれは、ツキに、見放されたんだ、

わかるだろ、目に見えて日ごとに大きくなってゆく不安…。」

「神々の不信がそうさせたのよ。」

鼻が冷たくて、

唇に何枚もの薄紙をあてられるのがわたしは嫌で、

こわごわと音を立てながらコートに唇を寄せる。

すると、彼が、やさしく夢見るような瞳で、わたしを見た。

(水底に堆積する永劫の夢の間という囚われの空間を泳ぐ、

君は、抑鬱を引き裂いて脱出するイメージだ。 )

——人類に残されたフロンティアである宇宙空間は、

人類の知的資産の蓄積、活動領域の拡大に加え、

宇宙空間のエネルギーの新たな利用を可能にした。

タイムマシン、ワープ航行、

植物をたった一日で芽から果実へと生育させる薬に、

食料供給の円滑化、資源・エネルギー供給の円滑化、

さらに高度な人類との接触——。

「汽車が走っているみたいだ。」



「あなたは映画好きよ。」

彼は、銀色の頂にいる女神を認め、

その頭上にけして消えてなくなることのない外殻である、

巨大な真珠貝を、あえかなる夢と思いつつ、

蛾の羽根のようなあおざめた光の死にゆくさまを、

見つめた。

「美しき幻の扉…ふるえる夜の磁界が裂かれ、

網膜からすばやく切り抜かれてゆく――。」

ひくい唸るような大音声、その昔、

木枯らしと呼ばれた現象が聞こえた後、

どうしてか、わたしの耳に、

長いこと断末魔の叫び声が聞こえた。

まだまだ小さな音だけど宇宙の君に伝えよう、

生あるものだけが持っている不思議な重力の秘密。

シンプルだけど哲学的で物を探す道理。

ざわざわとざわめきながら、一日が途切れ途切れに、それぞれ、

回っている、裂け目も、消えてゆくことも、

思い出すこともできて――…。

ディージ、ディースイー……。

<呼んでる。>

ゲイ失礼な、母の敵、..または失われた恋人の涙一一

古代の十字、地獄の樂園。..母の悲しみを剥ぎ取られた者よ、

傍聴した、最高裁判所での心臓を抜き取ってくれたまえ！

あの厳しい判決一一死刑！..正しい秤に、夜の閉じた翼が載る、

蠅のようにみじめな奇跡を追い払える材料を与えている。

しおみず

...でも私は思慮深く 言語努力によって 鹽水に入れ替える..

そして、恩恵によって海の底から、あなたに頼む。釘から外す..、

しかし板はくぎ抜きの私に言う。「間違っているのは、あなた方だ」..

でも彼は隅っこで囁るばかりで、鳥、一一船はくるりと背を向け、

心に横切っている私を見ないで、左耳から青の身なりして消え一一

ああ迷える先生、もし、人生を去るなら、あなたの罪は隠されよう、

いけにえ

人びとは叫びに似た感情で、恐怖！犠牲！..母親はまた訪問...！

いかり

水も砂漠に晴れて行くほどに、忿怒も妥当、神の気に召さぬ行い..

愛一一身を傾けては捉えようとする、育て方、人の姿..

、、、、、、

世界のあなたは..女性に演奏しない武器を持って余す白濁の子午線一一

ゲイ、あるいはノーマル、..飛び立つその人の魂の貌...、

、、、、、、、、、、

あなたの深層に潜入するも、「いまは構わないで欲しい」

、、

先生——あなたは幾年も獣のようにお過ごしになるつもりですか？

女性において子供は財産・男性にとっての健康診断！

きよ

かくも不在者の夜は長く、あなたの聖い手淫の手はむき出しのまま。

\* VII - Morte villana, di pietà nemic a

ガランとさびれ果てたビリヤード室。ビリヤードにおける肉体は、自分の身体がどのように動けば文句なしの正解となるのかを確かめるような所がある。確率的多段階意思決定過程。手球と的球の衝突後の進む方向、進む距離、クッションの作用など、球の動きを数理的に表現する。

夏の匂いと駅の雑踏。9ボールも落とせやしない。直角二等辺三角形の頂点。狙うポケットの決定。カンガルー。フクロウ。

次の状態に推移する確率を算出し、最適戦略を練る。

周囲には汚れた椅子、長椅子、ゲーム台、キュースティック。

羅紗。キャノンショット。コンビネーションショット。

バンクショット。ブレイクショット。

そして僕はカクテルを飲みたくなる。あんなにも素晴らしいものを創り出す最上の時。玉突き台は水平でなければならないのに、少し傾いてる。

そんな店が燃える。けだるげなビリヤード・プレイヤー。

瞑想的な貴族にさよならをする。現代人の風景と相對する崇高な美の観念。誰もが本当は一度きりのゲームをしているんだ。本当は明日なんて絶対にはないかも知れないと思うんだ。

でも僕等は立体的に物語ることなんて出来ない。

ほっそりとした手首に四角い腕時計。

「勘ぐられたり——噂だけが一人歩きして、

本当の自分を見失っていたよ、長い間、ずっとね。

自然に自分を表現することがだんだん出来なくなっていた。

でもここで終わるよ。」

真剣な顔で、言葉を絞りながら、彼は言った。

アルマジロになるのと、カメレオンになるのと、

どっちがいい？ ねえ、もう声が聞こえないぞ。

おい、なんか海月みたいにぷかぷか浮いちゃってるぞ。

タイムリミット——混沌の中の秩序。

彼は、大きな波のような炎のなかで甘い吐息をこぼしながら、

行けよ、と言う、19歳のジプシークリスタルストーリー。

19歳の、ヴィオラコンチェルト。

女が笑っている――。

にっこり

莞爾と笑っている――。

、、、  
「あれは。

、、、  
あれはね、

、、、  
何でもないの――」

乱れた空気。こころしずかに、あわただしいだけの現実に気の冴えて、

色なき唇から肉感が――水分が…、うしなわれ、乾いている…。

ちち、ぢぢ、と夏近くなった夕暮れの微かに乾いた音を聞かせる。

、、、  
親戚の家へと遊びに行った。

ははは…。

あはははは…。

(子供が屈託なく笑う声――)

(顔が細長く伸びてゆく…)

(塀が斜めに――鋭角的に見える――)

ザザザ、、、

ザザザザザ、、、、

…ダイニングとキッチンが隣接して…リビングが見える…

庭には犬がいて…庭には囲まれたコンクリートの塀がある…

僕は…秘密の部屋に踏み込む探検隊…

叔母がいた…そして弟のように思うミツオがいた…

(「何かしら不審を感じて眼を開けた。」)

……僕は次の瞬間、病院のベッドの上に寝かされていた。長い夢を見ていた。そして、傍にい

る母親が、心配そうに僕を見つめ、おとぎ話でも話すように――と、僕は緩速する意識の中でそ

感じたのだが――どうして、あんなところへ言ったの、と言われた。あんな所って何処だ、そも

もどうして僕はこんな所にいるんだ。わけがわからなかった。でも僕はかたわらにミツオがいる

とに気付いた。彼は病室の隅に隠れて、しっ、としていた。どうやら叔母に内緒で、僕のことを

心配して来てくれたらしい。いい奴だ。玩具の映写機でも見ているみたいに、部屋を暗くし、わ

かに洩れて来る外の光を感じた。そうだ、ミツオ、あの家の押入れには、ねえや、がいたね。叔

さんにそれを言うと――それを――言うと……。

ザザザ、、、



ザザザザザ、、、、、、、

、、、、  
「あれは。

、、、、  
あれはね、

、、、、、、  
何でもないので――」

めまぐるしく、ぱらぱら、と、めくれた。

押入れのある部屋には、畏れの入り混じった線香のにおいがした。

四角い狭い視界の、むっとするような、複雑な気分させる、呪縛があった。

立てつけの悪い鎧扉を開けるような、手の動きで、押入れを開けた。

そこに、暗い顔をした、ねえやがいた。少しずつ変わる、絵。

似顔絵がそこにあった。ゴム風船があった。

水彩絵具でえがかれた水仙があった。

終点の駅で見かけた古いベンチのような色をした縄があった。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
めまぐるしく、ぱらぱら、と、めくれた。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
めまぐるしく、ぱらぱら、と、めくれた。

ザザザ、、、、

ザザザザザザ、、、、、、、、

ミッキーマウスが飛び跳ねるように、ねえやは、絶対に私のこと喋っちゃ駄目よ、と言った。

風呂敷の結び目でもほどくように、やさしい顔をして、言った。

でも、と僕が言った。でも、何をしてるの、気になるよ、ねえや、と僕は言った。

ねえやは、着物を着ていた。江戸時代のお姫様みたいな恰好をしていた。

(赤い——赤い……朱色の、きれいな——。)

ザザザ、、、

ザザザザザザ、、、、、、

不意に歪みが止まった。

ねえや、は、真っ青な顔をして、言った。

物音が何にもきこえなくなる、夕方の校舎にひとり取り残されたような気持ちがした。

「あなたはこれから目覚めるのよ——何百年も前からの因縁なの……

これから不思議なことがたくさん起きるわ……」

ザザザ、、、

ザザザザザザ、、、、、、

僕は鳥肌を覚えながら、母の言葉を聞いた。

「ミツオ君……いたでしょ？」

僕は肯いた。

「……………死んだのよ」

(この顔さ。)

僕はカーテンの、仕切りの隅に隠れているミツオを見つめた。

普通だった。吊り眼をした母は――さらに、続けた。

(ねえ兄さん、本当に覚えていないの?)

「叔母さんとミツオ君と三人で、池に行ったでしょう。」

ミツオ君、溺れ――て…ううっ…」

午後四時三十九分とカウントされた公園の時計。

脳裏にこびりついていた、映像。

叔母はジュースを買いに行っていた。

池から、手が伸びてきた。それが、ミツオの足に絡み付いた。

(兄さん、言っちゃ駄目だよ。僕は溺れて死んだんだよ。

ねえ兄さん、声は聞こえないの――ああ、聞こえて…ないんだね…)

僕は母の泣き声を聞きながら、ミツオが口をぱくぱくさせているのを、見た。

その眼から涙がこぼれてゆくのを、不思議な面持ちで見つめた。

そんなに悲しい顔を見たのは、生まれて初めてかも知れなかった。

ザザザ、、、

ザザザザザザ、、、、、、

難しい質問や微妙な質問に、

やわらかく心をいためているのが母親です。

頭のよい子になってほしい、幸せになってほしい、

それが子供を持つ親の最大の美德。

けれど、感情を逆なでしたり、

傷つけたりすることも多くあります。

責任と使命とに振り回され、

親のむずかしさありがたみがわかります

でもあなたはあなたなので、

優しい微笑をして、話につき合い、

物の哀れを知り、子供から学んでください。

対等に接する時と、親と子として接する時と、

自分と他人として接する時を分けてください。

血のつながりは無意味です。

魂は、学ぶためにある。

生きる喜びを、教わるためにある。

人生は自由です。

塾や習い事がすべてではありません。

幸せも一様ではありません。

人が本当になりたいことになれない、

悔しさ、さみしさ、苦しさ、

それもまた、学びです。

傷付いても克服できるように、

あたたかく見守ってあげてください。

優しい子供に育ちます

誰もが本当は優しい子供です。

殺人狂でも親を殺さない、

恋人を殺さないのです。

信頼できる大人になることで、

社会の感じ方や考え方を、

少しでもよくすることができるのです。

親というのは、本当にとっても、

大変な仕事です。

傷つくことを恐れた僕に救いが訪れる——とでも…

教えて欲しい、地球儀の回し方、

夜を真似た永遠…。

——舞い降りてくる雪、

天へと触れる星への接吻、

イルミネーション。

あまりに細い流れだった、霧と雨。

ちろちろと水がこぼれている蒼ざめた月。

(その前に言うておくことがある。)

(それは石鹼を握り締める性の行為——)

そして、深海のような *aquamarine* の気分で、

君に押し付けた身勝手な夢は、蒼ざめた唇、

揺れる、投げ出された *dirty play* 。闇が、真っ黒な塊となって、

拍車がかかる空気は透明で、毎回だよ君が欲しくてたまらない夜。

何処で間違ったのか、と、何処で見失ったのか、と…

そう信じている幼い魚のように、醜いものを知らずに目を回して、

空虚な翡翠の小さな泡になったって――

届きそう――。

それでも届かない…、

伝えきれない、

涙が滲んで――…。

暗闇の中でおぼろげな言葉を指先で回す―― *list*…

君のせいにしたこの感情が、毒。牛がのさばってる、

煙のような声が硬い表情のなかの瞳を潤ませる衣裳。

時計の針が、僕の心臓の風船を割る、重力に押し潰されながら、

蛹が溶けた鉛のような僕を見てる…。

(もう一度だけ言う…。目を覚ませ――。)

(それは石鹼を握り締める性の行為――)

サラウンドするノイズ。

(は、) 僕を追いこんで――く…。

こんな想い、どうするんだ、

コーダ

まるで、全絃合奏…、隙を窺う一瞬で懐に潜り込んで、

境界線をぼかした。君の奥に放たれた *erotic* (な、) *motion*。

ルール体系を滑ってゆくコオド…。

教室の窓、自分の部屋の窓、心をあらわす瞳の窓、

空の窓、屋上から見た大きなあこがれの窓。

小型集積回路の憂鬱――。

生暖かい手ざわりがフロイトの扉を叩く。

こわ／れた／

ああ／ぼく／は／そんな／に／

マキシマム／じゃ／ない／

こわ／れろ／

きみ／の／ソウルフル／な／げんそう／

……伝えきれ――ない……？

ゆっくりと……、

息を吸い込んで飲み込んだ言葉……。

悦楽へM字に開く紅い口腔――。

冷や水を浴びせかけるんだ、鼻につく、その笑い声、

（で、）また綱渡りする、何か酔ったような表情、

いつまで続く誤魔化しの自分、偽装の弾丸の充填、

真夜中、白黒の鍵盤から悪夢へと続く *drive* 。

笑顔は、手のひらの中で零れ……。

夢の中の僕はもういない――。



虹をわたってゆく胸の動悸…。

消えてゆく駆け引きいっせいにゆらゆらと揺らめかしながら、  
呪縛から逃れられない——効果的な伝達手段、種族維持本能が、  
無頓着な鞭、壊れたガラス瓶、サイケデリックなほどに、  
違う色にしてゆくコントラストをハイにして発光ダイオード。

ねえ、歌うのが聞こえるよね？

きらきらする蒸気みたいに花びらがこぼれている、  
アクセル全開で、浸食は始まってゆくメビウスの輪、  
クラインの壺、雄弁な言葉は限界まで近付いてしまう、  
意味深な態度、吹く風、約束、ありがとう、さようなら、  
——わからなくなるよ、最終電車…。色のある激しい風、  
頹廢的な天国へと生き急ぐ生あるもののむなしさ。

「（固く酸っぱい林檎の実）…」

## 時計の動き

---

不意に君のつまらない横顔 思い出してしまう

ごめんよ 今日が終わるから

見覚えの無い手を握り返している 僕は

白い表情をしてにわかに際立って針のように尖って行って踏み込む

守るすべのない永遠が寒さや悲しみのように思えてくる 僕は

手を繋ぐことを恐れているという感情のまま 黒い気流に呑み込まれる

吐き気が過熱されはじける いつもさ メルヒェンのあらわれいでたる流星

でも謝らなくてはいけない 衝突の火花によってうまれた緩速のまどろみ

やわらかい粘粉の中に押し込まれた石炭のような 皺が

その複雑なものを隠そうとする包み込もうとする違和感が

宇宙へとつながっている部屋のカレンダーを生むから

出逢ったこともないけれど意識することしかできない 神が

次第次第に季節に顔を見せ始める 内省的な作用みたいに

交差点踏み出した瞬間みたいに もう分からないよ

見慣れたものがひびわれていくのを僕は背徳的な震えを感じながら見ている

何処かで受けた暗示が鋳型にはまって異なる幻想が開花する

フェアリー

仙女 肯定し続けねばいけなくなる

血が流れても陽光にさらされぬまま泥として処理されるような闇も

はっきり開いた眼で見つめる 背中合わせの知識の脂肪と一握りの性の余剰を

一つ残らず言ってしまいたいと思いながら消化不良の感じが募る

たとえば下卑た女が自分の股間に無意識に触れている時みたいに

高く低くゆらめいている喘えぎ声が

揺れる 赤肥りした虚空の彼方を 交差点で受け取ってしまう

何もかもに見放されたこの病 ゆがんでゆくのはたった一瞬

裏返したただけなんだ それなのにそれは地球の裏側まで抜けてしまう

そうだろうとばかりに ネオンテトラが部屋のうえを滑ってゆく

林檎にあいた虫食い跡のような 深い謎に満ちながら

つめたすぎるビールを咽喉に受け止める

カメラのシャッターを切る音がする

入口へと姿を覗かせた僕は獣の顔から人の顔へと変化する

ずぶ濡れていたって思う もっと暗いみどり色の自我に狂おしい喜びを感じていたい

人間のシステムを天の原の次元にまで置き換えてみたい 僕は

向こうではどんな平均値のことで皺くちゃになっているのかもわからぬまま

あたたかくてやさしい気持ちで あるとかないとか考えている

こめかみに死と生をたたえた不凍液のようなものが見える

こだわりつづけることで途切れてしまいそうな 会話の隙間を埋める

前頭葉 この前頭葉は 白磁に黒曜石を象嵌するパズルが好きらしい

ワレモノ取扱注意

もう風もない 音もない 心の世界の中で思い出してる 君

思ったとおり 悲しげで どこかつまらない君の横顔

さまざまな物思いにオオヴァアヒイトしてゆく君が見えるぜ

ふと消えてさみしい 気持ちに ふと振り返るような感情が 生活

自分で自分に囚われて少しずつ眼が醒めていく理想によって揺らぐまで

染色体は静けさを貪婪に吸収してる

わからないよ 澄んだ 青白い一瞬に エデン もう冬

言葉が見えるから 一步前に すすんでしまう 卵を抱き続ける

深海魚が重い水圧に醜悪で魁偉の姿になっていったみたいに

時が一回りするまでは 海藻に巻きつかれている の さ

とぐろを巻く蛇から何故か寝息がきこえてくる

存在を否定された存在が決定的な隔たりを湧き起したようにまた おおきく

囚われた感覚の中 憎悪と愛情を不自然にいびつにかさねあわせながら

こみあげてくる不安や恐怖の戦慄に皮肉な微笑を浮かべる 僕は

息が白くなる 何処かへ置き去りにされたような異和感に

自分の中心感覚が少しずつズレていく 簡単なミステイク

そうさ いかさまが慮っていたものをことごとく僕は見破ってしまう

透明な声をしてみたつじつま合わせみたいに口笛を吹きたくなる

手錠をはめられた気持ちの奥で罪状を読み上げるすました顔に

無感動に僕は聞いている 聞いているか 聴いていないか 判決

世間知らずの裁判官殿 敵はあなた自身

踏み出した 踏切の向こう側にある 退屈すぎる毎日が

思い違いさせる 錯覚 鈍感なほどに 麻痺して らりって

不意に君のつまらない横顔 思い出してしまう

汚れてしまう そしてもっといたいけに単純に汚してしまう

星屑となって大気圏外に 嘘から 異和から そういうコネクションから

ロールキャベツが食いたい しちゅーがくいたい

もう言葉になっていない 言葉なんていらぬ それだけさ 僕は

電気を消すと、カーテンが発光して、

恥とも取れるかき捨てるシナリオ。

最新機種と仲がいいらしいハミングバアアアド、

なかよしこよしの、ブルウウバアアアド症候群、

「やめろよ。」

と、僕が言う。

「もう、やめろよ——…」

げらげら黄色く笑ってる、小便。

銀河の光線は水晶のように澄んでいる夜の大気を掻き乱す。

覚束ない身体中の細胞全部に憩いの想いが無い、

気持ちのフラスコの底で、ガラスに刺さる、

おいおいふざけんなよ、<sup>のじし</sup>野猪の皮みたいになまぐさい、鱧革の艶、

ぬかるみのような闇、あざやかな、復讐の果て。

いつもどおりで済ますなら今のうちさ、ぬるぬる滑り落ちちゃえばいい、

安寧という地獄、住めば都って言ったもんさ、悲しい性だね、飼い犬、

行き場所もなく、へんにきらびやかな、境界線に、耐えられなく——なる…

彩どられた望楼、黒の喪布まとっている、黒い森、雲はすばやく変化する、

ああ翼を望む、世界エレベーター。

*Someone to Watch Over Me.....*

手のひらを包みこむように、

五本の指を握り固める、冷たく澱む、

混沌という概念を繰り返すころ目が冴える、

これが拳。明日はきっとこんな気持ちで、腐りたる葡萄。

ひとつずつ灯の消えゆきし葡萄の炸裂。

――そうすると・・・わかってしまう、わかっちゃうんだ・・。

ここは、本物の世界じゃない、だから眼を開ける、<sup>いしゆみ</sup>弩のようにね、

するとさ、身を噛んでやむことのない<sup>ゆううつ</sup>悒鬱に<sup>やじり</sup>囿繞された鍔さ、

沈黙でしゃべっている鸚鵡のように、

ロールシャッハテスト、靈感の、影が、

前髪を揺らしながら近づいてくる、

*Cry for the moon...*

*Someone to Watch Over Me.....*

小さな思い出をくれた日から、

俺は売り続けてる。どうする逃げ場がないよ、

依怙鼻眞のメリイゴウラウンドなら、台風なら、まだ戻れるぜ、

人生我慢だよ、みじめってのが相場、そんなもの見たら眼が潰れる、

やわらかにゆるやかにたおやかにしなやかに。

ああ、あきらかに俺なんだけど、てめえ誰だ、またか、幻覚か、

鏡の中だよ、もうとっくに墓の下さ、自虐的だね、

違う、厭世的なのさ、こういうけだるさ、ビトウィーン・ザ・シーツ、

…鍛えぬかれた筋肉の動きが切紙細工に思えてくる、

白い経帷子をまとった、もはや人間ではない者たち。

(君たちの欲しいものは——わかってる…)

(僕の命…！)

『救世主様！』

『救世主様！』

——望まれてるのは悪い気分じゃない、でも、

じゃれつくなら子犬の方がいい、おいおい冷たい手で触るな、殺すぞ、

おまえ死んでるけど本当に殺すぞ、

あーあ、できるならまだもう少し人間らしい方がいいぞってなもんで、

おいおい選べる立場かよ、そんな看板かよ、器かよ、それで、

ありもしない陰謀論唱え出すのか、やだね、ふざけてるよ！

こんな夜に死んでゆく、白い言葉…、

星が消えるね、飢えている人間の歯の中に、

生意気な雨の味、似非溜息、人生どうしちゃった、お前が腐ってんだろ、

安心しろ、俺はもう腐るのを乗り越えて発酵しはじめてるよ、

再生するよ、もう神だよ、悟りひらいて菩提樹の下さ、

目の粗いマントのなかに心臓の破調が隠れ、



ずぶずぶと飲み込まれてゆく、不幸。

そして大地に怪物の背骨、

天が裂け、空気と光がみだれ、

使徒が呼び出されるまでのシェイクスピア的時間。

*Cry for the moon...*

*Someone to Watch Over Me.....*

敵意を含んだ壁は有刺鉄線のように張り巡らされ、

きっと、彼等の嘘だろう？

そうだろう？ 孤独からのプロローグ、

いくつとなく連なり渡る深い海の隆起みたいに、

緑の炎が迫る、うす紫、黄金、緋色、

呪文をかけられたまま、霧に包帯、混雑してるよ、

蛭だか蛇だかわからないような奴もいるよ、ついてくるよ、

骸骨の列のように見えている木々のなかの道を、

――馭者が行く、

「お迎えにあがりました。」

四輪馬車が走ってゆく、マニュアルシフトさ、

どうしてもオートマティックにならないのが嫌だね、

でも、ぐつぐつと煮詰まってゆくのさ、微熱が、

夜風に飛ばれながら、ざわめきたつ蓬髪、

夜に溺れたい――…。

「…この日が来るのを、わたしはずっと、

待ち続けていました――」

悲しみのために構築された、城へと――。

あたらしい地獄の覇者とならんため…。

永久に呪う者がここに居る。

海藻や貝殻がほどけてゆく、

夏の暑さに溶けたアスファルトに浸かりながら、

異界の絶巔を覗き見る、ああ、象牙のしなをつくる、

ぬるぬるの、いかれた、夢にまで見たあの塔へと、

向かう。誰も放っておいてはくれない、

そしてきっと誰も、逃げ続けることはできないのだ。

過去から、自由の正体が燃えてる。

そして闇を強引に引き裂きながら、走ってゆく。

一匹の猫が飛んだ

目を閉じると待ち構えていたように

夢の中のよろこびや災厄が訪れる

「あたし性格悪いよ。」

指がことさらにゆっくりと柔毛に櫛をいれてゆく

「あんたオスカ、女好きだな。」

王子様にかわるか無理だろうなこんな馬鹿な顔をしてたら

まあディズニー映画なら大体お前が運命の男性というネタで

グリムとかいう性格の悪い人が作った話を虚飾修正した

ハッピーエンドの物語になるんだけど

「……………いいよな。」

いつのまにか眠ってしまったらしい

それで口を半開きにして変な顔をしていたらしい

隣に男性が座っていてちょっとビックリしたんだけど

そのことで笑っているのを聞いてコノヤロって思ったんだ

――青く染まった空はあたらしいメロディを求めてる

ねえあなたなの、王子様？

あかるい明日へと連れて行ってほしいのよ、ほんとに。

努力するから。

## 死んだ細胞

---

与えられた地図なんてなくても、

未来はその手でも切り拓けるんだよ——…

(with one's eyes slightly open...)

、、、、、、、、、、、、、、、、  
今からかけるこの甘い魔法で、  
、、、、、、、、、、、、、、、、  
何の飾りもない服装は美しくなる。

見慣れたその景色を、シャッターの中に閉じ込めたら、

夜がうすれて星は消えゆく火花…

(with one's eyes slightly open...)

………海と空が韻を踏む。

壮大な神話。

耳が燃える。

ざわめく大地に翩翩と漂っている小舟。

でも 君は、皮肉な唇の冷笑、

露わな白い腕に影が強くなる——

「綺麗すぎて、もう何も見たくない――」

――暗い水の揺れるような瞳で、

透明な優しい、その進路を拘束されないあの強い眼は、

もう見えない……。ヴァイオリンは――月の旋律……。

青い蕾を、僕にはひらかせてあげることはできなくて……。

失望を滑り下ってきた氷河がさまざまな影を織りなして、

牙をむき出しにして、夜を深くする――。

永遠の飛翔をもとめていた君には、

そんなもの似合わない、思っていたのに……

(with one's eyes slightly open...)

お伽噺の小人の洞窟のような、

胸のなかで今にもひと荒れきそうな気配がして、

破片が飛び散って、

ぼやけてるんだ、かすんでる、

まるでピントが合ってなくて、熱を持っていて、

都合良く波長合わせていくだけでは、

君の心に触れられないとは知りながら――。

十年前、柔らかい靄だったものが、

いま、不意におびただしい疲労になる――

(with one's eyes slightly open...)

黒い黒い君を真っ白に塗潰すことはできない、

僕には保守と見えても、君には中庸、

不透明な奔溢に――、気が遠くなって、

ビルディングが伸びでもして未来都市になってるような想像をする、

不安に胸を締め付けられ・・・、頭の中に錐で穴をあけられ、

そこから毒の液でも入れられていくような息詰まる暗黒が、

吐息になって流れる。濁ったまだらや、斜線になる、

荒廃になる――、何一つ変えられないと亡霊が呟きでもしたように、

不毛の土地で、目の前が見えない吹雪に吸い込まれそうになる。

(with one's eyes slightly open...)

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
今からかけるこの甘い魔法で、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
何の飾りもない服装は美しくなる。

いつまで経っても消えない君のかなしい残像が、

もう僕の手のひらに触れることはない・・・

(with one's eyes slightly open...)

「でもくだけやすい氷の秘密を知ってるかい、

その内部では、いまでも明るい夢を見続けている――。」

破れた風船はひらがなのごとくつまらない不格好さをさらして、

プスウと空気が抜けて凋んでゆく、

生の権利さえ弾き飛ばされ、自分の自覚、誇りをなくしてゆく人に、

身体の中にある空気は見えないんだろう――。

(with one's eyes slightly open...)

…………描いては消しての繰り返し、

両手からこぼれそうなほどの波が、

手負いいるかのように沈んでゆく、

海を追われてゆく。

でも 君は、一個の小さな遊星みたいに、

海の濃い青と夜の空の深い黒が似ていると言う――

「馬鹿にしたわけじゃないわ、

爆弾をかかえたアナーキストさん――」

心躍らせる、飾らない、君の言葉…………。

自分を打ち棄てない人の言葉――。



ねえ、ねえ、いつか僕もいまの僕ではなくなるはずだよ、

その時、君の言葉にどうしようもなく近づく一瞬があると思えるんだよ。

(with one's eyes slightly open...)

……………恥ずかしい人生によろしく、

まだまだまだ子供の僕によろしく、

でも音楽は息をしないとうまく歌をうたえないよ、

リズムより声より心がなくちゃ進めない旅だよ。

——僕はあと、何度好きと言うだろう、

ここにいられることにあと、どれくらい感謝するだろう。

ただ生きていることに、ありがとう、と、呟くだろう、

世界の寿命は近付いてる、

未来の破滅はカウントダウンを始めてる、

激しい息遣いをしながらすさまじい叫びをあげ、我を忘れ、

骨を拾い上げ、心臓を凍らせ、肺炎の一步手前になるまで、

やっぱり雨の街を濡れながら歩きたくなるかもしれないけど、

高鳴る鼓動が伝えていく、気配がある、

酔っ払ったような孤独がある、君が浮かべた、

鍵穴のような、笑顔に——。あたらしい電気に、

そのやさしい心の中の豊かさに、

僕はあと何度、見とれるだろう。

そしてあと何度、夜を照らす自由を見出すだろう。

でも 君は、悲劇そのものよりも強い悲劇が起こっていると言う

あなたの明るさはこの国の人々の閉じた眼や口を説明していない――

(with one's eyes slightly open...)

……原生林を開いていこう、

反射光線の流れを見に行こう、

うまく眠れない壁を壊しに行こう、

それが黒い平和や黒い愛を増やすとしても。

僕を感じる君の気配一一。

世界なら綺麗なだけの風景、

後味を知らない、互いにただ、

闇の裏側の極限にまで上り詰めて、

いつか防波堤が認められるほどの諦めに埋もれながら、

どんより濁った夜は神のおそろしい物語の入口。

眼球の海へ迸る回帰への予感。

貪欲な嫌悪の予感。

それでも輪廻をすばらしい黎明へとうつしかえ、

車輪は、殺戮をひややかに目撃したティーヴィーのように、

糸状の光の粘液から流滴があふれでるローマへ、

おお、ヴェネチアへ…、

始原の胎内奥深くめざめてゆく偉いなる悦び。

垂直な闇の底で、引き寄せられてゆく、

壊れた宝庫。

病める魂のうわごとが視覚と嗅覚をこすれあわせる、

暖房装置が囚われの思想を助長し、狂い独楽のような、

影だけがノックする欲情の距離が、白昼夢…。

凍えてじっとしている、虫だった。

われわれは一個の砲弾にすぎず、

たとふれば壊れたスプリングにすぎず、

そういう自虐的なものに僕は長い間、

すさまじい色彩をさせ、僅か数メートルの距離でさえ、

僕から女を拒絶させた。

お互いの瞳の中に何を見た、恋人。

傷ついた麒麟の首へとやさしい雨のように降り注ぎ、

距離がかもし出す幽玄なものにあふれ、

弓なりの曲線は、甘やかに、やわらかに、

時が急ぐのに任せる…。

月の光は春の夜を透かし、

そしてそのみづうみは何と眩しく心を照射するだろう、

素早い好奇心にさらに急かされ、芬芬と甘く匂う、

香水、汗、衣服、シーツ、それらが沖へと遠ざかってゆく…、

いや、燠へと真っ暗に襲いかかる心をとろかしてしまう、

黄色のインクをしている僕の飢えた時計に、

八重に咲く遅き香を与える、壮麗な左手一一。

僕の指が敏感な蓮の葉にあたる。

あらたにそこに芽生えることはできない枝は、

疑似的な心臓に触れる、不可思議な生。

僕の舌が腐った苺みたいな色の神経の尖にあたるときも、

ステンドグラスの縁の縁取りのかなたに異国情緒な陣痛が走る、

ゴム製シリコンが包んでいるような銀色の木の葉に、

猫のような挙動をさせている時も、銀輪をひるがえしながら、

熱い蠟のようなしたたりをさせている。

僕は切なく遠い顔を浮かべるまで、

くすぶる空を引き裂く雷光。

童話の挿し絵じみた、しどけない姿に、

悪意のこもった薄笑いを浮かべながら、僕は、

淫靡な夢に噓せ返るルソーの密林のざわめき。

いつまでも蒼白の野へと置いてゆくことはできない、若葉は、

沸騰してしまう、瓦斯体は赤瑪瑙を隠してしまう、

切れたゼンマイの感覚の世界では、

莢皮のなかにひそんでいる嫩葉に鈴降のごとく、

かるやかな芽だけが透明な箱の、

行き先ボタンを知っている。

水の渦が伝声管を生む。

不意に伸びた腕と、

甘い咳払いで均衡は崩れ去る、  
圧倒されていたたまれない、  
ゆうぐれどきの軽やかな雲がうすく青みを帯びたとき、  
内緒の願いをしたためながら僕は、  
夏の燃える太陽に焼かれたあとで、灰となり、  
不死鳥のように再生する。

鉱物のような夜に沈む、  
絶望を訴える嘆きが獣の背へと、  
あぶらじみた湿気を含んだ、  
棺おおいの温かい噴水の場所へと、  
絹ずれの音をひびかせ、  
気味わるい街の鹿の啼き声、  
硝子にして真空、空疎にして虚無、  
浅緑にして岱赭、黄土色、

この流れる水に――  
押し流された石は、  
何なのだろうと甲高い羽搏きをさせることも、  
かなわぬまま、階段のところで、  
ジャズ・トランペットのそれでも、  
通奏低音を聴き分けている。

君は熟柿のようにとろけ、

僕の肩というなめらかな岩を舐める、

かたつむりのように吸いついて歯を立てる、

お上品な食卓に爬虫類があらわれる、

鋭くまた細く、壮大な沼の憂鬱をさせ、

食虫植物の衰えを感じさせながら、

りんごやいちじくが、見つかる、

声が流星のようにきらめいたら――。

一瞬白く浮かぶ、ぼうっつ、と、浮かぶ、

ものういなやましさに、ずるずると、

水臭いあおい輝きのサファイアが滑り落ちる。

ねえ、木々のあいだから明かりが見えるだろう？

馬車の蹄も聞こえているのだろう？

…ワルツが拡がる、放物線をつなぎながら、

両腕をぴんと伸ばした夜を乗り過ごしてる君にも、

しゃれた花をもっと潤されたい一瞬があるんだろう、

もっと肌に近づいていたい毛布があるんだろう、

僕はそんな時に思う、つかい棒のような自分を、

股間というものの葉叢から飛び出ている残酷な毒蛇を、

唯一なぐさめてくれるのは、

やっぱり残酷な毒蛇なんだと。



異国情緒／異時的雌雄同体／異化作用／

食べる／交わる／殺す／

わたしは生活保護が必要であるから安眠を妨げられています／

完全な沈黙／徹底的な改造すなわちドリル工事の昼夜兼行つかのまの沈黙／

同情心を発揮して世話してやる闇討ちに注意せよのあとの沈黙／

同じ讒言／内なる野生／

わたしはラム酒ガブ飲み／放尿しまくり／

末期症状の零落ぶりに奇態さらしまくり／

政治的信念に寒気／幸運な色男に絞首刑／

世界平和に傷害致死／

いわば天罰の週末／いわずもがな跳躍しながら駆け足全速力逃避行／

アキレス腱なんだと言う生まれ故郷なんだと言う性善説なんだと言う／

異執／異常天候早期警戒情報／異人館／異数体／

食べる／交わる／殺す／

浮かぶ瀬もない／気前良すぎて影が吠える／

わたしは歌詞の断片／鋭敏な耳／嘘／船乗り／

精神機能の障害における変質や混乱／

例外的な存在への転生の経過とその終了／

語彙の異常な豊穡さと連想作用と傍若無人の自伝的記述／

世界は情報ですと言ったところで／

僕は奇妙な邂逅を繰返す波のようなものですよと言ったところで／

こけおどしの弾効口調／

煙草振りまわすような強烈なアルコール／

音程が一度から二度ずつ狂っていく天然資源／

暗黒の呪詛／死の夢／子宮の痙攣／人格の毀損／

自動自動車のお通りでえい／

ぶうぶかぶうぶか／ぶっぶふう／ぱああああ／

可憐な芋笛の音色のごとき詠じ／

黙示録葬送曲全旋界波だくましく猛烈な射勢命令／

抜け目のないこの勘のよさ／

全然関係ないわたくしの二枚目ぶり／

水に映る自分の影にナルキッソスは溺れ／

わたくしはそのナルシスさえ蹴飛ばしながらの構築作業／

そもそもナルシストは嫌いなんだ／

そもそも豚は嫌いなんだ／

食べる／交わる／殺す／

異節環式化合物／異常危険準備金／遺伝子突然変異／

ニューエロティクスな多様の窃視者です／

歌うのだ／嫌です／

芸術するのだ／嫌です／

無知蒙昧な日本人どもを弾劾するのだ／嫌です／

泣きごとを言ってる人間は神に近づいてはいない／

他人を悪く言う奴は自分の仕事を放棄している奴だ／

それは屍體と妊婦における時間の観念の逃避です／

本を読むのだ／嫌です／

飯を食うのだ／嫌です／

お前には才能があるのだ／ありません／

食べる／交わる／殺す／

無茶苦茶の滅茶苦茶の会話体で独占的確信の根本意見／

誰も何も考えていないということはわたしも考えていない／

否考える必要もない／

社会はくそばかたれの奇想天外／

そしておまえは悪夢の連続のサラリーマン的奴隷／

そして決して終わることのない死ぬまでの川の流れ／

否内部から湧きたつあらゆるものの爆発のアンチテーゼ／

啓蒙せよ幼年期お前はドンキーホーテ的観念のカトリック病／

慣れ合いはよせ思春期お前は酒類販売免許人の岡目八目／

ファイナーレはいつまでも来ない弁護士が力説するから／

白馬の王子様も来ない赤頭巾ちゃんは食べられたから／

食べる／交わる／殺す／

異端審問／異類婚姻譚／

否すべては幕が静かに上がった瞬間から劇になる／

幕とは迫害され裏切られ罵られ現実の足場を見失うこと／

われわれはお互いを騙し合いながら伴りの同士となる／

男は女と書き換えられてゆく／

女は男と書き換えられてゆく／

書物はまだ何も告げてはいない／

街路はまだ何も告げてはいない／

そしてわたしはわたしの中の何も告げようとはしていない／

否そうして告げる事自体が文学的な不毛／

否そうして告げる事自体が文化的な悲惨／

わたしはお前になど何も語りたくない／

わたしはお前なんか必要じゃない／

わたしは世間から忘れ去られたい／

わたしは無秩序な孤独死を愛する／

わたくしは無秩序な永遠至福のことを魔法や預言のように信じる／

食べる／交わる／殺す／

それでも食べる／交わる／殺す／

## 踊り子

---

水蛇が一匹、頭を小さな潜望鏡のようにもたげて、淵の面をスルスル滑って行った。水の動きに

葦がかすかに揺らいた。凝結した黒い平和が満々としてかぎりもない百本杭の中にある。判子で押

したような一一、光さえも速度を落としている月のブラシに幸福な時間が熟れてゆく。

まだ十五六しか見えぬ踊り子が原色の渦巻としか思えない衣装で踊っていた。

死んだ蝙蝠の翼のような、ふらんねるを身につけ、猛々しい鳥のように微笑んでいた。

それは錆びたハアモニカのメロディを思い出させた。

人目を避けた暗い公園の通り道に、父親の姿があった。

感情の働きが違ってくるほどに、きびしくあたり、知らず識らず大人ぶってつまらないことでも口

論になった。紙屑箱にでも捨てるように、会社の悪口や、社会への生意気な意見。自分の子供ではな

い気もした。動物園の地図が一一、人種を示す掛図のようにも思えてくる…。

かぐわしい花粉、レモンの新鮮な嗅覚的な注射…。

フランス式暖炉におけるパリの憂鬱一一。

売り言葉に買い言葉だということもわかってはいた。会社の部下に言うような口のきき方をしても、

世間体よりも、親子の愛情よりも、夢を選ぶことなんて当たり前のことじゃないか。洗濯物を干す、

料理をする、炊事をする母親を見て、これを見習えと言っても無理だ。花火があがる。一瞬一瞬に、

得難い価値がある。覚醒、思索、沈潜の歳月をあとにした一日など到底わかるものではない。

見ている側が演じる側になりたい心理――。

でも南瓜を盗んで馬車にするような俄かシンデレラ的な発想――と…。

社会には七人の敵がいる。風景の美しさよりも、移動手段としての電車の景色、ハードワーカ

としての夕暮れ。コンビニという新しい背景がもたらす眠らない街。名刺。人生と戦っている。駅前に

は五、六台タクシーが停まっている。職業に貴賤はある。しかも場合によってはホームレスになり下

がることもある。信じられないくらいの暴力というアンダーグラウンドに巻き込まれることもある。

それは遠くにあるわけではない。ビル街の隣に中華街があり、夜の店が立ち並んでいるのだ。刑務所

にだって送られるかも知れない。病院で蒼ざめた顔をしているかも知れない。心配だ。いい加減、大

人になってくれ、もう心配させるな、と言いたい。

諫言は耳に痛い、良薬は口に苦い、でも、ガソリンはいつかなくなってしまう…。

女、女というのは――。

しかし彼女だって何かと激しく戦っている。独楽のような動きをしながら、綺麗に何かを棄て去る

うとしている。それは技巧とも曲芸とも遊戯ともアクロバティックなだけなのとも違った。それは子

供時代を思い出させる、力の溢れた美しい白さがみなぎっていた。木にぶつかったり、草の中を走り

回ったりして生傷の絶えない子供時代のように歯をむき出している向こう見ずな強さ。

そしてそれを誰が止められるのだろう…。

酔っぱらいたくなかった――。

この可愛い子は誰です、と娘を写真で紹介していた時が懐かしかった。

顔かたちはうすぼんやりとしか思い出せない。やはり猿のようだった気もする。

それは本能的に可愛く見せているだけなんだという気もする。幻想なんだ、と。

でも時々思い出す、奥さんによく似ていますね、と言われたことを。

女房のように口うるさくなる。行儀悪くなる。でも、女房に似て、正直だ。

「お知り合いですか？」と、突然声をかけられた。

盲目にでもなったように、声が出てきた。

置物じみた姿が、器械体操を連想させる。

見ると、ホームの雑踏で見たことのあるような顔をしていた。

平和の後ろ側で見たことのあるような顔――。

ようは、まったく見知らぬ人であった。四五十代だから、自分と同年代かもしれない。

「いえ、まあ――。」

「そうですか。いつもああして、踊っていますよ、

ゆらめき進む、隣の軌跡のようでしょう。」

蜘蛛の糸のようにしばし視線を娘と戻す。

鳩が舞台を、つつきながら歩いているような奇妙さが襲った。

しかし、波のような圧力を感じた。

「すべてがつかややかに丸みを帯びて、最後にはガラスのような、

放心した表情をしながら、自動販売機でジュースを買って帰ってゆくみたいです。

毎日よく続くものだと思います。」

そこには感じることはできても中々口では説明しにくい永遠の若さへの嫉妬が、  
あふれていた。老境へと差し掛かる胸に秘められた花びらの赤さ、  
めまぐるしい文字盤の不安。古疵をえぐることになっても、若さはランプのようだ。

風が木の葉を落とした。

枝には北斗星が立ち、月が頂上を照らす。

薔薇いろの頬をした娘に、あたらしく落ちた露の雫――。

「…若さというのはいいものだね、

多くの名刺を棄ててもいいみたいに見える。」



でも 降り出した の 雨で 鈍くな る――

出かけよう、 順風満帆の生活…、

今からすぐに 情報整理…、 あいにく傘を持ち合わせておらず最寄り駅まで、

無差別連鎖…、何かその場所へ誘導される 共有情報ネットワーク。

「ダラダラと時間が流れている、

魂が汚い俺とひとつ美しい蛇」

白黒の世界を眺めながらスケートリングを滑っている、

特許許可局…、 フェロモン、 矢印 、 無意識的領域の暗示でアクセス…、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

言葉はフェイクまんまと嵌められる前に、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

意識をシャットダウンして機械に変化する術、

(カメレオンは――夜その姿を…夜の色の…色にする。 )

…いのちを…たたきこわして…

……いのりを……たたきこわして……

でも 降り出した の 雨で 鈍くな る――

(Haa…はあ… h a a a …haaa…はあっ…)

ハッと気付くとテーブルには既に幾つかの料理が並べられており、

オフコース！ 湯気の立ち上がり方からハッハウ、 副作用はとうとう禁断の領域へ、

共有情報ネットワーク。

連ね…た――切っ――た…

「ダラダラと時間が流れている、

魂が汚い俺といっとう美しい蛇」

(蛇、)

(蛇、)

肩掛け、レッグウォーマー、アームウォーマー、帽子、手袋……

でも 降り出した の 雨で 鈍く なる――

(Haa...はあ...h a a a...haaa...はあっ...)

今用意されたばかりだということは容易に判明、分析、

即時行動できる マニュアルシフト形状記憶合金・・、それでも記憶がない僕は、

ポテトサラダ、パン、スープを、いただきながらモグモグ携帯を動かす、

半信半疑フォロワー有名人DM状態、

「どうせ騙り (蛇、) 」

(Woo...WOOO...woo...WOOO...うわあああああ...)

IT、グーグル、地図、北、南、ここは何処、如何様贗物光化学スモッグ、

諸行無常のリズムに合わせて、PLEASE、HELP、NO、はあ..あ..うん、

やや不満そうな顔をのぞかせ、ポケットに手を入れながら見知らぬ街を歩けば人相も変わる、

よそゆくシティ前頭葉腐敗自尊心肥大精神不細工症候群絶望協調大袈裟、

人間を舐め切っている早口な言葉、ラップを意図せず 早く血と募れば、

それは緊張と弛緩の ドップラー効果エクササイズダイエット、

「どうせオナる (蛇、) 」

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

言葉はフェイクまんまと嵌められる前に、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

意識をシャットダウンして機械に変化する術、

(カメレオンは――夜その姿を…夜の色の…色にする。)

…いのちを…たたきこわして…

……いのりを……たたきこわして……

(浴室髭を剃って歯を磨きながら嘔吐。)

血を吐いて…血を吐いて…魂の言葉吐いて…!

(鮭飲みすぎたかなってあなたかクマ科ですかと嘔吐のち苦笑。)

嘘を撒き散らして…嘘を切り刻んで…魂の言葉吐いて…!

でも 降り出した の 雨で 鈍くなる――

新しい世界へ駆け足気味にジャンプ、飛躍したい世界に焦がれて口から舌からわき上がる唾液、

向上、次元転換でもそんなこと言たって、全力疾走しすぎの唧筒爆発寸前…、

脳内麻薬はネタ切れ、脳内崩壊、脳髓が倦んでいて小人が歩きだす、

イタズラに荷担、やめてトリッキー、片頭痛、ワンツーステップでヘドロダイヴ、

スクランブル交差点あるきながら、面接誰かとの約束バックレ、僕が消える夜、

誰かから消える夜、今からちょっとプログラムを書き換えるから ロートレアモン。

流星みたいに――よるにすべりこんで――ゆ…こ…う…

よるにすべりこんで――ゆ…ける……

…いのちを…たたきこわして…

……いのりを……たたきこわして……

通り過ぎてから気付いた風の色……。

---

通り過ぎてから気付いた風の色……。

（修飾・被修飾の関係は連想過程と等価なものだから、

——その処理過程は明らかに創造的な概念形成と同質……）

そこに、ストップウォッチがあればいい。

そこに、フィードバックのための追体験があればいい。

（目の前がもし、住宅街ではなく、学校だったら、

都市部のビル街だったら、高原だったら——。）

寸前でブレーキが掛かってる理性のタガを外して、

まだ内に秘めてるポテンシャルに呼びかける、信じる……。

（ここにいる僕が彼だったら、彼ではなく誰かがだったら、

あなたではなく、君だったら、名前だったら、存在だったら……。）

抑えがたい幸福の吐息、鞭打つような不愉快な関節の響き、

変わってゆく反響の具合、刻薄な響き、自然に目覚める和音、

鳥のさえずり、嵐のように君臨したドンキーホーテ、腕の鳥肌に頬の紅潮、

白く静かな空気、地下水の滝のような詩情、鳥が去った後の巢の冷澹。

（呆気なく溶け去ってしまう、現実という空白、認識、その始動、

——馬の華麗な足並み、兵隊式の行進。……）

人工的な音の中で、自然な音が寄り添う時の不思議な感じ……。

僕等、動物でも、人間で、人類で、猿で、しかも宇宙人。

（赤ではなく、レッドで、カーマインで、夕陽の色で、

青ではなく、すみれ色で、ブルーで。）

彼が着てるのは服じゃなくて、Tシャツで、そのブランド名で、

何らかの特徴を記した彼の感覚を形作っているものの一つで。

（どうして個性を形作ることに執心するのかと考える僕は、

予約募集の広告の注文殺到、成功とその忙しさと嘘偽りない血。）

演技的でいい、舞台的な演出でもいい、ジェスチャーやポーズに惹かれる理由、

言葉回しや、方言、溜息、間の置き方に惹かれてしまう理由——。

（キーンコンカンコーンと鳴るチャイム、くあああと鳴く鳥、

がたごと、と揺れる電車、ちりんちりん走る自転車——。）

僕が世界に惹かれる理由、さまざまな国の言葉に惹かれる理由、

興味という認識欲、知的好奇心、いやそれだけじゃない抑えがたい僕の夢——。

（言葉の中に囚われた瞬間から、言い表すこと、表現すること……。

嘘をリアルにすること、ドラマツルギーとキャラクター。）

レトリックは人類の積み重ねてきた知恵なんだ。

表現行為のすべては世界を表すコードなんだ。

（漫画やアニメや音楽、手に取る本も、聴いてる音楽も、

いま食べている食事も、すべて、生きることの深い意味になる。)

でもだから言葉は、もっと新しいシステムを求めてるんだと思った。

だから文明は、前に進んでいくことを求めているんだと思った。

(夢を見ているみたいに、懐かしさを覚えてしまう世界が――)

少しずつ変わってゆくことを恐れながらも、受け容れていった…)

世界はもっと広いのに果てしなく広いのに、

宇宙はかぎりなく広いのに、想像できないくらい広いのに、

僕はもっと違うのに、もっとその空気そのものになれるのに、

言葉はもっと鋭く、優しく、強く、しなやかに移り変わるのに。

(庭に忍び込んだ猫みたいに、枝にとまった鳥みたいに、

もっと心の中へ、魂の中へ、潜り込んでゆけるのに――)

通り過ぎてから気付いた風の色…………。

通り過ぎてから気付いた風の色…………。

戸惑いの影の中 で

納得できるゴールなんてあるはずもなく

お おど おどるような足取りでゆっくりとめぐる

調律のズレた ピアノの音……」

色が消えてく 表情……」

>>>最近見つけたインディーズなんだけどね

どうでもいい……………

剥がれ喚いて……………こわれ——て……僕は——

——歪んだ愛情なんてことはもうわかってるくせに……

と／か／言／う／

このジョークは不発」

———ほら、さっさと帰っちゃって

カエ／ラ／ナイ／デ

<へや>が

<共同墓地だ。不機嫌な男が巨大な蛇に変わる。>

透明な針で――鋭く光っている――

デジタル（の、）目玉のような星

どうでもいい……………

（ヒトリボッチのベッドで

剃刀を手首にあてているみたいだ）

蜃気楼に接続先はないし――合流地点もない――

身の毛のよだつような――古い鏡――

かじかむ――僕の中にある急所がちくりと痛む――

――アタリかハズレかだなんてそれで済むわけない

と／か／言／う／

このジョークも不発」



○コレラ    ○ペスト

—— 異様に鋭角の積み木 ——

(あなたの望むような筋書きにならない

棚に上げたエゴイズム)

[ 忘れ物 ]

繰り返して死んでまた生きて——雷雨にさらされて——

影の真っ暗な眼に見つめられ——カマキリの卵が孵る——

>>> 世界のすべては 否定される

本当の嘘つきはどこに誰だろうねとノイズの響き が

さみしさにふるえそうな喧噪に変わる

……マイナスの夢を見た

—— 《溺愛》が寒かった

お おど おどるような足取りでゆっくりとめぐる

肺がつぶれてしまう……………

金属の欠片——

僕は 昨日見る夢……」

傷口から 溢れだす……」

リップクリームを塗ったら、

カサカサやひび割れがなくなる――。

「夏をつれてくる妖精がないからだ。」

という、ボクは、

足跡のまだない街角・・・！

――なまめかしく揺らめいている夢から紡いだ淡いクリイムの期待を束ね、

接続の痛みを排他する貨幣――

踊れ、もがきながら暗い沼の底へしずんでゆく・・・

徳と犠牲と顫えと傷がつくりだす血液――（を、）――

あるいは、ちょっとずつ明確な矛盾へと移り変わる一瞬へ――。

「さあ行こう。」

ウェディングドレスの中の蛇、上顎と下顎が、

うまく噛み合わないような変形をしている。

孤独な魂の叫びを聴いたWHITE.Key.3205...pearl...

パチンパチンとたどたどしい音を立てながらはまってゆく、

風景の一部で酩酊の運転席ジャミロクワイ。なんだか意味わからない、

でもそういうことに意味がある、WHITE.Key.3205...pearl...

大切なことを見失った人がいて、

大切なことをもう認めたくない人がいる。

——人が歩いているのを見たよ…見たよ……

——街が歩いているのを見たよ…見たよ……

内へ内へと傾いていた想いの切っ先は、

ホームの前、着信音がナミダスケープして、 …シテ…

コンビニエンスストア／デパート／

不確定性シンパシー。戻らない星座、もう浮かばないあの日の部屋——

裂け目が生まれてくる…砂の幻……

『列を作るアリを踏み潰した』

フィードバック脳内スクリプト、

でも君のことだけは覚えてる、

ボクはきっと大切なことだけは覚えてる、

『記憶のページは効率良くめくられる』

逃げているのか逃げられているのか、

世界がなくなる前兆のように、

たましいなんかを見てる、

、、、、、、、、、、

うさぎになりたいな、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

耳のぼしてすすきの穂のように揺れてたいな、

——見透かされないようにしている、

心の中の影は、

本当にそれぐらい大きくなった..

靴の中には雪が、

空から舞い落ちた雪が、

いつか靴を埋めてしまう。

——誰かが言った、

淡くきらめいた世界の幻想に、

..横たわる身体、捻じ曲がった感情。

(ショーウィンドウの冷たさに遮られ、)

(ボクはもっと、ボクの中のボクに遮られてゆく...)

「感情を繋ぐものがあまいだから——

瞳の向こう側にいる君をうまく見ることができない... 」

デジャブ——指の間すり抜けていく抽象的な危険と論理の欠如..

エンドレスリピート——..。

「両手を広げた長さが身長だとすると、pass.170.door」

「君を愛してるとして、それが永遠だとすると、

pass.170.door...creep...」

——数えきれない夢をかぞえながら、

大人になりきれない大人になりながら、

..人間嫌いなのか、人間不信なのか、考える。

毛糸で編んだ手袋もマフラーも、

存在と存在の境界線。振り解こうとしたその腕の力に、

刹那と消えた闇と交わる瞬間、価値のない天体に置き換える、

だろう——ダロ…フ……。キャンバスみたいに思える、

すいめんかがみ

水面鏡の月。あたらしい、潜望鏡…。だろう——ダロ…フ……。ふふ…。

歪んで歪んで、叫び声だけが抜けていかない、

空っぽの脅迫、 ——ECHO（が、）

生きているだけの、*疲労*。

死ねないでいる僕の、*内部燃焼*。

世界は明日終わる

だから正さなくてはいけない

警察官をマシンガンで撃ち殺したい

僕は本気だ

公務執行妨害のゴジラと

謳われてもいい

だって明日世界は終わるのだから

螺旋階段を降りた先に

国際的迫害の街がある

未来都市ソラネス！

僕はソラネスの下僕だった！

卑劣な妨害者たちが

きっと僕に悪の

イングランド

キリスト教徒が来る

でも僕は彼等に価格の三分の二を

支払うんだオイキムチが食べたい

許さないぞと言うだろう

僕の中の改革は東京の下町の

おむつを集めさせるだろう

友好促進国家補助制度に

僕は小便をかけるだろう

あざらしおいで！

ひぐまおいで！

ホワイトタイガーおいで！

僕はここだよ山姥じゃないよ！

正義が不人気馬に勝たせたよ！

ジャスティス！

おいらん草は何処！

尻の穴をなめろ！

尻子玉をなめろ！



## What will you do when you grow up? # AVEN1106

---

青い風というのはザクザクと進める道にあって、

そっと遠回りをするんだよ。

あたしは自然とあくびをする。

頭が仰け反って咽喉が見えるほど単純な呼吸を空に求めて。

ねえ結構長くまじめにしっかり考えてたよ。

どうすれば眩しくなれるかって、幸せになれるかって、

電車のレールが遠くで銀色の細引きのように光って、

どうすれば向こうへ行けるんだらうって。

背の低い灌木のある庭とかでね、わからないまま、

窓のカーテンを閉じたりしてね考えていたんだ。

でもきれいごとはやめようって。

風のように無邪気に生きるのって大切だね。

見てくれよ、君、あたしは無数の瞳のように輝く葉なんだ。

作法もなく大胆にのびした腕に蝉の翅なんだ。

音もなく降ってくる雨で、

あたしもいつかはこの舞台を降りるのかも知れない。

あらゆる行為の生命としての終わりはあるよね、

躍動感はなくなるし、野菜も二日三日すればみずみずしさはなくなる、

肌だって蜜の河とはいかない。

けれど思いがけない曲折があるから、

引き返せるんだと試してみたんだ。

フラストレーションを溜めることはないよね、

何かを諦めてゆく前に電池が切れる前に中心の人ごみで。

水蒸気が白くほのかにわきあがってくる川辺で、

子供みたいな大きな声で笑うんだ、

大人になるのはもう少し先でいいや。

サイケデリックな蝶を見たかい？

それはモスラの生まれ変わりさ。

羽根から出されるパナソニックウェーブがよく似合う。

猛獣のつま先の影で心地よい眠りにつく。

釘や、ねじへと、フラワースモオオカアが。

奴は飛んでゆく土星のリングへ。

カオスにまみれた冥王星へ。

奴のチャクラがひらく時、

牧草のかおりにつつまれる。

そして執拗な催眠光線をはなちながら、

キングズタウンで、ペペロンチーノする。

強い。そして圧倒的に強い。

奴は燃える。

考えるな、感じろ。

廃止された魔女狩りのなか、

タイタニック号のように沈没する。

月が奴を孤独にする。

らっきょうが食べたい。

おやすみ、

サイケデリックな蝶。

どんな夢を見るんだい？

都会という刺激的な色に好奇心を液体されて、

燧石から出るような火花が眼を欺く。

——子供じみた不決断。

「おいでよ…これが最後だよ——」

躊躇した…！ いま、この手を握ることで、

性のあたらしい生活を強いようとする言葉が、

しみじみと嫌になった、でも愛していた、

願ってもない言葉だった、

でもだからこそ、猶予が欲しかった、

でもすぐに答えられず、心持ち首をかしげた——。

（静かなるときは漂い、感情があらわれるや風が起こり、

せきを切ったように熱狂的にあちらこちらへと帆を操るように行く）

（彼女は戸惑った、流行いろいろさまざまな種類のものに、

戸惑った、身ぶり手ぶりまでそれをしゅしゅ諦めた人のように。）

……魔法の力の所有を感じた鏡に。

——火が赤々と燃えている時に感じる雌鳥の卵のような一瞬。

関心と議論における仮説はチーズにスパイスすることで、

腐食性の神経伝達をする。

「嫌です。」

自分でも、そらぞらしく思いながら――…。

自分に失望した、本当はそうじゃない、と言いたかった。

でも彼女は決めた、内的な意志が、神の視座が、本当の幸福を見誤るのだ、

溶け始めた泥濘にしみながら雪がまだかがやいているように、

彼女は臆病で、未経験な若い警戒という病に真実を見誤る、

でもその深層には、正当な人生への処置がある、経験。

小賢しい焦慮がその不用意な胸や頭を醜く歪めているとばかりに。

（風は一層に切ない調子でせき込んで鳴いた鳥のように、

あわれどこかはかない美しさを添えた。）

（スカンクの強烈な化学的な刺激臭に、

旧世界の雑草が挑発する、とても奇妙に、とても刺激的！）

いま、嘴や鶏冠や、翼や、蹴爪を持ったように、

交感神経の思惑の高まりの中で、ひどく抽象的な純粋な不純粋な、

生き物になったような変化を感じる。

……無意識的快感が神的決断を迫る沈着と大胆とその鋭さ。

[彼女はこれから魂の半身ではない男と巡り会い、あばずれになり、  
ふらふらくさくさし、子供を生み、主婦になり、離婚し、最後に、  
人生に狂って自殺する。運命の皮肉、悪戯が、憧憬や理想を悲劇的にする。]

物体の如き物体の如き物体の如き物体の如き物体の如きはげしい焦燥衝動自爆断章僕等は  
金管楽器金管楽器金管楽器金管楽器の懈怠安堵にみちた瞳それでいて何か物足りない瞳をし  
てこの静けさのすさまじい叫び声に耳をやられるさみしさに雷光雷光に顔をパラソルのよう  
にひらいて感電する激流する電流する砂金する白玉する鰻のようにくねる水母する軽快にし  
て！ 飛翔して！ かくもうな垂れるしみったれ！

「飛べ！」

——認識は困難、形態は微妙…。短剣はつらぬくか、探検はつづくか、認知は生涯か、

それとも障害として処理されるか、認識は困難、形態は微妙…。

屋蹴る/矢毛流/やける/るるけや/るるけや/

(旧知の檻は続く——嫌みたっぷりなファンファーレが鳴る)

仮面を笑う舞踏のように永遠に装飾する永遠に総称する永遠に自称する睡眠する

フランケンシュタインなる説明のできないほど奇跡じみた美女となる

真っ二つに切断してしまったんだ烈しい裂け目を見せるようにもうしつこい悪夢が

どぎつい楔打ち込んだんだシャツをひるがえして青い話を探して日向のなやましさ

われひとつのテンガロン・ハットなる焦点がさだまらないさ/が/

鼻の中に豚が咲く文鎮が咲くしらけ鳥が咲く車輪が咲く

そしてめくるめくような海へとその姿形を混沌に変えてゆく



bypass-バナナをモチーフにしてあざける淫らな歳月にする流浪するあやうくなる

bias-しどろもどろな悪僧が尼になる陀羅尼する聖母するキリストする馬鹿なあやうくなる

血のつながりとか性的なむすびつきとか化石とか純潔とか幼児の追憶だとか別それは別だと  
デスマスクする宮殿する墓場するこの無機体のリズム無機体のリズムに劇場する運動に獲得  
する格闘するマイクロフォンみたいにテカテカさせて不思議だ

するとなくなってしまう遠ざかってしまう壁になってしまう非力になりすぎてしまう

するとなってしまう紫のリボンのようなキーチェーンになる

かすかに上気したものが諦めになる迫ってくる現実になる嘘になる動けなくなる

そしてまた封じられてしまう冷やかで微かなものに魅せられてしまう

噴水は美しい梯子をのぼる月汞だパラノイアだ擾乱だ炎ゆるわれらの炎ゆるわれらの炎ゆる  
われらの炎ゆるわれらの炎ゆるわれらの雨の日は迷宮の朦朧たる独唱それは落雷した慟哭  
のごとく虚偽するあしらう愚かな爆裂をする猛魚する珍魚する火花する殴打する賭博する骨  
牌する無頼漢する一致しない一致しなくなる一致しない一致しなくなるいよいよ加工するい  
よいよ下降する/ぎゆるんぎゆるんする/沈澱/する/ばさばさと/なる/

「笑え！」

——認識は困難、形態は微妙…。無限に奇怪する、大層はつづく、器械体操、

アクロバティックは続く、アフロディーナはもういない、認識は困難、形態は微妙…。

屋蹴る/矢毛流/やける/るるけや/るるけや/

変幻—— 圧迫の増大——

灰いろに規定されてゆく志向の中の林檎

無の旋律—— 非美学のなかの美学——

男性型鍵は女性型鍵穴へと挿入される

剃刀の刃は眼球をえぐるためにあり——

空間的アンバランスの可視的絶叫

薔薇はコーヒーカップするためにある——

という—— 無謀——

1 F は飲食店と書店にコンビニに物販店舗

2 F はゲームセンター 3 F は駐車場

4 F は映画館 5 F は存在しない 6 F は存在しない

常識はずれを比喩的空間にする——

絵が現実であり現実絵であるというダブルイメージ

女性の肉体は朽ちるためにある——

素朴な意見は必然的な狂気を孕んでいる

それこそが美だと——

パン屑のように落ちている——

欧米インテリア雑貨にベーカリーカフェに

中華料理店にフランス料理ドイツの

ソーセージに日本の寺

否サディズムを無意識的に表現するため――

非論理的魅惑のイメージが少年的想像力の代替をする

硬直する反動作用としての、

デッサンされる二つの椅子と二つの人形

痙攣的な扉における肉体に、

内部的未開人衝撃力

金属棒を突入させたときの崩れ――

その時黒人はモアイ像のような彫刻である

皮膚をもちあげる――

その時白人はヒマラヤの雪のように誇張される

女は次第に大きく拡がっては、

その時日本人はバナナの皮となり失笑を誘うだろう

縮小していく――横溢する幻想――

ダイナミックな遠近法とシャープな透視法

変幻――圧迫の増大――

生成生成分（としての、）生成という高速分裂

薔薇は色彩的なFINGERになる――

シュールレアリスムにおける官能的考察

女は毛髪や足の爪のFINGERになる――

エクスキューズミー？

エクスキューズミー？

エクスキューズミー？

[君と僕の想いは 交わることなく…]

(ほらほら始まるよ 歪んだ 僕のKiss)

*a...b...c...*

(何か異常に冷たい心に圧迫されて—)

人を陥れることを考えてしまう…。 )

……真っ暗い井戸の底に、

眼の上に、

夜の高速道路の景色が—思い出せる…

流星…時間に吹きめくられたページが、

垣間見せる—やわらかなガラスの破片の色した霧…

「真実なんて期待していない。」

*a...b...c...*

(本当の悪魔が目覚めてしまいそうな気がする――

僕は病という呪いをかけられた月明かり…。 )

エンドロールもない結末。白い紙が光る明日の噴水。

飛翔する。焦点の定まらぬ頭の中の油が切れた感じ。

*JOY and JOY and JOY...*

――希望と言う名のまがいものに生きる本能を妨げられて、

そんな風に過ぎていく、厚い雲のような嫌になるくらいの真面目さが街を眠らせる。

灰いろの煉瓦だ。忘れ去られた結核病棟だ。

僕という柔らかな繭だ。骨を積み上げたような記憶だ。

光は点から点へとゆく。恐ろしいほどの濃藍色の空を背景として。

言い訳をはじめから用意していた…絶望の朝へと向かって、

雪かき作業がいまこの瞬間から始まっている――。

「繰り返すこのリズム――」

「繰り返すよ、このリズム…」

そろそろ惑星が近づいてきたから、

花開いたカーネーションのような微笑みが輝いている。

でも耳の中で溶鉱炉の稼働音が聞こえている――…。

「タイムマシン読んだことがある？」

(――長く忘れていた…けど、僕等はまだ、

人間を辞め始めているようにも思うんだよ…)

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

ズレている、何かがもうブレているって、砂地の底のようなさびしさが、

発光性プランクトンする。子供の靴が、砂場には何故か片方だけ落ちている。

銃身のようにすらりと伸びたポプラの樹が、蒼みがかった靄の中に消えていく。

突き抜けるような、眩しい音で、

ハロー、ハロー……

「世界だなんて何処にもあるはずもなくて目の前だけが僕の世界――… 」

*a...b...c...*

「僕をおいていくように駆け抜けた夏の向こう側――… 」

(何か異常に冷たい心に圧迫されて――

人を陥れることを考えてしまう…。 )

……風と機械のChorus。

苦痛は消えない、

不可能だよミルキーウェイ――潜在的惑星軌道……

流星・・・収束のできないユニヴァース！

空論味あふれた視界で――全画面FLASHの独り善がりガラスケース・・・

突き抜けるような、眩しい音で、

ハロー、ハロー・・・

古糸のもつれたような寒い街で、祝祭がもう終わった夜に。

世界の隅で寂れた針が揺れる君の大好きなundergroundカタログ。

喪のヴェール、曙に眠る葡萄の蔓、そして火を吐くサラマンダーの森。

くろてん

黒豹の壁。空へ手を伸ばし続けるんだ、死者の腕のようにぐんなりとしても、

展開される放射状の景色がたとえ暗闇としても、夙うに方角を見失っていても。

指差す合図、Triggerの合図。鳶の刺繍がアスカの地上絵みたいに甦る、

抽象の洞窟のような扉が開いてくれる、ヨットの帆のように、開いている――。

さよなら さよなら が 巡る 光・・・。

傷つくたびに 聴こえる のは 散りゆく 惑星の声・・・。

*a...b...c...*

「培養液の中に入る――・・・」

（何か異常に冷たい心に圧迫されて――



人を陥れることを考えてしまう…。 )

……ブルースハーブの進化した心臓、

行方不明——vector反転する不慣れな歩行、

五メートルだって進めるわけではないさ——潜在的惑星軌道……

流星……音のない電波は螺旋を描くStarlightダンスフロア、

光跡の向こうからI say——無限に広がるセカイのパズル……

X軸から見るジャングルと都会を見ながら野蛮なひな壇に浮かぶCO2……。

突き抜けるような、眩しい音で、

ハロー、ハロー……

死者は最も健康な一般人の心の中で昼の日中に、

たのしく眠っている。めざまめよ君がころよ、

有用だと思われることに従事する自由、濡れた重い外套、

信仰の友として親しく交際して来たからこそ食い入るような眼で見つめる。

疲労が、黒い、氷のような手で――

そいつは頭蓋の裏側から俺を待ってる。

白い霜のような沈黙が流れ続けている部屋で俺はそれを見つめている。

――まさしくその在り処を、

突き止めた――なら……

だが次の瞬間、ちょうどそれは目的の時刻表を発見し、

スッと時刻表欄を指でなぞりながら、

精神と感覚ののびるうちに、[沈黙が緑色に色づく ]

不毛から、地獄へ行ったとしても、

それが眠りの中にあろうとも。[うしほあみにし ]

俺は地獄の安っぽさに娯楽的生活水準を見出す。

丸く縁取られた空間から抜け出す青色の切符。

れえぞんでえとる>>>>

<<<<よげん

ガラス管から逆流してくる血液、社会の荒廃、

(蕎麦の花。洋燈。洗い桶。

右になだらかな憂鬱そうな山が伏し、

空には憂鬱そうな月の笠)

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、  
純粹では遠くへ行けない。永遠さえも邪魔だ、

花はっそう斑點を増し、最後のきらめきは水銀。

繰り返しやってくる完成への欲求は、くらげのようにあおざめた、

楽園のみが製造される安寧であると知りながら。ありがはいでてる、

しかし、それでも、いま、有効な対策が打てないまま、なめくじがしおにとける、

窮屈にギクシャクと生きている俺が。

アンダーグラウンドー。

エンジン音が盛夏に拍車をかける。。

やがてタイヤの空気が抜けていくだろう。

月を一方へと押し付け、はてしなく広がる闇の中へと俺を残した。

当時の俺の経緯を知るとごくごく少数の者にとって、

力任せに磨いて銀色にひからせる鍋を UFO のように思っていた俺は、

泥の湖。爪のように伸びてくる不吉へと連れ去ってゆく手。その向こうに気配。

むき出しの漣にさらわれそうになる暗黒のかがやき。

映写機のビーム、蓄音器のレコード、隅々まで明るくなる嘘の世界、

そしていつかゴム繊維の塊にでもなって、河の底の流れに沿って棚引いている

樹枝が流れて固まったような子供がいる……

――まさしくその在り処を、

突き止めた――なら……

(存在の 一瞬のありようにすぎない。 )

「雲はちぎれて

そらをとぶ。

昇降する梯子のように、平安あれ。

(そいつにはきっと色んな名前があるんだ。

母の愛。父の愛。社会の愛。

友達への愛。組織への愛)

でもうなだれることを、

やめられない。邪念はつづく

だろう。

分からない。いや。」

肉体を失った劇業がそこに住みついている。

アンダーグラウンド――。

風に吹かれる帆のようにはためくだろう…。

そしてお前は小さな鈴みたいに鳴らされてしまう。

それでも、ふかふかのベッドに、

人並みの食事があるという湯上りの女の膝小僧のうしろのしとけなさに、

### ／さらけだされた戦車の部品

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
絶望する。王者の血潮はわきたたない、赤い光線の波に溺れられない、

ふけとあか、小便に嘔吐まみれ [研ぎ澄ましてゆく連想の作用]

それでも、焦がれながら豊穣を口にす、

酔っぱらいや警官が蜥蜴でも見るような眼で見る、

### ／絶えず姿形を変えてゆく

あたたかもいま永遠の風が、運び去るのを待っているかのうように。

ただ、赤ん坊が泣きわめくような異様な声で啼く、 [船尾灯のような月]

まるで嫉妬の恐怖に呪縛でもされているように、

いつまでも昔話が消えない、偉大な王とやらは消えない、

だから俺は得体の知れない鳥が、

街灯の淡い光を浴びて立ち尽くすのを、 [喰いちらした骨、煮とろけた檸檬]

強欲と怠惰、無知のうまい解決法、つれなく断られた交渉みたいに、

注意深く、世界中の芝生にでも降る雨のように、あるいは電話口のように、

黙って、聞いているのだろう。観ている。

背後の古ぼけたボンボン時計を見た。

――まさしくその在り処を、

突き止めた――なら…

(コニャックの罇を掲げて現われでもしような、)

――リボンの落ちる音、

スカートのめくれる…音…。

――みじかき時は貝殻、浮標、鈴、

目覚めよ、眠れるものたちよ、

巡り会い、はなればなれになれ。

アンダーグラウンド――。

舟を漕ぐのに疲れた種子…。

もはや何の目を見せる気もないサイコロ。

時間の奥底で、巨大な氷の皿を見ている。

(何度言わせる、それは、いぼだ！ 影だ)

ポスターや広告になる。不毛な備品になり下がり、

断崖の底を覗きこんだような腹立たしさをおぼえながら、

福音に満ちた休息、俺は口を嚙む、

一瞬意識が遠ざかりそうになるから。 [鉄の大きなかたまり ]

そして冷たい死の中心から俺は呼吸している。

残念ながら俺は腹がからっぽで、 [水底にうねりこむ無数の蛇 ]

頭まで少し変になったようだ。なたのやうだ。やふだ。

しつこい臭いがいまでも残っている。[ぎざぎざの縁駆けるにも似たり]

そしてどこにも見えない影がそこに残っている。

磁石のガラス蓋、それも上等の甘い蜂蜜を入れるような蓋のある壇に、

大きくて黒い俺という瓦斯体を入れてゆく。[取りすがれない、阿片感覚]

あれほど包み紙を破ってはいけないと言ったのに。

――まさしくその在り処を、

突き止めた――なら……

輪の反応をたしかめるような油断のない機敏な指揮官の眼の動き。

(ざらざらした本当の自分にめぐりあえるかも知れない。)

「ときはながれて

しろとなる。

そしてまた調理台の上へ、平安あれ。

(何かが俺の心臓をつかまえようとしてる。

何かが俺の血管を目には見えない物質でうすみどりにする、

綿のような雲、経帷子、面紗、そして、古風な楯。)

でもうなだれることを、

やめられない。邪念はつづく

だろう。

分からない。いや。」

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
解きほぐされるためにある――。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
魂はプラスチック製・・。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
みずからを焼き尽くす炎のときでさえ感じる。

(われわれにはただ 一つの 道 しかない。 )

――蜘蛛の巣（死の囚われた状態）が、

同じような服を着て、なまりをつけながら、おしゃべりしてる。

さもなくば――と言ったとしても……

見せかけの『動機』への結びつきの目は消えない。

おのずから生じるとしても、切断できるかぎりは……。

「引き裂かれるべき

人生劇場。

お前は牽引されてゆく。

(俺に向かって、すっかり路上に放置していた車みたいな、

俺に向かって。光は夢より重く、平べったい胸部で、

まだ脂肪の乗らない飛び交う花々のように、それを。)

打ち開かれてゆくのを信じるとしても、

目覚められない。悩みは続く



だろう。

おそらく。まだ。しかし。」

嘘を言わなくなったね

嘘を言わなくなった

きれいな月のようだと思っていた

きれいな月だった

——女が好きじゃなくなったわけじゃない

でも女のしなをつくるやわらかな春の装いが

僕から戦争を奪ってしまっただけ

行き止まりの誘惑とか袋小路って

カンガルーのポケットみたいだ

そしてそれはきっと僕等の胎内回帰願望なんだ

スカンクがかました悪臭みたいに

僕は名前とか環境とかそもそもの前提とかを

たくさん忘れてしまった

たくさんたくさん忘れてしまった

……甘くさえずるカナリアは

甘い汁で腐る気持ちに拍車をかける

肉体に魅せられた

でも百年経ったあとで欲情することは不可能だった

そしてそれが一千年前をさかのぼるドラマティックな一瞬でも

信じるべき嘘も本当も見分けがないんだってことに気付いた

世界がぶち壊れてめちゃくちゃになるのが見たいって

夜の怪物が言う

でも夜の怪物がいい気でいられるのは

まだ誰も死んでないからだということに気付いていない

ネオン管に封じ込められたヴァレリーの宿命的な退屈さ

牛だか馬だかの匂いしか想像できない純朴な賢治の退屈さ

そして僕は次の瞬間どんな退屈さをと考えてる

真夜中においでよあほうどり

ねえ泣くだけの場所が人生には必要だよ

ねえ人なんて難破船のようだって地獄絵の一瞬が言うよ

生理現象まで主義や主張が必要な時代だよ

さあオナるんだ

芝居は終わりにしようよ

でも人は孤独の中で俳優になった

だんだん明るくなってゆく部屋の中で

目にみえぬフィルターを本能と定義づけた

そして逃げる者になった

ふたたび追う者になった

やがてそのどちらでもなくなった

自棄になる気持ちの窓に

橋が至近距離で見える

てのひらってそういうものだった

ああ てのひらってそういうもの

ねえその背後の暗い階段は何なの

どうして人は翼にあこがれるの

ねえどうして人はそれでも空をもとめるの

――あんたが捕まった

それであんたも捕まった

最後にはきっと俺も捕まる

不安げな叫び声がきこえてきたらそれが夏の恥じらい

月が飛んでいくような裸のキスだった

俺も埋められる首まで浸かってしまったこの泥濘に

呼吸が乱れてゆく

仕掛け装置を変えてもルールブックを見直してみても

バスケットしてみてもサッカーしてみてもゴルフしても野球しても

背丈が伸びれば髭も生えてくる

ねえそれって何だと思う

ねえミステリーみたいだろドキドキするだろ

最初から正体がわからないから

最後まで行かないと答えがわからない

でもきっと僕は答えを言ったりしない

ずっと昔からそうさ 曖昧になる方がいい

不確かな期待と不安に痙攣していなければ

それはきっと何かがおかしい

投薬と洗脳にうそぶかれ

処方箋と注射に対症療法

カロリーメイト食べてポカリスエットのんで

それで最終的に煙草吸ってあとはもうベンチにすわりなさい

イメージを遠ざけるために言葉を連ねてゆき

近づいてきたと思ったら目隠しをして道を変える

利害というものに培養されている菌のコロニーで

それが誰もいない駅だったことによろやく君は気付くだろう

――だってさ君はもう本当の女になっちゃったんだぜ

死んでゆく小鳥のようなものさ

視界から消えてゆく男たちを見ろよ

さあ君はこのわけのわからない世界から逃れるのだ

もっと安易で子供向けの絵本みたいに話すのだ

僕は相変わらず女の子の心臓を鷲掴みにするらしい詩を書いてるよ

でもそれは多分僕が未成熟な部分を多く持ち過ぎてるからだという気がする

鎖を飛び越えて完成へと向かう想像をするけど

女より女の子に共鳴するらしい僕の詩は

まだ海のやわらかなガラスの繊細さを葬送している

ある人は僕のことを月夜みたいだと言う

ある人は僕のことを海みたいだと言う

ある人は僕のことを夕陽そのものだって言う

優雅な帝王切開をはじめよう

そして悪魔のいたずらのように大人になろう

そして血を詰めた腸のような物体を生みだそう

そして君が冷たくなってゆくたそがれに僕は帆を張ろう

類いようのないモザイクの顔した君

水玉模様さえ白黒になる魔術師の心をして

蜘蛛の巣のようなあおざめた眩暈をしよう

僕はコールドスリープを眺めているよ

そしてその胡散臭い白雪姫眺めているよ

しぼりたてのトマトジュースながめているよ

——ねえ 意味がわからないって美しいと思わないかい

空に傷を見つけるようなものだって思わないかい

魂に傷があるってそういうものだって思えないかい

君をあやめてしまえるものだってそう思えてこないかい

あ、と小さな声を立てている僕と、

窓に降る、雨の点々。

日光を忘れるのに、

月が海にあたっていることをけして忘れない。



こんな時、僕は集会所で真冬に眠っていたことや、

真夜中のバス停で、煙草を吸っていたことを思い出す。

雪の降った道で、穴のあいた靴から水が入ってくるみたいに、

時々どうしようもなくなりながら人生の場面を振り返る。

星の見えない夜はおびただしい夜の星屑がある、などと、

口が裂けても言えない夕方がある。

足下は濡れている。そして世界は何か少し湿っぽい。

積み木が崩れたのを知らせるように吹く風が、

遠い和歌山の地で見た、鹿がいなくなきながら、

遠ざかっていく姿に見えてくる。

さざ波はたわむれて濡らしている。

僕の心の中のポプラの梢を。

街灯が照らしている。

もう何処にもいない自分の影を。

セガフレード・ザネッティでコスプレの女を見る新宿。

世界を隈無く歩いた人が立ち寄るエレクトロニクステクノ。

そのバイイ・・・はどうだろうか？ スクリーントーンを削っている、

次に目を開けた僕はあまりにも巨大なMADE IN USA.supermarket.

メイドカフェ（トランスフォーマー！）

「ボクハボクノタメニイキルカラ、キミハキミノタメニイキテクダサイ」

すごい片言、0ミリ、0センチ、0メートルの感慨！ 安全に静止する、衛星！

咲く、（ツ、）柵、策、昨夜、さく、ら、さく、垂、

さ、くら、暗、蔵、喰、暗、くら（つ、）――

――意思無き ファンタティック・・・

「非常に危険かつ有意義なスポーツの大会」

ゲームクリアまで一切のステータスアップアイテム

（さまよえる孤独な魂の旅路に終わりは無く・・・）

クラクションを鳴らせばきつと終わりだね・・・Uh...

訳知り顔のおしゃべり、たとえばそれは人生のものたり・・・イ・・・ナサーに、

ジオラマの無風ハスキー・ヴォイスの世界・・・絞首台なのかアンビバレントよ！

真っ白な高層ビル、影絵、夜と朝、朝と昼、白黒の横断歩道、

エコエコアザラク、エロイムエッサイム・・・加速と静止のノウハウはステロタイプ！

咲く、（ツ、）柵、策、昨夜、さく、ら、さく、垂、

さ、くら、暗、蔵、峻、暗、くら（つ、）――

――意思無き ファナティック・・・

乗り遅れたイエローキャブ、アンイ/ナ/コトバ（で、）/

猜疑心magicドラムのように悲哀な仕組みを打ち叩く、エラーやバグ、

ENERGY.entropy.2205.potential...何故？ はじめて見た？ 木っ端微塵・・・

カンイ/な、（な、）/言葉（で、）/こと/ば、（で、）/

ロイヤルストレートフラッシュのあとに絵になるのは、

俳優の君、嘘の君、加速する／消え／る／薄氷の上に立っている夏が来た！／

時速1000 k m オーバーの車体から繰り出される残像が都市のクラシック、

くらくらしている錯覚めいた光の色彩、アルファロメオ、ポルシェ、フェラーリ・・・

セガフレード・ザネッティでコスプレの女を見る新宿。

世界を隈無く歩いた人が立ち寄るエレクトロニクステクノ。

瞳は闇と交われれば静かの淵・・・閉じる――トイーウ・・・急旋回、

搭乗者の死亡、理屈の正当化、電車は粉々、飛行機は墜落、

咲く、（ツ、）柵、策、昨夜、さく、ら、さく、垂、

さ、くら、暗、蔵、峻、暗、くら（つ、）――

――意思無き ファナティック・・・

love.like.9103“waltz”...ダ・ヴィンチだよ、

「何を捨てず降伏もせず衝抜けたパターナリズム」

love.like.9103“waltz”...ダ・ヴィンチだよ、

< フォークだよ、ナイフだよ、凶器だよ。狂気だよ、狭軌・・・ >

< 常識の青・・・かさねたー。 >

ゲームクリアまで一切のステータスアップアイテム

(抑えきれない感情が舞い落ちる言の葉・・・)

クラクションを鳴らせばきっと終わりだね・・・Uh...

F...F...final...final...g (でもなく、) ...h (でもない、)

F...F...final...final...g (でもなく、) ...h (でもない、)

蔭も深くはない低い枝に、

雀が一羽、たよりなげに。

(雀羽たたくそのこゑきこゆ...)

誰も笑わせぬうちの、

夜間飛行をさしひかえたその姿をば眼にとめて、

うすくなる、もつれた羞恥心に。

われも水車小屋の巢へ。

半透明な光が、

何時か少しづつひろがつて来た。

死に影に風と、

やすやすと人は吹かれて。

絡まり合っていた。

拡張しては痙攣へと向かっていた。

(雀羽たたくそのこゑきこゆ...)

水に口つけに来ぬ揺るる枝、

底知れぬ空洞のなか、

やさしさのすり減つてゆく、

心と心とのつながり、

否、うきぐさの類。

油をぬすむつもりであらうかあの羽音。

――ぶつぶつぶつ。

…ぶつぶつ。

（まわりに誰もいなくてよかつた。

本当に誰もいなくてよかつた。）

ええいアイスランドへ送つちまうよ。

トルコファがいいのかい、たぶらかし、

偽善のスンガポオルがええのかい、

ああおい、世も末だよ、瞞着だよ。

ええおい。わかつてるのかい。

貪欲と嫉妬。

個人の尊厳に愛国心。

疑問の余地もないほどの重大な過失。

ペテンにルンペンに、

バイブルにペンペン、

あはは――…。

自由に大空を翔けりつつある、

雀ははねるようにびよんと隣りの小枝に。

猿になりすます日暮れ鳥。

鴉は逃げて向かうの電柱の頂き。

(雀羽たたくそのこゑきこゆ...)

一羽は宙にまだ羽うち。

空の外界にむけての嘲弄の色。

いぬころぐさにつゆのくさ。

波止場の控えめ効果音としての波。

分割払い方式としての曖昧な時間と達成。

何ものかを阻止する力とものやわらかな返答。

——声を低めても、問答は途切れる。

——影に吠えても、骨壺は残る。

……そこに雨の音がする。

そこに乾いた砂のぱらぱら豆でも炒るやうに落ちる音。

しなやかな精神が見えてくる夕暮れどき。

渺望たる海の上を飛んでゆくやうな自由が、

さもなくば女のやうなわがままが欲しかった！

温かき生血を有する動物が凍死する。

善意で憎み合うなんて愚の骨頂とばかりに。

死と虚無に呑み込まれ——さ…う…な。

病む人のために鳴いている——や…う…な。

(雀羽たたくそのこゑきこゆ…)

鳥の石のやうな一瞬。

鳥が宝石により近づいてゆく一瞬。

空気銃で撃ちたいのだ。

撃ちたいのだ、貪欲！

間違っているよという視線！

良否についての絶対的な基準！



1909年頃に撮られた長崎郵便局を見た。

レトロだった。

後退りをした。

眼下に静まり返った場所はそのところじゃない、

でも考えている時間はない、あるかよ、時間切れ、

でも、不分明な戦きにうちふるえつつ、続くよ。

\*

動かない、

立ち上がれない、

そしてもう、掴めない。

キツとなって詰問したら、

とれるかな、垢、こころのなやみ、

とれないまんま、笑い声が交錯する、

きっと、続くよ、腐り。

\*

郵便受けの中に、

都会のトンネルがあった。

ほらどうしたっていう間もなく、

世界のほつれが、

それを燐寸で燃やした。

俺はカッターナイフみたい。

意味のない言葉が、

壁の傍でしゃがんでる。光るんだ、

長い沈黙から目覚めた小さなガラスの欠片。

こんなもんになってどうする、

そう思った、

でも解放されるよ、もう逃げだしていいよ、

壊れたカーナビと一緒に、

とっくに壊れたレディオなんかと一緒に、

この人生を生きたい。

\*

脳味噌なんかとれちまえばいい。

瞬間を失った鈍い雫のシャーレのまんま。

\*

破れそうな薄い皮膚があるなんて思わなかった。

冷たい色ばかりが燃える汗なんて想像もしていなかった。

きれいな花びらにさわれないなんて気付くはずもなかった。

\*

真夏の夕陽に染まるさざなみは、

いつ見たもの。

スローモーションが浮かんで行くよー。

同化することもできず、

ヒリヒリした痛みの不思議な爽快感、

羽根でも生えたみたいに飛んでいっちまう、

流れだすこともできず、

どのような人も住んでいるかわからない街で、

他人のことなんかどうでもいい。

でも俺の名を呼べ、

どうせ火傷してる、こんな俺でいいなら。

ひそひそ話がつづく。それでなんになる、

わからない、でも、続くよ。

燃料タンク。地図。ナビゲーター。

そんなものないよ、最初から、

どのような生活もない、

どのような考え方も最初からない。

ギリギリだった。瀬戸際、

わからないまま焼けちぎれて焼失したい。

\*

孤独の波紋、 屈折、 無声慟哭、

叫び声のきこえる真夜中の繁華街、 盲目、

人間関係の摩擦、 置き去りの嘘、

(black out...)

*his building will have a blackout tomorrow morning...*

*...blackout...blackout...blackout...*

*his building will have a blackout tomorrow morning...*

思考停止、 時が止まる遺伝子、 錯覚、

絶望、 正面衝突の生存確率、 競争社会。

\*

ヘモグロビンと結合した酸素を細胞に、

肉体へ供給している。

\*

インディーズマガジンにはサンプルCDがついていた。

\*

ショータイムはもう終わったらしい、

あれ、俺、ラスベガスのカジノにまだ行ってない。

不確かな未来が何も答えない。いつもだつてさ、そうだろ、

とどめをハデにくれ。

惑星のCO<sub>2</sub>が無駄で、白いシロップをかけるような、

牛たちの溜息に、

俺も何も言うわけじゃない。言うかよ、

ただれ落ちそうだ、知ったかぶりの知識、

本当の感情なんていう感情すらもない言葉、

ブランコを作るんだ、大きなやつ。

滑り台を作ろう、

うまく降りていけたら影を濃くしている時間もない、

写真のネガのように心に残った、残るかよ、

でも、不確かな未来を消したい。

\*

すっかり細くなってしまった首筋に、

樹木の影。

金魚すくい。水草もなくて、童心も、涙腺も、

蛇口もない。

提灯のともる白い罫線を見ながら、

ローからセカンドヘシフトチェンジ——…。

\*

はい／だいじょうぶです /

灰／大丈夫 /

はい／だいじょうぶです /

灰／大丈夫 /

肺／大丈夫 /

はい／だいじょうぶです /

はい／だいじょうぶ /

\*

赤いチョークでぐるぐると丸をつけた教師の指先。

\*

軟弱な精神が煮える。

肉が蒸発する。

魂がめくるめく。

\*

空しさは続くぜ、

やりきれないほど続く。

世界に出る胎児のためにフルカラーにしてやった、

素晴らしいものを作ってやった、でも、何も変わらないぜ、

終わりが無い俺たちの後悔に、たまらない激痛が走る、

でもとりあえず、忘れるぜ、最後に残るのは誰だ、知るかよ、

でも、不確かな未来を消したい。







そして僕は「人形通信」を始めてる。

「telepathy」なんだ、それは。対人的・対社会の人格が脆く崩れさる。錯誤とい  
う距離を置いた視点でいながら幻想の強度は固い。まごうことなき違和感の増幅。エネルギー。  
LSD。アンフェタミン。根源的なハラスメント。冷淡な瞳、冷徹な感情。分かりにくく、  
退屈な日常の理由。無意識のうちに加担する安心。支配的な世界のゲームや漫画。映画や音楽。  
でも僕は――夜に開かれています……ミツオ……そして、ねえや……そして水辺の手……。

ザザザ、

ザザザ、ザザザ、

ザザザ、ザザザ、ザザザ、

口をパクパクさせている。鯉の口のようだ。――――不釣合いだった……。

なめらかにとろけるような日常はチーズみたいな気がする。

……………無秩序で絶え間ない連想の流れ……………。

ガス漏出……………プレインソーダ……………。

一体僕はそんなことを言って何を証明しようとしているんだ。

でも、目の前にいる女性は、何かを訴えたがっている。

千々にくだかれていく、波。自由はない。安定はない。

そして、そこにあるのは、生の偶然がもたらす甘味や苦味でもない。

言葉の葛藤は哲学の内容よりも深い。否定された位置関係の中に、

静かに薄れてゆこうとする僕の絶望はもっと深い。

「じゃあ何なんだよ。」

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

「足だ。ちゃんと見てみる、それは本当に蛞蝓か。」

\*

、、、  
警察がバラバラ殺人の一部分を発見したのは、  
、、、  
県内に通う高校生の通報からだった。  
、、、  
田圃の見える雑木林に、  
、、、  
ビニール袋でくるまれた腐敗した女性の足が見つかった。

## Music player

---

波音かき消して、

*Music player...*

*player...*

*player.....*

ざわめく心に鍵をなくしてしまう、

熟れすぎた果肉がいまにもどろどろになーって…、

なーって…いって…

時は過ぎて日々に舞う Photograph...

一人でゲームセンターに行った帰り、赤いLEDランプに、

憂鬱になる。カラフルだったコンビニに、

火蓋が切って落とされた争奪戦。酸素ボンベが必要だ、

すり替えた利害の蜃気楼…。

—君は僕に優しい嘘をついた。

……………これが消えたら、

……………完全に消えたら、

…（埋めれるかしら？）

……世界の恐ろしいスピード感、

……………本当のスピード、

…（快感を呼び覚めます、）

波音かき消して、

*Music player…*

*player…*

*player……*

脅威の中毒性の歌にヘビーローテーション、

現在時刻は濡れた蒼い蛇のような肌をしてる、

夏の川辺で見た大きな蛇、

ロレンスの詩の中で登場していたあの蛇、

ショットガンで撃たれた蛇、

神話に登場していたあの蛇…。

ひとときの安らぎに蟠る、ポーカーフェイス、

身体に食い込んでゆく矢尻が、ギヴミーマネーのフェイク、

おそろしく静かに毒をまわす――。

――君は僕に優しい嘘をついた。

……………それが言えたら、

……………それが終わったら、

… (終わるるんだ、きつと )

……………上辺のキラキラした瞳じゃなくて、

……………うつろなほど人を求めている瞳、

… (一瞬に 生き 死に、)

波音かき消して、

*Music player...*

*player...*

*player.....*

打ちひしがれたときに言って欲しい言葉が全部詰まってる、

ニュースじゃなくて人生の可哀想な小羊の顔をした僕の気持ちを洗う、

シルエットとなって浮かびだしてゆくあなたの横顔、

しかしその波は不似合いなほど静かに僕を掻きまわす。

弱いから歩いて来られた道、渚、岬の突端、灯台、湾曲した屈折の終わり、

去りゆく僕はえたいのしれない感情に涙をしたんだ、

硬いベンチが無意識に放つ命令形、何をしたんだ、何をしているんだって、

何一つしゃべろうとしない夜の僕の心臓が、

黙秘を続けながら心臓からそれでもあてどもなく血液を送る、

そのポンプが僕を生かしてる、大きな発条ぜんまいの仕掛け装置にも似たこの肉体、

時代遅れで才能の情弱な僕に大粒の雫がこぼれる、僕は、高くなれと、

もっと心を磨けと、人らしく生きようとした——けれど…

けれど——結局それだけじゃ駄目で、僕は駄目で…

……………ねえ誰よりも速く走れたら、

……………もっと素晴らしい泳ぎ方ができたら、

… (息を 止 めてもいいの? )

……………麻痺してしまうから、

……………僕、夜に痙攣する、苦しい夜があるから

… (笑う君 のようにはいかないから )

波音かき消して、

*Music player...*

*player...*

*player.....*

君を好きな"ヒト"も、

君を嫌いな"ヒト"も、

どちらでもない"ヒト"も、

そしてそれでもまだあてはまらない"ヒト"も、

この街に住んでるよ——…。

不安だらけのレール（を、）

ふと振り返ったとき――

大切なものが残っていないこともある、気を付けて、

うん、気を付ける、本当に気を付けて、風邪を引かないように、

心に触れた温もりを覚えて――る…

でも心をあまり人には見せないように…

人のことが好きだけど僕は人を心の底から信用していない、

いつかきっとわかる、人生はあまりにも長いよ、

敵が誰で、味方が誰で、

守らなくちゃいけないもの、

戦わなきゃいけないもの、きっと、鏡にうつった自分みたいに、

わかってしまう――こと…わかりすぎてしまうことが…

あって…それで人生変わっちゃうから…。

……………人生に立ち向かう勇氣、

……………ありがとうと心の底から言うための勇氣、

…（学んでほしい、）

……………自分の置き場所を探すより、

……………本当に自分のしたいことを探したい、

…（答はずっと 前からあるよ）



波音かき消して、

*Music player...*

*player...*

*player.....*

車でドライブする。

.....する。

はあ...はあ...はあ...

トンネルがある。

.....ある。

[行き止まり]と書いてある。

はあ...はあ...はあ...

次の瞬間！

パアアアア、<sup>クラクション</sup>という警笛の音がした。

僕は四車線道路の真ん中に立っている。

鉄くぎを投げられているような光景。

車はビュンビュン過ぎ去ってゆく、

ライトが当たっている、僕は、目の前にいる、

巨大な鉄の塊を見る。トラック。と、脳裏に焼きつく。

.....する。

はあ...はあ...はあ...

パアアアア、<sup>クラクション</sup>という警笛の音がした。

助手席で一緒にドライブしていたはずの彼女が鳴らした。

光が眩しい、くらげの大群だ！ 目玉がカメレオンのように大きい！

「行き止まりよ！ こわい！」

ハンマーがぶつかったような衝撃！

強引に酔っ払った身体を抱き起こされたような気分！

「…………え」

(え、)

——意識が途切れる……。

途切れた——んだと思う、

ピアノ線で首が切られたみたいに……。

、、、  
夢の中で、女の子が笑っている。

「……どうしたのよ。」と彼女は言う。

、、、  
海辺だ。麦藁帽子をかむって、白いワンピースを着ている。

、、、  
可愛い、無邪気だ、心が洗われる。

「……ドウシタノヨ！」

クラクション  
パアアアア、という警笛の音がした。

はあ……はあ……はあ……。

僕は、ヤバイ、と思う。心底そう思う。

行き止まりのトンネルの目の前には、白いワンピースを着て、

麦藁帽子をかむった少女がいる。

……ある。

、、、

それがもうこの世のものではないこともわかっている。

……いる。

僕は車のハンドルを握っている。

[手がじゅくじゅくするっていうんですか、

うまく言えないんですけど、“呪い”っていうんですか、

“魅入られる”っていうんですか、

蛇に睨まれた蛙っていうんですか……]

[でも彼女が言うには、「違う、お前は自分が召使いとか便利屋だと、

思われてるんだ。だからそんな、幽霊ごときに振り回されるんだ」と、

のたまいます。]

サアアアアアアアッ、と引いた。血の気が……。

目の前に、そしておそらくは、あの四車線道路で轢かれて死んだ少女の霊がいる。

でもどうしてこんなトンネルの中に、と思う。しかも行き止まりのトンネルに。

その時、少女が僕に言うのだ。足首をつかみでもしたように、

ザワザワザワ、、、

ザワザワザワ、、、、、、

いや、耳に聞こえるのだ。黴が侵食でもするように。

「あなたは優しい人でしょ、ねえ、教えてよ、

わたし、わかるのよ、あなたは優しい人でしょ、

どうしてわたしは死ななくちゃいけなかったの、

さみしいの、こわいのよ。」

、、、、、、、、、、、、、、、、

狂った鳥のような心臓の音がする。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
次の瞬間、隣に座っていた彼女がキレて、

正気になれこの馬鹿男と平手打ちを何回かキメてくれなかったら、

僕は多分、というか彼女ごとこの世の人ではなかったと思う。

お前、あああああああ、とか、

うおおおおお、とか言ってんただぞ。

〔彼女が言うには、「連れてく。」「わかった。」と、

僕はあきらかにイっちゃった眼で話していたんだそうです。

憑かれた人の眼は独特だって言うんですけど、ああ、これはってわかったそうです。

でも彼女、見えない人だし、あきらかに道理の通らないことが嫌いなんです。〕

〔彼女は怒りまくりですよ。

「日頃から八方美人してるとこうなるのよ」と彼女は言いました。

そうですね、でも、彼女の後ろに白い少女が見えるんです。

どんどん低音になってゆく、だからどんどん、そっちばかり見てしまう。

まあそれはそれとしても、裏社会なんかで人が消されるって話あるじゃないですか、

ああいう感じですよ、幽霊って。そもそも、人間の命って。〕

「…………え」

(え、)

——意識が途切れる……。

途切れた——んだと思う、怪異が訪れそうな厭アァな心地がする、

僕はひび割れたかさついた皮膚の少女のことを考える。

車でドライブする。

.....する。

はあ...はあ...はあ...

トンネルがある。

.....ある。

パシャー—シャアツ—シャツシャツ...

後日、彼女がトンネルで写真を撮ったのだと教えてくれた。

テーブルの上に写真が並べられる。

二泊三日の旅行の間の思い出の写真と混じって、

忌わしい記憶としてあるトンネルの写真があります。

全身に鳥肌を立たせながら固まる僕。

そこには、真っ黒い影のようなものがいくつもいくつも写っていました。

そして後日、トンネル、霊体験でグーグルに検索をかけて調べていたら、

見つかりました。あそこ、帰らずのトンネルと言われているそうです。

地図から消えた杉沢村とか、津山三十人殺しとか、

ああいう場所にあるせいで、いつしかそう呼ばれていったのかも知れませんが、

出るわ出るわ、ものすごい数の霊体験。

〔彼女が言うには、「こんな奴死ねばいいんだよ。」でバツサリ。〕

ほら「死ねばよかったのっていう怪談」ってあるじゃないですか、

ほら「こんな顔だったのか怪談」っていうんですか、もう地そのまんまな、

彼女だから。でも幽霊だって神様と一緒にじゃないかって彼女言うんです、

死んだらもう人間じゃないんだから、神仏と同じように扱うべきだって。

敬意を忘れたら、罰当たりなことをしたら、手痛いしっぺ返しが来る。

むしろ「それでよく死なないなお前は」と彼女は平気で言います]

[でも今回のことで、彼女は、一つ嘘をついたことを、

僕、知ってるんですよ。彼女、実は、見える人なんですよ。

だって、白い少女に向かって、塩投げつけて、おらとかいいながら撃退してましたもん。

「いなくなれいなくなれ、うすらとんちぎ女」ですもん。

でも怖いんですよ、いや、その後、ちょっと連絡不通なんですよ、

まあ、エキセントリックな彼女だから、ひょっこり現れると思うんですけどね]

死は此の世の陸を去り

泪の泉が浅い心攫ふ間に

ヴンダーリッヒの思索



水底の如くなりゆきて、静かに海面を掻きまわし中心に渦ができ周囲にそれらしい山が頂きながら、

暗く立ちふさがる。鮫の歯のように。黒い顎のように。あるいはもう一枚の巨大なサテンのように、

殻をとられた蝸牛のように、ただ黒いあやしい夢のなかを瞳をうしないがら進んでゆく。しずかに絶

え間なく僕をおびやかすような時間が流れる。岩を覆う海苔のように、現実的過ぎてかえって悪い夢

のように見えるような時間が流れる。

イルンダ、と僕は思った。

――後ろから“視線”を感じた。

、、、、、、、、、、

――温度が一気に冷えた。

彼女は喋ってる。たとえばゴースト現象。心霊写真作成ソフトもあれば、フリーソフトもある。シ

ミュラクラ現象で写真も説明できる。磁気閃光現象で、先程のドッペルゲンガー現象も説明できる。

脳内は芝生のように柔らかな絨毯だと思っている内は、それがハンモックだと、それが実は蜘蛛の巣

だと気付けない。脳は人類が作ってきたアンモライトのようなものかも知れない。

――一回転する磁石の針のように……揺れる……。

どこまでもどこまでも、無限に高く延びる壁布……。

彼女は僕の聞いたかったことをしゃべっている。砂を後ろに蹴りながら歩くみたいに、誇りやかで

ある風さえなきにしもあらず。僕はここで何をしているんだと聞いたかった。応接間、資料室、パソ

コン室、トレーニングルーム。清教徒風に質素な侘住居だなと僕が言う。そして物置。案内された。

でも、本当にそれを見せられたわけじゃない。そして、本当に喋っているわけじゃない。影絵が空に

吸われていくような錯覚が水母のように漂い出す誇張でコネかためた張り子細工のようなものが焼き

餅のように黒こげになる。土人形となる。進行中の兵士のように写真に撮られる。

……「やめろ」

(と、) 思ったのだ。

……「やめろ」

(と、) 思ったのだ。

だってそれは動詞の変化のような樹液のしたたりだったから。ドラッグが見せる幻覚は、ヘロイ

ンを包むアルミ箔のようなもの。異質な感覚。手と足でおよぎながら遠ざかっていく。黒白のスク

ーモーション・フィルムのような、遠く白いでも実は黒いけれど本当は緑の波のように泡立ち戦ぐ。

、、、  
そうだ、時間律が狂っている。

—ねえや、がそこにいた。

ザザザ、ザザザ、ザザザ、、、

ザザザ、ザザザ、ザザザ、、、、、、

(「……わたしはここにいる」)

…霊現象というのは色々ある…淋しいから気付いてほしい…

…自分が死んでいることを知らない…あるいは、自分が辛い目に遭っている…

…だからお前も味わえという霊もいる…でもこれは違う…

(蠟燭の火はゆらゆら揺れたりしない。)

(蠟燭の火はまんまるくなる。)

<わたし>は<橘梨花>である。

<わたし>は<ねえや>である。

AはBである。BはCである。だからAはCである。でもその時、僕はとても重大なことに気付い

た。かすかな明暗のさざ波をたてる。水面が完全に結氷して陸地のように見えるように、ブリキのよ

うにかたくなる。そこにひび割れが稲妻のようにうまれて蜘蛛の巣のように見える。全てを呑みこん

で陥没させたかのような、暗い穴。左右へ割れたような大きな暗い口をひらく。蜂の巣だ。そして僕

を浮世離れした小さな世界に閉じ込める。芽キャベツのように隣り合う。まっすぐ立ち騰り、渦巻き

ながら円を開いて広げた翼のようにだんだんと僕を閉じ込める。暑い真夏に汗をびっしり掻いている

不安な夢。輪郭をやわらげられ、蒸気のような表情をうかべながら魂に杭でも叩きこまれる一瞬。果

肉を剥がした桃の種子のように在りし日の識別されない光について語り始める。桃の花がひらく

。め

ざめる。心臓や胃や肺や声帯や歯茎に引っ掛かる。虹色になる、車輪になる、もっとシャフトになる、

機械になる。そしてもう一つ一つ認識できる。林檎を砕いたように、涼しい匂いがする。

きれいな車のシートの下に、

シートの間隙に幾つもの、

どう見てもフロントガラスとしか思えない破片が数個……。

「ねえ、わたしは知らない顔をしないよ。」

~~わたしは、君がどういうことがあったのかを、~~

ほんの少しの経験から、よく知っている。

~~生きるといのはむずかしいよね、自分で作らなくちゃいけない。~~

~~逃げることもできるけど、立ち向かわなくちゃいけない。」~~

、、、、、、、、  
あれはどういう意味だ。

、、、、、、、、  
あれはまるで僕の――と、考えていた折りに、

橘梨花が、押入れの中で見たねえやのように、にっこりと、微笑んだ。

まだ少し部屋に残った煙がエクトプラズムのようにゆっくりと彷徨う。

脳味噌が隙間なく溶けてゆく。スイッチをオンにする萌芽。

ハンバーグに溶けているチーズみたいな、

微風になぶられて、ためらうように揺れる。羊の毛のようになびく。

息がほんの少ししか入ってこない。

そうだ、あまりにもそっくりなのではない、それはそっくりそのまま生き写しなのだ。

(を、) 思わせる・想起させる……。

——『偶然の一致現象』『驟雨的眩暈』『教会の尖塔』というのが、

不可抗力のひそやかに扉を開き、アヤシゲな、

ザザザ、ザザザ、ザザザ、、、

ザザザ、ザザザ、ザザザ、、、、、、

彼女がいつそのことに気付いていたのかは知らない。

でも僕の中の記憶がようやく一致する。

、、、、、、、、  
「……………ほら、やっぱり、君だ」

ねえ、お嬢さん、

白馬の王子様は来ないよ、

僕は愛しい彼女にそう言うみたいに、

ふっと遠い昔の場面を思い起こす。

夕焼けの坂道でサイダーを飲みながら、

女の子とキスをするとか、

何故か真っ白なキャンバスを君は持ちながら

僕は君を描きたいという意味不明な設定。

ああ、思い起こせば懐かしいけれど、

近頃ずっと思ってるんだよ、

大人にならなくちゃ、でも、

歳をとるほどに頭の良さらしきものが嫌になる、

そいつが僕をしめやかにするんだよ、

喪服を着せる、真っ暗な星の見えない夜にする、

愛ってさ、いまだに全然よくわからないんだけど、

くちびるを噛みしめている切なさに、

胸を締め付けられている間のほんの一瞬のときめきが、

永遠に消えてしまう前にささやきかける、

そういう種類のときめきが、生の意味かとも思う、

ごめんよお嬢さん、僕等は凡庸でね、退屈でね、  
うつくしくて楽しいだけの人生は用意してやれない、  
お伽噺の方がずっとリアルだと信じたくなるだろう、  
長い間ずっと僕もそう思ってた、  
どうして嘘ばかりがもてはやされて、  
人と人の心のつながりが無視されるんだろう、  
こんな薄っぺらくて中身もなくて、  
本人さえまったく意味わかっていないような言葉に、  
本当に何の意味があるんだろうってずっと思ってた、  
いまでもそうだよ、どんなに分厚い難しい本を読んだって、  
僕は本を読まない友達のことを大切に思ってる、  
ねえ、テレビや本や漫画や映画や音楽、  
楽しいことはたくさんある、でも、  
時々すごく思う、本当に大切なことは何一つ、  
教えてはくれない、だから、そこでこれは幻想なんだと思う、  
そこから自分を奮い立たせてくれるものがなくて、  
趣味とかいう口先だけの常習が生まれる、  
本当のところ、そんなのあったってなくたってかわらない、  
人生における一年後も一年前もかわらない、  
そんなのが生活かと思うと僕はただただ愕然とするんだよ、

疲れたふりしてるだけだよと怒りたくなるんだよ自分に、

他人なんかどうだっていいよ、

いまできることにきちんと向かい合わない自分に、

心底嫌気がさして腹が立つんだよ、

そして僕はみんなの欺瞞や偽善がどうしようもなく、

醜く思えてそれで嫌になるんだよ、

ねえお嬢さん、純粹であるほどに傷付くのは間違い、

みんないちように傷付いている、

でも、信じておくれ、

僕がいまこうして一生懸命に生きてるのは、

待つ人が報われないのをやめたいからなんだよ、

弱い人を、勘違いしている人を、

見下げ果てた情けない奴を、

少しでも情熱的な人間にするためにいるんだよ、

お嬢さん、僕は待たなかった、

もうこれからたったの一秒も待てないと思う、

それぐらい大切な人がいたんだよ、

人生ってやつをとことんまで、

歪めてしまう何かがそこにはあったんだよ、

神様も恨んだよ、ねえ、それで何も残らないってわけじゃないことを、

きっとまだ知らない人がいて、あるいはそういうの、



どうということかも全然わかっていない人がいるんだよ、  
でも、僕はばっちり人生ってやつをわかろうとした、  
ねえどうい愛し方をするにしても、  
一生懸命に誠実でしようとした、  
でも、すっかり遠く小さくなったよ、  
最初はわけわかんなかったけど、  
そこでハーディの詩みたいな悲劇的な喜劇、  
神の悪戯がうまれて、  
そこでの体験における不幸こそが人生哲学みたいになる、  
でもねえお嬢さん、子供っぽくていいんだよ、  
人生に振り回されるくらい、うぶでいいんだ、  
恋なんてファッションじゃない、一夏の思い出でもないよ、  
そんなことを言ってる奴こそ本当にビッチだね、  
さようならビッチ、でも、そんな愚かな愛もいいのかも、  
みんな好き勝手な愛の論理を持ちだして、  
大人ぶりながら、自分の子供時代を探してる、  
昆虫のような愛なのかな、  
その目に見えてるものはフェルマータへとつづく青なのかな、  
離婚時代は法律に後押しされてるけど、  
ところがどっこい、男の性格の悪さ、女の性格の悪さ、

という気も時々するね、そこで落とすのかい、

落とすよ僕は、だって、

本当にいい男なんて一握りくらいしかいないぜ、

僕の偽悪はすさまじいけど、それはさておいても、

僕が本当にいい男に立候補できるなんて思えないぜ、

ねえお嬢さん、君はどうだい、

神様が運命をねじまげたくなるほど魅力的な女のつもりなのかい、

子宮内膜からビクバンを感じるような器なのかい女！

ほどけそうでほどけないのひらの温もり、

柔らかくもつれてゆくことしかできない感情の糸、

いつまでも待ってる人にやって来ない、

奥ゆかしい君よ、

内面こそがじつは世界を美しくするものだと知らない君よ、

本当に深い森の中のような夜にまぎれていってご覧、

どんな絵画も、音楽も、そしてどんな文学も紐解けるだろう、

心が見えない多くの人の見せかけのポーズのその向こう側に、

本当の個性がある、

君が生まれた人生の意味がある、

誰かを愛することの隠された意味がある、

そして君が考える永遠は必ずそこにある。

## エンドレスミッドナイトダンスパーティ

---

特別な漫画（を、）「好きだから」——って..

神様見せて ——よ...

——パラソルがはじけて、チェリータルトが落ちてくる..から...

魚が飛ぶ。箒星を食べた電気を帯びた街に揺らめくレモン・ジュースのような君が、

安堵の溜息、剃刀を舐めたみたいに清澄だよって、すべてが音を立てて揺れて、

段々心が沈んでナウシカの腐海。ゴミ屋敷。AKIRA。

>>>沈黙してちゃ損だよ、もっと早口で捲し立てなくちゃ！

>>>もっとPOPしてFREEDOMしてついでみたいにLOVEしたい。

でもきっと涙は時間の水底で、森が杉木立が納屋が沈んじゃう——。

酔っぱらいの顔してるとあばずれだけど熊のぬいぐるみ、みただぜ。

——きらきらした、上等のドレスが..シャンパンするかも...

時計の振子みたいに揺れながら、彼女——言うんだよ..。

「あたし、星になりたい。」

スケボーしながらカクテル飲んでヤシの木立があってあたし、

一枚の金貨になるんだ——..。

（覗きこみ過ぎちゃいけないよ、才能..。）

（大事なこと、もっかいくらいあるから。）

（チャンスはきっとエルフの看板を持ってないと見つからないぜ。）

誰も観ない映画（を、）「三百回観た」――って…

あん時みたいに言って　――よ…

――うさんくさくて、よこしまな気持ちに鍵を掛けて…よ…

……永遠がいつも見えてるって顔してなくちゃつまんない、でも、

親指の指紋みたいなのっぺりした放心した不細工な表情が好き。

ふわふわして終わらない青春が蒼ざめたシャボン玉だって言って――。

間違えたりズムで全然規則正しくない歌い方してよ悪戯な少女…。

「恋してるんでしょ…あたし、彼氏いるから無理だよ」

いいよ！　それでゆるやかに揺れている人魚みたいならそれでいいよ…

――その彼氏、君の弦楽器に気付いてるのかな、つま弾きすぎると毒だぜ！

…サブカルアンダグラウンドセンチメンタル東京。

（すり減ってゆく白熱のナイフ、蝸牛みたいな帽子きても、変なだけ、

全然エキセントリックじゃない…、）

（でもそんな女の子が僕は好きなんだ――。）

…神様はきっと、欲張りな女の子に真夏の太陽を与えちゃう――。

特別な愛（を、）「好きだから」――って…

そんなのウソって　――ねえ！

清潔な頹廢…見せてよ――リボンほどこきながらさ！

イミテーションロックンロールノスタルジック、

十字架つけながら、飢えたライオンの眼しててよ、マジかなって言ってよ。

ねえロングもいいけどショートもいいけどボブは最高に素敵、

ドンヨリ曇った空に装甲車はしらせながらPVしてくれよ。

なんだったら、空想展覧会みたいなRPG一緒にはじめて見る…？

>>>ノウテン全部ゲンワクのエネルギー

>>>ふらふらのぶかぶかの大きな泡

その『SECOND』も、その『THIRD』も、

とびきりイカしてるぜ…」

イカれてるぜ…」

爪をパチッと切ったら感電して指まで切りたいのさ、でも赤い糸は残したい、

蜘蛛のレールは嫌だし出来レースは嫌、もっと単純な方がアクロバティックで運命的、

シチューを食べたとかアメブロで書くのやめろよ、残飯みたいなんだ、

呪文じゃないよ、スライムになり下がったみたいだよ、

バーで飲んでも、ゲームしても燧石みたいだから、

最悪のバアステエ、トレモロしながら風が古い城下町にする、

エンドレスミッドナイトダンスパーティ、腐りかけたトマトもチェリーになる、

愁いにみちた他人の心を溶かすようなグッドバイが必要、

「やわらかいよりかたいほうがいい。」

——— そうだね …。

「きずついてばかしてるほうがずっといい。」

……そんな子に恋をしたかったんだ。

>>>嘘にだって愛がなくちゃ駄目だよ、心躍るような…そう…

>>>もっとPOPしてFREEDOMしてついでみたいにLOVEしたい。

「守ってあげるよ」——「*包んであげるよ。*」

子供が大人を気持ち宇宙戦争。

——遠いとおい……本当に遠い場所で、眼を覚ましたばかりの、

ポップコーン見せてよ、最高なキュートな表情して！

ミラアマジック水色窓越し巨大なオレンジが二つに切られた水槽。

特別な時間（を、）「好きだから」——って…

*のめりこませて* ——よ…

——パラソルがはじけて、チェリータルトが落ちてくる…から…

……落ちてこなくても、ぐにゃぐにゃに押しつぶされてる都会だから平気だよ」

——宇宙人は夜に吸い込まれてく…」

きれいな耳飾り僕におくれ…！」

デイト・パームだ、僕は。

剥製の間に鎖された劇場の寂しさは、

不要物に嘲笑とばかりに。

半ば沈んだ、五年、十年、ことによると二十年が、

啼き続ける梟の黒い歌として。

いま、殺されようとしている。

何も出来ない肺結核患者。

地獄の底にも似た狭い職分、交際範囲。

絶え間なく漂ひまわる繁栄と、

不完全な鑑賞力のたまもの。

とりのこされる寂しさ、哲学や論理に、

ヘリオトロープの薫り、

レンタルショップの陳列棚に、

配置される表示プレート、

網状組織の境界線、明るい青色、

明るいはずの青色に、

一一鎖がある、

深いワインカラーがある、

脱ぎ棄てられたうすら寒い色の風を感じながら、

夢の続きに、動き出す、電車の軋り。

謎の罠に、氷りゆく心、切り離された、

瞑想から浮かびあがる野心。

けだるい眼つき、月、僕は保証付きとばかりに、

天体のセクショナルリーを感じた、

軟体動物特有の泥灰質感覚。

曇りの日の桜、不安、吊り飾り鉢、

見えない、続かないもののための朝の、

青色、あの青に胸が詰まる、オゾン、

陽気で憂鬱で、真四角の絵画。

幾度かのつつましい訪れを化粧ごかして、

突きたてなかった、証。

いま、それら（…落とした瞳…

人間的反省の死骸…奇妙な優しい夢…

本能的な衣装のひるがえり…)

それらが一一南京錠つきの物置小屋から、

よみがえる、球技用コート。



よみがえる、ガラス片をかかえこんだ太陽。

よみがえる、一酸化炭素中毒のサックルヴィル通り。

月は琥珀色、棘だらけだ。

なにもわからずやわらぎながら、

灰白い寒冷紗のような雲が、

蝸牛の孤独のように続く。

――置き去りにして……いく……。

うっすらとかかった影の多い銀色の、

手すきわしのような瞬間の、

紫陽花的色調、

その間を縫うように犬が吠える。

「……番犬よ、俺は、その輝く、

疑いようのない眼が好きなんだ。」

（防御壁を真っ向からぶち破る、

本当の衝撃……！）

――ありふれた満足、都合のいい言葉、

作りかえられていく入り組んだ人間の模様が、

DNAみたいなものだなんて思うな、

ながい病、あるいはわずらい、

他者によって関係を変えようとする態度、

底の浅いお前にはお似合いだ。

お似合いだって言ったんだ！

海亀にでも獺にでもなれる。

考え続けることを漲らせてもくれる。

でも月は昇る、昇る。

数限りない星の中でも特別な一個として、

舞台の上へとこのぼる。

魚の群れのように銀色に…

そして白い腹でもみせたように無防備に――

そいつが『硝子』を振りきらせてくれる、

そいつがなきゃ、きっと『壁』は突き破れない――

タイマァはもう聞こえないから…！

蛾のようじゃないと誓う――

ここはタマシイの出番なんだ、

静寂のグレエト・リヴァアを渡ってゆく、

そして俺は溶けそうなまぶたから本物の熱さを見据えるんだ、

一センチもなくていい、

一ミリだっっていい、

俺は矢のように存在していきたい、

そしてその矢がいつか銃弾になればいい、

針葉樹林に引っかかった風船のように、

俺を心底から突き上げてくれるサイレン…。

俺は喪服を纏いでもしたように、

愛や平和に取りすがれないまま、

首が締まる。果てることすべて、奪うことがすべての、

シティイのトランペットの音に、

通りの向こうのエナジイ…！

俺はすこやかに裂けているビニール袋の、

継ぎはぎの、血管が透けて見えそうな一瞬を欲しがってる。

博打ができないまま、

野茨は歩けやしない、

見えるものがすべてを抱え込む世界だ、

遠慮はいらないぜ、

黒い空を切りぬこうだなんて口先じゃ届くまい、

人の心には届くまい、滑稽な道化芝居じゃ、

耳のスウィンバルを打ち鳴らせない。

そして何度だって甦って来る、

俺のヴォリュウム、絶頂へと向かって、

ラビリンスシンドローム…！

「池の水が底清く澄んでいる。」

（――澄んでいる。）

（…けど、…本当は稲妻を受け入れたがってる。

――人生の変化をどうしようもなく欲しがってる…。）

「俺には――そんな池の水より、

もっと恥ずかしい生の、素早く脈打つ心！」

過去は過去、

忘／れ／て／ゆ／く／

青い棒を何十本でも何百本でも打ち込む、

頭痛がしても、

はげしく耳鳴りがして髪をかきむしろうとも、

俺の気持ちは止められない、

忘／れ／て／ゆ／く／

どんな成功も、

今日という日の些細で小さなよろこびさえも、

忘／れ／て／ゆ／く／

宵闇に吸い取られてゆく深夜の駅！

氷の瀑布のようにシャッターを閉めてゆく！

そして一日がシュレツダアアにかけられてゆく！

でも光ってこぼれるようなきらめきが、

静かであればあるほどに、もっと、迫ってくる、

俺の世界に、

不吉な韻律へとさそう地獄への合図が鳴り響く、

はずんできれそうになる唇がそれを受け止める。

手袋からてのひらをだして、

靴から、ブーツから、素足を出して、

うさんくさいものへと真っ向に突き進む！

月は、世界の飛行物体なんだ。

そして俺の中では水飴なんだ揺らめく影。

数限りもない星よ、

夜空に張り付いたままの影絵よ、

俺は乙女のように赤くなり光の微笑を携える。

遠吠えの群れのする、風の強い、

いかにも木枯らしが聞こえてきそうな冬の夜、

まごうことなきイルミネーションには、

石もない、森もない。

あざやかに光が抜け落ちている。

俺は切れ味の鋭そうな鎌が欲しい。

(俺は――死んだような静けさに触れる……。)

正しいんだ。間違っていないんだ。

そして俺は、もう、何かを突き刺しているんだ。

(切ないかい、湯気を立てているのは…！)

花のことを、思い出した。

水面に落ちた。

白い蜘蛛。

溺れずに、沈まずに、

浮かんで、

雨に濡れそぼちながら、

ぽつんとして。

暗い気持ち。

純粋な黒に染まってゆく、

人工的な眼。

空も見ないで、

残酷な止揚場。

浮くも沈むも、

肝に銘じて到るもの。





あの鞭のようなぴこんぴこんした具合はどうだね。

あの黒と白のホルスタインの抽象芸術具合はどうだね。

可愛いだろう、

しかしそれでも牛肉を食べる僕である。

僕が個人的に尊敬している数少ない詩人のひとりである、

福田正夫の詩の中で、蟻をテーマにした詩があるが、

僕はああいう恐ろしい眼を、ヘッセ的など思い、

ファールブル的な、と思う。

長く書いている詩人の本当のつまらない佳作程度の作品かも知れないが、

萩原朔太郎を古本屋で買い求めて詩人として出発した僕における、

蟻というテーマは、ほかのひとのそれとは受け取り方が違う。

僕が定型性の強い作風を押しだして、

自由定型詩という答えに行きつくまでの長い数年間のように、

そこには一つの時間の凝縮的な見方がある。

どこまで強調するの……？

蟻に砂糖をあげて、

赤い蟻と黒い蟻が争うさまを客観的に見つめる詩人の、

冷徹な眼は、いかなるものも見定めてやろうとする気概を感じる。

——天保山が少し前まで、

たんなる地名としか思っていなかったが、

実は標高四.五三メートルの日本一低い山であったという具合だね。

おどけよう。

そして、おおらかな気持ちを思い出すんだ。

ああ、夏に僕は住吉大社のうらさびれた場所で、

メロンソーダを思う存分飲んでおけばよかった。

どういう後悔……？

陽射しがチイズのような眠りを誘い、

夏の牛は、僕のように大体おおらかである。

そして、健康で、これからドナドナしてゆかない牛たちは、

すこし夏痩せしたようなあばら骨を見せているエロティックな夏。

きわめて地場産自給率の低い日本の牛たち。

少し前にウェルシュ菌食中毒の論文を読んだことがあるけど、

それなど実は、畜舎からのイエバエとサシバエの発生量について、

という論文とあわせて僕に不思議な印象を残した。

目覚めてみたら牛になっていたという筒井康隆の短編くらいに、

ニヤリとする。

なんだって一介の労働者が、

こんなインテリなことをしているのかと思うと、笑えてくる。

そしてそんな僕がパチンコ屋で働いていたというのも、笑えてくる。

でも僕は草野心平にあこがれているのかも知れない。

大体そういうアフリカアンサアアな僕は、

ああいう大地の感覚の根づいたアトラスマンモスな彼のことを、

本当に立派な詩人だと思い、

お酒を飲む時は、ああ、奴のやきとりが食べたかった、

最低でも二万くらいは使ってやりたかったと思うものである。

どういうアプローチの仕方…？

宮澤賢治を愛したのは、草野心平もそうだし、

高村光太郎もそうだったと思われる節がある。

でも僕はどうして研究家たちが、

目先の学識や、状況的判断にみだりにとらわれて、

草野心平や高村光太郎たちのように優れた詩人たちのことを、

もっと注目してやらないのか、という気持ちがある。

花博記念公園鶴見緑地の一面の赤い花。

ドイツで見た一面の黄色い花。

この秋だか冬だかわからない微妙な季節は、

省略し過ぎて元がどういう所だかわからない、

農林センターの牛が僕は見たくてたまらなくなる。

雀たちが一斉に飛び立つ空の墨絵を見たかい？

田舎の町が恋しくもありゃしもないのに、

僕の住んでいたビキハノ・シティーといえば、

産婦人科の有名なビキハノ病院とあわせて、

まあそれぐらいしかないところだった事情はさておいても、

あの日本一汚いことで有名な一級河川大和川は、

何故か押し出さないことを、

ほとんどむやみに決めている節のある僕も。

どういう皮肉……？

なにはさておき、

牛の鳴き声が恋しくてたまらない。

えてひにん、部落、という町もある、

ビキハノシティーの詩人が考える人権、

いや、人権なんていうのを版画的な印象として思い出す詩人の、

ほとんど異質な印象として残る社会見学、食肉現場のそれよりも、

あのロッキー2の映画に出てくるああいうシーンよりも、

僕が見つめていたのは――。

見つめていた――のは……。

歳を取るほどに野暮でもシャイでもなんでもなくなっていく。

それなのに世紀のロッククライミングはやめられない。

秀吉をどんどん嫌いになり、

千利休をどんどん好きになっていくかも知れない僕は。

こんな時代の花火を飛ばす、

最後かも知れない、詩の祝祭を披露する。

でも、もう大分わかって――きてる……。

食物連鎖の頂点のような霊長類というひびきも、

サヴァンナや、ワニ河では、何の意味もなさない。

東大阪の暗峠をわざわざのぼろうとするくらい意味を持たない。

しかしインスタントラーメン発明記念館へは行ける。

そして僕の大嫌いな、太陽の塔だって見に行ける。

そしてラインで、ツイッターで、グーグルマップで、

僕は何かしらの紹介をやらかす人みたいなことをすることもできる。

でも、僕が見つめていたのは――。

見つめていた――のは……。

シティボーイになりきれない僕は、

本当に近くにある仁徳天皇陵よりも、

あそこがいいのである。

ああいう本当に本当にどうでもいいところがいいのである。

とにもかくにもけだるく眺めているのだ、農林センターの牛。

ひらかたパークのCMほどには強調されない農林センターの牛。

ビールや、牛乳のCMの感じるほどのわざとらしさも、演技も、

そこにはない牛。

雑木林に、牛のいる柵に牛舎に、遠くに見える二上山に、

猫に、どこやらの次元にこだまする郷愁を嗅ぎ取る牛と、

ああ、僕などという、なやみやすくかんじやすい生き物は牛。



そんな風に難しく考えるものじゃないよ、

生半可に焦ると芽が出るものも出なくなっちゃうから、

賢明とは言えない選択の中にだって賭けごとの要素がある、

人生を味わいつくすには何事にも真面目にってことさ。

ある人が言ってたね、もう限界なんだって、

それもわかるけど限界を決めつけるならやめた方がいいぜ、

はっきり言って俺はお前の一千倍の仕事をするつもりで、

とことんまで足搔いてこの国の馬鹿を揺すぶるつもりだから。

お前はまだ民衆とか社会とか自分がしたいことが、

全然わかっていないよ説教してるんじゃないぜ、

雨に濡れた夜に肺炎一歩手前になって死ぬ寸前にもなりゃあ、

少しはよくなることだってある死ぬと言ってるんじゃないが！

うしろ指さされない誰からも一目おかれたりすると、

俺の足下にも及ばぬ小物が調子づく、

粘土みたいな偶像、所詮は支配の忠実な配下のお前、

正義とか平和だけじゃあ語り尽くせない物語もあるさね！

原子爆弾がなくなったら細菌兵器があるってな具合、



身分証明だって水かけ論になるのさ外国のバー！

感激だって放漫する歴史的事件の甘ったるい由なし事で、

実際そうだったっておかしくない国だったってそれだけ！

批評家が言うだろうそれは前から知っていた、

じゃあどうして言えない言った聞き届けてもらえない！

みんなそうさ、自然な成り行きに任せてる保守的だからね、

この国が壊れても別にあとについていっただけだみたいだね。

夫婦だって恋人と同じだよ家族のきずなは大切だけど、

目ざとく女の本性を見抜きながら第三者みたいに、

ああこいつはこんな男なんだと思われてる時に、

やたら頑張っちゃうような効果的な責め苦の関係もある。

同性愛者がカミングアウトをしてるのをえらいなあと思うんだ、

でも僕はカミングアウトするものがないものなあ、

実は僕はそこらへんによくいるわりとありふれた奴、

司祭や牧師より百倍優れてるけどそんなこと言わない奴！

ねえ街では淋しい遊びが流行っているみたいなんだ、

頂上に到達するとやる気がなくなっちゃうっていうそれさ、

ゲームの天賦の才能がないね、企画力が足りないね、

人生は難問、激情の燃えやすい性格だけじゃあやれないってね。

ねえところでマンゴーのドライフルーツって知ってる、

おそろおそろ食べてるんだ、なんでドライフルーツにしたのか、

全然わからない、何かそれは無茶なマクドナルドのポテトが、

三年間腐らないとかいって干してだろその状態！

ああ、ふっくらとした唇とか、乳房とか、

猥褻な僕は真夜中に考える、南国の情熱？

情熱って、いま言わんとしていたことの引き続きなの、

せわしげにめくったあとのかなしい溜息みたいに！

存分に魅力を発揮して全身像のポーズしてみせたって、

僕はギリシア彫刻じゃないよ！

大きなお尻がセクスィーらしいと信じながら歩く僕さ、

なんて嘘だよごめん実はちっとも彼女たちの発言を信じてない！

今夜は気持ちのいい夜だね、

毛布にくるまりながら詩を書いていると眠たくなるぜ、

内なる声を昨日見た夢にひそかに感じながら、

即座に行動すべきことは日常のつまらないことだったりもして。

二つ並んでるものが美しいって言う真理、

発達芸術のまわりくどいものよりも確かだろ、

まったく同じではない眼や耳や足や手や肩に、

なにかやんごとない窃盗を口にしたりして！

でもいつか直情径行ってわかっちゃうんだ、

いつか運命に異議申立人が現れちゃうんだ、

妄想が好きだよ、日を追って関係が露骨になる段階だよ、

僕はもしかしたら失墜した指導者そのものなのかも！

僕の芸術が君の中の楽園を壊しちゃうんだ、

どんな風にだろうハンマーでもぐら叩くみたいに、

美人にイカスミをかけるみたいに、

僕もペンギンの着ぐるみを着て歩くそれだけみたいに！

遠い未来はいつだって明るいよ、

子供たちがいるからね彼等がいる限り世界は通俗じゃない、

たとえいつか絶倫という汚名が僕の鳩尾にきたって、

僕の地位や名誉は決定的瞬間のそれというだけだから。

ああ、寒いね、彼女が隠していたコオヒイを、飲むんだ、

人生は甘い恋人のたわむれなのかしらん、

それともこれ自体が性というミルクなのかしらん、

不品行なのだよ僕、いや、君たちも！

でもどんな芸術が必要なんだろう、

どんな愛が必要なんだろう、

どんな生き方が必要なんだろう、

どうすればそこまで辿りつけるんだろう、

昨日の僕にわからないことが今日わかるわけもないね、

でも純粹に何もかもが完全に一致するの信じて、

いくつもある心の同一の軌道を見つめているしかないね、

傷害事件的なことを起こし杜撰な計画をさらしながら！

プラスとマイナスを思いめぐらせるよ、

全面的に賛成したものなんか一つもないって信じてるよ、

でも正しいって信じたことには越え難い壁があると、

だからこそ胸が震えるような勇気が必要って信じるよ。

過激思想で無一文になるとか、

将来結婚して身ぐるみ剥がれるとか、

たまにそんな馬鹿なことを考える、

あの居丈高な闘志がどうして、と。

いやいや神も仏もない、

僕等はやっぱり病んでいるのかも知れないし、

いつまでも塞ぎこんでいるのかも、

誤魔化しというスルメあらあらしくむしゃぶりつくのさ！

見るからに窮屈そうな牢屋の中にだって、

それがアパートという看板がありゃあ入るね、

そこに夢がありゃあ入るね、

そこに人生のかがやきがありゃあ入るね。

ものを読む時にはそりゃ眼鏡をかけるのさ、

夜の空気が甘美な無為の暮らしと見破れるまで続けるのさ、

世界は平和だよ、

でも眠っていない僕がそれを嘘だと完璧に見破ってる、

でも人それぞれの生き方がある、

近い将来に来るゴールドラッシュでまた世の中は潤い、

そんなのは嘘だって決めつけてる人が不満そうな顔をする、

ねえ、酒場みたいだよ僕等の感情って！

ああ、長居はよさなくちゃいけない、

後ろめたいんだか前向きなんだかわからない独創的な意見を、

さらしてるのか全然わからない古典的表現だね、

酒を飲むとたちまち生まれかわれるよね、僕等は。



季節と季節を繋ぐ糸は断ち切れて、

電球が交換される、

冬、羽根をこすりあわせている、

てのひらの音。

あの子、淋しいらしい。

心の中、地雷だって言う。

耳に、熱っぽい情熱に駆られて、

もう気にすんなよ、

そんなこと心配するなよって、

言ってやりたかった。

蛇にかまれるよ。

ヒマラヤが笑うよ。

放送室の音楽ごときで、

大根役者の青春だよ。

生まれた時代を間違えたなんて、

そんなことはない——から…、

（ドン・ジョヴァンニのような軽いオペラが流れる、）

胸を張ろう。

パンケーキの白粉が似合う、

蛾みたいな粉を撒き散らす、

大人に——なろう…。



コックをひねりながら、

尾崎豊の台詞を思い出す、

実際どういうニュアンスかは知らないし、

細部はわからない、でも言った、

お前これで浮気相手と連絡をとってるんだろ。

乗る気はないけど、

降りる気もない、

そうだろ、

どうみたって五万円ほどの値打ちもない、

アンティークブーツを見ながら、

（だって僕は写真詩を作りながら、

たくさんの芸術と接した目利きだぜ！）

話題を変え、

時代を変えて一一いく…。

魔女セイレーンのうたごえに、

涙したり、

灰皿にたまる吸殻が、

そいつよりちょっと多いお前の、

蓮の上にすわったような姿勢。

泣かなくても死ななくてもすむ大冒険したいな、

勉強ばかりじゃなくても楽しい一生ならいいな。

ところてんだか、

こんにゃくだか、

なたでここだか、

まくわうりだかのリズムで、

納豆しよう、

あれは食えないとろろしよう、

ところてんだか、

こんにゃくだか、

なたでここだか、

まくわうりだか――。

一生のうちにわかればいいことは沢山ある、

鯨には先端の割れた鋸、

鰐なら尻っ尾のほうをくすぐってやると、

力がなくなるのは本当かとか。

からかわれているのかな、

そうかもしれない、

蝉は腹部をおさえると鳴かなくなるし、

猫はおなかをさわると身悶えするのは本当だが。

――ねえある日、

僕が、先生って呼ばれる、

いまでもたまに呼ばれることもあるけど、

その時はきっと違う、もっと違う、

智慧の虎、

言葉の祝祭的テーマソング、

そうさ、深い割れ目の、

数千フィートを下りて行ってね、

僕はきっと最後の詩人になる、

僕が植え付けていったものは、

ちょっと一癖ありすぎるかも知れないがね。

「カウンターに座って酒を飲むより、

ひとりで酒を飲みながら、

ニルヴァーナすることが多い、

それだけさ。」

（風になりたいなんて、

幽体離脱したいのかと思う。）

月が欠けていく、

ロレックスが落ちるぜ。

僕は拾わない、

僕が拾いたいのは、

リステリンで十分だと思うから。

でも歯が悪くなるぜ、

酸だぜあれ。

U F Oが見える、

恐竜が見える、

ああ、タイムマシンに乗って――さ…、

最初と最後まで行き来してみたいね、

息できるかな、

いささかたじろぐようなハプニングで、

死ぬかもしれないけど、

そっちの方がいいね、

いって心の底から思わないかい、

むさぼる淫売変奏曲、

むさぼる産業開発、音楽芸術。

さあ、劇場の幕はひらくぜ、

はした金でやられた血に飢えた奴等が、

尊厳をほしがってる。

否応なしの第一歩を欲しがってる。

ひそかな波紋はこの国がすべてくれた！

俺たちは陳腐きわまる流行より、

なんら疑う余地もない芸術に身をゆだねた、

社会の服装のやかましさをより、

好きに着て、選ぶものの方がよかった。

価値観が大きく変わらなきゃ嘘だ、

自分たちで無理矢理何かをこじ開けようとしなくて、

ラベルは絶対にはがせない、

口先の言葉じゃ四方山連中のうすっぺらさしか満たされない、

埋めることはできても浮かべることはできない、

そんなの愛じゃない、

そんなの誰も求めていない。

（授業料はうんと高くつけておくぜ、

俺の授業料は分で一千万飛ぶんだ。）

あの子、淋しいらしい。

心の中、地雷だって言う。

耳に、熱っぽい情熱に駆られて、

もう気にすんなよ、

そんなこと心配するなよって、

言ってやりたかった。

奇蹟のバスに乗りたい、

奇跡の電車に乗りたい、

奇跡の夢に乗りたい、

奇跡の時間に乗りたい、

誰かが作った既成概念なんかのために、

そもそも間違ってる人びとの情けない根性のために、

僕等は生きてるわけじゃない。

ぐるぐるまわってガシューナッツみたいになる、

マンションのエントランスにあるゴミ箱に入れる、

天使も踏み込むのを避けるところで、

ほら今日も新しい神話が生まれてる、

ほら今日も新しい戦いが始まっている。

武器はあるぜ！

仲間もちゃんという！

必要なのは熱いハートと賢さ、

この時代とこの国をまとめて面倒みてやれる、

懐の広さ、これから身につける努力、

あとは適当に、

あとはきっと自分で学ぶこと…！

これだけは自信がある、

甘いものでベタベタにするんだよ、

僕等は蟻だからね、

常にお腹いっぱいにするんだよ、

そうしてれば絶対に喰いっぱぐれない、

嫌なことを言う奴は消えてくものだよ、

すべての船が動かなくなるのを恐れてるからだよ、

自信があるんだよ、

本能的なことに対する理解に関しては、

本当に自信があるんだよ、

そうやって僕は長く生き延びてきた。

ねえ僕等そんな大人になろうーね…。

ああ僕はそんな大人になろう…。

おずおずと身をかがめ

ブランコを漕ぐ

夢のはたらきのような

色彩の斑紋がうまれて

煙草の吸殻や

ジュースの空き缶を忘れる

チヂイ…

ピピイ—

うまれたばかりのいのちの

蝶のよろこび

この生命そのものの感覚の息づき

もうすぐわたしは、どうっ、と降りる

らうららうら、

もっと泣きたい気持ちのために

らうららうら、

もっと愛することを覚えるために

(ありがと)

(どうも)

(じゃあね)



ばいばい、――

大人になろうと料理を覚えた

化粧を試してみた

髪型をすこし変えてみた

三つ子を産んだような気分で

《孕んでる》――《やりたがっている》・・

もっと違う何かを手にいれたがっている……

せっくすしようぜ、

何を馬鹿な！

でも何が馬鹿な？

あたしが馬鹿な？

というよりも人類が馬鹿な？

繰返す鼓動――

在りし日のらぶのほてるへ移動……

どくどく、だしてみろよ、馬鹿な液

おい、なか、に、だしてみろよ、ばかなおとこ、

ぽっ、

ぽぽぽっ、

ねむりたがっているあしゆびのすきまが

ぴたぴたと濡れてゆく

たった一つの前衛だった

不覚に涙がこぼれて、うじうじ、した

ビィバップ！ スタンダアアア！

しっかりしなよ、あたし、

ビィバップ！ スタンダアアアアア！

アァアァアァア！

ちゃんとやりなよ、あたし、

うまくいかないことばかりがある水の底に、

ぶつぶつぶつぶつ

ぶつぶつぶつぶつ

……あ、曼珠沙華 ……

……なんだ、彼岸花か ……

騙し合う、恋をし合う、貪り合う、

傷つけ合う、所有し合う、

このしたやみ、

このいくたびのすみか、

(かたづけている)

(つくろっている)

(うずくまっている)

ばいばい、――

……ガラスの靴を履く二十四時の狂気めく青のひそやかな眩き

白痴のサーファー

誰と話しても嫌なアド・バルーン

異常な繁殖のメガやビット

ひどく骨の折れる料理を三時間かけて失敗して

こいつはすごい、何が？

こいつはすごい、何が？

ねえ、シェイクスピア先生

ここはどんな官能的なセリフ？

あたしのなかのあたしじしんが

すっぱくなる

ぶどうのようになる

水 のながれ

み ずからのおそれ

すぐにでも

きゅうと痛くなる

川そのものの感覚的な攻撃――

いっしんに かなで て いる

もっと げんきを だし て

いきおい よ く――

うすももいろに熟れている肉体はあばずれ、

チャーミングな唇の、はれんち、

ねえ…いま…すごくかんじやすいのよ……

ひょっとすると…かおがあかく…あ、か、く…なるのよ…

「溺れる」(たとえば)

そのものになる

流されやすい、あたし

うつろいやすくて、どうしようもない、あたし

まごころ、たとえば、

それっきりだった、

ばいばい、――

時計は止まらない、とま、ら、ない、とまらない、

はやく、なる、はや、く、なる、はやくなる、

「浮かぶ」(たとえば)

噛み砕かれるまで

そうしているかもしれない、あたし

そうしてはかないいのちをもやす、あたし

向かいあい、信じ合う、

経験…(Uh…ah…an…)

向かいあって、二こと三こと、

暴言…(Uh…ah…an…)

(が、)止まらない

（「真夜中に、そっと、こすってしまう、あばずれ」）

（「はずかし、い」）

向かい合い、探り合う、

あばずれ！

向かい合って、やばいぞ、このひと

夢見るように胸をしめつけてくる

ドンファン！

いいえ！

あばずれ！

万力のように、ぎりぎり、

（ありがと）

（どうも）

（じゃあね）

ばいばい、――

ひこうきぐもになりたい

ひこうきぐもになりたい

……ほしのたましい

ゆめみたもののたましい

はるかとおくにあるたましい

しかくくなってちいさくなるたましい

もっとちいさくなって

かぎりなくもっとちいさくなって

チーターになって

オオアリクイして

バク、ば、く、バク、ば、く、

あなたにうまれかわるゆめをみる

あなたにだかれているゆめをみる

(すごいわいせつだよ)

(きれいっていえよ)

(はずかし、い)

チヂイ……

ピピイ——

うまれたばかりのいのちの

蝶のよろこび

だきしめてほしい、すぐに、それから、

だきしめてほしい、それと、あと、それから、

(「おぼれた」わ)

あとそれから、そ、れ、から、

(「こんなだ」わ)

こ……んな……ゆめ……みえています……

こんな……わたし……いや……い……やあ……

タララタララ——

ピチチピチチ…

もうすぐ

みえてくる

わかりそうになってくる

うまれたばかりのいのちの

蝶のよろこび

この生命そのものの感覚の息づき

もうすぐわたしは、どうっ、と降りる

らうららうら、

もっと泣きたい気持ちのための宣言！

(宣誓！)

(賛成！)

(限りなく同意！)

らうららうら、

もっと愛することを覚える！

愛する！

喰らいつくこの感じ。

---

弱々しく、酷いくらいに美しく思えた絶叫。

反動の距離——抑制……。

ひとつひとつ名前をあてていく未開の動きに、

アデュース インデュース プロデュース コンデュース

提 出——誘 発——産 出——誘 導——。

「これまでの自分にいかに幻滅し得る勇気をもっているか？」

……認識を<sup>を</sup>超<sup>える</sup>速度の攻撃……

(それは本能を持った行いであるような気がします。)

(あからさまな意識の消し方をします。足音も消せます。)

(微笑みはすぐに消せます。)

—— ترامポリイの夢の中で …動的通告 …。

——— ترامポリイ ..Oh...uh... ترامポリイ ...

………単純な相互形式。沈黙の垣根で、順次終了する。

消化促進。紙鉄砲。ゴム製浮き輪。天体望遠鏡。地球儀。

—— 磁力的な吸引力をください ——

—— 必要なのは不安定な記憶 ——

螺旋コルク抜きみたいに…過剰に興奮…丁寧というより…率直…

流暢な日本語…不気味なほどの違和感…ドンキーホーテ…

、、、 、、、、 、、、、



駈落者、無宿者、亡命の徒、

最大限に圧縮されながら、燃え尽きる時間が——いい……。

いい……。

[ためらい（が、）みちてゆく] ——

……模範的教育主題／情景／偶然の一致／

[ためらい（が、）みちてゆく] ——

……解放されえないとして（も、）

……救われえないとして（も、）

原始人が火を持ってマンモスの回りをぐるぐると踊り狂ってるような、

苦悩。僕の孤独がモンスターア、超スマアアトなchloroform。

ディレクシア

自負も偏見もない、無意味が伝染してゆく困難な状態である、難読症、

苦悩。澱はどんどん一つの色に近づく、“ヒト”は<人>と呼ばれ、

その『情報』は海のように何もかも呑み込んでしまう、進化を妨げながら、

苦悩。“ヒト”は『守銭奴』と呼ばれ、《動きの縛り》・・

長い蠟燭みたいにつづいてしまう、けれど、懸命である燃焼、

苦悩。それがたとえ淋しいホテルの玄関フロアの照明でも。

何十年も死にそびれてしまった放浪者特有の諦念のような用箋でも。

……認識を**超**える**速度**の**攻撃**……

——マイネエエイムイズカモメ……

「これまでの自分にいかに幻滅し得る勇気をもっているか？」

何故自分は財政的、社会的、個人的だなんて信じられたらう！

何故自分はまとも、しらふ、立派だなんて思えたらう！

苦悩のどん底で（Aボタン）が見えた—んだ…。

違う、そうじゃない（Bボタン）なんだって思った…。

でもそうじゃない苦悩はいつだって（道の見えないXボタン）…。

（勝手に伸びてしまった髪を埋め込んでいるのだと思います。　　）

（皮膚は紅潮します。首筋も伸ばせます。　　）

（でもクールダウンは出来ません。　　）

きかい…じかけ…の…おれ…が…みえる…ぜ…

おれは…とけい…なんだ…とけい…なんだ…

とけい…とけい…とけい…とけい…

ここが超高層ビルディングの議事類推的なペニススでもいい…！

俺の心の中が嵐でも、そして確実に俺を犯す腐食作用でも、

つまりは…！ ああ、つまりはそれが輪廻転生だとしてもいい…！

—固着性詩色素にしてください　　—

—さみしいです神様　　—

苦勞したふりをした人…猥褻…潜在的な知識の…妄想…

常識の欠如…嘘だらけの自分史…真実を見ない態度…

、、、　　、、、

駈落者、無宿者、亡命の徒、

僕はもっと雨に濡れたい、俺のエレジイが聞こえるか——ああ……。

ああ……。

[ためらい（が、）みちてゆく] ——

………純粹真理探究者／選び拒まれた魂の石榴／噴き出す血／

[ためらい（が、）みちてゆく] ——

………解放されえないとして（も、）

………救われえないとして（も、）

発展／進歩／希望

交錯する、野牛みたいに、

大きな大地に吹く風みたいに、

いま飛翔する鳥のように自由に。

to shout or speak very loudly...

(…未知の目的で、未知の探検を始める。)

(…ここはジャングル、ここは宇宙のとある惑星。)

(…言い聞かせる。強く言い聞かせる。)

スローガンを絶叫マシン風に急行させるShow time...

——埃りっぽい風がしたら、

実験室や、原爆や、アナキズム万歳

新しい化学兵器のことくらい、

そんな僕だって思い出す。

救助信号・SOS・ドップラー効果、

心は何も語らない心は何も語らない…

「…生きてるんだから。

みんな、同じなんだから。

膚の色とか、瞳の色とか、

太ってるとか痩せてるとか、

そんなことで僕等、

愛を売り渡したりはしないから。」

Stop. It's dangerous.

新しいテストに点数を。

新しいノートに評価を。

新しいイメージに原点を。

to shout or speak very loudly...

(…老いぼれた賢者が言う。)

(…腐敗した元聖者みたいに。)

救助信号・SOS・ドップラー効果、

心は何も語らない心は何も語らない…

——社会的地位は魔術、

紳士や淑女の皆様、はいはい、

災難でしたね、

地雷だらけでしたね、

本当にブスやブサイク、

バカにアホに、

マヌケばかりで、

よくよく生きてきましたね。

はい、サイナラ。

スローガンを絶叫マシン風に急行させるShow time...

「お茶でも飲むか。」

「あ、おじいさん、それは。」

ウッ、ゴホゴホゴホゴホグオウフ。

「おじい…さん…？」

おーい、じじい、と心の中で言うおばあさん。

心配そうな顔をしながら、

クソウ、くたばらなかつたか。

「ばあさん…」

と言いながらおじいさん。

おじいさん、いきなり日本間へとゆく。

掛け軸の前に飾られた刀を手取る。

ギラン、と光った。

「ひゃあ…おじいさんが…」

ずおおおお、とおじいさん無茶苦茶早い。

動くの速ッ！ 老人のふりした若者、いや、

老人サイボーグかと思う。

「ひゃああ、おじいさんが、おじいさんが！」

うおおお、と言いながら、

桜の樹を一太刀。

かちん、斬れなかった。

刃こぼれしたかなあ、

と心配そうに見る、おじいさんと、

なんじゃ急にこのジジイ、

とそれを見つめるおばあさん。

「しかし美味しい酒だな」

「そうですね」



## やけくそで書く詩

---

枯草に落ちるこの火花、

ぜいぜい息を切らせた俺の声がきこえてくる。

咽喉笛の音色がドラム缶のようにひびくよ、

映画館の暗闇！

そしてほら落ち葉が一枚！

浅い眠りの醒め際みたいに落ち葉、

ハンドマイクに拾われている大阪、

救いがたい混乱の大阪、

茶の間の延長だろう、趣味、文化、

了解可能な単語がシェイクされてゆく、

頭の中はミチミチと血管でも切れそうだ、

ああ、大阪、

ミネラルウォーターが咽喉を切なく締め上げる大阪、

深海の底から泡が一瞬の花のように生まれる大阪、

慌ててケツをめくりあげたような力強いどよめき、

それが縄文時代風の壺とか、いやもっと原始的な、

蛇の模様、人間の肉体という彫刻へと移り変わる、

破片、破片、が、落ち葉、

波のようにゾヨゾヨと流れてゆく、

氷が生まれるような軽いそこぬけのかるさの音が、  
漂遊せよとばかり明るくて、  
躁でトレビアンな墨西哥な奴等を生みだす、  
こいつはもう世紀末、いやもう来たかと、落ち葉、  
それはクライマーズハイだろ、いやもう来たかと、落ち葉、  
ブランコの音は歯ぎしりし、  
街灯は一キロ離れた場所からでも見るように淡い、  
なんかもうまずい大阪、  
というか、詩、詩がもうなんかまずい、  
僕における大阪、  
ガチャガチャと音がして、ドアはあくのだろうか、落ち葉、  
囚われた夢の間に泳ぐ不安な血液は熱くこの夜の風が、  
腸にまでしみこむのだ、落ち葉、  
永劫の朽ち葉ありなんといえども象嵌された水晶、  
永劫の秋ありきといえども咽喉と耳に接吻する、  
かぜ、かぜ、の、なかにみえないクラゲ。  
もうすぐ行っておしまいね、ターニング・ポイントは来た？  
おそろしい物語の入口ね、でも夜は餓えた時計だぜ？  
もう一斉合斉を殺戮したいこの、  
べったり、吸いついてくる、ぬらぬらした、

なまめかしいものはなんだ、おお、情念！

月の光も見えない、そのくせ風ばかりむやみに冷たい、

そしてこいつは何処から吹く、おお、永劫の世界、

仮の世界、世界の上に黒い闇を降らせている夜に皺より、

吹きまくる風とは対照的に凧ぎまくる心の中、

傷ついた、痛い、さみしい、悲しくてどうしようもない、

が、荒れまくる心臓へ刺しまくる完璧に凄絶な嵐、

僕は向こうの歩道まで転がってゆく空き缶の、

カラカラという音を心の中でえがきはじめる。

カラカラ、ゴロン、カラカラ、傷付いた、

コロッ、クルッ、痛い、

ドゥルン、チッ、カラカラ、さみしい、

カラカラ、ポーン、悲しくてどうしようもない、

ぽたん、と、とりたてて美しくもない音ごときに、

綿でつつんだような気配を折りいれてしまう、

意図的な僕がちょっと嫌！

でもあの電信柱に影がいるぜ！

そしてほらあそこに墓場があって！

夜の虹が見えてしまった橿原神宮、

夜の飛行物体見た串本の海沿い

でも僕がいるのは救いがたい混乱の大阪、

否、否、おお、否、混沌の大阪！

名の知らぬ花が落とし蓋になる季語

井の中の蛙 たいかい い 大海の蘭の花

青梅漬けた葵祭の青葉闇

巫鳥が青鴉になる鳴き声かな しとど あおしとど

風はすゞしや蒼のゆくへ夏野原

我を呼びこの雨を喚び泣けむ蜃気楼花 あじさいか

登山人 挨拶わすれぬ良きをとこ とざんびと

乱杭歯 鰐の大口 滝白し

夏の浜 流木一つ 流れ付く

白い靴、ウォーキングシューズの夏

快適なりエアコン効きて夏車

とまりけり夏の心臓いい女

夏の肝臓やすみ増えれば麦酒飲む

みみ、に、せみ、みみんがみ、み、みみ、みみんがみみ

電動虫のてんとう虫は貧しけり

えんちゅう

しがみつく蟬炎屋に電柱に

おでんは夏まつりは夏おいも夏

ちんちんと路面電車と蝸牛

みなみ

旅人や目も鼻もなき南風かな

鵜の目鷹の目鰻の目にゆるり法突破！

ろういてふ うど

老公孫樹 独活の大木 夏鰻

よ

夏蛙夜の声いづる更けまして

蛙の妻狩時おりいぶ田圃にながれたり

やなすい

鮎さばしりて築簀入るかな 狐憑き

なみだごゑなみだごふゑに夏の月

冷奴と聞くとぷりん食べたきぷるん

冷奴と言われし腕やはりふるん

サロメさろめ おもひだしたる 牡丹雨

エンゼルフィッシュ見ゆる夏の水槽

みづうみにエラスモサウルスの首上がる夏

かを

薫れ風 山匂へ 城甦れ

な あしき はな

夏の赤白黄お花畑が尽くることもなく

夏の庭いぬがばふばふねこがみゃふ

たであえり あおだいしょうのちろたくん

たであえりちろたくん かぶ かんどうの ありや

飛魚が飛ぶ飛行機が飛ぶ何もかもが飛ぶ

キャベツの花ろおるきゃべつのもとなりき

キャベツの花たねもしかけもこうのとりの

むぐらかどおもて ひと

ゆめ

葎の門 表札も人影もなきて展望もなき

子が産まれ来るやうに見たい蟬かな

即身仏だ空蟬だ蟬の脱皮だあ！

つゆくさたずねほたるぶくろさがしほたるきゆ

きみのかおをわすれませませ夏休み

水泳に競泳パンツを持ち出して

伐採わるくて昆虫採集はよき

金魚売の仕事かなしきライターかな

走馬灯みるまでしなぬとのいいつたへ

秋の風 知恵の輪となる花めぐり

ひかり

プールの水反射はかたりて草はなき

みたり げんごろう

一人二人三人よたりと源五郎鮎みたらしのみず

川の字の如く障子に穴あけ蟬の声

アンネの日記にいさせて欲しき原爆の日

がらんどう鳴神門戸あき開放



みずさび

じゆりじゆりと水?たまるゝ秋川藻

オダリスク 君、エッフェル塔にうなづく 椰子

陽射しさへ蝶に桃色おとなはざりし

オイツメラレタネズミナル蚊の餌食

白玉を何故か金玉と言ひ間違え

昔語りか杵柄か 蚊は、西瓜の血 バネゆらせど

夕焼けて 影絵つくれるケルベロス

南十字星に花火あがるや ROSARIO

たわし

我が子亀の子束子の子喜びの子

いもり いわし

赤腹は鳥か蝶?か鰯の稚魚か

くらげばくだんがゆく 夏、沛然たる驟雨!

夕焼けや鳥は花間に僕は狭間に

水母の夏あめがふるならおしよせる

夏ぼうし風にめくれる 朝に捲れる音だから

ひまはり揺れていきほひ揺れてそら捲れ

夏のデパート夏季限定に踊らされ

夏のデパート、夏季限定、アイスクリーム。

なつの、で、ぱあと、かき、げん、てい、あいす、くり、うむ。

ひいんからから駒鳥ならぬ馬ひひん

赤青黄ッ！ 秋ッ！ 信号機ッ！ ki-ki-ki-ki-ki

赤青黄ッ！ 秋ッ！ 信号機ッ！ キキッ！

黄雲きぐものちぎれ浮雲きくものちぎれ菊藻のちぎれ

黄雲ノチギレ 浮雲ノチギレ 菊ノ藻ノチギレ

縁ヲ食ミ出シ 流レ出ヅル 秋ノ画材ハ

縁を食み出し流れ出る秋の画材は

オートライト

自動照明機能をもとむ秋の回想

サアチライトヲ索ム エルアアル 秋ノ回想

U F Oは盲亀浮木の秋の皿

ユウフオハ 盲亀浮木ノ 秋ノ皿

こした

樹下の右金網の前ぴたりと蜻蛉

しのぶぐさ

忍草やぶれかぶれの句もありき

アラーム

鈴虫は自鳴鐘をあやかるほどに

あげあげび

信念も縦にぴきぴき揚通草

まんぼ

雲駆りて万羽のねむり冬岬

浮浪者の柩入れるや冬の靄

おもて

うら表面 塩鮭ひとつ ごつごつと

ともすれば裸のをんな海水着

聞き役に徹するとき雪達磨

ひとひ じもく

一日とは耳目を搔めては雪を搔く

霜枯に死なず封ずと待てど焦がれど

すのう・まうんでん

雪山や詠めば誦むほど血を採られ

世界を拗ねし河豚の毒にも慈善鍋

もと

冬虫やこときれるまで味の素

そうばい わんきよくろ

早梅や彎曲路ゆけば枯れはじめ

脱衣所の鏡に毛布をかけてやれ

おりおんおりおんおらいうおん

季節はあっという間に

過ぎる

絶えずゆらめく樹の下に

あおむけになった魚の腹を

覗かせでもしたように

じめじめした夕暮れが

横隔膜のような夜へ

乏しい生存を語る

18:49 美術室

繁殖の神——夢遊病的香水タンク——漂流——

逢魔が時のシネマは開け放された窓に炎の中に封じた多量の闇。

アア、止まれよ、回転せよ、

楽器が税関のような、太守のような、

Zeusuのような月に不朽に照らされている。

珈琲を飲んでいるか。

人形は夕暮れであるか。

黒い犬を連れているか、

ケルベロスのような影が食卓に座る、

先天的な博物館。

その時、版画と大理石は動く。

不安定の悲劇の明かりが黄色い花を開かせる。

鳥が射撃されている。

猫の首が切られている。

\*

## カーテンはパイプのように火をつけて煙になる――

放課後、啓太を待っている内に、夕陽が暮れた。牢獄みたいだ――。金貨があふれ、桃色の魚が

継続性の教室に魚を放つ。そして猛禽類の爪……。僕一人だけ取り残されている。陶製に泣きたい

ような気持ちでした。ロクロのごとく流れて行きながら、宝石になろうとする琥珀のような色の教

室。昆虫だか双眼鏡だかになったような気がする。耳はより褐色に近づき、花の如く響く。足の裏

はどんどん汚れてゆく。衝突する。小鳥の発声器官から、薔薇や果物を想像する。

エドガー・アラン・ポーが読みたい。

葬列の如く優雅な風景に何かを白状したくなる。

でも空気が揺らいだ。そして僕は我に返る。

「――カーテンの襞に隠れている同級生よ、出て来い。」

ビクッとすごい音がした。煎餅の如く平坦な風景が揺らいだ。

ざわ――ざわあ、ざわざわっと色彩の運動が揺れた。

「ものすごく普通に足が見えてる。」

しかし出てこない。

出てこないで、僕は真実、これはミロのヴィーナスかも知れないぞと試してみる。くらくら

す  
る光と闇の間にあるものがすべて噴水になり、静かな鐘になってゆき、夕方の星に、貝殻に、花環

になろうとする、長時間の疼痛が、ダリのような神経を必要とさせる。

音は狼の迅速な無情な命令の群れになる。

「……………違うクラスの奴か？」

と、僕が言うと、カーテンが揺れた。

海藻のようだ。注意深く溺死する。

崇高な論理も、言語意識も消滅しそうになる。

瞑想の中の真珠のように使用されている楽器。

「俺に用か？ 何か妖怪」と言うと、しーんとした。

ぺたっぺたっ、と上靴で廊下を歩く扁平な歩く音がした。

「待たせてすまん、俊輔。」

啓太だった。

輸送——貯蔵…

生産——生成……。

しかしきれいに乾かしている、時間がない。

「どうかしたのか？」

つかれてものうげだ。

珊瑚がたなびいている。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
「あそこに女の子がいる。」

「何だ、怖い話か。」

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
そうだ、清廉潔白を装う、控えめな狂言者よ。

「もう一度言うが、あそこに女の子がいる。」

「そうだな、足見えてるな。」

「人魚のようにな。」



幽霊と人間の違いくらい、我々という不特定多数がいなくてもわかる。

そしてそういうものは、地雷のように吹っ飛ばされない限り、

無線誘導送信を求める傾向にある。

「――まあ幽霊にも足はあるけどな。」

「と、いきなり見たことありますカミングアウト。」

茶化すな、モグラが出てくる、と言いかけて、

そんな比喩はないことに気付く。

、、、  
「もう一度言うが、あそこに女の子がいる。」

「どうしろって言うんだよ。」

疑問符を投げかけるな、アミューズメントパークはパチンコ屋、

と、言い掛けて、それも、比喩にならないことに気付く。

「じゃあ、いないってことにしようか。帰ろうぜ。」

カーテンが揺れた。

手袋が宝石をちりばめているように――、

わがままな白雪姫…………。

「じゃあ、出て来いよ。」

しゃんとカーテンを引っ張るような音をさせて、女の子が出てきた。

一瞬見とれたが、夕方の女はゲレンデのように美人に見せる。

修辭的判斷は付き物だ。親愛なる怒れる友人は言う。

「橘梨花だ。一年C組。美少女なんだ。」と何故か説明口調の啓太。

「きれいだな。」

「……ありがとうございます。」

むちゃくちゃ、声が小さかった。

あんだって、とエルサレムにいる工事のおっちゃん風に聞き返したかったが、なんだよなんだよ、と急に啓太が絡みはじめたので無理になった。僕の肩にイソギンチャクのようにゆらーゆらあっ、と腕を巻き付けてくる。賞金首でもこうはいくまい。

「デキてんのかよ。」

「俺に子どもは生まれない。」

「……子供はセックスをしないと生まれません。」

啓太は、不意に悲しそうな表情をし、

その時、彼は――ああ、ポエジイ……。

いつ、ああ――君は色彩の夫に……………。

「……お前いいな。モテるな。」

と急に、髪を掻き上げている啓太。首を振って、ワインでも飲みたそうな啓太。

表情がシリアスだった。でも、存在自体が永遠のドンキーホーテに名乗りを上げる！

ウィンナーソーセージを自ら砕くこともあるか、この男！

「女の子がセックスなんて言ってるの初めて聞いた！」

「いや、俺もだよ。」

で、冗談はさておいて、何の用なの、と僕は聞いた。

しかしすると、啓太が、このっこのっ、と急にいちゃついてきた。

ハイキングにやってきた子供と熊はダンスパーティーするような想像をした。

満月の胸部にふれるだけで、それは叶う風船の息の吹き込み口。

「夕方、教室といえば、告白！」

愛の序曲――

その時それはトマホークになる、不思議……。

「……違います。」

なんで啓太、僕の顔を見て憐れむような表情をするんだ。

それが一番むかつく。

\*

17:35 kamomenald's

いらっしゃいませダロ、と鳥が言う――

話を聞くだけはあれなので、駅前のカモメナルドへ移動する。

みちみち、ざっくばらんに話を聞く。時計が旋回する。

垂直な酔いが不均一に切断されてゆく会話。

ざわざわざわざわ。

いつもより客が多かった。

何事かと思ったら、かもめの化け物が、つくねんと愉快地、

いらっしゃいませダロ、と挨拶してきた。

鳥が普通に働いていたが、僕は大理石でも、ロボットでも気にしない。

マスコットキャラクターとしてのかもちゃん。

それは紙幣から出てきた夏目漱石よりもありがたい。

「ニョホホバーガーセット。」と僕は言った。

「ニョホホバーガーセットまいどあり。ニョホホ入りました！」

くちばしで、ポンポンとレジ打ちをする。

永遠の微風に誘われる。

――しかし最後の多分勢いなんだろうな。

牛丼屋とか、定食屋のそういう伝達の仕方ではないと思うし。

「啓太は？」

「ニョホホ月見と、メロンソーダと、スルメ小。」と、啓太が言った。

ちなみに、カモメナルドにはサイドメニューでスルメが売っている。

大中小とある。食べやすいようにかなり切ってくれている。

ちなみに、大は袋詰めのスルメで渡してくるので、お持ち帰り用にしか思われぬ。

「ニョホホ月見と、メロンソーダと、スルメ小まいどあり。」

しかしポテトの代わりにスルメというあたりがちょっと変だ。

しかし、日本人には受け容れられる感覚。

リボンをつけているようなフランス人にはちょっとむずかしい。

「・・・かもちゃん。」と、橘梨花が言った。

「タベテスマワナイデ。チキンニステスマワナイデ」

この店員駄目だよ、急に仕事できなくなっちゃったよ、

だって訛っちゃったよ、俯いているよ、客商売向かないよ、とはならず、

急にギャグが始まる。

「昔からかもめを食べるとかもめになると言われています。」

何それ、オチも何もない。ふつうに、言い伝えになってる！

「…すみません、ニヨホホセットください。」

「ニヨホホセットまいどあり。」

お盆を持って、窓際の席に行く。

それにしても甲斐甲斐しく働く鳥だ、と思っていたら、

かもちゃん、ハンバーガー食べちゃ駄目、と大きな声が聞こえた。

と、橘が何か言ってる。

「……西条君、靈感あるって話有名だから。」

「ない。」

## 甘く熟れてゆこうとするつぼみのさみしさ

---

澄んだ音を立てる 限りなくやわらかいもの

澄んだ音を立てる 瀬に砥がれたきめのこまかな柔らかい質

すこおる／が／降つた／

スコオル／

驟雨／

Squall／

静かに鳴りはじまつて 奥深い謹しみ深い鳴りようが

静かに鳴りはじまつて 文字が涼しく爽やかに感じる

まあぶる／けえき／

ここあ／きす／とらいあんぐる／

マアブル／ケエキ／

ココア／キス／トライアングル／

(さいはてはまつくらで、ならくはいいろのゆめ)

(一一最果ては真つ暗で、奈落・灰色の夢……)

ハルジヨンが言つた

「その腕のなかでほほえむぜ。」

モーニング・グローリーが言った

「それはあつい血だぜ。」

Amaryllis／あまりりす／

はなことば／花言葉／は／

は／誇り／素敵／内気的美しさ／

おしやべり／虚栄／

(ほだされちや、つま、つまら、ないね、

うわ、うわ、つま、らな、

らな、らな、ない、ね)

(風に言葉を挿し入れた。

ぐらぐら、と揺れた。

壺のような表情がこわれた。

地面に落ちてぐしやぐしやになつた。なつた。)

――昨日孤独だつたからつて！

ドンブラコ！

はいはい！ 大切なことなのでハイハイ！

今日も孤独だという説の中に、

紛れていく若者だと思ふな！

ハイハイ！

光りも透き通るほどのあけぼのの女神の指！

大きい木の吊り橋をぎしぎし音を立ててわたる貴族風の舌！

心の中にあいている黒い大きな穴！ 縫う針のきしみ！

あつちよ！ こつちだ！

ドンブラコ！

はいはい！ 大切なことなのでハイハイ！

きや！ ややや！ ぷし！ アッハーン！

めちやくちや！ そう？

大体その一歩の手前の凧ぎ！

さみしくなると／とけてしまう／

溶けてしまう／差／味／しくなると／

と／進化／発展／

深化／八点／

な／な／な／なんか意味わからないや／

で／で／で／でも大歓迎送迎可能／

澄んだ音を立てる 限りなくやわらかいもの

澄んだ音を立てる 瀬に砥がれたきめのこまかな柔らかい質

すこおる／が／降つた／



スコオル／

驟雨／

Squall／

静かに鳴りはじまつて 奥深い謹しみ深い鳴りようが

静かに鳴りはじまつて 文字が涼しく爽やかに感じる

アルストロメリアが言つた

「こころの罅をうるおすための、

ハアモニツクトライアングルが欲しいー」

(欲しい、欲しい……)

リリウム・ルベルムが言つた

「生きいきした眼！ 白い花が刺繍された！

さざ波のような眼！」

(欲しい、欲しい……)

恋の黝い骸の松葉の蔭／

いつしようけんめい／に／いつて／よね／

素足で昇る／なにもうみだすことはなくともはじめるためのランプ／

いつだつて／いまだつて／これが／さいこう／だよ／

まあぶる／けえき／

ここあ／きす／とらいあぐる／

マアブル／ケエキ／

ココア／キス／トライアングル／

(おんがくはなりやんでしまうから、なりやんでしまうから、)

(――音楽は鳴りやんでしまうから、鳴り…止んで……しまうから……)

こぼれる／よ／

もつと／ぼくの／それが／はこぼれる／よ／

こぼれる／よ／

じゆもん／のように／くりかえしてた／ら／

くりかえしてた／ら／さぐる／よ／

もつとふかくうちつける／よ／そこなし／の／

まつくらやみ／の／いちばんおいしいところ／

うつくしいところ／かがやかしいもののところ／

こぼれ／る／よ／

もつと／ひろげられて／ゆく／よ／

もつと／さき／に／すすめる／よ／

(わかるようじゃあ、二流以下だね、

うわ、うわ、つま、らな、

らな、らな、ない、ね)

（風に言葉を挿し入れた。

めりめりと綿類独特の裂かれる弱いようで鋭い音がした。

青い、澄んだ瞳には何の表情も動かなかつた。

世界はまだ何にも気付いちやいなかつた。いなかつたんだ。）

（風に言葉を挿し入れた。

鮮明に、強い、この記憶だけが失われたものを覗きにかかる。

僕はまだ、すぎる手から逃げてしまう、弾力のある実をむさぼりつつ、

燐酸石灰の音。スノウフレイクの音。君の涙の音。）

（風に言葉を挿し入れた。

すると草の葉にたまつた水銀の露の玉をとばして、一面に、

数万色の花が咲き乱れる。君の涙が、夢の精、言葉はなお一層不思議。

でも春の調子の楽音の響く効果、傘は開いて、閉じてしまうんだ。）

そして／ぼく／は／きつと／ないてしまう／

ないて／しまう／んだ／

こんなに／だいじなこと／たいせつなこと／を／

あんまりにも／かんたんに／わすれさつたこと／を／

いま／そうであるみたいに／すごく／

はじいつて／はずかしく／て／はずかしく／て／

でもそれを／どうすることもできなく／て／

ぼく／は／きつと／こんな／じだい／の／

どうしようもないことを／わらつた／くせ／に／

そういうもののことだけは／わらえず／に／

きつと／ないて／しまうんだ／

でも／ほらそろそろ／じかん／だぜ／

うつむくのをやめて／かお／を／あげろよ／

澄んだ音を立てる 限りなくやわらかいもの

澄んだ音を立てる 瀬に砥がれたきめのこまかな柔らかい質

すこおる／が／降つた／

スコオル／

驟雨／

Squall／

静かに鳴りはじまつて 奥深い謹しみ深い鳴りようが

静かに鳴りはじまつて 文字が涼しく爽やかに感じる

目覚ましを止めずに、シャワーを浴びている。

そんなだけじゃ駄目だから、

洗濯機が回っている。

じゅうたんが敷かれ、本棚って言えよ、書類整理用の棚があって。

でも味噌汁の匂いがしない。

炊飯器からご飯が炊きあがったまま開けられるのを待ってる。

そして僕はひどく酔ってる。

癒えない疲れや消えない跡が、断片的で、猛烈で、

急激で、絶望的の分子が多い。

荒々しい悲しみに似たものが、ふっと、心の底から湧上って来る、

この命令航路の規約のように、

そうだろう、違うかい、だから、ふしぎに笛のような声を出すと、

鼻でくくん啼く犬のこえにも何処か似ている。

そいつは自覚無く過ぎていく時間で、

自己満足に酔いしれること。ふりむいて、去って、ある日、

面影はどこにも残っていない。

人が思うこと、人が考えること、人が感じること。

たとえば、自分のことを、

柿の実のようないい艶をもった頬、

苧りこんだ短い髭、すこし禿げあがった前額だと、

思ってみる、どうぞ、僕も一人の歴史的の人間になって、

影を追ってみる。

心の底に堅くなったもののあるのを自らにもおし隠すようにして、

科学はいとも容易く切り口上を継穂を見つけたみたいに、

そらニューロンの繋がり、微弱な電気信号、

でもハイヤーセルフとか、スピリチュアリティとか、

田舎とか、都会とか、そんなの本当にどうだってよくておかしい、

魂が天界を漂うその奥で、

うす気味悪い影が見えない方がおかしいのに。

僕にはそれが選べたはずなのに、出来たはずなのに、

ときめいていた時間は、

忘れないというだけの過去の誇りの色。

はなやかに照り満ちてゆく運河の往来、

長い間の歴史がそれをイメージだって、駆け引きだって、

立ち止まりながら、ゆっくりと歩きながら読み解いてみせたんだ。

瞳の中がプラネタリウムでも、場面緘黙症。

気づけば深く薄暗い森みたいなところをただひたすらに歩いている。

悲哀の調子が籠もっているって、地の底を誰か掘っくりかしてるとって、

寂寥の影の、どこまでもこのうえない幸福。

淋しくってどうしようもなくなって、

自分が自分じゃなくなってもいいと思えて、

どうでもいいことと、どうでもよくないこと。

正しいことと、間違っていることが、混ざってゆく。

それにどういう区別もない、性質の違いもない、

どこにある、日本風の顔立ちのどこに。

ここにも出入りの扉。

どうにもならない時はなにをやっても変わり無く、

何をやろうとしてもうまくいく見込みなんてあるはずもなく。

通過点やプロセスだとあの日の僕にだってわかったみたいに、

いたいけな心を踏みにじるように、

またどこかにある、好き勝手な論理を持ち出して、

瓦斯のように淡い夜の光を眺めることを好んでいた僕が、

愛情の保証なんて口にする、星が幾つか、妙に近々と浮き出して、

閃めいてくるまでストロボするまで全身が見えてくるまで、

いつもの一時間より長く求める、

意味のあることを求めれば求めるほど険しくなると知りながら求める、

世の中にいったい確実なものなんてあるの、

いまこの瞬間は違った、そうだよ、

この瞬間だけは違うって言い聞かせながら僕は生きた、

動いてるようで止まっている、こんな時間が肝要、

無関心のこんな時間が。

目覚めなければと願いながら

目覚めなければきっとこんな時間はずっと、

想像してる、天下を三分してその一を保つとでも言いそうな勢いで。

気に入っているなら、きっといい、

何をやっても疲れてしまう時も知っている、

どうやっても傷ついてしまうそんな時も知っている。

今まで森閑と、あるいははどんよりとしずまっていた心の何処かに、

俄かのさざなみが立ち始め、その絶え間ない波動が、

やがて体中、心じゅうに充満してくる。

フラフラッとしている間にあっちやこっちやへと行き、

アッと思うヒマもなくズバリズバリと手玉にとるコンタン。

ははあ、こいつはもう、風船に対するあどけない興味、人生の曙。

ふと気を変え、山の甲斐に峯のしら雲あとを消す。

力なき身体のよろめく毎に、石のような自分は、



ふらふらと、はずみで揺れる。

ち、ち、と蟬の鳴きやむ音、音。

自分の心の暗みを手さぐるような気で、

何処か釘が一本足りないような、

そのことで自分自身を馬鹿にしたような気持ちで、

自分にさぐりを入れてみる。

裏でも表でもなく、眉目のくっきりとした白皙の秀才型の顔でもなく、

野性的で精力的な顔でもなく、疲れているのでもなく、

おどけているのでもなく、河水の氾濫。

心に熱が少なくなったとすれば、

僕を組織している電子の運動が少なくなったということ。

もどかしそうに心のうちで呼ぶだけじゃ表面に変化はなくて、

いまさらながら、自分の歩いてきた道程があまりに近いんだってこと、

ああ僕もまた神意によるその本質を身誤って、成長する、大人になる、

社会人になる、立派になる、我慢するという嘘におどらされて、

本当にしなくちゃいけないことが何か、気付けなかった。

自然に「空」というのを見誤った僕がいて、

自然に「色」だとわかる、

そんな僕もひとり取り残されている部屋で。

木の枝を掻き分けながら近付こう、

入道雲に遮られていた地平線のあたりへ行こう、

何処までも行けそうな気がする、

ホテルや西洋人の会社がならんでいる海辺で、

堤防は黄褐色の単調な色をもって、右へ左へと遠く延びて、

心の中には遠く果てしなくひろがってゆく魂があって、

僕はそれを見たい、かがやきが変わるから、

生き方が変わるから、

ねえ僕はそれを見ていよう。

すべてを忘れて没頭していよう。

教育から政治的色彩を除くということ、

暴力団排除というパチンコ屋くらいにやらなくてはいけないものなんだろう。

(昨日までの屋台店や射的場を、今日から、

図書館とまではいかなくとも読書室にしよう、

という根本無茶な意見だが――)

社会的平等、福祉重視の原則が既に赤色信号の中、

(前者には真っ向から疑問がある、日本は厳然たる階級社会であり、

後者は福祉重視はつまり格差を強めるのではないか、ということで、)

『価格決定のメカニズム』 『自由な企業』

『競争があり強く公平な国家体制の優先』

……ネオリベリズム。

[昨日僕は、いかなる仮定を設定すれば、

計画の実現が自然かつ必然の帰結を迎えるのかと、

ぼんやり考えていたのだ。]

僕は電車軌道のように直結しない国家の曖昧さを、

議会のせいだと思うし、そもそも議会そのものの人数が多すぎるからだとも思う。

ヒューマニティーの欲求が、公然と語られながらも第三者機関は生まれず、

時折には、蓋然性法則の研究に嘘をついた用意周到な賭博技術なのかとも。

ああこれが民主主義ですかい、ああそうですか、と言いたくなる、

小熊秀雄の正当後継者みたいな僕。結局僕も四十くらいで病気して死ぬのかな。

何の話だ。感傷はいいよ。いやいや年の瀬も近い。少しくらい感慨に耽らせる。

〔教育にとってニュースがどんなに悪弊をもたらすものか、

政治家たちにはわからないだろうか、

と、ぼんやり僕は考えていた。〕

—国家はなぜ衰退するのだろうか？

搾取を通して、あらゆる国々の生産と消費とを、

世界主義的なものに作りあげ、それを維持し、促進するための、

生産手段、所有、および人口の分散をも把握、監視するがために、

さらなる搾取をすることで国家は衰退する。

これは肥満してゆかねばならないものの宿命だが、それでも、

衰退しない、維持する、経済は発展する、というのは嘘だ。

それらは不毛地質地帯の砂漠を開発するようなものだ。

結局、根本が破綻しようがしまいがどうでもいい社会に危機感などない、

小学生だってわかる。必要金額と同額の保障をすることが、

原則的に無理な社会に、そもそも個人は欲望の無限小部分しか得られない。

—活力は食欲であるからである。

…古代以来、そこには掛け替えのない古代の遺跡しか残らない。

年間排泄総量を液体や気化させるというくらい不思議な植林だ。

進歩的な亡命など存在しないが、進歩するほどに国は嫌われる。

憲法改正に憤る詩人たちがいる。はたまた、税金に憤るポエムマンがいる。

僕は前者より後者を信じるが、結局僕はそのどちらも非難するだろう。

——結局日本は平和で幸福なのだ。

・・・財政悪化や、テロ頻発しない社会に比べればということだが。

教育における不要な付着物を排除せよ、排斥せよ、という気持ちがある。

毎日、懸命に革命を模索している僕には教育に強い思い入れがある。

政治という絶対無比な広告を取り除け、子供たちに現代生活の速度を教え込むな、

まだ過去を顧みたり、その種のことを熟考させるな、

安眠させろ、活力を得させよ、と思う。

でもそんなこと言ったって、スローフードも政治的なものだし、

禁煙までもいわずもがな政治的だ。給食や教科書も政治的だ。

これは何となく、政治批評が根底から文芸的なものであるように、

文芸と政治が組み合わさるのはもちろんよいのだが、

一般的な意見がそこにはないという本末転倒、

いわば科学諸成分のそもそもの間違いだと指摘できる代わりに、

結局誰もかれもが、政治的なことを単純で効果的だと思って、

その代替となるべき個人の力を信じていないのかなという気もする。

——退屈な政治的キャンペーン。

王が戦闘をしない世界では人為的な懐柔が生まれる。

(国民の代表であるはずの政治家は地元の名士、)

『食品偽装』 『原発』

『それでも唯一の被爆国であり、平和で安全を謳わなければならない国 』

……日本。

[昨日僕は、国のことを考えていて、嫌になった。

知識層が政治に期待を失って、拳げ句に、

中下層まで期待を失ってゆくのを思ったから。]

そして僕は十二月布団の中に湯たんぽを入れる

---

S H A R Pの発電量シミュレーションを試してみた。

何故かというと僕は芝刈り機に、

ギリシャ語のアルファベットを縫い付ける男だからだ。

――嘘ですけど。

いや、ナイアガラの大滝の裏の暗い洞窟みたいに、

牢獄の夢と結婚するからだ！

って意味わかんないですよ、バッハのレコード聴いて、

どうしてビートルズじゃなくて、

ポール・マッカートニーを聴くのかなんて。

でも、冬でしょう。

寒いので、湯たんぽを布団の中に忍ばせながら、

太陽光発電っていいなって。

どういうことかといえば、

ラジオボタンのいずれかを選択する。

●お住まいの都道府県はどこですか？

●最寄りの地区はどれですか？

●自宅の屋根の形はどちらですか

●試算するシステムを選んでください

[高効率単結晶モジュール、単結晶モジュール、多結晶モジュール]

●設置する屋根の方位を選んでください

[南、南東、東、西、南西]

●一か月どれくらい電気代を使っていますか？

そしてそれは何月の電気代ですか？

最後、電力会社に情報流してるんじゃないかって、

ちょっと思った、

こりゃあ、赤ん坊のおしゃぶりのだなあ、と。

奴が欲しいのはおっぱいなのに、

おしゃぶりで我慢するのだ。

いい顔してると思うよ。でも。多分。

ほらコンビニで服装とか年齢とかを、

店員が入力するシステムってあるでしょ、

(かなしむべきかな情報入力システム！)

そんなことを僕は思い出してしまった。



普及率のなかなか伸びない日本の太陽光発電市場は、

同時に電力会社に後押しされているのかなあ、とも。

太陽光システムのエコイメージはいい。

世の中の流れに沿っているが、

僕は湯たんぽのCMがあればそちらの方がずっとエコだと思う。

でも仕方ない。

だって僕は冬の十二月に布団の中に湯たんぽを入れている男だから。

はっはっはっ！

さあ戦場のシーンだぞ、ラジオはキャットとなり、

ペンギンどものこがらしでえい、

とっとなり、かまいたち！

そして、台所の鼠が、

ローストビーフを欲しがって走り出す！

愛と勇気と絶望と涙を込めて！

何かが始まろうとしているのか、

いいえ、何も始まりませんよ。

でもただ、

ノイローゼになりそうなポエジイに叫んでみる！

亡霊になりそうで古いいびつな墓石になってしまう人々に！

日本の太陽光発電は、

マイボイスコムが、

(カタブツだなあ、おまえ)

太陽光発電に関するアンケート調査によれば、

「導入コストが高い」

「地球にやさしい」

が、ツートップを占めてる。

そこから四天王として、

「発電が安定的でない」

「発電量が少ない」

「設置場所の自由度が低い」

「メンテナンスが大変」

と続く。ああ、やれやれ、という感じ。

なお、アンケートはそうであると、そうでない形式なので、

本来の見方とは違うのだろうが、

太陽光発電の意見が食い違う場面も多々見られる。

売ってしまえばこっちのもんというというわけでもないから、

やっぱりこれは浸透度が低く、

(フラフープしますか?)

(粘土細工しますか?)

(砂のお城作りますか。)

全体的にマイナスイメージとして扱われている、

と結論づけざるをえないのだろう。

ただこれは太陽光発電と自宅の合わせ商法的な手法で存在していない、

あるいは電力会社の超強力プッシュとして存在していない、

車を一台持つのと同じ感覚というわけではないからそれも当たり前だ。

消費者の意志決定は興味だけでは不十分な情報でも満足できる。

しかしそこに実用が兼ね備えられた時、人は自然に学ぶ。

ソーラーシステムを頼む!

ソーラーシステムだ!

ソーラーシステムが欲しい!

絶叫しながら狂った太陽光信者たちが、

過去は遠い昔とばかりに、

気がつくとかキブリやネズミを殺しまくった。

可哀想なのはバッタやカマキリで、

あるいは蝶で、

(届かない。届かない。)

(でもきっとその跳躍は続ける！)

ハムスターや、動物園にいるネズミらしい。

すばらしいスライダーに、カーブに、フォーク、

そしてぶったたく！

どまんなか！

拡大傾向にある太陽光発電、

あるいはソーラーシステム、

自宅やビルに標準装備とは言えそうになくても、

伸びしろはあり、着実な成長産業らしい。

エネルギー確保や、エネルギー資源としてはもちろんそうだし、

節約志向と、どれくらいで回収できるのかという疑問も残りつつ、

それでも補助金などの制度的支援が必要だろうし、

環境貢献というイメージをどの程度浸透できるかも重要だ、

でも僕は毎日屋根を見ているわけじゃないので何とも言えないが、

あんまり太陽光発電を見ない。

木は歯抜けで、葉っぱは髪の毛の薄さをおもわせるこの頃、

(ビルディングは大人たちの溜まり場！)

(陽気を装いながら変なリズムで歩き始める、忘年会！)

もし仮にそんなものを見ても亀の甲羅でも干しているのか、と思う。

そしておそらく人類は思う、あんなもの必要ない、

だってアメリカは電気自動車を走らせない。

(硬直すると同時に限りなくしなやか！)

そして僕は十二月布団の中に湯たんぽを入れる。

夢の中から脱出すると――、

ぐっしょりと汗をかいて目覚め……る……。

拾い残した骨に祟られているような、そんな気持ちに駆られる。

悪夢の方へずるずる滑り落ちていってしまいそうなあやうさに、

みずからをまだ脱ぎ棄てることのできない弱さと同時に、その正気さを喜ぶ。

手れん手くだだ、それではもう奴のえがいた劇そのものだ、と思いながら、

蠟燭を撒き散らしでもしたような不吉な夢の中のはなびらは、強烈な未来だ、

僕が死ぬ夢、僕が僕として死にながら、

また違う誰かが僕として新しく生まれる夢。人知の倒錯する奇妙な原色が、

意識の底層に揺曳し、宝石で言えば紅宝玉のような、

花で言えば薔薇のような、赤い夢、血の夢。

真実とは何だろう、夢とは何だろう、と僕は信号機でも見ているように、

あるいは催眠術で目の前を振り子の物体が行き来するように、不気味な鴉、

あるいはもう不気味に湧き起こってゆく執拗な黒に襲いかかられているような、

そんな気持ち悪さに遠近感さえたよりなくなってゆく。

芋のように首を斬られる前に、あるいは毒薬を注射する一歩手前で、

ああやっぱり夢だったんだ、とほっと溜め息をつくような目の前の光景が、

蒸気船のようにゆっくりと荒れ果てた廃墟のような都会の僕の家に戻ってくる。

しかし凶悪な風が、心の底から吹き起ってくる。漠然とした息苦しさが、

顔色を悪くさせる。リアルな夢は、癌の増殖だ、

――奇妙な光景の断片が絡みつき……、

噛みつきでもしたように、<sup>まぶた</sup>眼瞼に焼き付いている。

原始というイメージが、口の中で潰れてゆくつかの間の安堵の溜息が、

輪転機<sup>とりこ</sup>の速度のように深い静脈を誘って僕を俘虜にする。

と、――反射的に立ちどまる。

空間をたち切って突然、黒い一箇の塊りが墜落していくのを見た。

大きく小さく、それは首飾りを投擲でもした時の軌跡のように余韻をのこしながら、

その塊には腕があり、手がある。気配がヒタヒタと近づきつつあるのを感じる。

それは僕の顔をしたドッペルゲンガー。細かいガラス屑のような印象の自分の顔を辿る。

じっと後ろで様子をうかがっているような、機会が来るのを待っているような気配が、

この時になって、何か得体の知れないものへともぐりこんでゆくような、

憂鬱の爆発的な蔓延を告げる。街に悲鳴が満ちて、青く哀れむ。

呪わしく陰鬱なあわれなしかし取り返しのつかないものだけが見捨てられた亡霊となる。

そしてそれはその時に、蛭のように動く、蛇のように動く。

一瞬、糞便のような臭いにむせかえる、それが取り乱した、僕の、むなしい自我の紙風船だ。

僕はその時、硫酸によってドロドロに溶かされてしまったような自分というものを感じる。

閃光に当たった面だけざらざらに焼け爛れ、

光の当たらなかつた方は元のまま滑らかであるように、裏は表で、表は裏だ。

表面上はきれいなままだが、内部ではもう錆び、腐敗し、乾き、壊れている。

時間がしばし凍結したかのように、物音の聞こえ方も少しずつ変わってゆく。

夜道を照らす街灯からどこからともなく聞こえた口笛のように、

しばし言葉を失い、口を軽く開いたまま、ただぼんやりとその方向を眺めている。

濃密な気配に恐怖が肥大化し、無限に遠い星にまでやって来たような気がする。

逃げたい。でも、逃げられない。心臓が口元までせり上がってくる気がする。

自分が何を見ているのか、意識を定めることができない。

人間ではない何かの存在をほのめかして――、

総毛立つほど居心地が悪い……。

血しぶきが生き物のように氷雨のように勢いよく飛び散る。

皺が、額の眉と眉のあいだにうまれる……。

僕は懸命に目の前の自分の心を読み取ろうとする。でもそれは無駄だ。

爬虫類なのだ。機械なのだ、ロボットなのだ。昆虫なのだ。

輪郭と実体とがうまくひとつに重ならぬまま、目を疑うような、

見ていると目まいがしてくる異様な風景がただゆらゆらと踊る。

まるで観念と言語が結束しない時のように、想いだけが、

熱く、納屋をなぎ倒す溶岩のように流れ、不意に重力が戻る。

でも、立ち上がっても何処へとゆくこともできないのだ。

まっしぐらに部屋のドアへと走りノブを掴んで開けても暗闇。

永遠などあるはずがない、お前は死ぬのだ。

生気のないリズムが鼓動する、澄んだ空気が僕を狂わせる。

それでも吞まれるまいと、緊張が走りパニックになりそうにながら、

窓へと走っていく。でも外を見て愕然とする、そこも暗闇で、しかも、



うにゆうにゆと、暗闇生物とでも呼べそうなものが脈動している。

僕は諦めた。でも、ドッペルゲンガーの僕はそれをにやにやと見ている。

夢だ、こんなのは夢だ、と思う。けれど、頬をつねってもいたいのだ。

奴は笑い声も立てない。そしてけして何をしてこようとする事もない。

――悪意は知っているのだ…。

どうすれば…………人を一番痛めつけられるかを知っているのだ…。

おれはその無限に棹さして流れる、

どこへ、どこまで流れて行くか――

あらせいとう

紫羅欄花の根をな噛みそ、暁近き影のむらさき、

無心に織る細き光は淡き疲れの影を生みたり。

人の心に染み入りぬグレート・リヴァの流れに、

、、、、、、、、

いとも尊き十字架は、

そのまはりには何の憚りもなく輝きが、

雲のやうにわきあがる。

、、、、、、

艸はかがよひ……！

……（おさなき恋のやうに、

あなうら黄金の響を伝へたり）……

咽喉音／区分的気音／

挿入的かつ付加的文字の存在／

人間の血と空間とを堺するスラム街のやうな街で……！

不完全な残像が、が、が、あ、踊る――。

近代速記術とも電信符号とも、

民族的衣裳の脱衣とも…。

踊る、蹲踞まる、よろこびや、悲しみが、

アジアンゼネレーションギャップをつくりだす、

羅馬、バビロン、メソポタミア…。

おれは感じる…！

おれはおれは感じる…！

要するに骨だ、そして肉だ、

くぐむ声もたをやか、冷たく碧きトレモロに、

ふみ

織りいだしたる愛の書。

はだいろ

否、人の肌膚色をしらない悪魔の辞書が。

………… (いらいらした心が

ふたつの窓をくもらせた) ………

固体残存沈殿物／高級喜劇／

同時選択的伝統の音調／

、、、、、、

艸はかがよひ…！

そして、枯れ…！

刈れ……！

井戸のやうなまぬこも涸れ……。

冷たきつまぐりは風琴の音色にくゆる。

たてぬき

涙の糸の経緯に触れさしめよ冬、

悔い改めよ人の子よ。

スタカットとピッツィカアト、

美はしき瞳をのろはん。

ああ、アルコールランプの灯は夜ごと抜けだしている。

……と……と……と……ときのあゆみをみつめていよう、

——ヒューマニティーの洪水！

さゆらぐ花の夢心地……！

「自由」の岸に行かしめよ！

クリエーション

——創造——

海にむつみかけゆくかもめどり、

海にいかくけつごうかもめどり、

……………（未来の運命を見た、

俺は俺の死をそこで見た）……………

無慈悲な犠牲／宿命的挑発／

最後は希望と青春の化身／

、、、、、、

クソッタレだ…！

、、、、、、

クソッタレ…！

おれは無限に棹さして流れる、

葡萄酒いろの霧雨のなかを。

紫式部のいろのなかを、

紫陽花のいろのなかを、

月夜のおさがおのやうないろのなかを、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

きみは、ふくざつなかんじょうのびしょう、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

ふくざつかんじょうこっせつのびしょう。

おれは感じる…！

おれはおれは感じる…！

(トラップ) から水がこぼれる…！

——無言の放心的表情！

、、、、、、

艸はかがよひ…！

、 、 、 、 、 、

艸はかがよひ…！

## ファミリーレストラン

---

ファミレス店舗端末はファミレス本部端末から暗証番号を受信し、

ファミレス本部端末へ売上報告を送信する。

駐車場を表す施設アイコンが地図上に表示される。

蕎麦屋、うどん屋、牛丼屋、寿司屋・回転寿司、

カレーショップ、ファミリーレストラン、定食屋、

お好み焼き屋、カフェ・喫茶店、出前・ケータリング。

「――それは精力的な事業展開をするJTBみたいに？」

おさらいする。

ハイリスクローリターン化。

メイン顧客層の減少。オーバーストアの常態化。

食材費・人件費・賃料。

消費者ニーズを補足する商品。業態開発。

「――それは一眼レフに強いキャノンや、ニコンみたいに？」

マルチブランド化もしくは絞りこみによる集中戦略は鍵だ。

味やもてなしの向上。客が選ぶのはメニューと、

立地や雰囲気という答えもある。

郊外は賃料が安く、駐車場面積をとりやすいため、

重要な手段であったが、都市回帰は起こる。

販売チャンネルに応じられるヤマザキパンのようにはいかない。

「…それでも大手同士の連携は起こるだろう。」

繁盛店の3つの共通点

料理・空間演出・サービス。

有能なストア・ディレクター。クリエイティブな才能。

業務の目標設定、進捗確認や問題発生時の解決。

快適な厨房づくり。フロア・マネージャー。

社員・アルバイト・パートをまとめる。

「それでも買い手である消費者の優位性が高いファミレス。」

(またそこにはコンビニという異業種の存在もある。居酒屋や、  
ファーストフードも。)

(家庭の外部に食事を求める傾向と消費者ニーズの多様化。)

「商品・サービスの情報は豊富になり、消費行動の変化がある。

外食は多岐にわたるので、

経営がむずかしいという見方もあるファミレス。」



(道路交通法による飲酒の厳罰化、原油価格の高騰、

店舗管理監督者の名ばかり問題もある。

鳥インフルエンザに食肉。大きく取り上げられた偽装問題。)

「中小企業や個人経営の比率が高い。」

自動ドアが開く。

いらっしゃいませ。

何名様ですか。

おタバコは吸われますか。

お客、席に座る。

メニューを手取る。

ブザーを鳴らす。

店員が来る。

ご注文をおうかがいします。

(比較的安価で供されるものに「サイコロステーキ」があり、

ファミリーレストランの定番メニューとなっている。)

客が求めているのは豊富なメニューと手ごろな価格、

というデータもある。

（レトルト食品のハンバーグはファミリーレストランにとって、  
主力メニューであると同時に、収益率の高い商品。）

洋食だけではなく和食・中華。

さらには、というのがファミレス業界。

「本格的な海外進出へ向かう王子製紙と日本製紙？」

しかし和食と比べて歴史が短いためメニューは、  
全国何処でもほとんど同じ。

セントラルキッチンやカミサリーという食品加工センター。

後者は本格的な調理加工機能を持たないのが通例。

食器類、お盆、コップ、テレビ、店内の清潔な印象。

（イメージは完璧だ。彩りと栄養を考えて数種の野菜を添える。

ニンジンのグラッセ、フライドポテト、

インゲンの炒め物やパセリといった、

赤・黄・緑の三色の組み合わせがポピュラー。）

高度成長期にはデパートの食堂は世界の窓であった。

洋食を提供する代表のように感じられていた。

そしていまではその役をファミリーレストランが担っている。

(完全密閉容器だから衛生的で高品質と謳われる、

ドリンクディスペンサーを取り付ける。

軽量設計で、ハンドリングもしやすい。取り扱いも簡単。

ともあれこうして顧客サービスが可能となる。)

「たとえば、はじける刺激と爽快なペプシコーラ。

それともゼロカロリーのペプシNEX。

ニチレイの爽快なアセロラマイルドソーダ、

世界中で最も親しまれているらしいセブンアップ。

柑橘系の味わいのマウンテンビュー。」

フードコートや、

多数飲食店のテナントをする郊外型ショッピングセンターに、

低迷を余儀なくされているファミリーレストラン。

ノートルダムの屋敷女中と、

ネイバーフット型ショッピングセンターへ行く。

逃げ得を許さないという彼女の一種治安維持的な効果が、

郵政民営化に伴い郵政監察制度が廃止され監視カメラを設置しながら、

職員の士気が下がるという理由で設置七百億、撤去三十二億。

年数が加わるにつれて比率は大きく格差は小さく。

ノートルダムの屋敷女中は、

機械工学コース、自動車工学コース、建築工学コースにするか迷った末、

同一音および不協和音の脚韻の問題、

中小企業診断士、システム監査技術者、

特種情報処理技術者の資格を有し、

最終的にノートルダムの屋敷女中になったという、

イミフないきさつがある。

(いいえ、既にイミフですよ。)

ノアの洪水させて、

ブラ・ブラジャーと言うと思ったでしょう、違うよちがうよ、

ブラ・ブラックホオールさせて、吸い込まれて、埋もれさせて。

(いやだから、あの、イミフですよ。)

蓄音器を聴かせてもらいたいお前の二つのメロンのところに。

何を言うのですこれはメロンではなくアップルです、卑下。

何を言うか貧民層のバカの俺の目の前に広がる工場、

不愉快な機械音の自動車工場で働いている間中そのつぼみ。

招待して、握手の挨拶させて、

喫茶店にいるモモンガのようにケーキ食べさせて…！

(というか、それ、イミフですよ。)

ああもう辛抱たまらんからオデュッセウスさせて！

ああおやめになってオデュッセウスなんていう優雅な老水夫の粋な振舞い。

わかった、でもわからない、わかりたくない、

いま家畜市場で販売監督していたい僕よオデュッセウスさせて！

いま俺の中ではじけそうな、乙女座超銀河団特急にコーラスさせて。

演繹的に描写したそれらの部分を、コラージュのように集合させて、

いまあなたは鹿児島純心女子大学したいのね。

単一させて、独立の試算させて、携帯に眼帯つけさせて…！

(というか、それ、イミフですよ。)

ノートルダムの屋敷女中と、葉の上で、寝そべりながら妄想プレイする。

俺はかたつむりだよ、君は水滴。溺れたらごめんなさい、アマノガワ。

「—————（まあなんて、素敵なシモネタ言う人なの。）」

(というか、そこ、感心するところ?)

いま、俺における女歌舞伎義太夫学雑誌！

女は大体スカイラインに弱い、ポルシェ、フェラーリ、

いま急速に、歩行者、強烈な肉体の快適なわかわかしい運動能力の開花、

もっとノッティングヒルさせて、アバンチュールさせてイスランプウウー！

ああ素敵、ふしだら、けだらけ、まんとひひ！

(というか、かえすがえすも、イミフですよ。)

ノートルダムの屋敷女中は、とても煌びやかさをまとっていて、

僕の立つ瀬ない三本目の手が貸し切りのハコでライブする、

精神を集中させて鏡の前で第三の腕をはたらかせる、無原罪の宿り！

それは誇張した表現では無い気がした。一目惚れした瞬間から、

僕の中のそれはアトミックハアトさ、ビ・ビビ・ビッグバアアン！

彼女を目で追っていた時の、いんゆあ・はあと。

奥底の深闇にへと辿っていく、火器したい、滑り台したい、したあーい！

「—————（まあなんて、卑猥なお下劣ヌーボー）」

(というか、冷静ですよ、あなた。)

ノートルダムの屋敷女中、禁じられた遊びをしようよ、

僕の絶対に解けない、でも、のび太なら解いてしまうあやとりをしようよ、

異常に発達した腹筋のよ～なものを見て、

景色を瞳に染み渡らせ、瞳が踊るよ波のように…！

落ちかけた日が斜に照しかけるなか、僕自身の主観をうたいこんだ、

芸術上の妄想に耽られて、君はドールだよ、ペットだよ、

いま、僕のエログロな旋律、孤独、沈黙、蒼空の類ない純潔を破裂させて！

嗚呼死刑！ それでも五、六ヤードは前進させて…！

Riverdaleは巨大な豪邸や公共施設、

地下鉄、通勤鉄道、およびハドソン川の眺めのある上流階級が住むエリア、

かつてはジョン・F・ケネディも住んでいたみたいに、

僕等も相撲しようよとりあえず真夜中のアスレチッククラブ気取りで！

3 川柳 その一

会社

管理職 女子にオジョウで ぼくコゾウ

b y え? どういう…。

先にやれ やったらやったで 後回し

b y たらい回し

部下棄権 説教半ばで ふと危険

b y ムシのしらせ?

ゴミがある ちりとり見せて とってくれ

b y あの粗大ゴミはちょっと

明日まで いつまで経っても やって来ぬ

b y 架空取引

帰りぎわ 言った上司が 帰ってる

b y そして今朝道凍ってる

対策書 同じミスして 基礎知識

b y くりかえされる喜劇

手順書に クレームのことは 書いてない

b y その後こってりタンシチュー

不況でも 見える不評は もろに出て

b y あ、あと負傷もね

報告書 エイズのように 蔓延し  
です

b y おお神よ! スキンはないの

上司から ああしろこうした ダメだ!おまえがな

b y 静止画像

まな板は 言い訳できない 過去の鯉

b y 鯉はすでに見失ない



## 官能

- アーティスト (夜には)電動こけし アスリート〜〜〜 b y まあ、寝るぽ
- 茄子を買い にんじんを買い 未亡人こけし買い b y オリエンタル・マジック！
- 二十センチ エロでもバカでも醜男でも b y 外国人にいかない所がいい
- スリーサイズ サエバリヨウには わかるから  
すウ b y 毎度おおきにちりがみ交換で
- 蠟燭を 何に使うの(と息子に聞かれ) 妻が照れ b y 夜肝試しをするためだよ
- 「あんた、また」「いいえ、倅が」「なに、息子！」 b y こわい話だ
- パワーアップ ぼくがするのは バカUP b y 急上昇する↑ おまえ本気
- すっぽんを たべたらほんとに ふじさんか  
いBABY b y 富士山よりいささか低
- 切れ込みを えぐりこみという あの時代 b y あしたのSHOW
- 納豆で 熟れすぎた蜜桃<sup>もも</sup>を 思ひ出し b y 三冠王
- オモラシも 裏を返せば 気に入った b y お〜〜い！粗茶
- 大相撲 とりたいはずが 猫騙し b y いや戦法だよ/セン法？

## 勤勉

- おじいさん 唄まちがえて またはじめから b y ウォーリーをさがせ
- 中国人 ドラえもんよんでも 笑わない b y 中国語の字幕
- 掃除して 御飯つくって (塾の)お迎え行って b y そして、会社に行って(泣)

正直に 回すネジでも すりきれて

b y がんばってるよ、おまえ

まあねといい なんでもといい そうねといい

b y 人間だいたいこれねといい

ヒアリング ここぞとばかりに いやリング

b y 猿は木こり

カラオケの 止まった画面で 「要するに…」  
ウワー

b y 泣き歌ヤバ歌シュビドゥバ

万歩計 落として歩く 当社二倍（比）

b y 足攣っちゃったよおう

リストカッター フトーコー ウルトラセブンかと言い

b y 悩んじゃダメです河童の屁

ジョウハウ通 むかしは賢い いま必死

b y 時間喰っても書き喰うな！

眼鏡みて ペ・ヨンジュン 目から鱗と妻が言い  
り

b y おまえが見てるからな、とチク

勤勉も イヌならえらいと 父親の眼

b y でもその席ポチのだよ

## 恋

はじめに恋と呼びしひとの昼澄みゆきぬ

b y 初恋

夕あかり行く方を思へば恋訪ひがたき

b y わたしは刑事？

1 3 7 3 8 解読は抽出  
書け

b y ふつうにラブレターを

しろい便箋に舟をかこう帆を張れば裂く

b y さら☆さら

ぬばたまの泥土か死の側か臨終の際か

b y 恋は無重力、愛は重力加算

ね、黒髪は地味な人ほどうつくしい

b y やまとなたでここ

恋をして みや 宮殿のいりぐち おみや 迷宮入り

b y ファッキングガム宮殿

好きだよと 言ってふたりだ ウフウッフフル

b y 襲う根性まーたくない狼

恋をして ストッキングの 膝力 b y 足をよおく上げるんだよ

恋したい☆ そうね、ボクもさ、出会い系 b y 騙され系

ずれてます！ 恋する気持ちは 二重奏 b y 何言ってんだ、ワタシ

恋をして 葛藤×幻滅×冷笑 ネガティブモード b y 飛べ鳩、とわに幸かれ

## 政治

や>、ぬるきもの頬につた心<sup>ほ</sup>底辺の人 b y 民のいないまつりごと

「差別する！」「報道する！」「炎上させる！」 b y 三段論法NEWS

あれはfake なるほどmistake ゆえにこれはcase b y 評論家の発明

助けてとるへば蹴りあげる国の理想 b y 古今夢想

血税で豊かな国とは——滑稽な！ b y 暮らしにズサむ

訛なつかし政治家にふとやさしい気持ち b y 国民の代表

マスコミは マスがいっぱい 込み入って b y しずかな窓拭きさん

民の声は タラの声…とおもう 神の朝 b y みんなタラコちゃんLOVE

総理大臣 だれでもいいや 正解ジャポン b y この国は支配されてるデス

一億批評家 一億いうバカ 円をつけるぼく b y 蟻とクマギリス

煙草税 儲けが減ると 人も減り b y ジュース税つけろ！

無党派の 女子社員が わたし辛党 b y ぼく甘納豆・え、ぽかり

## トイレ

「…あけてんだよ」 女の前で 何故いわぬ

b y ていうか、あけとけよ

締まりまーす、と電車の扉 真似するオレ

b y ほんとに締まりまーす

蚯蚓腫れ 小便したのは大分前

b y 墓場で口はとじる男

トイレにて 犬が用足す ぶっといで

b y 躡わすれた飼い主

犬がきて 用を足してく マット干す

b y 洗濯夫デスヨーッ

イワンのばかをよみながら「言わんの…ば・か」

b y ぼくは言う ば・か

お手洗い 思わず気がつく おれTバック

b y コートが凍っとる！

落書きを見ながら全部ウソだと笑いたい

b y 会社のトイレ

水を流す時 三つ四つは 恩の数

b y 地下鉄から、さあ地上へ

トイレの日 11月10日 七変化

b y オウンゴール！

国は金を剥ぎ取り/俺は紙を剥ぎ取り

b y さようなら塩分！

ファイトする 気力もポーズもなくトイレ  
！

b y 出て来い、トイレの精

## 事件

むずかしい記事はなれてく人やさしい花束

b y 殺人事件

けだものくさき脳味噌にストローをいれて

b y その前にメスいれて！

被爆者よ、Y樹林の遺伝かな

b y 男女、そして

人を殺すとみえないほどをさなひ胸もあり

b y 何故が連鎖する

ヒーローだったのね、記事とネットに開きあり

b y 盲目と開眼の点滅

カム・ヒアといふ底なし沼とはとほめいな

b y 真相

裁判員 あわててきいて サイバー IN?

b y 近未来ON

石川V よろこぶうちに 父さんウィッ

b y あなた・・・ そろそろ

朝起きて ドアを開けると 犬驚く

b y おまえの庭はひろい

ふるさとの 木漏れ日減つて 只の闇

b y 大仏眠らず

欲しい帽子があるの 言ってごらん シルクハット

b y 消えてごらん

しづかなる真昼音なき空の鳥

b y 会社という繭の中

## 学校

トンガリコーンを重ね過ぎて倒れた時刻

b y 川柳幽玄派

教科書の偉人が最新流行ヘアスタイル

b y らくがきする教室

何故だろう 屋上へと のぼってしまう

b y 尾崎豊も聴いてしまう

サングラス 似合っているかと ママチャリで

b y スカートはきなよ、牡!

学校生活 最大の謎「青春ってナンナノサ」

b y 何にあたるんだろうね・・・

ノルウェイの森 なぜかノル森と茶化すクラスメエ

b y イエー、チェックメエ!

火事が起き 窓に身を乗り出し 何事もなく

b y 学校ってふしぎだね☆

ランドセル/背広とパジャマの 似合う現在

いま

b y 懐かしいのが青年さ

一文字がはじめられぬ小説もあり

b y 十四歳

あっさりと 不良になって、ある日暴走族で

b y 仕事か、うーん、そうか

フリースなんて、古いッス! とPlease\*Freeze

b y 語呂あわせばかり・・・

卒業写真 どこかになくして/ぼく何処にいた

b y 雨やむでなし、嗚呼梅雨しきり

## 食

大阪の街いいにほひがするとホームレス

b y 汚くない、さびしい……。

中国産安けりゃいいがフグは嫌  
国

b y フグでもいいよ、死にたい

泣けとごとくに美味しいお粥食べた夜もあり

b y 拒食症一歩手前のぼく

死んでから飯はくゑぬ関所あらぬかも  
せき

b y ナンテ・ネ伯爵

食の不安 燭の提案 イ色イチョウ菓

b y 科学は魔法を使うもの

衣食住ガイコク産、ガイコツ産

b y 道化師は夜うたう

台所 ピオーネかよと くろき死者

b y バルサン焚いて！

「コーヒーより、お茶派だね」とビールのむ

b y 飲みたいカチヨー

エコの時代 あZらく言い掛けて エコエコノザラアシ！

b y アザラアシ！好き

ゾウ亀を どれだけ食べれば こうなるか

b y こち亀にきこう

チャーハンは すぐにつくれる ほらねチン  
。

b y 大尉、敵がこんなことを……

本当に 食べたいものは 何一つなく

b y ひるがえるものひとつなく

## オリジナル意識 ヤン・コハノフスキ篇

---

生年月日不明～1584年8月22日。ルネサンス時代のポーランドの詩人、王室秘書官。折衷主義哲学（ストア主義、エピクロス主義、ルネサンス期の新プラトン主義、そして古代とキリスト教を結びつけた神への深い信心の融合）の代表的な人物でもある。

太陽光線は、火山の口から燐光の見えざる点となって、

と、ナイチンゲールは、薔薇の磁気、

この黒い森の指揮者は頭上ラブソングを贈る

はいはい、仮想舞踏会、シャンデリアが点灯。

と炎は優雅な破壊、逃げ惑い、焼かれまい

幻想のコーナーでいく筋もたなびく煙り、白…

啄木鳥が打ち鳴らす、ばらばらと日がな一日けたたましく、

メロディーのエコー、まさに生み出さるべき灼熱の火の地獄。

あなたは移り気な小川に生える緑色、

穏やかな微笑、夕昏れはみんな起きろ！早く起きろ！

土龍も熊も蛇さえも、服を着た、あなた方は驚いた！

ヨモギに花咲く狂気の沙汰！ ありえないタンゴ！

強く甘い優雅なピストル、パンパカ！パンパカ！

アレグロしたり、剣劇を交わしたりする、チークタイムに匹敵！

火を丸めると視界は分裂し超越し、ひとつの色彩の愛となった、

シングが始まる、フォーユウの至高点――。

\* St. John's Eve Prelude



アドルフ・ヒトラーは、アトランティスの調査をしていた。それは未熟な瓜にたかる大きな蟻に頭を齧られでもしたような起爆剤だった。四本の後脚をカメラで撮影するように、巨大ないるかが飛びはねでもするように感じられた。遠景は沸騰した。ねりあるく白象のごとく、ふくらんでゆく風船のような彼の襟元の下から、それも何事かを大声で吐き出すたびに、彼には悩ましい幸福な荘厳の球形である火星が見える。――四重の非常線を張って、トラウマの抑圧やネガティブな自己イメージからの解放、反省と勤労の象徴が大循環し、何万、何十万という程多数のものが自治協同の生活をするうちに苔むす。そして巧妙に冬越しの食物を貯蔵する。しかし彼は管理していたわけではない、ハリウッド映画に出てくる恐竜のようなどよめきにわきかえりながら、続けざまに放たれてゆく戦略に、それも酔狂に毛でも生えたようなさざめきに、少しずつ土の器と化していった。その器は埋められ、そのかたわらには、わびしい木影があり、その根が器へと蛇や蜈蚣や蔓のように蔓延りながら、巻き付きながら、矛盾だらけの政策を炸裂させた。ふっと洩れる光に浮かび上がる死んだような静けさ。部下たちはその石堀の連なりのように引き立てられた静けさを恐れた。時の流れに取り残されるのではないかと恐れた。たとえそこに誰もいなかったとしても、だ。それは蟻によって黄ばみ変色した脳のためである。脳は白

い棘を立てられ、無益な顔をせざるをえなかった。彼はその大きな蟻に脳という王冠を差し出した。自己防衛と、反時代的なダイナミズムが彼を血迷わせ、彼の体重を根こそぎ奪っていった。彼は無残によくよろめいた。

彼は時折、老人のように動きがぎこちなかった。血走った眼をしながら、怯えていたのもそのためである。彼は幻覚の中にいた。走馬燈のように、色々の顔が、色々の失敗の歴史絵巻が、宙に展開し、さざ波を浮かべながら、腹の底に殺意となって表れた。しかしその殺意は同時に、みずからを夜にした。蛇が皮膚を脱ぎ捨てようとする時に、無臭になりながら、その実、一番なまなましい瞬間であり、しかも、もっとも弱く生命の危機を知る大一番であるように。彼はもちろん妄想に抵抗した。蟻を指で押えつけて殺そうとした。潰せない。しかし牙は刺された。彼はもがいた。しかもまた這って来る。そして、痒い。そして彼はまた自分が孤独に溺れつつあることを悟り、気が気ではなく、吠え狂う虚空しかないように感情の琴線はよく震えた。心はよく腐る球根のようなものだった。しかし彼の脳から発生した電波、波長、あるいは妄想圏内では、蟻の巣という名のコロニーを形成し、段々深まる春のように、カフラー王の横顔が見えた。読まされる重要書類はみな、蟻の足跡のように見えた。次第に文字が読めなくなった。後は手渡される書類に疑心暗鬼になりつつも判子を押しただけだった。

彼はいつも誰かに騙され、いつも誰かに裏切られるような気がしていた。

狂気に吞まれながら画面を青く変えてゆくアトランティス。蟻は、そこで生まれたと嘯いた。蟻は、彼にだけ優しい声で、よく分かるように語り掛

けた。悪魔だった。彼の心が支配された瞬間だった。永い間、彼の耳を群り湧いてきた国家は、ちりめん皺のような無数の蟻のフェロモン青い糸を引かれ、炎天の生き肝取りした。彼が人体実験をしたのはそのためだ。彼は自分の肉体を知りたかった。しかし偏頭痛がし、理性批判の方策を提供しながらも、遺伝子組替えをする。彼の超越性は燃え盛る炭火のようなものだった。暴力が容認され、差別が土台石となり、象徴的価値たりえる自分の神秘化は見事な吊り橋となった。彼は、自分の身体の何十倍も大きい蟻になったような気がした。そしていつしか、彼は傷付き倒れた同士たちのように血染めの包帯をまとった。彼は蟻だった。隠れた月が迫り、黒雲が迫れば彼は空から落ちてきたオルゴールの音色とともに侵略を開始した。それらの中で同質化する天井の板がピンと自然にはじける音をたてた。蟻だった。否、彼はもう身体中、隔靴搔痒の蟻の塊だった。よくはじけるポップコーンのように彼はよく気絶した。また泣いた。情緒不安定だった。説明できないアトランティスへの羨望は日増しに強くなり、超越的存在がパラドクスであり、エクリチュールが少なくとも同時代性と仮定できる音楽のオタマジャクシの小節のように移動した。滅びの時は確実に、それも日増しに刻一刻と近づいていた。秋の夜に海鼠にでもなったような気持ちがあった。でも無感覚ではないのだ。水母なのだ。痩せたけものなのだ。しかしそのような感覚はやがて去り、破産や失恋の為に自殺をすることもできない蟻には、もはや何も語ることもできない。同一性の保持、論理性

の確保は至難のわざとなりはて、生の感覚さえも希薄になり、自分が書物の登場人物でもあるように、知の産物に思えて仕方なかった。百万の衆生を残害する時代に純情多感な青年が翻訳した同族意識は薪の切り口の如く鋭利をきわめた。個体の甲と乙との見分けがつかなくなるころ、彼は巨大な蜘蛛の巣のようにたくさんの亡霊を従えていた。あるいは、操られていた。海が脱ぎ捨てた夜の遺品であるワカメのように眼の下は黒くなっている。蟻のように黒くなっている。彼の目の前にはいつも死へと向かう重い黒いドアが見えた。主観性の問題は再生産され、自己充足性が支配的な社会階層において存在しないカリスマ的指導者を求めている。彼は消しゴムそのものの記憶だった。自由という名目のもとに没意味的な文献実証主義に陥ち、いつも、老人のように手が冷えていた。彼の肌には老いのようなむしばみが食い込んできた。蟻だった。悪魔にすべて乗っ取られた瞬間から、それは無力化からの脱却を試みる政治的な観念である。もはや罪悪感に後ろ髪引かれることもなく、ひたすらに磨いたナイフのように刺す相手を探すのみだった。砂漠という夜の血まみれの壁の前にながら、彼は、その相手がある日知ってしまう。彼は婚約者の膝にすがって、殺したいのは自分なのだ、殺されるべきは私なのだと呼ぶ。汚染されているのだ。もう何もかも嫌なのだ。壁に蟻がいる。蟻は、蟻が蟻ではなくなるということにとっても敏感だ。蟻は、処刑を始める。

## スポーツ

---

スポーツは娯楽と言うが、

勝ち負けに妥協は許されぬもの。

ユダのようなしたたかな沈黙に青ざめ、

緊張に首を絞められ、

どっくんどっくんの心臓を抑え、

欺瞞と虚飾を飼いならしながら、

前に進む心境。

進まなければ、敗北者となる恐怖。

認識が紙くずとなる、灰となる恐怖。

そして実のところ、日ごろの行いしか反映されないという恐怖。

敵やライバル、そこにおける友好の無効性。

絶対的他者との相反。

スポーツは、

あるいは教育を離れたところにある、

肉体にはいつも、

殺戮的なとしか形容のできない爆撃機的毎日のあわただしさがあり、

挫折がつきものの人生で、

それをどう処理し肥やしにしたかで、

少し分かりやすい言い方になるが、

人間の一生のカッコよさとか、

やさしさとか、が、すごく変わってくる。

大人はずるいだけじゃない、

大人だって、子供のように夢を見ることができ、

いつまでも眠れない夢に苦しむこともある。

僕はずっと勝ち続けてきた！

と、言えたらどんなにいいだろう、

もちろんスポーツ選手でもないし、

そんなスポーツ選手もいないが、

その時の真剣すぎるうえで生まれた

含羞や卑屈さを見せられない一瞬を、

笑い話のように揶揄できるとしても、

見てみる、

人はみんな自分の世界を持ち、

そういうのを知っている人の眼は、

本当にどこか厳しくてむずかしい、

愛の成立を知っている。

それがナルシスであると見破っても、

そのナルシスは人のマリア的な一部、

あるいはキリスト的な一部にある。

イジメとか自殺、

終わらない労働、

わけのわからないノルマ、

社会の無意識のうちにある暗黙の了解。

これを蟻と称するのは、

けしてありきたりな表現を用いているからではなく、

人は誰でも働かねばいけないと言うがためだ。

そこで僕等は暗闇を知り、

まれに見えてくる望みやひかりをたよりに進むのだ。

蟻を馬鹿にするのはよくない。

馬鹿にするのはやはりきりぎりすだが、

現代のきりぎりすが蟻であるかもしれない、

という可能性はけして捨てきれない。

努力を怠って、うまくいかないことはあっても、

努力をして、失敗の確率を減らすことはできる。

僕はそれをプールの水の色、

川の色、

海の色と感じる。

浅いものは何もうつさないが、

ふかいものは鏡のように景色を反射する。

その色は幾層にも重なる多彩な空気を広げ、

たとえば、孤独と忍耐を僕に考えさせる。

生々しく眼を求め、

触れたことのない、いかづちのようになる。

死の瞑想が喚起するとき、そこで、

感じる諦念にみちた腐臭がすれば、それは嫌だ、

品性も、貞操も、矜恃も、そこにはないように、

考えてしまう愚かな人達が、嫌だ。

死なないと思っている人も嫌だ。

弱い人をさらに弱くし、

卑しい人をさらに卑しくする。

死ぬということは、罰されること、

当然すべてのことには原因があって結果がある。

いまなすべきことから目をそらしていたら、嫌だ、

そこまで行きついていない人の浅い物の考え方は、

動物的情念から脱出できない人達は、

出口を求めることのできない連鎖の地獄を、

みずからの保身と平静のためにつくりだすのだから。

愚かな人達は、

内面への深刻な危機を、

墮落とかんじられない美意識の欠如から、

あっという間に貧困になる。



幼い反抗の疼痛を隠すな、

その芽生えがルサンチマンを生む、

でも、見誤るな、

自分が困っていればすぐに略奪を開始する人になる、

その先には復讐しか待っていない。

その先には、つたない道、狭い道しかない！

責任を平気で他人になすりつける。

社会における自分をいたずらに受け容れる感受性のなさが、

世の中を監獄たらしめていくさまの地獄が僕は嫌だ。

スポーツ的な汚らわしさを汗にして流す一瞬は、

もちろん、温泉に入って汗に流すこととは別だ。

前者は屹立した頂点的なものへと向かい、

後者は調和というなまぬるい世界へと向かう。

僕はそういう前者の一瞬を、

いつまでだって修行僧のように求めている。

生きる上での勝利と敗北という、

二元論を骨の髄まで叩きこまれた人なら、

本質的に人がひとりであると思い、

その始点から放射状に展開されてゆく、

世界との折り合いをつけようとする。

様々な顔が闇のなかから次々と現れる、

社会は、僕等のスポーツが見せた非情な一面である。

情報ごときに四の五の言う前に、

目の前はどうした、と語り掛ける。

逃げられない、

立ち向かうしかないと思った時の僕等は、

おそろしく強い。

自分を成長させるためだと、

そこに理由なんてなくていいと考えられた時の僕等は、

老いる精神などないのではないかと思えるほどに。

僕は死刑台に立たされよう。

コロシアムの戦士として戦おう。

一見センスがよく要領のよさそうな僕も、

ばりばりの体育会系であり、

それとは関係のないところでは不器用であり、

そういう僕がこれまで何とかやってこられたのは、

僕の完璧主義に対する一つの傾向がある。

それは昆虫採集的であり、そこにおける標本的であり、

百科事典を眺めるような心理である。

断言しよう、それは機械仕掛けの神へと至る道だ。

そしてそれは、実は、

スポーツの内部にひそんでいる縮図なのだ。

そもそも僕はスポーツを数字で理解した。

数字に強い年齢は関係ない、

問題は数字に目途を持ち、暴走と飛躍をも、

なにごともなく処理してゆく数字に対する強さが必要なのだ。

僕は野球選手の肉体やその運動から理解した。

労働をとおして働くことを理解した。

でもお金のために働いているわけではない。

お金のために働いていることがあるとすれば、

それは不幸だ。

それは不幸だが、そういう人生の受け取り方もある。

お金を貯める人もいる。

お金を使う人もいる。

でも僕等は何が幸福であろうと、たとい不幸であろうと、

階級闘争の歴史や、権力への階梯から逃れることはできない。

僕等は動物であるか！ 否か！

僕は否だと思う……！

それは動物的な世界のものであるにすぎない、

動物的な世界から、魂の世界へと進捗していけば、

それはひとつの理由であり、ひとつの理屈と思えてくるのだ。

あらゆることの厳しさから真理が見出せるのだ。

僕等はたしかにそういうものと一見縁遠いが、

あらゆることには体力を必要とし、

精神の鍛練を必要とする。怪我や病気を恐れるのは、

その理由がわからないからだ。だが、その厳しさから、

僕等は学び取る。みすぼらしいピエロみたいな顔を、

浮かべてはられない。

この運動はたえずめぐりつづける、回転する、

そしてその理由が原始的な時代にも、現代の高層建築のなかにも、

見出せる、進む、回転する、動く、前に進む！

もちろん僕は社会で生きる上で禅やヨガをするべきだとか、

言っているわけじゃない。

釣り合いを保てと言ってるわけじゃない。

僕が言っているのは、

あくまでも、自分のコントロールと限界突破のイメージ、

如才ない愛想や天真爛漫さだけではわたってはゆけない、

スポーツの厳しさが与えてくれるもの、

それが、救われないもの、うまく呑み込めないものに働く。

太鼓持ちや卑屈な犬のような人格の人にだって、

僕等は接してゆかなくちゃいけない。

それに呑み込まれれば、嘘しか生まれてこない。

いや、すべてが嘘だとしたって、

そこから本当に噛み砕たかれてなお存在し続ける、

愛ややさしさは生まれてこない……！

でも一步一步階段を消しながら進むことだ、

スポーツは、僕における知的遊戯の世界の、

とある一瞬の幻の頂点的映像だ。

それでいて、スポーツ的に僕は考える。

天才のふりするより馬鹿のふりをした方がはるかに楽だ。

一番目よりも二番手三番手の方がマラソンは絶対にうまくいく。

プロレタリアの小説で、

生きたまま埋められるシーンがあるが、

ちょうどあんな感じ、

埋められてみよう、時の中に。

僕の味わった屈辱というのはけして、

スポーツだけのものではないが、

あんまり人には言いたくないような過去が背後にあるのだが、

思春期特有の複雑怪奇な葛藤がシニシズムを知り、

必然的ななりゆきで文章における強迫観念を知った僕は、

この世界が修行場であると無意識に思ったみたいに、

詩は、厳しいスポーツのようであるだろう。

否、あらゆる芸術は勝ち負けであるだろう。

カッコよい人になろう、やさしい人になろう、

立派な人間になろう、しかしそれでいて、

アンフォルメルであろう、

最大で最高の生と死の一瞬であろう、

前が見えない中をそれでもやみくもに進もう、

そしてそれでも、勝ち負けであろう……！

世界は腹立たしさと恐ろしさのうちに

大きく変わろうとしている

いつまでも風に

ゆられているわけにはいかないが

沙漠には絶えず模様がつくれ

組み合わせの難しい二つの感情が

積み木のようなものを撒き散らしている

いつまでも不思議な気がするのだ

責め具のような電話も

拷問のような二日酔いも

亡霊のいそうな暗い袋小路も

生の喜びも

権利の自覚も持たないまま

プスウと空気が抜けて行って

紫陽花の色が衰えていく

あざやかにゆるやかに

微笑みはその印象を変えていく

冷たい絹のようなものも

撃たれた小鳥のようになる

口や鼻孔や眼の中に

転がりおちる水晶玉のすずろかな気配がし

かすかに遠慮がちに

夏の樹の皮を剥いたような香りを

何故残していくのかと



人生の意味なんか知らない！

---

スロ／ロ／モーション

スロ／ロ／モーション

注いだあと／この夏が終わる

亜哀愛悪／ああああ

( 穏やかな湿った風と物の影の透き間 )

遮断機が降りたまま――で…

踏切の向こう側――で…

ミスタブウウムマッキントッシュHJのディグナム！

A…B…Γ…Δ…EZ…HΘIKΛMN

ΞOΠΡΣΤΤΦΧΨΩαβ

γδεξηθικλμνξο

πρστυφχιψω

僕は確実 (に、) …

もっと確実 (に、) …

―――ねえ、

……（鐘の音が、月に波紋起こした）

疎遠だったって、

曖昧だったって、

公園のブランコはひとりで揺れまくっていやがったし、

レンズは夢の中で白くなりやがった…

“祖国アルトコロニヨキ暮ラシアリ”

……金を巻き上げるためだろ、

それですぐ天国に行けるって嘯くんだろ、

みんな天賦の詐欺師かペテン、

階級の差別なしだって、神への背信かい、

闘争本能は名ばかりのまずい飲み物なのかい。

……快く、魅惑的な化学組成／

水溶性／感覚からの愛への嗜好／

無意識のひきつり／

柔らかで軽い花をいまつかまえて／

鳥の羽根にして／強壮剤にして／

議論にして／ダンスにして／

そしてすぐに終わらせて／

遠くのもの小さく見えたって！　ぐるぐる、じんわりと、  
また深く息を吸って、近くのものありのままよりも何故か、  
ずっと大きく、ああ・すごく大きく、ぐんぐん、ばかすか、  
とてつもなく…とてつ…もなくさ…大きく見えたって！　て！

………タイプライター、テレグラフ

―――ねえ、

（分ニ応ジテ）

………露骨に不機嫌な口調で。

歯車はかみ合わない――（くるくるとまわる、）

噛み合わない噛み合わない――（くるくるとまある、）

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
愕然として、僅かなズレさえも許せなくて、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
あわれもぐりこむ穴のそれさえも、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
いま発する声が追い付いてゆかない――

alcohol (は、) もう飲み干してしまったんだ！

alcohol (は、) もう荒々しい同じ言葉の繰り返しなんだ！

本当にゆっくりと眼の前を落ちて――

本当にゆっくりと眼の――

――ねえ、

ブラウン・ペーパー

漫画雑誌をめくると／褐色包装紙

以位依偉困委威尉意／iiiiiiiiiiii

ぐけ げ／ぐ ご ご／

具毛 毛／愚 誤 碁

( 神経を切断して空間を膨張させる )

否！ ありのままなら――真実…

否！ おおきいのなら――魔法…

A…Б…В…ГД…ЕЁЖ…

ЗИЙК…ЛМНОП…РСТУФ…

ХЦЧШЩЪЫЬЭЮЯабв

гдеёжзийклмноп  
рст уфхцчшщъыь  
эюя

誰だってわかるだろうこれだけは絶対に不格好だって、

伝達される上であまりにも不自然だって奇妙だって、

——（フ格好）だっ……ヒヤ……て！ て！ て！

——（ブ自然）だっ……うわあ……おお！ うわあ！ おお！

僕は确实（に、）…

もっと确实（に、）…

———ねえ、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
「明日は何処かへ行くよ星雲の集まりだからね。」

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
「雛型だからね。ステロタイプだからね。」

……………（歪んでいった）……………

素肌あるところに特殊な下着ありさ、

パーティジヨークもお手の物さ、

愚かで派手で悪ふざけなこれ見よがしで遊びちらし、

俺はどんどん孔雀みたいになってった…

ミスタブウウムマッキントッシュHJのディグナム！

ディタラース！ スウィーブニアコニイ！

…出鱈目な、——確信ありげ。

———ねえ、

“祖国アルトコロニヨキ暮ラシアリ”

…………王侯貴族みたいだね、

そんな刺青でどうするの、赫々たる未来かいDJ！

高位高官みたいだね、

お互い触ったり撫でたり、こむろがえりして！

最後はいつも猛然と減らず口！

「お前の才能がないだけじゃん！」

(お前が何ひとつやっていないそれだけのことじゃん！ )

スロ／ロ／モーション

ナイ／イイ／タイ

スロ／ロ／モーション

ナイ／イイ／タイ

髪は燃えあがるみづうみ。

指が押しひらいた割れ目から

数行のホメーロス。

をゆび

岬に樹てる一本の指。

ときをり蛾の様にとまりきたる、

溢れる夢の絵の具、垂鉛屋根を陰囊の塔とし、

あえかなる夢の破片、殆んど蟻の様に群がる、

風に飛散る夢の溺れ、凹み続ける胸の肺、

そしてぎざぎざの此処が何処だかわからない、

ごみ

雪は乾ひた塵埃のやふに舞ひあがる。

ひと時刻の雙つの世界へ、器官的飛翔。

うかがつておりました。

それではなかへ、どふぞ、どふぞ。

／なにかおかし／い／ぞ／

や／なに／か／おかし／い／ぞ／くらっ／く／

らっく／と／らっく／と／らっしゅ／くらっ／く／



ライト

燐光はもう凍つてゐる。

接吻せよ鯨の脂肉、鳳仙花、パナマ帽、バナナ、

ジュズダマ色のつゆのしずく、

づぬづぬだまだま自瀆のこうもりを忘るる

ふちどられたワンドの向こふ、

つりばりでパンを与えられ、

秘密の唄をうたふハンモック。

渦を巻いて吹きすぎる痙攣ったやふな蛇紋、

そは他界の月かげの様、

狂エエる喜劇の宇宙的反射鏡、

伽藍堂な感性の毛むくじゃらの縄がきれるまで

銀貨さながらの鱒はひらかれても

ノ

叩ツクされた風景のまま、眩暈。

われは蜘蛛の巣あをざめた夜の銜い。

——金属の液体さながらに。

（二十四時になつてすぐ僕は白銀になつた、

てろてろ、だ。てろてろは、

うるわしくとうめいに疾走する魚群のやふに、

僕をさかさまにとらえた。)

(地球人の勉強をした。

夢は異次元の旅だ。アルテミスはペドロ・パラモだ。

ホスロウとシーリーンはド・リラダンしている。

ケム・ナンしているか。町は灰色で黒は建物、

これを詩というのはロドイダム・プラッポか。

ニザーミノワイユか。)

(僕は変な女にチューイングガムされる。

「ペドロ・パラモだ。」という女の声は、

ぎざぎざの鼓膜に刺さる。脳髄が退化する。

冷凍睡眠する。クローン羊する。

太平洋する。僕は途方に昏れている。)

(エガカレナカツタ書物二、

「ペドロ・パラモ」はよくじょうのみだれ……。)

(ホスロウはアメリカのカリフォルニア。

シーリーンはブラジルの。)

(エガカレナカツタ書物二、

「ド・リラダン」は原始的なエクスタシイ…。)

\* 「ホメーロス」という語は「人質」、

もしくは「付き従うことを義務付けられた者」を意味する。

6 初期短歌

その 1

人をかへさぬ波がありいざ心うばへ遙か遠きくに夢のしろ

ふくい

馥郁たる花の魅了たとへば夜のかをり誰もいないまち

加護なくあらん！ 需要と供給もそれ神の視座グラフティ―！

ティッシュ受け取りながら会釈たをれる屑箱さうさ資本の残骸！

ひとひらの蝶の花弁おちにけり衰えをしらぬ闇のかなたに

宵闇しろくあをいはな揺らぎ立つ宵闇あをく蛙こぼれた

ギリシア

廃れたる園や古代希臘の豎琴を凝視むがごと積乱雲きたる

大きな巢穴へびよんと飛び込んだ兎によろり蛇のわ・わっ・わあな！

きり や

挙げ出したら際限がなくて嫌になるほど あんぽんたんで あんぱんまんで

まじな あへんくつオーケストラ

躓いて気圧され空虚しく戯れた呪い阿片窟管弦楽

ひとしづく

横顔におさへがたきはやはらかに一滴のなみだをこそおもへ

かけひ カスタネット かせ

筧は砂時計か二枚貝か我はこひしき枷はなつかし

えきすとらモノログあどりぶハスキィゆうれい口ゴスしゃがれボイス

つかみもこんどに

マリソルのセルフポートレート我こそ七人の敵「月、火、水、木、金、土、日」

まつよいぐさ こがね

露めきたる待宵草は迷いの草や黄金のゐろもあかく錆びなむ

おちは

待宵ゆのろのろねむる声かやあ鳥のこゑはあ落葉のこゑ夢のきこゑ

誰にも聞こえないように蹲り泣いた場所 あまやかな 楽園の記憶

そのはるけさかそけさをもってしても夜は明けなく夢は呆気なく

まち

あい

ぐつしよりと濡れた都会の廃品利用ウ神の大きやかなる感銘にて

アルツハンマアア

さう思ふ解説建設連合会！ 駭然愕然！ 若年性痴呆症！

いわやど

王様の耳はロバの耳うがたれたあなは天の岩屋戸なぞも

でもやらかいし、ちのくびもあるし、つんとすましているぴんくの蓋だし。

まぼろし

素肌と水のさかひ目めこうすゐが僕を酔わせる夢幻のやうなゐろ

でみず

われわれは洪水を忘れざらしむ一一橋桁に権威主義者のくらき俳・

ハツタリ

箸にも棒にもかからぬ自分にひたすらにみたづらに唱えし大言壮語

アピールせよ！ 地球征服も可能ウ釈迦に説法ウ自己暗示術

はんぼいてん

中古車販売店は洋楽を好む狐に化かされ煙に巻けないクラブトン

よわいはたとせ

オープンカーとコンバーチブルいまいち理解できない年齢二十歳

女性解放を訴えるフェミニストが盲目なら蛙崖飛ぶように信じる

くるま

池へダイブする自動車みたいにいざ金槌で割らる虫の音かな

審美眼ためすごとく並べられし新聞の短歌ひとつぶの梅干し

グレープフルーツは葡萄なんだよって嘘でもいいから食べたい絵

アンタ死ぬよと占い師はいうけれど のろいものろい かめののろい

かけてみたならわかるかな ありんころのきもち こどものめ むしめがね

おもひ

ガンダーラの歌みたいに理想ある人がいるのなら夢を叶えよ

たまき

砂浜は今スパンコール十字架あり心臓あり環あり

わすられぬえいえんのこだまをむねにやどすことゆめにきざまれたばしょで！

うしろからつきうごかされるようなめいふくをいのるばしょ「ともだち！」

スイミングスクールの宣伝「およげない、きみがみずをこわがるかぎり！」

スイミングスクールにんぎょひめ恋のおぼれめを見透かすいきつき

懸賞金その名を忍ばるゝ競輪そのスピードを携えド派手にぶつ転ぶ

ホアジンガンラン

ざる蕎麦の早食い選手のおおよそ鼻から 噴 出 と独りうなづく

不山戯た話が罷り通る風を見廻し！…さてこ そ 山 へ の あゆ み……

病める子は旅をもとめて三千里 南船北馬レジデンス！ 東奔西走 B R E A D

日も暮れて電報を打てり「アシタハレ、アシタハレ、アシタコソハレ」と。

おい いぐざ

さでござそ水がぶがぶとやれる俺ら戦はこれがら手柄立でンぞ！

いばり

ラボ

東の空、尿する、茜だつた。桃の実われる、研究室だった朝。

釣り具屋をめぐる冒険「どうしてあすこにお魚はゐないのでさうか？」

こなす メロデエ

けふもまた弾き熟す旋律とXデイもののあはれ夢の浮橋

この水はきっとパステルブルー膨張らんでいく寄る辺ない創造

すゝろかにドードーという鳥が現はれドードーとなりける

それは玉葱か皮を捲りてこゝろ香水のごと滲みつ浸りつ

いはんしゃ

黄なる缶をじつくり飲める飲酒運転者アクセル踏むか夜のあとさき

ななめ

斜線でもあるかのやうに老婆行くひかりとかげわかつ横断はづれの黄泉路

消印から探偵みたく場所を あまねくゆきわたる こいのかをり

ふつさりと、もあもあする、にこにこげだ、わあい、くんくん、おはなさいたね。

う こめつぶ

あかみ中華鍋あぶらひみて卵の米粒かぐわしき葱を見初めて

幼稚園バス来て風変わるサッカーのじやりじやりとした足音

ましろきかぜをかんじをりひとのはなしのきこえるかぜをかんじをり

フェアリーアナスタシア

きゝこゝきゝこゝ舟は行く櫂で行く漕いで行 く…聖少女羽衣幻想—

時間は君、白内障のたわむれさ、ニュースバリューは過ぎもゆきにし。

相撲った末にオレオレ詐欺のジャイアン！ モンゴルで君は誰に電話を！

あらくさ

マゾヒストは踏まれたい雑草のようにしぶとく逞しくエロティックに

あだるとびでお

獅子は我が子を谷に落す千尋万尋のA V的被害妄想かりる

機関銃の応酬にはにかみてにはかにも見る凍り付いたまなこ上ぐれば

パピルス文書ロールシャッハテスト起承転結ゲームデザイナー

そら

こころのままおもいのままかんじるままそうおもうまま青空が見たい

さみしいときはあなたのことをおもいだすからであるかないで夜

ねこがしにたぬきがしにいぬがしぬ交通事故に何故胸が傷む

ふあふわあとなでればトトロなる「すてきなねむりたりていますか？」

駆け抜けるフルスロットル高速機 流し撮りする まぶた残像

in a magical way

甲高にしろうかべた溜息をそらへかえすよ！ 魔法のよ う に

TIME さとゆれてかるやかなしよぱんおもわせるてんしのといき

魔法の音訪れ「むねがいたいよ！ としをかさねていろのかわるゆうぐれ！」

おべんとばこをもっていこ、ぎゅつぎゅつとくりつめかえろピクニック。

蓮の葉よ甲羅を出しぬる亀の子よ花はとんぼか猫のくちづけ

あわてんぼいそぎんぼうのなきむしこ君の名前はエマージェンシー

海開き我が決めれば明日ならむ何故かと言えは海へ行くから

しあわせ

わすれられないものがたりをはなにしていけたらそれがぼくの幸福

毒吐きて糸を吐きぬる蜘蛛の如おごそかにしばし富士を眺む

コック ビエロ

料理人はいつでも道化師の帽子を冠むるものさ献立表のどれもが美味しいと！

九官鳥の声聴く通りにて五官のともすれば交官

ブルバール

並木道でエッフェル塔とティータイム恋人の予感ノートルダムの鐘

りゅうとうげしゅ

屋形船ならぬ龍頭鷗首なんとはなしに宇宙戦艦ヤマト！

オ・プランタン

百貨店屋上、劇寄集戦隊ゲキレンジャー驚きてふと勸善懲悪このゆびとまれ

水芸見たよな風呂芸 水くらげ ぷくり浮かびて禿げるは河童

臨機応変の映画館「ポスターがかわることをなぜうわきといわぬ！」

目にも物見せる目から火が出る尻尾出るやってきたなと掴まえる

ふうぶつし

くたくたに疲労れて顎落ちる漫画S級目ン玉びよ～んの向日葵

タラップ う

汽船がぼうと霧の中よりあらはれた！ 乗降梯子おりる兎の死の鞆！

かばん

宅急便はポケットもて旅行鞆という名のあたたかき午後の陽射しへ

アスバラガス

ルソーの「蛇使いの女」に恋をしていつからか緑鼠に

こういしつ ころもがえ

更衣室を更衣と読めたなら何か変わったろうか夏のプール

ごらんぼくらのあさがよごされてるしんじていますか素敵な世界？



## What do you say to going for a drive? # AVEN1062

---

君と約束したドライブにかかった

カーラジオから見知らぬ洋楽が流れる

恋は歌みたいにわからない方がいい

2 カタカナ的試み“ハイク”

アキカゼノ ウロコオイハギ ハトドケイ

フキイルド ・ダンジョンスル ジュウロクササゲ

イテフチルトキ サヘズリノハヘンノ ヒナ、サヘヅレリ

アキナミノ コノキシ／ヒガンノ ヤミムクム

サフランヤ ムシガコボレヌ ハカナゲタクテ

シホオケバ アキノハサミガ ミミヲキル

イノノハナ スイスノカカシ ムギユトオレ

カゲロフニ ナニウバハレテ シロクナル

シロイチヤワン カボチャノ コクナルネイキカナ

クチナシノ ミノアセタルヲ イツクシムカモ

ソレハコウヨウ モクソウノ エレキトリック ・サアァカァス

タマシヒノ ハガオレルホド コノミオツ

プウルサイドニ 二年續イタ 竜胆記

ジッパア上ゲテ 林檎分カチ合ウ ルウム・キイ

鍼ノ如ク 蝉ノ死蹈ミテ 迎鐘  
ムカエテルガネエ

アヤトリノ イトノウチノ神 ! 星ガ流レケリ

ラブレタア 裏糸カラミノサ 星ガ流レケリ

アタラヨ  
コノ良夜 ミナー一切埋メシ 心ノ筈

モミヂモミヂ ナミ平ノ頭ヲ 覗キケリ

アキ空ハノキユリイ被爆ノ赤ノ滲ミタリ

鳩ノ眼に 鯨ノ瞳ニ 赤イ羽根

九月ヨ 流レテモ停マツテモ スカアトノヒカリ

二万哩ウギヤア片メ置カルル 秋ノウミ

秋夕焼 ピアノヲ弾ク 惹ク引カ

小豆ト云ハズ 垂鉛ト云フ 時代カナ

切レ長皓齒 E Y E 已ニ花御 色カヘヌ松

ステ ハナニド

アキアカネ モミヂヲシレル ヒトヤダレ

マンヂユウニ オモヒデカスム アキアフギ

ゾロゾロデテクル アキクサノ ロボット ・タイ ・キヘイタイ

タビニデヨウ バカバカシイホド アキスメリ

アキテフヤ イメエジコエテ ブツカツタ

デラレナイ コイノヒトシボリ アキノカワ

藍ノ華 ナヤム駅ノゴトキ ニツノ空椅子

豚ヨオ前モ 秋フザケテタ トオモフダロ TOMORROW

葛咲クヤ シロイ唾カタマル 喉ボトケ

ステンドグラス 匂フガゴトキ 石畳タミ

イメエジノ何カヲソコネル花芙蓉

外ハ留守兔ノジャンプデフト中ツ秋

秋ザクラヒタムキナ語ガ昏レテシマフ

蝗トハ否事ト覚工確カメ

秋簾ノパアプルノ隙キ間ニ今朝ノ庭

冗談ダロ 無果木ガ 行ツタリ来タリ

芋虫ヤ オ前ガ見ルノハ ヤセイノ拡大

憂イ目好き目コノGOLDEN 落し水

ナーパパ ピーパパ ペペペンパパツパー 懸巢

秋瘦セテ マイル飛バシテ 何ヤアドブツトブ

ジュリジュリト エツ！ト グロリア！ 秋川藻

秋しぐれ くびれし腕の イエス這入るかな

赤トンボ？ ああ…、そういへば 見ないなあ

角を出す ユフガオの実 輪廻／塔／わが家

ゆず、よなが、けんめいに尾を振るイヌ

心に寄せて アマタなる情緒 渡り鳥

綿をだす ロフジン は なぜ気が狂 れ

秋のカヤ上り框に口べたに尿瓶に

仕事場に秋の蝉オルよ標本の助

キテフ散る リキド・ギタの途切れたドラキヴ

間近で見たら階下にな <sup>した</sup>る 舌 にな る 秋高し

どこを掴ンでも 音ン切れた アキの虫

秋草はもふ捨てていいの？ ヤネのうゑ

セブン・スタアはおのがために吸ゑり一位の実

イモ畑やヒトラアに泣きやむヒドラかな

萱刈るゝとき おのれもギリシャの末裔か

眼帯や ナニをイノらふ木天蓼<sup>もくてんりょう</sup>の実

グラスや醤油さし棄てて花をうるほひの松茸にかえれば

影の國まで眺めし角度秋の蠅

心臓をとづる秋日射し千匹皮を

凸凹のHeat up ↑ 音符ふるへ秋ゆふやけ

ただ、いて ふちる いてふ ちる いてふち る

トランプ

骨牌や はあとを多様したり 運動会

Note 漆搔く／心伝図のやふに想ひおもひに搔く

霜焼けの手をつとのばして青蜜柑

中国の往時を語り、ユウヒ、アキアカネとぶ

某月某日ワ タ シ コ ワ レ タ 秋、飽 き

心憂 $\alpha$ 波かりそめの小春日よりには

秋の蟬六法全書の焦点ずれて来し

ロメオは阻まれる／ひとり娘をさがすアキアカネの貌に

「秋が磨耗してさ「タイヤみたい？「釘うたれたみてえ・・・

「とゞまりや夏「すゝんでも秋「あゝ…、冬すらもなく

と  
句とは何かと尋心人がおり秋葉原

百面ダイズのガスタンクみたいと思ふ秋かな

あきつ舞ふ ふしぎな墜落死体のやふに淋しき

輪廻 <if グリム童話>の兄弟と思ひけり秋

(それはひと茎) 「にすぎぬのだ「赤とんぼよ…

きざはしの号消えて「(…わたしは違ふ)」と秋その距離を距て

逆光／アキアカネの視界で自由に空をとびたく

天才かもしれぬ、あ き 。雲のやふにわたしは

と んぼ とんどお、傷付ゐた獅子の眠りさますごとく

B-29 (有) あきつ (無) とかゐて鐘が鳴る

残念嶽のあきつうるはしく人が跳ぶ

あきつ

日本列島もこんな貌してまだ一機でいやがる



ゆふぐれは無入駅 わたしはひとり泣く それも永遠の一やふに

赤蜻蛉の字を田んぼとよむところに句があり

内容のない芸術は、

背もたれの低い馬車に腰かけたまま、

泥まみれの街路を跨いで横断する。

純粋な態度がのぞましい。

確固たる信念がよりのぞましい。

己に勝つということであればさらにのぞましい。

一芸に秀で一能に達するには、

薪に臥し胆を嘗めるほどの苦心がいる、

それでも、

いかなる円においても弦はその上に立つ弧より短い。

他人の悪口を言うような輩に芸術を語る資格はない。

潜在的な多面体のエネルギーが奪われる。

機械文明を離れた人間の心の製作に、

邪心は無用だ、

それは集中していないに等しい。

眼を開けた入口から、

昨日より高く、昨日よりもっと優れた、

と、考えられないような輩は、

一秒も芸術を口にするべきではない。

真剣な仕事にこそ魂が宿り、神が宿る。

享楽階級に、着実な熱の熟れなど永遠にわからない。

賤民根性はなはだしい意見に救済はない、

それに従う者、すなわち不完全な芸術家は、

豚となり、瓜でも売るしかない。

売るがよい、それは悪魔の仕事だ、濾過装置は働かない。

われわれの芸術は毀誉褒貶でも、

価値を必要とする情報の一手段でも、

流行の類でもない。

そんなものはガス灯あるいはアーク灯の、

雨ざらし施設ごみ捨てバケツに棄てよ。

宗教も科学も、

飲用不適の水と思うな、

鑑賞力の幼稚な者にさえ届く芸術なら、

常に現代的であるはずだ。

無言の客人が思索に耽る。

人生は真面目に長い、

不良や横道に逸れるのも楽しいものだが、

しかし、古典的な表現を忘れるな、

実質上の難問の解決は不断の生活にあり、

深層のおくゆかしい疑問の鍵は過去にしかない。

されど、いたずらに抽象的な言葉遣いに求めるな、  
むやみに交通を求める文法の嘘を認めるな。

人類の総決算とばかりの哲学に、  
浮力はない。

それならば、弁護士はいらないはずだからだ。

酸素のような単純さはない、それは語彙解説になっても、  
誰に贈っても差支えないものではない。

道の閉ざされたものに芸術は語れない。

だが、ありとあらゆるものの中からまず取捨せよ、

それはシェイクスピアの中にもある、

それはわたしの嫌いなゲーテの中にもある、

性豪と呼ぶほかないしかし大好きなユゴーの中にもある、

あれほど偉大な人が何故こんなことをと思いながら、

それに対する適切な回答は処女作が回答する、

ああ君は文明の何がしかに羨望し、

人類の誰かしらに嫉妬している自分の弱さや未熟さに、

打ちのめされながら動力的膨張をする。

芸術の根幹とは何か、

その心臓をなすものとは何か、

それは豪雨における猛威、渦巻、穴、

回帰線、珊瑚礁、水車、波、

堅固でいて柔軟であり、

範例でありながら常に不足していよう、

それは幸福、愛、美、生きてゆく者の信頼、

未来への希望、歴史への感謝、

それらが及ぼす侵蝕作用を常に保ちながら、

偏在性を持った雲や山や海、

そこで暮らす植物や昆虫や動物のようである。

言葉の芸術は、サーカスのショーでもなければ、

癒しを売り物にするイルカの類でもない。

また何よりも作品の完成を期せねばならぬ。

だがそれでも作家の属している趣味や世界であり、

芸術とは想像上の国でも、人でもないことを悟るだろう。

否、あの悟りというものでさえ、

生や死を罰あたりに考えた末におのおのが勝手に救済された、

ひとつの安易なしかし個人が勝手に深いと感ずる、

到着地点であるかもしれぬ、

しかしそうでなければならぬのかもしれぬ。

火を消した水のようになければならぬ。

水に投じてもまだ消えぬ火のようでなければならぬ。

芸術とは、しかし真っ直ぐな道、

そして大きな広場へと向かうもの。

芸術とは、造形的かつ絵画的な印象をたばねた、

独創性を持った敏感でデリケートな感性である。

それが墮落や、頹廃、人情の機微を穿つとか、

人間と人間の間を忠実に細叙する描写となる。

そこであらわれたものはまず栄養食である。

名前に、年齢に、人種に、信仰。

神は何処にいるか、愛はすなわち何であるか。

精神的不断の努力の賜物である。

雰囲気の薫陶である。

異なる磁力の結びつきである。

それは新鮮な果実であり、

たとえばなまなましい牡蠣のようなものである。

人間精神を閉ざすな、

芸術はおそろしく広い、

カウンターパンチを繰り出すことくらい、

お前の命をあやうくするくらい何ということもない、

付随現象が起きる、

パーセンテージは常に変わる、

否定的なほどに胃袋の空虚を満たすこともある。

絵画も、彫刻も、写真も、音楽も、

俳優の演技、映像の手法にもあってしかるべきだ。

漫画にも、小説にも、そして詩にも。

何の色にも染まっていない白紙から立ち上がる時に、

特色は振り払われる、

それは時に無知で愚劣なものになりうるかも知れぬ、

大人になれない子供のようなものであるかも知れぬ。

あらゆるものは芸術となり、

その中でも人の心を動かし、

人の心に改革を促すものが芸術として、

手のひらの汗や、足の裏のつめたさ、

よろよろしておぼつかない感じ、

あるいは脳の痺れや、

胸が詰まるような息苦しい感覚として、

ただただ、圧倒的な眩暈として、

呼び起こされる。

ただ、容易に理解され、

たやすく長短が発見されるものを、

芸術ではないというのも惜しい。

しかし願うなら、望むなら、

より宇宙的なものである方が面白い。

まだ個人の成長と経験の分野の不足を感じさせる、

連続的な拡大や交際の不足を考えさせる、

芸術は、存在と存在の関係であり、

鍵と鍵穴のようではなければならぬが、

心の芸を求める時、心の美が必要になる。

美術眼から見た時、自然美が必要になる。

衝撃の震盪によって暴力や、

ダイナミズムが賞賛される時代。

スピイッドが必要になる。

重要なのはタイミングかも知れぬ。

ほらほら恋は富である。

友達との遊びはアナグラムや語呂合わせより楽しい。

酒を飲めばサボりを覚えた蟻のようにポツンともする。

ストレスが溜まれば外へ出たくなる、旅にも出たくなる、

無性に自分が小さく思えた時には、

世界の広さに圧倒される。



しかし勇気を持って、

生きる思想が死への誘惑をつくりだし、

生命そのものが財宝であり、資本ではないか。

それが雑多な物音の意味、懸念や不安、

心の中のあらゆる動きを説明してくれる。

生には魂の適正があり、

それが精神や肉体に流入していき、

非知的、非政治的、非時事的にもする。

でもわたしは、

皮膚よりやわらかい、

嘘はいけないという理屈を知っている。

高い焔の点火をしない、

また持続をやめない、

持続をやめないことが革命的变化を生み、

常にわたしをエネルギーにもする。

そうだ、

あまりにも熱いものは加速度的に何度も点火する。

でもそこに残されたものは、

死んでいなければならぬ。

鉾物質形態であらねばならぬ。

でなければ、人の心をノックさせることはできても、  
それらをあらたに安定した外傷のない均衡へと、  
連れてゆくことはできない。

需要供給の法則に従ったままうまれてしまう、  
個性の発揚はまずエゴイズムである。

鑑賞に耐え得るものが技巧である。

もちろんその中でも、  
美しい魂を求めることができたなら、  
それは目的の手段を正当化させた奇跡と、  
もはや人間の血を流した芸術と呼ばれるべきだ。

芸術は商魂はいらない、  
まず無謀に近いこだわりから端を発する。  
そこには度重なる偶然の一致が働く。  
だからそこは牢屋のような薄暗い所でなければならぬ。

無論、額に皺寄せることは常に内部になければならぬ。

中身のある芸術が狂人をけして生まないように、  
弱い箇所を克服することからさまざまな秘密は生まれる、  
精神疾患を増長させるものではない。

われわれは不確定で解釈が困難な芸術に、  
実質的利益はあるかと問う。

それは失望を伴う分量と方法の混和拡散かもしれない。

だが、本当の芸術はいかなる権利も放棄しない。

損害総額どおりの結果は必ず用意される。

そしてわたしは、

不協和音について説明する、

加工主義的な音の変化について説明する、

自由定型詩について説明する、

通奏低音と間奏におけるポジショニングを説明する、

自由を説明する、

太陽と月を説明する、

罪について説明する、

生きる時間を聖化させたい衝動と、

動物的退化を伴う天使的な存在様式を説明する、

多面性と無意識な中心点を説明する、

天国と地獄について説明する、

そして愛について説明する、

分裂しながら再生不可能となったものに説明する、

我慢強さと義理人情と古めかしさと芝居がかりに説明する、

曖昧なわたしの芸術に説明する、

否、芸術は常にそのようなものであったとわたしに説明する。



同じように過ぎてゆかねばならない時――。

数えれば数えるほど狭隘な路地の猫の鳴き声みたいなんだ、

ふと振り返るとみな同じ顔の――孤独……。

大切だったって言えていた愚かな夢を見ていたみたいで……。

――たいせつなことは、

……たましいのこどう。

「自由になれるからって、言った――」

シースルー、大切な愛とやらの日が暮れる――。

雨が滴る音を聞きながら雑音のフュージョンの中……。

経験値もレベルも全然わからない……。

異常なテンションだけが喋ることを山積みにしてゆく――んだ……。

――夜明けがにがにがしいほどに、

……こころはいつだってこたえにちかづく、

「飛び降りてゆく、さらにもっと、深い場所へ――」

一歩一歩滑ってゆくだけのかがやく夜の幼熟――。

蝶なら飛べばいいのに、さみしいなら逃げればいいのに、  
きっと終わりのない始まり——鉛の弾へとつづく装填……。

永遠にシープかぞえていようよ悲しいから、悲しいから……。

——さらさらとこぼれてゆく、

……とりかえせないくらいいたいせつだったものが。

「僕は悪魔のように、何が大切なのと——言ったんだ…」

きっと僕は上手く笑えない人生は選択制というより——。

宿命で、悪戯で、しかもそっと脱ぎすべらすのに音を立てない皮、

どんな痛みもそれが真実じゃないって言う——僕を笑えよ……。

きっと思い出さない悪夢はあちら側からしか手を振らない……。

——それなりに相応しい渦の中心で、

……ながれぼし、みてるよ。

「隕石があたるのと、僕の背中が、めりめりとするのと……」

(するのと————)

「……どっちが早い——だろうね……」

デッドオアアライブ、それが何だって言う闇——。

抜けても闇、まだ終わることのないトンネル、深すぎる人の闇、

否、僕の先天的な闇——愛しさや恋しさが掻きならずフォルティシモ……。

でもそんなのあなたがいないと風吹かす夜の闇……。

——ふもうだね、たいはいだね、じんせいおわりだよ、

……でも、だめになる、びがくも、あるね。

「もう眼が覚めない方がいいのかも……」

毎日がちぐはぐで、後遺症、でも、神経の正しい回路——。

そしていま僕は泳いで行くことにした文字の海の数百、数千……。

一年なんてあっという間に過ぎ去ってしまうよ……。

でもわかるかい、嘘をついて——それに気付いたらもっと淋しくなるよ……。

——嘆くばかりじゃ辛いね、

……ああ、僕もざっと二千歳！

「深い断層の亀裂にあるマグマ……」

(いや、それはビルの屋上だよ—————)

「……気の遠くなりそうな——文明のジャングル……！」

相変わらず同じ電車、バスだって言う人と会う——。

なんでそんなことに興味があるんだよ、話す話題がないのかよ、

でも責めなじることはできない——僕も本当に同じだと思ったから……。

自分が違うだなんて僕にはどうしても言えなかったから……。

——たえまなく、とぎれては、うかぶ、いっしゅん、が、  
……たべられてゆく、ぼく、のようで。

「ああ生きるごとに皮膚ってかたくなってゆくのね……」

トランプの裏と表、カレンダーの次のページもきっと同じね——。

疲れてるせいだけじゃない、真実を直視することも、苦い薬を……。

あじわうこと、生きるうえでの苦しさも僕の仕事……。

ただの一人も見誤らないように——華やかな嘘に溺れないように……。

——心や身体は寿命つきなんだ、だから、脆いんだ、  
……でもだから面白くて儂いんだ。

「でもだからって善悪まで他人任せじゃ困るぜ実際……！」

ねえずっとそうさ、わからないけど何かが違う一瞬を探して——。

でもそれも結局、迷妄だと、錯綜してる情報の一瞬の誤解にすぎないと、

でも、そうじゃないって僕は言おうとして——鏡の水面は揺れて……。

僕のすべてはきっと灰なんだ、風に吹かれて消えてゆく灰なんだ……。

——どうなのかわからないから、いみ、や、りゆう。

……つめたい、はな、の、しんしょく、その、かおり。



「ああ、裸足で歩きたいなあ……」

(そこに、素っ裸の女の子がいてさ————)

「……僕等——夜の闇にかくされている営みをするんだ……！」

夢だよ、夢、夢！ また僕は墜落してゆく——。

　　ひとりぼっちになりながらこんな深くて暗い海に溺れそうになってる、  
でも僕がもし諦めてしまったら——そんな風に折れることがあったら……。

　　きっとみんながバラバラになってしまうことがわかっていたから……。

　　——ほろ苦いコオヒイなんかには、酔えなくて、

　　……でも、よって、いて、よっているしかない、ぼくは。

「炎に焼かれた一瞬の夢の啓示……！」

ドアを叩くしかない、信じて、この道を歩き続けるしかない——。

　　奇蹟なんて信じちゃいけない、そんなのに騙されちゃ駄目だ……。

　　俯いちゃ駄目だ、人生を好き勝手なものにしていく手先になっちゃ駄目だ……。

　　心の中に芯がなくちゃ駄目だ——熱くて人をとろかせるものが……。

　　——つめたい、じぶんの、ことばに、ぐさり、とくる、よ。

　　……ほんとうにそうなの？ おわらない、ね、きっと。

「でも……季節が過ぎれば、それもよかったね、なんて！」

(忘れさせてよ、もう手離させておくれよ————)

「…そして——こんな人生をプラチナするのはよしておくれよ…！」

ほらまた色々な人が人生のつまらないことをしようとしてる——。

折角のいのちが、魂の輝きがこんなに簡単に曇ってしまう…。

ほらまた彼や彼女が傷付いてゆく——誰のせいでもなく……。

お前のせいだよ、でもそういう気持ちが僕にはわかっていたから…。

——可憐な花びらに触れたみたいに、その、神経を、

……もぐって行って、もっと、たえまない、かぜのなみ。

「——新しいベッドに…沙漠づくりのあたらしい、水のうまれ！」

…なぜ、些細なことですか？

望むのに！まあ望む？はあ、望む（望むのに！）

…なぜ、浪費するのですか？

出しちゃいたいから！

だってオス蜂なら、キカン蜂になりたいもの

——蜂の巣がモネの息に達する映画よりも

ディズ・イズ・憐れみ

生類憐みの令

…あなたは蜂の本能を忘れました！

針だけぽきんと折っちゃいましたあ！

望むのに！…望むのに…ああ望むのに！

ディズ・イズ・憐れみによって夜のベッドを失い

…たとえば自然に『同意』さすまでにのぼり続けて。

FLY 愛しているのですよ、ただ彼は注射針の縮小剤！

ノンストップ短小剤！

LOVE！LOVE！LOVE！

——でも彼はやらない、勃たないものとしませう！

おや、・・とすれば、あなたはインポなのですかあ！

納豆や山芋を食べない病気、ああスーン！

でも・・すぐにドリンク剤を購入すべきだ！・・すべき！

刻み大蒜！・・その刻み目の中で、

――私が玉ねぎを切った時の反応をすとしても

ああそして彼女に本物のキカン蜂を教えてやるのです！

LOVE！LOVE！LOVE！

それはよい意味でのイエスです、クロロフィルです、

そのためだけに結婚すると言っても過言じゃないのであります！

宣言は無謀！・・でも愛しています！

必要なのは理想、長く、太く、そして固く・・

あなたはそれが偶然に起こると考えてはいませんか！

いいえ、私もそうです、だから若い時に祈りました、

思わずヌード写真を思い浮かべ、

たまにスエズ運河に助け舟を出しました！

でも若い-祈る、ああ悲しい若い-折る・・

でもあなたはこれほど多くのヘアーをしめることのできる、

女性の存在を忘れてはいけません・・！

わずかの衝動で掘削、ときどきはリモコンで運転、

非常ショー、ショー・ミイ・フォーエヴァー運転！

あなたはまぎれもなく勝利するでしょう、

大切なのはテクニック！

私は上へ、..おお、上へ、ぐぐっとダウン、上へ、ダウナア回し絵

ダアウン、ふたたびの演奏、扇風機、換気扇をグルグル..

そうです子供ほど苦手です！

攻める！攻める！ああ攻めるばかり！

二枚！二枚！二枚！増やすばかり！

さあ陽気なジグザグ・ダンスで今日も幻のギグを試みる、

生体解剖図のようにではなく、

連続モーションの写真のように！

上へ！..すぐにダウッ！でも上へ、ふたたびダウ！上へ、ダウナア

——ビクトリー・ロール 蜂はいまや戦闘機そのもの！

まるで特攻機神風！

あなたはさながら同時併行世界！

無数の一致、あるいは一致する現象と女性の讃美歌、

恋よりも楽しい音楽、飛んで行く天上の一つの星めがけて！

それは知っている！ああ知っている！知っていますとも！

すべきだ、お前自身の内側から降ってくる隕石の衝動、

細かい埃の欲望シナプスー！

他のメイド・インでやる？ それともアウトプット？

…あなたは筋肉隆々がよいと思っているの？

私は確信する、きっとよい体操選手になれる！

女性の洞窟の勇者、天照が隠れた時のダイナマイト破壊

…知っています！知ってるよ！ああ御存知ですとも！

私はほどよい勇気にほろよい加減でほととぎす！

SWEET あなたを愛している！…

たとえリップサービスだとしても！

AGAIN!の後… AGAIN!できるか… AGAIN! の後…

もしたまたま初めてなら幸運か？ グッドラアック！

あなたの最初の勇気、観音開きの要請をした時に、

そのありえない誘惑は始まります。

AGAIN!の後… AGAIN!できるか… AGAIN! の後…

さあ空前絶後のメリイクリスマスに招待…

さあ良い刺す！ああ酔い醒ます…

ムッソリーニ大佐！…おやめください

ムリニゲッソリーニ中佐！…何するの、何するの！

ああムッヒョウジョーニパッチン少佐あああ！

## オリジナル意訳 #ウィリアム・バトラー・イエイツ篇

---

1865年6月13日～1939年1月28日は、アイルランドの詩人、劇作家。イギリスの神秘主義秘密結社黄金の暁教団のメンバーでもある。ダブリン郊外、サンディマウント出身。神秘主義的思想をテーマにした作品を描き、アイルランド文芸復興を促した。日本の能の影響を受けたことでも知られる。青空文庫で芥川竜之介訳の『「ケルトの薄明」より』と『春の心臓』が読めます。

メアリー、君は点滅している海を見ている

到る所で偶然に蹄が、鼻歌、咀嚼音する…

あの乳白色の大理石の複雑な模様

音のない塔があらわれたら…風が死ぬ――

「メアリー、あの浪間、記憶に閉じ込められた泡かな」

フ…レットの泡…これまでの日々？

フレット、肉体の碑…ゲイ、僕は寒くなってる…

全身で絞りとった泡が空にあがる、

のどかな牧草地、春や夏の残響

世界は何処かへと駆け抜けていった。

身体をゆすり、毒づき、笑い、せかせかとし、

ブロウ、夏の足は手を出す…

ひるがえらない巻き髪、穏やかでゆっくりの溜息…

アーチと直方体をくぐり、ぼんやりと坐りこむ――

「ねえフレット、銀行があるのね、怖ろしい朝が…

別れが、その睡りが永久に身に着けられているのね…」

気泡バネを使用した靴のように、

、、、

タイタン、——大声で笑う人びとの夜明け前、

その窯で起こる筋肉の収縮・耐火粘土の質感の

無明の洞窟にかくも鏡の丸さを感じ、

湧きいづる水は時間の向こうから沁みてゆき、

花を求め移動し、寺院のモザイク画は忘れ

短足の不細工な馬みたいなやつのことばかり

思い出す…冷やかな侮蔑だ——

ああ、かくも世界の光が熟する野生の空気の中で、

、、、、、、、、

メアリー、君は僕といる、双子に生まれた

、、

宿命…フレット、許すことに疲れる

、、、、、、、、

『ゲイ、この水は何だろう…？』

メアリー、涙は腐りきった心の濃み

ケルトの物語が死と愛について答えるように——

どうせ枯れる花の花輪など、王冠と何の遜色があろう、

裂ける傷と、泣き声を堪えるのと何の違いがあろう…

「メアリー、君は二つの孤独な魂として理解するかい？」

きっと枯れた花の花輪も美しく甦る場所で、



永遠に終わらぬ春のうちに、…彼は楽園へと向かった、

ほら、物語の入口はもう開かれている、

ほらもう、黒い瞳、宮殿の表玄関…

太陽は羞らう、もう暗い息、野螢。

でも冬さ、丘は氷河のように、

のぼると窓のように真っ白で、もう息と、

区別がつかなくなる、あきれれるほど…

メアリー、悲しい、スティールウールのやぎひげ

アルカトラス

永遠の頭痛の種子に眠りこんだ人びとのように

メアリー、君はまだその花を見つめる

それを見たら鈍い水溜まりが揺れる、開いて閉じて

色あせる、…セピア色にするために降る雪よ—

君は彼を愛していたか、羞恥か、まだ忘却か、

「氷るわ、あなたのそばには草も木もない、つるといばら

…長くここにすぎたのかしら、アイルランド—」

死は遠くにある、まだ雪の降る…

天使の告白、「メアリーあれの身体は闇だろう？」

君は去る、…これでよかったのか、

幻視の解放されない内に…息を殺して

まだ風船のように浮ばない、自分は、

スイス時計のように精密な心臓を高鳴らせる…

メアリー、君はこのドアを開けて何処へゆく！

…雪がもがく、足跡がもがく、

でも魂は追えない、われわれも自分たちを追わない、

しかし罪を追う、愛と死…

愛と死の薄明に膨らむ 羽ばたきが途絶えた――

けものの大音響がする破裂するのではないかと思うほどに。

けものどもは肉のなかの肉となり点のなかの点で俺を嗅ぐ。

感受性に運命をもたらす。口と口。

真夜中。虚ろな響きが鏡に消え失せもせず、

バ・ス停に潜みもしない。バス停。

二千年以上も前からの潜在的な芽生えのすべてに、不可能な空間を与え、

不可解に、しかるに不愉快に、神経に突き刺さってくる厭な音。

それもフ・ランス映画のようなそらぞらしさで、

ベッドが降ってしまうような時刻のフランス映画。

お前は乱暴に叩いて歪んで濁った音楽を薄幕に凝らす。

でも電車のブレーキの余韻しか聞こえないこの場所で。

夕陽がこんもりと茂った山毛櫨に軽く声をかけたあのような、

むらさきの岩魚のいる光がまだらにちらつく夜の街燈で。

そいつが俺のシャツの端を握ったまんま咽喉から鳥の啼き声。

そいつは猥褻という言葉のすべすべの斜面で時間の堅い凝縮。

精神の一掃。ほら見ろ、きらびやかな金と紅がおどるネオンはすかいの、

原始林の小径に俺は殺される。俺は肩と腰だけの生き物。

ゆらりゆらりと風のように、凧のように、

けだるい湿度のおおいピア・ノのように揺れるピツアーノ。

ここが俺のどん詰まりとばかりに、神経をぴいんとはじいて、  
空しても逸らしても、跳躍が血ぬられてゆく。

けものの大音響がする破裂するのではないかと思うほどに。  
けものどもは肉のなかの肉となり点のなかの点で俺を嗅ぐ。

なたらかなこの砂。

運河に入ろうとするこの砂。

イマージュの矛盾が深層に不愉快な節まわしをつくる。

あらたな高速道路でも建設するように、

一瞬消えまた増える。耳から押し込まれると、皮下出血する、

そして俺は吊り糸の切れたシャ・ンデリアみたいになってしまう。

シャンテ！ 途中でさっと吸い込まれるように、かねがね鬱陶しい虚空へ。

シュワルツ・ワルト

ここは黒い森。沈黙せよ。幽霊、残酷せよ、酷薄せよ、

笛が鳴る、ひどくものがなしい音を立てたふえが、

生命のはての渦のはじまりに合図を送る。教会のやけっぱちみたいに光る、

あの十字架が蒼ざめた夜のめまいをつくり俺を気絶させようとする。

俺は俺の死体の臭いを嗅ぐ。

俺は奇妙にゆがんだり震えたりしながら、砂匍う蟹となり、

うてな

この街の台とでもいべき真っ白な場所で、凍てて冴ゆ蓮。蓮。

甘くくすぐるような嫌悪感のあまりにじゃりじゃりと砂の触れる音。

でもそれは蓮。正しい音律をつくってはゆかない、蓮が、

俺の目玉をくわえこみでもしたように、燃ゆる銀。蓮。否、月のはなが、

歓びを抹殺するための奇蹟のように長々と描写しつつ、

時計は二度と同じ時を刻まない。

俺は俺のしぼりたてのトマ・トジュースにうんざりするトメエト。

俺は俺のしぼりたてのトマ・トジュースにうんざりするトメエト。

けものはきっとここにいる。と、思った瞬間、オートバイの単調な音、

パニック寸前の人の変な声。いまや完全に遮断しきれぬまま、

遠くで唸るオオトメエエション。

そしてきっと俺はかなり急な傾斜を走るけだものなんだ。

そしてきっと俺は儂い夢の黄金を星座にでもし、饗宴の酒とばかりに、

空虚を作り出し、またあたらしく、いっそう恐ろしい時代に生きる、

未来のわれわれに傲慢な自尊心を進呈するのだ。

夜。聴覚を引き裂くような激しさで。

枝と枝が触れ合う。

甘い音。

その鼻の中であって、耳になる、

夏の終わりのけだるさをのこしながら、

指先に力をこめるとき、

折るような低い音は、

ゆっくりと戻ってゆこうとする、

ざわめき。

「梢が揺れる音だよ。」

「あの町の灯だよ。」

(めろん、) が、

だんだん小さくなる。

テニス・コオトで、

ラケットをふっている。

僕はキャベツになる。

僕はレタスを食う。

ドレッシングマニアになる。

僕は全然ねむれなくて、

お好み焼きのことばかり考えている。

そして、かえし、の名前を、

何故だかいつまでも考えてる。

調べようという気持ちは起きない。

ブレイクボール……！

人間の五感すべてを駆使しよう、

と馬鹿なことを考えて、

お好み焼きを思い出す。

緑。茶色。案外、こいつ、

チャコールグレーというじゃないのかしらん。

わからん。肉。キャベツ。粉。

粉といいながら詰まった。

これ小麦粉ちゃうはずやで。

薄力粉ちゃうかな、わからん。

でも、織物がやたらと軋むようなメロディーパターン。

それにしても、ジュワツとか、

ああいう音って、水気がとんでいく、

で説明してもいいんやろうか。

擬音をつくっていいなら、

シューシュージュワワスウウ、が正しい。

これが好み焼きを焼く時の風景の音です、と。

でもはじける音も、その変化も、

大雑把に閉じ込めるなんてよくないことだ。

でも、水気がとんでいく、のとは違うな。

水気が熱によってこしらえられていく。

これは多分、

カレーをかきまぜる時にコクを出すと信じるようなものだ。

でも野菜が溶けかかるほど弱火でかきまぜれば、

そのカレーは甘くなる。

日ごろ、野菜が甘いなんて思わないものだけど。

太るものは甘い、と言うが、至言かな。

ともあれ、その間、俺の眼は、特製のかきまわし器みたいに、

はよせえとか、腹減ったなあとか、

しかしなんでか好み焼きって可愛いなあ、

とか、ほんまに馬鹿なことばかり思う。

もし、日本人が好み焼きに対して愛情を持ってるんなら、



その発想突然すぎてついていけないが、

可愛い、は正しい。

可愛くなかったら犬の餌にしてしまう。

最低でもギロチン台に送る。

最悪でも、ペペロンチーノという名前の刑に処する。

蛍光灯に照らされる。

引いて行くカメラ。

ロングショットの地点までゆくのか君は！

どこまでゆくのだカメラ！」

僕はいまでも、まくわうり、という名前に弱い。

まくわうりってなんなんだ。

あの正体不明のひびき。

あのやたらイミフで規則的なものをおさめようとするひびき。

息をひそめる。

お好み焼きって牛の肌のようにやわらかい。

誰かがゲロのようやと言ってたけど、

確かにまあそういうグロな見方もできるけど、

俺から言わせれば、ゲロはやまいもや。

ぐつぐつと煮詰まっていくようなゲロ。

しかしこんな夜に、

ゲロの話をしてる僕は充分疲れてる。

疲れてる度数は、やっぱりどうでもいいことや、

変なことを細かくそれも意図的ではない状態で書いている時に、

ほとんどどうなだれるように気付く。自覚する。

眠りゆく罨のごとく。

でも子供ってゲロとかうんことか、

ホラーよりもホラーに、にこにこして言うよなあ。

ずいぶん前に携帯不通工場とぼくが勝手に噂した、

金剛山付近のとある工場だけど、

そのそばにすんでいる女の子に棒でぽこぽこなぐられた。

大の男だったら、とこいつつ、

大の男がそんなことをしたらあきらかに精神を病んでいるが、

ともあれ理屈上は速攻でしばきあげるけど、

女の子というのは、にこにこしながら、

大の男をぽこぽこしばく。

僕はMに目覚めそうだったよ、嘘だけど！

この前、とある事情で子供がとまったことがあるのだけれど、

子供って本当に可愛いよね、ああ、子供の可愛さを、

自分の少年時代にかさねているという可愛さでもあるし、

いやそれは嘘だな、美化しすぎ、

小さな手足で、顔も小さくて、

まだなんにもできないのに、自分の意見を持っていて、

何かしているという驚きに僕は、不規則な時を感じ、

年老いたというほど年老いていないにせよ、感動する。

十代で弟が可愛いと思ったことはあったけど、

子供が可愛いと思ったことはなかった。

これがもし二十代になったばかりだったら、

俺は病んでいるのかくらいに思ったかもしれない。

人の心は変わる。

孫という歌も、演歌だけど、なんとなく聞けそうになる。

僕はスパイダーマンという英語、

あれは英語じゃなくて、名詞とか、特定の、という、

えーと、こほん、英語を、英語をね、うん、英語をね、

スパイダァァアマン、というのだ。

男の子なのだけれど、スパイィダァマン。

これがすごく上手。

やたらすごく耳がよくて、ちょっとカッコよい。

英語の歌だって、日本語のそれでやっちゃあいけません。

そして節回しの、オーイアだとか、フウ、フウ、だって、

なんだか、アメリカ人っぽくやらなくちゃいけません。

policeだって、Michaelだって、

スパイダァァマン。

英語に対する褒められた唯一の思い出は、

ああ僕、実家があれば、定時制くらいにしか行けず、

それといって仕事をしてそのままする気にもなれず、

まあ、定時制に通っていたわけなんだけど、

いまでも時々あの時のことを考えると僕はゾットする。

正体不明とか、不在感とか、

階段を一步一步後退していくような恐れ、とかいうのかな。

脳天気にも中学校や小学校を過ごしたこと、

そして好き勝手に詩や小説を書いていたことほど、

僕をゾットさせるものはない。

ヒヤシンスの中にひそむ憂鬱とでもいうんだな、きっと。

ヒヤシンスは、僕に夕暮れ時の池を思い出させる。

おっと、お好み焼きの話だった。

でも、こうも思えてくる。

物が、人のかわりに考えてくれている。

それ自体が、イメージの吸収をしてくれている、と。

だから物の思い出に緩衝材はない、と。

焼け跡の中で、闇市に活気があったのはこのような理由だった、と、

僕は考えてしまう。

夜空にかかる豎琴のようにむすばれた星が美しいのは。

おっと、お好み焼きの話だった。

それにしても、冷蔵庫ってどう思う？

僕、ずいぶんと前に、

おさない頃の冷蔵庫が緑色っぽかったと記憶していて、

ちょうどおさない時の写真で確認したんだけど、

ある日、白になって、

ある日、グレーっぽい色になってた。

それは、僕が冷蔵庫に対して何の感情もいだいていないからなんだけど、

色ばかりよく覚えてる、ばっちり、色。

その頃、僕はテレビがモノクロからカラーになったような感覚があって、

もちろんそれはイメージの世界の話なんだけど、

テレビの画像はどんどんきれいになっていった。

気がつくやうに、嘘までどんどん綺麗になっていき、

その頃からじゃないかな、

ニュースをどんどん見るのが嫌になっていったのは。

まるで、蜂とか、蟻とかもさ、

まあ、蟻については視力があんまりよなくて、

お尻のフェロモンのにおいで列についていくみたいなの、

本当にどうでもいい話を聞いたことがあるんだけど、

蠅とかが一番わかりやすいよね、広角レンズ。

その蠅でも、実は色を見てるんじゃないかって。

原始的な衝動に色を見ているという考察は、

たとえば、色と状況の判断。

男性だったら黒。女性だったら赤。

非常口の案内板は緑。

それにしても、色で思い出したけど、

どどめ色とか、づづぐろい、とか、わかるかい？

どどめ、は某ノベルスゲームで拝見した表現なんだけど、

づづぐろい、は、金子光晴。

そういえば、いまでこそ僕は金子光晴を詩人として尊敬してるけど、

はじめて図書館で読んだとき、

僕はこいつ西脇順三郎の系列じゃないかな、と本気で思った。

知識がないとそっくりそのまま意見を振りまわす。思い込みだね。

そういう反省があるといまでもこういう可能性がある、と思うようになった。

ともあれ、これ、生理的な印象のイメージの色なんだね。

真実の色。これなんかたぶん、黄色。

ひまわりは、黄色。

あかるいから真実だろっていう連想が働いてる。

たとえば、青は落ち着く。

部屋をひろく見せたい時は、この色を使う。

しかし変なことばかり知ってる。

しかし僕の知識で一番知らないものは、野球。

野球が好きでメジャーリーグから、

ニグロリーグのプレーヤーまで知っていったりして、

実は最近百七十キロ近くまで投げるピッチャーが出たって知って、

名前もう忘れちゃったけど、

それぐらい速い球を放り投げたピッチャーのことを思い出した。

そういうのって何か暗い青春みたいで、かなしい。

でもまあ、生きてるってことはどこをどう勘違いするかで、

あれはどこかの外国の詩人が書いてたと思うけど、

内面的に充実している人の方が最後には人生を楽しく生きられるみたいなの。

いやそんなの嘘だよ、こいつ馬鹿だなあと思った。

どういう人生感覚の錯覚におちいつてるんだ！

でもそういう風に自分の立場を説明したい淋しさみたいなのを感じて、

僕がそいつの目の前にいたら、そうだなって肯いてやったと思う。

速く投げたいという欲求って僕は好きだな。

ひじょうに原始的。

草野心平のばかばかしさ一步手前の誇張表現、

あるいはおおらかな大地の感覚、

しかしその実それはダダイズムとかモダニズムのそれで、

また経歴を見るに知性への批判が詩であり、

それがアクロバティックな詩へと移り変わったいったのかみたいな。

それにしても、お好み焼きの話だったね。

どうもね、書くのが早すぎるんだ。

書けと言うから書いてやったみたいに思うんだよ。

理科の授業で川について書けというから、文字で、適当に埋め尽くした。



何書いたのかわからないけど、先生がすごく驚いてた。

僕の方が驚いたよ。

高校の時に百科事典みたいに分厚い小説を書いて、

毎日定時制であるのをいいことに、朝から書きまくり、

自転車やバイクで登校して、

ぼんぼんの学生たちを見て、

といつつ、僕はぼんぼんだとは思わなかったけどね、

遅かれ早かれ、そんなのがつくられたものだって気付く。

少し前に堺市駅で、酔っぱらい若い二人組が、

終電を逃して、まあもちろん僕は路上ライブをしていたんだけど

寄ってきて、一生懸命歌ってるっていいですよ、手抜かないっていいですよ、

みたいなことを言って、仕事の話とか、今現在の話をして、

最終的に、ぼそっと言ったんだ、お金のために自分は働いている。

これだってすごく思い込みなんだけど、だって労働は義務じゃない、

でも社会で生きる上での義務の行為としては存在する、

最低ネオ・プロレタリアを呼称する僕に、

お金のために働いているなんて通じない。

じゃあお前は奴隷なんだな、と本気でキレると思う。

でも、見ず知らずの人にキレたりはしないし、

僕だってもちろん、人のことを理解してる、

だからそれを笑えない、

それもそうだなって思えてくるような一瞬、さみしさが残る。

生きることのさみしさが、経験かもしれない、

冬を生きたことのある人だけが、やさしい春を迎えられると、

僕はすこし気障に優しいことでも言ってやるべきだったのかもしれない。

でも遅かれ早かれ社会っていうものがどういうものか気付く。搾取。

縛る縛られるの関係。働く。食わす。生きる。

ともあれ、学校から帰って、また、書いてたよ。

おそらくこんなに文字を書いた人は、

世界中でも百人くらいしかいないんじゃないか、というくらい、

僕は書いた。正直に言うと、その中でも十人に入るくらい僕は書いた。

本当に小説家になりたかった。

いろんなものを犠牲にしても、勉強して、何にも考えずに、頭をからっぽにして、

ずっとイメージを凝らして書いてたよ。何かに届いた瞬間、

卵の黄身と白身がわかれていく。

そうだよ、言葉なんて思い浮かばなくても、指先が動くんじゃないかと考えて、

ずっと書いてたよ。

時代だね。

プールのへりに腰をおろしているような、薔薇色の時代の、暗さ。

意味のある言葉を嫌うのも、必要性を嫌うのも、

僕が何でも出来るのも、まあ、そういう理由がある。

でも、その後、僕にやってきた、ひどい数年間を考えると、

水平背の向こうまで行く船のようだね。

言葉を書くことは、速い球を投げることだった。

お好み焼きは、シューッと音をさせて湯気が出てくる。

もう少しで完成だ。僕はウーロン茶の蓋を開ける。

テーブルを用意する。具体的に言うと、物をどける。

しかしなんだが、こうやって書いていると、

せんべいの袋を開けるみたいでひどく味気ないね。

ドキドキまで伝わってこない。

暗闇のなかの絹ずれのようなこわさ、みたいなのがね。

ほら、ギイッ、ギイッ、と鳴る。

これは古びたドアを開ける時の音だよ。

そしてそこに僕は人形やぬいぐるみのことを考える。

蜘蛛の巣が天井の隅っこにあるような部屋のことを考える。

窓にすだれがって、風鈴がある。

僕はそういうのを黒い鋼鉄製のものだと考える。

闇を研ぐ石のようだと思う。

そしてこれはきっと大小さまざまなかがり火のようなイメージが、

連れていくんだ。

お好み焼きを見る。ひらべったくしてるけど、厚い。

かえし、でおさえつける。

それにしても、モザイク模様みたいだよな、お好み焼きって。

蜂の巣箱の中の、蜂の巣みたいな。

たとえばそういうのをダイナミックな印象というのかな。

お好み焼きはかならず、ひらべったい皿に移す。

ぐっと、かえしでもちあげて、つつ、と力を落としながら落とす。

失敗すると滑る。でも、皿に移す。

誰も見ていない。皿に移す。

なにごともしなかった、皿に移す。

ここに、かつおぶしとか、あおのりとか、

マヨネーズとか、ソースをかける。

それにしても食べる前って、出来あがってさあ食うぞっていう時って、

運動選手のように息を整える。

赤と白の玉を押している運動会みたいだね。

そして僕は大概それをフォークで食べたいと思う。

はしじゃないのか、おまえ、西洋人か。

いや、フォークなんだな、こういうのは。

ところで、

僕は好み焼きを子供のころ、美味しいと思ったことがなかった。

好み焼きを美味しいと思ったのは、

高校生を過ぎてからだったと思う。

どさりとバックを床にでも落とすみたいに、

くらくと眩暈がするね。

僕の生理的な感覚というのはどうも気が重い。

おもわせぶりに転がる野球ボールくらい気が重い。

人は、みんなはじめから、大人じゃない。

子供から、大人になっていく。

そしておおくのところ、子供でいた時のことを忘れてゆく。

子供でいると傷付くことの方がはるかに多いからだ。

でも実のところ、大人も大きな子供にすぎないってことが、

僕にもちゃんとわかる。

虫取り網を持たないだけで。

ランドセルを背負わないだけで。

お好み焼きがなくなっている。

パジャマがどこかにいってしまう。

ぽかぽか、

陽だまりのなかで、

ビクバン！

くうきをよんでいつもよりすこしつよく、

音、空気、水、舞う落ち葉、粘って、

塀のうえにはふてぶてしいねこが、いて、

落ちた。

スケートリンクみたいに白い廊下を進む、

カプセルのなかに虫の卵があるかどうかを調べる。

ヤシの木生えていた。

「ハロー、グッバイ……！」

ひどくきれいな白。

さっき食べたラーメンがおいしかった。

でも青空はもうどこかに行ってしまった。

1 + 1 は 2。

2 + 2 は 4。

1 + 1 は 0。

2 + 2 も 0。

ゼロは強くて、

なかなか、イチにはならない。

ぶくぶくぶく。

炭酸水を飲んでゆく、

しゅわしゅわしゅわしゅわ。

吐いた息は不可解な灰色の冷たさ。

…鋭い冷たさ。

——全部ウソつきの冷たさ。

書店で本を買い求める。

小さな書店。

けっこう可愛い高校生くらいのアルバイトの女の子。

なに読んでいるんですか。

聞かれた。僕は赤くなった。

とたんになにかうしろめたいことをしているような気がして、

僕はその場からはやく逃げ去ってしまいたかった。

うみをさがすまで、きみは、人魚だった。

うみをさがすまで、きみは、人魚だった。

蜃気楼みたいな映像なんども見た。

ほらコウノトリが飛んでった。



オナニーを覚えた。

アンプにつないだギターが滅茶苦茶にかき鳴らされた。

キツツキが木を叩く音がしない。

ポケットのなかにダンゴムシがない。

ああ僕は、おなかにちからを入れて、いこう。

普通って何だ。

枯れ切った花を見て何も思わない。

常識って何だ。

パントマイムがあの日みたいにうまくできない。

手に取る物がみんな、

形のあるものなのかないものなのか分からなくなる。

黒黒黒。

弱弱弱弱。

一瞬はきれいなものたちの欠片。

ワルツをおどる、

人形に激しい衝撃音来る。

前も右も左も分からないのに、

生まれ変わって、

遊び終わった玩具のように歩きだす。

デリケートというより、ヘタレだから、

イメージはいつでも誰かと同じもの。

迷宮へとは行ってゆく。

僕はこれが欲しい、あれが欲しい。

でも本当に欲しいものはもっと別のもの。

でもその時の僕は思う、それが欲しい。

でもきっと後悔してしまう。

時計の中の電池を入れ替えるみたいにそう思う。

エンジンの抜き取られた車は機械文明の奴隷。

だってなんだか気が狂ってるような気がするから。

にんげん、って、ことばが、どこかかなしい。

どうぶつ、って、ことばが、いい。

おとこのこ、って、ことばが、どこかかなしい。

よろこび、かなしみ。くうき、かぜ、ひかり、

かなしい、そして、いつまでも、むなしい。

——本気で駆け出してみる。

無意識に鳴らす靴の音、

時よめくれよとばかりに。

時が止まる。

それとも本当に止まったのだろうか。

カブトムシみたいな車が燃えていた。

その向こうをかすめる火葬場の煙。

四角形になった。

三角形がよろこぶか？

五角形はしあわせか？

点と点をつなげるスパイダー。

今まで一度も言ったことなかったけど、

目の前で女の子を消したことがあります、

とか、――とか……こんなのまいった……。

宇宙に繋がっているようなまっ黒い銃口を、

口の中に入れると、トンネルの中に入ったような、不思議な夜。

ドラゴンクエストをやろうって何故か言えなくなる、

ファイナルファンタジーとかちょっと言えなくなる、

オートマチック・テラー・マシーン、

オンラインバンキング、

キャッシュ・ディスペンサー。

マネーロンダリング。

(知らない言葉たちが言った、

そんな絶望ではわたしはたおせない！)

自転車を漕いで誰も知らない遠くまで逃げた。

世界地図みたいな猫の小便の臭いがした。

それでいて吐きそうな本当に嫌な厭な嫌なにおいがした。

逆立ちをした。

二人乗りで自転車に乗ったらパトカーが来た。

優しくて、それよりもっと優しくて、

あくびふわっと浮かべて目をこする。

不思議な暗号（は、）ケミカル。

不思議な発音（で、）ケミカル。

デッドオアアライブ。

デッドオアアライブ。

パズルみたいに組み合わせて、

自分の罪からのがれて心臓が痛い三秒。

僕はあと三秒。

僕はあと二秒。

その 2

ベクトルとヘクトパスカルとベクレル ねぼけているとおなじに見える

よおいどん トップとビリの貴重性 ウサギとカメはアリとキリギリス

真っ白い猫さんと交渉せり あたまなでていい? かんでもいいなら?

よるもつきもほしもねむるころいままでになくかがやいた空の椅子

だりつよりだてんよりほんるいだよりだすうしあいすうにこだわる吾

あなたはいつもほんとうのことをいわないからとてもしんぱいです夜

ほかのとりにこいをしないであたしだけ」そらとべるころのとりはおまえだけ」

てれてしぬとりのなまえはあなた」くびをふりめもあわせないおまえ」

そのうそがつみをおかしたしゅうじんにしけいせんこくする腸

せめてさいごくらいうちあげはなび——「大輪の菊を秋お届けします」..

よわよわしいちからしのびがたいちからがなまじろくわれる流氷  
さすらい

スプーンにあだぶかだぶら唱えればサイコネキシス ねむたくなるよ

サイコロが数字はずませて着地サイコロからサイコロジーを知る

猿回しチェスの如きティールーム人近付いてくるサイコロの目

さと落とすところの翅のいちまひを素直であるならふめよ吸殻

た〜んとバレエダンサの牛の脚線美 目のやり場に困る純

手を噛まれた犬の歯型にべったりと嘗めた跡がある水で洗ひて

義理や事務ではなく使命や知命であれとわけもなく独身宣言！

家動く回り舞台のくるりどん夢の中では二足歩行す

架空の島「ゴルフ島でポーズする男のあざやかな旗の振り方」

まっしろこねこさんがゆうわくするあさ「魚を食べたら人魚になるの～」

ラッキョウ食べてラッキーマン！ 臭ッまじ臭ッと言われる心境

苗植うるつの字の人は折れ線グラフ！ 収穫という名の経済！

血液型判断法あんな胡散臭いものでも分類法でキャラ作り

かお

本棚の表情にちらほら家鴨の子ぐわつぐわつとおとぼける僕

なつすぎてほうれんそうのおひたしさがつわりがひどくてたべられな一い

梅雨の籠城を阻止した殿様は記録的な炎夏にくらぁッ！

ホールインワン！ 公園の屑箱めがけて空き缶がスパナに化ける

アイツ コイツ

むっとしたトイレ個室の湿気いやだ幽霊か死神かそれとも独逸か？

盛りあがりにかけて食欲のあき六月の空に栗咲きにほひしも

CDの繊細な乱反射を見ゆるドーナツの穴のさびしさ

拳法 武術 格闘技 ころころ変わる話の傍を通る空手着

もうそいつはきかんぼうのあめんぼうさ 辛抱たまらんのさ飼犬よ

泥だらけのユニフォームの弟は勝ち負けも美学の浴室へ

メシア

救世主より飯屋にて電灯のスイッチ切るように朝が来たから

向こう側わたし跳びます飛込み板に跳ね蛙 やっぱりかえる

びかそ

インチキの似非画家ここに現れたり ひゃくまんえん ひゃくおくえん

ビール腹つづみいなして打ちなづむえまりえまりと弾みけれ腹

うふんあふんいひんえへんおほんばかんいやんどこさわってんのばか

友と賭けをし百円硬貨を宙に投げてみる。かしゆ。「ひゃ～食べん！」

ピカソみたいな絵の街でゆらゆらと南国の花揺れるカクテルは波音

柑橘類(ふれっしゅなかをりじゃないかしらん (メヲアケテラレナイ

おけら

「蝮姑になる」食害よろしく「じいい」と鳴きをり「じじい」と聴こえり

うたたね

ソプラノの歌はかなしや春告げ鳥と季節はづれの午睡をする

思い出すマングローブの森抜ける舟の軋みにも似たマンゴー

湖面にかよふ桜月夜しらぬわれが朝ぼらけ知るきはみかづき

花は揺らめき消ゆるやむなきさだめ闇のこもるゝ息は老衰

金剛嵐と我が名付けし山登りロープウェイから眺む田の神

かわづこ

水無月の夜更けには月をうつす川底いまま夏の日が灯る

鸚緑という文字おうむ物真似を覚えれば鳥のけはひをいつも浮かべている

このはだからねころんでなおふみつぶされしるけもでない現代病

油まみれオイルモンスターの頻出 専門家にもオイルショックを！

神隠し誘拐事件の別称ひとが消えてもおかしくない夜だつた

屋形船で密談する罪人の溢れた「マチノヨルナゼカキレイ」

ほころび

それがにくをくさらせほねにかえゆめもたましいもうりわたす破綻

物騒がしいてんやわんやの大騒ぎ住宅街にPATROLCAR

蜂の巣をついた鼎の沸くが如き彼等にあわよくばたんこぶを

(アゴラフォビア)にねむる秋の文字(あき)の記号(あき)の本(あき)の文学

ぱちんと指を鳴らすやうに電灯は何の前触れもなくぷつんと

失ひしころの色に医者はあるかカルテに添えるメモのやうに

あなたが笑う鈴の音にも似た声おもい出しては ゆれるあまおと

抱いては眠るぬいぐるみは哀しい瞳の色をしていた ゆれるあまおと

その涯に何あらうとしても斑ゆれる虹彩のさびしいうるほひを求めて

鴉の行水みたいに夜が更け音を立てぬようにキスをする

写真の平面世界二次元に合成写真の如き L O V E

閉づる革表紙ぱたととは永久のたそがれの響きわからぬ朝

春の月はあの日のビリヤードみたいに臍ろげで小さく撞けば恋が落ちるかも

ホタテガイ愛する女に恋をし我は巨大なホタテになりたい

一つだけ異議あり女よマカロニの好きなマカロニペンギンはいない

くるほしき蚊の唸り声に白けてこそ愛を知りぬ AMMONITE の全盛

すぎですあいしていますそばにいてくださいじゃもうこたえられない胸

悲恋のため成就のためマダムわたくしはこいをするがらすのくつ

にじをみながらふるいこいをおもいだしていたあのころのことを今

いたわりをしらぬあなたをおもうほどかたくななところがひそむ夜

そんなあなたをゆるしていたのはぼくのほういまは真っ直ぐにいえない

アルカポネはあるかもねにいるかもねベーブルースがしているかもね

オードトワレ 芳香品！ そこ こうすいでもころんでもないにおいさがして「花屋で止まれ！」

して非ずにて非ずみて非ずきて非ずなに非ずただあらぬ歌

かげをやけだからもりをやけそらをやけそしてひとをやけ静寂

長う高うつづく鐘よ胸にはいれ白う黒うつづくチェス盤



テーブルの蜜柑をいよいよ剥かん いよかん さよか しおらしかん 門外漢

ラテンリズムのマンボだマンボウ顔のっぺりびくり綿棒入れ顔

ライラックしおんウスタリアかきつばたシャクヤクむらさきずみれ

つつじローズいちごチェリーあずきルビーぼたん風と共に去りぬ

車びゅんびゅん風もびゅんびゅん人もびゅんびゅん凧になれ

ゆうねりうねりくちなはよ上揺れ横揺れ斜揺れ下ッと揺れ！ 蹠跟めけッ！

もえてまんねん、くりからもんもんくりだもんどらえもんだようそだもん。

1192つくろう鎌倉幕府11104(おわろう未来はあやふや

氷袋をかく擁きてつめたひわらひだけが零れる夜もありき

スモッグでやや霞んだ都会の遠景この戦闘ひに水銀灯ひかる

奏でられた音の先にはいつも眼鏡では見えない世界がある

正しいものが欲しいのなら捨てるのだ 技の脱皮 七転び八起き

あまたるき花の羽ばたき誘われて振り向けば海だつたらいいのに

結び目は固く結んで固結びおむすびなら苦勞せぬ結び目

いつかしら訪ねてみたい所があり知りたいたんだ朔太郎先生まちの故郷

何かを知れば知るほど空虚しくなる 交換速度 断絶の速度

つららつらつらつらのかわのつらよごし詩人を名乗るつらいご時世

ののっぴきならぬ立場のとどのつまり ドーナツ現象 ドーナツ盤

指痛きあのがむしゃらな時間を共に過ごしたシャーペンがある

クラインの壺たとふればあをき壺ひそめきてさやぎぬクラインの壺

たとえれば二壘ベースをスライディングする気持ち嬉し悲しい

ただけないはやりきれない物欲し病つけくわえれば出し惜しみ病

可変翼飛行機から連想せり世渡りとはかように切り替え

堪えられぬ苦しみなどあるものか目を瞑りいま心の旅へ

印刷工という名の一筆書き「博打を打つのに夢中の歌詠み人へ」

風走る みちのくの駅しづまれば神の子が宿りゆく太古へ

弟の髪が伸びるように早く背を追い越せと視点のびなむ

ランニングホームランは嘘なり打てば走れりダッシュホームラン

セルロイドのお面捨てられずしょんぼりと溜息をついている縁日

洗濯物干せる女の鑑かな降らないわ雨そして雨かな

ストローの先から虹色オーロラひかりの干渉なないろのまく

ファミレスが視界から消えてゆくまで食べ残しの皿が舞踏つた

紋章のようなスクラップ工場プレスされた空缶の押し花

小麦粉キャベツ卵ベーコン長芋まぜてやくお好み焼き

歯医者予約ははずれない君の大きな胸をはずれないみたいに

ああんしてごらん歯医者だよさあ服を脱いでみようか？ 廃車点検

ナンッテナンナンパンナンソウナンノ 難がおありの言葉 関西弁

合縁奇縁とは選択不可のふしぎなちからはたらくごと縁  
えにし

沈魚落雁とは美女の形容ただしエスパーと思うが筋

津津浦浦はぜんこくのいたるところちなみに津浦はぼくの知らないひと

九十九折といえは川端康成の伊豆の踊り子を読めばわかると思われる（完）

ただし所詮はピストル文明開化明治初期のスローガン

変幻自在は誰でも知っているけれど言葉に寄生するたび意味が独り歩きする

あなたもとりあげて青春時代はぼくがとりあげた四字熟語

松尾芭蕉よ！ 不易流行とは宇宙人と翻訳せり

背もたれに凭れ片膝を立ててあらぬ方向を眺めている女 ひと

首を傾げて微笑みがてら髪おさへ俯く人はくちびるをぬらして

牛さんと祈りささぐる平和かな夏雲めぐる小枝はゆれる

山びこに雨をかけなば水音か坂を歩くぞずんずん歩くぞ

雀さんの羽根をつければ羽子板や猫がとぶとぶ風にのりのり

薄暗い校舎がゐとう段ボールの箱いってしまひぬ「ウ・レ・タ」

わたしは思った。虫というのは、虫というのは……。

案外、かわいい。ゴキブリも見ようによっては、かわいいのであるのかもしれない。

なんだねこれはふむふむ。

どうしよう、

虫めがねを通した

瞬間から、あたしの眼が、

いかれちまった。そして、あたしは、一体全体どうしちまった。

などと、本題を置き去りにしたまま、

すすめるな、似非シャーロックホームズ。

わたしは、彼の虫籠にはいりたい。

ハゲタカの餌食になるつもりか、あたし。

蘚苔類にでもなるつもりか、あたし。

でも、蛍が光り始める夜空には、

テイラアスウィフトになりたい、あたし。

# オリジナル意訳 エミール・ヴェルハーレン篇

1855年3月21日～1916年11月27日は、19世紀後半から20世紀初頭のベルギーの詩人・劇作家。フランス詩壇で活躍し、ポール・ヴェルレーヌ、アルチュール・ランボーとともに象徴派の一翼を担った。当初自然主義によっていたが、やがて独自の境地に達し、人間讃美を主題とした新領域を開拓した。1909年、1912年、1915年の計3回、ノーベル文学賞候補にノミネートされた。その名声の高さがうかがえます。

## 僧侶

*Les Mines*

僧侶たちは、血の冷たさを見る巧妙に偽造された

痕跡のなかで 破風、ああ吹き抜けの光よ――

雷のとどろくごとくに魂は、炎を消す、

魚になろう、真珠採りに出掛けよう、

土の匂い おお土の匂いを嗅ぎ、

いだ

それは記憶の底から取り出す一枚の庭の写真・・

この庭で残忍な相貌と、魂の不安を精製し、

忘れてゆく農場のあなた、実体のない動物の声を聞く・・

唇を噛みしめる、あの顔が、叫びが天に吸われている――

業火の苛責によって百色の幻覚が悪の神秘を生み、

我々は星がオケストラした後の洞穴の空気から、

銀と鉄を神の形代に寄せて、武器を求めた

ああ狼、人間の血の汚濁をかすめ取る美しい牙を

時に咽喉元から燠はくねり、踊り出、

幻の風車に挑みかかる月明かりも虹に染まるだろうか

あなたは夜の冒険、世界の規則、キリストのヴァリエーション！

…直観的に悟ったであろう、遣る瀬無い老いの咆哮の瞬間。

あなたは背を曲げずに少し異なる火や水、

この巨大な黒い穴に棺がいくつも納まり、間断なく納まり、

王家の響きを伴う…

僧侶——僧侶…

ああ儀式や神話にロゴスとなる崇高なキメラ

アッサンブラージュ

源をたどれば、先鋭的な主張、集合体の爆ぜる音

永遠とは（単一の、）…ああ、（各々の解説の中で、）

あなたの心は美しい塔の中に匿われてアラベスクとなる

あなたは、首の十字架を手にとり、松明を揺らがせ、

ここで揺れている、ここで残っている、

根源に…揺れている——おそらく…残っている

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

埋葬されている花や葉と、いま、手にある無数の棘…

ああ！醜悪に肥大化する静かな僧侶

ああ！いかに地球の声、自然の声を聞き分けていくか僧侶

天は不在の夜の歓楽に不幸な共感に知覚意識する

亡命せよ僧侶、グランディスの一切がこぼれ落ち、

彼等は追い出され自虐の煙となり、その服は罪業を燃やす

、、、、、、

嘲笑う勿れ、照る月の光はまだ寒けれど、

抑制作用に、狂気の道と、ああまだ消せぬ花…

いのち

ああ最高の太陽の血潮の生よ、リトマス紙さながらに蒼く染め

我々のために蔦の葉よ降るな、と言った。

ああされどもパレットに絵筆が打ち鳴らす

積み重ねてゆく景色に心臓 を 壊し た 一一

泥の手のひらに折り畳まれている地図をひらけば

修道僧の河、おほき鍵盤の上で発語し

最後の魂は滅ぶ前に、鎮痛剂的抵抗を試みる

…離れることすら非力な、かよわい、涯のない隘路で

わたしはわたしの居場所より上へ、その上へ駆け上がる

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

あなたは神秘的な祭壇を、わたしは初めて鳴動する弦の音を

それらが眠気に逆らう貞淑な放浪雲の、

…おお天蓋の下で、フロンティアを超えたらうか

ああ、光る夕暮れの不連続なあなたと混ざり合うだろうか

いつかこの魂は永遠を望むよ、指から、

あいまいにすりぬけてゆく弓よ…、曳いた一一。

ゴスペル

淡い夜、逃れようのない無垢の猥雑な聖なる音楽から

物思いにふける 悲しい、寂しい、

(この永遠への 恐れを抱いたままに、)

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、  
暗澹たるあの火災が問いただした、長く胸のその谿の水のよどみに

窓を浮かべ、画布を浮かべ、栄光へと結露のおきて黴はえ

おお、鱗の落ちてゆくとりとめのない倦怠感がくすぶっていた

そしてあなたのことを考えるときの最後の冒瀟

ゆるんだような、胸にぬるい痛み、ああ 赤！

巨大な剣で貫く半獣神にこぼれ落ちる手帖！

…いろいろの白いあなたの影、夢のない眠りのなかで

わたしを見る…あなたを見る――

それは（単一の、）…おお！（各々の解説の中で、）――

穏やかな修道士

*Moine doux*

幼稚な感覚だと言われている、ロマンチズムに拠って…

彼はキメの細かさ、緻密さ、匂やかさの僧侶である。

人は心ないことを言う、薔薇の花を椰子の木に飾る、

あなたの手が伸びる――梯子もないのに…

しかし皆さん、大地は足の裏から聞くことのできる交響楽です…、

――死ぬるきわまで…

人びとの上に花があるのは、それに近い恍惚を感じるのは、



静かな心地で、..あなたの心が丁寧に匿されているものから、

たった一步、しかし貴重な一步を踏みこんでいるからなのです――

青空のように淡く..青い、聖読の堆積よりも貴いこの天蓋といえる頭脳の、

わたし達は..額がくるめく。涙が煮える。この生活の平野にいます――

、、、、、、、、

湖は銀色の道でした――わたし達は金色の心で通り過ぎ..その後へと。

湖のなだらかな形..時に凸凹とした形、その鍵のようなギザギザ感をもって、

赤外線による写真のように、水に沿って、心を沿わせている僧侶です。

白い百合の行列..この夜の光がたとえ蠟燭の持つゴシック小説の響きを帯びても、

清浄無垢なものへと反射し、これらの僧侶たちはどんな時でも、

聖母マリアの素朴な愛好家であったものです..

くりかえされる強い罪名、動かし難いものを根源的に探る触覚のように、

絶えず燃えるような宣言で、母になりたい、あなたの父になりたい、と――

同情的な性格が孤独の果てに、知恵の果てに、気付こうとした者たち..。

誰しもの人の心に燃えるような情熱がある！..宣言がある！

生きてゆく範囲がある！ 裸だと言える――絵のように、

彼は海を感じた、大空の火のような夥しい星に、

勝鬨をあげた..賞賛を、心の中でひっそりとあげた..風がそれを攫った、

彼等の目の前には確かに、夜の、不気味な、

薄気味悪い光景が広がっていたが、いま、天使の聖歌隊が！..

いま、僧侶である彼等自身の唇には..つかんだ感じの万象が――

人は何者であるのか、を問うよりも、何処で生まれ、何処で死に…

どんな人生を生き—と 渴望は、純正な音楽へと帰依し、燃え、

時に誓いを破るように、誓いを貪っているかどうかを尋ねられ…

答えられず、それでもただ大きな目という、トオキイの音が、

ふっと消えて、サイレントに変わった瞬間のように…心は絶えず燃えて、

人は一体どんな料理を作るのだろうか、何を食すのだろうか、と言った人…

彼等は牛や豚を食べる、山羊も食べる、猪も食べる、…

ある人びとはそれをゲテモノだと言う、それがこうじて文化を形成し、

—国民がすべての総意であるかのように、罰の火の中へと言った—

信仰とはそのような気質であろうか、いや、…

熱をはかっている医者のようなものだろうか。稀薄な香料、

神秘的な体験をもたらす報酬のためにと…多くの女性が、愛の夜を知った、

彼等はイエスに接吻けをするために神聖なものを、ねばり強さと、奥深さで、

唯一無二のように体験した—一夜は夜の心であった、

朝はまた、朝の心の眼にいよいよ鮮明にしみついていた、

夜を、千万の想いを込めて払う時にまた穏やかだった…。

## からだのなかの雨の音を聴く

---

みにくい忘却性から、

つめたい水が流れる。この。

エネルギーに溢れ、煙草の喫煙者、竹の膨張、

何時間見ても飽きない、それでも絶えざる苦悩に駆り立てられる、

皮膚はひりつく。非常線。警戒通知。「ちょっと頭がおかしくなった

かもしれない」姦通を愛する、儀式。鼻に粉白粉をはたいて、

変態の、坊主。ほころびた縫い目から、しゅるしゅると音を立ててさらに勢いづく。

ぽっかり胸にあいた穴を、それが埋めてくれる。欲求。身体を中心。

活け花ではいけないのか。

芸術写真ではいけないのか。選択肢がないまま、逃げながら、

旋盤や彫刻刀からふっと眼を上げた傾線の合体。横道。死亡。夢。

不真面目な蒼ざめた夜がウェディングドレスのようでこわい花束の夢。

上体を起こし狐につままれたような顔をしながら、

よみがえってくる――涙、馬鹿げたこと、目覚めるたびに忘れていた何かを、

ふっと手繰り寄せようとする、こんな風に。語られるたびに、筋もないのに。

ずっと遡ってゆく魅惑的な女を愛する男みたいに。つまり地上で、

生きて呼吸して、水滴の溜まり場所へと落ちる。通過する。

彼が言う。「安全な場所で南無阿弥陀仏を唱えているのは、

――それは、電気が流れるフィラメントのようなものだ。脈打たない。

爆発しない。安全な距離から夜を深める。

きちんと折りたたまれたシャツみたいだ…」

稲光に蛙が頭を突っ込んで、河童が生まれる。

熟練している完全さなら、静かにその忠実な一つの在り方を理解する。

やるせない哀音で空虚な心をのぞく、熱い、熱い。

溺れる。人身売買とダルマ女。歯を食いしばりながら。

ヤクザの流刑と楽園の島。果てしなく落ちた。墮ちた。

いまま落下し続けている。「加速している、

——白と黄色の花をさせながら…」

遠く隔たっている——、感慨などない…、

若さなどない、若さ、若さねえ、へっ、インチキの間違いじゃねえのかい？

標的だらけの消費者環境。エデンを模したプール。難民たちの衛星的様相。

泣きたい気持ちなど微塵も感じない青春、盛大に胸にいだきつづけてた物質欲への、

歓喜の叫び、脳味噌の食事、金切り声。

密教の生き肝喰い。警察村で起こった職権乱用の事件。

口から口に伝えられた。加害者に有利な条件。そうかと思えば、

自殺に見せかけた中国で雇った殺し屋が関与しているという事件。

そうかと思えばカメラに向かってピースサインを送る若者。

からだの動きや、手の使い方を見つめていると、ふっと——音楽のように…

彼がそれまで信じてきた叙述的というより瞑想的な世界が、

シネマスコープし始めた。「交尾しているハエは、

そだが十束、かぐわしい木材が大きな四つの山となった――」

安らかな死出の旅ですこと、土に変わるまで、お待ちになりやがったらどうですかい。

UFOとエリア51。想像力に限界はない。無駄働きでも、英雄的努力はできる。

糸巻きに巻き取られるようにして、

徐々に姿を現す。地面にめりこんでいるような、ひどい痛み。

やさしく揺すってやる、おい、十三階段をのぼる時間だぞ。

やさしくお押しさしあげる、ほらはやく白線の内側を飛び越えろ。

そこが完全な絶望だぞ。生は矢印だぞ。方向性だぞ。

銀色のメルセデス・ベンツ・クーペを見ながら、

原始的な荷車を思い出すような、痛み。肉体労働的な、痛み。

森の奥深くにある、のこぎりの凸凹でつくられた痛み。

原子爆弾はまだ作られ続けている。

人を殺すためではなく、政治的な道具として。

渋滞の見本帳に載せたいような渋滞。平和の中の殺戮が、神を望むが、

世界の終りまでは行かない。だから神は動かない。

われわれは好き勝手に繁殖し、破壊の限りを尽くす。そして平和を願う。

豚や牛を家畜にする。同種殺しだけではなく、喰らいもする。

原子の、分子の雲。最小単位は百年後また姿形を変えるだろうが、

さらに一千年後また姿形を変えるだろうが。

「…ひとつひとつ生命を奪われてゆく、しかし、

そのかたわらでは、くつろぎ、ほほえむ人がいる。

赤ん坊をロッカールームや、トイレに流す母親もいれば、

赤ん坊を抱いたまま涙をこぼす人もいる。宇宙をつくづく思い知って。

この腕こそが神の一部だと知って。

手と手を繋ぐことが人類における世界の最初の橋だったと知って。

でもそうだ、それは対極に過ぎない。不幸でも幸福でもない。余剰でもない。

深読みでもない。美しい生命でもない。」

繰返す、

原始爆弾は作られ続けている。それは願望であり、住処だ。

お金儲けに走った某国が、それを、テロリストに売ったら。

目的地は進行それ自体の過程なのかも知れない。時々死にたくなる。

何度も何度もそんな気持ちになる。誘惑をささやき安全基準が変わる。

死にたくなる。でも、花のつぼみのうえに、虫は這い寄ってくる。

その上に樹がある。そしてそこに季節がやって来る。

野原は空き地になるかも知れない。「でもそんな何十年あとのことを、

考えてはいられない。陽はのぼり、雨は降るだろう。花は咲いて、枯れる。

無情だ――。しかし・・火打ち石のかけらそれ自体にいかなる結末もない。」

恐れているのはそのこと。

内側に毒が塗られたワイングラス。

ビルの入口に貼られた立入禁止の黄色いテープ。

「…自分の国じゃなければそれでいいや、

もう、そんな奴、死んだって別に困らないから。」

信じてくれる人がいるかな？ 血がさわぐ、

グラスのぶつかる音、シェイクする音、マッチをする音、ライターの音、

少し前までミステリーだと思っていた。嘘の上塗りの末に、

幽霊に憑り依かれた。神秘体験。LSD。さまざまな都市の釣り針。

丘の突端に動く雲、風、木々、鳥のさえずり、でも、

話題はさまざまな会議。雲がうまれる場所ではなく雨の降る場所。

腐る場所。おなじく、蜘蛛の巣の作り方。俄か絶望の作り方。

眼を閉じれば車にだって轢かれる、おやすみなさい。

でも僕は知った。「奴隷が日本にはいたんだ。

夜這いと同じようにね。」センチメンタルな夜の世界に、

神様の心が見えなくなる。とにかく今は神様が嫌いだ。

肺病患者の咽喉みたいな声で、毫碌しているくせに、飯の時間は忘れない。

不遜で、ハンサムで、しかも憐れむべきほどに無表情。

やめなさい、と、おやりなさいがっぺんに出てくる。

肉体の腐敗が血をすすっている悪魔の嬉しそうな顔に思えてくる。

低劣で、無分別だという気がする。ブラのカップは上向きだ。

「汗ばんだように湿る。

軍曹、パンティーは白であります。」第一原因がこうなってくると、

ゲーム、漫画、音楽、映画それもいまは嫌いになる。その。

切り口には何のためらいも感じられない。

セーフティーネットのない思考。

自分は正しいと感じたい。正義を信じたい。

苦痛は洗脳をうむ。平和は最上級の彷徨かもしれない。

真っ白な表面のかすかな凸凹。

下半身露出している男。ゲイビデオに誘う男。

人道主義者のふりした男が夜の店へと入る。

ロック・コンサートのステージで全裸になる。

でも同じものだとわかる。それは心の中でも同じものだと、届く。

手が届きそうになりながら、それは違うものだと気付いて、引っ込める。

でも耳をすますことをけしてやめたりはしないだろう。

どっと酸っぱいものが溢れてるんだ。鼻にツンときて、

涙が出そうになる。立ち直れない。任務不成功。何度、

心を持ち直そうとしても、悔やんでしまう。そんなこと、

考えたって仕方ないとは知りながら。

巨大でぼんやりとしたものに巻き込まれているとは知りながら。



## 雨のさざめき

---

鉛筆で

いくつかのぎざぎざの線をひいて

ゴムケシでその鉄条網を消す

さみしい心拍数がかんじられるほど

僕の脳波は弱っていく

何にも出られないような弱い気持ちがる夜

日に日に進む工事

さらさら木の葉が舞う泣いた雨

毎日の嘘で

いくつかのぎざぎざの線をひいて

ゴムケシでその鉄条網を消す

ある詩人が僕の詩を笑えないよと言う

その詩は涙でいっぱいなのがわかるからと

人に気持ちを見透かされたことよりも

そういう強い眼を持てる人のやさしさを思った

黙っておいで

苦しまずにおいで

さみしい癖をつまびらかにしておいで

死なずにおいで

そして旅において

僕が百年の詩を終わらせる器かは別として

僕が百年の詩の涙を語ることはほとんど確実

僕の混沌とした複雑な回路は

現代詩ごときのアマチュアぶりを認めない

なにをもとめて行く貨物列車

何をもとめて吹くなやましい風

何をもとめて行く秋の人

さざめきながら

かなしみのかたちがつくられる

浪間にも

いくつかのぎざぎざの線をひいて

ゴムケシでその鉄条網を消す

でも僕はあなたを笑わせよう

ねえ僕はあなたを優しく包み込もう

この時代のくらやみを

一番感じているのは僕だよ

この時代のひかりになろうとするのは

それぐらいむずかしいことだよと

僕が言いながら

唇を噛んで目で笑っているような僕は

いつもしょんぼりと取り残された

この狭い部屋のような空虚などここに

置き去りにされた

奴隷だった時代よりよくなったよ！

病気で死ぬ時代よりよくなったよ！

ねえ何も知らないなんて嘘さ

僕はねえもうさあ

ばっちりわかっちゃってるんだよ

因果とかじゃねえぜ

勘だよ

このするどすぎる勘が

ばっちり前の人生のこと

僕が持ってるある種の感覚のことを

全部説明しちまうのさあ！

…………夜だね

…………夜だ

——さみしいね

——うん、さみしい

ねえ、

うん？

ねえ、

僕は小さな石でいいよ

僕は自分のことよりお前が幸せならいいよ

働くことで悔しい想いをする人が

僕が不幸でいっぱいだということで

満足するならそれでいいよ

でも僕は前を向いていたよ

お前にはわからないかもしれないけど

僕はずっとこの長い暗闇と戦っていたよ

僕がお前の気持ちを知らないだなんて思うな

僕がひとりだけ特別だなんて思うな

どんなに優れていたって

どんなに前向きでいようとしたって

すすぎおとせやしない俺の悲しみは

都会や文明だけのものじゃない

…わかってるだろ

…わかってたさ

—一夜だね

—君は夜を守る詩人だから

ねえ、

うん？

ねえ、

僕がひとりだけよければだなんて思うな

僕はいつだってみんなのことを考えていたよ

いつだってみんなの愛になりたいと思っていたよ

——かなしみの置き場所くらい

ちゃんと作ってやるさ

…人生ひとつくらいで

済むならそれでぼくはよかったのさ

鉛筆が

ナイフになっても

それがフォークになっても

いくつかのぎざぎざの線をひいて

ゴムケシでその鉄条網を消す

どうせどうせさみしい人生だもの

どうせどうせつまらないことだらけだもの

ですもの——

ですもの…

ねえ世界の雨を

かなしみを

終わらせるのは誰だろう？

それは僕？

ちがうよ

ちがうよ

それは君の仕事

君がこのくらやみと向かい合って

出さなくちゃいけない答え

僕がすべての代わりはできない

僕の仕事は時代の責任のみ

お前の悲しみまでは

俺には癒してやれない

絶対に癒してはやれないから

黙っておいで

たくさんたくさん泣いて

明るくしておいで

明るい服装をしておいで

明るい眼をしておいで

そして死にな！

ちゃんと生きてって胸を張って

次の人達のこと

前の人達のこと

ちゃんとしてやったって

胸を張って口にできるように生きて

僕は死にたい

そうやって歴史の愛が完成する

橋が完成する

人と人との愛が完成する

鉛筆で

いくつかのぎざぎざの線をひいて

ゴムケシでその鉄条網を消す

消したのはぼくのとひら

消す ぼくのゆびさき

消す ぼくの爪

門の前でいつまでも出てこない得体の知れなさを感じる感情の水位が、  
陽光の中のアステカ・モザイク模様に思えた時に暗黙の目的は消失した。  
ねずみが猫を夜な夜なパステル・ブルーの地平線の見える荒野へと、  
連れてゆきたいとそしてそこで残酷になぶり殺しにしたいと白昼夢するように、  
振り子の原理は嘘だそしてその無駄な描写はスマートではなく屈折。  
幼年期の原住地的特色として本を読む一行一行を心臓の激しい脈動として伝える。  
温室からイタリア語の発音にも似た日本語がきこえるように、  
死んでいる幻覚は夏の終わりの徒花として咲いた花のように弱く香り、  
どこかひっきりなしに来る料理のようなえもいわれぬ猥褻で凡庸な欲望のあり方を、  
展開してみせている彼はいま門の前においてポケットの中に手を入れて握り締めているが、  
遠い間隔においてそのたたずむ姿は肉でコルセットを作る整形外科に似ている。  
数珠つなぎのような聯関関係は住宅の意志しいては建築家の炭酸水のようなものか、  
彼は貧血だった無関係な往来のざわめきが激しく軋る四輪馬車を彼に想像させたとき、  
拒絶する表情を浮かべていなかったとすればそれは腐蝕菌の作用だと言える。  
彼は彼の必要品のよう保存されている補充し確保されていかねばならないものが、  
彼の時間の継起の精密さをメカのように身体をちぢこませらせている、  
ネジ的意識なのだが硬直する自分の頭を理解の及ばない真空にするのは、  
名前がするりと抜けていくような朝の白磁いろしたシーツのようなかやきに、



石がつつまれているという彼の歓喜の乏しさをいちいち事細かく物語っている。

人生に対する態度などそこにはなく仮にあるとしても終始無言で、

吐き気をおぼえ強烈な感覚の逃避を意識する程度の汗に濡れたガラスの側面に、

てのひらのあとがつくようなものだ妙な感動よりはその手形がのこるという、

薄気味悪さが消化管のように彼をとらえている視力だ。

彼は頭がいいのだが独善的すぎるし知識階級特有の中層下層を馬鹿にする癖が、

骨の髄まで身に付いているせいで通りゆく人が舌打ちをするほどなのだ。

あるわけないだが彼は想像するわたしは場所も時間も自由にできるのだ、

そして香水をつけた女が穏やかに終わってゆく彼は童貞だった。

彼はバスを見つめながら狭い屋根付きのベンチと銀色銅色の硬貨を、

じゃらじゃらいわせながら女に道楽程度のフランスの話をしてやりたいと思った。

そして喫茶店でブルーベリーのタルトを頬張る女に白く乱れるマロニエの花を、

ささげてやりたかったがそれは彼のプライドの高さ卑屈さ弱気さがそうさせなかった。

指先になにかの屈辱のようにおぼえた白粉と薔薇にまみれた母を思った。

母は美しくわたしに勉強をせよと言ったそしていま憂鬱な父の姿を思った。

彼はいくつもの会社を築き上げてわたしのことをお前となれなれしく言った。

わたしはじっとりと湿気を吸い取ったハンカチのようになりながら、

洋画展でも見ているような姿勢で毅然と踏ん張りながらも人波に押され、

誰か気になる人がいれば視線を投げるまた伏せて投げ返す一瞥を待ったが、

はじめから終わりを待つための時間であったように強烈な無力感に襲われた。

母は駆け落ちしそのあと父は死んだそして彼は分裂した輪郭の俘虜となり、

精神病院へと通っている彼はいつでも自分には文学の才能があるのだと信じた。

銀座でブランデーを飲みながら女の肩に手を回し夜のみじめな運動について、

なにかかがやかしい時代の前触れであるかのように語るのだ。

でも彼の投稿小説は落ちたそしてそれを苦悶も憤怒もなく馬鹿だからと思った、

三流の生活者には三流の批評しかできない三流の女のような時代なのだ、

門のまえでの彼は金属の感触そのものである遺産というめぐまれた状況にありながら、

滞っている彼の身の上の欠落した感情がさらに筋力の衰えを引き起こし、

否応なく現実的生活を欠如させながらおかしい罪悪感をおぼえさせ身体をひねる。

彼は動脈の途切れた生き物の不許可の生息と帰還する可能性の相違と思った。

彼は人間味がない毛皮のコートのやわらかさを指でもてあそびながら、

長い空白におちいり仰け反り黒の井戸のような印象にうつる陽射しと蛾を思った。

彼は無性に絶望という言葉に口にしたくて口の端の慣習的本能のもと、

すっと言いかけて突飛さに気付いてあきらめてその言葉を縄のつかぬところやる。

屋敷へとはいるとそこには変わり者の彼だけが池の広い水面の木々の投影をする、

光の襞にかろうじてつながっている窓から浴槽へとわずかな水気にうるむ赤、

トランプのような黒、人間の顔のようなあ青という色彩の橋をつたって、

長らく使っていないが断続的に強弱の変動を繰り返すブラシのように、

かろうじてそれが白であった頃の湧き出るような印象をとどめている。

いきなりそこで突き放されて、何か約束が違ったような感じで戸惑いしながら、栗のいがが落ちていないなあって。土の道がないなあって。あの見渡す限りの菜の花畑、ああおとした田圃。つくしも、狸もうさぎも狐もいたちも、すっかり見なくなりました。台風の度に増水した川。かつては学校に曲がりくねった山道をテクテク歩いていました。重い鞆と疲れた足をひきずりながら。離島にでもいるような時代ですから、舗装されて歩きやすい道ではないです。物はなかったけれど、心の結び目をほどくような道です。雪が降れば二時間前に起きて歩きました。三キロだか五キロだかをテクテクと、ロボットのようになりながら歩きました。一九六〇年の近代化が、悪魔のようなブルドーザーと、大柄トラックの往来を連れてきました。便利さを求める裏では、政治や官僚という綺麗な、通りのよい、分かりやすい言葉の裏では、いつも誰かが働いていて、そしてそこに弱者や虐げられた者がいて、立ち退きをせまられ、いつも見ていたものが消えていくことをつぶさに見てとりました。いまの中国の貧しい家庭のようなものでしょうか。あるいは北朝鮮の貧しい家庭に毛の生えたものだと言えるでしょうか。こんにやくに、茶に、山林、炭焼き。藁ぶき屋根に大きな囲炉裏があって、その囲炉裏には柴木をたき、母は柴取りをし、父は田畑山林で働きました。水は井戸から。手押しポンプです。照明なんてない、

スイッチひとつでつかない、石油をいれたランプに灯をつけ、両親は夜なべをしていました。わたしは兄弟が八人いたのですが、家族を守ろうという気持ちを、そういう夜の気配のなかに、いまでもひしひしと感じます。母は縫物、父は藁仕事をしていました。そしてその頃の思い出が胸いっぱいに充満して、わたしはセンチメンタルな涙をこぼしそうになるのです。海も山も汚染されています。過度の伐採、環境汚染。古い時代のツケがまわってきて、色んなことが頭打ちになって、そのほとんどは打ち切りです。近頃では日本食ブームだとか、スローフードだとか言うそうです。でもわたしはそんなことよくわからないのです。会社は定年退職しました。妻と子もいますが、子供にはもう子供までいます。かわいい孫がいます。孫に玩具を買ってやりながら、贅沢だなと思い、物のあふれすぎて価値がわからない時代だな、と思います。でもわたしは、いま、おさない時にどうしてもしたかったけれど、機会を逃して作れなかった模型づくりをしています。下手くそです。換気扇をつけてもらった部屋に、スチールデスク。大型のカッティングマットはパテや塗料で汚れナイフの傷が無数についています。机にはプラ板や、プラパイプ、真鍮線にアルミ線などを模型ごとの材料を分類して保管しています。引き出しには、塗料の瓶、ナイフやピンセットなどの工具類がびっしり。妻に笑われます。鉄道が好きです。定年してからガンプラにはまりました。本格的な模型づくり。でも歳を取ってからはますますレストランは苦手になりました。でも幸せです。けれど、時々公園を

あるきながら、考えます。都市とは何だったんでしょう、華やかなものは加害者ではなく、被害者でもありません。それはわかっているのです。でも、波のように引いていこうとする眩暈を伴ったその一瞬、かけがえのないものを失った哀切に、ふるさとは何処にあるのか、と、嘘のない、隠しだてのない、真実の気持ちで問いかけたくになります。

# オリジナル意識 シェイクスピア篇

---

ウィリアム・シェイクスピア

*William Shakespeare*

1564年4月26日～1616年4月23日。英国の劇作家、詩人。エリザベス朝演劇を代表する作家であり、卓越した人間観察眼と内面の心理描写により、最も優れた英文学の作家とも言われている。また彼ののこした膨大な著作は、初期近代英語の実態を知る上での貴重な言語学的資料ともなっている。

## ソネット127

*Sonnet 127*

その昔、海の沖から吹く風のように黒は、新しく凍った雪の上・・

もの言わぬ夜が明けたのは・・暗い気持ちで深い海のほとりを歩いた時――

その黒を発見してから、美しさはひそかな湿りで汗ばみ、

、、、、

名となった。・・いま星の鏤められたように、美は。

そして夜、石炭のように黒い肌理が湖を悩ませた時、

他の女に心を燃やしたことなど――

おお！ひとすくいの水のことなど・・

ちょうど、昔・・酔い痴れて惚っとりとしていた時、

あの日、恋の熱に浮かされていた、

みずみずしさ を思い出す・・

いること

あなたに囚われの身でなかったら、情事をする、

羞恥心も起きない、くちびるが・・

うやうやしく触れることも求めない、

、、、、、、、、

おしゃべりできるのに、迷い込むこともないのに

いたる所で、真の美は偽と思われ、あの波も、

蟻一一、相手にされない胸はさみしい…

心地よい甘さが神聖ではなくなった…その瞬間から、

恥のない人生が始まり、でも、崩れかけた藁小屋…

電光の真っ白いほのめきのあとに一一真珠…

心を知りつくしているあなたの眼は黒…

葡萄酒のように私を酔わせ、昔を憶えば、

人を酔わせる、罪の舌、失恋の悲しみまで打ち明ける…

一体何に涙に暮れ、まだ知っていない、わかっていない、

美しさの定義にいま湧いてくるはずのあわれみよ…

本当に苦しみを紛らそうとする燐光が、

礼拝の道具一一、その眼差しは、まだ泣かない…、

すべての舌が、何ら責を負いはせぬうちに、

やすやすと遡り一一、あなたへと堕ちてゆく…

ときおりその瞳が夜であろうと孤独であろうと一一

いぎたなく眠りこけた美が…こうして夜の続く限り現われる、

またこうしてその真珠に心が寄りそうように願う一一。

## アミアンの歌

吹かれて動けば、心も乱れる、

アミアン！…アミアンの名は、

かつてこの地のガリア系部族、アムビアニ族から…

好奇心を抑制するのも、不親切かも知れませんよ！

寝そべっている浮浪者たち、いえ少し不親切すぎるかも知れませんが、

誰にも迷惑をかけないように努めて…

上品な暮らしをしているじゃありませんか！

でも、人間の忘恩など。歯切れが悪くなり、敬うことを忘れる、

私は見たことがない、——別段、物識りぶるわけでもないが、

あなたのモヤモヤした心が失礼な模様！

ホー氏！ホー氏！…歌う、エメラルドの柵とありながら！

ほとんどの友情なんてと片眼を瞑る、

…最も愛するとぼけたピツエエロ！

その後のことですって！…ホー氏、孢子——ヒイラギ…

こんな人生は！終わりにすべきだよ…クリスマスみたいだから！

耳に逆らうようにお前は酒に酔っている！…

[フリーズ、フリーズ] 汝はにがよもぎの空…！

chorus：にがよもぎ！

はい、そうですよ、にがよもぎ！ 汝…その近づいて噛まない

原住民！でもほら、…劣等な人間は犬の真似をさせたがるから、



「ほら片脚をあげて、この肥え太った豚にかけな！」

ああ…アミアン——伝統の誇りを自覚しています…

アミアン中にある水をすくって咽喉の渴きは癒えない…汝！

お前が勝利するような場面が思い浮かぶわけではない、

友達がいない過去を思い出す——また思い出す…

こんな路上でものをねだらず、大道芸人の君じゃないか！

ホー氏！ホー氏！…歌う、エメラルドの柵とありながら！

ほとんどの友情なんてと片眼を瞑る、

…最も愛するとぼけたピツエエロ！

そしてねえ道行く人！…悪あがきしないでさっさと

森のお前の住居へ帰れ！——と君は言ったのか、酔っ払って…

あるいは口が滑って！でも彼は帰らない…

だって彼の人生は最後の一言に、ふと心を惹かれるから…

アミアン…アミアンの名は陽気な花——。

今日、女の子が、パソコンを、

引きずって、歩いているのを見た。

ふざけてるとか、じゃなくて。

怒っているとか、じゃなくて。

ずるずる、パソコンはバウンドする。

犬みたいに、

首輪をつけて、

女の子が、パソコンを、

引きずって、ずるずる、

棺桶みたいに、引きずって、

歩いていた。

俺はあまりのことに笑った。

しかしそのあとで、

世界って明日終るかも知れないな、

と、本気で考えていた。

8 あたしの短歌

1

ボーナスが 出たら買うよ ぼけ！茄子をと 言った父上の浮気写真を  
駅までの電車がなくてキャプテンと夜を燃やすためニワトリ燃やす  
アパートにホンダのカブあり株だから安売り・高値を気にする夜もあり  
天才歌人うたわれる夜もあり節操もなく抱かれればいい

2

ブスを見てきれいだという女は駄目！ 酢豚好き、とブスと刺されても  
「部屋で飼うおたまじゃくしはしろいのよ」「そうね、きれいな女はみんなそれ  
誇りです！ 感謝の念をもちながら、涙にきらめく、母と娘のケンカ  
色に譬えブルウかグリーンというのだがあなたはラーメンといわれる気持ち

3

G★SPOTはまぐりの里をぬけたら吸血鬼はスキャナグラス  
潮干狩りスケベな貝をあさるため九十九里浜たとえが墓場  
ダイエット無駄なジュースをのむほどにgi gi gi-カチャ と ふくよかな女

お尻に当たるチャックの皺うっとりとびりびりの手紙やぶいてつなげ

## 4

春ですね！ けっ、じつは夏（笑）といれ鈴虫らしき鳴き声つめたく

叩いたわ二つ三つ四つ五六五六と夏目漱石の偏屈☆われにも

錆びたマイクこわれたマイク飾られたマイク・まいまいもマイク・つまむ

バス停車きゅうっと卵にぎるよ比喻はわれても続柄のTAMA

## 5

わたしはいまも生乾きのパレット 部屋にうなじのともしびがのこり

うつくしさ それを知るため薔薇を買い ささげることでその夢を買い

遙かはるかこう線が折れ矢印に瀬踏みをするが朝きみの部屋にいて

浴槽に泡いっせいはじけてゆくオリーブの卵うまれたころから

## 6

終バスからあやまりますって体温計くわえたあたしどうすればいい

たっぷりと洗面器からうるおってタオル／てのひら／あなたとのキス

こぼれたのMILKさかずきが傾くよに交わる裸身のいまだうつくしき

言いかけてやめてブラウスを身に着け柱時計の音まねるわが乳ぶさ

7

タバコ吸うしぐさがフィルム・アートです！ ジャン・コクトーよ、眸も貝の

天使うまれるはち月の終焉りとは悲歌に追憶あり風もあり

あたかも夜の帳おりて魔術師……煙・草……は余白を……殺・し……煙草は……

囚人……！ 悲しくて熱帯の雨——— 問いなき答え／答えなき問い

8

森のそよ風を買いにゆく柔軟剤それはあたしの優しいにおい

干す時も ルララ……取り込む時も ルララ……着る時もしてる あたしのおい

「ドラム式洗濯機が、そろそろほしい……？」 「いいえ、ふたりの部屋に置きたいの」

庭へゆくサンダルをいま履きながらこの庭にはない陽射しの楽園

9

ソックスに赤いペン折りて入れ林檎、蒸しタオルがいきいきと腐らせ

ワインで、口の滑りがよくなったかしら／玩具、足裏やけつくいたみ

ここはリーマン通り／蟻／さみしい蟲／ち・ぶ／ペ・／にしりんはどんなひげから

羽根ひろげ て／ね、靴下スリッパう う ん／いまはMusic is My life

10

ポオの笛アイスクリーム・ふれえずよ、透下テキONで、「やり直せるか…？」の尾

汀／朝、雨に瘦せたよ、／…転生したって、／12小節のブルース

イヤリン心臓にBELL、BELL、BELL…、LLEBよめなくていい裏返してよ、胸

恋をしてあたしのそれが水いちぢく／胤もないのに、／蕩けてるてるて

## 1 1

幼児期より殻を破らねばひとしづくの灼熱もう一度生まれて

みどりしたる すれすれにゆるめると（あたま）血ぬられ葡萄は紅き

いたゞきにはサイボウの皿まはるごと下枝ひんやりと実を結ぶ  
しづえ

それは水の紋 死の後を生き君の我慢／あたしは放浪する幹の皮剥がして

## 1 2

*radio*

つぎの夏は、おもひでから始めたい（おほぞら）へガラスのわれる日記

おだやかに灰はカプチーノへ／あたしの星／をさな児に乳ぶさ 喉をかすめつ

去勢されたソプラノは彫刻刀でアポロンのよこがほ…しづけ さが照る

つぎの夏は…b b b…、おだやかに…b b…、去勢された…FLASHBACK

## 1 3

段ボールを敷いてすのおぼおどみたいにD?j? Vu すべベッていくんだ

くさばなはcolorfulなマニキュアを塗りあたしはビューなビュウ・ingをつけて

百年後でもきみの小石や／恋しや…、指にふれるセツに狂れた くもありや

「ここで曲がって「ここで行き止まり「恋は二叉路、あなたの歩みに友するのが嫌

## 14

あいくりうむ LOVE

アフガンダイオウサソリ／プレデタービートル／ツチジムカデ／ギュリキマイマイ

あ、…引いた？ ごめん虫好きな子ナノデス、デス、です・すとおかあになりたく

ど・ちがうだ・かあほ／ふい・ふい・ふいっじえねらるぢど・ちがうふいにゆっしゅ

マリヤの胸にナイフ立つるをとめごよ透視をゆめむふかき絵去りかねつ

## 15

やわらかい夜のTeapot

耳なしヴァン・ゴッホむしりとられるまえにヘッドフォンのよるのあかるさ

ねむってよいかくび筋のpendantなめ、へたnaピアノがばすてるnoカラア

「ねえ、ごらんよぼくのRain子音、こおと、「ふざけたコード、蚊アド、でもドア

非国民と呼ぶがいいエロティック・アアとアアケエドという平和宣言

16

*e-i-g a*

ねうち

ほほえみは百万ドルの価値あり日本人やめたしStreet Stroke

十月 くちびるがとれた、火事めぐり来むコンニャク・ふるうふ上手くいへなひ

ボンネット押し倒され（たように思う…）カジョーナやめてをやめてよカノジョ

「ブス…」「ですというのも「泣き顔だから？ ひそかに皺が蹴り合うアイもある

## 9 自由律俳句詩「拡声器」

一豆電燈

寝がへれば豆を獲ている遡るかに

灯にみだれ/脚ばたつかせるみだらなほどに

め

昇天せよ！ 瞳に降る雪が離れない



一星を憶心のは何故か？

それは拡声器のように要所要所で雑音が入った

しだいにやはらかく月に佇つ

つゆ載つたまゝ掌にインクの色をかすめとる

古き感傷/活字のごとく膝にこぼれたり

—そういえば梅雨であるなあ

と彼はヴェランダに腰掛け、たばこ 烟艸を吸つた

紫陽花が咲いていた ……“若者”は火の粉なのに

風呂敷みたいに—夕立ちは きえ

ばらいろのまゝに影はモディリアーニ

## 10 自由律短歌詩「姉妹どんぶり」

—yeah ありえないくらい彼は絶好調で、エクスタシーの波に漂って、レーシング・

カーのように時速1000キロで突っ走っていた。止められないのだ止めたくない！

ていうかどうやってブレーキかけるの！ yeah まったくもって彼は、ドント・ストッ

プ・ミー・ナウ、、ドント・ストップ・ミー・ナウ！ 何故二度言ったのかそれもよく  
わからないファンファンファンじゃ酔えないからってそれもあまりきちんとした説明に  
なっていないぜワンフラットとりあえずそれらしいことを言ってみたかった彼は同級生  
の家へ。もちろんその時、頭の中で岡村靖幸の「聖書」が流れていて、ワーウオ！

+ + +

…お茶です。——あのお、これ不味くて飲めるかい！

大切なことは縛ることです

HEART★LOVE

+ + +

制服は汚れてもいいよ

家だから

コーヒーなんだよ牢屋の差し入れは

映画みたい！ 燃焼系青春！

捌け口はまず

「わたしで」と言え

+ + +

…お姉ちゃん。——あ、ごめんなさい！ 鉛筆削りが欲しくて

大切なことは撮ることです

HEART★LOVE

…妹よ ナイフで削ってみたいくないかい？

+ + +

大丈夫かたい膨らみ

ドアノック

姉のゴム鞠、妹の幼つぼみ蕾

「ほんとうはインポなんです」

え！え！え！え！え！

邪魔スンナボケ

艶めかしいは声

## うつくしい女

見られてる ワタシ綺麗よ 化粧ぴたと止め b y 夢みる働きバチ

「わたし、けっこう好きだな…」で改めて b y うーん、Bかな

十五年 見ざる聞かざる 名もきかず b y ゆらゆら

心の旅をしている内に齢をとり b y 韓流ミトコウモン

背肉ブラ 詰め放題の妥協点 b y さすがに世間体ってあるし

眉毛剃り 夜、かわいいという男が 豹変し b y なんか妖怪

モンローちゃん モンしろちゃん モンもんたん b y あだ名の付け方すこし変

モンロー step,モンロー Jump,モンロー Shut up...! b y イエー、ゲットアウト

目的地 着かないところが 人生だ b y 人生の心得

黒タワシ 白青タワシ 赤タワシ b y 妄想の自虐

なぞなぞの 謎はあなたの 口調かと b y ホテルラウンジパー

赤い糸 /チョコを配って お立台 b y 女ってすごい男はエロい

## 電話

電話線 無理に引いたら 切れちゃった b y よくあることさ/ねえよ

「〇〇さん、ご在宅ですか？」はい、留守です b y よくある掛け間違い

待ち合わせ 再三再四の問い合わせ b y お掛け間違いですよ

「…だったわけよ」と女はいうが三人目

b y キツネは九尾ですぞ

目を覚ませ 止まった画面に知る立場

b y 男は背中で泣いている

携帯写真 厚化粧だったら どうしよう

b y 素顔を知らないぼく

電話では 水は澄んでも会えば汚泥

b y まあ、よくある話っつーか

電話くる いよいよ敬語解除/愚痴開放

b y フィーバー！！！！

「電池切れ」調べてみたら「寿命きて…。」

b y 灯油の中におちた携帯電話

携帯を 隠して話す人 ヤバい話題

b y いや、そんな気が…。

薄情 魔SHOW OH…バクシュン

b y 電話関係なくね？

電話からテレビの音が聞こえてた

b y 脈ないな、これ…。

## 妻

妻寝てる つまみを食べて つま締めたい

b y そしておれ真綿で首しめたみたい

細君を 妻とかくのも 細工です

b y 仕上げは五郎誰だそりゃ

機嫌知り つま(り)うつくしい と褒めたたえ

b y 日本語むずかしい/ガッツだね

安うけあい 三步先行く 断れない

b y アイル妻の部下アア！

ゴマすりで 器量をためす いまの時代

b y 揉み手うまいよオレ！

半額はソラ/高級服にはシラを切り

b y き、記憶力って…。

これだけ買えば鳴るだろう…妻の眉間皺！

b y 蠅螂拳…？ あちょー

メイクで目エ逝く妻だからめえめえなきたい羊ごろ

b y 倦怠期こえて洗濯機まわって

ねえあなた！ あかるい声には ￥がつく

b y エプロンの紐/財布のひもゆるめ

頑張れよ！ わたしはこれから スポーツジム

b y 縁の下おれささえすぎ

家族会議 リーダーシップは何故か俺

b yいつものようにやりたまえ

過労死は ツマのいるところ ホントのこと

b yあの日あの時君に～♪

## 流行音楽

びみょうなaikoはアイホーンと男は

b yぷぷ、インターフォンみたい

EXILE 近頃何かが 試される

b y音楽ネタ、振るのやめ！

ダメサレタ /aiko騎馬戦バットもつ

b yAKBって…。

レミオロメン 反省する気もなく あーマスクメロン

b yメロン戦隊超豪華

飼育係 蛙解剖 おーいきものがかり

b yファンに殺られるよ、ちみ

お、UFOに似た星 くしゅん サカナクション

b yハクチュン！チュン！

ジャズ・セッション となりの席の ファックスが

b yぶきみな起点

笑えわらえと 剃刀が置いてある

b y勝手にシンドバッド

平泳ぎ ゆうやけ色に シャドーイング

b yハミング/口笛

道化服脱げば比叡を焼いた本願寺

b y第1位としての日本

野性なれラップは羽根のドライアイ

b yイエートライアウツ

オールドミス 近頃人形劇が流行ってて

b y痩せてるね…。神呼吸

## 女優

いわれてみれば 黒（木）いね瞳 お手洗い

b yいいねアソコも真っ黒だよ

キャメロン・ディアスの「酢」ならとぼくは

b yお世辞も上手

篠原涼子の「恋しさとせつなさと心強さと」

左右確認 こんにちは 蒼井（だけ）さん

誘われて 心で付け足す 菜々子はね…。

ほほえんで 上野樹里だと ルール変え

四分の一のふぁんたじあ

点滴を見上げ流れ弾 そしてワタシは生御魂

女を抱いている/いやいや ダチワイフを

女優名 眺めてぼんやり 近くなるやがて

ここに神おわすファンファーレ試供品セット

ふじつぼの幸福の科学  
と

## 株

株分配 仲間うちでは よい男

株取引 出稼ぎみたいね あのねばり

凍死する 口では言うが 投資する  
ば

腰掛けと 株で一攫千金 いや転職誌

マイホーム 海外別荘 初投資

株を買う 一難去って また一難

あたれば南国はずれりゃ生命保険

b y 涙は見せないでネ☆

b y もうゆっちゃいなよYOU

b y カマトトぶるな/名前だもん

b y 似ている芸能人

b y ドギーバッグってこと？

b y 女優をみる女優

b y 試着室もあるのよ♪

b y ファン心理

b y なれるさ、きっと…（笑）

b y キスって言え、せめて接吻

エクトプラ

b y 女の場合は稀な歌舞

b y 中国フラッシュニュース

b y これ釣りか？ ああ釣りなら

b y 迷うことが人生ですぞ！

b y 最初が肝心なのかな…。

b y 落とし穴/それともその先に

b y パワーブレスレット

ラジオ消す日にカゲがありますボールペン

b y ていうか、競馬なんじゃ…。

お小遣い 不況の詰まった冬の位置

b y 株、関係なくね!?

窓開けて出刃包丁を持っている

b y 追い詰められすぎ…。

素人が深夜かなしむ 時計鳴り

b y トライアル・アンド・エラー

指人形 見知らぬ人の杭十本

b y データは確かか、間違いか

## バス

バス揺れて うちの子が話をする/飛び出すな

b y ペットは差別用語です!

広い椅子 気分は草原 降りて! シベリア

b y そしておれはカナリア

定期券 これでいくらと 遊園地

b y わーい遊園地/ぼこ。

うとうとと 猫を抱いてる バス気分が大事

b y わーい遊園地/なによ

リモコンで ジェットコースターのバス速度

b y おいこら訴えるぞ

バスの中 中学生が ムシ話  
や

b y そして、ムカシばなしですじ

席どうぞ 立って沈黙! だれのこと?

b y 優しさ…優しさって

シルバー席 デパートの広場みたいだ

b y 枯れ木も山のにぎわい

テロリスト 尻っ尾をつかまえ赤ン坊

b y やらしお

正義とは ブザーにも赤林檎をうつすらし

b y 自爆

欲張らないの、陽はいつも窓

b y でもその先、崖よ

出て行けと言えはだあれも知らぬふり

b y え? 何か言いましたか僕…

。



## ダイエット

痩せたいが やつれたくはないと やつれた句

b y 冬に我慢大会鍋が好き

ダイエット おまえを見てると ミュージカル

b y 殺すわよ、…あ、はい

「何回目だ」「一度目よ、ウフ」「オエ」と痩せるおれ

b y 幽体って何グラム？

おおマサ夢だ 豚が真珠になった あ…ずるり

b y すっぽんが月 あ…ずるり

ダイエット朝昼晩までクラリね、っと

b y あ…ずるり

(脂肪) 出すのよと 掃除機かけて 追いだされ

b y こらポリゴン！

おかあさん ももいろお肉に ムール貝

b y マイケル・シャンソン

シールといい シュールといい セールといい

b y わたしはセーフと言い、ウフ

一キロを カッターで切りたい 端数のように

b y 強がりはやせ

胴上げを 見ててわたしも え？ おまえ

b y そ、それってどういう…。

犬かかえ きょうは天気かと いってみる

b y あ、雨かな…？

水を飲む事象に強い解釈せず

b y 夏場がくわいわ

## パソコン

性能より パンツをはかずに「俺の子だ」

b y 技術は上、反応は下

心を持たないはずなのに 好きさ Yahoo!知恵袋

b y こ、これって自作自演？

パソコンに パアそお 今度ねとダジャレ書き

b y やっちまったか俺！！

コンピューター/イエー こ・ん・ぽ・たとようやく死

b y ふたたび俺！

電化店 ぱの字もしらずに アントニオ

b y え？

お互いに (悪いところは) 直しましょうと 語りかけ      b y え?え?

木馬の膚の色終わる /靴の泥      b y え?え?え?

セレナード大繁盛で ネタのリクエスト      b y 恋愛詩人

モノ忘れ ド忘れ 次の手間ハブけ      b y リクエストする母

マイナスイメージ 死ねよ笑い 逝ねよ健やかに      b y 救急車で搬送中

ホームページ 突然音楽流れ △□と点数をつけ      b y やっぱりビビる多き

逆さ吊り タロット占い地下への扉      b y すぴ・か・じゃないよね…。

巨大なキューピー人形が俺の前にあらわれて言う。

ちなみに、いま、戦争中です—いや、でした、が正しい…。

時は西暦二一xx年、核ミサイルがこちらへ飛んでゆくことを、

受信。ただちにあらゆる情報通信機器に緊急避難が発令され、

自殺志願者全員核シェルターへ避難。

でも大丈夫、地下シェルターはもう都会と全然かわらないし、

核汚染浄化装置をちゃんと開発していることは、ニュースで報告してたから。

日本は戦争をしない国なのでいつも準備万端なのである。

と、安心しきっていた俺だが、俺は大好きだった、

くまのぬいぐるみを忘れたことを知り、

あと一時間よ、ちゃんと戻ってくるのよ、と母親に念をおされながら、

こんな恐慌状態といいつつ、子供たちポテトチップスを食いゲームをし、

大人は大人で、いやあ、会社が休みになるっていいねえ、なんてのんきなもので、

僕が出て行っただって、まあどうせ戻ってくるんだろうみたいな扱いで、

脳天気の実家へととことこ戻ったのである。

空がさあああっと青くて、きれいで、地球はうつくしいのだ、と俺は思った。

でもこれから全部これがこわれちゃうんだぜ、と思うと、柄にもなく、

感傷的にもなった。いかんいかん、精神を健全にする音楽を聴き忘れたからだ。

不自然なほど、牛のようにふくよかに聞こえる学校のチャイムが鳴り響いた。

まるで焼けつく前になめらかに見える紙のように、

それは何かの革命の合図のようにさえ聞こえた。

森の中のジョギングシーンを入れたいような気さえした。

ぱしゃぱしゃと水遊びする川でのシーンを始めたいような気さえした。

ともあれ、家に戻り、俺の部屋にはいると、

そこに、巨大なキューピー人形がいた。

俺はとりあえず、殴った。ぼこっ、といい音がしたので、

きょええええええええええ、と必殺の飛び蹴りをかました。

しかしすると、巨大なキューピー人形は、ああ、クソ、めんどくせえな、

と、低い完璧にキレた女の声で言った。俺は少し引いた。

「お前さア、空気読めよ。」

「……すみません。」

「何してるんですか、から入れよ。」

「…………かえすがえす、すみません。」

こほん、と咳払いした。それで、あの、何してるんですか、と俺は言った。

急にキャラモードで、猫撫で声になった。

「あたしィ、魔法使いなのォ」

部屋がしーん、とした。

俺の顔はこわばり、核ミサイルが飛んでくるのもあいまって、

まっさかさまに落ちた。というか、ガラスが砕けた。

何かは僕の中で完璧に撃ち抜かれたような恐怖を感じた。

秋葉原で、萌えると叫んでいる少年くらい痛々しさに俺はまみれ、

コカコーラを飲み、ハンバーガーを食べ、アメリカ気分にあひたっている、

ハートが血を流し、痛み、だいたいもんだのような涙を流したかったが、

それはできないので、俺は唇がかわいていくのを時の流れに任せた。

ドーン、ドーン、とどこかで轟音がきこえてほしい気さえした。

「あなたの願い叶えま〜す！」

しかしその時、奇蹟が起こった。

俺は、震えたように、感動した、涙が出そうになった。

こんなに空気読めない女ははじめてだった。

なんていうシュールリアリストで、ダダなのだろう。

埃をかぶっていた俺の芸術感覚が満たされてゆくのを感じた。

俺は何かが終わる前に、すでにもはや死ぬことすらもできない世界で、

完璧に死んでいる女、いや、キューピー人形と対峙していたのだ。

俺はてのひらのゆびさきに神経を集め、アイフォンで検索する。

<キューピーにんぎょ、>

と、ポケットの中で打ちかけたところで、

「ああ、クソ、めんどくせーな」とまた、低い、ドスのきいた声になった。

俺は、指先が硬直した。

「…………お前、アリスとか、異邦人って思ってるのか。」

(いや、キューピーにんぎょ、)

と、思いながら、

「いや、そんなんじゃないです。」

「じゃあお前、ガラスの靴をなくしたとか、魔法のステッキをなくした、  
とか、思ってるのか。正直に言え。」

(いや、キューピーにんぎょ、)

と、思いながら、

「いや、ほんとに、そんなんじゃないです。」

「恋したいな、愛がほしいな、と思ってるけど、  
東京へ行きたいと思ってるんだろ、パリとか、ニューヨークとかで、  
一生を暮したい、でも生きた心地がしたいなと思ってるんだろ。」

(いや、キューピーにんぎょ、)

と、思いながら、

残り時間が消費されてゆくのを、俺はハッキリと感じた。

このまま、ずるずるやっていると、本当に死んでしまう恐れを感じた。

「…………あの、どうしたいんですか？」

すると、きゅうにまた、きゃらもおど、へ、移行。

「…………ベビーブームですよ、心中的な性教育ですよ、  
アカペラ入門したいですよ、水玉バンドエイド病ですよ、  
ヌーヴォーロマン殺人事件ですよ、ガンダムVSジオン軍ですよ、  
仮想敵なサヴァイバルゲーム的行き先ですよ、

ロボットガールとアニメーションガールですよ、

スナッフフィルムですよ、オペラ座墮落論ですよ、

ゾンビ軍団銃撃戦ですよ、ガールズコレクション君が代機関銃ですよ、

ゴーストライタークロニクルですよ、バカップルやマッスルボディの青春ですよ、

冷凍保存されてる眼鏡ですよ、」

と、彼女はいいながら、すぽっと、キューピー人形のあたまをはずした。

予想通りと言うべきか、めちゃくちゃ可愛かった。整形していても、

最終的形態がそれならいいのだが、おそらくそれは地なのだろう。

しかしそれゆえに、まちがいなく、電波系ビッチである。

世界の黒幕的な存在のように、愛とは抱かれること、夢など見ないもの、

恋などはしないもの、という感じだった。

そしてこれは、しかし、シチュエーション・ホラーであった。

ループ系ホラーへ超高速催眠状態。このままいけば、

ファイナルデッドパーティーへ直行である。

「愛してます。」

俺は、口をあぐりとさせながら、なまとなでしこ、と思った。

いや、きちんと言葉が出ず、なまったのだ。なまとなでしこ。

しかし、俺は彼女のうつくしい瞳が、俺だけを見ているのを、

はっきりと感じた。なまとなでしこ。世界が終ろうとしているわけでもないのに、

やっぱりどうせ終わらずにずるずる先延ばしにされてゆく世界で、

恋する魔法とやらをちょっと感じて、やられたなあ、と思った。

なまとなでしこ、万歳。

やあやあやあ、メリークリスマス！



ふわっとした布に触れる時みたいに一一通りを覆う木の葉が、  
点々としているようなイメージで、お風呂場に観葉植物をレイアウトしている彼女。  
抜けがらとがらくたみたいなお風呂場も、  
すだれでアジアンモダンを演出しつつ、  
蝶々のように優美にのんびり。

(彼女の個人的な心象です。)

(宮澤賢治なら石を投げられ、  
女の子なので一一薔薇を投げられます。。)

「……パーラービーズのモチーフとか、  
鏡を造花などで華やかに縁取るだけでも、すっかり変わるでしょ。」

見違えるねと同意するべきなのか、  
腐り掛けのトマトをペースト状にして、  
うまくスパゲティソースにしたねと皮肉交じりに答えるべきか、  
一一でも魔法にかけられたように、ふたりはアジアンテイストな池のほとりに佇む、  
明／暗の、浸蝕の、つかのまのあいだ浮かび出た模様、

光にして影、寓話的な輪郭、すべてのものの中に生じ得る何か、  
それを四肢のようにゆっくりと震わせ、きわめて穏やかに触れてゆく、  
すべてのものに恵み深い光を投げかけるのは太陽ばかりではなく、  
明るい蛍光灯だったのだ、と今更ながらに考えてしまう瞬間……

それから僕はオレンジ色の光源をじっと凝視し、  
どうしてバスマジックリンにしたの全部それで台無しだよ、と思った。

それでも彼女は額縁に花の写真を入れてレイアウトする。

手ごろな値段できれいな写真がすぐ揃う。

四角い氷ならすぐに丸くなってしまう、

四角い有限は褪せれば捨ててまた店先に並んでいる写真をチョイス、

四角い永遠は一隅しか見えないのだ。だから。でも。

（その昔、堪え難く殺人的な光の骨組について考えていた。

工場だった。追憶の赤い果実はやがてそれは遠い闘牛を誘いこみ、

僕に無果木というある比喩について考えさせた。）

（ためいき深く沈む戦争が、すたすた行ってしまう。

真っ赤に燃えた太陽のような一瞬のあと、焼けぼっくいとなり、

大きなきのご雲が残った。）

……不意に、僕は、

あたらしい樹に飛んできて囀る鳥のような気持ちになった。

あれは本当だろうか、鳥が受粉を媒介するというのは、

――ああ、それは嘘、それは虫です、虫です。

「でも、ねぐらは作られる。」

枕と毛布を持ってこようとした僕に、

やめろ、イメージが壊れると言った女。

イメージを行き来させようよ、

もっとエロティックになろうよ、

ああ、芸術に燃えてこないかこの女！

「抛り棄てよ。」

「僕はベッドではなく、お風呂場で眠る。」

「等身大にひとしくなるな、抛り棄てよ。」

吸盤式のアイテムで壁に、

コップやボディウォッシュやシャンプーやリンスなどを置く。

器用な女性っていいな、と僕は、

不意にそこなわれることのない子供時代の安らぎに包まれる、

咎めることはできる、あからさまに。

そんな風に打ち明けることはできる、口の中にも、耳の中にも。

でも荒れた土地の環境はこんな風に楽園になる、

加工される、宝石がもぐもぐと猿轡をすることで、

イミテーションはもっと輝く、

サービスも、社会も女性のそういう器用な手を、配慮を、

必要としてる、思慮深く、そしてこんな駄目な時代の恩寵とならんと、

人の目を飽きさせない見栄えを求めている。

でも一一。言わなかった…。

「（一一帆をはためくような風を浴びたら、

そんなの何にもいらなくなるよ。）」

「（……………僕はそうだった。

一一翻弄に一瞬だよ、闇に涵った街を、

君もきっと、本当の意味で、抜け出したくなる。

一一駆けだして、光のときめきに巡り合うまで…）」

それでも、つまらぬ夜の物音なんかに目を覚ます生活より、

虚無が口をぱっくりと開けている生活より、

上昇気流に見せかけた風をつかんで去るのかな、

もじもじとしている内気な僕よ、

永く、ゆっくりと、年老いてゆくのかな。

でもひとつだけ、わかっていた。

荒れた、苦しい生活を、恋は癒してくれるだろう、と。

ドアを開けてみればそこには誰もいない、

夜の鏡を覗きこんで――。その後ろに誰かいたら嫌だなあという、  
別のこわさや、しかし一瞬後の空虚と、地雷をのこしながら、  
不意に思った真夜中の妄想……、絵を描き、壁面を彫りこんだ洞窟を、  
そして、女の敏感な頭に、暴力ではなく、花輪を載せるような瞬間を。  
あらゆる場所の僕が慎みとぎこちなさにふれながら、  
かさぶたを剥がそうとしていた。  
禁忌へと、本物の、甘い、蕾を、木の実を、探していた。  
彼女は、その壁にシール式のモダンなモチーフを貼る。  
僕は陶然とさせる樹木の腐敗にも似た観葉植物に人知れず酔う。  
有機の世界に迷い込んだ無機物のような詩人は、  
ジョギングをし終えたあとに、ちょっと戻った地点で、  
彼女の腰を抱いて、素敵だと言いながら、キスをする。

その 空気は**新鮮** で

(.....聴覚を ....調整しなくてはいけない )

.....誰よりも先に新しい星を見つける

駅前に渦巻いている黒や白の格好から、

無表情なサラリーマンたちが暗流を遡る冷やかな鮭の群れのように、

.....その対極には「物欲」と「虚栄」の放射熱がある。

、、、、、、、、、、  
均一な速度で流れている。

都市部を流れる川の平凡な光景が-----

ステーション・ワゴンの速度を落とす.....

[君は諸原則を演繹し、

概括的にこの単純にして把握し易き理論を知る...]

円い腕時計の硝子の上へちらりと影を落とし、

時間がぴたりと止まり、空が落ち、海がなくなり、音が止み、

回転がなくなり、光が消え去るまで空しく真理を探求する。

.....誰よりも先に新しい星を見つける

「情念の風車」と「真鍮の巨大な皿」...

さもなければ「鋼鉄の刃」

(君が血液型や、星座や、誕生日について思っているけれど、

そんなの車のタイプ、年式、ボディ・スタイル、色、速度と、変わらない )

——無常だね…、でも、茅蜩は鳴くのさ…

空白に諦めと無感覚が一日の終りの街のどよめきに触れてくる。

野心もなく、精神の姿が虚空となり、さながら濃藍の水平線にでもなり、

呼吸のように膨れては下がり、また大波が刺青のごとく走る。

異様な姿をしている——

多分わたしはもう死んでいる——…

足取りは重く地面に吸盤でもあるように生命が吸われてゆく>>>

——それを止める術はない…。

君は——まだ迷子になった煙みたいに浮いてる…。

……黒い影を伸ばしてゆく——んだ……。

……そしてもっとガラスの表面に引っかき傷を作る——んだ…。

ヘッド**ライ**トが照らしている。

(……海の…乾きを )

……誰よりも先に新しい星を見つける

倒れたヘッドライトのバイクがそれでも車輪をゆるやかに回している。

エンジン部から流れ出した黒いオイルが路面に伝わって、下水の中に滴り落ち、

パチンコの小石のような鼠が、暗く、みすぼらしい階段でそれに気づく。

……じりじりと「炙られるような熱気」が





沈澱してゆくこの香油は、僕という命は痛苦さえ訪れない静寂を誘う

)

——心がふるえなくなったら…、もう、一滴の油彩さ…

北極星よ、流れ星よ、願わくば雪を催してくれ、四月の濡れた光をくれ…、

十月のさみしい秋の投げ網のような星座をくれ、曼荼羅をくれ、

いやもう、率直に絶望をくれ、俺がもう、濃い霧とともに遭難できるように…。

空洞の冷たさにおののいている——

もうアイスクリームの塊なのさ——…

ワルツのように流れてゆく灰の時間が銀の細工のしづくに変わる>>>

——探り針が突き刺さる…。

俺は——一体何を拒み、何を受け入れたんだろう…。

……こわくはなかった——んだ……。

……でも静かな気持ちで世間の口に立つ僕は——さみしかった…。

時は 顫えたまま に

(……汚染を広げたままに …見知らぬ地図を宿命的に描き )

「水滴がはじけたようだった……」

暑苦しい夜だった… (声はもう聞かれなかった。)

(身体をやさしく包み込んでゆくのは割れ目だった……)

「すさまじい音がした—————

名伏しがたい鈴の音のようだった——（次第に感覚を失っていった。）

（公園の老いた樹がものがなしいほどに落ち葉を降らせていた……………

「愛を探していたのだ……………

胸から咽喉にかけて電流が走る…（時代は街灯に舞った雪…）

（そして雨だけは地面に向かって走って行った……………

「墓の声を聞いた—————

都会のレットルに吐き気がした——（天才を装う道化も見た…）

（そしてまだ終わらない歌を聴いた……………

「肉ひき器のなかに落ちたキャンバスやパレットや絵筆たち……………

結末は迫りゆきたちまち落ちる…（無暗に勢いがよい線香花火…）

（でも僕は空き缶を引きずる音を聞いたよ……………

「身体の深みからふるえが走るんだ—————

冷たい戦慄なんだ——（残酷で無慈悲な夜の溜息…）

そうして崖のような夜が終わってゆくよ——

折れそうな幹に月朧の戯れを残しながら——…

（君は人形劇の整列を知らないの——）

（君はまだ、唾を含んだ怒声を知らないの——）

.....誰よりも先に新しい星を見つける

饗宴の横波を受ける小さなボートのように不安定に揺れる。帆柱は、

蒼い結晶のように染まる、炎の坩堝のように染まる、時には鉱石質にも見える――。

.....傷跡は「ギラついた油」と

「はがねの板」のようにも思えてくる。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

電気より早く駆けぬける。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

光より早くさだかな形をうしないながら走ってみせる。

濃淡いりみだれた混沌の地で――――――

雲は星を掩いかくしただらう……………

[美しい世界が何か信じられないような気がしながらも、

媚薬の痺れにも似た美しい合唱曲に心揺れる十二月…]

僕は人の目に笑い、怯え、疲れ、そしてその悲しみや切なささえも連れてゆく、

何処へ…？ 人と別れた瞳の中へ、山の向こうから発する、光線の緊張の中へ、

ややもすると浅い受け皿のうえへ、やさしい微風のように、木の実を落として。

.....誰よりも先に新しい星を見つける

「林檎が厚ぼったい唇」になり、

それは多分「切り取られた巨大な眼」だよと…

さもなければ「マリアの腰帯」だよと――。

(ねえ、パセティックな気持ちがガラスの棺にも真空にもしてしまう生の

断崖で、

僕はじっと静止してる…移り気な空のように、新しい訪れを告げながら—  
—)

——愛を知らない…、遠雷のない夜空があった…

そんな時に僕は人知れず、砂漠のように憂鬱な大地へと心を変えていったものだ、

穴だらけの古綿、水銀、ナイルブルウ、絵画的な印象、奇妙な凸凹、

一度として言い尽くせなかった夜は、いま、したたり落ちそうな灼熱の青…。

「わたしは――」

と、言った橘梨花は、あかご すがた 嬰兒の像さながらになめいし せつかせつこう 甘美な大理石、あおざめ うみ 雪花石膏、あるいは蒼白た鹽海を、  
はくるう ひ 思わせた。白蠟の冷やみ、ウツズ 深い森のどこかゆうじゃく 巨大な鳥居を思わせる樹からしたたりおちる幽寂な  
ささやき 私の私語、チョコレート その、柔らかな異像が僕を包んだ。猪口冷糖は溶けていった――  
カメレオン オルゴオル 避役のやふな自鳴琴……。

ロオブウェイ つな 見えない空中電纜の索が――、そう想わせた……。  
、、、  
白い少女、無聊な少女、遍照光少女、白粉少女……。

光りつつある唇が剽軽な綱渡りのように思えてくる。砂金のように重たくなってゆく時刻が、  
、、、  
勿忘草のようになる。山羊の瞳、鱈のふりゆうとになる。性の衣装をつけられたコンクリイト  
、、、  
のふいるむにトパアズの鮮やかな影の双角を見せた蜻蛉の危機迫る軍艦のような一瞬のがらす  
を見た。どこか水埃にも似た石綿の色をして海の中にあたかも存在している沈没船のようだっ  
マイクロウェーブ た。僕の胸の中は体温が下がるほどに静かな極超短波の影響をうけていた。

「わたしは――」

スカアト アジサキナンデス断片的ナ腰衣。  
ベンチ ペンキガ剥ゲカケテイル共同椅子ナンデス。

――『請求番号』『乱暴に書き写された丘の頂き』『幻視の玉座』というのが、  
ザザザ、ザザザ、ザザザ、

（「鱗と爪」）

カフェイン 珈琲基塩が欲しくなった那由他で阿僧祇な気分の所為かも知れない。  
、、、

空気のや心に光る死の灰の重さ……………。

むづき きさらぎ やよい うづき さつき みなづき ふみづき はづき ながつき かなづき しもつき しわす

睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、霜月、師走。

（「虎の同体が始まって、蛇の尻尾で終わっている」）

ザザザ、ザザザ、ザザザ、

トオテムポオオル

夏の旋風の如く、変質せる凶騰柱…。

乱酔的欺瞞。葡萄の如き青と紫のせめぎ合う所の反乱一一。

「わたしは———。」

\*

一一眼を閉じながら僕は彼女の言葉を待った。

でも次の瞬間、意識がぷつぷつと途絶えた…。

☆

鳥が僕を苦しくした。

星が僕をもっと苦しくした。

☆

墓を塞ぐ石のように空虚な乞食は死んだ。

飛行機はもっと白痴の手紙した。

☆

氷のように曇っている風が眠りから覚めたばかりの湖を作った。

雪のように冷たい表情は海鼠にも何処か似ていた。

☆

真実がひとつひとつ外れてゆくと林檎の芯だけになっている。

嫉妬がじゅくじゅくとしていると陥穽の如き失意で八つ裂きになる。

☆

ロッククライミング

岩壁攀登をするために呼び鈴が鳴る。

コアラ

偉大な想像の滝に僕は子守熊になる。

☆

アンモナイト

鸚鵡螺化石が見つかった。

クリイム

脳髄の中を泳ぎまわる凝乳。

\*

何故そうなったかはわからない。

本当にどうしてそのようなことになったのかはわからない。

シャツが揺れた。そして束の間、少年の神経が荒れた。

それなら屋上から花瓶でも落とされた方がまだマシだった。

同意するのも否定するのも妙案。秒音。ゴムだけのびるし、ちぢむ。

地球儀だって破片から組み立てたものにすぎない。

肋骨だって破片から組み立てたものにすぎない。

でも僕はひとつの偉大な夕顔の前にクラッシュした。

彼女は天才的な犯罪者かも知れなかった。

唇と唇が合った。

リニアモーターカー

線形誘導電動機は霧となる。

バスワアード ブラックホオール

口令は黒洞。

ニョホホバーガーの味がした。

ニョホホドリンクの味がした。

それは嘘だ。何の味もしない。

それでも忍び笑いと豚のような啼き声とする。

街燈の光の縞模様になる。

遮ることのできない巨大な企みのなかに入ってゆく。

そんな風に僕に、なまたたかい息とぶあいそうな触感が、押しつけられた。

ピラミッド ミイラ

現代の三角塔に収める木乃伊のようなえにしだ的感触。

ウイックポイント

十六歳になったばかりの弱点が悲鳴をあげた。

スウパアマリオブラザアス

超市馬里奥兄弟のメロヂーが鳴った。



1818年11月9日～1883年9月3日。19世紀ロシアの代表的な小説家の一人。ロシア帝国の貴族。理想主義的な父の世代と、唯物論的な子の世代の相克を描いた『父と子』（1862年）は、19世紀のロシア小説の最高傑作の一つに挙げられる。日本ではいち早く二葉亭四迷によって翻訳・紹介され、特に国木田独歩や田山花袋らの自然主義に大きな影響を与えた。

## 春の夜

*Весенний вечер*

こがね

わらわらと蛍湧く黄金いろの雲

大地に一縷の希望だ

あか

昼の町、耀るくなる鼻先は、フィラメント

ランプ

太陽において輝き、ああ露は楽しげに語らい

谷から五キロにもわたる蜿蜒長蛇の霧の列が

雑音を遮蔽した

歩くごとに春の霹靂が来る、扶助と加持

ポプラ

白楊の葉に触れる、なよやかなる気韻の風は

ひらひら、陽遊のリズムを通し、

みのも

この葉を水面に浮かべた・・

この静かに透きとおったものに出会う時、

いやな高台に映画の台詞はあった

十色もの緑、ああ二十色にわたる暗い森は肅かに…

かげ

ほとぼりの冷めた深い蔭影…

わたしの笑い顔、しかし、その彼のまどろむ時間さえない

、、、、、、、、、、、、、、、、

眠れない、眠れないと言うのに、今日のこの町は

ねむたげにうるさげに目を開く――身を切るような響きで…

、、、、、、、、、、、、、、、、

日没にマーズが震えて

歓呼し、切断面の大きなたえざる行為を走った

おお15歳の君は、ひと息ごとに遠のく、幼少期は去る

ゆるく撓みゆく心の影の若さよ

私は何を思うか？

*Что я буду думать?.*

ぞっとする過去のすべてが怒っている、…死、もっと猛々しい笑いを持ちながら、私は

考える。そしてその後を考えることが出来ているだろうか？…

乱心した傷んだ靴のわたしには分かり合えなかった、…灰色に寝、さながら湿った生木

、燃えない樹が雷に打たれる。ああそんな人生に、昼寝はあるか？

“でも一体何が死だって言うの…？” だって消え入る煙のように不可能、結局、わ

たしには夜が早く過ぎる！だ…過ぎゆく時にいつも、ああ暗い穴よに落ちる夜は寥し。

いくつかの欲望を満たした高価な絵、得意顔に、わたしのいまがそれゆえ留まった。ふるさとのような過去よ…聖なる悩みを賜ったことを君は覚えているか…？

脛に傷をつくり、押出す膿みのようなわたし…昔のように、魂は悔いる。だが、すぐ改めるほどの瞬発力はない。…ああ、あこがれよ！いまは苦しむばかり――。

、、、、、、、、  
やがて墓をこさえ、葬式会社、遺産の相続の諸問題を書類化し…しかし、わたしは何を持っている。ああ、何を待っている！そしてその向こうに何がある？…

この内省の闇は、天の恵みの果実を腐蝕させた、…さしものわたしの肉体がひたぶる心を失い、…強制的な無垢。おおナンセンスな取引…でも、でも、考えてはいけない――。

わたしはナッツを焙ったものを噛むように、わたしの色褪せた眼の奥にはひらひらと翼を挽がれた鳥。負傷した鳥。その鳥がイカロス…不満は夜を破り、死をうち樹てる――。

暗い部屋だ。室内の人工の明かりも足元までは照らせない。

芝生に寝転んで漫画を読んでいる時のことを考える。

どうしてだろう。下らないことばかり思い出してしまう。

僕はたぬきだった。

たぬきの僕はたぬき鍋にされてしまうのだ。

たぬきたぬきたぬき。

たぬきたぬき。

簿九…は、段々と意識が不明瞭になって行ってシマウマ。

ま、ま、ま、まんとひひ。

ひ、ひ、ひ、ひざこぞうがいたいまんとひひ。

ひ、ひ、ひ、とわらうやまんばにみせかけた、たぬき。

模句…は、段々意識がたぬきになってゆくのをかんずる、

ロイヤルコペルヘアゲン。

変身がとけてしまう。

ドリンク剤をのまなければ。

変身が、返信が、とけたのらよ。

あたしだっちゃん、ラムだっちゃん、

あぽーん！

夕闇が迫り、赤く染まる海。

月経閉止的な印象を持たせる、禿鷹島一一。

海月の異常繁殖を思わせる、空気が、ひとつの、

大きな帆に思えてくる。シャボンの泡立つボウル……。

長針と短針とが同一斜度にくる瞬間、石化するオルゴール、

モーターボートから、人の心を腐らさんばかりに鼠が逃げてゆく。

冬の吹き荒さぶ風を一身に浴びながら、蛞蝓のようにひんやりした委縮が、

痩せたけものの黒い背骨のような島が硯のようにそぎ立つ。

ちゅぷちゅぷ、と、窒息しそうな魚のおちょぼ口を想像させる。

栈橋に降り立つともう、あたりは暗く、黒蟻の有象無象、

それも螺旋階段でも覗きこんでいるような気持ちにさせる。

暫時的習得なしに、懐中電灯とライターを取り出し

月光に藪の中の蛇みたいに粉微塵になる。神経を遣う。

知性の若返りと、強迫観念の解消。斥候。三日後、合流する部隊。

事態の目途をたてるためにも情報を手に入れなくてはならない。

しかし肩すれすれにふれてこようとする蚊さえも何故だか気持ちわるい。

鼻に油でもつけるように、服に消臭スプレーをする。

きりきり舞いするほどの臭い。ガラス瓶に入れられた、蠅。

ただちに鞆入れへとサバイバルナイフを装備すると、

拳銃や、擲弾発射筒などを、

腰に巻き付け、いつでも取り出せるか確認したあと、

キャップをかぶりサングラスをして、

ゾンビ達のもとへと精力的に前進してゆく。

GPSのカーナビゲーションシステムの地図を頼りに。

ふっと振り返ると湾と水平線の作る円環。

くすんだ藍色の水の塊。

ザザザ…ザザ…ザザザ…。

無線機はもう切れている。

木立のなかの崩れた碎石。卒塔婆のような看板。

黒い無言の影。メトロノームのような脈拍が狂うのさえも正確に狂う。

進入口は退出口であり、暗がりのこの世のものごも思えぬ場所で、

事切れた人間を確認する。安楽椅子に座っているような姿勢のままの自殺。

もう狸穴から這いださぬのを願って――。糸の切れた人形の眼の端に光る涙…。

お腹が減っているときの犬の憐れな鳴き声。

非宗教的な死体保存方式を思いながら立てつづけに十字を切りたくなる。

それが女性らしいしなやかさをうしなった、潔さ、覚悟とするのか、欠点とするのか、  
乗り捨てられた車や、事故を起こした車が目立った。

逃げのびていればよいが――。

やがて彼はシンと静まり返っている住宅街へと突入する。

ブラインドでも開けたように空気が変わる……！ いかめしい円形の砲座。

彼は嫌な夢を思い出す。地球上の人類が問う、不眠と悪夢のどちらがいいか、と。

しかし悪夢からまだ出られない――。

人類の邪悪な絵巻物――。黄金の空を剥ぎ取ったミッドナイトブルーの、

海の中の魚のように、人、人、人……。

ゾンビ達の強制収容所。微小な昆虫、微生物、細菌、バクテリア。

連想は布団のように臆病にしかし敏感にひるがえされる。

公園、コンビニ、住宅街、ビルディングに、

そいつらはいた。家具や大時計のように嵩張っているそいつら、

構成分子はさらに分割されながら、焦慮煩悶せしめ、

シャッターをバンバンと音を立てたり、

もう都会では見かけない電話ボックスに入ろうとしたりしている。

もう町はニューンベルグ・キッチンのような商品。

無意味となったクリスマスのデコレーション。



空虚なこの家なき曠野の点けっぱなしのままのイルミネーション。

死はいろいろな言葉で語る百合の花の奥にもぐりこんだ蜜蜂のように。

言葉は瞑想に耽るヨーガのようだ。膨大なエネルギーと馬鹿馬鹿しい自然のリズム。

そいつらの足元は覚束ない酔っ払ったような波長のようにじぐざぐで、

閉口感覚をうしなった非濃縮な歩き方は、狭隘な路地にでもいる広場恐怖症、

いや、便秘から落ちた糞を想像させる。

スリリングな非倫理に埋没する未開の地域的な食欲。

うううっ、と低いうなり声をあげている。無限に遠い未来へと向かう、

原始人。ばらばらにほぐすことのできない疲労が肉体の隅々にまで、

直観させる。口からは涎のような糸が引き、眼球に生气はなく、

パーティジョークのネタのようにおどけながら弩のように飛び出し、

首筋か肩に噛み痕が見えるはずだ。雪崩れと化す野獣。

犬のように発達した聴覚と嗅覚。そこにいた奴は片方の腕がなかった。

服はズタボロだった――。それでも歩いている。

しかも、片腕で狼のような奇声をあげながら、

人間の腕力とは思えない力で、乗用車を持ち上げてひっくり返している。

隠れていた小さな子供が悲鳴をあげる。造形の非常にリアルな唇のみづうみ。

見つかった……！ 殺される――。

でも、彼はそれを助け出す。距離にして十光年以上、救済の可能性は無謀、

もはやノアの方舟のようにそれは選ばれたとしか思えない人間たちの運命。

…研究中の実験だった。

…花の散る如く、そこにとまっていた、

蝶が飛び立った、空へと浮かびあがった。

…蝶は、蜘蛛の巣に絡まった。

その頭上から木の実が落ちた。

細い葉末に孤独な光があたりながら、

枯れ葉が舞いおりる。

寿命が見せる無限と有限の喜劇あるいは悲劇。悪魔の眼は、いつも、

妖刀のようにぬらぬらとしてあやしい。研究者たちの中にも保守派と過激派がいる。

底意地の悪い粘り強さが嫌われても、細部にまで神経を行き渡らせれば、

そういうエリート意識が科学の進歩を早めるのだ花はかぐわしく果は苦い。

だが我々はあまりにも知らなさすぎる、掘割にあふれた雨後の水のように、

エリートというものが、間違いを認められずに突き進むということ。

そして最悪の事態は起こった。それは韻律の狂いがふとしたはずみで、

破綻をひきおこすように、人体の能力を百パーセントに引き出す、という実験。

脳に外科手術をする、特殊な溶液を入れ、

論文上、研究上は完璧な知識の箱をいれてゆく。正確な誤謬。瑕疵。

人体実験。成功すれば惑星でも宇宙服なしで探索できる。

だが、実験は失敗した。日雇い三万という高額に騙された、

何の罪もない男が意識をうしなった。パンドラの箱へと。

しかしその投与された薬剤の感染力は、人間を狂人にした。生きる屍にした。

ゾンビにした集団殺戮的伝染病。さながら、光芒を曳くあわれではかない諸彗星。

くしくも人類史上初めて、人間そのものが破壊兵器となった瞬間であった。

国が捜査に入った時、科学者は逮捕されたが、実験施設のあった町は、

壊滅状態になっていた。旧月をいだいた新月のごとき新聞社は報道規制を敷き、

国家は最悪の場合は情報を握りつぶし、一個の町ごと焼き払うことも検討した。

かつての集団自決のように情報は寸前の所で前足で踏みつぶされながら。

だが、無人島からSOSが入った。痙攣的な変容。投機的決断をあやぶみ、

取り残されながらも救いを信じて騒ぎ立つ五、六十人の住民もしくはそれ以上を。

雪だるまのようになって転がり込んできた地獄からの救出作戦が始まった。

拳銃が鳴った……！ 波を揺すぶる前の枯木のごとくに落ち着きながら、

いやしかし足音が急速に放射状に展開するように近づいてくる気配が……！

それが勤め人のように思えた頃、寺や神社の境内にいる気がしてきた。

彼は無性にゴールデンバッドが吸いたくなってきて仕方がない。

ひよわなアダムがそうであったようにイヴは林檎を投げた

心の中に死んだ蛇がいくつもいくつも流されてゆく川のなかで、

それはふらふらとさせる、嘔吐の発作さえ考えさせる、じわじわと、彼を、

使命感や責任感へともちあげてゆく、彼はいま、若い虎。

## どしゃぶりのラーメン屋前から

---

ラーメン屋を出てどしゃぶりの、

フット・ブレーキ！ ループする巴里の灰色！

タクシーがいつまでも来ない。数秒後二キロ以内の稲光、

クリーム吐きだしても結氷してしまいそうなデートのハプニン！

きゃあ抱きついてもいいぜでもそうはならない、

咽喉の所まできている白い音符が石榴するゼソーセジみたいな僕に、

小さなビルが壊されてどっかが倒産してる二キロ圏内、

俺の中の（Let's GO）クラクションが、

PPP... マスカラを落としたシャワーになって、

どうして、俺の中のラジオは調子が悪いどしゃぶりの、

深い瞑想の穏やかな気分に邪魔が入る下司な札束。

・・・彼女が待ってるぜ、

「そろそろ結婚したいんだけど、」

（chance...）

きゃあ、うひょう、

人生モテたいぜでもそれだけじゃない・・・！

<折り目正しくズボンをはいているような男だぜ俺は>

<スカートをおさえながらマフラーを気にする女だぜ君は>

そうだねそうだねそうだね！

うひゃああん！

ばっちりシャッターが押されて、

クリスマスソングが店内から聞こえてくるけど、

なんだかロマンティックじゃない横殴りの雨、うう…

ちっともお洒落じゃない発砲したあとの血だらけの、

死体みたいにああちっともお洒落じゃない。

エブリバディ！

俺の中の（Let's GO）クラクションが、

PPP… 部屋に入った時から鼓膜に刺激したかったよ、

ざらざらの嘴で本能的な爪を焦がしたかったよ、アウ…！

意味わかんないでも意味わかんない方が燃える、

PPP… 戦利品をながめる愛と沈黙の海底へとおりてゆく錨、

アルバムの中は今日の君だけに懸命ですべて君だぜ！

いまヘビメタしたい夜の水溜まりへワントゥスリでジャンプ…！

濡れて帰ろうぜびちゃびちゃになろうぜ踊ろうぜ、遊ぼう、

メリーゴウラウンドの電源が切れない…！

シー…システィム…

シー…頭の中に混ざり込んで来るスティム…

どうしたいどうすることもできない、

届かないけど恋するって甘いことばっかじゃない！

けど、空気を肺に送り込む（good-by）じゃ、

uh...Ah... さみしすぎるから。

you...Haaan... さみしすぎるから。

hahaha...ウウ...

ああ...uun...いつまでだってそうだよ！

いつまでだってそうしているつもりなのかい君は！

タクシーは...いつまでも...俺に気をきかせてほしい...ウウン...

神様にダイヤルを合わせて...無数の蹄の音...

ドファッ...ねえ神様あなたが邪魔したいのもわかるけど...

愛がなまめかしく脱いじゃっても...それは愛だよ...

ヒビゴウ...こんな気持ちさわさわとなりだすぜ、

ドシャブリだけど、雨だけど！

咽喉仏/ソーダを何かことこと煮てみたき

あじさいのコーダながれて夏落葉

睡蓮のまだ暁知られてゐるやふに

盗聴する蠅/思つた以上に勤続疲労

火のつきにくい花火ひぐらしと光りけるかも

る・ん・る・ん とサア栄養失調、夏の旅

汗は名演する「いつもの、いつもの、」孤独なり

ゴーレムが石炭宣言する炎暑かな

アワビなら結婚してもよいという値段

ヒロシマの日燦めきながら揺れながら

オーボエでタラップ下りてくる貸しボート

世界はなかよしメランコリイ → 脱皮して蝮

サングラス背中にある内なる翼



—われ新聞記者なれば—

リトマス紙アンデルセンを乞ふ万太郎忌

空のモノローグ/マッサージチェア/影長く/栞せぬまま

まんこーと叫ぶ男の手にやはりマンゴー

うん、尾形亀之助って卑猥な名前だね

短夜やティーパックしみだす滑り台かな

ヴァトーの絵の、「ジル」 見 る ジロリ、と 見 る

メロン食べたやアン、あうんの呼吸でくわせて

かほを彫るらし/夕映カシオペヤの路線まで

ぶつきらぼうをひっこぬくヨット・ハーバー

画用紙のラベンダーに海パンを

林間学校次は殺して三年生になりたい

ふらふらと石、基石を尊重すあしのうら

ぐわいかうくわんがくわいけんしますくちなしのはなでさふ

じうじゆんなしじふからならぢゆうしんでさふ

キミとボク キラキラと アマノガワ・ミルキイウエー

イーハトーブまだ遠い

こだはりなどない、そうさ、歴史の一こまに

鼻を折りポルティナーリ祭壇画おもふわれよ

ラスボスのBGM千本の糸ほつれたる夏座敷

省略せよ！ 明日なきが如くにプロモーション・ムービー

カルパッチョに走馬灯を描いてほしかつた

おいゴキブリがいつてたぞ！

「 」それで？ ものがたりはここからはじまる

ふつうに季語をあつめてRPGする愛と殺りくの物語だあああああ！

きーんと走ってきんとんうんにのつてどこへゆくのアロハシャツきて

#みな、めとおのおむより ちつちかたつたか ちつちかたつたか

俳人め！ おまへは屑だ 蝉も死ね

悠 つ た り と 話 す

わたしがしたいのは世界征服南風よ吹け

ひい、ふう、みい、うーん、ううーん

たわむれにたかし忌などと呟いてみるか、うん

超高性能爆弾ひとつで吹っ飛ばす防御力な地球

S字型の蝮ならくるみ割り人形を聴く

こんど、魔弾の射手をきかせよう LOVE！

ここは地下牢なラブホです、滝浴び！

風穴がぬける速度でエイトビート/たぶん 分身の術

田草取りあみだくじひいてかき氷くわせると、俳句ちんぷんに投稿

「ひでえ句だ…！」だと選者はYOU WIN あとでボコつてコンクリ大阪湾

端午の節句原子爆弾をおとしてみる

世界の平和はセキュリティーから BYセ●ム

飛び込み台スタートの笛はすぷうんを曲げて

梅雨明けのプール。何気なく草が揺れ

網膜に因果ゆれ、拋物線は狼煙のようによすれゆき

手が触れる。クロール まだ見ぬ水の途中で

規則正しく飛沫をあげて皓い歯を見せて笑う少女は

ずれてゆく骨まだ感じながら気だるさが残り

わかりきれなかった。ゼンマイのように巻けぬ 伸びたゴムでは

傷口に塩素のにほひして/やはらかき剣では

水晶といふ一個の壘に溜めながら

パイプをとほつてゆく伸びるものの影

ジッパーおろしながら、裸足であるく夏が照り

誘惑が。甘く冷えてゆく眼分量

六月 赤いターバンをかぶった原色なり

緑陰に追憶の甘き愁に

ラムネ玉胸の謎好きだよと言ふ

らつきよう蠓螂を真空パック

少女「わたしは緑夜、絶滅危惧種」

たとへるなら、デザイン事務所の騒がしめヘリコプター

ルーム・クーラー/ブルックナーに聞き違い

すきとほるほどの胡蝶蘭地球がこほる日

歩かねばならぬ、厭話さねばならぬ夜の秋

夜釣り輪投げする要領で輪ゴムする

庭の夏青空はいまもやさし

蜈蚣刺す源氏と平家のものがたりを

ストラヴィンスキーあなたはカメレオンの水鉄砲さ

\*\*\*1971年4月6日\*\*\*

帰る娘に、ハナミズキと云ふオペラする

ああ、すげえ夢を見ていたぜ/又、見るぜ/きつと恋のときめきだぜ

木下闇ヌエネンの墓地の塔原爆ドーム

月下美人「薄命になるのはむしろ俺の方だぜ、や、月の下だけ美人・・・！」

百日紅みじかひフラメンコ葡萄酒の樽

どの風をあつめてもぼくは海のむこうへ

とりつかれてしまつたといつてよい/なみうつ情感/オアシス

プッチーニの旋律が

踊る、踊る、沙羅双樹

ルフランは滴り

夏がぼくのちから奪つたから

黴メモのや心に筋肉だけが萎けて

かつこう、かつこう/うそをついてるよ

青嵐三島の激写

カブトムシ/コックノ帽子カブツテドコユクノ

かきつばた か・つ・ぱ おい、えろがっぱ

映画ゴジラのテーマ。通行手形は大風鈴で

薫風や威張りん坊がちょろと出て

夏の夜 昇降機ぷぷ\*ぱ ぱ こつそりと

鱗の乖離

こわれた蚊帳の見本/えんぱいあすてえとびるでいんぐ

メメント・モリ [=今を楽しめ]

古本屋にて朔太郎読むタバコくわゑた頭蓋骨なり

ノアの方舟 岡本太郎はやっぱり嫌ひだ

夏が/氷り/冷たく/光つてた

草いきればくはあざやかなセロファンになりたい

引力は寓意のなかに

至急申し込み/青インクの秋を惜しみけり

幾秋のひとめぼれ払うふり

、芽をださない黄金の田の少女によぼるゝなり

イね火縄銃のごとく着火

地獄のダンテとヴェルギリウス/赤のまんま

引き抜けど今すぐふかせられないでしょう秋の草

馬肥ゆる人なぜ無雑作に反射光をあびて明るく輝き

くづおれるぢやないですか/大ひなるみ天うつくしき君に

南瓜は生まれた頃の色にもどりけり

牧歌 ダンス！ 慈悲 キス！ こちらでは、毎日良い日が続く。

夕ぐれの島まではるかにカンナ流刑さる

花火より、しづかな秋ゆ心がたに残るもの



死者は生きむ/赤と白の桔梗瑠璃ゆらるゝころ

ようやく眠った子はディアバード汚れてはならず

よびてたまはれ/沈黙してかたらざれ コスモス

日の落つもやツとどこがゆれ/huhhuhhhu

ゆつくりと歩み寄つていく木の実ひとりでに割れ

静止して / とまる /いつも心に /まさかの火

ヴィーナスの誕生！ヴィーナスの誕生！

天国キャンバス空き巣に入る藍の華

日日挿替ふる秋花急いでも気持ちのゆるみ

鏡の中マンモスの牙がある確かな信頼

谷の裾にいまも一〇〇〇台の車とまりますか？

革命に一瞥するおれは神業ジャズ・ピアノ

深化する秋の閤鎖骨が蠅の非常口

なつかしくあはれなアキ

片よった水の面を秋の墓場《す》ふほどに

星の流れた島清、秋はせめてガラスケースに眠れ

羽透けゆくほどに新聞を読み/危険の芽をつみ

自分は世界を見てゐる

パウダーどこかで何かゞ消えゆく季語は「秋」の俳句

四十九日！　へへん、センチメントをぬいた器械で勘定

さうあつてほしい秋はユーモア

ぼくのかほ、ぼくのかほ、少女になつたシネマを

「まあ、兄さんなの。」「やあ、アキ。」「やあね。すけこまはは」

あく迄も。あく魔でも——いい！

とらんぼりんなあき/やつぱりぼくうしをみます

あきのうしもやつぱりはえをむちでころすのさ

いまのあなた！　喜びで明るく、祝福の鐘がいつも鳴りますように

糞喰らへ

秋のステーション ¥120円のじよおじあ

R-R-R-R-R……………

週末の秋

アキ感激!!!

無定形のフィールド/ビル興り/秋「の手紙の一番はじめに」

Love is SONG 秋

秋風を/することは/苦しむこと

馬馳せ行けば秋の帆船風でふくらむごとし

こめかみに秋の濡れた一番星夜のマラソン

秋のユニフォーム出征見送りの報せかな

肋骨あらはにカルテ座標軸秋の風

男は常に安定株は無い。――いやセーフでしょ？

旅客機や蠅螂は[多様化・巨大化する]増殖炉

想つたことは 作られる 感じることは 作られる

プロジェクト名 ～秋の秘孔ははずしてある～

秋はわたしの頬をバラ色にする、おかあさん鍋の中のつみれ

テレビでしか見たことなかった秋にも雪が降るんですね

秋の味方 はじまりだ/トロフィーなき心のつながり

秋確信する/老熟とは わみろ行為

Tシャツをきてもビートルズがない秋のロッケンロール

説得するリトル ひとことで タクシイ、ハイ！

稚い魂よ飛び立つ気配が拡がりぬ

秋風や聖僧わらふリベルタンゴかな

んだ。QUEENが男性だと知る秋の部屋

俺は履きそう 秋は想

「現実の世界」というものは――。..どこか、――どこに？

秋ハ友人ニ云ヒ残スコトモナク

絶望の深い海          内需主導の          臍の緒がねじれ

秋は家出娘！家出息子！

句は哲人彫るばかり

ほんとふに人間は四本足だったのか秋出水

心の"しみ"にすがれずにはいられない

獄中壁画チョコレート/落葉描くほどに生御魂

「踊」と一字書くことのむずかしさ

てい電蜘蛛のネットが実験者その人となる

てのひらで点滅見ずじまい赤蜻蛉

好きでしたよ（笑）/あのとき、あ、いい人だなんて

それぞれがサクサクといふ噛み音。漆紅葉

わが黙示録今やすでに消えかゝりなんとしつゝ

底抜けに/磨きあげたる/細き瞳の/はたぞたふれぬ

怖気づく女は肩から香る揺らぎかな

ついて行く。いつまで匂ふのだ 銀のナイフ

かぶろうよ、表情が穏やかになる帽子

急ぎ足に歩くことはない、よい道がまっすぐつづく

懈怠を陳列するわれ、図鑑にいない烟を

風の鉦で截られるべし/開ければ香る

その人の狭窄に地獄といふ文字をかぶせたく

木枯しは大いなる眼や目蓋をつつみ切る

お辞儀だけで済ませたいそんな冬の日

羊朶よにほへ。わが憎悪白くなるほどに

しんしんと雪とけるまでうとまるゝ

外まで行列。何を売るのだ 道しるべ

ひしめく中の、孔雀と葡萄、わが朝の夢よ

粧ふばかりで、まなこ荒れ。粉/かぶるばかりで

ふらんすけいかなだじんみたいなふゆのやま

あごひげがこほる、ふらすこみみたいな、あめがふる

右肩上がりのあんなに青い空

夜もすがらあやまりにゆくわが紙はしろく

娼婦に贈り物をすれどバラの花の陰で番人が

のれんにぎやかな店にかこまれる如く

さあ牢獄。療養所のわれは一疋の混蟲

ネジ触れてゆくばかりのかたつむりのつぶさ

流れて来ないかしらカットの音鳴り響く頑固おやじ

爆死した富士、永くお前を憶ふ

埃つぽい傾斜。ストリップ・モーションだ 菜の花

くわつと明るみ草食獣の眼を攫ひたい

早起きして二度寝して夕刊の夢をみる

海は矛盾だらふ。せつかれて、知るめゑ、されど

冬は訝しき縄文人の縄跳び

どうせ霜おりるだけの冷やかしだから

エコー/失楽園/棺ばかり深くをさめて

風鈴にさわりたいと舌打ちする

ぼくの角折れてしまつた線香鋏もちゆくと

なお野に憧れ、「ジパング」は重たいか

海は霜、くしやみだけが耳にきこえる

光りて昼の外包を取るなり、自分の翼で

あくびして鍵盤遊びにきらめけり



手袋を外して「翔」に応へけり

炬燵はサイケ、いまも、いのちフルーツ・スタンド

ヒヤシンスは緑色の眼の少女なり

ゆふぐれがそらにどんどんすりへつて行く

二階の窓を開け放したつてきまぐれなだけ

NO! 雨のえのぐで 夏がしじんにする

理数系この刺繍もさびしからふに

退場しても、お尻がおほきいおまへであれ

嘆ぎ葉の匂ひのこもつた本棚だなあ

几《つくえ》には消しゴムで消えぬ唇の寒さ

白線がわたしをにらんでる目玉焼き

手にのせて笑い声がゆくよタワーサイド・メモリー

残った都会で悪ぶるー「…最終の電車で轢かれて死んだ」

標本の舵をとつてゐるユダヤ人女性は

人混みで彼女を一生懸命に探して

この一瞬この機会を逃せば次はない

水族館ペンギンはいないと妹が

どうして年明けに？ 妹＊HAPPY NEW YEAR

爽やかに連峰見えて瓶の静物

貝殻の中に鉛筆ゐれてをく

色彩の強烈な使用/虹はしもやけ

芸術はナンバー・プレート6が列ぶ

天使の羽根で駆け抜けたい階段と性

草の上に雪をほつている

十二月はとりあえずBig family

わたしの身体が目当てだったのね

われ廊下でバケツ持ちし夜業終ゆ

脱衣麻雀したい雪が降っているから

おれは正月横断歩道愛好家なり

友は書き初めするべく波動拳うてない

雪山恐れ入りますが、もうしばらく突き抜ける

浴女！ ちがった妻によくじようもっと違う冬の朝

脱げ！ 白衣にかわる春のジグソパス

原爆忌ただいまの時刻をしらせますはとだよ

ターバン◆赤や黄や白◆供花◆手

抱かれれば別れてゆく 波の響き懐かしむ

死にきれぬ夜もあり貝に真珠いれたく

ヒストリイはズボンに手をいれるだけ

爪は凋む/塔に触れる葦枯れたり

ああもおムナヤケ

十二月かたさをかへして陽は孤独らし

でいあーらぶ 「七面鳥だよ！」 「ダンス・パーティーだよ！」

ギリギリスのやふな笛 馬酔木はそれより艶を犯して

まつさおな肋骨ぬきとれば/haoto

風で落ちた果実 礼拝堂 金魚は逆立ちに

冬さうび えつ楽y x 地図にない化学工場

風が強い日に思うのよ蘆が鉄のにほひ

静脈/うちゅうきしむほど自慰したき

家計簿ばかりが女の死者にちかづく

かえらざる水清冽に地下を語り継ぎ

躁鬱一つでこらへりアイスホッケー

水に泛くわれを消しにゆくひとがほの苑

ふぐり/ちいさなやまをこえ

なほ愛憎と なほはなやかとなりすまし

ポプラはとある窓辺で一本のぬけみち

自転車で案内してくれるのね

鞆といふキレ味 らん ・ ぷり ・ り

遊星を吸ふと樹が枯れます

大量消費社会蝙蝠飛べり

線の向日葵截るごとく水着は

血の涙近づくわれが蒔きし懺悔月

軽々と銀杏落葉なだれをつ

夜を掃く朝の光に/古代/墓と思ひけり

いちじょうけいをおう/すとおつぷ/すとおつぷ

目ざめよきお辞儀が並ぶスープ濃くなりし

五円玉.人の群..襟巻畜生...

麦茶くらいでしろい歯をみせる男もおり

涅槃図にくわえるべき玩具の眼かな

十二月八日に耳生ゑあたりは耳だらけ

かつて耳きこえなかつた思想の牢獄

広重の絵をトランプにする男のア・カペラ

ビニール・ハウスの季節じゃと死刑執行人あざわらふ

豁然とひつきりなしに雪の国

盲導犬曇り空の枯れ木かな

陽の射すまでに子は起きぬ夜更かしはせど

うすく書かれてあなたの速度反応す

木の下に鳥いればオイコラ釣りをしろ

あさきゆめ/はしごでつなぐ/ぽんぷかな

ねむろう、ねむろう、そして埋葬しよう

ぷつんと切れた枯れ木の片親になりまさふ

年賀状一枚だせば羽根のつくるひ

ていねいに生きること/正月 めざめて考えたこと

触るるものなくて神さまたすけてほしいのです

身をも心をも洗い尽される歌の羽根を置き

初夢を見ずに年喰心臨ふかな

じゆんすいにカレンダーを見る頃かな

カンチョウすると含みもたせ、もたせたくなり

同行のない旅行みたいだ、俳句は

冬山を気だるく鬱ぎ消しあひながら

きつね、きつね、善き政府

後ろ影逆しまに坐りつづけをり

ほら、俺はね、しつこく足を踏んできたから

———なんだ。———ほんとだ。…あ。

もうやらぬと（コメディー 第一幕）雪が雨に

業務日誌呪文かくよと勤労感謝の日

（どれどれ）パサッ う パサッ う

凭りかかる陽のけはひあれば冬の椅子

葛湯は葛根湯の略語なり

ぽちぽちと乳くび勃つてゆく寒さかな

根つからの根といふ心根もあるらしく

冬の町ドングリたちのお客様

われはいつまでも小さき日本人でありたい

ルソーの「夢」を見し扱て糸の球

われはイカロス矢印に迷っている

スキだから、あなたを追わない困らせない

ある晩……。今までうとうとと睡っていた木の葉髪が



おほらかな牛になるまで掃除機を押せ

冬の夕立によって/なれる/らしや/

前略寄せては返す様

泥黒い、泥黒い、光のない生涯

空の色、窓があるから見えるんだ

硝子もStyle人によつては

冬眠しよう/わしじつはクマやけど道に迷った

もえろよもえろGS寒いのにがんばりすぎ

くうーっ熱爛きくぜしみるぜおれはこの一杯で

ごめんなさい うしろ吹かるる 人違いです

アロエの花食べるため隣の家忍び込む

人知れず 銀杏もうえろとグルメなぼくさ

母の手つよすぎてゆふやけ赤トンボ

ひたいから真つ赤な血がながれてきたりけり

牡蠣を喰うよりあたつたふりが巧過ぎて

さむいね

ぷつくりと月に蛙のはらわた

かくれんぼしすぎて名前つけわすれた心平

永遠に凍ほつたまゝだ、

四段腹の/さあ青年へ いさぎよく

百人が眉剃つているとこたへる国なり

仙人が眉はやしてるふあんたじいなり

神の留守アンジェリカこれ以上如何するの

ルッジェーロ/水の世のさひはひなる

アンジェリコ曼荼羅なり厭仏壇の広告なり

物語の挿絵なり！/天・知・空・海

あなたの眼は男 根をほしがる神の留守

良薬/のみ下すときも産むためにあらねば

くふのにこまらぬ人だけがとふめひな冬

渡らねばならぬ川「こほつたよ」「次はぼくだよ」

浴衣ばかりが囃し、花火/屋台/kingyo

これはもう神かけてあの/その/と/夏のルソーは

傍に迫害がある、たぶらかされにやつて来る禍は

四月に蝉が鳴く

雑炊を炊けば冬殺したくなるのです

地のほてり

油絵は裂けよとおもふ脂肪をのこして

武器を求めてやつてきた/小蕪などお調子者

カーニヴァルの仮面着ぶくれるほど蒸れて

剥ぎ取れど、剥ぎ取れど、宵景色

向き合へばやめてくだ。くだまく。風邪の所為なり

飲まずにいら。(いらいら) くさせんじてのませろ

空つ風{ 海・心の旅・あたらしき目覚め}

すさまじき夢という名のおなじくらいの広さで

月光◆裸になれる◆ジャクチ◆とぽとぽとぽ

暗い絵の時代◆とんびがたかのふりをする時代

「死にたい」んじゃないくて「落葉踏みたい」んだろ

それを信じないのはお前だけ

地球が記者だったらイロをくださいなアオじゃなく

四五分かけてシンクロナイズせよー〇〇〇〇本のバラを

にほどりもすずめとまじりてなくかるがも

マネキンも財布がいるわと不貞腐れ

むらはずれ みやこぐさ/なかまはずれにされた

ぷにぷにしているぼくでも、かたくなる/かいわ

花束をもつ婦人の日はどこにあるのか

風花もくろき瞳をひらくよりほかなし

節分に鳩のお面がほしくなり

プニプニしててきもちいいのかなのだ、はとは

庭は苦しむ/天井は眼をきずつける

風花や想像力が骨を狙い撃ち

コンビニで買うペットボトルに笑顔ついてくるんだぜ

歌につくか、笑顔が、人の心が、あたたかさが

そらをめでる廊下/夜明けにわれただひとりきり

句のために句があるか、詩のために句はあるか

ものめずらしい風避けどつと起りし

鬼は外一皮むけた静電気

時間が絡み付く、風垣《がつちよ》にダンチョネ

ふるいうたをもてはやせ、個人差を

鉄砲で明日鳴るはずの夜の誓い

影/科学を棄つるほど神秘はありや

消しゴムの滓をあつめて黒子があるよ

温度計水にかわるほどの公害なり

かたつむり聞こえてきそうな或時死生観

揺曳ひやデータパンクする風のやふ

舌を嚙みたい！ 飾売りは腹を切らない

滲んだ溢れた止まらなかった流れた仕方なかった

老人ホームにぶらんこをつくろう

制度は隠れ蓑か、みのならば雨もあめつちのなりゆき

よるになれば、きつとかおりがころをさそひこむ

池を訪れ、身を投げることの名すらも忘れ

火事大コブラ液を吐くとも

それ、見知らぬ町の見知らぬヌードにて

除夜の鐘紙ン質のごときライト・ブルー

し んしん と

数え日や漁と猟にしてみたき

お年玉太郎にやらふと意味不明

アイスコーヒー鈴の音を食はむとする

雷鳴よ、お前の気持ちはわかるが洗濯物が

きそひ馬優しくなれぬまま見知らぬ国

こいのぼり臨床講義して深みの水泳

「楽しげな農夫」の名前でてこぬ鳥の日よ

書き順のくらはげは海へ。しい・するう

グラジオラスとまると思ひあくびを殖やして

裏庭におちる風鈴の日かげのしづけさ

棘ひそめたる波乗りとほひ海の呼吸

いもうとがぼおんながくしてぼいんになりたがる

アスファルト復元できぬかすれ大文字

七月は殺意潜水夫の捕虜を握る

多血質寝ねがたきジュエードロップ

壮大で感動的なフレーズで締めくくれ



たまにパチスロ三昧の人を思ったりして、ぼくはなんだか、お金ってこわいなあ

いいじゃございませんか、水中メガネしながら風呂に入っても

黄砂とか、インフルエンザでマスクをつけない人/被爆だとやましい点は一切ぼけてない

いまに始まった事じゃねぇヨ！ ノープログラムといいそうなわれらがアメリカ国民たち

老人ポケ世界ノーコミュニケーションです、バカ親

H I V 献血で被害拡大か、売春で被害拡大か、それとも既にぼくらH I V そのものなのか

使い捨てカイロより焼きイモがたべたいぼくはおなら

カネ儲けで自殺者が激増して、学歴が名札になって、そして国内汚染は言葉で発症して

ぼくらはいったい何の感染者ですか？

不自由ってえらいのに、自分を守るためなら、法を犯す言い訳になるんだなあ

日本国旗も外国の刑務所を見習って、ピンクにすればいいのに

本来のあなたです、スプレーの色は変わっても、缶は残る

## 1行「風邪」

風邪をひくと、犬がどうしてあんなに眠るのかわかりそうになる

賛否両論あると思うけれど、ポエムを忘れてしまいたい現代詩はさびしいなあ

(玄関先で、) つまらないものですが、これ、生きた鮭です

抹茶をのんでいる時は、かぎりなくぼく松尾芭蕉の帽子、ベレー帽にしたい

## 1行「一休さん」

法治国家というものを教えていただきたく裸で国会に参上

隕石のかけらかもしれないいや、黄砂だよ、車の上のそれ全部金の代償だよ

大日如来坐像みたいに仕事の昼休みは魂に近づいていたいなあ

薄い海苔を食べていると、うそつきまゆげ、といたくなるのだ、ぼく

優しくなれって言う、突き放してるやさしさ

そのうちあなたもするようになりますよ、考える人なら誰でも

タバコを毛嫌いする人もいるけれど、タバコをあげるだけで喜ぶ人もいる

## 1行「シルバーバーチ」

あなたと共にいるということは魂が常に輝いているということ

本当に好きな人のために、何でも出来るなら、とりあえずぼくから離れてほしい

甘いな、女を誑かして何が悪い。男のロマンは包丁ごときじゃ殺せない

より多くの幸せを願うために、まず自分の声をなくしたい

麻雀をしないか？ どんなGAMEにも二種類ある、生の執着、死の執着

父上さま、何の御用でございましょう？/卵焼きはどこにある/はっ！ 鶏を生擒りに

永遠がここにある

### 1行「人は多面的」

株がそれなりに上がっていけば横顔にも、プロマイドにもなる。

ぱななという樹があって、それが黄色いと、ぱななだという“差別”

### 1行「相互扶助」

霊というものが、ぼくの話聞いてくれる、それはぼくが知り過ぎているからなんだ

ネギが多いと嬉しい、モヤシが多いと嬉しい、なだてここが多いと嬉しい

1行「もやもやな人生」

たまに中学生を見かけると、青いな、そうさ生きる醍醐味がな

1行「総理大臣が言ったら、ご飯粒ふきだしそうな台詞」

生きるからには勇気です、正義です、――そして最後に、愛です！

1行「いや違うだろ」

「ようやく着いたわね。」 「はい、あなたを拉致監禁プレイをする施設に。」

1行「ハードボイルド身代金的設定」

大丈夫と信じたいな/ていうか何この展開/ていうか、大丈夫なのか、頭

1行「種無しをつぶら」

皿の上で豆電球を愛でている

そんなに急がなくてもいいよ、人間は年ごとに変わってゆく

高き梢がどことなく陰気に感じられてならない/秋陽しばた>く

[散骨のあたらしい使われ方] いじめた人にかけて下さい、それで、GOOD JOB！

まだけ？ からた（「」）け？ そうじゃないタケ

1行「フルスロットル輪廻」

流星は長い蛇のよう（に、）自分の尾を喰って！喰って！貪り喰って！

街がないサア

しろ そらね

檸檬抛り上げては皓い空音がしづく

1行「健全な肉体に健全な魂が宿る」

健全なロボットに健全な破壊兵器が宿る

かごとばかり

託言のネヂリ花

1行「ある程度のストレスはいい仕事につながるもの…」

ごん、おいゴン！ ごん！ 権！ 混！ ゴン！ 鐘が鳴るなり会社の人事

洗剤売り曰く「一家にひとつあれば家庭円満間違いなしの農薬で御座い！」

1行「痩せている土地」

おまえ、スレンダーだなあ、..でも、キリンめざしても首はながくならないぞ

末代までのご用心！ 心を安らかにさせる般若心経ロボット怒羅衛門でござる。

なよびかであることよなあ、ピカ！ ああ、自転車が水溜まりをフランソワ！

1行「ゆたにたゆたに」

ヴィヨンのいいところは遺言を詩にしたこと

何処で誰と遊ぼうか？ （そしてそれを、）鬼ごっこといっても過言ではないのだ。

1行「泣こうとわめこうと」

ほんの紙一重で誇張しているのである [2011年5月31日 会社の健康診断より]

カジュアルな雰囲気！ すげえフォーマルな場なのに、成立する、超現実感覚！

1行「ライト当てすぎ芸能人？ それとも…」

お肌のうるおいを保つためにですか？ してますよ、人の生き血でなあ、ウヒヒ

寒い日に長風呂する！ これで桶！

ポロロッカといえばアマゾン川の逆流？ ちがーあウ！ アイドルポロリのマニア表現

1行「マラソンをおかしくしてみたら」

完走したいから中継基地で。汗のんでます。息で傷つくります、アンフェタミン（が、）

八月湖で釣りをすればみずうみが揚がりそう

志望校ですか？（うん、と先生「は」）どうする、マグロ漁船に乗るか？

1行「尻切れトンボ」

ウェーターとウェイトレスの関係は、ターとレスとくに意味はない

信号機に人が住んでる/夕方、ふっと思い出す「あ、こういうことか、巧いなあいつ」

1行「会社の常識」

え？ 学歴不問ですよ/確かに/だが、うちの子は将来大物になるバカ親の子はいらない

林檎が枝を離れると地面に向かって腐り始める

水は百℃に達すると、気体に「真っ白な領域に驚きを与えて」つぎつぎと死んでゆく

1行「こわい話が好きなので・・・」

工場の騒音って出張しないかな？ どこに？ もちろん、閉鎖した夜の工場に

ロミオ役は誰ですか？ 現場におちていた（と、証拠提出）ライターです

家出とはいわないホーム [レスをもじって、] トス、ホーム・トス、う、鳩尾にきいたぜ

1行「2チャンネル的な展開」

遊んでいて入試に失敗したらどうする？ 大丈夫さ、失敗したら首吊るから

ニューキャスター：明日は豚が降るでしょ？ それで、肉汁がおちる真夏日でしょう

のっぺらぼうに顔の輪郭があるという事実は何故かみんな気付いていない

1行「天に許された生が滅びる瞬間、地獄の蛇になる」

ピラミッドの下に隠されていたのは、エデンの喪失ではなく、邂逅であったわけです。

青ぞらからもりあがっているので、その日ぼくはそれを青森と言った

1行「かわいい名前をつけてください」

家に帰ると猫が近寄って来た。シロと呼んだ。そしたらクロになって、爪を立てた。

全世界が戦争放棄をしても平和にはならない、平和は天の道の宣告

1行「ど、どういうこと？」

おれ、爪を噛むのが趣味なんだけど、子供の時、噛み過ぎて痛かったわたしかまわないわ

マネキンと話していたら気味悪がられたので、以降、美容師を目指す



ががががが ぎぎ ぐぐぐ げげげえ ごおおおお

過程？ 仮定？ ー家庭

母がディズニーランドに行きたしというので、ねずみをボヤッキーと呼ぶ

1行「ピノキオ」

口をパクパクする人形、腹話術師の電気もガスもきた状態。

大人になれば好き勝手にお金を使えるんだと思ってた

机のことをデッキと言い張る叔父

1行「ミンナ青イ胡桃ト呼バレテタ」

おやおや、おい君、こりゃあ大したもんですぜ、馬券を買えるようになったらわかる

バッティングセンターでゲームしているのを見掛けてそれがカッコいいのかと思った

1行「スーパーの店長にワックスかけすぎと試してみた」

**NIKE**=ニケが正しいとしたら、スペはどようするSUPEとRでスペルか、こりゃあ参た

夢浮き橋にも…（なゐ）うつつなし、あゝうつゝなきとも

1行「夜明け」

夜明け千羽の鴉万の蝙蝠が?げてゆく

こうねつひを百万回となえると、こうのとりになるという噂

1行「一家離散というケイラクヒコウをついてみた」

せんせえ、ありえないこといわないでください、でも想像しちゃう一家死産だなんて

チラシの裏に大変な警告音を残して行った家族の誰か、どかん

知ってる？ 月って綿入れしているのよ

じゃくくわう、じゃくくわう

天竺牡丹⇔ダリアだとすると、マリア⇔天蓋花常乙女

愛人から[生まれた]甘美にして名誉な絶望よ

声、とほる

汚職とかゆうな、はらぎたなし、はらぎたなし、たぬきのおちばなし

涙を乞うのは愛が冷めた時

睦言をムツゴロウと勘違いしている人は、ちょっと、可愛いと思う

1行「空泣き」

想いは露としらぬは梅雨のはじまり

開け放たれた窓から“永遠”が忍び込む（は、）囚徒、博徒、陽気な怨讐

孤児- I N

ファンタジーは鶯、サスペンスは鴉、ミステリーにはにわとり

見た目が既にわたし透視していますよ、宇宙人メガネ

皮肉のおかげで関の山を知らない、関の山は“冷笑”

1行「多いことのたとえ」

[渋滞とk l a x o n] 道いっぱいによそ見運転かと打眺む

見て見ぬふりは、いたるところに孵化し

何故必要なのかを聞こうと思って、忘れ、思い出し、置き換える幸福かな、と

軽業師は憂鬱を放浪する、少年はオリンピックが不幸だと知らない

1行「夜間は60分につき100円です」

1000円1000円1000円、安いよ安いよ入っていきなよ=100000万円

月かげにこの世界の外がある、幕はもう上がっていた、ランプを消したその瞬間から

1行「ある御都合主義に」

バランスがおかしいことを学んだ日、僕の足は竹馬のように伸びている

てれわらい？ すっぱい？ ちがう、らりってる

なまこと合体せよ！ 俺は海鼠だ…なまこ？ なまことは、——なまえとは？

1行「伝わらないとしたら、それは宇宙の真理だからなのです」

わかったぞ、一つになれ母性のうちに太陽が殿様になる

しぼたらむう。

ずけずけ、ズッケケ、ずけずけ、（「づ」）

1行「ステンドグラス」

百合、薔薇（の鉢植え、）窓ど俄わかにかには差じむかいる（「に」）嚮う

天井から不意に大きな足。眼が深く凹んでラムネの瓶。

どうやら道をまちがへたらしい



夜は孤独

まぶたを

閉じると

貝殻になり

瞼毛は

葡萄の蔓

となる

そして心の

古糸が

もつれたまま

錆びた

この都市の

機械が

押し寄せてくる

互いに愛し合う肉」

時折さめた 笑顔」

僕は何処にでもいる)

くだかれて散らばりながら何処にでもいる)

あるとすればそれはいかなるものなのかという問いは、AとB、BとA、CとAである。「時よ止まれ！ お前はかもめ！」という、たとえば詩的な鷗が、わたしの中に登場した瞬間から、ファシストの軍隊のように豆スープ、パン一片、水のように、言葉の機能や意味を、無人のただ淋しい砂場を開拓する秩序ヴァリエーションが誕生した。産出的構想力。それはエゴの変形であり、覗き穴から見る石打ちのような人生における神を喰らうものとして、到る。花は蜘蛛かと眺めける。

あるがままでいたい」

つねにどこか情けない男でいたい」

その踏みづらさより、その踏まれやすさを)

つくられねばならない道よりも、通り抜ける道)

それも“矛盾”という悲劇的な音を聞きながら、

息苦しいほどの“是”という薄い皮膚／

ガラス／

眠りの気配のなかへとわたしは降りていった。

体験、創造、態度の中で、

人は反応性うつ病や自殺を克服することが出来る！

それはまったく確かなことなのだ。

根源的な男 根が人面獣身の娘に宿るように、あふれる天使の輪のかがやき、  
天の潮。人間の意識や有機生命を自然的物質に還元し、全て力学的な法則によ  
って説明する機械論に基づく唯物論は運動的形態の明快さによって滅ぶ。壊疽  
は千本の白髪のうち。聖らかな肉のうち。彼は棟木や梁として家の中にい  
る。そしてそれを贅と呼ぶだろう。静まり返った死の静けさのなかで、失意は  
黄色い風船のように飛んでゆくだろう。兇暴や叫喚を王国の一番高いところで  
はなく、おおよそ素足で宙を踏むような感覚のなかで傷付いた樹木へと降り注  
ぐ雨のように、夜討ちの投げた松火を印象的に見せるだろう。二十世紀は終わ  
っていた。そして、わたしには植物の情慾が信じられた。

言い換えれば、

その交わりの中で分割され続ける時間と、

その時間というものを照らすことを義務付けられた太陽の眩しさ、

に、もう一度、心の底、から、吠える犬になろうと――。

世に咲いた隠れ花」

一晩中 俺のルーズなブルース」



歌はもっと自由なもの)

そして僕はもっと愛について歌いたい)

抽象概念は根源的な概念に属する。時間＝意識＝罪における、集合離散する  
無限の霊的物質の蘇生は、夢幻の複数を現象的にではなく解析的な立場でぬけ  
がらを一つの反射にしていった。春の花は、嵐の山桜。ちもとの種子の夜もす  
がら。おそるべき静寂のなかでも人の口は動く、眼球は相変わらずのぞき窓へ  
と向かう。昼ともなく夜ともなき時。影も姿も見えればこそ、罪のあがなふ胸に  
影湧けばこそ。戸無瀬となせに満つる白浪、花の嵐。壮大な行為は時に卑小な行為と  
なる。さわるものはすなわち、さわられるものになる。うたうものはすなわち、  
うたわれるものになる。蒼い炎シャツの息を吹いても、素奴色の白いはないか。

お伽噺／

神話／

深層意識／

時の狭間、帆柱の根、錨綱の下。

僕は笑った。耳をおおった。

視界は段々狭まった。僕は呪った。呪った。

長い間 僕は 神について考えていた」

神に 著作権などあるものかと)

君は 世界平和を笑い 戦争に真面目な顔をする」

神に 愛と憎しみほどの違いなどあろうかと)

これは知的領域における地獄からの再出発であり、そこにおける在り方は偽であり、意図であり、美に傾く性情のようなものである。ここは海近き荒涼たる地、およそ若き人には姿見えず、現たる者には邪たる願望にしか見えず、老いたる者にはいのちをえんがために神をも恐れ果てなん妄執となる。聖徳太子は仏教のことを、「四生の終歸、万国の極宗」とした。わたしならどう言うだろう、一つの死は「遺伝子におけるゲノムの消去であり、雌雄の生殖の黄金に似せて造られた脂身」とでも。緋の法衣を召そうところも圧うるがごとくたなそこ掌。つめたいくちをひらけ、べとべとの砂糖菓子をあぶれ。蟻のシステムを見つつ壁を破れ、一つの穴から来る幾千年もの真実を見やれ。ヤマト王権の支配が広がるにつれていずれもが国津神、高天原神話に統合され、そもそもは独自性の強い神話、アミニズムがこの国のすべて。天地開闢。国産みと神産み。アマテラスとスサノオの誓約・天岩戸。葦原中国の国づくりと、国譲り。天孫降臨。

わたしは別に天皇がえらいとか神様がいるとか」

わたしは別に人が馬鹿だとか世界は欲望にまみれているとか」

そんなことはない それは君の世界の問題)

ただ悪魔は 君を餌食にしよう)

停止せる永劫に毛むくじゃらとなった一匹の獣とでも説明しようか。乳酪とでも。すみぞめ やみ とまどい えい ひれ墨染の暗夜は戸惑をした鱧の領巾。『あなたの隣人をあ

なた自身のように愛せよ。』という輪廻／転生／再生装置はわたしの心の底深くにある点描画であり、記憶という作用自体を繙くとき基本的欲求を満たしやすい社会の高次の欲求の発現により道徳的洞察から功利性の支配を可能にする。

「おのがじし港を永遠に喚く者のように持たりけり。」

――幸福を羽交い締めにする真昼、すらすらと従い出づ。

くらい陥穽がある、煉瓦づくりのまえの何もない空間が、

ぽっかりと開いている。月の真珠、花の真珠、雪の真珠、

牡丹、芍薬、菊の花、こんじき ぎんぶくりん 黄金色の董、銀覆輪の、月草、露草。

その時人は井戸のように掬いあげたい、と…。

太陽そのものとなったイメージへと、鉤の尖に虫を付けるがごとく、

ナイフが用いられ、運ばれ、心臓に差し入れられる倒錯をさせる。

何故だろう、鞆はどの方角へ向かっている。

顔や声は、どれほどのさみしい心もちでいる。

文化はミイラ達の夢のようにある。

そこには、アンモナイトや爬虫類、始祖鳥のいたジュラ紀が復元される。

超自然的な神ないし地上の権威によって決定され、

自己／神の存在を忘れるあまりに、

連環的な森羅万象の内なる照応が神話のように発生し、

それは不毛の曠野や、奇跡、虚無の深淵における、

恍惚／忘我／白痴として理解できよう。

だが見開いた眼で理解すべきことはたったひとつ」

本当にたったひとつ」

わたしは歌う」

この見開いた眼のひそやかな水のおもてにめざめる」

## 女性

---

あなたは 木張りの床を横切った

ひとり目覚めて しんとした夜の寂寞のなかに

小動物の悲鳴に似た きしみ音を立てて

頬でも打たれたように 熱いまなざし

あなたの呼吸に クラッカーがはじけ

シャンパンが ぽかすか抜かれる夜のうわずみに

わたしは動かない 柱時計を豆電球のなか見ている

蒲団の裾に手をかけながら 服を脱ごうか

期待と興奮に 胸のなかのろうそくが消えそうになる

あなたのそれは 生きているいのちの重み

スケート靴でもはいているように 瞬く間に過ぎる一秒一秒が

この世界があなたのために存在するという確信に 触れさせる

それは 悪魔のいたずらのような問いかけ

照明器具が揺らぎ ゼンマイが巻かれてゆく

けれどそれが いまのわたしには信じられた

あなたが もし同じことを考えているとしたら

それはどんなに素敵な 二本の樹

想像力はいつも 才能のせいにする

鍵裂きの花は 睡蓮ではなく牡蠣だという

どれだけの道を歩いても 答えは風に吹かれていて

何かを見つけ出して うなづくことしかできないわたしは

自分で選んだ人生です という

抱く時も抱かれる時も わたしは覚えていると言う

星ばかり見ているような あなたと

日が始まっては昏れてゆくのをしている わたし

地図の中に ピストルが見つかった

吠える犬の背中に 抱擁されたい小さな子供が見つかった

やがて最新のカタログからぬけてたような あなたが来て

期待に目を閉じたあとには なめらかな唇の感触にうずめられ

ほほえましいくらいおぼろげに からだをみなぎらせた後

凍った池がとけはじめたような 体温の異常な洪水

美しい言葉に復讐されはじめる わたし

やさしい眼のつめたい意味につきまとわれる わたし

廢墟はすぐ傍にあり 二十世紀はわたしの肉体を下等と言う

芸術は猛獣のようにやさしく 民衆的な世代とわたしに言う

ありふれた恋をして 長い廊下を歩いてきた

あなたの声が 見えない夜の世界のみちしるべ

わたしもそうですかと 指をゆびのあいだにもぐらせ

あなたはふるえるような沈黙の舌から 一滴の血を

そしてたとえばそれは 一羽の小鳥のとうめいなあし跡として

わたしは思う 都会にも

いまでもやさしい なみの音がするのねと

閉じられた蓮の中にかくされた しろいおとずれ

そのくもからあふれでる雨が わたしを満たす

遠い日 こんなに破廉恥なことをして

それでいて真昼 真面目な顔をしている自分を恥じた

けれども そのことだけ考えていたい真昼があった

谷の口をおしひろげた その肉感的な声は

荷物を投げる音や 機関車のとどろきによって消え去った

あなたはどこか物悲しく 気恥ずかしそうに

窓ガラスにへばりついている 虫のような顔をする

わたしは食虫植物や 雌の蠃螂のように笑う

もはやそれ以上何を失おうと もうそれ以上の声はない

それは愛ではないかも知れないという 自覚よりも

いびきや寝息の 鈍い音の余韻に

ちいさな女の子は接吻をする こどものように口笛をする

言うことのできないおおくのもので あふれていることが

うなり声の混じった 遠い記憶をさらに忘れさせてゆく

感謝することを忘れた どうめいなしづくのような 一滴

あなたは知らない おんなはいつでも 余韻を楽しむいきものだと

しかし ゆっくりと うつりつつある まばたき

そして もうだれもいない ふたりしかいない よるに



1行「狐火」

宵の明星がけいけい?々として、やぶれしょうじ破障子にほかげ薄暗い火影がさし。

真直ぐに走つて、いんしやう も印象は漏り出づ

ひゆるるん、つゆの玉簾

1行「カメラを構えた男」

いまの撮った？

恋を重ねてはてしなく卵を生みてその口へ持つてゆこうとしている

1行「月」

血だらけの手をあげた、くろくて、巨きくて、その背にせな遠い昔のある言い伝え

問題の絵は、傷ついたまま、（犯行者に、）ダイヤのような輝きを与えるでしょう。

『天空の城ラピュタ』に出てくるムスカが絶えず呪文を唱えているアラビア人に見えた。

一本の指がつんのめつた。ぬめるといふのに納めがほ

1行「赤ん坊がうまれる」

満腹デ腹ガ膨張シ、ぴょくり

はしれちょうとつきゅうお酒の名だよフウ一息で五臓六腑に沁み渡るウオトカ

いちゃいちゃ、指を口にくわえてぴゅうぴゅう劇しく鳴らす成分は医者が癌です

べんべんと（すらすらと事が一）この惜夜 あたらよ

1行「野原」

なんにもない空を見ていると、いま頃、冬の石が落ちてくる

新聞の為替欄を読んでいると、うらわかしoboe

1行「どことなく」

何処からも逃げたい時は〔静止・早送り画像〕のビデオチェック

「君は時計をもっているか？」「飛魚に翼が生えたようなものを」 とびうお

雨が降ったら好きじゃない、晴れだったなら花じゃない、曇りだったら濃いじゃない

1行「歩くセーター」

尋常ならざる毛深いものが、「ピクニックいきます。では」という

うみだってかみさぶ

1行「ぶら下がる」

めだまをむいてる、はんぱじゃないかきがうれしい。

ひかりがこぼれた椽/いまし方、日<sup>とち</sup>がくれて鋸/いまこの瞬間の溶接とみずおと

1行「ピックアップ」

きいちごのしげみに a ふるえるねこ b せみのしがい c それをながめる森

つめたくはりつめたくちなはがゆく、鱗、鱗、大理石、鱗、

紐のような細い溪、そそり立つは山みずからのすばらしい日々

母親は銀行口座に「テーブルが苦勞する」と言いに行く

1行「1行詩の心得」

途中で全く偶然に、花になった

この風が吹くと夜の柵—一月の動物園

ぼおっとして

1行「わたし、おなかへっているのです、ご主人様」

昼食が宙吊り

スープのむたび中世の猫背

グリーンワイフは中毒や酔っ払い、ゴムが緩んでポップ

1行「マザーグース的」

ダウンタウンのモーター、スペアのきかない四つ奪われる

レバーのステップ、カーニヴァルがお好き

1行「会社の常識」

月光は卒塔婆を現像液にさらす、（どこからか）ひゅーんと廻転機がまわる音

私の腕の中で泣く、殺虫剤も、住宅ローンも、夜中に起きれば、赤ん坊…。

夏の日に泣いて、地球にKISS/プールにびっしょりとしたシャツの涙輝く

台所の流し、石炭、炉、オーブンのドア（「斑消ゆ」）を埋める

1行「ナニモノベレエレナーイ」

赤ひび粘土で目の角を滑り降りる（唇の曲線は、）沸騰激怒ほとんど刺殺

携帯電話の解約の理由をきかれ、仕事辞めたので払えないとつい素面でこたえ

善良な男—そこにずっと座ってるつもり？と…。

1行「オーマイベイバー斬新じゃな—い？」

石のヒットは、波紋の中心/ブルース“開けゴマ”でアクション漆喰の亀裂、猟犬の感傷

CANCELできないよ、またしたいな。/だって“うらわか、なまめか、みずみず”

石の化石/繭ではなく、繭になった/余罪のない完璧な存在

1行「眠っているのか、いないのか」

よく眠り、ア・カペラ

乳白色の香りを叩き、ヒップニ叩き、父のためにときめく“赤ちゃん泣いてるぜ”

1行「お—ん、あ—ん、あお—ん」

シャワーノズル、のろい！ …ジュルジュルむらさきの胡蝶

ドゥウイッ！ はしか〔グ—刺されたと撃たれ、〕

1行「16歳で、カユイ」

表面がたやすく剥げたり（する、）犯罪チョーク（「する」）オーバースキップ観覧席

絵を描かれました。NOTHINGに、この国じゃあ祈る彼は [今今今、] 平成のコン今今

すべてのVS [ ] を埋めなさい散々空欄でもう槍豊富

10歳でチョップ、枕もとにあった例の原稿で着せ替えわれわれ人形的chop

予想外の急用/芸術的なエラー、レトリックを作成しますかユングの原理で

島を生むバナナ園

1行「同じです」

。。。同じです。。。

ベートーベンになりたかった、コインの反対側で

ブラック・メサ

淵瀬も知らず、台地の影

夜、布団に太陽の匂いがした

布団の下に顎を置く/漬け物がうまく漬かっている

1行「海浴い」

F Mは自然交響曲、風がきもちいいね、わりと

文字化けしてハトの影/よくはわからないけど、ロザリオにピースv

(( ( 判読不能 ) )) たとえば{刺激官能、権利宗教}わたし(「は」)

一つの顔があらわれたダンスは(火の周りで、)沈黙の音楽、区切りと悲鳴と、うめきと

短い言葉は日本人のプロポーズに似ている。

細胞の揺れ/放棄された理由を推測する。

### 1行「うし」

うしとはなしをした、うしは解散総選挙をぼくに聞いたがった。あした、と正直に答えた

ナルシズムときくと、どうしてか同性愛者の粘っこい眼つきを思い出してしまう

ストライキを何故、賢い人(が、)法律にいれなかったのだろうかとおもう

### 1行「大阪城」

斜陽は、城の外。

国民が汗水を流して働いている税金だが、ぼくはその光景をあまり見たことがない

失業者をなくすのは無理だから、国民全員失業すればいいのにと（たまに、）

（拍手）喝采を（拍手）喝采、喝采を――国民信頼回復の鍵は、完全独立国家

### 1行「原水爆禁止運動について」

その前に、軍事基地反対、あたらしい憲法へと全面的転換のスローガンを

まもれない国もこわいけど、まもろうとする国もこわい

私は必要なものを得るために戦う、ただ撃つのではなく、高い基準で

地獄のような空想を生きるのです

記憶というものはこれからを素直に信じられるということである

徹夜明け:おまえの顔、必死でプリクラかわいく撮ろうとする女子高生に似てるぜ

眼にうつるものすべてには意味がある、だからぼくは眼をつむる

「ロジックは、高速道路を横断する」「なぬ、（刺激され、）透明高速になり骨となる」

キャアというてこりゃこりゃ/鳴かぬなら生まれてしまえホットミルクでおりゃおりゃ

追いかけてようとする[遠く離れていく、]逃げる女、自転車、ベル、ライト、交差点

精神疾患派はスプーンを曲げられない、すなわち彼がスプーンで[その痛みの状態]



1行「無言歌」

回り道するのがうれしい日は[思考停止ののち] いまアメリカに暗示かけられ中二病

ニガムシや、はんだごての爛れし痕

あなたは巨大な咽喉、映像（に、）する必要があります扁桃腺

人の心の宇宙に遮るものはない、ただ蔽うものがある

1行「何べんも何べんも降った雪、古い[一記憶一]を辿って..。」

冬、ほのめく青い街燈の下——「眠れ、谷間よ！」

湯呑みと手鏡を持って/青い庭（「へ」）/後悔は、逮捕されるまでの“時間”

1行「ルービックキューブのイメージ」

腹が痛い時のトイレはむしろ騒音（「に」）亢進する。

ホルマリン漬けの魚は喰えない。喜喜ウヒャヒャ

神様を捕まえろ！/クロッキー、クロッキー、めちゃくちゃテンポの速い曲

ベーコン・アンド・エッグズ

ジャッカルの

卵かけ塩漬豚肉/よく噛んで、ブラック・ドッグ？ 山犬？

1行「しーんと静まり返っている森」

違えねえ、奴らはここに燈を残してゆきやがった。

髪洗ひみて封書一片滝とどろけり/男の前にnoが落ちる。雪降るなか

われを見るすさまじき深きまなざし/空に白痴

わたしが知っています。――“母が持っていたこの夢”

風は花の匂い/妙に静かな美の彫塑ひとつの胎児（「を」）ご覧！御覧

しゅじゅめ ドーセン すばめ

雀、電線に、燕（＝須磨へ、の暗号かも知れぬ）住まいへ、住まいへ

（と、呼ばれていた“いくつかのぼくの部屋のひとつ”）

眼を曝す、オルガン、ギロチンの呼稱をなくした右下の奥歯よ

1行「牧場」

あなただけのポニーテールを愛して/（ささやく、）溶岩よりも熱い、黒い馬

ソフトスリーブ、フフ、選択するんでしょセロファンオのスピ

カンカンカンと鳴る微かな太鼓の音/隣寸が擦られる。“縞、少年の細部”/細胞の死

いいえ、汗

一片の花の愁いアールグレイに似て、とても悪い孔雀

1行「君は君だから」

解き放ってください、復讐への序曲（あなたは、）不思議な遣瀬なさ新しい王は、痛み

なかで燃えている紅葉

思い出が旅客機の窓みたいに不自然に小さくなる。

それが虫ピンの展翅板とか、

標本類のたぐいのようにおもえてくる。

なんて空虚で——限定的・・・な白昼夢。

いつもそうさ、ピアニッシモやブラッシングがたくみ過ぎて、

僕は聞き分けのない子供みたいな表現使い。

でも僕は、意味不明の音声でいい、

それでも素直に、真っ直ぐに

ただせめて、焼酎の飲み過ぎで声が嘎れるように、

自分の気持ちが届くことだけを切に願った。

狭い世界にある星の匂いから欠如してゆく、

緻密な玉の接触・・・

人生は同じことの繰り返し、

騙されているよ——・・・

おどけているよ、

ねえ、かわいらしく泣いているよ。

どこかで鶏の鳴き声が聞こえてくる。

トワイライト、

ミルキーウェイ、

シリンダーが眠って呼吸しなくなる場所、

毛むくじらのおおぐま座を想像する場所、

カムチャッカというと赤い服を想像してしまう馬鹿な僕、

繰り返すほどに、

わけわかんなくて、

悟ったふりをすんのさ、

ベイビー、

僕は君が好き。

僕は君が好き。

真面目な人とか、

不思議な人とか、

おもしろい人とか、

全部そうだ、

みんなそうだよ、

嫌な奴はすぐにわかるようにね、

素敵な奴や、

癖のある奴はすぐにわかんのさ。

相手を対象化することで、

生きるバランスを得ているような僕等は、

木に根がなくて、葉がなくて、枝がなくて、

という不足感を持っているようなものだと、

たまに思う。

そら、空想の枯渇！

あいやあ、力技のポリュウウウム！

おひねりのトランスフォーム！

埃の光が宙に加速――。

凍えるような冬の手前の秋の中を加速。

照明が匂いをつけてしまったような目鼻の微動。

食べかけのチョコレートを鮮やかにポケットから出したい、

僕等のまがいものの戦争に加速。

お、なんとなくインド洋めざしちまった、コロンブスの加速。

どっかの海がひっくりかえって、洪水となった情報のパニックス。

トピックは驚くほどたくさん。

殴りかかってくるような学生の声も加速。

鈴の声、スズメの声がそこだけ明るく聞こえている。

桃の実が、たわわさ。

たわわ、すもも。

すもももももも。

おっと、いま、俺の中の祝福が炸裂しちまったようだ。

にじんだ赤の冷たさに加速。

破裂せよ。

木端微塵になれ。

いやいや、人生、加速せよ。

僕は、毎朝、

なかばひとりごととも思えるような声の群れを聞き、

いろいろな喋り方の群れのなかを通過する。

アナフィラキシーショック！

魚だなと思う。

プランクトンだな。

地引網だな。

すべきだな、

人為的なショベルカーみたいに、

うなぎのようにのびて、のびて、大蛇のようになって、

通行を邪魔する人の群れ。

そして何故か、睡蓮の葉のうえの、

運命論的な一瞬を想起するのさ、僕は。

僕は引っ越しをしてから、

ひそかに、駅と僕とは相いれないと思ってた、

そら、無数の経験の扉たちが浮かんでいる。

でも二年と半年くらい経てば、

地上の無言劇に祝砲が鳴る。

なんだか、水気を失った感覚でいるよりも、

なにやら人のようなものがある馬鹿馬鹿しさよりも、

こおろぎだとか思っている方が楽しい。

きりぎりすたち、きゅうりあげようか。

ねえ、グアアアウッって、さけんでみようか。

なんで？ わからない。

ギャン！ キャウオオオン！



ねえ、さけんでみようか、

そしてそれを君が笑うか、賭けようか。

ひよこの鳴き声がきこえてきそうだな、おいおい。

おっとおっと、

まるで次第に大きくなる品の悪い声だよ、

悪魔諸君。

ねえ、爬虫類のふりしたがる君たち、

自称変温動物たち、

この駅に停まっている電車の前の喧噪を横目で見ながら、

バイクで通り抜けるって、

どんなシーンかわかるかい？

僕はくわえ煙草をしてる。

多くの方は、くわえ煙草する僕のことを、

喫煙マナー守れよ、と思ってるのかも知れない。

煙草をぷかあ、と吸う。

うすあおいかげにつつまれるというところの美化。

あるいは、何にも見ていないのかも知れない。

ああ、俺も駅で吸いたいなあ、

と思ってる奴もいるかもしれない。

ああ、雨だれのように途切れそうになる会話。

でも、本当は、

違うんだ、面倒くさいだけなんだよ、説明するのが。

眠たい頭を起こすとか、

社会が好きでもないのを煙草で吸うことで誤魔化してるとか、

僕はそれを生きている理由として考えているとか、

本当はひとつひとつ理由がある。

もっと即物的な理由もある、習慣的な理由もある、

さようございます。

さようございます。

俺もそうさ、こんな馬鹿なことをしてる。

でも本当はね。

どうでもいいほどにあるんだよ。こんなこと。

認められようが、られまいが、あるんだよ。

こんな時、かなしい軋り音を聞いたような気持ちになるね。

そのまま坂をまっすぐ駆け降りて子供が轢かれる、

クラッシュ！

イグジット！

もし本当に煙草をすわないでバイクで通るんなら、

僕はゴミ袋を毎日出したい、

君等がそうしてるようにぼくだってそうしたい、

そうしたいそうしたい、

でも僕は全部すつとばす。

だって、面倒くさい。

だからもう何も言わずにそうしていいやって思う。

牛のげっぷはよくて、煙草はいけないのかい。

毒ガスはだめで、都市ガスはいいのかい。

結局みんなどこかでそんな考え足らずを繰り返してるんだろう。

俺だってそうさ、でもお前だって同じさ。

あのね。

僕が怒るのは、それなら、煙草なんか全部なくすべきなんだよ。

原因を作ったのは昔の人じゃないかい。

それをどうして今更話をややこしくする必要があるんだい。

じゃなけりゃ、毎朝煙草患者のぼくのために、

タクシーをまわしてくれたまえ、きみ。

そうすりゃ路上で煙草なんか吸わない。

そんなの不公平だ、うそつけ！

いまじゃタクシーだって禁煙だぞ。

じゃあ、煙草持つかわりに、はさみ持たせろ！

銃刀法違反だ。

はさみは、銃でも刀でもない、だからいいんだ！

警察が来たって、俺はこれこれこういう理由でってキレまくってやる、

はさみがいいか、煙草がいいか、決めろ！

いま、そのはさみがお前の咽喉を切り裂くだろう。

やめろ、それはすりかえだ。

それだったらそれでいいさ、でも考えるんだな。

社会で暴動が起きても、いいと思うんだな。

煙草を吸わない人と、煙草を吸う人が、

ナイフで刺し合って、拳銃で撃ちあって、

ヤクザの抗争している場面を、

するべきなんだよ、そこまで言うなら。

極論ちがいます。

おまえをからかっているのさ。

じつは、明日からそうしよう、

と、さっき、決めたんだ。

僕はそれを善行で陰徳だって思おう。

そしてみんなのためだって思おう。

前にもそうしていたことがあるのさ、

でも、ある眠たい朝、

むくむくむくむくっ、と悪い気を起こしちまった。

きっと犯罪ってこんな気持ちなんだろうな。

俺はそれで捕まらず、

ある人はそれで留置場にぶちこまれるのかも知れない。

真夜中にうさぎが轆かれてる。

頭蓋骨がぐしゃぐしゃなんだ。

でもそれを誰にもどうすることはできないんだ。

悲しくはないよ。

ひどくどうしようもない気持ちがするだけさ。

トラック運転手だってのは一発でわかる。

こんな所に飛び出したうさぎが悪いのさ。

でもそうじゃない、それならうさぎが入ってこられないように、

するべきだ、でもそれはできない、

ねえ、悲しくはないよ、

ただどうしようもないという気持ちにして、

よくわからないけど、一発おまえの顔面をなぐってやりたいただけ。

えーと何の話だっけ。

そう、煙草を吸うのはやめにしようと思った。

結局なんにもかわらないだろうけど、

そんなの常識だよって諭す人がいるかもしれないが、ね。

地図になった世界には、

しりぞいてゆく波がある。

切り離されてゆくてのひらがある。

棒鱈がいる。

あるいは、はねつるべが。

気まぐれなほどに訪れる、

何かのなごりをとどめながら荒れ狂っているバグが、

じつはそれ自体の病巣における当然うまれた状況が。

時々僕はお前の間違いを指摘やりたくてたまらなくなる、

常識なんかお前は持っていない、

いいか、その常識は、お前の妄想で、

マスコミがつくりあげた妄想だ。

昨日はほんとうに昨日だったのかと、

問いかけてやろうか、お前の食事とかの話を聞いてるんじゃない。

会話を聞いているんじゃない。

お前は寝て醒めて、それがほんとうに昨日だっていう保証は、

どこにあるのかと聞いてるんだ。

おまえはきっとこの問いがわからないよ。無知だから。

そもそも路上喫煙が犯罪になり、重い罰金刑になれば、

嫌でもそうなる、

それが常識だ。そこまで馬鹿するような奴はまずいない。

より信頼性の高いもの、それが常識だ。

百パーセントじゃない。

いいかい、昨日を探すことだ。

なまなましい轟音をプレゼント！

俺はもっと言ってやりたい。

ましてや、ねむたい眼をこすって、

もはや意識朦朧となりながら会社へ行くような奴が、

煙草を吸うのがそんなに悪いことなのか。

その社会の常識はお前の定規じゃないのか。

さっきの理屈でいやあ、俺はカジキマグロな顔をしてるのかも知れない。

警察官はさしづめ、サメですね、こりゃあ。

でも冗談まじえた比喻はともかく、

その定規が正当だと勝手に思い違いしてはいないかね。

(八当たりだとしてもね、

みんなそうさ、一番心の奥底では、

絶対に触れられたくない何かを持ってる。

エゴってやつが！ エゴってやつを！)

喫煙そのものが本当に悪なら、国家は税金なんか上げず、

廃止すべきではないのか。

マリファナだって好き勝手にやらせてやったらいいんだ。

合法ハーブだっていいじゃないか、やらせてやれ、

それが社会の悪だと言う根拠はまだ見つかっていない、

本当さ！ だって、第三の麻薬だって持ち込まれるかも知れない、

バファリンだって大量に飲めば意識が混濁する！

ねえ、そんなことは起きないとか、

そんなことないよ、どこで何が起きるのかなんて全部把握できないのさ、



大多数の思い込みにおける常識はそこにあるらしいがね、

でもよすんだよ、おたくさん、

アメリカみたいに、あなた方の為というポーズを。

でもこんな話をするのは、

きっと、僕は、

どこかでまだ社会を信じたいからなんだろう。

内省的なものになまめかしくなでられながら、

ごぼごぼとくもぐった音が鳴る。

僕は僕で見直すべきところがあることを、認めるべきなんだろう。

それは路上喫煙のマナーのためでもなく、

公衆衛生のためでもなく、ましてや常識のためでもなく、

自分がみんなのために、と思っている限りは。

でも行き過ぎた正義は、

所詮お金や、心理学の手法にすぎない。

ずっと無自覚で生きてきた、君よ！

砂だって繰り返し生きていることを認められない、君よ！

あらあらしい意味を与えている線路が、

盲目的な人をたくさん生みだす。

そして彼等こそ、

常識を持たない連中だ。

お前のことだ、カメレオン、

お前のことだ、お前のことだ！

そいつは粉々になってばら撒かれた音ばかり聞き、

いつまでも本当の音を聞かない。

情報はすべての正しい音じゃない。声じゃない。

社会の締め付けは、ルールの厳守は、

あんまりよくないことだ、

誰もが素直に人のことを信じられなくなる。

でもそうすると、奴等は言う。

信じなくていい詐欺にかかる。

嘘だ、間違ってる、ふざけるな！

見破れないと本気で思ってるのか！

そんなのは騙されたことのない人間の台詞だ、

でもお前も実はもう騙されてる、

そしてそういう人間をさらに騙して苦しめる人間がいる、

どこまでもこのシステムは続く、

思い込みで自分の世界の壁をつくった人だけが、

そのシステムを破壊できる、

ただし、人生を無駄遣いすることはもう確定済みだがね。

そうでなければ君は法に裁かれる、

裁けない、嘘だ、嘘なものか、法にはいくらでも落とし穴がある、

まして君に恨みのない人間がいないと本気で思ってるのか、

そんなことを言ってるような奴にいないと思ってるのか、

あるいは人に刺される、

刺されないと思ってるのか、お前は今度から後ろを見て歩け、

そしてこれは脅迫じゃない、

言語上のトリックにすぎない、

でも、もうちょっと痛い目を見た方がいいな、

お前の性根は腐ってる、

あなたが死後かならず裁かれますように！

とても重い重い罪があなたに課せられますように！

お前をからかっているのさ、

でも、車を運転すればスピード違反は生まれる、

暴走はうまれる、

最低そんなの一年もすればわかったはずだよ、

車によってあたらしい事故はうまれたはずだよ、

でも一体誰がその車より、

もっと安全で快適なものを生み出せたんだい？

それを作るためのプロジェクトがあるなら、

この国はお金を惜しまないのかい、

もちろんそうだ、これは詭弁だ、でも、この詭弁が、

指し示しているのはなんだ、

君が勝手に作っている常識は所詮、

つくられた常識にすぎず、

本質的な常識ではないということだよ。

手塚治虫の未来都市も、

SFにおける創造的な世界のフィクション的な問い掛けも、

なにか、しらじらしい。

ぼってりと闇を吸ってふくれあがったすえに、白い光が生まれたというくらい、

どこか、うさんくさい。

頭の中の素晴らしいことを寄せ集めれば、世界はしあわせになる、

でも、頭の中のそれは、お金ではないからうつくしいんだ。

最初からそれはそうだったのに、

それだけでよかったのに、悪い気を起こしたんだなって気持ちがある。

ちいさなものにおおきなものを入れ子にして納めるさざ波のリズム。

トンネル長屋にでも入っていくリズム。

実際この国には、貧乏な人がいる、

子供にごはんを食べさせやれない人もいるんだ、

それをあなたの責任でしょという人もいれば、

いやそうじゃない、これは神の賜り物、という人もいる。

捉え方次第で、人の心はスムーズになる、

でも、人の心を捉えているのは、

本質じゃなく、見せかけではないのかな。

おや、顔色が悪いね、どうした。

そうさ、そんなことを言ってもどうしようもない、

とあなたが言った瞬間、

僕は即座に、お前は自分で嘘を認めたんだ、となる。

じゃあお前の常識は何だったんだ、絡んでやろうか、となる。

有り金全部もらってやろうか、

指の骨を全部折ってやろうか、

俺はいらいらしてるんだ。

とっとと消えろ！

おいおい昔の悪い癖はやめなさい。

でも答えはたった一つさ。

お前は嘘をついてる。

さらに付け加えよう。

そしてお前は何もしない。お前は善人じゃなく、

自分に責任を持たない悪人だ。

悪人は、他人をだまして死後罰を受けるらしい。

君も、それを子供だましと言って重い罰を受けるつもりなんだ。

いい心がけじゃないか、最初に言っておこう、

まず俺を笑え、俺のそれは、お前の人生に一番よく効く。

おっと、緊張しないでくれ。

こんなのは別に論理上のひとつの帰結じゃないか。

雨のための執拗な増水、それだけじゃないか。

冗談はあれとしても、

馬鹿丁寧にそんなのいちいち喋ってられないよ。

かまってられる？

おまえ、犬か。

お手しろ。

三回まわってワンと言え。

違うだろ、

違うのさ、

みんな多分そうだなって思ってるのさ、

世界はきっと何をしてもいい、

でも、僕等はルールを守る、

秩序をおかすものを許したくはないから、

青い水底にある真珠を守りたいから。

でもそのために、小さなことに、

眼をつむらなきゃいけない。

生きることは小さな罪の積み重ねだから。

わかんなかったらわかんなくていいよ。

お前の人生まで俺が干渉するのか。

違うだろ、だからお前は俺を干渉してはいけない。

でも、干渉すること、すなわち接触することが、

人の成長でもある。

本当はいつだってその向こう側にある。

向こうがわのあたらしいところへへ行け。

僕等は筋道のある感覚で、

ピラミッド社会を通過する。

ステンレス製の。

あるいは、プラスチックというひびきの。

ねえ、その単調な岩を噛む波の音はなんなんだ。

ああ、雨は三角形だって思う時みたいに、

内部には何があるのだ、そのものすごい不動のところには。

集団的無意識、

みずからを薄めるための幻想、

ガラスの表面だけ乾いているような神。

そんなものわかるものか、

空っぽかもしれない、

愛かもしれない、

というよりすべて嘘かもしれない。

わかってることはたったひとつ、

どうしてこんな恥ずかしいことを、



大真面目に書くのかわけわかんないけど、

君が好きってことさ、

僕はいつだってそういうことには正直なんだ、

セクスが好きじゃない、

おっぱいだって実はそんなに好きじゃない、

ゲイとかレズも実はそんなに好きじゃない、

だけど差別じゃなくて、

その内部にあるかもしれない、

宇宙的なことわりのある種の矛盾、

烈しい熱をうむその荒廃のなかのあたらしいルール、

人はそもそも何物である必要もないかもしれない、

というのを、僕はそこで感じてしまうからだ。

路地裏とか、

建設現場とか、

たとえばコンビニのトイレの蛇口のそばの石鹼のいれものとか、

別にどうでもいいんだけど、

妙に心に引っかかるような時は、

必ず奥の方で何かが引っかかっている。

でもわかることはたったひとつ、

ベイビー、

僕は君が好き。

僕は君が好き。

とにかくにも、

そこでスーツ姿の人を見るんだ。

女房を食わして、子供いて、家や車のローンあるって人。

あやつり人形みたいな、無表情な人。

感情を完璧にとざしてる人。

それをよそゆき顔と言う人もいるけど、

違う気がする、

それがその人の怠慢なんだなと思うこともある。

世界に期待しなくなったあなたは、

相手を見て喋っているということで、

それ以外のことを閉ざしてるんだ。

でもそれは、しっかり勉強しろ、

ということじゃない、

純度があがるほど、視座がしっかりするほど、

人それぞれの理由かも知れなくて、

たまに考える。傷が柔らかく撫でられ、

ごくたまに、底辺から侵食するような感じとして。

毎朝おなじことの繰り返しだけど、

他愛もない繰り返しほど、

洗脳だよな。

チェックインさ。

光と影に弄ばれている感じがして、

どうしようもない。

ああでもほらさ、

信号なんか別に必要はない、

車だって本当は必要はない、

チョコレートとクッキーが降ってくるぜ。

マカロンにプリンにアイスクリーム。

ゼリー菓子にキャンディにマシュマロ。

チョコソースのたっぷりかかったエクレア。

シュークリームにロールケーキ。

ふくよかで、贅沢なものが、降ってくる。

いま、多くの人はそんなことないって言う。

違うんだ、本当は何一ついないんだ、

そしてそれを認められないのを、

弱さだって気付くことができない人達が、

さらに嘘を重ねていくんだ。

でも安心せよ、僕もさ。

僕はそういうのを認めてる、ひとりの人間の重さって、

嘘の重さのことだよ。

でもどうせならしあわせな嘘がいい。

ゲイにもレズにも、愛想よく接したい。

実は昔、ゲイだと思われていたこともあるんだ、

おやっ、と思う人もいるかもしれない、

また、女性っぽいなんて、よく言われてたことなんだ、

だからってわけじゃないけど、

正直ゲイやレズの人心理ってすごく興味があるよ、

いろいろ違うだろうけど、

根っこはみんな一緒だし、僕もどちらかといえば、

社会に対してカミングアウトしなくちゃいけないようなこと、

たくさんあるしね。そして、実際、してきた。

残ったものは全部空虚だけど、

正直っていいことだよ。

いまでも、眼がきらきらしてるって言われる。

それは、魂が燃えてる証拠だ。

僕がまだ、人のことを人と思っている証拠だ。

好きな人も嫌いな人も認めて生きている証拠だ。

人生は薔薇色？

人生はフルコース？

どうかな、僕にはわかんない、

ただ、人生は僕にとっては多く、恋とか、

ロマンティックであらわされるシーンが多いよ。

純粹だから、社会批評や、ジャーナリズムにつながる、

素直でいたいと思うから、弱い人の味方にもなる、

でも時と場合においては、人と話すしかないから、

その時、自分の技術が必要なんだなって考える。

交渉もいずれ得意になる。

くだかれてる僕等の心のように、波は、あばれていい！

でも、大切なのはなんだい、

いま、僕に必要なクラクションや、絶叫はどんな言葉なんだい。

朗読するとき、まず何から始めるべきなんだい。

歌をうたいながら、自分じゃなく人の気持ちを考えているとき、

なにを真っ先に持ってきてくりゃいいんだい。

そしてそれを、本当に心の底からささげたいって希う僕は、

いま人生のどんな瞬間より価値があるって信じてるのさ。

ベイビー、

僕は君が好き。

僕は君が好き。

人生はややこしくなりすぎて、言葉ばかり増える。

僕は沈黙し過ぎて、言葉ばかり増える。

僕のそれは、とある精神の病の軽い症状のために、

芸術的な衝動として処理されてゆく。

そして人は、あやうさと友好的になれる。

そのあやうさは、つまり恋だから。

そのあやうさこそ、人類のマイナス面を、

プラスにすりかえる装置だから。

だから、現代がかかえた闇を、

麻薬や暴力だけのせいにしちゃいけない、

政治や経済のせいだけでもしちゃいけない、

結局、僕等は本当のところの理解を、

一歩手前で見誤っているんだって、

考えて、とりあえず、前に進もうぜ。

そこで、言いだす言葉と、言い終える時の言葉の、

違和感にふっと思い当たる。

それでいいんだ。

そんだけありゃあいいんだよって思う。

世の中は形式やパターンに充ちていて、それは因習だよと、

ある日の僕は言った。スーツで仕事しなくたっていいし、

ネクタイをしなくたっていい。

働くことが苦痛なのや、

いま、もし給料が少なくて生活に困っているなら、

僕は運動をしなくちゃ、社会運動。

革命をしなくちゃ。一滴も血がながれない、

世界平和の活動。

そしてすべての人が、才能を評価され、

もっと自分をたかめられて、もっと前向きになれる世界に、

しなくちゃって――とある日の僕も、

やっぱりいまの僕も、思っていたと思う…。

大人っぽくなった僕を見破ってくれ、

特別なふりも、賢いふりもしない僕だけど、

本当はどんなに自分を恥じていて、

いつもどんなにみんなのことを考え、

そして少しでもよりよいものを考え、

それが君へと向かっている前向きな感情であることを、

見つけてくれ。

つながってくれ。

すると突然、忘れていた言葉が、

地下室の天井をぶちぶちぶちぶちって破ったもぐらみたいに、

ほら、朝陽。

でも僕等は約束とか、言い訳を、

あっさりと呑み込んでしまえるクジラなんだな。

僕がたくさんの人にいただいた、空っぽや、むなしさは、

僕にこう教えた。

結局この人には何もないんだって、



そしてそれをお金とか欲望とか、

知識とか教養で誤魔化してるけど、

いま自分がどこにつながっていて、

本当は何をすべきなのかも全然わかってないんだなって。

あなたは狡い人だよ、と指摘されるのを恐れてる。

本当はしたいこともしたいと言えない人だよ、と。

でも、心のどこかじゃあ、そういうごまかしや嘯きにみちた人のことを、

心の向こう側のシステムの不自然なむくみや暴走や閉ざされることのない、

人の自由な気持ちを感じるたび、

愛せた――。

輪に応じなかったわけじゃない。

星が散らかっていただけさ。

僕は別にたくさんの人を嫌っていたわけじゃない。

何ら意味をなさぬ人の心のこと、

自分と他人が一緒だとは思いうくせに、

結局は人の弱さや、人の不幸を見つめ、

結局猿の力関係をやめられず、

本当の成長を感じられない社会に僕は憤りを感じた。

名刺なんか持つなよ、詩人のくせに。

よくできたプラモデルだと認めたいのか。

アーティストだろ、魂の仕事なんだろ、

人を愛するって肩書きを必要としない、

そもそも、僕等は社会を必要としない、

むしろ、社会から求められる才能。

でも多くの未熟さは少し違った。

働きたくないと言った。

辛いだけだから、嫌なだけだから、

それもわかるけど、でも、わかりたくなくなるほど、

彼等の言葉は一様だった。

ノックする者はいない。

あきらめている以上に、

君は弱いて、

いま目の前のことさえ本当は理解していないから。

ノックしても返事がないんじゃない、

君がからくりを見破るのをやめただけだよ、

正しいことと間違っただけから、

三つ目の答えが生まれた社会で、

さらに、君がそこで覚えた経験がいかされていかない、

ノックは鳴らない、

だからそのノックはいつまでも鳴らない！

何が宗教だ、馬鹿野郎。

お前はなに救われたがってるんだ。

どんな嘘にみちて、本心を隠そうとしてるんだ。

でも答えがないから、生きてるんだぜ。

ただ遠くへといこうとする本能に、

すり抜けようとしながら、

思ってた。

すこしでも理性を寄り添わせて、

人間っていう笑顔を、愛を、本当の自分を、

旅を、世界の真実を、見付けたい――…

でもわかることはったひとつ、

いまのぼくも、

光を探している、

そして希望を見つめてる、

それだけでいいのさ、

そんだけありゃあ何処へだっていける、

僕等は何処でだって暮らせる、

どんな人生も、なんのそのさ、

ベイビー、

僕は君が好き。

僕は君が好き。

太陽の姿が鳥のように見えたら、

きっと感情は女のように触れてくる、

酒のようにまわってくる、

夜を待ちながら僕は女性らしい美点をうしなった、

そこに、空想への合図の流れ星を待った。

言葉が若い魚のように泳いで行く、

僕も、遠い宇宙から泳いで行く。

風船に蠅がとまっているみたいに

ソファを胡桃材の棚の前へと置く

すると粉せっけんみたいだ

僕は安心する

かわゆいダルマのように

まるで人なつこい犬でもいるように

生活という重い石に寄り添うように育った草や野花が

温かいシチューの匂いのように近付いてくる

手習いのトランペット奏者になった気分で

口笛でジムペニティを吹いてみる

そうしてみると本当にいい曲なんだ

知覚しうるものは演奏されるはずのもの

目の前にある美しいもの

心を癒したり慰めてくれるものに

だんだん音がなくなってゆくまでの

愛のやさしくてなつかしい歌

それが偽のユートピアづくりなのかもしれない

それは閉ざされた深層の

抽象的な傾斜なのかもしれない

緞帳の受動的な態度が嫌になる内的感受性が

立ちつくした季節につかまえた足音を聴いている

そして僕は万能医療装置をほしがっている世界に

まだ早すぎるよと思った

ねえフォルテだよ自由の女神の

マリアンヌあるいはドラクロワの絵

あるいは設計者の母親もしくは恋人

さらには奴隷解放記念から黒人女性とまでいわれる

自由の女神

ねえまぶしいほど白いシガレットだよ

本当にどうでもいいクリーム分離機

でもまぶしいよ複合的不均齊的イメージ

1

ランプ

けだか

太陽はまだ洋燈のように渦を巻いていた。それは殆ど知性の微かな猛毒であり、崇高い魂は名に依拠せぬ香わしい肉の果実を、はるかに勝ち獲る松火のように、地球を閨房のあたりに。おお太陽！地球はギリシアのオリンピアで採火された溶接用語ほどに、通気は狡猾な眼に向かって消滅・あざむかれない、ああおまえは軽佻浮薄な炎、厚かましい木々の緑、過去の葉、枯れた甘ったるい貧困な花、素っ頓狂ほどどでかい松、ポプラ、オークの木の首根っ子踏みつけるようにして。（幻など消え、）なのにヒステリックな俺が残る、俺の為にさわやかな風が螺鈿や燠する、光の中で風は砂金採りや貝になる。この未来へと向かう空洞のひびきはプラスチックやアルミのように、輝く光を返し、おお物質の内側にひそむ火のように

らめき  
俺を懶うくした木擦れの音が耳元で陰鬱な影の如く攪拌する。そして俺の頭上の晴朗な精華、シダ・まこと驕りに充ちた無為、ユダ、残酷無比のユダ俺がいらない、俺だけがいらないきらめくみずからの体内が欲するものを選ぶことなく、羽根ある矢の――死――

き

2

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

俺は青い肉体を寢床にして夢見た・私はランス、一五〇三年に生誕した。

私はランス・大聖堂の主クロヴィスの戴冠を目撃し、偉大な聖母像の石、ああ永遠の空笑いの町。されど及びがたき、われらの選ぶ狭き門のこれ見よがしなポーズ。



私の裕福な両親、孤独の魂に聖体、さもなければ聡明なミュージシャン・彼等は唳々と雨がトラ  
ンペイトする劫初からの音楽。たとえるならバッカスの席にも、トロイヤにも。・・私は生ま  
れる二十年も前から小さな家、雨風を凌ぐ数千フランを与えられた。あるいはポンド、ドル  
、遣い方もわからない節約する意味もわからぬアダムの頭蓋の聖心のように。母からの小遣  
いを知れば、笑いの火花が俺の性の奥底に嘲りとなってはじけ飛ぶ！

せいたか

私の父は軍隊の将校。彼は背高く、檸檬をまぢかにながめやるほどの短髪禿頭の黒。それ  
は髭や眼や皮膚と同じ火刑台の処理。――私が生まれた時に彼は・・あんまり記憶になくて少  
し恥ずかしいのだが還暦。いや、四十八また五十、さもなければ、思わず祈りの言葉を口に  
しよう実際的な五十八。どうでもいいのと同義だが、地獄の蓋はひらく、不死鳥の輸送も危  
険な海峡でならありうる。頻繁に憤懣たる。おおされど懊悩、消極的なアンタを悩ませ、苦  
しませ続けた、心ざけた展望塔。

私は母は不可能な夢のように、針仕事。さもなきや靴下を繕う。恐ろしい、穏やかなウィ  
ィ、その後の完璧な順序“ノン”――家は繕いすぎて虫取り網が必要なほどに、静かな、結  
晶の焦点。愛した・・兄弟は腕の中の巢、乳房と一つという具合。私は、読み取りをし、書  
き込みをし、・・お誂え向きの人生のひつまぶし。研究に消印、『愛』・・しかしクレープから  
精液がしたたり落ちるほどに、ある日毎の約束――『愛』・・

彼は二十フランくれると言った――庭・・薬の匂いだ、阿片だ・・

幻の二十フラン――腐爛。蛆が湧くほどに眼の玉は白い。でもとうとう、内在化感覚器官  
の共同謀議。未完了の救援。私は欲しかった、玩具、お菓子、・・美しいランプの灯――幼幻  
。五フラン、・・腐乱、腐爛――できることなら・・・何かに立ち返るように手で触れられる頁の



ン。聖書までバツテン。ユダ・ユダ・召喚は正しいか？

ああああ年金受給者ラテン語崩壊。

、、、、、、

動物のような、アーサー。

## 昭和

昭和の子の仲間きえ核は外交へ

b y わたし達の川柳は

…ごとき愛すと 誓った人の 昭和だけ

b y シニカル内戦

ピアノにドラムにジャズかじる貌  
きっと！

b y そんな時代だったのさ、

ほんとうは 夕焼けこやけで「また明日！」

b y ちょっとおれ無職

ブランコに憲法と音楽があり

b y ゆ＊れ＊る

昭和と言えばイタリア料理と かるぼなら

b y ヘイ、おなーら

オリンピック 平和に穴があいている

b y 高度経済成長

手加減の遊びに飽きて宇宙VS

b y てか、まず地球

森を消すアンコールに諸外国

b y イエッサー！

憲法から煙がふきだし「加熱です」

b y 電子レンジ

蛇口から尿意をおぼえる歴代首相

b y 悪い顔の奴いっぱい！

トーストの暗い図柄

b y 米からパンへ

## 酒

ジョッキもち 喉仏みえるほど 噎せ返る

b y よごれちまったぼくの肝臓

麦酒のびーる 麦酒たりーる 麦酒おわーる

b y でもまだ飲みーる

ビール腹？ バチはないのに バチあたる

b y 酒ン蜂

非常階段 吸殻と空き缶 コロがつて

b y そして誰かがぶっ倒れ

意識して 脈絡もなく もっと告げ

b y 注げ、とも書く

あまだれをのぞけば薔薇の一万本

b y やれやれ…。

小便小僧 水が美味いとガッツリ！ 四つん這い

b y いや、いつかわかるから

頭痛い 迂回路に「まだ眠い」

b y まだ、朝早い！も…。

始発からコップ酒のにほひがし

b y ていうか、寝ゲロ…アウ！

一口目のビール  
議さん

b y 飲み会解散できない不思議

コーヒーの湯気みたいな世界

b y メマイマイ

酒さけ鮭をつるし蝶ならぬ腸わるくし

b y いい旅☆コワイ気分

## 自然

雑木林も悲しからずや助太刀は微力

この癖は一問の値打ち大和河

通り雨、霹靂、そして静まり返つた

## 春

アイスクャンデーに見えるほど春もえにもえ

霞みゆく蛮人の槍もトロツとして

ジジリと心でひそかな別れを告げた

## 会社

大勢の男の斉唱、呼んでいる

とろりと飴が窓に垂れる度に囚徒めく

きのこみお

葦俯瞰ろしても思索充滿す

こめかみ

ネオンの灯と石油ストーブの蟀谷

## 夕暮れ

夕ぐれは気障な感じが目立たない

うす笑る馥郁とした昔を憶はせる

松林黒鍵が鳴るやふなもの

便所の西隣

## 酒

酒が肴に ネクタイはピントに

酒をコップに注いでドアが風に

酔つて足下に人影見掛けたり

嘔けば装いも新たに船が沖

## 昼食

性格の悪い女ごみのおいせかせかとする

ランチタイムさもしいほどに脚が太い

手綱をとれば遠い場所でもXの値

夢の如し わたし何も存じません

色気に欠けてあたりの音に牛通る

## 風邪

消化するモーメント紅き林檎になれるか

比喩的な拡大用法 風ふたゝび

やゝ黄色みを帯びた蟹

赤ん坊の皮が剥けたやふ

指いきいきと笑ふ

聞き捨てならない「熱い」より「冷たい」

からだじゆう汗がしたゝりました

いたいけな汗この危うさは映画となりぬ

体温計肉を炙る香ばしい匂ひ

## クールビズ

野良犬が草を噛む/はだけた胸は断られ

ちょっと慌てたよ蜥蜴の背に毛が



## 嗜好

スイーツ昼寝端に蓼喰う虫

## 偶感

太陽のない街に猫がいる

サークル費 坊ちゃんのように感心しない

## リモコン

遠隔感応しくじりでは済まされない

## 山

目を離すと、動かない写真だ

あかい靴はいてへりくだれサイダー

駅までは影のような奴等に同情する

凍てつく山に本心は白髪となつた

杉の幹まで雨過ぎて洗えるごとき

## 恋

北へ走ろう ぼくは或る恋のため  
遠き顔、如何様するなら二年後に  
気持ちを鎮めるまゝに飛び出した  
ひそかに埋めるレモンイエロウは戻らざる

## 痛み

どうも身体の調子が天中殺  
胃がきりきり痛む捕虜なら夢中でつい  
髪がくしゃくしゃ いもしない昆虫を見る

## 東日本大震災

胃カメラは多忙くゞれば海は毒薬と化す  
治安が失われ 武蔵野に手がとゞかない  
こゝろに異国、そして誰がこの遺言

いけ好かない 囲碁なら五目並べできるのに

幻想は硬い頭にグミを授ける

## 源氏物語

源氏物語 活造り異境にありて

## 女の子

けなげでかわいい指先に似た毛虫

膝の上は花の市井いちいになつている

楽器は骨董品と思ひ患ふ

## 椅子

何時の間に椅子よ 家じゅうで一番すゞしい

夜は屋根、指紋とるのにいそぐなよ

考えれば靴のサイズが合わない

クレーン そろび

フェリ

かくまでも蟹紅き起重機は薔薇なる胸騒ぎべにばなの香おぼえそめにき旅客船

叙情のともしび薫るがごとき灯台は白亜紀をかまして

りょくようへんべん

オノマトペで表現できる緑の動きかへりみあえていま緑揺翩翩げざやかに

スローモーション映像みたいに零れる度に啓く夜の面影

ワルウゴザル アイサヤウサヤウ アイコノクラズム アーバンライフ

222とt o m e 不思議な偶然の色彩りが何故か僕を咎む

やなぎ あ

われを託たむ揚柳の尾ひれ生れ出でし狐の尻尾すゝきかな

あらくさかをる鎌投げる首狩や祖先古墳の変身なりし

老公孫樹トーテムポールの十字架 インディアンになりたき我等

忽ちに巨鯨を逐ふ我故にこの予言はもうひとつの臓腑突き抜けて滅亡

こだま

返答のない名前の坩堝だ！ コンクリートジャングルでの反響は！

さいろうとうろ

豺狼当路のぼせあがった回路に ドンナユウシャヲ ドンナセイジンヲ

帰省ラッシュのニュースに氣勢削がれる奇声はされど「規制品」

何を目指し何を諦め何を獲た きらきらひかる あめのつぶやき

バリアフリー住宅はりぼて忍者屋敷のかたむきを透かすまなざし

はな

鼻が花！ 明鏡止水 光風霽月 虚心坦懐の花冠！

ひと

如雨露を持ちてまた置きてまた手に取りてつくづく花を愛づるいたいけな女性

た ベンチ むげがら

誰れが置き忘すれたの共同椅子にて演出過剰の空箱がひとつ

一斉に飛び翔つ雀は羽根それもいつせいに風ぜ吹き渡る逢う魔ヶ時

フレグランズ

戦闘いは尽くることなく水霧らふ海にぞ眠れ血の芳香

へたくそ  
たからのもちぐされまだおれはほんきだしていないぞってね歌人

尾行る刑事は拘摸を警戒していた！ ふふっむだだね さいふのひもゆるむ

かさ  
踏絵とろう試金石に甲殻めく洋傘はなく茸はへ湿地茸はへなむ

飛行機のシートベルト着用ランプ のぞきつともる ひそかなたくらみ  
きやんきやん  
喜屋武喜屋武と吠える沖縄の犬は賢いのだ！ いったみただけ

いそがしいいそがしいいそがしいいそがしいいそがし磯巾着

アゲ足をとってバタ足になるようにムシ足とってあるけなくなるきもち

か  
絶えてし耳を藉さざりきストロベリーキャンドルの花揺れしけぢめ

くち うた  
つひに身の上を語りけり唇しめらせよ我が詩をきかせむ可憐

かえたま  
やさしく歌ひ出でしかど蛙卵かえにける閃めく冬のほたるぶくろ

歌ひつづくるのみなれば孤獨なる花言葉わすれしクリスマスパレード

ひそかに何ン度もおいらは慟哭いた箱庭遊びをわかき循環りと看做し

鋸と鉋で！ 釘と金槌で！ 鍬で開墾ンせよ礎石事業ウ

地震雷火事老爺！ 生垣ひそんだ蛇猪蜥蜴の尻尾きり

しかんたざ  
まよなかはセクハラオヤジ愚ッ不ッ不の和尚も只管打坐の修業ウ

石畳を掃き清めるならはしでカムフラジュバックする歯ブラシ頭

バリバリ・エクスプレス  
水を打つてもド頭に打たれる襖はもうできン我なれど夜は現役超特急

そのふ  
ひとりのみもあらざりけらし公園うち物語らひて我も消ゆる

知ったかぶりの歌男おろおろ男かのまめ男おたふく男

祖先伝来いわんや北斗のケンシロウ一子相伝をうかべる

ヴァンパイア・バット  
月とすつぽん血吸い蛭の弟切草の吸血蝙蝠の面影

キスリングの謎に輪を掛ける人おりき！ 遊山旅行に出掛けなむ

じしょをひかせたいとおもうだけさ登山用リュック画家も背負いし

おでこにゆびを一本つたてて古畑任三郎いかんせん容姿が

跨ぎ押し開き走って逃げる！ ワッタシキオクソウシツナーンデース！

煙管乗り略してキセル自動改札を強行突破す！ ラーマン！ イエースラガアァマン！

カワウソかカバカウソか看板みいっけっネコホームズねこなだけ

「あの頃は好きじゃなかったな、学校」と見え隠れする内省の瞬間  
がっこ とき

首根つ子つままれてみるように振り向きて君の読みぬし本が捲れる

霜下りの戀に羞らふ、かく羞らふ、嘘は窓掛引く SHADOW愛人  
とぼり アズイーザ

印象派ドビュッシーの楽の音と睡蓮すなはちやはらぎの祖国  
くに

戀に戀する男いと云ふ大正浪漫を投影されよ三日月

はや着替え寝巻き洗面所で表情に齒冠に頭髮に前掛けをしてワタシ  
かお は かみ エブ

京の商家を模せり店通し土間よ玄関から真っ直ぐうら口へ  
あきなひ

裏庭の鬘ぬぐうが如く掃き清め水を鼓動つ美なる媚たるくはへ

竈にて薪を焚く飯を炊く味噌汁の出汁をとるワタシ凍傷の足  
だし しもやけ

借金の抵当に引つ張つてきた店だから甘いみつばちのデザートを用意する  
かり かた

ドキュメンタリーのように克明サイレント映画の意図ほど明瞭ウ

メビウスの輪の繋ぎ目を?ぎ取れば君は気付くだらうか切れ端

ぱちぱちと御破算！ 商いは牛の涎さ須べからく焦慮ることなかれ

ソロバン模様の服で何をせむ商人の建て前を表面に出して  
あきんど おもて

## とある犠牲者の死体が木端微塵の理由

---

パラシュートで落下する。

打ちつけた釘さながらの悲鳴あげながら、

燠を目指して、

ひまわりを探して、

――僕は……落下する。

黄土から生まれた野菜に見える、

この進路はもうすでに拘束されている、

蒸れる伊吹き、腸を蛇にかじられ、

さながら僕は重みに耐えきれなくなった葉先の水滴が、

落ちるみたいに、いくつかの記憶のかがやきをのせて、

銀色の小魚たちが挨拶するような幻想、

踊るような足取りでめぐる、

荒馬の眼をして、

蜘蛛の巣を振りはらう。

光線さ――筆舌に尽くせぬ澄み切りのなか、

宇宙からこぼれたシャボン玉。

僕は小さくて白い種子かな、

レモンの漿かな、ガラスみたいな液かな、

大粒の塩かな。

僕は何も知らない。

――僕は…落下する。

たくさんの世界や、銀河にある星や、

異次元を見てきた、

画鋏のような印象として、

いま、パンチで打ち抜かれた金紙みたいに、

そこから絶えず押し寄せてくる、

それは月明かりでも太陽でもなく、

そこにおける指で摘み取ったものの力。

水面に浮かんだ花になりたい。

燃え尽きた打ち上げ花火になりたい。

天使たちのまばたきや欠伸のようでありたい。

闇を乱す孤独とその喜びでありたい。

烈しい音楽と、

しづかさの無垢な涙のようでありたい。

――僕は…落下する。



フルート、ジャズ、ビーバップ、

テキスト、サファイア、ヨーグルト。

二度と撮られることのない映画を考えている。

耳を澄ました――午後…

僕の髪は白くなっている……

帽子をもてあそびながら、

おや、そこにいるね。

フィラデルフィアの夕陽。

(だ) んだんとビジョンが見えはじめて――も、

きっ(と)……

それ(は)違う…(ん) だろうな――

「これは旅の音楽だね、

たえずそっと流れていく時の――…

〈鈴のような声で…〉

シンセポップ、シューゲ、USインディー、

雑多なサウンド・アプローチが並ぶが、

…チューインガム。

欠けた月のおぼろな光――とか…。

めくるめく構成の、しかしスロウな音像が襲いかかってくる、

ひっそりしたガラスの破片、鋭利さを隠しながら、

ディープな一面のコントラスト。

〈異国の遊歩道が見えてくる――の…〉

チルウェーヴ等の影響を感じさせ、グラマラスに盛り上げる、

――会話がとざされたときの沈黙？

沈黙（は、）――違った…

まるで白昼夢、まるで、完璧な黄金いろに沈んで、

飛行機雲になる夢を見ているような、

（ドリーミーなサウンドスケイプ。）」

鴉のような、

喪服のような、

黒い服を着て――いる…

まだ幼くてあどけない僕等のふくらはぎみたいな感覚が、

無重力の世界へ、ねえ、

…青春の味がして、

涙目になってしまうほど甘酸っぱい。

オーディエンスに、

拒まれはせずに、

吹き抜けて――ゆく…

空気が独り歩きしていく、

声がむくむような、

あわあわとしたひびき――。

同じ映画の決まったシーンだけを、繰り返し、

ている――みたいな……。

(アントニ・ガウディは何処へ？

ねえ、新しい仲間が増えるのは嬉しいこと？)

(フィネガンズウェイクは何処へ？

アメリカの裸身が、

ピンポンの玉のように、

意識の壁から壁へとゆくよ。

あと、朝陽がすごくきれいだよ。)

……過去を思えば、ひとこまひとこまのやさしい動きを、

怪訝そうに、もの訊きたげな音を立てて流れる、川を思う。

――声質はやわらかい……。

(死) について。

クラブのブラックライトが、懐かしい。

――あと……あと、あとね……

あれをしたかったんだよ、あれ。

(悲しみ) について。

ライブハウスには、

ひとりもいなくてさ——…。

僕等は敗北や、

挫折や、

青春の傷手みたいなものを、

最後のラスボスだって——信じてる…

「螺旋階段をいつまでものぼっているみたいだ。

でも、さみしそうな響きがそこに含まれていて、

マリリン・モンローが死んだよって、言われてるみたいで。」

メリーゴウラウンドに乗るんだ、

あの観覧車に乗るんだ、

巨大な音楽が死んでゆく——よ…

あいかわらず進歩がない僕はダイヤモンドの小川で遊ぶ、

その弾丸は金属音をともなって無邪気に明るく…

カーテンの向こう側から聞こえてくる。

11 自由律短歌

その一

ジョン・ケージねがはくば「4 : 3 3」――香水のように……ながれたまへ……

名前ほどきれいでないキース・ムーン着弾地点 誤射確実

クリスティーヌ・チュバックの公開自殺――何することも無きひと日の……情景……

キーボード徹夜で打ちしわれ……風船おじさん――冷えきつた心おもふ夜もあり

夕映えの東京タワーおもひ出せば無人のマリー・セレスト号わが身に迫る

スキー歓声あげて滑りゆく「ああ」「ああ」と風の冷たさポストより出す新聞

冴え冴えと朝の日差しの照るなかにツタンカーメンの呪ひ今朝も鴉眼で追へり

刺すほどに強きライトを浴びながら不法投棄不幸をもたらすダイヤモンドかな

指先が冷たい石のようになりおれはジミヘン歯でキーボードを打つとおどければ

ベランダのハーブガーデン—友はサラダの如くまじりあひ…香の中に入る

騒音の中の一瞬頬をふくらませた栗鼠はつかの間やがて消えてゆく

『クノッフ 愛撫』タオル身体を拭いて幻覚の如きカーテンを開ければ

メガホンを使わず眼の前をただ中学生が行き過ぎれば「アルファでありオメガ」と

夜の静寂がのしかかつて来れば—「密林も消ゆ」…されど木霊す「理性を抑ゆ」……

たそがれの寂しさバックランド親子なら—夕陽でも食べる…ああ、火事のサイレン

かの暑き夏の日の午後もアベベ・ビキラ敗戦を裸足であるけたら

リストラは胃カメラをのんでポリープが胃腸や喉をも冒せしと喩へ

愚痴などは吐くものかエベレスト電燈がいつせいに消えた世界

去勢された野生切歯扼腕しながら遺伝子を受け継げと勤めに行かむ

鋼をも溶かす火災の泉墓標のごとく抉つて物語新たな章が始まった

幼子を喜ばせむと火抛げ入れよ心枢の中でたちまち幾千となるおれの骨

猫を飼ふベートベン葛原理想に殉じ生きてゆく翁のこころも聞きぬ

海も見ず数千キロ少年はただ歩るきたい潮のほひさせて

一筋の涙を流す禁じ手を乙女は知つている彼の背中を愛したから

『《見知らぬ人》植物と動物』といふ飛行機に乗ればコースを変えて世界中

だまつて私と一緒に歩いて来た人にだけ打ち明けたい本当の世界を

どこでも暮らせるけど人生はこの道ずつと探してるんだ「しろい家」を

かすかに微笑むアリス/ほんとうの名前は知らないふしぎの国の少女

空を両手で迎え入れ朝日を浴びる/水底に透く/ぼくは魚

計算器まはりてピストルの音――みじめなる思ひ重ねて……言葉がみつからない……

びしょぬれでやらせてよ光る波ささやきあえば月まで昇るから

無菌室の影それはわたくしのくび筋にただひとつ鞆の鎖

スポンジにのこりし指の痕はPhotoグラウンド着色この真珠は夢



拾った手紙に金魚も蒼を愛するフラッシュする印象のなかで

「判で押した」ようにきみは、おしひろげる衝立をさらって行ってはくれぬか

まなざしは求愛する昇りつめながら階段は螺旋という縦穴を掘り

心臓に動悸を呼べば液晶は止まる刻は引き潮あなたの髪のにほひが

夜ななつのくびかざりを、恋人へ存在感で生まれて泡の姫

チューニング微妙に狂った弦はあらかじめそこに置かれたバターみたい

降伏する！ 眼のかすみラフなタッチで手紙を書かむギタリストなれば

人命を守るべき大げさすぎるシチュ―だからバーナーで燃やそう

あらゆるものが図形なら涙拭くマネキン、煙突、窓、レンガを

ひと影も稀、ミステリーは軽くタッチ、メリーゴーラウンドな十字路

ぶっきらぼうに公孫樹は舞い落ちたから「信じてる」迷路はない闇のほか

ひんやりとやはらかなナイフをかざし夜の瞳は兵士としての自画像

さり気なく花自づからが水面にと世界の人抵抗しているか

世界には実に沢山のパンがある、車輪が無名の個人の脳味噌

半地下の一行目これは<強>だなと吹き飛ばして「ドア、閉まります」

なお雪に降る、空は曇りて花落としデッキチェアが酔ってるみたいでした

フロイトが「フロイド」に変わる・ピンク脳内にゾウさん湯加減どうですか

ノートなど売ってしまおう、ぼくらには防ぎようもなく理想という美が

網の中にあおい樹を生やしていたのだ、夢ばかり重く、翅が風の名

ベッドから右の足垂れて不思議な響きが欲しかった鈴とかシャワーとか

いたずらっ子が跪いて神を乞う「壁の穴があって…その、一一いれたいんです」

ひやあせ/このままずっと 感じたいのに/さよならをいう ぼくの不自然

さあおいで/こえしめってます/ぬちゃりと/どろのようだから/あめはあかるいから

旅立ってゆく倦怠の眼は銀河みたいにとらえどころなく影よりあいまい

下着とはあおき卵のことだよとマンションの入口で羽ばたくような

この噴水の「くぎ」をぬいたら剥がれてしまうそれはわたしの黄金色の砂漠で

深夜、君の弾く左手がそっと消えて、とけかけの氷みたいあんな表情で

小蛇の感情 鯉はひとりでに。泳ぐだろうループする水ぬめらして夜明けは

申し出しかねますラフマニノフは難解或る女みたいに這入れない群青

夜の女王/砂の嵐/クレオパトラ/交尾にもつるる毒蛇来たる

高層の足場にネオンある涙は何故きらめくの遠い国のお姫様

やぶれやすい心に石をいれてみても存外やぶれない翼を

おまえたちは小石の波紋/南行きの電車だ/まだ遅々たる歩

ここでやすめよ終点にはやがて着く汝と私それだけの故郷《ホーム》へ

「入れ歯ならすぐに…」じーちゃん うま、うま「まだかなー」やっと来たわたしの眼鏡

蓋開けてみればざくざくと均一な時間どうしてだおたまじゃくし

凹凸がピタリと合わさるジグソーパズルゆらめいたら感性しか望まない

電話鳴り数字すべて忘れて戀の匂ひは「早く作って」ひたすら西日

ゼリー状になった封建制度のかくあるべしは爆薬なき待ち受け

日々はいつも「約束」と想ひ給ふ駆け寄りて猶ほゆだねるやふに

お元気ですか？ でしたか。ーと肩をたたき…優先席はあいてますよ！

洗濯機渦を眺めて/鏡のなか/シンメトリーかレシピかミキサーか

# 抽象ブルー コートは黄いろがいい さらわれし子はGREEN+RI-N

「悪魔に魂を売り渡した」パガニーニに束の間に騎手の右手思ほゆ

魔女裁判の水に映えぬし鳥を思へど来世は万緑を蝕みぬる

「乗ってけよ」おれはヒッチハイクな青春数えていたよアンタのやさしい歌

なんで、と言う脅迫は胸を抉らない「兄弟たちによって売られるヨセフ」

スローライフの重苦しき。冷たくなつたりリビングのドアといふ拍子。

体重計という通過駅で恋人さがすの針ぐぐっとスケルトンになれ！

地図を見ながら電話して何処と聞けば心の奥のあいまいな部分まで

リストラを言はれし君はショパンだ電話に「雨だれ。」とこたへてやれ

流れ星から病原菌がきますよ！ イエー世界中窓からのぞけ子供たち

とうさんは倒産だ。かあさんはcar+sunでクラッシュして死んじまい

ゆるやかに沿って「夜明けの蒼。」崩さぬや思わずクレヨンで引力と書く

外からは見えねど車は虫の息/風邪などもらふなよキリギリス

我が家のイヌはかつ丼を喰うみたい/泣いてみようよ/里の お袋さん！

空腹は孤独とスイッチする日もありきわが病背負ひて詠へば

あとの波は「沈着する。」色も香もかかはりも悟れ今日《けふ》も又ひとつ波

隣家に碁をうつ音こそ先づあらはれて楽士も蛙になりたるとぞ

\*\*\*夜は暗い「明るい部屋なのに」濃く映る夜空におほはれて「星ただ白く見ゆ」

自問する/葛藤する/絶望におはれる/血のにじむ心の内を透かして\*\*\*

目を閉じてみるのさ本当に正しいのか[思考の光]はなてどもゆる

痙攣する悪阻のやふな夜の窓へリコプターは夢おちみぬわれのこゝろに

ブーム去りたれどPictureはとうとう兎 目をそらす友のあかき充血

逆立ちしても出て来ぬ金と競争 ビジネスマンは「聖戦遂行。」

星空をトナカイはしる「りん・りん・りん」りんごすきだよ あかはなじゃないよ

やあサンタクローツ！ いえいえ回し者ケーキ屋で自給やすくて飽しかくばれません

タクト振るぞぼくにとっての諸君やさしき青の帆止められない

シンデレラは硝子の靴を忘れたけど途方に暮れた奴がしたたかという不思議

さあメールを送信しよう「仏陀です。」いやいや違うな「御陀仏でござんす。」

その瞬間に聞こえ来る[キャンバスxパンドラ]暦だけ出ておいで

「それが結論ですか。」吃驚した/彼はいつの間に草のにほひ思い出したのだろう

雨の夜の駅/階段は「不要。」/夕暮れの土手を段ボールで滑りゆきたい

涙は砂糖水さ/でなけりゃ叩き割った硝子壘みたいに時効はないよ

これから何処へ行くって聞いてもいいかい？ 「恋する、ふたり」に「あおい、そら」に

氷るる浮世剥がれければ顔れかゝれる此の天地にぶつかってみたく

阿修羅はパソコンに向かふ風邪薬のんで麦酒のんで伸び悩む訳をのんで

のっぴきならぬ不況/会計士は赤字/人は転職/神は無職

医師はビジネス誌に登場「YES」「NO」はリビング・ウィルから

ぱつと消える閃光/追い掛けた真夜中/テールランプに42.195キロ

1000階建て10000メートルのビルディングス100兆円のネット社会

腕をまわして「どうして君なの？」と紙飛行機は薄い空気、息、染色

生まれてきたから星よとこしえに手のひら握り一歩ずつの寿命を

不慣れな音。魅惑的「闇の中？」そして、誇りに思っ苦しんでいる

彷徨えば目を閉じて。に大きくうねる髪/花の重み（に）茎が撓むね

淫乱といふ女の背中に熟すなら葡萄の房もいで皓歯のつめたさを

ジーンズがペダル踏み込みスピードあげる「無理するなよ。」恍惚に目覚めた

ハッピーエンドなのに「すかさぬ髪。」繋がらぬ光しかし澄みたる眸わすれるな

マニュアル通りのメロスなら待合室でごめん薄情者バスに雨は降り込め

地獄の釜/退屈なドライブ/月が昇れば産みの親見るエンゼルフィッシュ

ひとりさびしい夜あり今日もセピアさ動物園でTVから流れる声

地下鉄の長いホームこえさりゆかばふぶくゆふべと虹の断片

われの名がもし花ならば瓶《かめ》にさす頬につたふうす紫の花よ

冷たいと思った/嗅ぎなれた部屋も短かければ今年ばかりの夢に落ち着く

TAXIに光しのびよるひび割れた声 業界の風は十二の色に折れた

酔いざめにコップあれば毛髪はないか人魚よカサ・ミラのかほをして

蜥蜴は撃ち落とす黄砂も/雪も/扱て湿つてはふえてゆく水玉模様

B l i n dに夏の匂ひ何気ないあなたのしぐさ隠せなかつた

ゆつくりと忘れゆく男らを遠くに「ただ急げ！」と死にたまひゆく



正義/麻酔薬/それとも点滴の落ちる音か折り合いのつかぬ不安に

体内に運ばれてゆく数秒あとに「水。」比喻よ 心は知らないだろう

「饒舌」を吊られ喉にはりつく睡りの濃度、満員電車 I N 賽の河原

真昼間のC A Rの遠鳴りかぞへては麒麟の首だけ咽喉飴を拭ひたり

誰かといても「白。」さ 坂の上の陽炎も空吹く風となつただろう

コペルニクスのスイッチOFFふくらみてくる地球儀なぞり地球儀のまま

ゆきがふると ますくせんまい とんでゆく ああちゅうごくじんが やみにまぎれて

ゆきのひは たいようがこいしい ぼくだから だだをこねたら ごみばこになりそう

ブロック塀に啄木鳥の痕跡あり飛び去りゆかん寄り添ふ人の起源に

天から「輝く白い衣」サグラダ・ファミリアただ潜つてゆく深海へ

昏睡する…

耳を――かたむ…けて…いる…

誰も――ひつよ…うと…して…

いない……

夜は動けなくなった……

(僕は、)

ファントムの、エレベーターのねじりのなかを、

駆けて――…

駆けて、息が苦しくなって、

駆けて、切なくて、

(僕は、)

<どうして生まれたの?>

<生まれて死ぬことにどんな意味があるの?>

(僕は、)

ファントムの、エレベーターのねじりのなかを、

駆けて――…

駆けて、息が苦しくなって、

／亀裂／炸裂／

駆けて、切なくて、

／砂漠／燃焼／

呼吸が必要だよ、

祈りが必要だよ、

でも、急降下するよ、水面上のレントゲン、

……きゅつきゅつ……

……くくく……

うごけなく――なった…

もど――れなく…なった…

でもわかって――いた…なった…

耳を――かたむ…けて…いる…

誰も――ひつよ…うと…して…

いない……

アコースティックギターがひびく青空で、

うごけなく――なった…

君がドアを閉めた後――

うごけなく――なった…

広い水面の果てにある眼界に埋没する銀河で、

うごけなく――なった…

君がドアを閉めた後――

地球はあたたかな黒土でおおわれていった、

昏睡する…

耳を――かたむ…けて…いる…

誰も――ひつよ…うと…して…

いない……

夜は動けなくなった……

(僕は、)

ファントムの、エレベーターのねじりのなかを、

駆けて――…

駆けて、真っ白になって、

駆けて、湯ききった音になった、

(どうして?)

<どうして?>

……たよりないぼくのいのちが、

おわることに、べつにぼくは、

なんのぎもんもいだいてはいないのに、

(どうして?)

<どうして?>

ファントムの、エレベーターのねじりのなかを、

駆けて――…

駆けて、うすれて、

駆けて、僕がちぎれていった、

でも、急降下するよ、水面上のレントゲン、

……ちくたくちくたく……

……ぎいいい……

うごけなく――なった…

もど――れなく…なった…

でもわかって――いた…なった…

耳を――かたむ…けて…いる…

誰も――ひつよ…うと…して…

いない……

「海岸で遊ぶ子供たち。」元気で居るかマナティなら冬でも君のところへ

咎もないのに吐く息は殺し損ねし/ランボー/中也なら感情来て去る

以心伝心ファールの方ではなく「無視。」の方へかつて見ざりきわが地平

複雑なニュートン「重力。」はテスト・ペインティング泥の歴史に沈む

ラジオジョッキー話し言葉は無意識にウオッカの45度聞けやしない

体力はきのふも今日も実に寒くてガンダーラという所でねむりたい

真夜中墓場平和なひと日にふと神を憶ふふるさとに歩く僧のなし

實體粘球/プロペラの音だ粉つぼい逆光の中キュービズムだ

落ち葉踏む音をテーブルに譬えてみれば「日射しをどける。」飯がまずくなる

ホチキスの針足しながらパチリと綴じる揃うべき端世にあらざりければ

ジグソーの欠けたピースを埋める大自然なぜか雲の上を歩くような格好なり

マスクの中の薄ら氷しらじらと流れゐる日本お〜いお茶

憤懣の夜ダイヴしたいおれは特攻一番機一行の重さおら石炭

対人バリアーは過去の因果ベートベン葛原僕の気持にも迷いはあるので

変声ののち味噌汁が好きになり今この瞬間《とき》も実験室のむこうで

睫毛一本動かさぬ矜持よ不愛想なかほ経ていま何を匿ふ

空白にくる生といふナイーヴなものありて朝日のあたる樹も詩に似たり

電車に乗りたればポケモンの攻略本いやクッションのような記憶に

(外レタ螺子) で口の糸垂らしつつ蜘蛛苦悶する微笑ふチャットルーム

静かに語りあふよ「抱擁。」 曇天は蕁麻疹うかベシェービングクリーム

愛人はいなかった 源氏物語望みたるシンバルこの都会は五月蠅い

ゴルフコースのたへがたき講釈 人類は四足歩行するECHO

墓場の入り口その顔はきまぐれですか防水スプレーの眼を育てをり

[葛飾北斎] 富嶽三十六景改札口へ啄木のごとくに子は苦しみぬ

ゆく雲を夢みて朝空にはじけつつおのが光りを趨ふごとくにも

星あれば昭和一桁干してをり熱き涙はたまりてみたり

僕らには熱がないね匍匐前進が心に深く刻め 生きた皺を

血液はおまえの指で墨絵となつた幾つもの脈《なみ》が交わらぬ世界を

喜ぶには偉大なルックス聞く！ ミュート/ゼロの避難所はあなたの災害

Mr.ピエロは癌の検査を待ちながら新聞を読めり 真面目な緊張

霧雨は切り傷にぬるく指を入れ 。内向的だ そんなに弱くては

リンス、リンス、シャンプーつながっている風呂場シャワーおもいがけないブルウ

席へ着くだろう、席で咳をする堰があるから席へ着くだろう、席へ、席へ、寂へ

塔エーテルから淵のために、爆発人類。 溶解燃焼 のろわれたあなたが。

わたしはたわしが好き/凍らせてみよう かたつむり/れれれれれ

群衆は無限の大声で、サイレン 。蒸気は、ゆたかな髯で徘徊です



ロンリーな論理でメビウスの輪たたかひたい死体の後に 死鳥の戦い

空が美しいだけで剃刀をうちにしまい単純にしてくれない

電車が私に語ったこと 窓からみた叙景 結晶翼の付着

覆いのないシンクを恐れて下さい 。悪魔を呼び出します 魔法陣/周回

二十五年住みて初めて気づきたりカプリッチョ : 白い星 アップリケ

つままない町田ちがうな万智だ。ぐあん/ビキハノCityの王様 やめとくかマーチ！

アンモナイトの化石に蟹が石鱈の泡 胸元、霧の海を眺める

映画観てマクドナルド行つて詩を編んだ陽水なら何処にシュートする

想ひあふ男女は青い色の剥げた空と大地つなぐベンチの偶蹄

四階建ての四枚葉 一枚でもかけたら影どこへ仕舞おう

現れて去った午前二時朝刊の配らるる頃を白く浮き立つ

二十六歳 月の光がレントゲンする履歴書の白がちらつく城/ゆうへい

曲名を思い出そう、もう聴こえないと――僕の顔が映る・・・よごれた透明人間が……

制服の少女五分後に試験だまらせて日焼けの匂いフェルメールの「小路」

ただぼんやりと見ていた大空をじゆうにうごく雲ぼくのいない場所で朝焼けは

帰らないか 地下鉄のホームへ今も「石の花」という乱心の荒野で

駐車場にあつまってきた迷惑やろうたちカーナビに吸い寄せられた砂鉄か

早口でまたビルたちゆくアリの巣にかくれるだけの檻 ・ペットショップ・ぶうむと

空耳だ…幻になつたぬくもりに——黄泉の渡し守よ…おれは真珠——

水平にドレミがゆくおれは写真機のレンズで大聖堂のゆくえ

太陽があいすくりいむのカップのなかに ロードシップ・レイン駅、アッパー・ノーウッド

留守番をしてたふじよう理はおなじ壁に強い雨が降るのを待ってる——いまも。…

眩暈をおぼえる B l i n d はフラスコみたいだ話題の中にふるえあがりながら笑つてる

赤い屋根/ぼうしを目深にかぶつてた少女は/青空のえくぼ…ひまはりとなる——

靴紐がくろ髯にかわる冬のまつしろい月のなかで凍えてるぼくだけが純愛

――街路樹で「種子と破片」をかんがえる俺は天才だ…ブランコたかくゆれ…

金糸雀がしやべり出す/でも俺は耳がすこし伸びて 巨象になる枯草の夢を見る

モーツァルトが朝露だ――キスをした 思い出を消して欲しい夜の水管たぷりとゆれ

1秒でつたわるのかスウィート・キャンディー ぼくが顔を赤くしたら君は曇りになれ

煙突が過去からのせいし画像だ――こんなはずじゃなかった 狼煙は

たばこをすいながら歴史に胸をわずらう男だ――世界は…ここから何も見えない…

俺は心の闇という化石さ/チンサー―それでゴングが鳴る おまえを殴る先制攻撃

洗面所でぼくはつうがく路を思い出してたのさ神は不在――世の中と向き合え…

シュプールがきらきらしてると真夏のすなになつちまう混凝土はメデューサの首

産婦人科であの人の子供がいなくなつた――しあはせつて…ふたりにはすこし不器用で

よく冷えたグラスにトマトジュース注ぐ地中海のにほひがするぜ先輩

蝉しぐれはこの瞬間死を前提としたあわいひびきとなる未熟なにんしきのあまさで

城は竜宮のようにうそで塗り固められ脆いぼくらの呼吸をくるしくする

人間である「ふゆの日。」は千年うけつがれたものすら拒み翼得るがごとく

むじやきに人を傷つけた――時間は、しんと待つ……自分とは何かと問う怒りを

さか路をのぼりながら冬の龍を感じた在りし日のぼくのきたない皮をやぶつて

無毒という蛇がいても黒板につめはたてられたくない――ひり、とするから……

競うことをやめれば決断は――迅い……ぼくはちゆうちよしたハムスターの台車に……

ひまわりの種かじりながら花は何故さくのだろう臆びような蕾みたいに

麦わらぼうをかぶりながら景色が自然と変わつていく振り払うのは幼ないかんばせ

足音がきえる光の海で――ただ歩くよ……どうして生きるのをおまえは選んだ、と……

公園のゆう具は小さくなつたラジオからのじよう報も「雨」を聴きながら

なつかしいのよあなた消しゴムではけせない雨みたいにしずかな球体

こころの隅にはほほえむ/しや真がある/きつと皮を剥ぐことのなかつた永遠が

ぼくは好きだつたよ――ああ、痛々しくていへない……むみ乾燥からうまれた野生が

ため息がこぼれれば生命線をなぞつた彫刻刀でおや指をきつた記憶

「この町は変わっていない。」とまるで夢/ぼくは出られないまま夢の中で逝くから

ほほを染めて「てれ屋ね。」といわれてた頃がなつかしいこの爪もまだ桃のいろ

十月 秋の歌/かがい者は迫害するというきみらの癖おもいのままに

皮を剥くナイフなんかじや血は流れないベートベン葛原ぼくは月をころしたい

シェリーいすちやんのことを考えながら温かさの湧く無形の財産

ケータイをひらくとあおぞらが湿気りだすPM5:00のこごえるさみしさ

できるなら棘をぬきたい「寒さ。」を厚着でむりやり押さえこみたくないから

こんこんと咳する若き皇帝は――乾坤をふるはせる…うちゆうは重いよ、と……

生きることのむずかしさはたとへば夏落ち葉にうもれて枯れ葉に雪がくるやふなもの

「勝つ。」というまつしろなシーツを血でそめてベランダにうなだれてあをく

あらそひは欲望のためだけにある――小さなほのほは…とんがつてゆくばかり……

要らぬものだから譲つた——歩くより歩かせたい……いつか天に才能をかへすとき……

時間をくつきりとうつすメトロノームならH i g h w a yをはしるこの気持ちわかるか

めり込むせかいに放たれた銃弾はぽけつとに入れた白黒のえいぞうで

羽ばたく鳥は悲しい/いよいよ蟻の影/いきているかぎり何かをつかむ仕草で

そつとささやいてる街燈のない坂で沈黙の臓器/耳に残つた厭な言葉を

青い山も、いろとりどりの人生も——かつてうつすら翳つたものでさえも……

いつたい敵はどこに潜伏/毛を逆立てる猫/同じだ、父の背中よりうすくせまく

穏やかな日はぶあつい壁だつた終わりのない国境はないけれど信じられた日

糸がうごけば髪をくくるのだ地獄絵図は端正なかなしみをまだ知らない

平積みにされた雑誌もいつか煙になるビルの谷間で薄暮のいろを見つむれば

号外を持った子供はまいごになるというレトリック——青春つて……古い自転車を漕ぐ

後悔がコルクを載せた皿みたいにわすれたいものは何時も秘密ごかして

ナルキッソスも改宗する孤独すぎるランナーはトランスフォーム断層のなかで

筋断裂するつかのまゴキブリの瞬発力おれは吊革につかまってひこうき雲みてた

第九条だつて言う雲のはるか上でゲーム機をにぎつた神様の太鼓持ちたち

「年金です。」大震災を経てもまだ機能する――はかなくゆれる空罐のリズムで

――ぼくはコックになりたい……盲導犬サービスをはじめよう赤ワイン善良なれ

運動会にテニスをはこぼうみんなの笑顔をもらおうサービスを治療するさあぶで

眉がない――ここに刺さってくるのだ……気味悪いうちゆうで顔の部品なくした女……

むねを張っていたんだ――あかい花卉みたいに僕の鎖骨に……くもり日の一瞬……

そよ風が町並みをぬけるとき鳩は麩麩の代金をはらうのさ冬のはくしゆ

心理学でウンコは投げ遣りだとおもう肥料ならゲートをぬけて馬に駆け寄りたい

日曜日はよく羊飼いになつた夢をみる「ヤギ、こたへておくれ」いやおれはこひつじだよ

薔薇を買つた男は――まず第一のこひつじだ……とこれだけは言わねばならぬ……

兄が「安い肉屋。」を教えてくれという――海外とわらつて宮崎のニュース……

カラッチ「狩りの風景」で少年になりゆくわれに雲切れて朝日射しくる

さつきまでそこに座っていた理想――犯人たちあがれば衝撃のラストへ……

僕は告げる「人殺しめ。」よくもぬけぬけと手じなしていたものだ帽子かへせ3980円

恋は「切符です。」というおんなはジーンズの芯のなかにパイ生地をねかせて

切符なんて落葉のなかにある――わたしたい、わたしたい、……ミントガムをいち枚……

叱られて「窓辺の花。」になつたおまえは魂のひとつひとつのかたち

齢を取ると言霊に/補聴器が必要だというシャレは/ムンクの叫びのなかにあり

君はとうめいな花瓶みたいに笑つてた花にふれるゆびは口笛のほしそら

まるみをおびてゆく水滴が――ガラスの最後の加工だつたと……ぼくは思う……

大好きだつた時間くちづけをしたほんの少こしの週間だれでも受話器を置きぬ

さん付けという長い種蒔きのあと――たんぽぽが咲く……ある意味で愛されてたよ、と……

うまれたての音でひたいは――ぽつん、と弾けた……効いていないつめたさのはずなのに



こわれた砂時計のりゆうしゆつ地面は——えいえんに…えいえんにまぎれろ、と……

あの人は「はまぐり。」とくりかえす執念は好きと繰返す以上のものなり

濱口さん、と独り言なぞいえば「はまぐり。」なはまべではかまなぞはきたく

法則と詩

トマトは、血飛沫あげて[踏絵も、不発弾。]——くちづけを…怖るごとくに…

木洩れ陽（も）脈打たずに賑はへば笑い声がする目鼻口のどれも

都市をアナウンスするならオン・ザ・ロックで…ということだ […やがて] ——

煙草を喫へばくらい心の穴がすぼみて鎌磨ぎておりその間ぢゆう

林ゆく逆光の蜘蛛いるんだろうな、葉ずれは歯ブラシで洗面所なり

先に触れた、コーヒーに余裕がある人波はやさしい待ち時間にめぐる

シュワルツェネッガー大気圏おれがパーキンソンの法則“LET IT BE”

徒競走とヤーキーズ・ドットソンの法則そいつの顔がでかいかちいさいか

空白がもしオセロであつたら、正負の法則よ——隠し事している神様の気分だ…

どうしてもうまく呑み込めない薬[フーコーの振り子、]といふシール貼りたい

いろいろ紆余曲折はあつたがシュテルン-ゲルラッハの実験といふ筆はこび

旧ナチと旧ソ連と麻原彰晃の連鎖はウルトラか？ スタンフォード監獄実験

ユーリーミラーの実験はトマトみたいだ、半分にわられてなほ蒂はあがめられ

メール打つ夜の麻痺——アルコールランプ…アイロンのスイッチを切る（ように）…

静止の内に

おちつかう、はだしであるく、朝露

花に種子の不在を見ゆるべし

ホワイ ヘリオトロープ  
雪降れば、白？ 一木立瑠璃草一

ぬくい日の、まんなか

こんな夕陽は、はいえなの毛皮

花にひそと暮らすエトランジェ

ノック  
半開き三角を起こし、円を？啄

のたまは たま  
既にない消息に囚はれ、日、魂

ひら  
ゆふべ瞠ひてもう流れてら

説明：わがままきままにかすんでかさなつて

のつぺらばう叱られてばかり

首をかしく向き癖と思へば多感なる揺れ

数式に蟻が這ひ

鍵穴はオロンティウス・フィネウスの地図

「…私の唇をありありと思ひ出す」

しづ おわり  
一行の肅かな死を切りて畢かな

さうだ！ もふ五月だぜ！

かぜふいてちりいろみだれてわかれ

## 風吹散色乱別

ゆふべのおれんじの性

オールオーバー オール・オア・ナッシング

縞模様、すべてか無か

おもひでは墓、されかうべは千年

ふる寺やホリゾント幕と鞭の音

手は滝へ

否定せよもとほくあり詫助

さか ハバナ

ヴァイオリンの遅れ/離りゆく葉巻をお呉れ

雨降る夜ぞ！ 夜明けの鉦

アニメ

女性もつれアノニマス同性愛

はい いらくさ

みづからへ入港るふたなりの蕁麻疹

子羊のなかにスパルタ！ スパルタのなかにスパルタ

いちじくの葉かげ水のわくところ

マルガリータ

裏山は罨、虜はれよ夜会の真珠

春の魚くはえ、矢に君はいない

ハシツシユ

一番綺麗な夜行性の没薬

いれものがない考えごとをしている

かんが

それは馬上に残る考ふる手

海へ行く！ ましたへ蟬のから

く

腕拱みてしやぼん玉に吸はれゆくヒラメ

そばえ

日照雨には筆られて削られて

鳴かぬ虫よ、もう明けさう

ブルウムウンの決闘

半裸なる最終電車待つ

かひやぐらなげきぶしふきあげや

ほ

頬にのびる爪は殺し場の薔薇

サングラスでかくしきれなる火の用心

いろは伝道まりふあなのつもり

縄梯子 → 金切り声 → 時報聞かせて下さい

ナイフ持ちピストルが鳴りはたと豚返り

へんぼん

咎むな、笑へ、翩翩とあれ

さ

ネガティブな夜！ 錆びしピストルもあり

くそ

糞

思ふこと言はぬなめくぢクローバに轍

アクアリウム

まはるまはる水槽

バブル

叱れば蚊がなく、死すれば泡の告別や

あきや

月は空家

内出血◆天井棧敷◆薔薇◆楯円

いらいらする遠ひ点凍つてしまふ

少年の白の余日の純粋なまちがひ

こゝろがすなほにうごゐた

謎に似た十五のころ

人は皆、哲学の石と言っても過言ではない

ほこり スフィンクス

矜焚けば天蛾はもう還らない

たにし

田螺よ、遮光器土偶を知ってるか

アール・ブリット な

ありのまゝの芸術の孵り業零れ花

みごも

無月にて美しく瞑るレモン

早すぎる死/特急が通り過ぎたり

重さうに風を送りし地球

すぐ泣く児だ、マッチ棒を消し

よ

咳すればそれで縦し

(帝王切開)「斧をひと振り」「血しぶき⇔金銀財宝ざつくざく」

はいた

青き髭生ゑ、歯痛

イグジット

説明できない出口「白紙の出棺」

自由律プトレマイオス⇔不定形コペルニクス

繭の中の巣ごもり入れ子状

潮騒向き変ふる/指輪を失くしけり

ブルース

少年が蹴りし空き缶、終戦忌を知らる

与太でもユダでも富

ひるかわず

招かれざる客屋蛙面白くない

アーメン

アウラ

ともかく亜孟、死にとつての微風を

今日が終つて眼の前

とまらふ。けふもいちにちかさりこそ

午後寝ぬれば十円玉が顔に落ちてくる

あの人は旅人

反動でスピン！

ソリッド・スネークの森

インビジブル・ハンド

道が開かれた、満月の夜「地に響かう」

かざぐるま

蜂も風車まほろば

渋滞に迷路とは花の名も知らないともしび

ミラア

割れし鏡欠席多き真つ暗闇

首輪なき犬とすれちがふ硬き沓音

メガホンの声鈴虫鳴かせをり

君の乳 房に折れるけものみち

自転車でとほくまでゆく一人帽子かぶらず

見をさめの少年喉仏髭の斜塔

故郷なくて自分を抱きしめてる

力いつぱい笑った、洗ひあげるやふに

地下鉄を出でゝ遠ざかる砂丘

こんなによい月が蛙を昼寝の足にする

斥候か早討ちか「いや、死後のこと考へてゐる」

爪切つた両手が馬の尻を捨てる





熱帯魚は何か憎んでをりにけり

〇〇〇

やめろ！ それはいばりじやアないヒバリだ

遊牧民、響かず

ウージー

仮死続く見事な演技「でも俺の手淫が火を噴くぜ」

おまへは氷河に眠れ！ 非常階段に追伸

火の山の凶

ネクタイはさしあたり凶器です

エア・バッグのない放火魔たち

鞭を持つてる、でも刷毛よりいいと思ふ

おまへもそろそろ懺悔をするか——い、嫌です！

夕方、ねむたすぎても、腹は鳴く

夕焼の色に赤く光つてた、シルバー

ふくら脛不時着す花さくらの残雪

そう、あの日にはもう誰も帰れない

便器のような平凡な扉を閉める

しづかに流れながら、次第に溢れながら

きみ  
大樹は黒板、チョークでぬれるだけ

土の匂ひ森の青さ

缶詰を開け嵩増してくる匂ひを嗅ぐ

風の中かぎりなくなぎさふりかへれば

昆虫は宝石ではない/あの眼にうろこ雲

なんと長い足だ！ 静かなるかげ

都市的道程に迷心がいいイルカども！

U F O棲むには狭すぎて機影

雪崩れやふ！ 話題といふ沈黙の池に

エクソダス

井戸に映つた大移動一鳥という帯

さびしさを舞はせ夕焼けて一切

エマージング・ディジェーズ

一ツ目小僧のいなづま「アイスクリーム屋をひらくべし」

ワイエスの“クリスティーナの世界”を追心揺れ

またゝきだした。両手でうけて暮れるため

仙人掌が欲しい、でも撃ち合いはいらない

白き手袋なほ皺の数心糸愛の羽根

14 自由律俳句の実験

赤い車

赤い車、鳥居をくゞりたり

——時速120キロで彼女は——

ほんたうにしいんとして誰も

鋭利な器物は一切過去にながれて

——その頃、男はバーでBRANDYを呑んでいた。夜だつた。そして、先程までの、  
対話を回想する。彼は回想する海草だ。ひきつった暗い顔の奥に、  
背中を丸め下を向きっぱなしの女を見ている——

運転席 骸骨が真つ直ぐに

悩み 不倫 英会話カフェ

茹でたまご、もつとひりひりさせてください

たくさんのビルにコーヒーの味の違い

——女に返すように、男は言った——

腕時計何度か人にぶつかつて

おしゃべりは命尽きてゆくように

するするするするとたれ落ち

ぼんやりと白いその川その砂

――見えた。時間に、ほほ笑む者が眠っている。眠る者は観るものだ。  
突き出た支脈だ。峡谷は分断し、川は流れている――

小姑はいかむ地平あからむほどに

ふらふら野をよぎる蛇の決まり悪く

――月が消えると、我々は来た。勝手にしやがれ、と昼が来た…  
人は幸せなのだろうか、クラクションの音はゆううつといかりのリズム、  
イモリは水面で溺れている。小さな虫は魚に食べられている――

モツアルトが遠くもつとかすかに優しく

ひとつの唇に風はすゝまなみ

タイムマシーンに乗つて

おじぎすると眼に涙が一杯

――ひざを曲げて、男の子は、親友のことを思った。  
小学生・飛び跳ねた魚はナイフのように落ちる…  
でも男の子は、あかりがぼんやりと夢のやうに見えるだけになっていて――

くりかへしくりかへし、さらさらと鳴る葉音

待つてみようか待つてみるよ待たせてほしめ

うごくやうに咳

――心の中の石段は終了され…動物はさまよい続ける…

こおろぎが不気味な静寂に思える。ゴキブリはゴキジェットされる。  
ホシゾラの中でホシの中でアキを見ている――

くしやくしやに細ながる月

仲間はずれの風鈴、いつも金糸雀の啼いてる

すきとほれば顔色/讚美歌と/雪

――そしていちめんいちめんいちめんが、雪…  
自動車の上にも、自転車の上にも、後者の上にも、  
こうして眼を閉じずに、空を迎え入れているやうに見上げているぼくの世界にも――

雪はとけるよしみるよさめざめと光るよ

しろみほのほ、だんだんしづかになつてゆく振り子

――朝が来て、昼が来て、夜が来る…  
やがて「もう、彼女は来ないんだ、――去ったんだ!…」とほんたうに、さう、  
思ふ。…どうしてもつともつと愉快になれないんだらう。どうしてどうして…!  
どうしてどうして…! 特別なものへとしてしまうんだらう――  
やがて葉は切れ込むやうな風のなか、冬のひびわれに、そつと姿をあらわし始める。  
片足を音立てて引くやうに、いつのまにか、妙な癖。タイムマシーンに乗つて、  
タイムマシーンに乗つて、タイムマシーンに乗つて――

この痛みは乳のこぼれた白紙

呼吸は花の色

わたしが死ぬまでこゝろの垢は消えなみ

隣り合っている値打ち風コートの際を立てる

電話のように遠くあるハリネズミ

鏡に映した溜息が沈んでゆく

夜を探す街路樹の鯉でいる

時刻表に靴そろえている

ディスコミュージックのない不景気もない夜もない

文字を吐いている君は不条理

年齢はキーキーと鳴く風

オフィスのあかり無限をしめす稲妻の記号

群れ/お喋りになる/少し舞う/紅葉

花は湯気oneと鳴く愉快的な声

ねぐらがあれば素っ裸

ハンサムなのに君はつけないのかペニス

ぽっかりと窓奇妙に開いている

すれ違ったポスターが大きい

黄すいせんの内臓に突き刺さる

電線は少しほのぼのと頼りなげ

LAST BEAT—コーヒー・カップを割れ！

子供は生まれたように泣く

君らしくて正しい何もない温みが好き

くらくらする酒が静かなだけだから

昼寝して眠って凍えて誰もいない夜になりたい

蛆虫の正義は取引

雲が走る 飲む水そのままに

秋の夜は一つ

回覧板階段の途中夜のはぐるまきこえたつていい

密度は羽根をはやすのかドーナツ

ぼくたちはたゞさみしむ甘つたれ

すり寄ってくるのはメスばかり

川はまるゐ

やつちやつた後でもすごゐから

眩暈して受話器

今日はメンドクサイから全部パオン

あんたはチョコレートぱんつの穴のようにふしぎな歯

かもめ飛びすぎてこわい

鳩の転落死きゃあああっ！むくり

マジメにやんのがこわくて全部ホンキじゃない

サイノーもとめるノーノーミソ

バッハの文字が止まらない

つくろうよいたずらな神様ビデオ

名 名前 性 姓名

ぽぽぽろぽろぽろ落ちるポロ

ち んこといえばなにかすごい

花嫁といへば花粉症

めし食ってめし食って癌

夕焼けは柿、おたまじやくしは波紋しておりぬ

ロダンな自重レストランがなんだ

月曜日の六時半もうみんな時計の顔

足もとにうなじ道は見えない

プラス思考のやさしい道は行き止まり

鎧剥かれても梨

車の流れ/マッチ箱の昼下がりに

小便かわすみみずかわゆし



君の乳房それからどうなった

短くて長い夜は幽霊がない

だれもみな愛の皺をゆるせない

なんというかカモメといわれて屈むだけ

愛してるわあーうそうそただつくりごと

コンニャクみたいに味がなくて味付け

しがしがする犬はしがなおやです

うまくはいえないけどいちごはかわいい

2

脳は現実の悪夢を再生する

口ごたはずつと息が楽

雨の降り方、じつにいろいろな降り方

あざけるやうに、からが、ぐしやっ

のどの下をもち上げながら 尾を振って 犬

信号 ブツブツ言うけどしらん振り

切手付けてノートに書いた秋の空

外灯に夜更ければコスモスが散るかも

だれか住んでる夜が静かだから前髪揺れるだけでいい

やばんにせめかゝる、ばかにながい片腕の影

すぐ書いて切取線まよう白線のうちがわ

陽は彫刻する葡萄の熟れゆくまゝ

雲が低く飛べば誰かに見つかる神様はさみし

星は止まらないピクニ

信号もコーヒーを飲む現代人

冷汗がさがさつめたひふるへ

どれ名前をつけてやろうポチ

へんへんへんへんもともとへん

暮れゆくけど違う一生懸命で老いは明るいから

はちきれそうな中に一人

地震は何処かの隙間から

一ばんきれいなおもちゃは硝子のやうな音が鳴る

おほさわぎすれば一本足の案山子になるかも

ぴよんぴよんぴよんと跳び上がりい

宮澤は星月夜とか銀河とかいふ種類の猫です

信号が骨をぴちやぴちやくちやくちやあゝもう

映像はいつだつて咲く実るこはれる人の生きる限り

恋人は噓せるくらいがいゝ加減

ナットウカッタベチヨノフジ

祈り 祈らない 猪 噛まない 突進する コンチノ

ぶくぶくとあちらこちらに蒼月遺言

にじんではほふの汗ばかり

裸のアルバム、背伸びしても鏡を見ない

笑み 会いに行く せせらぎ

口笛と 目が合ふ あのやうな句

### 3

金箔の上に靴はあるだらうわたしの暗紫

すきとほる雲に微妙な村あればこそ

きらきらの枯草の向こうに美しいことばがあり

来たねと言う彼の声だけが胡粉を多量に使用する

生はいばらのつる

石さえ夜をかたるしばしの魔睡なら

そのしづかに尋ねあぐねた手こそ道

すべてのさいはひとは何と愚かな

絵の具が滲んでいる笑顔はなやめる

追われた魚の群れ車なら音符利鎌で刈る

たはぶれあふ俗世のろくろ地球と名づく

ももとせ

睡りなど焦れつたく惑ふばかりの百年

底のほうにひそむ昼の濡れ

あゝ朝の月、きみは噛みつゐて死ぬ

なにもなくてなにゝも含まれていなる小鳥

べつな

とまれ水の妖精よむなしく儂いよるの別名よ

ザラザラ動くかたくなゝ瞳永遠なき統一なき調和なき

君は溺れる！ 川は流れ去る煩悩に暗い

乳飲み子のやうに鎮められぬ苦悩吸う

泳ぎまわつたみずたまり遠くから笑つたそらのいななき

いつさいが劣らぬという君の腕が木の幹の蟬

秋ひとしづくひとしづくのほのおひとり

日本が狭すぎるから真似っこしている日本の詩の在り方

…まあ、結構夢見がちだね。

だけは、（だけは、っておかしい気もするが、）

ちょっと嬉しい。今日はがんばったから、ちょっと早く寝ていいよ。

痙攣するまで言葉の海

ダメなんだよね。段々、嫌な気持ちになってくる。（に、）溺れたい――

ぼくも、月給100万円くらい欲しい

ビルの屋上から、苦勞をばら撒く。

眉間に皺が寄るよ。情けなく

ときどきすごく、ぼくは羨ましくなるんだよ。ね…！

――さびしい。ぼくは、もっと。

もうあるがまま、だ。神様お助け下さい、――てか。

、

雑誌一万部もねえわ、詩集そりゃあ刷れねえわ、そりゃア、書店に本おかれねえわ。

生き方が腐ってたら誰もついてこねえ

何にも喋らない。マスクつけてる場合か

これまで通りの、伝統の闇

なんだっていいよ、いいけど会社

平気なふりして、わたし一般人ですってツラ

アハアハウふうふやってる、嘔気

感情の生き物、血が通っていてだからこそ熱い

瞬間湯沸かし器かもめ7440

受難は続くよ。みんなこれからエロサイト

資料というか、見本というか、勉強というか、

仕事は心の中で悪いこと

ぼく、本当に馬鹿な大人買い

情報としてのノウハウ百万詩集

アマゾンをチラミ

ハングリー精神かつ井は喰わない

ヌケ作ヌケ作案山子ばかり

むかつくから否定させろあほんだら、おまえもな、あほんだら、ああおまえもな！

乱暴なコーヒーの置き方くづ折れ

あの人は後味の悪いなんだか嫌な感じ

花たちのいろはインド行き

ジャンパーの肩を浮かせた政治家も見習うべき

寝台列車でぐうすかトンネルを抜けると雪国ではなかった

ボッタクリバー僕は誰のグラスに入れればいい？

中性的な顔立ち栓抜き蓋をシュポッ

鼠が猫をたぶらかすゴクゴクふつうピスタチオの殻

帽子をふかく紅茶が先

3キロ先は海

ブランコ 影 雑踏 一瞬のことばの陰翳

何処かへ逃亡する夏の記憶

うしろで別の音楽が流れている、free

ゲーム感覚精神構造ネットの中

ワンマンプレーベストセラー

ハートブログ/ボードレールよりある意味革命チック

僕は超天才詩人、下司を蹴るのが好き

自由律なんちゃらかんちゃら書くだけ道化

スローガンはゲーテ自ら



呼び返してくれる人は今宵恋人

父上よ股と乳の因果関係がわかりませぬ！

今日は誰でもヒットラー

政治家は愛、政治家は冬の夜のくらげ

心より心を、いやいや心より心を

やめようか／やめまいか／

広告等の灯は消えるし、

相撲力士のまわしは変質者に切られる、

目隠しのプレイは消える／し／

やめようか／やめまいか／

自分の姿／かっさかっさ／

ぱっさぱっさ／

薄い明かりが水面となって揺れてい、

、、、、、、  
る、ひらひらひら、とね、

なっているのではあるまいか、格納庫、

エリアは野原の緑と都市部の共存する、

砂利道が、<sup>さいな</sup>罪に呵責まれた良心のように、

泥溝は煮えくりかえり沸騰する。

(ダイヴィング・プール)

風が強くなった、

モーツァルトが暗殺されたと考えてしまう、

ペルシャ猫が黒い、でもそれはペルシャ猫ではなのだ、

でも黒い、夜だったらそれは黒い、

モーツアルトが便秘だったと考えてしまう、

風当たりばかり強くなる、

やめようか／やめまいか／

色は、闇の洞から、灰の中。

ほらふきの男が裸で体操をして捕まる、

おやすみなさい／だ／し／

だしちゃいけないし／だしちゃいけないか／

自分の姿／かっさかっさ／

ぱっさぱっさ／

――テントで暮らしているキノピオみたいな男が、

モヒカンにしてる。

(いいなあ)

……街で暮らすあざらしが、

僕にペペロンチーノ食べすぎですよ、と言う。

(いいなあ)

暗い場所ですてられている赤ん坊が、

「あたしってさあ、不幸なのよね。」と渋い声で言う。

(いいなあ)

にゃあお、と猫が飛んだ。

カモシカのつのが折れて大慌て！

にゃあお、と猫が飛んだ。

カモシカ猫に怒りとすさびのマジタックル！

(ダイビング・プール)

眠りの中へ銀色の粉が、ゆく、蛇口をひねって、

きゅっと水音を立てて閉まる、音の周期のよどみの、

シャットダウン、ひらひらひら、とね、

理性が透けていく、とか——信じられない…

でも、“はんらん”する。

“ぶんれつ”する、

のだ。のあ。“なにごと”なのだ。

(ダイビング・プール)

——と、草が折れる。

根まで浮かぶ、

何故か、自動販売機までぶっ倒れ

る。…… (朽。) ……

——腕だよ、とか ——

—— それ、 蕭条たる雨の音だよ、 とか ——

やめようか／やめまいか／

静かに目開く蛇、おもむろにたちあがり、

いきなり人間になって、

人間になっている／し／

やめようか／やめまいか／

自分の姿／かっさかっさ／

ぱっさぱっさ／

すばらしい独身生活！

胡瓜に醤油付けて海苔でまいて食べる、

あんまり旨くないよムラカミハルキ。

すばらしい独身生活！

真夜中に、定食屋でご飯四杯お代わりする、

でもなんだか、何してるのかわからないよ。

ジェネレーションギャップ！

流行って何なのかわかんないよ、

全然、たのしいけど、ふつうだけど、

でも、たのしいけど、ふつうだけど、

(とか、) … (とか、) ………

すばらしくいい女！

(とか、) … (とか、) ………

(とか、) … (とか、) ………

薄い明かりが水面となって揺れてい、

、、、、、、、  
る、ひらひらひら、とね、

なっているのではあるまいか、格納庫、

エリアは野原の緑と都市部の共存する、

砂利道が、罪に呵責さいなまれた良心のように、

泥溝は煮えくりかえり沸騰する。

(ダイビング・プール)

このように突如として始まり放尿をくりかえす、

牧場の牛、

夜はヒスイとセイジを塗り合わせたような色だね、

毛皮みたいだね、パンダみたいじゃないねと言え、

また、放尿をくりかえす、

法に用をくりかえす、砲に酔うを繰返す、

アニマル放尿、

アニマル放尿。

——リハビリセンターの患者が、

ナースセンターの看護師になりすまして深夜働いている。

(いいなあ)

……すいかのたねをすてると、

たねのおばけができて、

ぼくにたねをくわせるぞ、とおどす、

でも、たねはくえません、と三十回言うと、

じゃあ、うえてください、と弱気になる。

(いいなあ)

すてられた犬が、

「お腹減ったから、なんかおごってください」と猫撫で声で言う。

(いいなあ)

にゃあお、と猫が飛んだ。

カモシカの腹部に直撃、それで心臓が口から飛び出した。

にゃあお、と猫が飛んだ。

カモシカ猫を心臓のないまま走る追い掛ける。

(ダイヴィング・プール)

触れたい一ミリ手前で・・・

飛び付く、マクシム！

（失速する失速する！）

……………け 心、が、おわる。

カフカァ！

——かがやく夜明け！

防衛システムの暴走が表出物になる。

ゆら／ゆ／ら

*ra...yu...ra...yu...*

アリスとパネスが、おののく、髓。あおの水鏡。

アリスとパネスが、おののく、髓。あおの水鏡。

しゃこの群れがびんびんしている、ねこのやわらかい尻尾がゆれまくる。

だからメロディーgateでは、ラジオtuningがめちゃくちゃで、

触れたい一ミリ手前で・・・

飛び付く、マクシム！

、、、、、、、、、、  
そして僕は死ねばいい。

エマ ラミ ネガリハ

前には鏡が、針金、散ってゆく。

エマ ラミ ネガリハ



前には鏡が、針金、散ってゆく。

(失速する失速する！)

(煩惱する——する…)

きみのことわすれたいから、

……け　ふ、が、おわる。

カフカァ！

防衛システムの暴走が表出物になる。

きみのことはもう午後八時のものがなしいメロディだと、

ぼくはおもいたいから。

ゆ　ら／ゆ／ら

*ra...yu...ra...yu...*

青春の残り…香…とか…

パンティーとか…おやすみ…とか…

「仕事が終わったパンツはかないで今日はいきたい」

「きょうはがらすみたいにくわれやすいコンタクトをしてるから」

(メガネ、ヲ、ハズス)

エマ、ラミ、ネガリハ、ララ、ララ、

エマ、ラミ、ネガリハ、ララ、ララ、

ねむけとためいきでカルシウムほしくなるぼくは、

ねむけとためいきでカルシウムほしくなるぼくは、

(失速する失速する！)

「優しくて残酷できまぐれな笑顔で鬱になりそうになる」

「こいはできないけどぼくはどこかへいきたいからコンタクトをしてるから」

(メ、ヲ、ノゾカレテル、ツテ、スゴイ、ヘン、ハズス)

くらくら――なダンス！ ダンスでまたおどれる、ふらふら、になる、

くたくた――(な、) ダン、ダンス、ダァァアンス！

くらくら――なダンス！ ダンスでしにたくなる、どろどろ、になる、

くたくた――(な、) パパパパパ！

「痩せた並木はサイケな国夫を呼んでくる」

「れえだあがもちいられないぼくはかよわいコンタクトをしているから」

(カンチガイ、ハズス、メ、ガ、カッテ、ニ、アルク、ハズス)

エマ、ラミ、ネガリハ、ララ、ララ、

エマ、ラミ、ネガリハ、ララ、ララ、

ねむけとためいきでカルシウムほしくなるぼくは、

ねむけとためいきでカルシウムほしくなるぼくは、

ぼくは、かいついをしたたらせながら、ナトリウムほしがる、

ぼくは、かいついをしたたらせながら、ナトリウムほしがる、

……アアア！ アアアウン！

……ウウ…アア…ウウ……！

「雨が降って視界が悪いからパトカーは遭難する」

(まだなれないぼくはなみだがとまらないコンタクトをしているから)

(エキタイ、ガ、カタ、イ、ハズス、ハズス)

(さあ、トゥルルツ、トゥルルツ！ イエエエエ！

ウオオオ！ いま、俺の全速力がきこえるか、ききたいか！

飛びたいか、泳ぎたいか、もっと先へ進みたいか！ 行けえ！

飛びこめ！ その空につっこめええええ！ )

「布きれが幽霊に見えるから象は子供の王国へ行ってしまう」

(きっとぼくはこんちゅうだとおもえてくるコンタクトをしているから)

(ムシ、デモ、ナミダ、ナガス、ンダ、ハズス、ハズス、ハズス)

……裸になれ、馬鹿になれやさしくなれ、

……何もなくていい、馬鹿でいい、夜になれ……

……裸になれ、馬鹿になれやさしくなれ、

……何もなくていい、馬鹿でいい、夜になれ……

……裸になれ、馬鹿になれやさしくなれ、

……何もなくていい、馬鹿でいい、夜になれ……

ゆ ら／ゆ／ら

ゆらゆ／ゆら／ゆ

ゆらゆ／ゆら／ゆ

ra...yu...ra...yu...

ゆらゆ／ゆら／ゆ

ゆらゆ／ゆら／ゆ

—一口を開くや否や意味不明の音声

—機械の中で響きを変えてゆくリズム

…（音声）は何処？

…（知らない）は何処？

—一口を開くや否や意味不明の音声

—機械の中で響きを変えてゆくリズム

犬歯を濡らすディスクの記憶／

ほの白みゆく椅子に置かれた白い指／

液晶が溶けてゆく永遠　／

思い出すのは、言葉、言葉？　言葉？　言葉？

—一口を開くや否や意味不明の音声

—機械の中で響きを変えてゆくリズム

(d e) バイス

マトリック (X)

… ( (d e) ) バイス

マトリック ( (X) )

—— (d e) (d e) バイス

マトリック (X) (X)

… ( (d e) ) バイス

マトリック ( (X) )

——朽ち を啓 くや伊奈 や胃身斑迷 の鯨謫緘

*Obscurity...oh...ooohhh Obscurity...*

(d e) バイス

マトリック (X)

*Obscurity...oh...ooohhh Obscurity...*

——弃飼い の茄蚊 で檜比 きを昇 えてゆくリズム

—— (d e) (d e) バイス

マトリック (X) (X)

… (音声) は何 処?

… (知らない) は何処?

—口を開くや否や 意味不明 の音声

—機械の中で響きを変えてゆくリズム

*Obscurity...oh...ooohhh Obscurity...*

*Obscurity...oh...ooohhh Obscurity...*

(de) バイス

マトリック (X)

*Obscurity...oh...ooohhh Obscurity...*

—口を開くや否や 意味不明 の音声

—機械の中で響きを変えてゆくリズム

時針(hour hand,short hand)

分針(minute hand,long hand)

秒針(second hand)

*Obscurity...oh...ooohhh Obscurity...*

hahaha...Obscurity...hahaha...haha...Obscurity

病む街のゴーリキー／

空虚が不自然に小さくなるカポーター／

エンジンから臓腑の臭い　／

hahaha...Obscurity...hahaha...haha...Obscurity

hahaha...Obscurity...hahaha...haha...Obscurity

hahaha...Obscurity...hahaha...haha...Obscurity



7 自由律俳句 その一

機械の中に、仲間はずれのリアル・タイム在って

あの頃の/ウクレレ/海が/遠くなる

見知らぬ町のエイプリル・ 夏の霧

暗い海の底に休業の札が貼ってある

末裔は夢にかくれてアルミ缶はオス猫になつて

廂に浮び出で、あま確かに置けど

洗ひ上げる名残りとすれ違ふ天然のShower

ランドリーみたいだ、すかし見る闇の深きに

暗闇はバーコード只管波音

呻くもの死するもの、蚊群がって蠅

とゞまればワイパーに人去りし

ざんざ降り/耳栓すれば/一生/透きとおる

火が通りにくいブーケ亦ラッシュアワー

ベンジーは歌う、傾斜する/ビー玉の/失踪

ペンキが禿げた建物、シーツみたいだなと咳

魚は骨となる、赤ン坊は水かけろふになる

しづかに歯に染む、すべて去り

足下に虹がある夕陽がある水たまりがあるお前等

とむらうべき煙、虹の橋となりて

とりあえず、メリー・ウィドーはいない立つ水際

カーテンに羽ばたみてゐる水の塊

ペンギンを見て、縦し、マラソンしよう

夜明けの釘にとまってきた、爬虫類のかほ

雨降る夜は逆光のサーカス

しんしんと砂嵐あさひ浮橋

テトリスをする歳月を押し上げて

トンネルに雨が浸み出す

Sugar とゞまれば凍つてしまふ

停車場に着きたるは過去にならないバケツかな

非常ベル、堰、液

あはれみのことを言ふは三十一日の夜

日本の駅がある/さかなのしるしかい

世を疑ひ靴浮沈して足そこらへんに掛けておく

世界の水音/蛇口/噴射/くちびるをつき出し

ロボット・メールが記憶のたてがみを刈り

ひと日もの云はぬときめる朝の会議

おれは不良/この不漁はいやだ まぐろ漁船

喜劇？ 美談！ いつの世も逆さまにトンネルを抜ける

ゾウになるまでウシをみるワシ

受胎告知/生誕/リスト・カット/十字架

ちょっといい、寝そべって？ ふんわりと雲に乗っかって

夜、蓮の花のつぼみに戻り

道路にてさくらの幻が落ちにけり

耳ちかよせて祝辞たまふはまだ年よりでなし

天地創造よ、よりグラフィックな図案を挿入せよ

道路に夜空を貼りて壊れたバイク残さず

鬱となりてバターとなりたき地殻応力天気図

しゃべらぬとは言え、時間はヒートポンプ

不可能に昇天する核実験

イエローはモンキーではなくカアド

か、かえるは、かなしく、あめ、か、える

かごめ、かごなし、おめめなし

風のない 横文字の 小さな看板

去勢された 蠍に あの鋸なく

須磨でスマタおぼえたすっぽんぽん

スマ好き！ たまたま好き！

官僚は完了という重さで昏れる

うつくしい国はまじなひをしないグッド・ナイト

しやがんだり、立つたり、目新らしいやふな店先き

酒はこぼれけり

大定規がほしい、でも線の見直しはしない

うねうねした道路、鉄道、乱暴なピアノ

右の眼閉じれば安全な避難地どこにもなく

左眼は抽象記譜、ビジョン・セラピーのかたさ

心をすっかり奪った

小麦をとった、埃及への逃避

這い上がる影、蔓のやふに前脚を白い化粧

きらきらとうたひつゞける蜘蛛の歌

ちちはは、そよかぜ、じじばば、たつまき

ターナーは消しゴムのように死んでいる

窓から覗く子供たちいて、ある日皆あっち向きに

あの世へと歩ひている進化の縮図

かへせ！　ぐるぐるとxにおちて　泥をさらふ遊びかな

また、ねむれない泥は静かな流れに見せて

鉄棒を見れば　鉄を喰ふ鉄　てのひらの血

蛇口はジャグジーなり気球をあげて夏のピアノリズム

枢よりペン光りおつくらがりのビル

鋼鐵は無駄なく、蝙蝠傘をも残し

握りこぶしする時ヤ、まっくろな眼

まな板は鯉をさばき、刺客はうろくずでもうよごれ

もう夜明けか、という夢を見てまだ胸は蒼く

われは白紙、われは迫真

叫ぶともう似而非の神あらわれをり

雷光は動揺、いなづまはあをく

やはき風のささやき、血汐、おもふことまぎらすこと

不器用な抽斗もあり

早く行っておやり、朝の一番電車不安はポケットに

車庫の隙間、解剖台の空気、メス

ひとひらで塔を覆ふ夕空の花

遅れるものは舟、くらがりで棧橋が孵まる

お嫁さんでも貰う手の握り方になっていて

米洗う手より寿司握る手

死の島、海辺の廃墟散るといふ意味なり薔薇

千断れた花びらは言葉のドミノ連鎖す

島にペストが流行る、土砂の量か壁か

消火器がまないたを遠くする

さようなら人魚たち！ ユラッと白あざらしや

しはがれた悲壮な声が、伝ふて流る、闇に乗り

てのひらに砂、にぎりこぶしに暖流

濡れれば、愛撫 風にゆらる

額を割った鳩か！鳩ならば ズブ濡れて

首つり ( ( ぶうらん ぶうらん

親指締め具でよわ虫になる二月かな

まな板に湯をかけるが如き軍手



ドキュメンテーション朝寝してをりぬ

連想される弊 詠嘆。美的優婉 惨。

それは確かな青麦、質素で堅実家族を大切にする

年寄りでほどけぬ屈伸運動

ヴィーナスが言ふ「一物語の最後。」…花馬酔木のかをり

季語をロフト・ビジネス、と言ふ男なりわれは

ロックハーケンする夕方に買ふなりAsparagusを

美しい額なりしかど、女、ロッジの醜態してまざ

もしやその切手の裏に八月の樹のなか

乳ぶさに似たりいちご、花ははやく枯るゝべし

「A Venus」慥に希望のある 思ふさま有りたけ

すこし映画のやふにワークアウトしやふ、君がゐないから

ダダイスム運動のシュルレアリスム陣営われは彫刻家なり

木の上の奇あつてよろしからふ

洪水の洪水の夏

うららかな

鳥の巣にリスペクトする排泄物が

いつまでもリザードする、雪、雪…

菊分つリアル・リアリティーの魔の手

LDとなりたきわれの背中あはひ陽をうけた頂に家紋

にぎりめし食うか？ とパクつたから ちとしつこみ

ケイチツはやはりゲイジツに限るとおどけるでもなし

ね、母さま、海明けはゆうえんちののりもの

橋から突き落とされる醜い娘との別れ

亀鳴くまゑに落とせ、さあ冷蔵庫でこほらせ

使徒たちの別れとはかのやふなもの

ユートピアンが言ふ、ちかごろ下痢が流行つてゐる

分けあつて高校時代のライトコート、どうしても

背がわれのてのひらなら、恋はクロッカス

ミニオンはミネラルどの掌にも

炬燵塞ぐミリタリーショップに足を挿入す

森の中の池/ゆけ 形態よ！

ポリグラムほしき脚立放任主義にとらはれ

蝶剥製となる、脚立あるかない貴族

幅ひろく見せて標識せまるやどかりに

なぜこんなことをしてくれたのです、御覧なさい

マッチ擦れば無縁と知るなり雪の果て

デューラーの祈る手に小便がしたる

死んでゐる無情にくらぶれば、不浄はアンタ

神様、佛様、聴こゑませふ。

聲も千切れて肌もあらはに伽話

ライラックはうたはない

(花よりも濃くにほふ) 「あら?御用」 「いいえ、いいえ」

ミヨソティスはしかし都会の病、ドライ・スキン……

夕暮れの輝く光の表現はターナーを超えてみた

廻はる廻はる、がらんとした遊具、都會派ディメンション

ティラノザウルスが新聞を踏む余寒かな

おかん! それはヤカンやがなもうアカンになってしもうたがな

細長く、痩せた、判らなゐをくりかゑしたい

用もなゐ雪しろと実にゐる餅のため

まつ黄いろな国で三半規管喪失するよろこび

誰も気づかない比喩こそよかれ、咽喉元の鼓動と

誰といても寥しいね、はは・・、二月らしくなってきた

汚すとすればいよいよに、ちんぽこも、キスされたく

チェアウォーカーは見る、雲はたいくつ、雨もたいくつ

蛍烏賊とこしゑに光らむと知りけり

土饅頭/ほそい剃刀みたいな風が、ビルから

午前七時四十分の雨

伝わらぬ言葉をもたぬ俳人はダビングだから

裸の女はわれわれに何をあたえるか？

キャンキャンとダブル・アイデンティティー

人体解剖図を見るなり、はた、隙き間だらけの若さか

蛇が蛇を喰ふ、鼠が鼠を喰ふ、人が人を啖らふ

しんぱ・しい ) するうふあぶりつくのこゝろかな

關り知らず。眠りにてあれ わが恐るゝところ

ダイヴ/ジャネレーションX) の献身/こぐらかつた蛙の大海

葉巻きタバコのなか のかなのこばたきまは と鏡は

鏡 (のなかのタバコ (のかなのこばたきまは

シーラカンスも夢を見る鼻見ごろ

ホメロスを読む児をながしシーリング /二月の部屋

蜂に手巾畏怖するスカートの似合う女 ひと

いざ筆をとってみると

扁桃腺動物がゐる蜂と太陽

それでおしまい、以上

囀りや犬を蹴るなりプライマリ・ケア

訳もなく苛苛するぜサブカル精神

湯呑みが二つ縁側にある二月かな

グレイテストヒッツとりあえず熱爛で

では失敬/留守である どんな真実がこもつていやふと

「沈黙の」ゴルディオスの結び目もベタ

死は痕跡予感は世界眼は万事へ

土曜日に蠅殺せども蜂襲いくる

ゆうこ なまえきくと みかんおもいうかぶ

たね どろりと とけるがまま

無意識のライヴァルはモーゼの道を発見す

脱皮するライブカメラといふ手もあり

トンネルの垣をなくせる祖父の目線

慣らされていた。蟻の汗まみれ 三つ数えれば

せーので握って。うーんと手足を空に延ばした句

月に溺れやふ、風船の音も出ぬ時も

ここには書けないことをしてきます

人の顔に見ふし電燈もあり

行く冬や ねばつて交つて お好きなやふに

紫水晶のかけら ポツケにつめて じゃそれ脱いでみよっか？

おはじき弾くばかりの月の月

この、泥棒猫！/お許し下さいご主人さま！

北風が海の饑へなるとき「利潤」のために

臍のあたりから冬体操とゞけるかもしれぬ

きつねのよめいりは冬こおらる・れっどに名前をかえる噂

教へて遣らふ、路上のアーティストに五線譜を

クラシファイドに「暮らし」の三文字の押し花

いいから詰めて、硝子天井「環境にやさしい」から

神経腫瘍クラスター爆弾冬帽子

頬割れる歯剥きだすガムの破壊力は況や！

食堂に冬も飽きずにグラス・コート

春の七草キャタピラ・ベルトを履いてをり

断ち切ってゆけ！ 辻にほつぽらかして、枯野



どん底だよ黒と影だよしやぼん玉

たゞかぼそくはかない一筋

コルクが落ちてゐる

クリープとゐ心歌聴けば、円形浮体の印刷とされ

鏡餅ある日そつくりそのまゝ永住し

インテリアは光りそよげる風のやふ

宇宙人による誘拐/しかしめまではエクストラ・ライトさ

自転車にゐくたび足がはえるか寒椿

門を出てくる掃除機

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛 ハテ、おまへはいゝかい

はだれ野はインセスト！ （ハイ、インシャラー、インシャラー

ネエ且那、竿はこつちにふるさとはくじらに

「まつろはぬ」に流され、押し流されてをりんす

下世話川から湯上りのにほひがし、四十代

アンニュイは記号、夜ひとりで眼をあけていさえすれば

山肌の岩のくぼみ象のあずかりしらぬこと

冬空は喪服が好きなアラベスク

5

レトリックはぬかづけ

町に入ると人湧いてくる

ピーナッツは噛まれいくエレベーターの構造

人生の底力

暇つぶしの中学生の限界

昼食べし弁当のあき箱

藍のような海、船端へくくり付けて曳く

太陽は沈み、月はsax

味気なき微笑、見分けるのに骨が折れる

富士は憂鬱

世界に棄てられている沢山のパン

君は一万時間の花の日

こちらへいらっしゃい、いらっしゃい芭蕉に似た大きい葉

ドイツの小説期限切れは美しい

煙草が切れた。美しい空の色どりも切れた。林も切れた

バケツに山小屋が入る

あわててマッチをするも名はしけ

タクシー差額とんかつに化けた

緑翠すこし碧

予防的施術プラットフォームでマスク夜女は安全日チーム

侮辱侮辱ク リトリスを噛みちぎれ

ひもじい時にべらり川喰えたらいいのに

指揮者のいない秋の街路樹

あれか？やはり

電話音はループするだいたいじょうぶコーラは用意してある

無職の君はマ　ンコ主義者

ペニシリンをペ　ニスと言いたくなる悪の使者

回転寿司、風　俗嬢のように美しくまわる

耳が溶けてくる左手はない右手はないふくざつな事態

くじらのペ　ニス槍のやうに黒人を殺す

口と臓腑の中に、hair

下は駐車場、僕はシャワー、これは社会のことであり

レロン、ラ　ワ　ン

単調な、単調な、単調な

意識不明細君びしょ濡れ

、、、、

けふはふえらちおな気分とおもひけり

残る半分、高く吊るせせば屠殺かな

天は釣鐘、秋の夜よく声がひゞく

おほきな瞳は整形、固形無形、罪は無罪となりにけり

防空壕はチョコレートのにほひ

ノーブラ女コートジボワールアビジャンの歌

階段を昇る尻から馬

サンドウイッチ、恥辱の隙間

ジョン・レノンは増殖するエイズの物語にだって

鴉よ鴉、ふしぜんな空の真ん中

液状化宇宙、天（ヌイト Nuit）と地（シブ Sibu）

青い炎し、たた（る）

こーひーまめは/ほほえみあわない/たべたい

花片とダーヴィンの学説

しろいゆめに/ねむりがある、それで？/ねむった しろいはなのため

軽トラにガードレールの翅が燃え尽きる

ひまわりは赤ん坊に頭突きする

夕暮れは火と燃えて

とんぼくん、新聞が配達される夕方のまちだから

祈ればすぐに焼死体

さびしい気持ちの英国旗

ふりかへれば、湧きしみず

混じり合いたい、) 酔いたい、)

霜◆焼★け●し■た▼赤

ぐるぐるぐるぐるぐる／数字がまわる／ルル

不気味だつた、おほきな鼻の穴

ダダはサンスーする

怒ってもいいよな、泣かしてもいいよな

とてもかなしい、生唾

狂気を孕んで、鎖骨

モノが、泳ぐ

6

かすかに伝ひよる秋の川 無音の驟雨

無果木の剥奪、露はな肌、妙に佗しい頼り無ゐ淋しさ

あきつ蒸し暑ゐ工場の孤独

ちづ

秋は千鶴どこかで寝そべるがよい



芋の蔓、知らない町に延びてゆく

都市の線路図、たくさんの夜明け、雨月

末枯や、狐の声もしない

○霜枯れた野の草葉に至る鉦叩

こころうち

ショウ・ウインドウ腕はもうかりがねの心理

けら

君は何処かの三角啄木鳥と月

絹雲や凹凸として無数の頭打ち

十七、八の霧 浄化夜 完全 な 太陽の爛れ

7

人を幸せにする風船は仲良しごっこの引出しに似て

危うく見過ごす 顔にかゝった蜘蛛の巣

シチュー鍋をかもめ掻き混ぜるキャッチの勧誘

午後九時過ぎ 荒野の中にある町を締め出そう

ラブソディー・クラスルーム、教師行政を知る

おたまじゃくしにお白粉

一生地獄におちろ まわりまで腐らせるくらいなら

戦闘機の隣はデルタ

マリートゥス ティ・カネテ リセス リセス ゲットアップ

夫 お元気ですか？ 奥一一奥・・起きる

小川は愛人、繊細で敏感な鹿

誰もいないのに夜明けはバレリーナのステップで

眼がチカチカする世界の強欲ビルの屋上から投げたい

ねがいごと残らずこの空の流れ星

ごはん食べて母に蹴り

少年の純粹 病気きれいにみえいたり

直線は 空で疲れる しか し 雨

木の下にいる落葉こほろぎみたいに鳴く

忘れものひとつだけソプラノのような雪

nova 背のびすれば鳥になる

ひつじがたくさんいるいるいるいるいる帰り道

海泣いただけビー玉数しれず

髪の毛を伸ばすか君の席失恋の食傷

月へ届け砂の城

もう一度寒くなるカタツムリ

どして…かな え…なんで…かな

あなたと似たような顔した郵便貯金通帳

ひるねするぼくは“音速”の絵

喧騒がpunch

リュックを背負い雨上がりの空のけだるさ

こわいゆめおきた ら 無精髭 指 に かみついた

温度計見て感覚から瞬時になじむ

ジ・アザー・デイゆさぶれ世迷い言と青い壁

ランニングシャツ ロンドン帰りの留学生

使用済テレカの猫はもういない

靴底ごとにいつか昔話を貼って

なまこも言葉 無 重 力

少女は犬になれ、日没舌のように瞳を濡らせ

空っぽな胃袋夕暮れを早く感じる

膝頭 照れながら切った髪も火照りぬ

ヴィラージュ

旋回 秒針の尖端が しなやかな草に坐し

たのしさうにとまつてゐる

さらさらと片われ月、ピアスのように揺れる

裸にもなれる電話ボックス空が寒し

意識をもたぬ鶏は一層に孤独らし

ペンキ臭いノートなら海で剥がれるのに

ちから

スクリュウの振動スクリュウの呼吸スクリュウの迫力

あやうくすべり落ちそうになる真珠かがやいてしまった

誰もいないのに、皺

根を生やしたクラゲ 波 波 波

空にクリームト 羊歯しげ る しろ き 蛇

蜂の巣 パラパラ と 砂

8

後光の

やうに

脹脛の

真っ黒な

蛙跳んでゆきます

× × ×

砂時計 の 砂

の こぼ れ る

バックス の踊 り

× × ×

い  
か  
ら freeの  
わ よ  
や う  
な

—やわらかい通奏低音が違うNew York

十 どんなに鳴かうと此処にゐるのは、僕等

背中に トゲトゲのやうなもの あたつてゐる

× × ×

綺麗

(な、)

リボンのように

船の見え

る

海

× × ×

甘い悦びは蜜蜂

春のお前の

やさしいそのすがた

× × ×

句句句——吹きだす のを こらへ

「自由律というそれだけ」より

心の中に正直なのはじぶんだけ受粉を持っているみたい。

無意味な自然の花気取りで突然かわいた種類のむなしさに襲われる。

爆発する/魚の肌/だ /

まだ僕は自分の中の知らない「声」を探してる、

それが「豚」そのものだって、

僕の考えはいざという時に「芸術」をしんから叩きこむ！

僕は自分だけが蜜になりたい花の骸の水中花になりたいと言ってるみたいだ。

対岸ではロマン主義の挫折が生まれ僕は余念なく喋り合う会議みたいだって思う。

爆発する/魚の肌/だ /

構造、設計、

建築、意匠、

本能的にそうなる！

いつも決まって少し気が短いくらいに！

(ドライヴは続いてる——)



風に飛ぶ草の実は、まだ十八か九の頃に食べた玄米パンみたいな印象を残す。

始末に負えない文明の臆病が周囲をさえぎるもののない世界で。

リユーザブル

再利用の/...

『反射的に迸る現金なしの衝動、世界は洗練された自己愛を求めている』

リユーザブル

再利用の/...

『何百ヤードも先に進む車のヘッドライトが充血した眼みたいに思える』

....それが...パラノイアだって...いい...

いい...僕はいいい...いい...ああもっと...いい...

それが...異人の眼でも...いい...

それが...昆虫の眸でも...いい...きっと...

いい...僕はいいい...きっと...気に入る...

(ドライブは続いている、ドライブは続いている...)

しらみ

蝨がいたっていいさ、蛭も。蛇も、熊も、

たとえば、女がメスライオンみたいだって、

僕も小鳥のように可憐な女みたいになったって、

それだって人生！ それだって、自己に対して素直なものごとの正味！

でもどんなことを話しても不徳…環境を作ろうっていても…

擬態…………擬態…………

(動物のような生活力、ゴキブリのような生存力が、

このお転婆で底意地のつめたそうな街をつくりだしてる)

気付かないふりして気付いてしまう観念に感傷…

理も非もない…理も非もない…

———こんな 無意味 な空白 ———

まるで僕、催眠術かけられてるみたいだよ…

より洗練されたX状態に入りたいみたいだよ…………

アルコールが永遠に救ってくれる奇蹟のアイスクリーム…

———幕が落ちたみたいだよ ———

(ドライブは続いてる——)

心の中の異常すぎる軽やかさは、あたらしい運動能力をさずけてくれる、

エレキの雲は違った、パンのはだざわりのようなベンチは少し違った。

リユースブル

## 再利用の/...

『魚の腹をぶちまけたような抽象的な世界ばかり思い描く僕の街』

リユースブル

## 再利用の/...

『時代はいつのまにかクリーニング店の高額請求になってたのさ』

(ドライブは続いている、ドライブは続いている...)

つかのまに夏は飛び去り、秋かと思ったら、もう冬！

もう既に山はサフラン色！

ねえ、あんな莓いっぱいとれたらいいよね！

そしてあれがオリュンポスの山だったらどんなにいいだろうね！

僕の気軽な進出...社会への正常な参加意欲...

でも擬態.....でも擬態.....

(生贄をほしがっている街の中で、アルファロメオを見る、

クレーン車を見る、消防車を見る、しづかにやって来る)

瞳孔が、まっくらな穴に思えてくる...

ねえ理も非もない...ねえ...理も非もない...

## 秋の果実

---

透けて見えるくらい……、鮮やかな模様は氷細工みたいに、僕と街を繋いでいた。うなだ——れ、蒼ざめ——て…横たわる、無常のその上にある流行が、細かい網の目のよう——に、僕には感じられた。そ——して、白いくっきりとした輪郭をもって、僕は魚になった……。不愉快なことがあったから、悪意が、合成着色料を生み出したようにも思え——たから。まるで蠅取紙だとそう思いながら…、夜は疾走する、完全な沈黙にならない呻き声が、獣めいた叫びを口からこもれ——させようするのを必死で憶えていた……。そうして葡萄酒の壺に涵された言葉——が、ふつつつと煮えたぎる溶鉱炉のような心臓を連れて来て…、自己陶醉の詠嘆的なつぶやきをのこさせ——て、僕はもっと嫌になって、無性にやりきれなくて、いつか、姿のない筈みたいになってゆく——透明で、ブルーで……。いつまでも、さざ波が広がって行った。凶暴だけれど、子守唄のような、冬の吐息、蚊の鳴き声……。僕は本当に、いつまでも曖昧で——、いつまでも社会や文明ともつれ合ったまま、螺旋状の階段を…昇ったり降りたり——でも、絶えず背後からきこえてくる音楽の兆しにしたがって、永遠の夜

をもとめ——、でも…行き先はない…ないんだ。孤独をかん  
じているけれど——、もう、淋しくてつまらないだけなんだ  
けど…すれ違うたびに、叫びが疲れや咽喉のしゃがれとは  
べつのところ——うまれて…。インク色を深めている夜の  
硬直の中で、悲鳴をかわしあうように不本意に揺れる幟。僕  
はどろり——、として…、月は青い、と底部に厚みを増した  
書物のカバーみたいに、夕暮れを、暗い平坦な幕だって、も  
う、あの海へと目指した自転車もないよって……。掃き溜  
めをあさる犬みたいに、食欲はゴムのようにふくれあがってい  
る。それに…、身を任せてしまおうかな——。違うなんて、も  
う言えない…。気の狂った風船みたいに空へと飛んで行く、  
情熱はヘブライ文字を記したようなあの惑星よりもずっと球  
形に、円形に、しかし独特の形に。でもすぐに——いっぺんに、  
僕は気分が悪くなった。生の秩序は、めぐる——けれど…、色  
も形もさまざまで、人の生き方も考え方も本当にさまざまだっ  
たから——。僕等は旅人なんだと…、冷やかし半分で思った、口  
笛を吹いた、だから果てしもない悪い夢を見ているみたいに溜息  
が出る——。毛細血管がどこかで切れたみたいな眩暈。昂ぶり。  
わけもなく打たれた……。風の葬送曲。それに皺寄せながら、  
折り合いながら、僕は楕円形に…、三角に……。して笑った。  
このスロオウウモーション——。僕は、でもけして声を立てず。

黙って…だ、ま、って。だまる——んだよ、だまるしかないんだ  
——よ…。みんなが真っ黒い咽喉までのぞかせて、下らない話を  
し続けるのをメドゥーサみたいな眼で、見ながら…。切り裂いた  
——スロオウウモーション。ゆっくりと刈りいれていく秋…、に、  
湿って行く——僕に沈鬱な神話が、手榴弾を破片のように持たせ、  
またひとつ電球の光を持たせ、無分別な夜の数千の羊たちの中へ  
と投下——、等価、透過…灯火——と…。くぐもらせていった。  
終わりのない僕の愁いはフライドチキンの皮——みたい…。脂肪。  
脂。そんな感じ——。暗くてさみしく、熱を持たない、死の仮面。  
——なんて、言えない、いい面の皮。そんな気持ちが受話器の曲線  
や…、プッシュボタンの溝や…、エロティックな蜘蛛の糸のよう  
なコードを想像させた——。スロオウウモーション…。滑稽な僕  
は、石の表情をして、明るい空間にいながら襖をして——抱いて、  
いま、僕は鏡のように正確な——交通整理を…甲高くはじめる。  
その時、去ってしまった夕暮れや、風を受けた花のゆれうごくさま  
のことばかり考え——。まだ、考えてるの、そんなこと…。考え  
てるよ、とても、大切なことだと思えたから——。灰が流れ、吸殻  
が、燃え尽きる、クレッジエンド…。そして無性に——、誰かに  
抱きしめられたくて、変だった、笑い顔がもう歪んでいた…。踊  
りの手振りのような影が焚火の火の粉のように散って——。きっと、

きつと…。と僕は思いながら、歩道橋から、ビルディングを見上げる。――風を孕むように、夜を孕むように、ねえ…おお、ああ…、淋しいかい、さみしいね、街よ、って。誰も何も言わない。強靱な精神を、――笑わなくたって済む話だと知りながら――。ガラスの破片のようにとげとげしく、僕はただ僕だけのことを考え、でも、あまりにも――どうかして、でもびくともしないなにかに、多くに、僕は僕のことを、他人のものとしてしまって――、芽の葉として。なのにたちまち……、曠野の果て。終わりが――ないなんて…そんなの嘘だよ、嘘だけれど、ビルディングが夜を作りだして見えたのは本当に目の錯覚だったの…わからなく――て…。その静けさの果てから、僕へと続く距離はあまりにも近い。というよりも――、近すぎて。僕はあまりにも、もの訊きたげな子供のように、悪魔の心を、知らず知らず隠し…、沈黙の部屋を貫く。

## ふしぎなすごろく

---

ギュウウウ…！ バチッ、バチバチバチッ…！！

バチバチバチッ…バチッ…！！

…プチュンッ…

（これはふしぎなすごろくです。

ルールはいたって簡単。

あなたの振ったサイコロのコマの分だけ、進めます。

ただし、ふつうのすごろくとはちょっと違います )

通常版と、解除版があります。

これは難易度をあらわすものではなく、

R指定があるか否かというものです。

### ■ 1 マス目

ドシャアッ！！ ズズズウン…！！

恐竜が現れます。

\*一時間できうる限り逃げるか、戦闘してください。



■ 2 マス目

.....

.....

——— 【 落下する光線 】

古代都市です。

ここは神殿のようです。

あなたの目の前に女性が現れます。

とてもきれいな女性です。

.....

.....

え、

ええ、

えええええええ、

「なななななな、ななななっ、なな、ななんで、」

(どうして?)

(なんで、いかように、)

(なぜ、どうして、はだか。)

.....

.....

女性は一糸まとわぬ姿であなたに抱きついて、

なんで、なんでなんでえええ！

ビクンッ、と、する間もなく、頬を寄せて、

ニユルン、と、

あなたの股間に手を伸ばしてきます。

ドクンドクン、はあはあ、と、していても、

女性は顔色ひとつ変えません。

ニコッ、とほほえみます。

言葉は喋りません。

あなたを夜のベッドへ誘おうとしています。

### ■ 3 マス目

落とし穴に落ちます。

一回休みです。

(一回休みとは、

あなたの世界の一日分に相当します。

大きな砂時計があり、それが目印です。

ただし、これはふつうのすごろくではありませんので、

自力で抜け出す能力があれば、

時間の消費は最小限で済みます。 )

#### ■ 4 マス目

戦争をしています。

銃弾が雨のように降ってきています。

血なまぐさい臭いがします。

——小人です。

——鳥人です。

…………争っています。

#### ■ 5 マス目

ここは誰もいない、

あなたのもうひとつの世界です。

#### ■ 6 マス目

塔です。

ここは時間を視覚化した場所です。

神の心臓と呼ばれている場所です。

ぜんまいが動いています。

ぜんまいが動いている場所に向かって、

絶えず強い風が入ってゆきます。

次の瞬間それは石炭になり、

それは窯の中へとベルトコンベアーで運ばれてゆきます。

## ■ 7 マス目

ここはアイテムショップです。

以後どんなマスからでも、相応の品があれば、

10マス必ず進める靴、

ラッキーなジュースであなたを6マスすすめる、など、

不思議な商品があります。

ですが、ここは同時に、

あなたが強運の持ち主であることを、

証明することになります。

ここには60マスあるすぐろくのゴールまで行きつける、

アイテムもあります。ただし、お代はあなたの寿命です。

そんなの払えない、とみなさん言いますが、

払えなければどのみち死ぬでしょう。

いままで、生き残った者はひとりもいないのです。

先へ進めば進むほど、あなたの死亡確率は増えていきます。

(フッフ、それこそが秘密、

ストーリーテラーのわたしこそが、

唯一この世界を行き来出来る。 )

先へ進みますか、

それとも――それとも……

それとも、最大のリスクを取り除きますか。

うつろな鱗くづのようなうみ／うみに

みすうみはぬめりしたたり／くちなしの

みづうみ透明にゆらめくエエテルのそこひに

話すつもりだった

終わらせるつもりだった

ながれるそばから／はなれ／とじ／

はなれ／めをつぶって／

青銅の文鎮／くらげ色のすかすかした骨

真理も自由も神も気持ち悪くて吐きそうで鬱陶しくて

まるで貝殻に入れられたセンチメンタルな僕の耳のようだよと

まるで夜の潮にあらわれた真珠の色になってみぞれのようだよって

はなびらのかたいゆきのなみだのおえつのいのもたれの

命の持たれ／待たれ／いやおうに閉ざされ

しめりのさざめきのなかのしろいくろいよるの／あとで

オルガン／カアァテン／エプロン

つづいた／い／た／つづいて／い／た／いた／

ひときわたかくひびきわたり感情をくしゃくしゃにして

ひとつの廃墟となったアルパカのような眼をして涙でぐじゅぐじゅにして

絵は消えしびれあおざめたゆめは迷路／ぼくのかお

に／蟄居して／拡散して／いや／フライのような油であげられ

夢色／とらわれの色／もくせいのまわりをとびかうの衛星の色

はなかざり／はなづな／はなのともり

の／瀑布

おっおっおっおっおっおっおっおっおっおっおっおっおっ

ことばはうそつきだから／もうはなしはしないから

ひふのうらがわ／へ／

したがかわかない／その／先／へ

おとは炎のなかへとひしゃげこわれ／かつぎこまれたよるは

まつくろいあさで／まつろで／それはくらいあさのくさいいきで

はてしなくてでもひさかたぶりでけれどずいぶんどうでもよくおもっていた

路上／工場／空想／逃走

萎えた手足は百千の蝋燭／だえきのなかをあるくすなのうつろいをあるく

おわりのないほとばしりはすべてくさり

ことごとくみだれてもえてみだらですすがれ／否どうしようもなく

もうシャンデリヤさえ見えない淋しい悩みの翹音は聞こえない

暗い夜の化身にして孤独な語り部の言葉がもれてゆかない

くさりながら鎖／と／

くさりがま／と／くさいつぼ／と／

戸はひらかれていながらよどむヨオグルトのようで舌がふるえだす

ころがる／びいどろ／どろどろ／ひゅうどろどろ／

すべてののはなのいろをみせた／さけめから

オリブへと／グラウンドへと／都市へと／文明へと

あたらしいせいめいのむらかぜのなかへと

僕は燃えている銃剣の切っ先よりずっと熱く

ぱっと両手をひろげるとくろいかげが血のようにみえておもえて

まんげきょうあそび／望遠鏡のなかをのぞき

それでもひそやかに顔をもたせかけて金の砂州へはこばれ

いましも綺麗な埃にでもなってこだまする／濡れる僕は

ひかりのそこへ／まつくろい／ことばのそこへ

くらくらしながらくたくたになってぐだぐだなことばを吐いてる

づづぐろいよるのおわりのばしょで

もう見たくもない夜の売り声の一步手前で



ねむたい声でうつすらと口あければ「ぎゆうにゆうぱつく。」と幼き日の夢が

しゆわしゆわとサイダーは泡をたて――あふれるみどり、と…誘惑の非常口へ……

からだをちぢめれば「影もかはるのね。」――ゆふ陽も…しろいクレヨンをほしがり……

草原の妖精みたいだ/ふはりと くりかへす、くりかへす/波頭 しろく くずれ て

はくちようになりたかつた僕は川辺であまい余韻に「音階」と名付ける

とどめ得ないくう気をウイスキーの香り「召集令状。」したい怒りでもいいから

研ぎ澄まされた眼差しなら――行ける気がした…この世界辞表を出す勇気だ……

まだ覚えてる夏の自転車リバーをはしつたぼくはひとつの世界の窓

熊野古道でゆふれいを見た――しんしゆつきぼつな…かがみのなかのぼくみたいに……

嵐はいつ去るのだろうてのひらがつめたいまま昨日死んだ人みたいに

もうずつと前にむりよくな民は難民になつたひとり花火のバースディケーキ

第九条を謳ふため日の丸は注文の皿を眼で追つた回転寿司

おとうさんが鯛を買ってきた液晶テレビも/年末せかいじゆうも鬼ヶ城なのに

招き猫になれ/マニフェストというキャットフードを食べる猫たちよ、居ねむりせず

もみじうつくしきロープウェーはゆつくりとうごく闇の中に存らう日本の美を

電源を入れたように――紅葉は…あらはれて去った安倍元総理の知らぬ町……

日の光金糸雀のごとく顫心――霧晴れて…くつきりと柿の実赤く熟れたり……

窓に黒猫/むらさきの吐息。 珈琲/瓦に苔が覆ひぬ。 /ものづかれ。 燕の巢

影絵は山羊のようなり――川底にいまも夏…切手のむこうからおしあげる力だ……

ひと匙のココアでいいさんぜん銀河へぼくはゆく公園のじや口で水をのみながら

## その二

ですから、思春期といふ亡霊――

僕はここを離れたい…くたびれたジーンズ履いて

冬空に吊り下げられたようにぽつかりと浮かぶため息

囚人のジレンマ

注射針は老人になるを厭いて「あと、…何発？」

と引き金を引くGAME

自然の流れに逆らうことなく「期待しないで。」

/デッドヒート 誰もが追い越してゆく

「ここを出て、何処へ行くのだ。」/

わかりません、核実験、改革と言う名の藪の中

…冬の陽は翳りやすく一一午後十時

…どこまで行つても懐か し い

家出せし人一一海外へ行くと言つた人…

いまは新世紀格差社会の薄氷に映え

冷やされたね一一振り向けば誰もいない…

沈黙もうすぐ来るね、縫れ合ひやがて

君のこだまが吸い込まれてゆく一一相変わらず…

未来都市蜃気楼をのこして…

一年半ころをとらへてはなさない電球が

あはれにそそぐ黒のまなざし

この卵のように脆い一一

世界は深海に光りをもとめ

…雲紅く街…

+ + +

ですから、思春期といふ亡霊——僕はここを離れたい…くたびれたジーンズ履いて

冬空に吊り下げられたようにぽつかりと浮かぶため息 囚人のジレンマ

注射針は老人になるを厭いて「あと、…何発？」と引き金を引くGAME

自然の流れに逆らうことなく「期待しないで。」/デッドヒート 誰もが追い越してゆく

「ここを出て、何処へ行くのだ。」/わかりません、核実験、改革と言う名の藪の中

…冬の陽は翳りやすく——午後十時…どこまで行つても懐か し い

家出せし人——海外へ行くと言つた人…いまは新世紀格差社会の薄氷に映え

冷やされたね——振り向けば誰もいない…沈黙もうすぐ来るね、纏れ合ひやがて

君のこだまが吸い込まれてゆく——相変わらず…未来都市蜃気楼をのこして…

一年半ころをとらへてはなさない電球があはれにそそぐ黒のまなざし

この卵のように脆い——世界は深海に光りをもとめ…雲紅く街…

\* \* \*

胸——ぱいの夜の散歩はわたしに夜更けの

冷たい匂ひをかがせて

指先の示す向こう――ほら、大陸の砂を運んで……

放蕩息子が帰宅する……

筐を開くべき鍵もヴァニラ 時がわたしを椅子のように硬くし

風がカーテンを揺らす

クテュールの「ピエロ服の政治家」みたいだ歌心

いつしか心に戸惑ひ重ねたる

霧の向こうの世界に行つてしまつた――廃墟に

……せせらぎの音を残して

レントゲン医師となるべく迷路に似たない面

廃墟の地図たどりながら

ツンドラの下にうつくしかつた季節、

わたしは心の扉を開ける鍵が欲しい

+ + +

胸一ぱいの夜の散歩はわたしに夜更けの冷たい匂ひをかがせて

指先の示す向こう――ほら、大陸の砂を運んで……放蕩息子が帰宅する……

筐を開くべき鍵もヴァニラ 時がわたしを椅子のように硬くし風がカーテンを揺らす

クテールの「ピエロ服の政治家」みたいだ歌心いつしか心に戸惑ひ重ねたる

霧の向こうの世界に行ってしまった――廃墟に……せせらぎの音を残して

レントゲン医師となるべく迷路に似たない面 廃墟の地図たどりながら

ツンドラの下にうつくしかつた季節、わたしは心の扉を開ける鍵が欲しい

### その三

#### 月の沙漠

ヒチコックの夜は「奪ふために生まれたのだ」――ほのぼのとあけそめて……月の沙漠……

はらはらと落つる木の葉（が、砂に）が、雪にかはる…しように。…するほどに

（こんな風「に」）受話器を置けば、波紋さえカーブミラーに映つたよ、たぶん

あら波に力を〔仮面剥ぐ夜（は）〕おもふのだ蝶番死ぬまで開け続けたい

まがたま まなこ でぶ くち

月よみの光を〔=勾玉と読み解く〕友は眼ひらきて肥婦の唇よ、といふ

海の呪文――マリア像〔このラインで、〕…むらさきのきよらを尽くす花の拉致……

…しないでくれ。…くれ。（世の中で、）キリストと似た境遇は罪びとだから――

#### リハビリ

小さな蟻に敷かれゆく「信じられない」――あぐらをかいて…迷ひ多くして……

「杖は要らない！」「もう、杖は要らない！」「（杖ついて歩いてる）」「（木に寄りかかる）

オランウータンの足跡かと「…いつの間にか」セピア色の葉（を）噛みしめぬまま

オルゴールを失ひし記憶——せつなさに（慣れたら、）…風吹かぬ夜に鳴りたい…

歯にしみとほるロイ・リキテンスタインの“車内”流れ来て又流れていった

棘のない薔薇…みむさだめか——町の灯といふ恐竜の歯、夜のパッチワークさ…

フィルム いろかたち

うしろ姿で（水は、）こぼれてしまふ、どんな映画も色形にならなくていい

髪ながき少女と——踏絵、ハイウェイ…旅は尖塔の上なる〔速度で、〕……

バンザイの中に〔マチュピチュを連想する、〕旅せねば亡びの子ではない証に

友と遊んで水遣りを怠つた記憶の（なかで、）母のように花が咲く

半額と貼られし品ものに（イルカ、）——TVのような液晶を見る——

## 静かな時

静かな時を刻むように熱い茶を飲む——染み入るような…数分間……

トレイン

（ドア）の向こうが受話器〔…は〕軋みつつころあひ夜の電車来るところ

数千年たとえ…しても。…でも“ふるさと”は美しい夕かげは垣根に——

さびしい庭に花を植えよう、さやさや波立てる風の草むらに住もう

振り込め詐欺は終わったのかソフトバンク100億円宙に浮くゴミではない

エンジェルフォールみたいさ——幾日来ても蝉と杉の群生…放心…

キング牧師の夢[・リンカーン・ケネディ]の演説それはオバマと共に生きる

春

ねむりから醒めたら菜の花おもふところに付箋ふはりと春風をさらふ

傷付いていた黒鍵 [ふと、] イメージしてみたよ「くすぐつたいね。春の陽」

人はみな扉の向こうに [確かに、] 世界を愛したんじゃないかなあ

あほ空に酔つてしまふよ――ひたすらに聴覚を研いだ…大樹の下で……

…によって。…がもとで [見つかつて!] ながい夢を見ていたようだ、雲母

小鳥よ、広がる物語の世界では色んなことが変わつてしまふ

「ぬ」に付いてたあいなく「り」がついてくる、いろ鉛筆でひまはりを描く

ふりつもる雪

吹き消して（「と」）けた魂の接着剤コンパスは海の底に孔をあける

目に何か入ったようだ、虱、今日のできごとは「頼んだぞ」といふ眼に棲む

…のままの状態 [以上いろいろな語に付く。] lngではないLang

ノーコメントといふ林檎ニュートンでも禁果でも「矢の刺さったリンゴ」でも

「…ひそかなる時」嫌なニュースが迫る――槌ではないジェット機の発進音で……

何処かにある涙のあと風でかはひた夜は年月といふ飛ぶ鳥がさらつた



(さす指の先を、) ひびきとしてマネキンの「ぼやけた時間」風景画見る

洗濯物を干せば [テニスのスマッシュ、] ひょいと戻る…雪のあたたかさ…

数値みてこの矛盾 (主治医言う、) [奇妙なセンサー、] 多彩な魚群探知機

## 肉体の疲れ

泳ぎ終へれば [塩分濃度、] 薪の音ひくく/着くより早くこの汗

はい

忘れられない懐かしさに素手のわれ [白き杯、] をつかむ泡のいのちでも

シャトー

印象深い。ハンドルを切る“オイデ下サレ”/そして来たのだ。夕暮れの鐘へ

「…であろうか「いや…ではありはしない「水に沈める「では、きつとありはしない

…ないかなあ (と、僕は呟いた。) 夕闇に孔雀は思ふことのおほくを呟けり

…か。…だろうか“小夜しぐれ”葡萄のかげに松の下草にほふほど (か)

古い硬貨・貨幣。――「光る電飾。」枯れ松葉こぼれおちる月のやすらぎ…

帰らなかつた街に (も) 夜空は来る、もの言わない生きる影のとほくから

うしほ

涼しき朝は田舎の夏をおもひだす味噌汁と線香と猫と潮

## 恋愛歌

みおろ

背後から俯瞰した「塔は沈黙している。」1・2・3で君の吐息は眩ら (「む」)

しなやかに投げる / 呼び戻す術はない / 犯した、遠い目の彼方

うつくしく粧つて寒いね、羽毛なら頬にもくちびるにも流れなかつた、と女

ホテルの窓のカーテンは蝉の抜殻（扉の絵ばかり「が」増えて）――

スコーピオンズというよりも、蠍団と紹介するのがよいのだろうか。

それともいのちつきるまで、燃え上がれ。ハードロックというより、暑  
苦しい連中のいかにもなロックで、ボンジョヴィを想起したりする。そ  
ういうことは音楽のメリイゴウラウンド的な事情で、さだまさしを聴く  
と松山千春が聴きたくなり、禿げと、金のせこさは関係あるのか。いや、  
ないだろう。男性ホルモンであり、若干遺伝とか、パーマのせいともい  
われ、いやいや整髪剤をつくるメーカーは髪質とって譲らないだろう。  
何の話だ。まるで鞭を恐れるような子供みたいにぶつくさいってないで、  
さっさと本題に入れ。70年代の彼等は英米のハードロックと比較して  
も抜きん出て斬新なスタイルを確立していた。イングヴェイ・マルムス  
ティーンに多大な影響を与えたウリ・ジョン・ロートこと仙人がいたか  
らである。指先を端末とし、ヴィブラートによってエネルギーを弦に送  
り込むというイメージで演奏しているらしいが、それはロボットダンス  
よろしく、我々にはよくわからない。ともあれハードロックとか、メタ  
ルでは一家に一台必要なテレビ。その音楽は、80年代L.A.メタルの原  
型である。なお、渋谷陽一がスコーピオンズの『復讐の蠍団～イン・ト  
ランス』をラジオでかけたのが日本で最初の紹介で、楽曲をかけた後に  
反響があり、その後口コミでどんどん日本でのスコーピオンズ人気を広

がっていったという経緯がある。韓国であんまり人気のない俳優が日本で評価されるようなものだろうか。七転び八起き。最初、プロモーターがスコーピオンズに来日公演を持ちかけた時は、ドイツのローカルバンドに過ぎず、彼等たちがビックリしたと言う。勝手に付け加えてやろう、おいおい、戦争は終わったんだぜ。悪ふざけはよすんだ。ベルリンの壁んなかに入れちまうぜ。言っとくが俺は、イッチまってるんだ。壁に向かってピストンするぜ。何の話だ、別の話になっているだろ。ともかく、初来日が1978年に決まった時に、スコーピオンズ側から日本の楽曲を歌いたいと日本側のファンクラブに手紙が来た。日本という国では、結構泣ける話にむすびつけてしまうところだが、俺は落とす。思うに、スコーピオンズというのはサービス精神が旺盛で、ぼくのあたまはとまとできて、ほおるぎるばあと、と大差なく、完全無欠のサービス精神であり、このようにして、日本通と呼称され、人気が出火になっても、あそこだったらお金稼がせてくれる、ジパングになる。というような、穿った見方はともかく、そこで蠍団は荒城の月を演奏した。僕はサザンオールスターズのTSUNAMIを演奏する外国のパンクバンドよろしくのインパクトを感じた。これがスティービー・ワンダーのエピソードだったら、もう一つだったろう。スコーピオンズという空気感だから、山の端をながるる白い雪のようになる。日本のネーミングセンスのカンフージェネレーション燃えよドラゴンはずさまじく、アルバム名に、大体、蠍団が入っている。蠍団ってエジプトとかアラブにいる強盗団みたいだ。銀行強

盗でもするような人気を揶揄していたのか。それは違うか。大体このバンドは、もちろん個人的偏見だが、マティアスの狂ったギターで説明でき、うねりまくり、てのひらがいまもげたとしても、魚のように泳いでいるような感じなのだ。また、バンドメンバーは変わったが、サウンドにどことなく蠍団節が残り、いつ聴いても浸潤し、なにがしかの時代的な熱のようなものを投影させてくれる。玩具のルビーにも似た蠍団的音楽。おっと、白い泡のような蠍団的音楽。黄色い液体。くう、泣けるな。飲める飲める。しかし、いつ聴いても、『Don't Stop At The Top』を聴くと頭の中でボンジョヴィが出てくる。というのは、野暮か。でもガンダムや、漫画や、テレビゲームが野暮だという意見があってもいいじゃないか。語るべきところよりも、聴きたい。エモーショナルに粘る。伸びたい。それで、ぐっと縮みたい。堪えたい。でも聴きたい。って、お前何を閉めようとしているんだ。キース・ムーンやラット・スキャビーズのオカズ的な感じがほしい。あった。Pictured Life。父さんは生きる、子供いないけど、父さんは生きる。生きる。ところで、蠍団を語る上で欠かせないのは、『狂熱の蠍団～ヴァージン・キラー』であり、アートワークの少女のヌードが物議を呼び、当時発売禁止となった一品。これは売れてきたバンドがなにかしらの悩みをかかえたすえに、必ず、分かりやすいロックをやるようなもので、これ以上の追求は避けたいが、軍艦しよう。児童ポルノは反対だが、芸術写真は賛成である。と、いう風に僕は何故だかそれを拝ん

だが、間違いなく発売禁止になるな、これでならなかったらチャタレイ夫人なんかなにほどでもない、という感じだった。演歌ロックから、世界を掴んだ'80年代&'90年代を経て、円熟を迎えた'00年代・・・それにしても中々解散しないので、調べたら、演歌ロックよ、フォーエバー、いつまでも。最後に、リルケのマルテの手記で『人々は生きるために都会に集まるのだという』という一言を、捧げたい。

溺死して死蟻化

ひらけば地図ペンキのはげてゆく

涅槃図フラミンゴ裸が好きと羽根ふるふ

スケルトン「御百度参りしただけよ」と女

たまねぎをぬがせしみじみとはれたりふつたり

全費用込みで美老年になりたく

まだトムライ x まだオイラン y まだハラキリ z

2011年春堂々公開“ヒト化ネハンに♫しにゆく”

s i と書いた前科「死んでやる短歌」「生きてやる俳句」

待ち合はせ急ぐ理由なしとマルクス・マキシマム

むごたらしいオカンアート、春

四角の部屋で釈迦堂「ツモ！」――勝つんだ、御仏サン

瓶詰めのカッターシャツ → クールビズにしてね

あゝ、賃貸女のやふな五月だなあ

いれかはりたちかはり案の定粗大ゴミ

みみず脹れをかじりながらウグイスになるのさ

サロメとか言うな！ くさめと言え[でも怒らないで]

哲学はこの時「鉄が苦」となりにけり、なむあみだぶ

並んで歩いてそろばんの珠ぬける

売るものがないくせに、萎えたりズムで脱いでもは無い

ゴウゾウはいう「魔術！」

ぼくはいう「供述！ あの臭い飯喰わせないで」

岡村靖幸さんを見習おう、ヒャア、ウンウン、アヒャア

トランペット↑ ミシン台↓ 駝鳥襲ふ

手持無沙汰を誤魔化すためにモテなくちゃダメさ

（「ヒャア、アアアン」）こだまら、こだまら

雑草を?つても！ カルアミルクを休憩に飲む

「イケナイコトカイ」を召喚

メエルシュトレエム

大渦巻

句弱になりたがる人、孔雀になりたがるおれ

枢に釘をさせるか、そのペンで！

アトランティス語源録、棄てばち、割る八、来る蜂

なんとなく痛リック

聖書(バイブル)/(で)ある声

消えるのは何故？ 気の遠くなつても、うとうとしない



叫ぶともう青春を飾ろうとする自我

似而非の神はエセニンだけでいい

水玉は（水）と（玉）にわかれゆく

朝、パンティーをかぶっている岡村靖幸が好きだ！

天狗にもならず、評価もされず、——靖幸ちゃんだよ

しな                      うそのそら

やすゆきや姿態つくるたび仮設蒼穹

それはまるでFinger/模造男根Singer

おしやまにおせんちめんとに月光病

「おや、不思議だ。」かゝる自己を以て人生に臨み

流るゝ水に似たり/潰されるな、蟹にも髭

原則として石は割るべし/石は水の匿れるところ

けむるばかりの焚火的夕焼け

払い戻しのきかない人買いは結婚の喩へにならない

カントリー

地球と電話帳越しに言ひたい

ガン・コントロール

太刀打ちできない、きつと、花粉症の木もね

ゆくぞ法螺貝/まさか胃買ふんですかい

ノー・マネー

昼はノロケよ¥0円/ろけっと、見えなくなるまで

ノルマンディ/ダカラ、飲ムンディ“ロマネコンティ”

また一人羊の毛刈りをする都会

あざけりを浴びるがごとし日常や

アフリカの空は広いのか、立ち話ひゞいて何より

いしみち きりぎし

真夜の蝿、つつ抜けの崖

ピッチング人体模型にぴきぴきと

そのまましづかに、しづんでゆくように

ワイパー動き花いばら翼となり

うお

魚とびあがつて、石未知へしづんでいつて

あや

殺める前にはやく飛び込め、岬の端

どんなに走つたらこんなに湯は熱くなる

あかちゃん

掃き溜めた落葉からこんにちは毛虫

り音させて潔く蝉は「はやく離縁させて！」…。

乱数的同志、意味合いが違ふと言ったきり

白髪に住処、皺寄った時間

土不踏移動祝日恵比寿

都合不都合御都合！ ああ好都合

低姿勢の敷居/猛吹雪北の国

アナタ次第/それは気体？/期待それでもサムライ

会えそう？ 和えられそうよ/サラダでしょう

いきいきと風景をうつしとつてみる

信号は柔らかく少し膨らみ、青い

絵筆は水電していた、かたちよく

とつぴようしもなく鎌がのび、ごみ袋はバタ足

苦笑が会話の中にある人だ、眼かくしの内に

犬がリアス式海岸をなぞる、吼える声

いまよ甘美！ シャワーを止める時の緊張

音楽は越境する、釣る真似をするように

雪そこはかとなない鳥のくらし

ビルの自縛、自動巻きのおおよそで退社

ブランコや、青年、かがり火のごとく漕げり

陽はどんぐりのあたたかさ

口を開く、たらこにいびつな包丁はいる

夕方、影に歌物語うばわれる

匂い嗅ぐ空の悲しい日

靴の底よき人の机おもふかな

水溜まりがふるえている満月きれいよと

魚焼けてます、手が、握手が

コミュニナリズムみたいだ、コーラ

犬ッぽいかほをしているな、犬だな、犬だな、ネコだな

駅前、蒲団を干して落ちゝやつた

銀杏の道忘れたる、穴があいている

つくづく皆働いて日は急に落ちて

おいでなさいな、マグネット、――いやなテレパシー

ひれに、ふれ、ダ・ヴィンチの朝が来

パソコンが年賀状に見える

ふくろうにも、手が届く、柿

宇宙的なあくがれ

葉を鳴らししゆわしゆわと鳴く蟬の尻

自由に伸びるうすむらさきの空、ダリアの花へ

死―娑婆シーシャバシーダバダバ be―耳紋

コルセットの恐竜は夢の連環

雁落としあさはかでありとひまひまに

津軽はいい！ 風のぬけ道、湯のけむり

おおげさに夜中を出せ、いもりの黒焼きを

どこも痛くないため息と瓦スタンクの街

回転木馬の眼エ潰れたり絵巻

たふ

ススキ強風増してうしろに仆れてみすみずし

かいろう

むらさきのなかにうす紅を見むる廻廊かな

細長いビルもグラスにすれば悲しき

え

はくれんの一樹映像を呼び醒ますかの泥

そよと吹く糸電話にしていしのうへにたんぽぽの綿

肩に吊りし虫籠さようなら神学

走り終えしあと散る花に撃たれゆくとき

話の合間に町を歩く美は儂い方向感かも知れぬ

蠟梅もでれンともゝの余りあるあはれ

海にこゝろがあるなら恋をしたい

実存とは？ 花影あはく戸惑ふ視線

ポインセチアいつ見上げてても空は青

忘却に遅刻する宇宙遊泳に飽かず

死後ひとつでも響かせたかつた木々の色なり

いてふ

金貨も握らずに公孫樹は少し遣りたしと

散文が書きたくなるとき

二十一になつたばかり、ふたつの川のあひだで

「待ちます」と呼び鈴のやふだったぼくの声

括約筋も煙草を吸いたひ春の夜なり

酢の物みたいな星も悪文家にはいゝなり

缶珈琲を飲んでも箱舟をうごかさなひ

しらけ鳥、跫音の小さきこと胸に痛し

夜更けてもねむれなひ窓を開けて、屋根に移動して

物の名をみなわすれたひ、声を出すのも恥ずかしかつたから

まごまごと仔犬がふるへ

セーターを着れば編んでほしかつた人

蜜柑を剥けば、あの暗い坂道の方へ

すなほにかたりかけるための“無題”かな

露のとうとAsparagusなキスをする、風まだ冷たく

ハンガーにも切手をつけられたらいいのに

ふと気がつくと、あまりりす

空いつぱいのいわし、すゝかぜ、すゝかぜ！

鹿は角ぬかれるとひよつとこ

ごぼりごぼりとぼくの絵は深海に

その辺に粗筋のわからぬうろこ

糸が切れたら陽のあたるとほりの躓いた石

どこにでもあるような話

貼り紙の上に夜空を留めたまま

いつから狂うのだらう、蟬の声

早口な春と夏のせめぎ合い

効きすぎのクーラー、庭先は夜にうつる

コインランドリーありがとう指の在り処

働いて返せないお金といふ季語が無い

逃げる場所といふ季語がない

重たい瞼の隙間からローンは机を蹴る

自己主張せず酒を飲む倦きも退屈も

筆をとつてから死ね

いらぬものは死ねばいいんだ

もんじょう

呪ひが欲しめなら地獄のやふな文章で

甘つたれやがつて豚ども

うつむいて歩く街は唾を吐きたくてたまらなひ

とりわけ大学生が嫌い一年ぢゆう

お金つて重いんだ、冬の雪よりもさ

ピカソなら俺でも書けるぜと言つて殺したい

こんなの載せられるか、それはそうだろ

嫌な話をし続けて女を殴り飛ばしたい

「包丁で刺してやろうか！」は言わずに

「てめえ風呂に来い」は言わずに

いやな唄、しめつぽひ歌、どうでもいゝ

鬼の児がやさしいと後ろめたくもあり

歳月で癒えるまゝ冬の童話

ぬつと顔を覗きに來さう、学生もラクじゃない

おまえとたつた二人の地獄だ

わたしはそれを理解したいとも思わない

年輪を彫りて肉体は夜呼び合う

いきほひはかたくなに罐を切るゝ

耳を病める別の星では朝がつゞいた

ジャランジャラン

蜃気楼へ散歩（する）酔つてうたつて

鏡へ、ぬかるみがある「音」にまつわる



ぼうふらや頭蓋に染むほど混み合へり

開閉器 光量 舌荒れる 影のびる

落ちるフケ

足の裏しびれるほどに眼は弱り

つめたくしぬときはこゝろをとじていたい

黒点よ！ 爬虫の眼あり夜景あり

じよろ べた

小便する、糞をする、夏落葉する

なきがら

この声は堅い麵麩を孕むため

ショックウェーブ

衝撃波、たゞ足が耄られたゞけ

幸福の黒いリボンのサーカス

高く投げ上げた世界！

ぐんぐんと遺影のや心に離れゆく

メーデーの声/止まれ/止まらない――撃つ

眼が開いたままの頭部

生唾ごくりと生き血を嗅ぐ写真

兵隊が引きずつてゐた影

わけ

街の子供が無表情でゐた理由

追ふば刑事になるだらう

天に帰つたといへば神も仏もありやしねえ

暗い戦場

下肢の絶え間ない動き、足踏み、

片足から…もう…片…足へ…。

逃げる、追いかける、

――走る。

黒く…塗り…つぶされ…て、しまう前に…

心の奥底にしまいこんでいた感情が、

云う――――。

…網戸が見えなくなる夜の角度、と …

……車が見えないカーブだ、と ………

マイルストーンのように見えてくる。

〈スピード〉がある。

(加速発進)がある。

……エネルギー。

心拍数の増加、息切れ、不安、

いらいら感、不穏感、焦燥。

棺桶から…もう…抜…け出して…。

景色も人も消えて行く、

生きることの難しさ（は、）

よろこび あじわい、

もっと前に見つけなくちゃいけなかった、

NARRATION / NAVIGATION

——でも、まだ足りない僕の足。

.....世界は、まだ、

その才能に、気付いていない ...

『答え』（が、）〈ある〉

『生き方』（が、）〈ある〉

足を速めた、一足飛びに、  
集中力低下からフル稼働になる、

《GOAL》を目指している、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
僕の足は、黄金の鉱脈を掘り当てる、

*to be insufficient—not enough—*

*too little—deficient—wanting—*

*short—inadequate——*

——bibibi

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
駆け足になる、やがて全力疾走へ。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
背中だけ見ていればいいよ、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
遠い点だけ見ていればいいよ、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

僕が走ったら、二度と君の出番なんてないよ、

——それだから人生は長い。

背伸びしながら風を感じ、等身大の世界、

街の匂い、町のリズム、を受け入れる。

継ぎ足した歯。

もう僕は……先へ……進……むよ……。

(マット)      でも——

(ペダル)              でも——

(システム)      でも——

云う—————。

……涙があふれてくる夜は      ……

………*Game*の終わりの合図さ！      ……

足を下ろす、増やす、生まれる、

そし……て、き……っと……違う、僕になれる……

手足の肥大感覚、割合のバランス感覚崩壊、

生きることの難しさ よろこび あじわい、

足背と足底の足の、足の、

中足骨部分への動脈。

〈スピード〉がある。

(加速発進)がある。

....この足。

とあるチャット機能のあるサイトで、  
わたしと話していた女性のことを話したい。  
いまでも心に焼き付いてはなれないので、  
いま、勇気を持ってこの話をしたい。

「文章下手過ぎて、あこがれます。」

え、メタ？

それ、メタなの、それ、メタ？

と、女性らしい人物は、そっと書き添えた。

「わたしは文章を書いて、  
三日経つと、  
誰が書いたのかわからなくなるんです。」

え、なにそれすごい。

え、なにそれ、ほんとうにすごい。

(じゃあどうして、わたしに文章を書こうと思ったの。)

忘れるよ、~~それ。~~)

心の中に重たい石が残った。

～(=。◇°；=)～ スッゲスッゲスッゲ

～(=。◇°；=)～ ニヤツハニヤツハニヤツハ

～(=。◇°；=)～ スッゲスッゲスッゲ

彼女はおもむろにまだ続けられた。

何を続けようと言うのか、いや、何を残そうというのか、

詩人の魂と呼ばれているわたしは、

彼女の宇宙から届く最果てのメッセージに目を走らせた。

「文章を書いていると脳の筋肉がゆるみます」

え、なにそれやばい。

え、なにそれ、ほんとうにやばい。

(~~デモオネガイダカラ、括約筋シメスギナイデアゲテ。~~)

心の中にゲーリック大佐があらわれ、

「君、締めすぎ、だろ、もっと出させて下さい」と言った。

～(=。◇°；=)～ スッゲスッゲスッゲ



～(=。◇°；=)～ ニヤツハニヤツハニヤツハ

～(=。◇°；=)～ スグゲスグゲスグゲ

それでもまだ、彼女は続けられるようだった。

詩人の魂とよばれて幾年か過ぎているわたしだったが、

この時ほど、わたしは自分の才能のなさに驚いたことはない。

あまりのショックに文字が書けなくなった。

「文章って、変態ですよね。」

「大体そう。」

と、返せなかったわたしはやはり、

まだ、詩人の魂と言うには早すぎるのかも知れない。

諸君、世の中には気付かない種類の天才がいて、

しかも、おそろしいほどの文章の破壊力に、

まだ気付いていない人がいる。

(トレモロすごい人。)

(ロートレアモン読んでみたい印象をわたしにのこした、

あまりにもあまりな詩才を隠す人。)

わたしはそんな時、

あまりに深く文章を知り過ぎてしまったことを、

とても恥ずかしく思うことがあるのである。

経験はあまりにも、無意味。

括約筋をしめないで文章を書く方法を、

考えてしまう、わたしである。

詩人が迷いの森を歩いている。

びっこ

僕は跛をひきながら、沼地の植物のように腐っている。

誘惑に応じない時、血色のよい頬も、美しい顔も見えないみたいに、

静かに、静かに、腐る。

エンドレスに？

オーヴァーに……。

胡瓜も、茄子も、腐る。

人の声高な話し声や、ラジオの歌声、雑踏の賑やかな孤独が、

詩人を流浪させる。青い煙が、苦痛の音楽であるみたいに。

神経の先端を晒す。火照ってるんだ、不意に思い出す何かで、狂う。

弦操呪牙――。

カオス・ストリング……………。

そして時折、故郷の空を想像させる――。

どんよりと曇った魚のような眼をしている。

ひれ

眼は、病人のようにどんよりとして、銀色の領巾を見せるだろうか。

無作法に弾くピアノの音にも似て、その頼りない音色で、おろおろしながら。

兎が戯れているような、スウプに、美しい線が幾条も見えてくる。

しごき

そこから手拭いに、扱帯に、腰巻まで。

午前の懶うくて、やわらかな陽射しを受けながら根転がり、若草色のベッドで、

まごつ

創痕の塊になる。俺は徘徊してる、空気にも、魚にも、泳ぐという行為にもなれず、

きちがい

癩癩じみてしまう土、滑石粉、セメント…。

ああ、無価値なフルーツアイスの舌ざわりをうけながら、

造物主に向かって、吠える、俺はとんでもない飼い犬——。

（海老のように身体を曲げなよ。）

（詩人、もっと踊りなよ。）

ねえ、恋人だって醜い快感を与えてくれるようになる、早発性痴呆。

胸の中の何かを抑えるように、僕は何かに鮮烈に憧れ、何かに冒瀆的な失望。

多段式ロケットのはずだったのに——。仮面のうえに仮面をかさねる…。

眩しくて腕で遮るが、完全に遮れない陽射しが、僕の寝息やいびきであるみたいに。

はじ

辱を搔かせてやりたい、無責任な混乱の手れん手くだで。

美しい城として知られる、ビジタリアン王国。

高台に位置し、吃驚した顔付きの居住まいを想像させる、監視目的の塔なのか、

わからない——。空を射抜くような砲台…。

凸壁を備えるビジタリアン城。幾何学的な模様に、蝙蝠のような思考が羽搏く。

古色蒼然にして、将棋倒しな世の急ぎ足な風潮のマストを下ろさせてくれる。

門兵と、少し話をし、チップをやって、城内を見学させてもらった。

「どんな詩を書かれるんですか？」

「内緒です。」

詩人は何処の国でも特別な扱いを受ける。

なま しな

そしてこんなに媚めかしい姿態をして、冷淡なほど口数を少なくして、吃って。

詩人と芸術家は感性が違う。本当だろうか、僕にはよくわからない。

才能のない無能な奴ほど、飛び立つ鳥になりたがる。

くっくっく、と僕は笑う。

なんて気持ち悪い奴等なんだろう。

蝶のふりしている、蛾という劣化存在のくせに。

僕は、百二十ほどあるという城を見上げる。

兵士よ、僕は懺悔しよう幻の告解室で！

僕は思った。ああ、なんて面倒臭い建物なんだろう、と。

威厳。権力のプラスアルファ。ああ、権力とは都会の常であった。

そしてその振動は、常に大衆の血と涙と汗で出来た心を粉碎した。

表現は単純な清楚さを沈黙の中で、ディヴェルティメント聖歌合唱する嬉遊曲。

お気楽な天使たちが俺に刺される、でも血が出ない、だから言葉を持たない、笑顔の鈍感さ。

愛をほおぼってる――林檎の味に、背徳的な花も色あればこそ！

門からの通路を抜けると、中庭に出るまで渦巻き状の進入路。ダイナミックな、

衝動の立体交差。ああ、神話的なイメージがそのまま起伏に富んだデザインを実現する。

できうるなら、豆をばらばら落とせ――雨を！ 雨を！

痙攣し硬直する、満ち足りた生活の不思議な花がうまれた魔の刻！  
とき

城の中庭には、歴代の王の銅像が飾られ、表情やしぐさに笑ってしまう。

ねえ、これだけ、デブデブとふとって、どうするの、

何で蠅のように両手をこすりあわせないのか、豚よ。

噴水がすすしげな水音をさせ、僕は、睡い、銀河だ。

でも赤と黄金の縞模様に染めよう。ねえ、と僕は電気接触する空間的なものへと奏でる、

サクソフォン。いい家具や、流行の扮装。宝石。紅茶の時間。

何て歪んでる風習、拳銃をくれ、いますぐ俺が撃つから！

大きな時計の華美。ああ、景観制御装置の中枢にある発砲！

僕は噴水の傍に坐り、幽霊を口説いた。

そこらじゅうにあふれる溶解液に、蛞蝓してくれ、瞼毛を光らせる淑女の無邪気さ。

身体中を震わせて泣け、お前の悲しい話ばかりが俺の渴いた胸を打つ。

表示板がまきもどされてゆく、謀計。眼前の利潤。

黙りこみうなだれた君に、トランプ占いで決めた答えを聞かせてやろうか。

小さな溜息をつきながら、肩肘を寄りかからせる、美形、慰みものよ！

『無政府的な自由思想は、消極的な愚弄だ』

(さようなら植物の破片、さわがしい響きを忘れてゆくポンプの中で。)

水母召――。

ゼラスゴート…………。

――そのまま、古風で、昔馴染みの煉瓦の道を一步々踏み締めながら歩いた。

消化器官としての都市。轍が残っていて、そこに、馬車や、

人びとの蹀音を想像させる。でも何か心許なくて、道行く人に邪見になる。

冷たい心に、モザイクとなりはてて、いつまでも淡い、情念的な回転木馬運動。

でもこんな旧式のセクシュアルに満足できるほど努力する軽い昂奮はないね。

無暗に、頭垢ふけを落としてやりたい。

何かに、無性に呼吸が詰まるんだ、センシティブに――。

小さい波に洗われているような陽射しの中、

俺はいまにも撃ち落とされそうな小鳥たちを見ている。

「ポーカーフェイスのハードボイルドゲーム……」

「ハイジャックできない深い井戸のような地図——」

輪廻転生

ゆふべ見し満月を悔ひるかゞり火の點るとほ

つひぞ一行だせぬ海邑こめかみ皓くひとふみ うみ しろ

天の極、奥津城、深淵の神韻きわみ おくつき しんえん しんいん

弛みなき草のみのち古譚よふるきかたり

噫！ のびやかに魚族遊ぶこともかはらずうるくづおよ

愛は析け渙らす、口漱ぎ、浄化り、鏤を一一わ ち すす きよま いとぐち

いまや白臘とけうせるとくに審らか！はくろう つまび

曰ふ「靈魂とは手綱ひき、扱てものたま たましひ たづな

長劔の如く光り！ 叡智夥しき！つるぎ

火よ！ 一一沙羅曼蛇よ！サラマンダラ

朕を守護せし不動明王よ！われ ふめつのおう

至高情緒の織美、法悦の顫音を聞き給へせんび せんおん

視よ！ 観よ！ 朕、幾多の涙を喰ふ者なり…」われ

されど灯は憤怒りて、性急につぶやけりいきどほ あしばや

恐れ慄へる心の上に 一一萬有は揺れ、コスモス

「偉ひなる、つねに崇むるゝ者よ、汝の胸の裡にあり」おほ あが

朕は闇よりつよき光より生まるゝ傀儡なれど…！わたし あやつり

如何して、如何して一一答へてくれぬ、答へてはくれぬ

ああ、この自嘲こそ崇ぶべき…あざけり とうと

噫一一色青き石鹼の如く嗟嘆くなり…なげ

われ



朕に背負はされし真理のかけを一一ききしか！

かもめ的自由律俳句の世界

なんというのか、つかれたので眠る

夕方すずめ嬢が来た。ねえ、君

お空は青かった、すごかった、びゅばばん、びゅばばん

トニーと言いたくなる夜もあつたらいいなあ

夜、猫を見ると危険だ

いい子は昼寝しない、おやすみぴぐもん、またきて四角

牛の尻尾をみているだけでかもめだ

うさぎをみて、眼をくりくりさせたら、かもめだ

いちょう並木を歩くのが好き

時計を見ずに一日を過ごしてビビる

会社のチャイムをあやつりたい

花屋に行って、遠い目をしなきゃコマシ

ぼく、あそびつかれた

ゆびがかってにうごきだしたらいいなあ

くもよ、ぼくをのせて太陽に行かないで

霊はいる、ただくらはげはかむからいや

そいつはたぶん、黒田です

一生に一度でいいからコマネチをきめたい

ジャンプしたら、おどりたい

ふえをふいたら、コブラだしたい

ねこにあぶらあげ

ねこはめざしをたべません

葉の花畑で蜂にさされたいとおもう

ふざけニヤいで、といたい

ナットで、つい納豆をおもいうかべてしまうなあ

世界中の悲しいことよ、なくなれ

NONSTOPなファミレスに行きたい夜だze

どこかで恋人が死んでると思ったりする

シモネタを話す人は、ぬかなきゃ

ビールの蓋は、歯で！

ショットバーにgunをつけたい誘惑

ガムを噛むのは不良だどォ

トンチンカンなこと仕事時間中ずっと続く

アーウーはふしぎな呪文です

女の子を騙す人はよく笑う

男の子をからかう人は、しつこい

先輩を強要する人はアブない

ゲイはいいけど、うしろはやめてねと言ふ

きょうはすこぶるいい天気でごわすなあ

13 ショートフィルム

雨 雨 ふれ ふれ

雨 雨 ふれ ふれ もつと降れ

蛙が孵るの それは無理

雨 雨 ふれ ふれ はやく降れ

ガッコの体育 いやだから

雨 雨 ふれ ふれ ハタを振れ

赤さげないで 白あげて

雨 雨 ふれ ふれ パンよ降れ

飴をつつむの ほうそうし

うさぎ

うさぎ、夢を見た。

(うさぎ跳びの夢・・・)

たらり、と汗がながれて

めざめる拷問ネ☆

うさぎ、それでも

(夢を見た――)

鹿のように飛び跳ねたい

わたし、短い足がいやよ

しょーと・ふいるむ

瞼の裏にはぐれた夕焼けをさがしている

失明した！ぼくのなかにいる少年は

火事ですとあったあの日から鳴りやまない

鼓動が・・・ぼくの火の見櫓

花火のようにあかるい月の夜の焚き火  
ペンキの缶に蛾がとびこんで・・・

「これから三途の川へいくんだ」と君、  
まるで映画のようで

苦悩よ・・・

一日中、詩のことを  
考えていられたら  
いい！

たとえば、腐った組織で  
適材適所ままならず、  
一生を終えようとも、

精いっぱい努力しよう  
せこそせこ立ち回る生き方  
はできないから

何処か遠くから模範  
として感じられる日、  
それが明日の答え

仕事を一生懸命  
にするのも  
笑われ、怒られるのも

詩だね、と胸を張って  
なんども嘔み締めて  
いられたらしあわせ

好きな仕事はできなくても  
いい！犠牲はぼくだけでいい  
責任と使命さえ、

履き違えていなければ、  
おまえ等が時代を変えるから  
といつも最大限の努力

することは、すてき  
君が僕の誇り  
地道な努力、ぼくの努力

君にすべて渡したい  
あの日のようにいまも  
澄んだ眸をしていたいから

おおきな、おおきな  
夢を見て眠りに就こうよ  
あの日の苦悩よ

9月8日

詩のように変な一日がある  
そんな一日は  
詩を書かなくても  
書いたつもりになる

## 文明讃歌

季節はずれの雨が降った

わかりやすいように

ゆっくりと降った

歯車をとめると雨が止んだ

油をさしているのだ

でも油のにおいがしない

警報が鳴ると

レインコートのフードから

生首がおっこちた

ピーッ！ ふーッ

警備員が日本人だなと言った

電気が足りていない

ジョー— — ク / 雷が

おちてまた過労死した





すべて

運び去る眼のために距離を手繰り

すべて

運び去る眼のために耐えがたく

脈拍を打って

なごり

哀傷の僕たちは余波

くらげ

海月のようにあおざめ

みずがさわぎはじめてつきのひかりにさわった

ふるい蒸気機関車みたい に

微笑み交わす

どこまでいっても桃の芳香がし

巴旦杏がずるずると堕ち

あおむけになった魚のような印象でともる街灯 に

よるのかわのほしがながれていった

ながれていったはざまをたえずゆききしながら

ときめいて

秋はさみしく

沁みいるようにさみしく耽けてゆく

ふかさ

口ごもる深淵 に

まばたきなんかもしないで

織りかけの うす 物を擁いて

心の根はいつでも

水に餓えながら 球状の岩塊

おもいをふかめるようにぬれていくまなじりが

こんなにもかるいぼくのかげのようだった

ねえ

意味のうえの冷たい歌の雪を思い出す

ねえ

意味のうえの冷たい光と影のゆらめきに

盲いた記憶を

機織音で僕の夢を揺さぶり

縛り首になったひとのあたまみたいな

押し花のようなさみしい図形

まほろば

なやましくこわれやすい言葉に

やわらかく身寄りのない思想

とき

みつめる瞬間

もがきながら 炎と化した仮面

みつめられている

煉獄へといまにもゆきそうな車輪の魂

思い切り僕は泣きたくて

光――と…

川――と…

芝生――と…

くちにして……

――さみしさがふってくる

からだのなかを

ながれぼしがふってくる

(さら に)

(そっ と)

……旅

……………旅

――と…

口にしていたのに 夢のいきれに

せせらぎ なみ

水瀬の上品な汀うち際のみじんにしずかにあたる

漣が

散ってゆくだけなのねと

夢遊病にかかっていたねむたげな犁<sup>すき</sup> は

半ば閉じた眼のよう に

ふつうの体温を持っていたやわらかな制度

かんじょうがめぐるおもわせぶりの善悪

(かみさまも お眠り)

(と 手渡された お葉書き)

差し伸べた僕のでのひらを

こんなにも赤くしてみせた

お別れが

色の褪せた卵黄とも

よごれた真珠貝の破片ともおもえてくる

人の出会いのころにまでさかのぼって行って

あのいのちは

あのいのちは

濃く て――

でも本当はあまく て……

霧のような酩酊におもえてくる

うすい影法師をぬぎながらの通り雨

とおく夏の裏側へとむかうポプラ並樹

ちいさすぎてみえない地図のなかの見知らぬ街

眼の中に擴がるあざやかすぎる昨日の夢

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
みょうにさみしいあきのいちにちはレモン

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
みょうにさみしいあきのいちにちはレモン

……雲を

………雲を

——突き破ろうと……している……

ブルース…

嘘……uum…

ジャズ……

ゆれるだけ……

ゆれる……だけ……

haaha… huuhu…

死 それも抽きだしの暗闇

死 それも舵をなくして漾う小舟みたいに

死 それも仮寝の宿で聞いた恋唄

死 それも取りすがれない真っ黒な鴉みたいに

死 それはポスターの貼られた街灯

死 それはわたることのできない横断歩道

死 それはうしろすがたへの風吹かし

死 それは彼女によく似合う喪服

(さら に)

(そっ と)

ときだけがめぐっていった

さみしいかんじょうのおんがく

ねえ あなたへと届いたかしら

みひらいた眼や 鼻や 口みたいに

ひかりがあてられたこのさみしい葉

森もなくて

きつといのちもない

この声や 言葉や 歌は

しろいうなじのようにうつくしいですか

成熟の前にみているとうめいなそらの寒冷紗

一行のがらんとしたくらやみ

もう二度と思いだせないかもしれないくらやみ

空の隙間に覗いていた

あのくらやみにも似ていたくちびる を





ぎざぎざのマフィン 尖った丈の低い岩場に

う

底なしの死の海の中から氷の塊が海豹かび

背中に…薄荷菓子………蜥蜴…

——夏の樹と革のにおりが雲の仮面をつける

スウィンバル

…水晶球！

かみ

ブルー

裳髪をなめらかにとろけるような濤にしなが

ふえ

せんりつ

銜して——いる冷たい水精が…

も

おおうで

嚙下される刹那 漏沙れゆく腕

ほうろう

珙瑯の樹液する！

空ってまだ言わないで、絹の肌ざわり。

僕はまだ鉄格子みたいな空間の盲目的な冷静さだから。

空っていま口づけしないで、いま金の油あびて、

踊り出す、恥ずかしさと照れくささまじえながら、

ざわめく大地のようなこの活動的な景色のざわめく漁り火。

空って怪物の長く静かな寢息、夢の陶醉。

僕は汗と生殖器の匂いをさせて、幼虫的実在するのさ。

空って筏が必要、ジャングルへと向かう海水、

どこまでも続く、この水の世界に、成長の早い蔓となった僕は、

君に巻きつく、でも恐れなくて、この一枚のカーテンがあるから。

空って言って、いま腐った川のような僕の名前を呼んで、

遠い日のあらゆる防御が崩れさる受身の状態でいて。

空ってもっと言って、ほこりっぽい風でめくりあげる、

猛烈な伝染病、悩み事、毎日にむしばまれそうな悪意、

君が歯を剥き出して笑う、不意の未来の出現。

...ビー玉のようにまるい

...ビー玉のようにまるい

音楽の稲妻。

太陽がしめった雲をやぶってひらめく、

蒼白な額の凍て空を。――「至近距離の放尿・・・」

ゆうべの祈りが昇天する、――「至近距離の合成都市・・・」

嫌な出来事が昇天する。

プリーズ・プリーズ・ミー

(アスク・ミー・ホワイ)

LIGHT (を、) 感じる。

インターゾーン (n,o, ) パノラマ的眺望...

〈受刑〉――〈空の表面〉――

――悪魔が来ないように、

その餌食にならないように、

守ってくれるようなあたたかい声。

端正な顔立ちを想像してしまう、uh...

手を延ばせば、声を掴めそうな気がした。

それは葉脈の内部にひそんでいる水のうごめき、

あるいは大空を流れるかるやかな雲を押す風。

プリーズ・プリーズ・ミー

(アスク・ミー・ホワイ)

LIGHT (を、) 感じる。

オタマジャクシの尾のような、

これは (HAA..HAAA...)

エロティックなシステムなのかも知れない、

焰の舌、乱暴に愛撫されているような、「静かな寝息を掻き乱してほしい」...

真っ青な絨毯のうえのはかいのあと、「あなたの釘の残骸が欲しい」...

これは (HAA...HAAA...)

あたらしいヴィジュアルの経過を生む、

セキュリティーは暴力的にこじ開けられ、

性的形態のデザインを革命されてしまう。

透明なやさしい緑色をした瞳...

...宇宙という病魔に侵されている。

プリーズ・プリーズ・ミー

(アスク・ミー・ホワイ)

LIGHT (を、) 感じる。

未分化組織になる弱さ、

ものういやましが次第に落ちて、

わたしは熟柿のようにとろけながら、

眠りの中に入る。視覚という感覚器官、

聴覚という感覚器官に、

桜のしべがちりぢりに浮かんでいる。

台所――浴室――テーブル――

舞って――魔って――摩って――

わたしは、林檎になる。く……ち……づ……け……を……

食べられてしまう。く……ち……づ……け……を……

神経連結――拡張性組織――眼――脳――

その歌を聴き続ける限り、

もうやめられない、軋むこと、

連環すること、結合すること、

出口があたらしい入口になること、

迷路に入ること、

時代という罫にはまること、

はまるほどに…。

プリーズ・プリーズ・ミー

(アスク・ミー・ホワイ)

LIGHT (を、) 感じる。

## 偽装表示をやる人と、やらない人

---

メニュー表示と異なる食材を使う「食材偽装」が、  
全国の少なくとも294のホテルや旅館で行われていたことが、  
朝日新聞の調査でわかった。

――2013/11/28

⇒偽装の常態化についての意見。

→日本人の根強いブランド意識を考え直す問題、

また、背景に中国や、冷凍食品の存在がある。

ピンパンポン、ピンポンパンポン、

『メニュー表示と異なった食材を使用していたことに関する、

お詫びとお知らせ』……。

徳島東急イン（徳島市元町1）の直営レストラン「シャングリ・ラ」が  
国産牛をブランドの「阿波牛」と虚偽表示していた問題で、  
ホテルを運営する東急ホテルズ（東京）は22日、  
調査委員会を設置して行っていた調査の結果を発表した。

――2013/11/23

⇒（シャングリ・ラで調理場の実質的な責任者である男性シェフが、

原価率を下げるために納入業者に国産牛の仕入れを指示してい

たことを認定。組織的な不正は認められなかったとした上で、



「管理体制に不十分な点があった」と結論づけた。)

⇒原価率と管理体制の問題。

→食品偽装の発覚は、内部告発。

- 1、単純な利益を出すためには飲食店はチェーン展開するしかない。
- 2、最高のサービスで美味しい食事を提供してレストランは発展する。
- 3、しかし現実には、家賃、人件費、食材費原価を抑え、  
食材の廃棄をなくすか、である。

――2013/11/24

⇒ホテルと冷凍食品の関係。

→ほとぼりが冷めた段階での公表をしたホテルもあり、

当初は「誤表示はありえない」

ピンパンポン、ピンポンパンポン、

『不当表示なら行政処分ですが、客に誤認させたら刑事罰』。

逃げ回るホテルサイド』……。

食材の虚偽表示問題を受けて改正を検討中の景品表示法を巡り、

消費者庁は22日、改正作業に当たる専門部署を新設した。

現在、同庁しか出せない再発防止を命じる措置命令を

都道府県も出せるようにするため、条文作成などを担う。

改正案は来年の通常国会提出を目指す。

一方、菅義偉官房長官は22日の記者会見で、

老舗ホテルや百貨店で相次いだ食材偽装問題について

「表示への意識改革や監視指導体制の強化について法的措置も含めた実効性のある対応策を速やかにまとめるよう指示した」と明らかにした。

――2013/11/22

⇒偽装問題における法的措置の示唆。

→政治資金のパーティ等の問題もあるので、彼等も、

真面目に取り組むだろう、というのが見方。

⇒（多くのホテルのレストランが、賞を取ったことのあるシェフを雇うことで格を付け、値段を上げている。逆に言えば、無名の経験の少ない料理人では経営が成り立たない。さらに、ソムリエや洗練されたサービスができるウェイターも必要になる。スタッフの教育に時間がかかるため、当然人件費が上がる。そして、食材も鮮度が命のメニューが多く、ロスが出やすい。）

- 1、メニュー虚偽表示は、レストランの経営側が現場に対し単に数字だけを押し付けた結果、生まれた荒業といえる。
- 2、腐ったものを出したり、賞味期限切れに対しては敏感だが、仕入れやメニュー表記などのマネジメントには鈍感である。
- 3、双方の意見を噛み合わせた結果、冷凍食品などが用いられ、虚偽表示の問題へと発展していった。

—2013/11/24

⇒偽装表示の根深いビジネスの問題。

→信用回復には時間がかかるが、

信用される所はそんなへまはしない。

ピンパンポン、ピンポンパンポン、

『伊勢海老じつはほんとはロブスター。』。

ホテル川柳』…………。

## 訴えられそうな時に一番大切なこと

---

A君はZ君より土地を購入した。

A君はかめはめ波はうてないが、家なら建てられるので、

猫の額ほどの庭と掘っ立て小屋のようなものを建てて住んでいたところ、

とある日、Dさんなる人から、

「自分はこの土地に水を供給している水道管の所有者」であり、

「あなたは水道管を使っているので使用料を払え」と催告された。

(A) でも待つて水道管は公共のもののはずです。

ということは、土地内部に水道管があったのですね？

(B) そうだ。だからA君、あなたはわたしに、

お金を支払わなければいけないのだ。

そうなったとあっては、A君、愚痴ります。

Z君に、ひどいじゃないか、

孫悟空になりたかったのに亀仙人みたいじゃないか、と言う。

Z君に確認すると、そんな馬鹿な、いやそうだったのか、

でもその水道管もA君のものであり、それを含めて

あなたに売ったのだから、Dさんに使用料を払う必要はない。

(C) でもこれは権利関係の紛争に見せかけているが、

これは間違いなく、無体財産権に関するトラブル。

(D) この場合、言った言わない、そうだそうではない、  
では、通じない。

(E) 白黒つけるためには権利書を持ってきてほしい。

そして案の定、Dさんにそんなことを言っても、聞く耳持たぬ。

暴力をふるいたい。でもそうすれば、ブタバコ行きである。

必死に我慢。世の中というのは、弁護士や法律ができてから、

ギスギスしてしまったね、と嘆いても、もはや遅いのである人類！

「そんなことはない、その水道管は自分のものだ」と主張を変えない。

それどころか、もし使用料を払わないならば、裁判に訴えろと言ってきた。

濡れ衣かもしれないが、裁判をすると弁護士料がかかる。

(F) でもおさらいしてみよう。Z君、つまり、

僕と君の間には、

このようなトラブルの時にサポートする話し合いはしていない。

前にアパートに住んでいた時に、火災保険の満期の通知が来て、

なんだろうこれと中を開けると、一万四千元を払えと書いてある。

この野郎、お金を貪るつもりか。俺はアパートに住んでいるだけだぞ。許さん。

と思いながら、保険契約の更新がされない状態での事故が増加している、

という脅し文句のようなことを書いてある。許さん。でも、よくよく読むと、

こわいので、一万四千円を出したことが僕にはあった。

そしてZ君は、僕に一万四千円を出すような話し合いをしていない。

(G) ともあれZ君とDさんの意見に食い違いがある。

どちらかが正しいのは明白だが、

万が一、どちらも正しいということも考えられる。

前者なら、契約書を持って裁判所へ。でもこの契約書も存外、

曖昧なものなのではないか、ということも考えられます。

後者の場合、Dさんは罨を張っていたのではないか、と思われる。

友達のいる興信所に酒おごるからよと依頼して、調査してもらうと、

なるほど、このDという奴は前にもこんなことをやったらしい、

裁判にも勝った。つまり、Dさんは、そこに家が建てられるのを待ち、

自分を罨にはめたのだ。法的破壊力。さや抜き。居合抜き。

そして、Dさんは、おもむろに人差し指を立て、

しかし、もし今、使用料を一括で払えば、

過去の使用料についても咎めない。

しかも、今後の使用料についても咎めない。

でも、払わないならその一括金を二倍にして請求する。

(H) 一括で払ってほしいのだろう。ゴタゴタしたくない、

もらっちゃえばこっちのもの、というDさんの思惑が見え隠れ。

また興信所情報で、Dの奴がお金に困ってるのもわかってる。

しかも、自分を含めて数人にこんなことをやってるらしい。

こいつ、ヤクザ屋さんのヒットマンでやっちまおうか。埋めようか。

それとも、自然死がいいですか、とろくでもないことを僕かんがえる。

「おいお前相手が悪かったな、俺はY組の〇〇言うんや。

シャブづけにして、ひいひい言わせたるかい。それともドラム缶に、

コンクリ詰めにして、大阪湾にしずめたるかい！」

と、思わず、言いそうになったが、言わなかった。

(I) 冗談はともかく、一括はきつい、分割にしてください、

と言えは通じそうな状況。頭金なるものを出せば、受け容れてくれそう。

ようは、この人、出せる分だけ貰えば黙るのだ。

(J) いやいや、こんな卑劣な相手に屈することはない。

こんなのは社会における屈辱だ！

裁判だ。いやしかし、冤罪でも懲役喰らったひどい話あるしなあ。

ここは人間我慢というではないか。いやいや、正義ではないか！

(K) もちろん、僕はこんな問題物件を売りつけられたのだから、

Z君にかめはめ波するという裏技もある。これは詐欺である。

妄想でも構わぬ。実はZと、Dは共謀をしているのだ。

刑事事件に発展。おい、貴様、欲張ったな、相手を見んかい、

「大阪湾に愛犬と一緒にしずめたるかい！」

と思わず、言いそうになったが、言わなかった。

実は僕はベジータだったのだ。

いやいや、ふざけている場合ではない。

僕はもちろん、Dにちょっと待ってね、と言ってから、

興信所の友達に、例のあれだけど、と僕は言った。

(L) 「ああ、用意しているよ。絶対に勝てる契約書だろう。

ちゃんと作っておいたよ。百パーセント大丈夫だよ。

しかし、そいつ馬鹿だね、

〇〇に喧嘩売るなんて、ひどい災難だったね。」

(M) 「あと、Y組の〇〇に話しつけといたよ。

若い衆で、生贄差し出してもいいって。

その代わりに、出所したらシマの一部をあげてやってほしいって。

ほかにも、ハナくらい持たせてやってくれよ、と。まあ、

それについてはいろいろあとで。あと、送っといたよ。」

(N) 電話が終わって、うしろを振り返ると、

Dがガタガタふるえている。話がきこえたらしい。

俺は舌打ちした。俺は話を聞かれるのがとても嫌いだ。

俺は殺人狂ではない。断じて、ヤクザなどという顔ではない。

俺は慈善家であり、いわゆるひとつのビジネスマンである。

「すみませんすみませんすみません！」

(O) 「じゃかしいわ、ガキが。ジャマイカ行ってこんかい」



と言いながらY組の〇〇じゃいといわんばかりに、

ぼこぼこにしばいた。一応、武道派であるから、

大体、指全部折った。貴様、俺のアルマーニが血で汚れたじゃねえか。

と、そこへ、舎弟が到着。

「ひいやああああ、やめて、わああああん！」

即、ワゴン車にのせて拉致。

うるさいから、サイレンサー付きの拳銃で耳撃っちゃった。

夜は僕を――抑えた声にする……。

火照るのをやめた情熱は勝手に鳴っている――

ピアノみたい……に、

時々つかえながら、潮が引いたように、

歩道橋の上でむやみにささげられる――キス……。

化学物質の雨、

原子力の事故、

世界中の何処にも――もう何処にも……

きれいなところなんてないかも知れなくて……。

消え入りそうなくらい、悲しい声が、

僕の器官組織を破壊して――*ゆく*……。

(いま――何が出来るか……)

と、言っても先がどうしても続かなくて嫌になる、

(いま――今までの僕を脱ぎ捨てられ……たら……)

刺すような……痛み……痒み……ひりひりする……

むずむずする…僕の頭痛…

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、  
テーブルに落ちた午後の陽射しみたいに、

、 、 、 、 、 、 、  
コーヒーを求め—ながら…

息を吹き込んでゆく足音が、

嘘のような—頼りない声になって、弱々しく、

胸に余る興奮が、先で割れて…いく—。

臆病な苦い後味を…

青と白のビロードの屑にかえ—て…

胸を締め付けられる—この…感じ…

突発的な感情のうねり…

体重の変化—食習慣の変化…

視力の変化…聴覚の変化…

味覚—触覚…嗅覚の向上…

呼吸を繰り返す巨大な金属のような、どこか冷たい街で、

液状になる、鈍感な、僕と、銅版画になる—思い出…。

原発も、株価も、食も、

、 、 、 、 、 、 、  
どうでもよく—なる…おもえる…、

呑み込んで—無数のひしめきあう不安な要素が…



いま——ここにいる理由に……

つながっている理由に… 笑うんだ——

わらう、翹虫のざわめきのような夜の時代を……

コリコリとした食感。

食管。

触感が苦手です、蛸。

ざっくりとひといきに切る。

剪る。

かめれおんの舌を斬る。

てくすちゃああ、

てくすちゃ、

ああああああああああ、

てくす、てぐすね、

てくすちゃああ、

てぐすちゃああああ、

ああああああ……………。

たこが、ぜりい、になる。

しゅんかん。

どろどろにとけてしまう、

そうぞう、を、する。

カタイ／イイ／

ヤワラ／イイ／

イイ／

ウ／イイ／

「脱衣せる少女にネギを持たせよ！」

という、断言。

「動き回る河童に草履を履かせよ！」

という、断言。

…地面…を…

のたく…って…いる…

鳶…みたい…に…

僕は銃剣を持った薄鐵葉の玩具。

笛を押しこんだまま、

天井につられた、真鍮の円盤を目撃する。

砂のような手触りに似た、処理。

やすり。

個人各々の感覚へとむかう素性正しい、投機。

カタイ／イイ／ゾ／

ヤワラ／イイ／ゾ／

イイ／ゾ／

ス／トコ／ドコ／イ／

ウ／イイ／

ウ／イイ／

ヨ／パラウ／ゾ／

どっと、ちょう、

が、すばらしい、

てくすちゃああ、

てくすちゃ、

ああああああああああ、

てくす、てぐすね、



てくすちゃああ、

てぐすちゃあああああ、

ああああああ……………。

てくてく、あるくぞ、てくすと、

てくすと・てくすちゃあ、

てくてく、あるくぞ、

でゅくらすじゃあ、

でゅくらすじゃあ——。

初夏の水分を含んだ、凧、

浮かぶもの、

まつろはわぬもの、落ちゆきにし——。

彼は戻ってきた、

彼は戻ってきた椅子の上に、

彼は戻ってきたふくよかな背中に、

うなぎのような皺の寄り方をさせたシャツで、

ネオンサインの雨を浴びた極彩色の心で、

折り鶴みたいに、戻ってきた、

ぺらぺらした白紙を持って、

溺れる人間の藁よりも藁の手を持って、

彼は首と頭をどこかしらにほうり投げながら、

座る、かれはもどってきた、

かれはもどってきた。

三次元空間上のオブジェクトにテクスチャを貼り付ける。

滅亡後の世界を描いた廃墟が目の前に見えてくる。

## 顔が雨に溶けていく

---

会話の盗み聞き。

視界の届かない場所である中華料理店のうらがわにまわって、

物音や気配を探って、

失敗したら電柱に激突する！

酔っぱらいのふりをする！

いったいこの人なにしてるんだろうと見つかったら思われるが、

安全確認をしたりしながら、死亡や永続的発狂の一手手前で、

聴く。ラヴクラフトの幻夢境——…。

「…（がやがや）…」

「——いやだから、あのニポンジン、ダメダヨ…ダメダメネ…ネ…」

「…（中国語わからないから解読不能）…」

「…（がやがや）…」

ある人は滑稽な身振りで、

爆弾や毒ガスを自作するようなテロリストプレイ。

グレートオールドワン

旧支配者な戦争のあと、

白いぼかし模様の黄昏があった。

ネジやボルトが打ち寄せる浜辺で、

リアリズムと機械主義が織り交ざったような詩がある。

極右や極左の活動家や革命家、オカルティスト、

クイックスタート…

われわれの経済成長の終わりが、隣の国の経済成長の導火線。

資本主義でしょ、それ、資本主義でしょ、

インターネットでしょ、インターネットでしょ…。

ある人は幸運に恵まれた、

うす緑いろの空間のなかで咲いた白い花のように、

ある人はかもめの嘴のような鼻をして、

脳が筋肉になったということを単細胞というなら、

脳が七福神ようは脂肪だらけになり、

黒ウーロン茶でも中和しきれず、

気がつけば犬の鼻のように汗に濡れ。

ある人は向日葵よりも明るく、まぶしく、

海へと傾斜した丘へと向かう真昼のように、

両腕をひろげながらジャンプする軽快さ！

「…（がやがや）…」

「…（あいつ、なにしてるのかな）…」

「…（げんきにしてるのかな）…」

「…（がやがや）…」

窓ガラスにおしつけられたような鼻のような気分で、

シナリオなき道に僕は来る。

押さえ込んでいた呼吸がミモザの花の香になる、

僕を転倒させる、肉体的に傷つける、香水となる、

早口でしゃべりつづける君、

いつまでも自分のことが好きな君たちだけど、

茶化してない、

悪魔崇拝や魔女信仰、

文明への理解、

が、かたむきかたむき遠ざかってゆく僕の鎖国！

迂るように軽々とながれてゆく声や言葉に、

多分、僕における君たちが、

すごくいい奴ばかりだったからかもしれないけど。

『フレンドリー』と、

『馴れ馴れしい』は違う。

でも――。

でも……………。

きっと――。

『フレンドリー』は、

『波打つときのしな』…。

……ときどき、ぼくはかんがえる、

一緒に夜通し飲んでしたこととか、

僕の話をちゃんと聞いてくれたこととか、

人間と人間って、

分かり合えないこともあるけど、

言葉じゃなくて、心かも知れないって、

そう気づき始めた最初だったから――。

ねえ、僕は知ってるよ、僕は一步間違えば、葡萄酒や、ビールや、

そういうものに祈りを捧げる聖職者だったってこと。

聖なる光が知られているけれど、本当かい、都市は、いつだって、

アンデッド化の毒を注入する、棘……。

死亡、発狂の危険と常に隣り合わせ――。

キャラ付けのためのフレーバーのためのロスト的設定。あるいは接近。

学名、ホモ・サピエンス。ヒト科ヒト亜科に属する動物。

驚くほどあっけなく死ぬ、だからこそやさしく春がゆらいで――いる……。

でも、気がついたら、ひとりになって、青は死んで、

誰も信用できなくなって、

異次元に棲み、絶え間無く動いている、奇妙で幾何学的な存在。

霜降りのように、紗の幕のように、大地の内部の巨大な寂寞のように。

ねえ、昼も夜も、波の音しかきこえない、そんな場所で、

僕は綱が切れたような気持ちを持って余していたんだ、

嫌なことが、ほんとうにほんとうに、たくさんあって――。

『闇に囁く』…、

と――。

と……………。

『過度なメタプレイにおける停滞』…。

でも――。

でも……………。

きっと――。

『時間』は、

『見てはいけないものまで見てしまう』…。

シャガールの回転、

ナポレオンの脱出！

愛想よく振舞うキャラクタープレイに飽きたら、

自虐的に布団噛むしかないの、マウスピースやガム噛むの？

サブマシンガンで白く長い傷を撃つの！

二連式ショットガンで！ ねえ！

真っ赤な動脈にすみれのような静脈を探すの！

ショートキャンペーン、

ロングキャンペーン、

ルールブック…。

内臓と脳のみが半永久的に生き続ける呪いをかけられたような夜、

そっと駐車場へまわって、

車や自転車やオートバイの確認をして、

ひかりながらへだてられている場所を想像する。

愛というスタンダードだけじゃ生きていけないよ、

愛を一番多く口にする詩人が心の底から恥じてそう言うんだ、

犬が無機物の塊に見えるし、

鳴き声が風の通るような音に聞こえる！

人間をもてあそぶような自虐の裏側の集合的な意識の血管！

黴に似て陰気な、本当にどうしようもない暗さが僕の中にあるような時、

僕の心臓が瀕死の人間のくちびるのようにふくれあがり、

鼻はひとつのアダプターを差し込むコンセントになれないとき、

眼は、蠅や蛾しかもとめないとき、

数時間しか気持ちがのぼらない、そんな日は、

僕は中華料理店のうらがわへ出掛ける。



街。商店の並ぶにぎやかな場所。

そいつが俺に《過去の観念》を与える。

それが視線に、雷光の如きひらめきを与える。

はてなく、終わりのないものを――。

もはや、 懺悔が語られることはなく、鞭撻が揺れることも、

とりたててない、

千言万句いっそうに無益な、不躰な、遣る瀬無い、

すでに秩序を与えてくれているところの結合の市街の美しい極光。街。

究極の飢餓。

あるいは結論的な食欲と排泄。

裁判所に超有名なDJが行く。

芸能人が撮影現場で人だかりを作っている、街。

村おこしの取組みと、過疎化。

俺が何かを言ってもそいつは《過去の観念》に過ぎない、

ブルドーザーのように平坦にされる、

秘すべきことも、いたく過ぎぬるは罪になるにこそ。

固有の街でも、通りすがりの懐かしい、街。

そこに飲食店のアーケードがある。

商店街、デパート。どんな人間にも秘密があるということが、

語られざる哲学を増やしている住宅や商店が多く人口が密集している所。

微細な凹凸パターンが形成された誘導体の、

大量生産方法としての都会。街。

体系化された科学の密集地。

科学という魔法であたらしい呪文の如き方程式をつくりだす、街。

混凝土の道路があり、電信柱があり、電線がある。

増える期待/進む赤。

*hazard。*

よしんば、それが無意識領域の産物であっても。

地方政府が自律的に政策選択を行えば、

再分配政策を実施することが困難になる、とか、

開発政策を実施した場合に流入してくるのは、

多くが専門・熟練労働者などのホワイトカラー層という、街。

識別であり選択をする自由な権利が、あたらしい関係の、

都市緑化計画が企てられている、街。

でもそれも《過去の観念》に過ぎない、

電光掲示板には今日も死者たちの眩きが溢れ、

救済が忘れてゆく。

——平気で黙りたい間、黙っていればいいはずなのに、

年齢が、職業がそれを許さない、街。

可視のものはみな不可視のものになる、

それが欲望の生活を作っていると看破しても君は信じるだろう。

だからこそだよ、

諂うものの享楽主義的態度を笑うな。しかし見下せ、

されどそれを賢過ぎて愚かな、ということだと思うな。笑え、街。

ふつかよい

俺は宿酔になって液状化するか、スライムになる。

そこは使い道のない波の絵が至る所に飾られているような街。

ドレスの長い裾を引いて夜の森の奥へゆっくり歩み去る憂鬱が蟻地獄とも、

なかんずく死へと誘うという意味では機関銃の響きとも思えてくる、街。

おいで、3Dイメージの未来都市。

コインランドリーで洗剤を買いながら、こんなの別に、

買ってきた方が安いんじゃないか、と思った僕の不思議な街。

料理だってレストランで喰わなくたっていいんじゃないか、街。

焼き肉食べ放題だって肉を網で焼いているだけで、

果てしなく食えるわけじゃないし相撲力士になるわけじゃないだろ、街。

でもそれもまた、《過去の観念》に過ぎない、

油断のならぬ世の中に殊更に見せない素直な気持ちで、

数千枚からたった一枚の写真を選ぶ。

*choosing from images stream.*

「あらゆるものが美しく見えるのだ…！」

「見えなければそれは嘘なのだ…！」

芽吹く蒼/太陽。照明燈-白熱灯-電球。配線-接続性。

ねずみ花火さ、導火線が伸びているのさはてしなくどこまでも…！

やがて鳥も虫も、人がひとりも歩いていない真っ暗闇の時間帯の街。

詳細を捕えるように、蛍狩りをしよう。

俺は栄養ドリンクを飲みながら、人類の秘密とか、社会の罪、

己自身が感じている孤独や無常を歌っている。

でもそれもわかっているだろ、ああ、わかっているだろうね、

そう、それもひとつの《過去の観念》。

近頃わかってきた、

輪郭に同化すると意志があやふやになる。

戦うことをあらかじめ拒絶している燃焼力が、

サーバー室内部へと沈潜する知恵の輪。脳。

再創造する力のない思考は正解に辿り着ける時まで、不安に襲われる。

はめ歯歯車-テクノロジー。

病気でも負け犬でも根性がなくても軌道がある、

まるで、とても綺麗に回る無人のメリーゴーランド。

絶対に聞けてはいけない扉のように、いつも何かが象徴的に隠されている。

夢のように作られてゆく空白――

その配置や全体の構成といったものを理解しつつも、

音楽や、今噂のスイーツを食べてみても、

話題の映画に興味を持とうとしても何か足りない。

そしてそれが自分自身の欲望の否定である時、

俺は不意に気付く。俺は高尚なのか！ 否！

知的なのか、特権階級なのか、

難解さとは、晦渋なのか！ 否！ 否！

文明は大いなる他人づくり。

うすっぺらく、みんなと仲良くしながら、

昨日も明日の約束を忘却する――

世は己に向かう空しい紙の如し……。

文明を一つの深淵に比したいと思う世界各国の主要都市で、

絶望的なニュースが相次ぐ中、何処か上の空のまま、

精子と卵原形質膜の融合の図式。

原始的世界の草原に封印される言語。音楽。舞踊。

そんなことを考えて――いたら……

本当に見物人を退屈させない交通所だな、この街。

複雑な屈折が情報のうなじをつくりだし、

ゆかりというくちびるを生みだす。

でも月曜日は最悪で、マイケルジャクソンが生き返りでもしない限り、

この気持ちは変わらない。同時代に生きる人は、

諦めているのか、大人ぶって受け容れているのか大体同意見のようだ。

とじようまれよ、とこしえ――に……。

主観的な余白が己を厭ふ。

ふかいむらさきのぜいたくなふくらはぎ。

文字がバラバラになったような壊れた椅子のうえに座れないまま、

*binary stream* の中へと消えていく。

そう、それもひとつの《過去の観念》。

自分自身の謎の叢林のうえに、ふわふわの眠りがシャボン玉のように降る時、

不思議な図書館-宮殿-王国へとつながっているのだ。

光がいたるところに照って、影はくっきりとむしろ鮮明に見えた！

まがりなりとも、収まりがつく世の中の、層また層と、

境界のまた境界へと有それも無なのかわからない世界へと。

否、自我の生成と消滅をつかさどる暗黒の領土、魂の入り口と出口へと。

光と色と影とがたくみに配分される。

そしてそれを、誰にも止めることはできない夢という機能なのだとすれば、

染色体-ゲノム-遺伝学は人工知能プログラムの作成を支援する環境。

*blue cyberspace* の海へ、と。

それがこんなふうに見えるものだと、俺もかつて考えたこともなかった。

意識のなかに二つもしくは数個の考えが同時に存在することによって、こうだ、

ゲームや漫画がことごとくリアルな主体を隠蔽した末の精神風景に思えてくる。

ある人は面白くておかしい舞台を展開していると思う。

でも、実態はその理論と応用が負の法則の方へと、

あるいは、バランスの方へと働くこともある。

それが「手」でも「指先」でも、いい――

それが「髪」でも、いい……

何かについて考えている男性ロボット/女性ロボット。

疑問ばかりが、増えていく。煙は永遠にたちのぼってゆく、

迷いが道を探し続けているみたいに。ある瞬間は、とても幸せだし、

満たされた気持ちになる。でも数秒後には、

どうして何度も確かめたくなるのだろうと唇を噛んでいる自分を見つける。

――でも俺の中の多様性を持った性格を宇宙的氾濫と呼ぶな！

混沌と言うな！

俺はただ、もっと知りたいだけだ、嘘も本当も、

支配的なシステムの中の退化であり進化であるみたいに！

魔法少女にアンドロイド、RPG、宇宙空間の旅に、タイムスリップ。

エイリアンとの格闘。空想はより肉づけされ、現実的になっていって、

それは大昔からすれば大航海時代みたいに、

胸がワクワクするようなことのはずなのに、なんでだろう。

ふと、寂しくなる。悲しくなる。

このままでいいのだろうか、と怖くなる。

そう、それもひとつの《過去の観念》。

看板に鍍金を光らせているように感じる俺が、

博愛主義者になれるわけもない！

万物を操る空虚の中に、またもや、爆発。物事を考える上での立場とは、  
事に臨んだ時の心の持ち方なんだろうか。モダニズム、ダダイズム、  
シュールレアリスム、呼び方は違えど、肩書きは変わらない、  
だからちょっとした違和感くらいで歴史に既視観をいだいてしまうんだ！

人間の注意力の限界とは、構造や、  
それを支え得る観察への忍耐力――。

金融マンはツインタワーに張った綱渡りのようなもの。ビジネスって、  
国家予算って、ああ、都市を、国を、  
支配しようとするものはその規模がどんどん大きくなり、負荷が増え、  
それを放棄した時の社会的な制裁も大きくなる。

まのあたりに見るような、生き生きとした、  
躍如たる都会のシャープな剃刀の切れ味がその時は鋭利というほかないほど、  
クリティカルな破壊力を秘めている。処理装置の、街。

僕等は *keyboard ball*。

形成するリズムやイメージの飛躍や余白の効用。

――俺は、夜の水になりたい。

……俺は、夜の風になりたい。

夜は孤独の始まりだ。

夢遊する銀河の埃を掻き集めたあとみたいに、ひとりぼっちになる。

迷子になろう！ なれ！



聞こえもせず見えもしないものが後ろにあって、

魂は鳥のように遠くの地へと飛ぶ、抒情的な衝動を炸裂させる、街。

おのずからなる秩序の虚無的否定。それでも、

咽喉に歴史が数字や文字として詰まっている。

階級性-コードとしての僕等は街を尋ねあぐんでいる天使なのかも知れない。

でもそれも《過去の観念》に過ぎない、

権限付与-同一であることの認識-指紋。石油採掘装置とポンプの輪郭。

革衣装を着ているようなふかきふかき闇。静止衛星。

現に見ているもの、聞いているもの、触れているものなどにも作用する、

オリエンタルなホテルの内部で昇降機が闇へと向かって沈んでゆく。

工場、ビルディング、パン屋。青が消える、ジャズが消える。

気の狂った馬が一枚の落ち葉のように揺れながら走り、

やがてフェラーリの形におさまっていくみたいに、街が轟音をあげる！

## それでどうした

---

空に月がありやがりそれでどうした

目の前にはホテルの文字が見えてそれでどうした

芯をちぢめたランプのような感傷があって

ナトリウム光線のように貯金箱の中身を考え

昔野球でもらった

金色のメダルは実家にあってそれでどうした

どうもしないがそれでどうした

欲張りな天使が悪魔になってゆくのが都会の魅力

いやいや所詮はそれも小銭だよと

レトリックしてだからどうした

だからどうしたそれでどうした

四階って風が気持ちいい

俯瞰せば墓場だから妙に身が改まる

でももしここで幽霊が出たら成仏してないぜ

ということになるな

その場合寺の奴に文句言いに行こうな

そうだなそれでどうした

幽霊どうしたどうなんだ

いなかった出なかったなんだよ期待してたのに

困るじゃないか観音開きのような第六感！

蒼ざめたシャボン玉にして

ガラスのようにデリケートな詩人の

僕が困るじゃないがいやいや誰も思っていない

それがどうしたそれでどうしたって言うんだ

それにしても緑少ないね

いい墓場ってのは寡婦のように

きれいな緑をたくさん持っているのだ

都会だから無茶言うな

無茶言うなお茶漬け食べるな！

ああまた誰かに笑われてるような気がする

芸人なんだろ

はいもちろんそうです

大体詩人なんて芸人兼職人じゃねえですかい

おどけてふざけてわらわせて

あるいはにもしもになんとか！

退屈な時間だな

でもすぐに眠ったよ

親指の指紋はそれでも残ってた

昼の太陽のイメージが

一日の馬鹿馬鹿しい気分をどうした  
それでどうしただからどうした  
人生ってところやすいものだね  
こんなこと毎日くりかえしてたら  
きっと僕は駄目になっちゃうだろうな  
頹廃とか墮落ってすぐ傍にある  
でも誰もそんなことをのぞんでいないのに  
自分をいためつけるような癖が  
やめられないそれでどうした  
笑ってるおどけてるそれがどうしたんだ  
四階のドア付近で  
夜に走る車を見ていた  
夜に走るものはどこか不安でたよりない  
金の指輪を探したって見つからないよ  
愛なんか絶対見つからないよ  
餓えたライオンはだからさみしいんだよ  
ここはまるで砂漠のようだって！  
地上をのぞきおろしながら  
悪趣味な神様の気持ちを垣間見たりする  
ああ何処まで続くのだこの文章はどうした  
そこまで書いておいてどこをどうする

それがどうした何もかもどうでもいいのにどうした

膿んだ創口とハードボイルドきめても

妙に決まらないのは十月がくせものだから？

みんなアドベンチャーしたい

冒険したい

どこかへ連れ去ってくれる何かを期待してる

政治を見ていて楽しいって根本どこかおかしいよ

でもああいう重力にひきずられてしまう人もいる

だからサイダーにブランデーがやめられない

煉瓦の粉のような

情熱の骨らしきもののイメージがやめられない

恵みぶかいひかりなんかいらぬから街灯ふやせよ

猥褻なことば言う前に本当に猥褻になってみせろよ

やさしくてつよい風が町を洗う

僕の膀胱がふくれあがり小便に何度も行く

腐りかけたトマトみたいな脳味噌あるいは心臓が

ポールギルバートの歌をおもいだしている

そんなにおまえ日本好きなのか

俺も好きだぜジャポニカ学習帳！

そうか日本が好きか

日本人はやさしくて思いやりがあるか

中国から来た友達と言う

魔法にかけられたようにゆっくりと僕は言う

鼻の穴が突然あいたみたいに鼻息は荒くなる

でもそうだなそれでどうした

どうもしないよどうしたっていうんだそれで

装甲車の残骸

光の矢の残骸

都市のようなものの残骸

そんな殺人的なイメージを胸に

沈黙の果実がえいえんに甘くてつめたいことを

かんがえたりする

思い悩んだりする僕は

内気な信号だよと言い

追憶の交差点だよと言い

無数の爪をのばしまくるスナイパー？

爪のばすスナイパーがいるか

それを言うならさしづめ…

さしづめ…

あ言葉がでてこないそれでどうした

それもどうしようもないどうしたんだ

空に月がありやがりそれでどうした

目の前にはホテルの文字が見えてそれでどうした

a) 激しく吹く風。強く吹く風。はげしい風。暴風。烈風。

b) 激しく荒れ狂う風の吹く雨。暴風雨。

c) (比喩として) 事件や騒ぎ。また、感情のゆれ。

\*

そよ風、微風、軟風、追い風、追手、

順風、向かい風、逆風、春風、東風、

和風、恵風、洋風、陽風、夏風、南風、

炎風、烈風、秋風、西風、涼風、木枯らし、

冬風、北風、寒風、朔風、陰風、朝風、

夕風、夜風、松風、潮風

\*

手術中の血を絶えず洗い落とすような水の音がきこえる。

そこからだ、と理性が言う。

玉突き台を指して言う。

\*



奇跡のようにゆるゆると運ばれてゆくとき、

動脈のように浮かびあがる、仄暗く、頑なに、風。

それは冷たい花なのに、

くちづけのようなつめたさなのに、

木立や、川や、鳥のくちずさむ唄にさえも、

美しい印象を残してしまう。

\*

困魏救趙。

声東擊西。

借刀殺人。

\*

横隔膜に触れる鍵裂き。

うぶげが剣のように反る。

黝い手で琵琶を抱くいにしえの日没が、

いま、ジャムの壘を割ってしまう。

ふしぎな化学変化を起こす鍵裂き。

白い羽虫まで大きく青く紅色に突出する。

\*

ナイチンゲールが言った。

「ねえ、声が出ないわ。」

この話には二つおかしいことがある。

鳥が喋れないことと、

鳥がそれでも言葉を喋っていることである。

\*

人の心はお金で買えるだろうか？

もちろん、買えない。

だが、会社がしていることはつまりこれである。

ではお金とは何なのか。

それは不幸にも糊がきいていない紙の姿であり、

風が海をはなれた時の挫折である。

\*

たとえばアルコールは、夢の中で、

抑圧しているものを示唆し、

現実世界における対立の溶解を求める。

\*

クローン人間を作ろうとするのが、

エゴイスティックな欲望でなくって何だというんだ？

\*

うう、寒い、なんでこの風はこんなに冷たく、

私を凍えさせようとするんだ、

外側を向いているようで内側へと向かっている、

均整がとれているようで、そのじつ、不調和な神の舌。

\*

森林破壊。

地球温暖化。

オゾン層破壊。

ヒートアイランド現象。

核廃棄物に核兵器。

戦争。

テロリズム。

\*

ジャングルジムへと吹き抜けてゆく、

燻されたアスファルトの風。

赤いパイプでも通ってきたのか、

黒いラインをシースルーしたのか。

\*

九月十一日が、

警察相談の日だって知ってた？

アルゼンチンでは、

教師の日。

もちろん、

同時多発テロの日だよ。

洗濯機などというものの……

脱水の時の……

ガタガタ、ピシャン、グオングオンガウウィーン、

という音を聞く時に……

各工程の途中で止まった場合は、

エラーコードを見て下さい。

——見るよ。

……見る。

でも、跳ね返ってゆかねばならない、

ぼくは、カメレオンだから、

いろがらすのはへんを、

ふりおとしてやらなくてはいけない。

（誰かが作ったルールの中で、

各工程の途中で止まった場合は、

エラーコードを見て下さい。)

すすきの穂が揺れる…… し……

紫陽花みたいにゆれている花がある…… し…

――洗剤というもののやさしい匂いを嗅ぎ、

なぜかいつも、魔女の宅急便。

キーワードは『やさしさ』と『独身生活』…

「校舎の屋根にぱらぱらと雨の降る音を想像しながら、

詩集を読んでいると、何だか楽しい。」

「詩を想像していると、

口や、眼や、鼻孔の中に、

見知らぬ世界のなにかしらがはいつてくる。」

(炊飯器のピンピロピンピロピなどという機械音に、

食欲を刺激されるパブロフの犬！

各工程の途中で止まった場合は、

エラーコードを見て下さい。)

日／没

だ／よ／と／

あ／な／た／

吸い込まれてゆく…… ね ……………

そして急にほほえんでいる…… し ……

香油のごとくにおやかな午後は、

は、保守容易性テンダーネス。

黒い瞳のなかにイルカの鳴き声を想像するわれわれは、

は、保守容易性テンダーネス。

## あかるい鍵盤にふれるように

---

鱚の缶詰のような気持ちが眉根を聳めさせ唇を噛ませて血を滲ませる。

昔から今へ流れてゆく時代にあっても残り続ける蜘蛛の巣から星がめぐる。僕は照れながら真剣

つりぼりぐも

に願う。釣状巻雲からくさった海藻のような雨が降る。そして僕は鉛だった。だから、消しゴムが

必要だった。新しいことを始めるために古いものは邪魔だったから、光のしずまりかけた波の上を

僕は液体となってめぐる。橋杭にあたる風や波みたいに、伝えたいことが増えてゆく黒板に文字が

どんどん増えてゆく。

傲慢だった、と欠伸を洩らしても、ふざけたりしても、

脳天に皮下注射器の突き刺さる瞬間の破裂と膨張――・・・。

土器の形成をしよう。蝉しぐれのような読経の声に帯のようになろう。激しく音を立てて、通奏

低音が、柏節曲調の蜈蚣にふれているアレグロ。太陽や月のようにならぬ。すみやかな変幻。きつ

と、蛇。くれないめの割れ目が覗く、火。永遠のナイフ、千のナイフ、ほらもう骸骨の林が見えて

くる。コンクリート、アスファルトに封印された土の声が時間という檻の中にとじこめられた獣を

想像させる。ドラムが鳴る、シャンデリアがかがやく。



「僕はごめんだよ——勇者の剣を作ればいい！」

……もうマクドナルドのマックシェイクにストローをつきたてて、すごい勢いで飲んでおどけ

てる僕に戻りたくない。意味もないのに本だけを読むしかなかった図書館にも行かない。巨大な棺

のようだったと不安を語っている時代よりも、揺らぐ蠟燭という比喻よりも、どんな機関銃に狙い

撃ちされるよりも、自然と赤錆びてしまう鉄の階段よりも、もっと、手錠を掛けられていた僕の方

が深刻だ。もう真夜中にブランコに乗らない。砂場の傍に腰掛けて石川啄木ごっこもしない。彫刻

刀を持ってベンチに切り付ける朔太郎ごっこもやらない。ここは海の突堤。波が、潮騒が、身体中

にくまなく行き渡ることができる唯一の場所。

「光線銃を持ってくれ、友よ！」

若者のすさまじい笑い声、犬の間抜けなあくび、酔っぱらいの泣き声、

もう早く眠りから覚めて、袖をめくって、春を迎えに行きたいのさ——……。

誰も来ないからなんて行っちゃ駄目だよ、本当に孤独になってしまうよ。

愛がないなんて嘘でも言っちゃ駄目さ、忘れたら思い出せばいい！

心からしたいこと、やりたいことを思いっきりやってそれで失敗したって、

それが僕のキャリアになるよ。

僕の孤独じゃなくて、すべての愛に捧げられた歴史となるよ。

――世の中は知らぬ間に狂っていたみたいに思っているけど、絨毯は色とりどり。蚊の合唱隊だ

としたって、それが溺れた人びとの霊だとしたって、僕の孤独な絶叫は必ず君の耳に届く。才能を

恐れちゃ駄目さ。力を信じなくちゃ駄目さ。駄目なことを言う奴や、自分で何にも出来ないって決

めつけてる奴に耳を貸しちゃ駄目さ。冬の雪がまだ残ってるとしてもいい。永久凍土が、僕の心臓

にあるとしてもいい。すべてがなくなってしまうかも知れない世界で、プレイするのは、ゲームじ

ゃなくて、人生。世界をつなぐ、まったく新しい橋桁。みんながのけ者にした、愛をうしなっ

まった世界で、まるで銀河系の端っこまで来たみたいだっていう君よ、あるんだ、あるんだ、僕は

その美しい世界を、この魂とともに作ろうと思う。それが世界平和だよ。みんなが、ひとりひとり

が気付いて行く最初の一步だよ。川のざわめきにあわせて進もう。夏の夕立ちに濡れながら服を着

替えよう。波のうしろにもまえにもある、海というものの弓なりの魚になろう。

「お嬢さん、恋をするみたいな気持ちで世界の愛になろう」

森のロダンになろうよ、林のなかのピーターラビットになろうよ、

薔薇を育てたりしながら、夜の海をいつまでも追いかけて――…。

ほら、もう黒板の文字は変わってる。

それどころか、のろのろと寄って来た犬みたいに、文字がつくられてる！

何千と駆け抜けてゆくダチヨウだよ！

ごうごうと音を立てながら、果てしなく、進む、流れ星という氷の塊だよ！

そうなんだ、氷なんだ、氷なんだ、つめたくかたくこおりついたものこそが、

実は、愛なんだ、人の魂がそこで立ち止まらずに前に進む時、

それこそが清浄なる白なんだ、神秘の歌なんだ、前へと進む勇気なんだ！

「しりぞいていくのを見つめている、この時代の波——…」

傲慢だった、と欠伸を洩らしても、ふざけたりしても、

脳天に皮下注射器の突き刺さる瞬間の破裂と膨張——…。

## 自由律一行詩 24

---

題：テディ・ベアのぬいぐるみ

私の心はだんだん広がって生きた血を持つに至る

題：ラバー・ダッキー

冷たい水のやうにいつでも同じ温かさ

題：砲撃

ずばずばバン！ 戦車の玩具マトリョーシカを砲撃

題：冬眠カプセル

余光が峻しい連山の樽の底に、水

題：少女マンガ

親代わりだった…過剰なほどの心配性。一人称は「俺様」

題：逆転現象

チョームカツク/あのお眉毛って描いてるんですか？

題：ダンテが這い降りてゆく

電車のさわがしさも 人は、人に、 愛されかたに対する注文

題：千年王国

千年モ贖物（あたたかく埋もれ（とろけ果てしない潜上の夢見

題：素直

集中出店し集客の相乗効果を狙う野心――ぼく、田舎っぺ駐車場が広いべ…

題：素直で優しい少女、好意に不慣れで鈍感

嫌いな食べ物：なし（梨喰え（えー

題：呼出音

P P P P P P / R R R / U U U U U U / D D / I

題：花屋

薄給で酬われる運命、ざんぶと心切な教示、と驚く…僕を手にとつた人

題：客の行き先階を聞き、ボタンを押す箱娘――

ほら地上は、高く翔ぼうとする

題：うしなはれた目的

沖は、) 裂いてる (ひどく渴いた離愁の果て…)

題：孤独な樹と、つめたい椅子

かくれんぼをするここもまた一つの国

題：歩行者天国

歩行者天国がベルトコンベアーに見 / え / る

題：登場人物の微妙な心理の変化

“それって…”何が起ころうと『O×』進行中

題：鳥居を工場の二階の窓から斜め向きに俯瞰す

心狂ふばかりなるヘレン・ケラーの声

題：愛しい人へ

あなたが信じる温か い 夜の しずけ さ

題：しあわせな家族

夏の晴れた青空にゆいつとけてゆけるもう何処にも存在しない

題：他界の扉

ときおりわたしは、ふいの羽音

題：人生の眼

“散弾”のごとき散文的事象 に 夢は、 また 化膿す る

題：ランボー

未生の言語の草叢 堆く積み捨てられた気味の悪い本のかな し み

題：鞆韃（ブランコ）

花になぞらえ、雲にたとえ やまなみ [山脈]はくづれ

題：耳の奥が鳴るような無垢

熱烈な接吻 蛾と、戯れる ほか は、な い

題：自由律一行詩のイメージ

川岸につづく「内部」 石垣にからむ“言語”の・・「影」

題：乱れ舞う蝶

風はまるで あな たの悲し み

題：凍結に至るまでの道

罨にとらえられた欠落感は窓のあかりのやうに

題：11月

稲はもうない、蟪蛄は苦しみを取り除く必要 のな い 世界 へ

題：アンモナイト、恐竜の化石のある博物館

なほ雨、蜂がにぎわつた鍵穴の密葬

題：小さな生きものの中のわたし

ゆつくりと揺らせば、傷口すこし見えるほど破れて

題：明けきらぬ朝

てのひらは蜉蝣 ぎつしりと真珠 胎しつゝある魚卵

題：月のない夜、昨日僕の町に月が明るく輝いていた

痛みはあきらかに無造作に畳まれ



題：沈黙している劇場

出口のない太陽がひしやげた、色彩の夜

題：伊勢神宮

バスに乗っている ツウと 懐深く 森へ

題：王も奴隷もあまた釘を外した

助けて 傷が疼く 折れ た矢の如き、夜迫る

題：九月のうっすらと汗ばむような陽射し

白い歯を見せた *blue, red, green,* (きみは、) 気味のわるい溜息

題：症候群

荷の中を 依然 捜査する 紐は鎖 ほどけば 無数の脚 死への助走

題：準備、プール、協奏曲

何の躊躇いもなくそれはとある深い霧のなか

題：夕映にあしひき

うすれつゝ、うすれつゝ、うすべに

題：高く、高く、高く、高く、

途切れはしない、記憶 レンズ コバルトブルーにうるむ

題；モディリアーニの風景画

葛藤は婚姻なれども夢の冷める帆柱

題：幻視の倒錯

あられもない蛍光灯まもなく白骨が埋もれるだけ

題：まぎれもない脈拍、均衡をつくつていく心臓だ

ジャックマイヨール青い小さな針にきずついたおまへ

題：半円形のパレット

動揺に悲しむな、葉ずえにいくつかの水溜

題：平等の標的

合図の旗が精神的欲求を告げるヒ首のわがまゝな傷口のために

海で泳ぐものは

一人もいない。

幸福 悲劇 理想

に圧倒させ—られながら… (見方、考え方に、無限をつかめ)

物質上の圧迫が、繰返し寄せてくる—猿

のよう

な、狐のような、犬のような、雉のような、理解…

{Gameの効果音／夜な夜な呼ぶ声}

皮膚と眼の色の改革…偉大さとは—  
精神的な衰退、人格破壊…かも知れない…

「とりとめもつかない 墮落 聖なる美の花園

考えろ 大沙漠界 円光を頂く境地で」

それはしずかに

えいえんに—。

…あのかなしみは怠惰

…奥行をぼかした神秘主義

…あのかなしみは掘られた

…彫られた



《そして愚を売って口に糊をした自分の作法とした》

…人生は文学の貧困によって生まれている…

……「感受性は、さまざまに浮かび出でた過去の感想の静止。」……

……「僕は多く読み、多く考え、溜まり水をつくり空を映す」……

ぼ…く…は、い…ま片腹痛い…

お…んなじ…だ、無学…高等芸人…

、、、、、、  
海で泳ぐものは

、、、、、、  
一人もいない。

幸福 悲劇 理想

に圧倒させ—られながら…（見方、考え方に、無限をつかめ）

瞬間的な芸術が、オベリスクでなくても—

いい

と、独断的に、言葉を、刈り尽くせ…

「瞑せよ、拙きButterflyのmotion…」

（ここに、含まれて）—《て、》イ、ル、と…

（神経症患者、世捨て人、泥酔者…）

官能が俗物でもいい・詩でも田でもいい—  
わがままな思想でも、いい…社会観がいかなる歌詠みをつくる…

それはしずかに

えいえんに—。

そしてそんな奴、

— I feel alive- I feel happy ..

そんな奴、 いなかった———のだ。。。

(。。。そんなやつ?)

(石になった、) 鉄——に、なった、な、た..

ウェイターガ磨く (て、) て、 (て、) てえぶるになった...

東洋の海に浮かんでいる 積み木の 石塊が。

脇腹の海をつくりだす。

*I feel sorry for her- I feel like nothing on earth..*

つくりだす! つくり——だ..す。

それはしずかに

えいえんに——。

Uh... かなしいのだ! うつくしいのだ!

Uh... ごまかされよう! うばわれよう!

.....花の盛りは精神の飢渴のように、遠い!

(波間に何を見たのか男) 蠟燭 忘れたかに見える。

(けだもの、圧制者、男) 夏の海 に。

(永劫の水母 が) 遠ざかって いる。

——を“ハイ・アイポイント”または“ロングアイポイント”

——を“芸術家の半生”または“招かれざる客の嘆き”

——を“空を撃ち虚を狙う”または“嘘も本当も綺麗だった人間の汚れの部分”

(さ、) みしいあかり が ぽつんとみえてくる。

..あのかなしみは怠惰

...奥行をぼかした神秘主義

....あのかなしみは掘られた

.....彫られた

.....夢と現実を交えながら

.....あのかなしみは怠惰

それはしずかに

えいえんに——。

そしてそんな奴、

——I feel alive-I feel happy..

そんな奴、 いなかった———のだ..。

(...そんなやつ?)

## ぼんやりする、僕

---

昨日、友達と冷蔵庫を探したのだ。

そしてそれ自体が、時間の水底に沈殿してゆくような出来事だった。

福山の駅に降りて、

ねえ、お城が目の前にある駅なんてすごいでしょね、

なんて誰も言いやしないに違いないが、

いや俺は言うんだが、

愁いに満ちた他人の心のように不思議だった。

うどんの美味さというわけじゃないが、

つい先日冷凍のさぬきうどんに開眼された僕などという生き物は、

結論的に、なにやら失敗し、牛丼屋のうどんを喰ってしまった。

まずいわけじゃないが、いつもそうなんだ、

俺はこういうのを喰いたかったわけじゃない。

でも、昼の時間帯で、それを探すのはくたびれるのでやむをえずさ。

友達の家は、寺の前で、

四階の窓からは墓場が見えた。

ともあれ、色々あったんだが、どうもこう、



真面目に説明する気が起きやしない。

のんびりしてたのは間違いないんだ。

どこかへ行かねばならないと思ったから、公園へ行った、

薔薇がいっぱいの公園。

むかしもそんな機会はあったはずなのに、

薔薇の棘にふれて、ああこいつは痛いなと間抜けに思い、

花がいたんでるのをこの棘のせいじゃないか、と思ったりした。

栄養の回し方が悪い、とか、思ったりした。

大体、僕というやつは、めちゃくちゃなことを言うのだ。

それで、安売りのスーパーへ行って、

パンとか買ったりして、公園で食べた。

友達は、鳩にパンをやったりした。

鳩は、きつつきさせながら、ドリルだ、ハンマアだ、

とでもつぶやくみたいに、あるきながらくびをふりまくり、

しかし、僕はそんなことよりも、

こうして目の前に奴が来ると、ニワトコだなとか、

孔雀みたいだと前思ったことあるけど、ニワトコだな、

と、あらためて思ったりした。

そして、世界はあらかじめ、そんな風な季節らしい感じで、

平和が剥がれ落ちる前のおよおよしていた。

夜になって、冷蔵庫を買いに行こうよ、となった。

僕はアイフォンで、中古のものはないかな、と探した。

最初は、カカドットコムなどというもので、買って、

送ってもらえばよいのではないかとも思ったのだが、

それはさすがに無責任すぎると思い、

だって見たわけじゃないし、壊れても文句言えない、

などという紆余曲折の末、近くのリサイクルショップへ。

そこがまたすごい。

僕は実に客観的意見だが、

リサイクルショップというより、

もはや廃墟一步手前の凄絶さなのである。

ただ、それゆえに、僕はその店がすぐ好きになった。

友達の欲しがる小さな冷蔵庫なんか、

絶対にあるまいと飛躍抜きで、一目見て、

そんなに品揃えよくないからまあないだろうなと思ったが、

とりあえず行った。

われわれはそのような時、

義務と責任の生き物である。

無論なかった。

我々に残ったのは、

定食屋でたまに見かける、

巨大な炊飯器があったという発見だけで、

機会があればそれを買いたいな、

でも使うあてがないな、

でも欲しいなあ、ということくらいだった。

思うに、あのような店は安く引き取ったり、

はたまた処分に困ったものを無料で引き受けている内に、

あのような廃墟になったのではないか、ということだった。

福山は大阪より田舎だと友達は言ったが、

僕の住む町は大阪の中でもとりたてて静かなのだとかえした。

そのあと、大型の電気ショップへ行き、

普通に一万二千元くらいの小型の冷蔵庫が見つかった。

選んだ理由は、ディシペルとかいう冷蔵庫の音だった。

最終的に、ディシペル病がはじまり、

これは二十二だけど、大体十八で、

おっとこいつは十五か、なるほどなるほど、

だからこんなに高いのだなあと非常に、

日曜日に大工するおじさんのような気持ちになっていた。

友達と一緒にそれを自転車に積んで持ち帰った。

どうやったかといえば、自転車の荷台の所に、

ゴム紐とかいいながらカラフルタイトとかいう名前があるが、

じっさいはたんなる紐としかいわない僕、本当に詩人なのかなと、

おもいながら、紐、紐いってて、本当にまずくないか、

とおもいながら、友達じょうずに紐で固定して、

(話は前後するが、実は僕は、この冷蔵庫を、

宅急便よろしく手で運んで行くつもりだったのだが、

仕事場だったら、腰いわすからやめろよと言われそうな場面だが、

大体、明後日だったら届けられるといわれたら、

持ち運んでゆくしかないところはある。)

僕、それをおさえ、

友達、自転車をゆっくりとおした。

こいつ、が、ぎいぎい、なるので、

ぼくは、ななめに、押し込むような感じでささえ、

何でそんな所で変にリアリティーを追及する描写が必要なのか、

ぜんぜんわからないが、紐が、あ、こいつ、また、

紐言ってやがる、でもやっぱり紐だよなあ、紐が！

ななめに交差して、本当はもう一本の紐で固定すれば、

自転車の荷台のキリスト的場面のできあがりって、

キリスト教徒をてきにまわすのやめてください！

もういいや、このままでいこうとなったから、

そのまま、はこんだのである。

しかし、油断すると、ぎいぎい、鳴る。

前述したとおりと、なんで、ミステリー描写するのかわからないが、

四階にあるので、これを手ではこびます。

軽いのです。

ですが、おろす時には、そんなこわれものじゃねえよとおもいつつ、

いちおう、ゆっくり下ろすのです。

昨日、友達と冷蔵庫を探したのだ。

そしてそれ自体が、時間の水底に沈殿してゆくような出来事だった。

などと言いながら、まだ話はつづき、

実は、友達の家洗濯機が止まったのである。

別に自慢するわけでもなんでもなかったのだが、

どうもそういう節が僕がおもうところの僕にあったので、

こういう言い方になるのだが、

そしてそれは別に友達が言ったわけじゃないのだが、

洗濯機が止まるってどういうことなのか、と。

それって壊れているんじゃないか、と。

しかも一回じゃない、一日に何度もである。

でも友達はそれを、いちいち、直すのである。

僕も、手伝った。

アニメを見ながら、お酒をのみ、

ちょっと手伝って、あいよ、と手伝った。

大体僕は嫌だなんてあんまり言ったことがない、

生き物だなあと自省したりしながら。

でも、その時にアイフォンでしらべていて、

冷蔵庫って止まるものなんだなと知ったの。

すごいよね、

全然想像したこともなかった。

たとえば、犬がネギ中毒を起こすなんて、

僕が犬を飼ってたことがあるから知ってるような風に、

ああ、こんな風に生活のリアリティーがあって、

そこでの生活の知識がうまれるんだなあ、

と、ひじょうに感心してしまった。

そこ、感心するようなところ？

いや、大体ぼくのような生き物は、

ちょっと人よりすこしおくられているところがあるのだなあ。

冷蔵庫の値段とか、

洗濯機の値段とかを、

しらべたりしながら、

お金ってすごいなあと思ったりした。

僕はお金ですごく苦労したことがあるから、

お金の話を絶対にしない。

お金の話をする奴も好きじゃない。

そういうところに、僕が卑しいというとき、

たいていの人は僕が高潔な人格と思うかもしれないが、

そうじゃない、

人間はお金の話をするために生まれたわけじゃない、

と、思うことが、あまりにも多すぎたのだ。

まあもちろん、僕の天性の、無邪気さとか、

子供っぽさというものもあるので、

あんまり、めったなことは言えない。

僕はいまでも、砂場であそびたい衝動に駆られ、

こどもなんかができたら、

絶対一緒になって遊んでいると思うのだ。

父親のふりして、おまえ、こどもじゃねえかよ、

という場面を想像して、

いまから心配してどうする、

でも大人になっても子供だし仕方ないじゃんって言う？

昨日、友達と冷蔵庫を探したのだ。

そしてそれ自体が、時間の水底に沈殿してゆくような出来事だった。



バネ、Springがあるから、

素直になれーる…。

弾かれたように、目を見開け、

きれいなものや、うつくしいもの、

さしづめ、はたとよべそうなもの、

それが無分別のまま、

解き放たれてる、

静かな岸——。

ねえ、

そこでは魔力が、

不安定な人生の酔いみたいに、

炸裂する、

そいつが心の窓を明るくも暗くもして、

女を貞淑にも奔放にも——させていて…

こいつが人の脆さ……。

悲しさって奴だよ、と、

訳知り顔で言いたくもなるが——。

愛が特別なものだなんて、嘘だよ、

努力だよ、

やさしいことの核心に、

かならず触れなきゃいけない、

そこに世間の評判とか、

人同士の掟があるから。

でも、からだとからだ、

絹ずれの音をさせるだけで、

情欲よりもさらに醜い、

人の心の醜さを――自由に…でき…る、

そうじゃなきゃ、機械だと思う――。

光のような眩しい白さが生まれる場所で、

悔いや、思い残しがないように、

傷つくことが、恋だったみたいに――。

時が人を変えて――いく…。

あたらしい悲しみを連れて、

僕は長年見てきた砂時計の、

――すなを、ふやしてゆく…

考えている――んだ…

人生を――どう過ごすか…。

己の驕慢を、報酬の計算を、

軽蔑せず、さらにそれを克服せず、

進む大人になるのかい、君は、と――。

真空――。

そこがまっさらな美だとか、

魂を骨抜きにする光や芸術であるとは、

言わな――い……けど…、

繊細なエゴイズムの鎧の隙間から、

ぬけぬけと侵入する…、

愛の諦視を普遍とでも見なさなければ、

恥だ。人生はもっと素晴らしいと思わなければ、

日々が同じことの繰り返しだと諦めていたら、

生きているままの出来事しか感じられない心になってしまう。

本当の疲れとは違うことで生が邪魔になる、

だから色や欲がまったく別の顔を見せ始める。

憎しみを愛し得ないと言うかも知れないけど、

傷を負わない方がいいことみたいに言う人もいるけど、

多く苦しまないことの方が、

人間を駄目にしてることをつとに感じる、

そしてそれが多くの――不幸の始まりで…。

それが多くの――墮落の始まり…。

ねえ、

木々には喜びがあって、

風が生まれたことで葉を鳴らすんだけど、

その揺れうごきが、鳥をおどろかせて、

いま、僕等の前に――。

海があることを暗示的に教える…。

何百年もひそかにかくまわれていた、哲学の中にも、

頭先从爪先まで、何か弱い、

暇と、しかしそれでも処理しきれないものが、

欲望の不可能な熱度を作っている。

哲学はいいよ、初めから、

トリックがあるし、

スローガンみたいなものだから解釈次第だって、

言える。政治や経済と変わらないけど高尚で、

その上、人を小馬鹿にした態度で、

みづから窮地に入ってくれる。

照らし出す炎も、

浮かびあがらせてくれる炎も、

同じことだって気付いたよ。

そして僕は何処まで来たのだろうか、

そして――君は……。

僕は――。

降り注ぐ光の糸を束ねるように、

しずかな悲しみと、

いま、ここにいるという確かなよろこびを、

永久の失恋みたいに、掻きよせる、

肉体がなければ権力もない、

そう言っても差支えがないほど、

盲目的僕等は、孤独の困難に、

人同士の関係を硬化させ、死の匂いを遠ざけ、

玩具や愛着という存在の価値にまで貶める。

占有と偏執、

それが散る花なんだよ、

生きていることの儚さが、

悲しくて苦しいことを、誤魔化そうとしてるんだよ、

と、知りながら、

それも人生の取扱説明書に書かれていそうなことだよと、

想い――ながら……。

バネ、Springがあるから、

くちびるがやわらかいということ、

てのひらがあたたかいということに、

おどろいたりする。

なにか根本的な問題を抱えた、

文学的な愛——だけど…

壊れやすい方がいいのかも知れない、

臃ろで、察することのできない未熟な気持ちの方が、

いいのかも——知れない…。

人生で一人の女を愛しますと誓う愛は気持ち悪すぎるけど、

ああそういうのって、英語の愛とかいうやつが、

軽薄すぎるせいなのかもしれないけど、どっちでもいい、

まあ、それを認めないところの愛が、

思いやりとは皆無で、なにか前世的な執着のようで、

僕は怖い——。

奇跡とは違う、もっと生々しい、

人間とは違う、動物的なドラマ…。

過去は虫のいい話ばかりじゃない、

政治だってそうだろう、

戦争だってそうだろう、

だから人に前世とでも呼べるものがあるとするなら、

すんなり受け入れられなくても理解するしかない、

残酷なものだよ、ドラマツルギーって。

でも、戸惑ったように目を宙に泳がせ、

「あのさ、」

と言っている時は、心地いい。

鋭敏に相手を感じている絶対的な瞬間って、

素晴らしく心地いい。

だって、

「何？」

って、なにか、そちらまで、

そういうのを、どうも、感じてるらしいから。

バネ、Springがあるから、

きらきらとしたものに騙されるんだ、

そんなのは子供だましたよと、

言いたいところだけど、

僕は知っちゃったんだよ、ああ、

人間って心の中のある部分じゃ、

絶対に歳を取らないんだよ、間違いなく、

そうなんだよ、知ったかぶってるだけなんだよ、

だからみんな幸福の追求をするんだよ、

いつまでも自分の幸福を求めている、

でもそれが、もしかしたら、

もっと違う愛になってゆくのかも知れないと、

気付いた瞬間から、人ってもう、

子供のようには振舞えなくなってゆくものだから。

ねえ、

機会があったら、

不意打ちで問いかけてみるつもりだよ、

永遠に人を愛せるか、と。

永遠に人を愛することの始まりが、

どんなにむずかしいことか、

というか、生を超える構造なしに成立しない状態であれ、

仮にそれがそうとは違うと思っているのであれ、

どちらにせよ、有限の愛もそれくらいむずかしい、

人は年老いても美しい場合もあるけど、

多くはそうじゃない場合が多いし、

いやいや、それ以前に心が若さに蓋をかけていることの方が、

圧倒的に多いその問いのはじまりの中で、



僕は考える、

永遠に人を愛せるか、

そんな風に人を理解していけるか、

許していけるか、

分かりあっていけるか、と。



もっと単純に、

ちぢみあがっていたものをていねいに、

(さあ) のぼし、て、のぼし、て、い、っ、て、

(スムーズに、もっと、かるやかに、柔軟に、)

……羽搏く心を思い出せないかな。

うつくしく切り取られている一枚の写真と、みじめな気持ちが、

がんと脳髓を揺さぶり殴るような打撃で、先へ進めない気持ち、

前へとうまく歩き出せないような感じ、気持ちが――

…べつにきょうなんて きまっていないのに

ぼくはきょうも あたらしいおんがくをさがす

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
歯止めがきかない時代の夜の過ごし方。

そよ風に…舞う雨…鏡の中ではきこえないかみなりのひびき…

そよ風に…舞う雨…鏡の中ではきこえないかみなりのひびき…

――ねえ、鉱石質の空に目玉焼きが見える、

(さあ) 金盃と、青い粉と、合唱曲の拡がりのなか、

(スムーズに、もっと、かるやかに、柔軟に、)

パセティックに、ガラスノ棺、

洞窟の神、

星空を知らない、ゆううつにしずむだいちとのさかい、

(さあ) 牛、の、霜振り肉、赤、の、名、残、

(スムーズに、もっと、かるやかに、柔軟に、)

…………不透明になってゆく。

病的な光／奇妙な凸凹／ま／る／で／水銀光線／

汗の玉のしたたり／皺のかよわないうなぎの腹／

(うまくいかないまま先端が折れている爪楊枝…)

(そいつがすべてをresetできる場所に差し込まれたのに——)

(…をオフにできる瞬間、まちがえて、折った。)

(…………を、オフ、に、で、き、る、瞬間。)

——うまくいかないんだ、屋根裏の模型づくり！

——ピンでとめられているような蝶の感じが長く続いて。

——はやく虫の声をききたいよプラネタリウムじゃなくて。





ぼくらはユートピアを探している。

集合的意識における下痢グソ！

グローバリズムとしての下痢グソ！

アクティブ人になった僕の名前は躁とよんでくれ。

ウソオオウ！！！！

「うんこしたいなカレー作ろう」

…うんこ！ うんこ！ うんこ！

と、言いながら、かわいい女の子が走ってゆきます。

表情やしぐさはふつうなのに、言葉だけが変！ というか、やめて！

でも、俺はつい、いとしい恋人のようにそいつを見つめてにんまり。

大便がしたいのだな、あの女！

おお、リフレッシュタイムなんて永遠におとずれないぜ、あの子、

フッ、と僕は思ってしまう中二病。

公園に行くと石をなげられてしまう僕も、

ああいう女の子のために、こんな詩を作る！

「（なんだろう、あのおぞましい言葉を薔薇色にする可愛さ！）」

トレビアーンでグッジョーブな気持ち！

芸能人だってうんこします！

ぶりぶりですよ！ ぶりぶりぎえもん！

旅のはじまりっていうのはいつだってこんな時、

いま、心の中でファブリーズするんだ、消臭力はあるかい、

オーケエエ？

いま、ケツダシ星人になるんだ。

ブリーフにうんこだけはつけちゃいけないぜ、

きいろいオロナミンCのようなものなら可！

いま、僕は下痢グソをかためて、かためて、彫像をつくろう！

その時僕は、下痢グソのロダンと呼ばれてしまう人になるかも知れない。

バナナ状のうんこにあこがれている永遠の不埒と呼ばれてしまうかも知れない。

どんなにすごいものを作っても天才と呼ばれず鬼才とよばれる人になるかもしれない。

それでも巨大で芸術的な巻きグソをつくろう！

感情シャットダウンするんだ、うざい！ きもい！ どこかいけ！

でも、そんなもの、テケテケ団だ！

そんなもの、センスゼロの連中がすること！

だってぼく、巨大な巻きグソを尊敬しているから！

さあいますぐプロフィール画像をうんこにするんだ！

フェイスブックでもラインでも、とりあえず、

検索欄に“うんこ”って文字いれてみるんだ！



女の子のスカートの中を見たいとか、

女の子のおっぱいが大きくてついまじまじとみてしまうとか、

やめなさい、

そんな時僕は巨大な巻きグソについて考えていたい！

人間は正直だ！ おおらかだ！

本当はみんなこんな風に素直でやさしいのだ！

「あ、やめて、石なげないで、宮澤賢治のふりしただけ、ごめん！」

くそう、テケテケ団め、

子供を洗脳しやがって！

ああ、俺は行きたい！

太古の昔からかくされつづけているという、うんこの国。

ぼくはうんこの国へ行きたい。

いま、野原の真ん中に立って、僕はおおきくうでをひろげて、

マーヴィン・ゲイみたいにくうでをひろげてうたいたい、

いつかなくなってしまう、どんなものもこわくなくなってしまう、

だからいまこの瞬間の恥ずかしさなんてすぐ消えてしまう、

「うんこがしたい！」と…。

肉体と魔力の強化、剣術の会得――

アメリカンジョークの上達、エログロネタの強化、

シモネタにブラックユーモアの複雑殺法！

そんなの必要ないよ…フツ、必要ない…

でも自虐的な俺たちに、明日はない！

ファーストフードの店員、薬局、漫画喫茶、

クリーニング屋、ホテルのモアイ像、歯科、眼科、

紳士服、営業アシスタント、消防士、ポリースメンも！

総合受付、レストランバー、パチンコ、コンビニ

コンパニオン、鉄板焼き、カフェ、

ウォーターサーバー営業、ティッシュ配り、

教科書販売という名の倉庫作業も、

出せるのはうんこ。それだけだ、それだけ！

イスがたくさん並べられ、

そしてそれは便器と呼ばれるもので、

そこに座って何かが始まるのを待っている。

そして俺の人生の何かが終わるのを待っている。

小規模なものなので殺傷力はないに等しい。

というか、そもそも殺傷力はないに等しいが、

やるかやられるか！

いや、ただながされてゆくだけのうんこ！

僕はそういう空気になりたい！

なにかが完璧にしぼんでゆきそうな空気になりたい！

「うんこ！ うんこ！ うんこ！」

と言いながら、超二枚目も、すたすた、歩き去ってしまう。

「（なんだろう、あのきわどさを否定するほどの二枚目臭！）」

詩人の魂とか呼ばれる人がものすごいことをぽつりと言った。

「大体、文字なんか全部一緒なわけでしょ、やっぱりフォントだよな。」

# フォント (*font*) 「同じサイズで、 書体デザインの 同じ活字の一揃い」

「えっ？」

(ほんとう) って言ったんじゃないの。

「ぶっちゃけ、文才なんて誰も求めていない気がするし。」

(「 ° □° ) (「 ° □° ) (「 ° □° )

なんでやねん (どないやねん )

やかんやねん (ラカンらねん )

「そうでしょうか。」

「だって、下手くそな詩人はそう思ってる節がある。

どんなに客観的な事実を欠いていても、

自分が優れていると勝手に勘違いする。」

言葉ではなく、フォントの理論。

(「 ° □° ) (「 ° □° ) (「 ° □° )

なんでやねん (どないやねん )

ちゃぶだいひっくりかえすで、やすしやねん

やかんやねん (ラカンらねん )

ちゃぶだいひっくりかえすで、あきもとやすし

a

.....

b

////////////////

c

.....

d

////////////////

///

///

| = G

e

「HIJKLM!」と君は言った

「LMNPOQRSTU!」と僕は言った

「XYZ!」

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ..... (無限に続く。)

———万華鏡になった

§— G = Z

「さんかくじょうぎは、いつまでも、つくえのうえに、おかれていた。」

ないふは、あたらしい、くにを、つくるためにひつようだ。

「さんかくじょうぎは、いつまでも、つくえのうえに、おかれていた。」

ことばは、とざされるといういみで、いきることにひつようだ。

“点”を

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

(( ( (( ( (( (

「石化する味わいというのが解読不能のすべてなのだ。」

「そして——僕の中でそれは蝉の鳴き声の視覚表現なのだ。」

~~~~★

)))

))) ))))

-----

-----

ズレ……て……ゆく……僕等の時間……

“線”を

朝

昼 昼

夜 夜 夜 夜

朝 朝 朝 朝 朝

昼 昼 昼 昼 昼 昼

～～●

『(鍵穴) (鍵穴 (

ミネラルウォーターのPhotography

タイムラグのMIRRORBALL

～～◆

草むらがおびた(しい) )

～～■

み み み み み み

み み み み み み

み み み み み



## 愛のダンス

---

彼女が教えてくれる、

高いビルディング層の凹凸、

その蘚苔類のような生えひろがり、

街全体の騒音の秘密を。

ラウドスピーカー　アァーアァーアアア　…

ねえ、彼女はとっても——とっても…いい人……。

駄目なところや欠点も持ってるけど、

暖かい雨みたいに自然と濡れてやりたくなるんだよ、

僕をからかう茶目っ気のときの甲高い声も、

演技のないじらしい姿も好き、

僕に火を点けて——よ　…。

永久凍土を溶かさせてよ、人の心の固まった厭な気持ちを、

悪意を取り払う、愛してる、好きの呪文を…言って——言って…。

ラウドスピーカー　アァーアァーアアア　…

都市が雲の下に沈む、

文明は隠される、

闇のなか鉢合わせするおかしい男が、

キャンディーの包装紙をひらきながら、

本当の愛を探してる——捜してる…。

、、、、、、、、  
彼女を見ていると、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
明るくて前向きな気持ちになるんだよ、

、、、、、、、、、、、、、、、、  
なれるんだよ、だからいつも、

、、、、、、、、  
なりたいんだよ、

(いつもそう、いつもそう———…)

辛くてどうしようもない日々があればあるほど、

*Shooting star...*

僕は夢を見るよ、死せる快樂の亡霊じゃない——

もう奴隷じゃない、僕がのぞんでる愛のありのままの姿、

*Shooting star...*

*Shooting star...*

彼女が教えてくれる、

ああ、僕にも (*gimmick..gimmick*)

不毛な世界の人の知らない樂園——*が*…。

脳天の内側で爆発する地上への、天界への出口…

*Shooting star...*

星は——すごく綺麗だから…。

もう手のひらに触れたら、隠せない…の——。

ねえもう——この一等星、手放すつもりはないよ。

(白と黒の時代の幕開け)

自分が好きになることでしか、

人を、誰かを、いま目の前にいる君を、

愛せないんだと気付く。

ああ、僕にも (*gimmick..gimmick*)

夜明けが…近づいて…きます…

どこまでも…この気怠さ…ひろげながら…

ゆとりのある秩序で…愛のある…ダンスで…

花の色に…燃え上がります…

喰べて御覧な。

青黄色い蜜柑――。

ほらほら、夕暮れと同じ味がする……。

高く悠やかに投げよう、

脆く傷付きやすい器物うつわのように、

いたましい謎が解き明かされる前に。

ふくよかな頬の魅力、メルヘンの陶醉、

神話的火花。昆虫類？ 魚類？ 両生類？ 爬虫類？

でも三秒だよ、会話を中断して、外へ出て――、

それから……この酸っぱい味……。

奇妙な嫉妬に襲われた指先が、

苦し紛れに潰してみせる、

数学的に分解されることのない不調和な実が、

こんなにも緑色。

\*

うおっ！？ ……何だ、驚かすなよ、

今から撮影するということに――

今更かもしれないが――緊張する……

\*

ジョアンヌが、

「りゅむ。」と言いながら蜜柑を剥いている。

図書館へ入ると、何故かやって来ていたのだ。

管理人さんが、待っていたみたいだよ、と言った。

かたわらの書棚で、リー・マヤが、

足をぱたぱたさせている。

――龍は何でもお見通しなのだ、と思う。

しかし龍というのは、本当に人間より、

気の利いた、マメなやつかもしれないと思う。

「りゅむ、りゅむ。りゅむう！」

にこにこしているジョアンヌは、赤ん坊をおもわせる動きで、

ついに、エベレスト登頂でもするように蜜柑を剥いてしまった…！

まるで北極点に旗でも立てたような誇らしげな顔をして…！

テーブルに、蜜柑とちいさな妖精の、

何とも言えないファンシーな空気が満ちる。

ハムスター台車で走るだな、と思う。

ある日、気付いてみると地球一周分になっている。

ふう、と額の汗をぬぐっているところを、

かもちゃんが、じいっと、見つめている。

かもやん、とぼけた顔をする。

かもやん、時間が止まる。

かもやああああん！

かもやああああん！

なんダ口、ねむたくなってくるな、

崔見術かけるのやめろ！ やめなさい！

でも、その美味しそうな蜜柑ひときれください！

「りゅむりゅむ！」

それゆえ何処かへと連れて行くのだ、竜也、

とやっぱり、えらそうに、リー・マヤが言う。

どうしたら、そんな上から目線になれるのか。

王族とは何か、一般市民を見下すつもりなのか。

というか、なにがそれゆえなのか、全然わからない。

お前の国へ帰れ、と言いつうになりながら、

それでも、そうだな、と言ったのは、

実際のところ、僕も何処かへと行きたかったからだ。

\*

煙草を一本喫ってみる。

いたましく、もっともらしく、醜聞を撒き散らすように。

酸素が薄くなって死が近づく復讐心の象徴的発露の瞬間、

しいては歴史が空虚になるモザイクな埃及模様な一瞬、

目的や努力といったものが泡になることを轟々たる社会の声と共に、

理解する。しかし、願わくば神よ、

ひとりひとりが天才なんだ、ともう一度。

白痴なんだ、と、もう一度。

万人とは万能ということだと教えてくれた朝のおとずれが、

昼、金言とことわざばかりだと見抜いて、見抜きはてて、

予言的に一日が占えてしまう、僕の未熟さを自嘲しながら――。

でも、苦しみだけが人を強くも弱くもすると思えた。

空っぽの中に、本当の人生がある。

未来は過去の再生産にすぎず、

所詮は屍のうえに成立するさみしさだと僕には思えたから。

どれだけ先へ進もうとしても、煙草の味は消えない。

吐き気を覚えるまで煙草を喫っていた公園で、考えてたよ。

火の修養、不良の閥歴、死へと向かう落莫たる心地。

世を討とうと誓った夜だって、神様アンタの寝首をかこうとした夜だって、

人生最大の屈辱を味わったあとの扇風機の音だって、ぐるぐる廻る、

大嫌いな上辺を取り繕うだけで本質をちっとも変えない、

あんぽんたんな大衆だって、この煙草の味。

阿片よりやさしい。

けれど、一気に狂うことはできない、それもまた、さみしさ。

コーヒーよりやさしい。そしてどんな嘘よりやさしい。

分別の慈悲を得て、邪慳になる、僕のかぎりないさみしさ。

救われることのない、恵みにも似た僕のさみしさ。

だから思う、ああ僕はそれでいて溺死しよう、と…………。

溺れよう、さみしさ。

人は教え導かれることばかり望んで、天下の利害に、便利と安寧をのぞむ。

世界平和や、核兵器、病気、ねえ、滑稽だよ、ふざけてるよ、

そんな臆病な気持ちでどんな夢を謳うの。

命を捨つる覚悟もなく、ろくに生きる勇気もなくて。

ねえ、それを墮落だ頹廢だと言わずに生きる人が愛を欲しがり。

ねえ、嘘だまやかしたと言わずに生きる人が愛を欲しがる。

ねえ、このけがらわしい心がこの霧をうみだすのさ。

前も見えない、この不覚こそが、肺いっぱいの空気を拒む。

利益をもとめる主義や主張が軽佻浮薄の徒を増やし。

流れの性質とばかりに勇断を選ばぬ言葉が曖昧な態度を増やす。

この一本の煙草が兵隊の証でいい。

この一本の煙草がかたくなな魂を語り得るとしてもいい。

この一本の煙草が人生を特殊なものにするとしてもいい。



人生に選ばれ、僕は人生を選ぶ。そしてもう一度、立ち向かう。

僕はどんな国に生まれたって同じことを言っていたよ。

僕がどんな歌を歌っていたってやっぱり同じ歌を探したと思う。

何を得ても空っぽに近付くような人生は嘘だ。

僕が欲しがっているその人生は若い者の始末のおえなさじゃない。

なまやさしい無能じゃない。

そんな、なまやさしい孤独じゃない。

## 打ちつける釘

---

不思議な金属的光沢を帯びている斧から、

チェスのようにいろいろと奇妙な動き方をする木屑が。

まるで群衆が為す無数の会話が、

空っぽになったウイスキーの壺であるようにおもえるとき、

やがて林檎のしぼり汁のような朝の陽が鏡のように泡立つ葡萄に。

夜それはプレアデスの星の群れに！

ジャイアント・アアムが、

運動的疾走をする、無数の若き群像の靄を払いのけるために、

マラルメやヴェルレーヌのかげろうがゆらめきたちのぼる。

たぐいまれなしどろもどろの看板を照らす、

メランコリックで行き過ぎ！ やりすぎ！

這い寄ってくる、見出す椰子！

空は青、

晴天を約束するように、

神聖な契約が、

純粹のその内側に宿るとでも言うように。

シューベルトを聴いたか、

モーツァルトを聴いたか、

ショパンは、

バッハは。

酔いにかすんだ美しい女の眼のように、

示唆や想像や拡張や象徴という奥底のきわめてかすかな動き。

魂が重たい暗いものをためこんでいて風船の役を持たないように、

上へ引っ張り上げようとする明るみの力と、

下へ沈ませようとする衰退の暗。

羽ばたきにも似た光の雨が、

様様の姿態、

スケッチブックのめくれ、

わずかに洩れた少女の指のような隙間の金粉のごとく、

蜘蛛の巣の如く、

ある時の僕等はそうだった、と思う。

涙で消した炭火！

激しい雪崩れだった、と。

ウグイスの汚い羽根のようだった、と。

すさまじく爆ぜるような音を立てた死の闇。

自意識过剩が饒舌を産むが、虚無をも生む、

暗い水のゆれるような光のたたえが洞窟的印象で、

風のない沼のように不吉、

でも貝の居住性という印象、

蓮に根があるという人生的な印象が、

海の瑠璃色として、濃淡として、月として、

ある時の胡桃を割る心地として、

みみずが、促進する、

むかだが、鞭撻する、

この、おだやかな波の餓え――…。

僕の額を洗うしぶきは古代の英雄の剣や槍のように疲れている、

かたくむすんだ銀色の水滴は夜光虫のように密集する。

この絶望の壮観、ダンテ・アリギエリに出てくる、

犬のように白い牙を剥きだしにした、闇から抜け出したばかりの幻。

僕は思い出す、

虚空の錐にえぐられながら、

眸の色が深い、

いつもあこがれている眼が、

密林を刺激する、

髪のひとつじを揺らした青草の匂いを。

弓なりの唇が放つ、

「人生は牢獄・・・」

(でもその一瞬あとで、)

「人生は奇蹟の連続――。」

恐れるな、永遠の自由をもとめるために、時がある、

失くした旗のような顔をした、

いまは何も出来ない僕がいる……。

雨に濡れて、月のように青く光った不思議な頬の色をして、

また栗鼠のようにドングりをほおぼって、

そのかぎりない砂漠を愛する、

可能性は星の消えゆく火花！

無力を恐れるな、真実に踏み込むことから逃れるな、

それだからこそ、太陽が僕をうつくしい皮膚病にする、

ホルマリンづけにする、

ひと荒れきそうな風のようにする、

解決だ、いな、鳴り迫る、だ。文字ひとつひとつの乱だ、変だ、

爆発だ、皮肉な唇の冷笑だ、

碁盤のうえに置かれた碁石だ、

でもそれは追憶に燃える光だ。いや、水晶の玉だ。

何処へと行こう、

何処まで行こう――。

僕はそういう汀にいつまでもうずくまっていたい、

思想という人間性の苦悩の底で、神霊の高貴さに打たれ、

物質を超越しようとする志向の怒濤を感じ、浸透し、

うとうとと昼寝でもむさぼるように、

森のステンドグラス、

糸を摺るひびき、

殻を剥いた茹卵のような魂に、

軽薄になる、狂躁になる、

混乱のしずかなる悲哀のように芝居のリズミカルな調子になる、

迷い鳥が餌をもとめているのを感じる、

かかる言葉は、スタンド・バイ・ミー。

先生の、はあ、ああ、うん、はい、

先生の、ご指名でございますので、

誠に僭越ではございますが簡単に挨拶させていただきます、

めつぼうたける

政治家の滅亡建でございます、

清き一票を！

違いますね、慰安会のこのような席で、

恐れ入ります、

いえ、そんなことはありません、滅相もない！

誤解があったようでございます、

再発防止に努め、非難の声を真摯に受け止め、

このようなことがもう起きないように、

清き一票を！

私が間違っているのでしょうか、すみません、

しかし訴状が届いていないのでコメントできないのです、

なんですか、議会の花ですか、それは！

やれやれだなんて言われたら、

オレオレとしか言えないじゃありませんか、

はい、それは聞いたことがない、はい、勉強になります、

大昔の政治家は大抵悪い顔をしておりました、ヤクザみたいでした、

何だかもう存在自体がセクシャルハラスメントでした、

念のため申し添えますが、

私も悪い顔になりたい、滅亡建でございます、

清き一票を！

はあ…それにしても、ん？ ああ、もういいの？

ああ、マイク切ったのか、ああ、助かるよ、

おお、こっちかい、控え室。それにしても、あの先生さ、

ギャグ飛ばしてこいなんて、ふざけやがって、

じゃあ、お前も俺に夜の席をつくれっていうんだ、

最低でも指二本はもらわなきゃやってられないな、くそ、

おっと、くつろぎすぎだな、どこに聞き耳があるかわからん、

おお、おお、こっちか、

いやあ、でもねえ、君一一、

って、おら、

こういう時はビールだろ、くぬやろ、

なにが、水だ、お茶だ、飲めるか、



くぬやろ、何考えてんだ、そんなんだから、

てめえはいつまでも二流なんだ、

だから誰からも顎でつかわれるんだ、くぬやろ、

腹がいたいだと、くぬやろ、ちょっと蹴られたくらいでなんだ、

おらおら、ひざまずけ、土下座しろ

政治家は腹が立つんだ、反省しろ、

おら、靴なめろ！

ご勘弁くださいだあ、くぬやろ、お前は政治家か、

自分のことをチャンづけで呼んでる議員か貴様は！

その店の棚には、いつも温和しい猫が、二、三匹おる。

駄菓子屋。床には洗濯機のうずができておる。ガラガラ、と扉をひらいたら、ネコがももんがのように飛びかかってくるから気をつけておる。宇宙の物置のような駄菓子屋には、ふるびた幟があって、何故か和菓子となってる。

むかしは、波のように白高く笑ったものだが、慣れると、和菓子も駄菓子も、かなしい追憶ではないか。いまでは、洋菓子によって用無し。お。わし、うまいこといったか、ガハハ、うまいこといったか。ああ。おお。浮かれてしまった。これでは核の雪の雰囲気が出ない。蝶や花があるようなしらじらしさだ。そうぞよ、そうぞごじゃるよ、わしは夕陽の色を受けながら、重い重い足取りの囚人である。ゆるやかによじれて見るとすれば、それがろうそくのこよりのように見るとすれば、吾輩が中心であることを拒んで見えているという単純な屈折の原理である。婆が、おる。ばばあ。と、声がヨットのように滑ってゆく。氷のようにつるつるとして、気持ち、はげあがってくる。おい、ばばあ。こう呼ぶ。その間にミケだのブチだの、白だの黒だのにさわる。物色。触診。

この駄菓子屋、衛生状態は最悪だが、フレンドリーなサービスは最高だ。そもそも、誰も気にしない。壊れた世界のうつくしい空っぽのことなど一体誰が気にしよう。わしは知らん。わしはただ、スルメとラムネが買いたいだけだ。喉仏が丸木舟みたいにせわしげにうごく。鏡で見ていると、むしようにウクレレのことを考えてしまう。それにしても、長い長い一日だったぞ、ばばあ。たすきを駅伝のように受け取ったあまりに四十二キロを走って、そのまま泳いで、障害物をこえて、最終的に腕に麻薬を打ち込んでるような気分になる。わしは知らん。市内電車のレールを見ながら、吾輩はスルメとラムネが買いたくなった。ばばあは、まだいのちがくつついている葉っぱのような顔をしておる。それと、みのむしみたいなからだ。ひからびた骨に肉付けしたからか、なにもかもが干物っぽいばばあ。ふくべのような白い歯がなければ、額に悪霊退散の札をつけてやるところだ。おや、誰かと思ったら、あんたかね。いま、気付いたのか。あいよ。調子だけは、落語のよよいのである。しかしその間も猫が、ぞわぞわする。にゃあ。ぐにゃあ。うにゃああ。やりたい放題である。家に猫の毛がおおわれてこのうえも

なく、毛皮然としているのに、ねこくさい。わしは知ら  
ん。おいばばあ、スルメとラムネ。あいよ。めきめきめき、  
と変な音が鳴るがいつものことだ。眼玉をぜんまいで巻い  
ているような音にする。目玉をどうして巻くのか。それは  
わからん。知らん。ただ、どこかに目玉がほつつき歩くこ  
ともよくあることなのだろう。ところで、おい、ばばあ、  
さっき魔術書にでてきそうな猫にあつて、いきなり話しか  
けてきたぞ。交差点の横断歩道。さくらのはなびらみたい  
ないろをして、それがしはキャットフードを買いに行くで  
ござる、だと。すかしてたな。ぬかしてたな。さて、あい  
つはどんな仕事をしているんだらう。わかるか。歌舞伎や  
ってる猫みたいな顔立ちをした。あれはさぞかし二枚目  
だらう。おい、ばばあ、ババア！ すまん、死んだかと思  
った。ねむるな、いきをとめるな、死んだかと思う。そう  
したい時は、ひとりの時にやれ。迷惑かけるな。孤独死と  
いうことにもなるまい、これだけ猫がいれば、さぞかし立  
派な絨毯となって、ばばあをはこぶ天国への道とならう。  
ともあれ、わしは知らんぞ、そのまま死んだら放置するぞ。  
あいよ。本当にわかってんのかねえ。それにしても、鰯の  
頭みたいな天気だねえ。そうだな、鰯の頭みたいな天気だ。  
いま、どういう意味かって考えたらう、おまえさん、馬鹿

だね、昔っからあんたはそうだよ、蜂の巣に蟻をいれてみたりした。まくらにそっと、紙風船をいれていたりした。そうだったかな。そうだよ。でも、ばばあ、鰯の頭だろうが、蛙の尻だろうが、別に何だっていいのさ。しゅうるれありすむ、って言うのかい。不条理とも言うな。今年で百九十も生きとるがあんたはわけわからんよ。猫の悪いくせだ。わしも猫だ。でもあんたは特別、いかれてるよ。

## 友達のももだち

---

友達のももだちとかいう話なんだけど、

彼女は不倫をした。

彼女は昔からそうなのよ、と、友達は言った。

続けたー。

「すごい修羅場だった。警察も来たし、救急車も来た。

奥さんが彼女を包丁で刺そうとしたの。シットって、すごいよね。

悪魔みたいね、あはは。」

あはは、じゃないよ。

僕は不倫とかこわくてできないヒトなので、

大体浮気なんて性がふしだらか、

人生をテキトーに考えてる人のものなのだと、

僕は思うのだった。

「あ、続けて。」

「それで、浮気相手がそれを止めようと揉み合っている内に、

腹部に、グサアッ！」

「うわっ！」

「血どばどばでて、あわてて、救急車。

彼女ついでに警察呼んだみたい。」

(まあ、でも、殺されそうになったんだもんな、  
しかも、相手はちがうにせよ、現実的に刺してしまったわけだし、  
警察は民事不介入で済む話じゃないなあ。)

「命は取り留めたんだけど、そのあと、  
両親とか、兄弟とか、一一色々言われたみたいで、自殺。」

「うわっ。」

「奥さんはもちろん罪にこそ問われなかったんだけど、  
だって、殺意はなかった、脅すつもりはなかった、だもんね。  
でも深刻なのは、自分が夫をころしてしまったとなやんで、  
精神病院。よるもねむれなくて、半分ゾンビみたいだったって。  
本当かどうかはわからないけど、ヘンな呪文となえてたって、あはは。」

だから、あははじゃないよ、あはは、じゃ。

多分、すごくふつうな人なんだろうなとおもったりした。

すごくふつうだから、精神なんかがおかしくなってしまうのだ。

愛ごときで、狂ってしまうんだ。

「撃たれた小鳥は落ちるだな。

「で、友達は慰謝料をはらって、トンズラ。」

「うわっ。」

と、言いながら、じゃあ、奥さんの面倒を見れるのか、

という問題はついてまわる。

そんなお金を払っていたら、よっぽど稼いでいないと辛いだろう。

でも、なんだかやりきれないな、とも僕は思った。

「でね……」

「え、まだつづけるの？」

「だって、こっからでしょ？」

と、彼女はニヤニヤした。他人の不幸は蜜の味なのかな、ワルいなあ、

でも、話をもうやめろと言えない気の弱い僕もワルいのだなあ。

「でね、そのあと、友達も、ようやく結婚しようって話が来たの。

真面目に一生を添い遂げてもいいと思える人があらわれたのね。

ファミレスで、友達と会って聞いたんだけど、

あの頃はおかしかった、彼のことも、奥さんのことも本当に後悔している、

反省している、と言ってた。どうだかわかんないけど。

友達、むかしからそうなのよね、都合のいい時だけそんなことを言うの。」

「――ああ、うん」

ちょっと引いた。

だって、友達といいながら、友達のことを全然信用していないのだ。

それなのに、友達と言っているこいつが、ちょっと気持ち悪いなあと思ったのだ。

でもふだんは、つゆともそんなことないのだ。

優しくて、段取りがよくて、大抵のことは笑って許してくれる。

僕みたいに無個性な人間を、優しくて、遠慮があっておくゆかしい人と、言う。

「で、ここからが面白いの。彼女の結婚相手に、

封筒がとどいたの。不倫の写真とか、不倫相手が自殺したこととか、



奥さんが精神病院にいまだに通っていることとかを記した手紙がはっていて、  
あなたこんな人と結婚できるんですか、みたいな、  
えげつないやつ。」

「うわっ。」

「でも、それぐらいじゃ結婚をとりやめない。本当に後悔しているんだな、  
もうこんなことをしちゃいけないぞ、みたいな、やりとりがあったって。」

「うん。」

「でもそこにもう一枚封筒が来て、高校生時代のイジメの話とか、  
不倫はそれひとつだけじゃなかったこととか、数々の暴言とか、  
彼女がどういう性格であるかを記した手紙が入っていたって。」

「うわっ。」

ストーカーだ。

こんな悪質なストーカーがいるのか、と僕は正直こわくなった。

「彼、人間不信みたいになって、お前ここまでやってきて、  
人間として恥ずかしくないのか、そんな奴と結婚なんかできるか、  
になったって。破断。自業自得よね。弁護士に相談しようとしたっていうけど、  
できるわけないわよね。人生の恥部だもんね。」

「――うん。」

自業自得ということで処理していいのかとはおもいつつ、

因果応報という気は確かにした。でも、そのやり方が、えげつない。

「で、彼女、一時は自殺しようかとまで思い詰めたみたいだけど、

あのタマが、自殺なんてするもんですか！ あはは、ぶりっ子よね。」

おいおい、とは思いつつ、

こいつ、性格じつは悪いのかなあ、とも少し僕は思った。

でも、性格が悪いということになれば、僕だって性格が悪いことになる。

友達だって、恋人とおなじようなものである。

なにかが似通っているということを否定しきれものではない。

「で、遠方に引っ越し、転職。だって、仕事場で、

結婚をやめた理由を説明できないものね。

もう逃げるように違うところへ行こうって。慣れない仕事だけど、

何とかやれそうって。悪い夢だったと思ってやり直そうって。

でもそうしたら、あたらしい仕事場に例の封筒が。」

僕はもう、相槌を打つ元気をなくしてしまった。

過去はいつまでも追いかけてくる、と想像して、ゾクリとした。

「その日のうちに、仕事辞めたって。

彼女、絶対にあの浮気相手の奥さんだって息巻いてたわよ。」

本性がでてきたな、と僕は思った。

僕だったら、その時点で出家するかもしれないなあ。

「警察に行って事情を説明したって。でも、警察もさぞかし、

あきれたでしょうね。」

「でも、加害者だろうが人権があるから。」

と、僕は言いながら、

大量殺人をやらかすような奴に人権なんてあるか、

レイプをやるような人間の屑に人権なんてあるか、

という風に思った。守らなければいけない、

でも、守るべき価値が本当にあるのかよくわからない、

と、昔かんがえていたことを思い出した。

加害者の家族は守るべきだ。それは絶対にそうだと思った。

でもそんなモンスターをうみだした家族が、

一切何の罪にも問われないなんておかしいことだと思った。

「…でも、証拠がないから、相手にしてもらえなかったって。

警察の文句すごいってたわよ。馬鹿よね。」

馬鹿だ。馬鹿だけど、——そこまでひどい目に遭って、

まだ、誰かの悪口を言えるなんてすごいなと逆に感心した。

「裁判もしようとしたらしいけど、うまくいかなかったって。

大体、証拠ないのにどうやって裁判するのよね。でも、無理強いで、

通知でしたら、不倫相手の奥さんから、

名誉棄損で訴えるぞとすごく怒られたって。

あわてて、取りやめ。脅しのつもりだったらしいけど、逆効果よね。

お前はもうわたしの世界に入ってくるなって。

慰謝料として、手持ちのお金をすこしわたそうとしたらしいけど、

いらないって、つっぱねたらしいから、本当に怒ってたのよね。ね。」

「そりゃそうだよな、うん。」

僕はすごく悲しい気持ちになった。

きずついているのに、さらにうたがわれて、しかもそいつが、

嫌な過去の張本人みたいだったら、本当にそんな感じになる。

「じゃあ一体誰がって彼女、泣きながら言ってたわ。

本当に誰なんだろうね——。」

と、友達がニヤニヤしているのに僕はうっすらと背筋が寒くなった。

ちょっと待てよ、と僕は思った。どうして、こいつ、

こんなに嬉しそうにこの話をするんだ？

いや、まさかな、と僕は思った。彼女は異性の友人だし、いつも、

優しくて、——。

「わたし、彼女に教えてやったのよ。きっと、傍にいる奴じゃないかって。

おかあさんとか、おとうさんはどうって。身の周りに、

恨みを買ってるようなことはないかって。彼女、すごく驚きながら、

そんなこと考えもしなかったわって。でも、そうかもしれないって、

考えながら、誰だろう、わたしの周りにそんな人はいないだって。」

僕は、友達のこんなに嬉しそうな顔をはじめて見た。

蝶を踏みつぶすのをよろこぶみたいな残酷な笑顔。

そしてそれは多分、——。

「……………いったい、誰なんだろうね。」

と、僕は、低い声で言った。

僕は一連の話をおもいだしながら、決定的な、彼女の笑顔を見ながら、

僕は犯人が、わかってしまった。

でも、僕は、その犯人にあえて諭そうというつもりはなかった。

でも、僕は、彼女の頭をゆっくりと撫でた。

やだ、どうしたのよ、と言われた。

「――ずっと昔にね、思ったことがあるよ。

温厚な僕が、本当に人を殺したいって思ったことがある。」

友達は、僕の硝子玉みたいな瞳をどんな風に見ているんだろう。

鏡のなかのように、見ているんだろうか？

「手を血に染めても構わないと思ったことがある。

こんな奴、生きる資格はないんだって本当に思ったことがある。

屑なんか生きてる価値はない。本当にそう思うよ。

僕がその時、銃を持っていたら、ほんの少しのはずみがあれば、

殺してたと思うんだ、まちがいなく。そしてそれを、

おかしいことだなんてつゆとも思わないよ。

でも、鬼になるのは辛いよ。屑になるのは辛い。

屑と見ていられる価値のある人間が、そしてそれを、許せない人間が、

ほんの少しのはずみで、地獄まで落ちてしまう。」

友達が、押し黙っていた。

顔が完璧に、引きつっていた。

僕はいつでも、その気になれば、人を冷徹に脅すことができる。

「嫌な夢は続くと思う。嫌な気持ちも続くと思う。

でも、そうじゃないんだ、それを乗り越えなくちゃいけないんだって、

僕はすごく思う。」

「――な、なんの話なの？」と彼女は言った。

「……たえ話だよ。」と僕は笑った。

「あなた、たまに、変なことを言うから。」

「うん――でも、ご飯食べに行こう。お腹すいちゃったよなあ、

お酒いっぱい飲もう。それからまた、恋人の話すこしさせてくれ。」

「なによ、あらたまって。」と彼女が言った。

「彼女は、すごくやさしくて、段取りがよくて、

大抵のことは笑って許してくれる。僕みたいに無個性な人間を、優しくて、

遠慮があっておくゆかしい人と、言う。」

ねえ、一瞬きらっと、本当にきらっと光って、

その瞳に影がこもってゆくのを見たか。

理性を信じている人がそうであるように、僕は、彼女を落とした。

## 評価

---

ショックだった。

何がショックと言って、

青い麦酒を飲んで、

瓦斯体になって、

あとは白い粉だけなんだよ、ということが。

創造性に富み、企画力のある人とか、

専門性、柔軟な適応力、

自立心旺盛で自己動機付けが上手で、

長期的展望がとれ、社会的貢献心、

広い視野、健康な肉体にして前向きな姿勢、

国際的で、マナーがあって、文化教養がある。

――僕は、

人事考課について考え、

人知れず社会の弱点について、

この動物的な見方と、

科学的な見方とに分かれるのかな、と。

われわれは細胞分裂によって細胞を増やし、

固体を形成する。

倍数分裂と、減数分裂がある。

そしてこれは非常に会社的な説明だ。

資本における社会も説明できる。

でもそのたびに、僕は海について考える。

聖書の光あれではなくとも、

古い化石が、

つねに海の生物ばかりであることを想像する。

しかしもちろん、海が変わったわけではない。

海は昔からずっと同じなのだ。

ある人は、合格と言い、

ある人は、不合格と言う。

学歴主義は、人間的な資質を了解しない。

優しい人間が、部下の育成が上手であるとも、

限らない。厳しい態度は、怠慢を生む、

造反も生まれる、全体の士気も下がる。

だがそれすらも、一括りできない。

遠近感がたよりない絵こそが、人の心――。

でも、合格不合格の中でも、

人は好意を持つ者や、



信頼できる者に無条件で甘くなる。

逆に自分を合わないものを、

棄ててしまう傾向がつよくなる。

冷たくなるよりはいいから甘くしよう、

というのでは自分の意見がないが、

客観的になりすぎて悪くなることはない。

たとえば能力開発や、自己啓発は、

主観的な態度や、

口先から生まれてくるわけではない。

星空に海中の痕跡は見えるものだ――。

銀色の短剣は光り、

無数の星は個性を謳い、

常に遠くからとおくから、

何かを見つめようとしている。

成績はどうか、能力はどうか、

その人の情意はどうか。

その人の運命や歳月における考え方はどうか。

咄嗟の理解判断はどうか、

応用性を持っているか、偏りはないか、

人は、――

自分の中に本棚を持っているものだ、

自己評価と他人からの評価。

狂った鳥の鳴き声のような心臓、

長い航海で、

乾いた花びらが生まれてしまうとしても、

叩き潰された紙風船をうみつづけるのは、

いかにもな安っぽい燐寸であるな、と。

ある人が言う、

ショックだった、と。

小やみなく蝉の声が流れる、

森の屍衣につつまれた悲哀の飛沫的感觉！

yesとnoがすべてではない。

第三者的意见は常にあるし、

周囲と自己との評価は必ずしも一致しない。

見よ、白く輝く宮殿の露台を。

そこで、お前はすがたかたちかわる、

心について正直に、みさだめがたくなりながら、

人をあれこれ言う自分を思い知れ。

「（あれ、そのことって、

随分と前に、そうじゃないって言わなかったっけ？）」

「（覚えてないの、聞いてなかったの？）」

「（人は、聞きたいこと、

見たいものしか、受け容れられないのかな）」

…とある時代の人は、

食いっぱぐれる、

おまんまおあずけだぜ、と言われると、

おびえるらしいという話を聞いたが、

これを保守と一般的な見方をするのもよいし、

向上心がないと突っ込んでもいい、

社会的な信頼を失ったのは誰か、と。

不安定な社会の言語的な脅迫とでも言っても、

別に間違いじゃない。

マスコミメディアの責任、情報の氾濫のせいだと、

鉄の釘をさかさまに打ち込んでもよい。

わかっているだろう、

いや、わからなければいけない、

脅えていようがいまいが、

認識の範囲の広さは、人の評価とはまったく別だ、

人の評価をする上で、

こいつが嫌いだからというなら、

それは以ての外だ、

原始時代か。能力があれば評価されてよい。

利益に全力疾走する人間は、問題を起こすし、

人格に問題がある考え方を持ってる。

たとえそうだとした場合、

能力を引き出しながら、

人間的魅力を引き出すのも、

上司の手腕ではないか。

人を変えていくこと、包んでやること、

できるできないを考えてやること、

たとえそれが意見に合わなくても受け容れることは、

人の生きる上での成長じゃないのか。

無数の吸盤があるのか、

それとも、人はみなノッペラボウなのか、

（「いやいや、洗濯機は、

平坦にしないと、止まるものですよ。」）

（「高い精神というものは、

哲学とか、宗教とかとは関係ありませんよ。

禅だって、その本質は、禅以外のところで、

見出されるべきもののはずですよ」)

——おおきな蜘蛛がねむっていて、

空には小さな雲がながれている、

世界にはおおきな雲がねむっていて、

空には小さな蜘蛛がながれている。

学校に行く。と言っても、顔を出しただけで、

平気でサボろうともものすごく本気で考えてる。

どうすっかーと頭をボリボリかいて考える。

――労働時間を七時間に！

と、何だか別の社会の声になっちゃった。

…浜辺には…地雷…を、埋めた…よ…

“mylife”の記事を図書館でやるかな、とも思う。

ガリ版で刷るか、なつかしい字なみの揃ったインクのかおり…！

[どこで間違えたのかを理解しようとしている、顔……。

四十個の机や席。黒板。掃除箱。教科書。棚に特別授業で使う絵の具入れ。 ]

それとも、“珈琲専門店ダンスダンスダンス”へ？

ジャズに、ロック…。アイスクリームのコーンを買うみたいだ――。

フフッ、ハウスミュージックに限らずポップミュージックやヒップホップ。

そそられる――…。

[バイクが停まっている。横断歩道が見える。速度表示系が見える。

ハンドルが見える。車体が見える。 ]

ろうそくの…火を…吹き消…す…

ああ、あきらかにいらついた感じ、ああ、なんで、って言いたくなるよ。

神戸牛のステーキを食べていないせいだ、きっと……！

あるいは、“屋上”へ？

そこで仙人になる。解脱する。

……仮面ライダーにでもなるつもりか ……

……ウルトラマンにでもなったつもりなのか貴様 ……

社会の枠組みをもう一度、捉えなおすところの試み——。

文句言うなよ。

辛い人生を生きているわけでもあるまいに——。

悪人ほどおのづから善きことを言う、か……。

カシャカシャカシャ、とシャッター音が鳴る。

カシャカシャ——。

……いいん——ガチャッ。

……ういいいいん。

でも、文化祭でみんながちゃんとやっているのを見たしなあ、

という感慨もあった。僕はどこまでいっても他所者で、部外者だけど、

——年齢と人格において超越している、とマスターは言うけど、

結局のところ、僕の居場所なんて学校の教室にはなかった。

でもだからこそ、人を素直に評価できることが嬉しいのだ。

根気強くピラを渡している場面や、料理をしている場面、

普段滅多に見せない真面目な顔とかを思い出していたら、

自分も、そろそろ本気出してやっていかなくちゃいけないんじゃないか、とも思えた。

でも、空気が本当に変わっている。

ゲームスタート

試合開始・・・？

少し前なら、（主に女生徒の意図だが、この場合はからかい。）お盛んだな、とか、

不良だから仕方ない、と片づけられていたことが、

全国模試で一番になったことや、音楽活動という恩恵をうけて、

（TVで見れる幽霊みたいだね。）

（そうそう、空揚げに犬の糞を混ぜておく下品なパーティーみたいだね。）

がり勉しに行ったぞ、とか、インスピレーションがわいた、とか、

仲のいい奴は言う。そうそう、そんな感じ。

[絵の中の目が動く。唇だけの、絵が、ぱくぱく、と話すように動く。

海の上を吹き荒れる嵐に耳をすますように、思う。魂は死なない。

生命は死ぬ。亡霊は増える。 ]

山崎先生のサポートとかフォローもあるのか、

大金を稼ぐ男への資本への憎しみにかたまっている様子はちらともうかがえない。

（相変わらず恋人とラブラブみたいだし、ってあんまり、関係ないな。）

（俺だって負けないぞ、って何を張り合ってる！）

もちろん、お金の匂いがするとしても、させない。

でも僕がお金なんていらんんだよ、というわけにはいかない。

お金は師匠にもまわるし、たとえば今後の人生活動においても資金は必要だ。

高校や大学なんてものも普通には難しいが、自分のお金で行ける。



億なんてものを貯めておけば、やりたいことはすぐ出来る。

プライドなんかスタンプやシールみたいなものだって気付くはずさ。

二尺択一的な選択-砂時計-人生の時間…………。

人生に勝つんだ、自分自身に勝つんだ、本当に欲しいもののために勝つんだ——…。

でもだからって、僕が守銭奴になることは本当に難しい。

なにせよ、文化祭での僕を見て、見なおしたという生徒や先生も多かったらしい。

俺には全然関係ないが。

（骨は何本まで折っていいんだ？）

（指の骨はどれくらい折っていいんだ？）

更生したな、と思う。

ヤンキーとかと、いっぱい殴り合っていると、ヤクザ的な文句が上達する。

もちろん、俺に触れられる前に全員気絶しているが——…。

ヨットが暴れ、フェラーリが暴れるような時代に、

どんな拷問にあなたは耐えているの？

あれ……なんだろ……ちからが……はいらな、い……

古ぼけたぜんまいがぜいぜいと音を立てて軋る。

ニコニコ笑いながら、近頃は愛想笑いも板についてきた気がする。営業スマイル？

そうそう、そんな感じ。

ワンワンワン！

ワンワンワンワン！

でも、外の世界を知ってみることで、

…ねえ…ぼくの…気持…ち、知ってる…だろう…

学校というのがそんなに悪くないものだと言っただけで思った。

(白色も、黒色も、黄色もないUSA!)

(カーテンを開けたら目がくらむような光!)

こうしてだんだんいつも感じていた、いつも、から少しずつ離れていく感じ——…。

絶好のお出かけ日和な今日、暑すぎず、寒すぎることもない、九月!

実は勉強は嫌いじゃないし、我慢するのも本当はそんなに苦手じゃない。

でも俺はまたあの意識が遠のいていく感覚に襲われその場に腰を下ろしてしまった。

ゆかりが言う。

*Baby lets Ride Out...*

ここに…いたら…おかしくなり…そうだよ…

「あなたはずっと前から、特別だったのよ。」と言う。

恋人はお世辞がうまくてかなわない。

と、俺の顔を覗き込む——って近い近い…!

ビーチサンダルを履いておくれ。そこからなら、話が出る。

休み時間、これから抜け出そうとする俺を引きとめようとする前に、

自分の本当の可能性に気付いておくれ。

(何処へ行くのだ、お前は!)

スパイシーでホットでエキセントリックでダダイズムな女…。

*You look so sweet while you're dreaming...*

「そんなことあるか。」と俺が言うと、

「ちんこ、でかい。聖剣エクセカリバー！」と、かもちゃんが突拍子もなく言った。

つうかこいつ、爆弾落としやがったああああああ！

男がいる教室で、ちんこの話をしないであげてください！

やめてあげてください！

気にしている人いっぱいいるから、そこ、でりけえと、な部分だから！

そういう誇張をされると本当に人間の会話に困ったりすることだから！

「こいつ、馬鹿なんだ。」と俺は、ゆかりに言った。

鳥、一瞬沈黙するが、ポケットに入ったハンバーガーをちらつかせると、降伏する。

鳥、何故か学校に来ているうえ、後ろの棚のところに、自分の席とばかりに座っている。

むぎゅうっ、と近寄って来る。コミカルで、めちゃくちゃな夕暮れの温度！

じゅるり、という涎を我慢している音がした！

りゅうやああ、と何故かこんな時だけ甘えん坊将軍！

「（というか、なんでこいつこんなにファブリーズ・・・！）」

しかし授業中、ぬいぐるみのふりしてる鳥を見てると、ちょっと笑える。

しかし、二度ほど、ニョホホ、と奇声を出したので、ぬいぐるみ失格。

かもちゃんのファンらしいクラスメートの女の子に、友達になって下さい、

という、手紙をもらったらしい。

「ニョホホ。」と、かもちゃん笑った。

世界中でこんなシモネタを言って当たり前に許されるのは、

この鳥くらいではないか、と思う。

男子生徒がこんなことをいったら、総スカンを覚悟せねばならないというのに！

チィィィィッ！

きょうはもう…ねよう…つかれ…た…

「……でかいのと、ちいさいのとは、比べ物にならない。夜中に、竿を引っ張ったら、

竜也がうごいた、なんだこりゃ、ニョホホ。」

俺はにこおーっ、と笑って、その後、全存在を無視した。

ハンバーガーが与えられないのを見ると、これはどうも湿原だったようだな、

と思ったかもちゃんは、

「嘘ダロ」と言った。

すると、手がうごいたので、

「本当は、もっとふつう。」と言った。

みんなは、大いに笑った。

ハンバーガーをやると、すごい勢いで食べた。

僕はバックから一冊の本を出した。もちろん、ニーチェだった。

嫌よ嫌よも好きのうち。そうそう、そんな感じ。

花瓶の花が。いつもは目にとまらないような、

小さな花が何故か今日は目に入る。

## 神の孤立

---

ねえ、何も言わないでよ、

愛に引き裂かれそうになるから、

光が官能じゃなく理性にくじけてしまう、

星が松明のように落ちて、

両手いっぱいにあったはずの今日の靈魂が、

また奈落へ、無垢へ、くれないの色の朝へ。

あの子が言うんだ、

雪のかけら、

あなたが死んでしまったらわたしはどうすればいいの、

身体を大切にすると、

わかってるんだよ、でも、

燃えさしのような悲劇で終わらせたくないんだ、

だからそんないつくしみぶかい手れん手くだで、

僕の心を見つめないでおくれよ。

美しいことに対する悲しみ、

両腕をもがれた彫像のような悲しみ、

いや、翼がないということの悲しみ、

人が嘘だらけだっていうことの悲しみ、

かがやきながらおぞましいものを見て、

殺人に強姦、首吊りにガス自殺、

でもそれをだれにも止められない悲しみ、

ひと影さえ死に絶えた往来の悲しみ。

ねえあの子、かわいい、やさしい幻想のあの子、

こんなに苦しむってこと、

いつまでも心の血を流すっていうこと、

恥多い少女、ひとつの真空を目指す女の子、

君はきっと幸せになれると信じてる、

くさい穴の中でかい、間違った彼等の世界でかい、

どっちみち蜜蜂はいなくなるなよ、

いつまでも優しい顔をしてる人はいなくなるよ、

骨の髄まで叩きこんだんだ、

僕は地獄のような時間を過ごしたからね、

心の底から愛を信じれないようにできてるんだよ、

だから探すんだよ愛の幻、

風景のやさしい一瞬。

ねえ、法律書なんか読まなくていいよ、

漫画だってそうだよ、

映画だって観なくてもいいよ、

そんなものの中に愛があるとでも、  
愛が一冊の本にであるとでも、  
君はただ、力強く乱暴に説き伏せられただけさ、  
僕だってできる、嘘の言葉を並べて組み伏せる、  
僕はもっと悪魔のようにおぞましい言葉を吐こうか、  
そしてたくさんの厭らしい人間のふりをしようか、  
けれど、可愛いあの子、  
君にだけは正直に素直に話したい、  
はなびらが吹きちぎられた空を見たかい、  
もう少しましな世界への入口を見たかい。

光の中を泳いでいいよ、  
とどろく空のしじま、  
死へのおびただしいアクセス権、  
ハンマーや皮切りナイフ、  
ささやかだけれどにぶい反射をもたらす意識、  
その、光の中を泳いでいいよ、  
生まれ変わっていいよ、  
このどうしようもなく暗い国で、  
神へとさすらってゆく終わりのない航海へと、  
君のやさしさが、

君への心の底からの愛と感謝がささげられる。

ねえ、みじめな肉だよ、

小さな小さな虫だよ、

自分がわかっていない人のようにはなれないよ、

僕はねむりのなかでたくさんの真実を見たからね、

ねむりは人生におけるなめくじより過酷だ、

突然の死より、ずっと確実な後光だ。

でもねえ、死という否定的なモチーフが、

告白という高貴なものであるとき、

神という絶対的なモチーフが、しかるべき、

時計のなかの一分一秒を別の枠組みへと吸い込むとき、

僕は恋人というぜんまいがはじけとんでしまう、

君だけの人にはなれないよ、

愛だけの愛にはなれないよ。

僕は噴水になる、地下の暗い牢になる、

無果木にも、知性の実にもなる、

キリストにもなれる、マリアにもなれる、

いいや、神にもなれる、絶対的な結末の体現者にもなれる、

こんなにも愛しているからという言葉が、



つめたい埃の体積になる、

悲劇的すぎてうつくしすぎる僕の言葉、

でも運命をおそれるな、それだけだ、

ほろほろと砂がこぼれてゆく君の笑顔のときに――。

雨あがりの道の、ところどころに残っている水溜まりを避けるような、

正午過ぎ、灰と化したばかりの紙片を、中心のそれらしい山に放り込む。

(少し隔たったところから騒がしい物音がする…)

(涼しい物音…)

ジェンダー/セクシュアリティ、階級、人種/エスニシティ……。

嘘っぱちの白い笑みは、軋み鳴る骨の音のする、なめらかな海面が連れてきた。

疾走するスピード感！ 思考即迫、観念奔逸……。

ゆみかげ てさ

弧影の赴くままに照り苦え――。

…… (自覚的な越境主義)

「ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバル……」

(地球が一つなら、世界も一つのはずなのに――)

(問題はうまれてくる、あたらしいバビロン捕囚…)

ニュートン的な性格を帯びながら、小人の国のガリバー。

船を歓迎するように、商店や、オフィスや、共同住宅の窓が、白い歯のように光る。

子供の笑顔みたいに、あるいは子供の描いた絵みたいに、

本当に何か厭な、薄気味の悪い、無意識とか意識とか関係のない蛇の恐怖にも似た、

そういう何かが光って、それが僕の中の何かに触れるのを感じてしまう。

(リライアンス?)

(あの、インド最大の財閥の?)

*resistance random access memory....*

僕はその太陽が、鋭く噛みついてくる鮫の乱喰い歯のように思え、

思いながら、いまやそれが映画の一齣のなかの織物と化したことを見つめる。

シャッターが突然死ぬ。

死ぬ時のおいほしまでとどくようなためいき――。

○・○・1

○・○・2

――たとえば――

――まるで――

なにかをうしない

なにかをてにいれる

鳥の啼き声が突然死ぬ。

うすれろ――

うすれろ……

結んだり、解いたり、縋ったりする手仕事のリズムが、

一步一步の疲労を物語り、根気よく歩く、それが足場だとばかりに、

意識のサーチライトを使って、歩く、歩く…高級なシルクみたいに、

すべりながら、羞恥をほんのりと浮かべながら、一瞬、

蝸牛の、ダダの様相――くずれる、いびつになる、そんな幻想的な一瞬……

僕は螺旋を想像した、頭の上に樹液のしたたりを感じた、

(具体的なことなんてなかった。)

(具体的なことなんて、思い出せないんだ――)

サイレントナイト！

ヴィーヴィー……ホーリー……ナイト……

トゥアイレエントツアアアイイイ…

――たとえば――

――まるで――

しんでゆくようだ

いましんでゆくよう

オットー・リリエントールの滑空飛行、

アントワネットの被りそうな帽子、

曲がり角に看板があり、そのへんで、レストランのチラシを配る人と擦れ違う、

そして大地の隠された溜息が暗黒物質へと雪解けしていく。

瑪瑙の、アクアマリンの――気の遠くなる想像…

檻の中の熊みたいに揺れている木々の音……。

(――――国際捕鯨取締条約とでも？)

(――――やめてよ、笑っちゃう、逮捕許諾請求)

洞窟にぶら下がる鍾乳石、地底湖という透きとおる鏡、蝙蝠、原始生物、

いつか記事で読んだ、実際いかがわしいというほかない、

美しく組み合せた盛り花の籠、

チェルノブイリからの脱出、香港からの脱出、

大日本国帝国からの脱出、

何百年も生きていたという人達と会ったという話からの脱出……

ぼっくい ろっこつ

そこで、僕は太陽を木杭や肋骨のように叩きこまれる。

南メソポタミアでは、棗椰子が天上界と地上、

地下の冥界を与えるものとして崇敬された。

そして、僕は真っ白だった。

桃の実が真っ二つにされたように、真っ白だった。

ねえ、ポピー、ようやくユダの気持ちが僕にもわかったよ。

こんな *Love is Beat* 市街の葬列、

太い静脈のこめかみの蠢動、亜熱帯風の腰のくねらし、

花畑のときめき、食用蛙の生存、溶岩のすさまじい食欲――。

あさ。

ぼくは、忘れてしまった、

ながい時間のことを考える。

あさ。

あたたかくて、ひとはだの温もりをもっていた、

みぎ手、と、ひだり手、を、引き換えにした。

あさ。

それが、自己、の、行為、なんだよ。

それが、自分自身、という、やつ、なんだよ。

あさ。

こどもじみた、世迷い言、なんかに、なやむ。

もろもろのことに、

ひとつの、青い、照明になって、

はりつめた、氷、のようで、いる。

ぼくの、すぴーど、は、そのつど増して、

より、自由、を、慕う。

あさ。

ぼくがみる、鏡、の、なか、に、

ぼくが、ひとり、うつっていることの、不思議。

そいつは、ぼくの、醜さ、卑しさ、を、して、

ぼくが、それをいかに、

克服、していったのかの、歴史、を、知る。

あさ。

きっと、永遠に終わらない。

断頭台に、立たせられたって、

みずから、が、みえない、暗澹、の、なかに、

嘘、を、さがしでもしたように、眼をつむる。

そして、ぼく、は、忘れてしまった。

風景が、醜悪な、表情を、とった、朝。

いつも違う顔をしていたのに、

それに、気付いてやれなかった、自分を。

あさ。

きのきいた、得意のうたで、

おんがくを鳴らしてみせた。

純粹体験、を、のぞみながら、

束縛、では、共有しきれないシステムをみつめながら、

ぼくの、声、言葉、歌、が、

うつくしい道をつくっていったこと。

うつくしい、道、を、思い出していたこと。

カラフルな街でマスカットが食いたいと言ったってそれは嘘だ！

俺は葡萄汁を飛沫かせたい！

焼き鳥つくね！

（何でお前はそんなどうでもいいことを叫ぶのか！）

もちろん、ドバドバのシュビドゥバでな！

（何でお前はそんなどうでもいいことを叫びやがるのですか！）

ぐはは、と笑いたいが、俺に出来ることは、実際、ぐふふ、だ。

笑う所に福来る、と言う。笑い方で運命を開拓する、とは言わない。

差し引きゼロだ。笑うと本の角に頭をぶつける！

オーノー！

将軍にはなれないが、越後屋に立候補する権利を得た。

[《逃げ腰》の能力を得た] ー。

椅子に座って足を組み目の前は大体アレキサンドリア！

「ぷーぷー、あれきんどどりあ、ってどこどどどどど！」

「うるさい、殺す。」

お茶目も許されないのか。

何を言われても、殺すというのか。

殺すでなければ、犯す。

犯すでなければ、笑わせる。

一斉合斉がそいつは嘘である。



ありやがらあ！

ガラガーガ！

眼の前にあるのは大体しけた俺の住んでいそうな街だ。

（何でお前はそんなに自虐的なのか！）

違う、甘さ控えめの！

（何でお前はそんなにネタを口にするのか！）

俺の顔がどんどんどん猿の顔に近づいていく！

どんどんどんどんどん……………（\*閑話休題）

それにしてもぶどうジウスだったらゼウスだなセンクス。

ーひょおおおおお！

…………あ、こんにちは、なに、カメラの前で、

既成上げてるんだって、おっと、奇声ね、規制だよくそばかたれ、

どうでもいいよ！

迫ってくる、ねじられてくる、巻きついてくる、アナコンダ、

と見せかけた、ミトコンドリア。

おっと、あまりうけないな、イボコンドリア。

うーん、空回りしているな。

バッティングセンターだからな！

金属バット振り回してホームランするからなボールじゃなくてバットで！

どんなところでもピンポンしてスマッシュするからなバットで！

（何であなたはそんなに強調をするのか！）

明白である。簡単である。しかしそれは、一言では言えなああああい！

(何であなたはそんなに秘密主義を気取るのか！)

ここだけの話、「葡萄」と言うのは「果実」である。

いま、じいっと考えたでしょう。読みなさい、読みなさい。

「果実」であるが、「ブドウ糖」と「果糖」がほぼ等量含まれているのです。

えっ。だから何、と思ったか、後ろを振り返ってみてごらん。

ごつん。うお。

葡萄の話をする、葡萄のお化けがやってきて、あなたを金属バットで、

ぶったたきます。おそろしい話です。本当にな。こわすぎるな！

カラフルな街でマスカットが食いたいと言ったってそれは嘘だ！

俺は葡萄が嫌いだ！

おめでとうございます！ ありがとうございます！

昨日世界一の葡萄になって、メロンと握手しました！

どういう気分ですか、野暮だなあ、このアナウンサアア！

世界二位と世界一位じゃ「格」が違うんですよ、「格」が！

おっと、つい、本音がでてしまった、アイムソオリィヒゲソオリィ。

\*

イライラするから電線のコードを歯で引きちぎりたい。

感電してもいいよ、うんこうんこ、うるせえよ、お前に関係ないだろ。

わかったふりするな、する、な、線のコードかじってから言え！

俺は豪傑になんざなりたいわけじゃない！

どこから出てきたそのアプローチスクロールハリーアップ！

開き直るな、ブリーフかじってるんだろ、布団かじってるんだろ、

どうでもいいんだろ、ニートなんだろ、真面目にやりたくないんだろ、

頭の中、撃墜マークなんだろ、どうでもいいよ、生きるのやめてほしいですよ、

おほほ、都会につらくてつらくてさみしいよボクウゥなんだろ、マゾコン野郎！

だから俺は肉喰って労働して筋肉自慢するような奴になりたくない！

だからどこから出てきたそのアプローチスクロールハリーアップ！

いまのストーリー本当に必要だったの？

うるせえ！

俺はむしろ緊張性頭痛、睡眠障害、くつろげない感じ、

いらいら感、消化不良！ 残尿感に、陰部のかゆみ！

そうだと、俺は完全無欠の動物園的砂漠！

あの一意味がまったくわからないないんですけど！

自我のありかをくらませているつもりなんですか？

うるせえ！

ナマケモノが言う。今日こそは電線をかじるんだ。

ゴリラが言う。今日こそは電線をかじるんだ。

あの一なんですかその不毛な自作自演！

もしかして、電線をかじることを必要な行為にするために、

フロイト的な路線を狙っているんですか？

うるせえ！

俺は白い壁の中に住んでいるからチェスをしたい！

したくて、したくて、たまらない！ チュッ！

いま俺のファンの女の子がチェス盤を用意したのだ、馬鹿野郎、

亭主関白もほどほどにしやがりなさい、さだまさし！

あーもう！ 電線をネズミのように、かじって、かじって、かじりたい！

それで耳栓になりたい真夜中の秩父山中になりたい！

うるせえ！ かじって、いらいら、かじって、うおおおしたい、

かじって、かじって、かじりたい！

かじりたい！ 一定周期で繰り返されるべき波形、映像の乱れ、

いらいら (a)

いらいら (b)

あの一。

うるせえ最後まで聴け！ 聴きたくなければ、電線をかじれ。

お前は電線もかじれないのか！ かじれ！

中学校中退して愛人バンクにでも入っているのかお前は！

家出して街を出て海へでも来たのかお前は！

親のすねをかじるな、電線をかじれ！

ねぶれ、なぶるな！

そして俺は東京タワーの糞小説を隅田川に流したい！

そして俺はノルウェイの森を富士の樹海に埋めたい！

あの一。

うるせえ、俺はいま、バタフライナイフを持っているんだぞ。

刺すぞ。やめてください。刺すぞ。やめてくださりませ。

じゃあ、刺さないから電線かじれ。

かじれかじれかじれ！

●月●日 [晴]

登場人物：神崎竜也/マスター/かもちゃん/リー・マヤ/ジョアンヌ

(はじめ)

|

[神崎竜也、ダンスダンスダンスへ行く]

【声/キャラA】「すっかり遅くなってしまったな。」

プログラミング的な、サーキット的な、アルゴリズム的要素。

|

(三重県の旅行の話のため。)

(かもちゃんに先を急がされているため。)

|

<歩く方向?>——|

↓右

↓左

[穴に落ちる]

[敵が現れた]

|—————|

|

「(モノログテキスト)」

\*フェードアウト/五秒ウェイト

BGMは陽気な音楽がのぞましい。

笑わせる/驚かせる

(a 穴に落ちる場合は工事用の看板が見える。

工事中のヘルメットが地面に転がっている。また、

落ちる瞬間に、将棋をしたかったあああああ、

という謎の台詞、中二病的発作を残して余韻を作る。)

(b 敵が現れた場合は、それは猫である。A～Eの5段階のステータス。

HPMPなどが表示される。猫と格闘する、竜也。

バキッ！ ドガッ！ バキッ！ ドガドガッ、バキ~~~~ッ！

しかしそれを、リー・マヤとジョアンヌにがっつり目撃される。

相撲力士のまわしを引っ張ってしまったような場面。

「ははあ、おぬし。」と侮蔑の混じった声のリー・マヤ。

「ヒロスウィマ……」と悲しい声のジョアンヌ。)

|

「本来なら〇〇であるべきものが、そうっていない」

「本来ならxxであってはならないものが、こうなっている」

|

(バグ対応、バランス修正、一部カット)

|

<ダンスダンスダンス>——|

↓通常

↓異常

[旅行の話をする]

[ドラクエの話をする]

|—————|

|

(a 旅行の場合は、伊勢神宮の話をする。

「海岸には、リアス式海岸と七里御浜！」

「真珠の養殖が盛ん！」

などのマイナーネタが肝心。)

(b ドラクエの話の場合は、かもちゃんが話す。

「レベルをこつこつ上げるのが大事。

昔のレトロなゲームは職人技が必要。」

「いまは、シナリオ+グラフィック+システムだからな」

「リアルタイムにマリオしてた俺はちょっと辛い。」

|

(おわり)

神の世界に到達せしめよ、

## 僕の音色・・・！

鷹という繊細な建築となり、

智慧の道を顕す。

瞑にして鳴の明らかな偏執。

ヴィレンドルフ・ヴィーナス

歓迎はない、太古の車輪、

その静かな夜明け前・・・

見てくれ、山の息吹き、

波の打ち寄せる音、

## 無限・・・！

自由間接話法に、不可解な文句の空間感覚、

千年かかった氷が溶ける音…………。

その一一自然なる理性の一齣-尺から、

Eroticなまでに生と死が浸透し合う、

僕は濡れてしまう、

、、、、、、

父と母でない、

、、、、、、

男と女でない。



その静かなかがやきの前 …

艶めかしい媚びとうるおいのきいた、

この燈りをつけられて、

……蔭をspiceした声が聞こえてくる、

*Midnight....uum...*

この強固な形而上学が個人の消息を探る…。

この密度は戦闘用絶叫…！ 十！月！…

(この、) ブレーキングは無敵！

気障な言葉でなく荒っぽい口調、

緻密な硬度、おなじ動揺をさそいながら、

お前に完璧に植え付ける圧倒的音楽のヴォリューム！

打てば響く、蟲の音色はぴたっと――

止む！ 止む！

欠如した音階が切り刻んでしまわないのが不思議！

## 秘密…！

僕が呼び覚ます真夏の海のような悲しい軋り！

間延びを打ち消すアンダァライン！

しよく そしり

嗜欲の誹から離れた爪の裂くる切れ味の櫂。

想像して御覧、

血にorange色の漣、古風なびいどろ、

猫撫で声の錆びた衣から地声――腹から響く声…。

神は存在する――…

神はずっと前から僕にsignを送ってる――…。

――何処を押せば、そんな音が出る。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

まるで松毬に似た野胡桃だよ、と…。

焔の顕現――神へと向かう痼高い濁った声…。

囚われの身、

問うに落ちず語るに落ちる、

それでも 火炎の先端が蛇のようになる。

僕の多彩…！

虹いろのオーケストラがゆくぜ！

脳下垂体の蠢動…ねむりのときにかんじる、

こうとうぶへのふかいはたらきかけ――

愚か者、世界はまだ終わっていない…………。

機械の中の響きは、まだ、変わっていない――。

愛が…満ちてない…ひわの…声…

壮大な体系のごく単純な模型が不意に解き放たれてしまう…。

僕はまだ自分の才能を定義しきれしていない…！

— 小鳥たちのすがすがしい鳴き声 —

— 太陽がまだ始まらない僕という神話 —

人の宮殿、飛びだす、おどろかす、

あらわれる、

ブラジャーへの視線が、

ニヤリ、平常、ていねい、奥深い。

視線の最前線なのか！

夏も小袖——…。

All the girls, All the girls,

どっくどっく——どっくんどっくん…

心臓高鳴り気味のbabyにささぐ

(——アップテンポのリズム)

純粹 (嘘さ…君は小鳥のように震える…) [口笛と溜息の]

ハーモニックピアノ——エクセレント！

(…おいで、やすらかな不滅…)

ああ！…もう！…どっきんどっきん！……、ひ、び、びび、び、

crazy “funky”——I'm sorry

世間知らずで…「おっちょこちょいで…」 「少し、空想暴走気味——」

(いろとりどりの…ナイストゥミイチュウ…)

(やっつける頂点へとあがる『グレイトな一瞬』…)

……………君は君だけの

——幻の躍然たる不勝利！

(此の世界の二人に一人が持っている、

戦争する道具である。)

(園芸師の細工ものである。)

芸は磨くに越したことはない、

*Heel*の似合う脚線美、

信じる *don't cry anymore*

ほらすぐに *make up*(して、)

*City* ここでは 君だけが *heroine*

曲がり角に立って———少女たちが……………

全部行きすぎるのを見る……………！

ハイ、ミス、インフェルノのお嬢様、

クリスマスは帰ってこない！

永遠にね…！

「…ふはあ…わあ…」

(あらそうなの、はぶ・あ・ないす・でい)

「——もう、あきたのよ、そういうの……」

(ねむい、まいにち、げんきだ、きょうもねむい——)

カザリナイ 愛…!

スナオナ 愛…!

タクミニ シンガイ デモ サキオクリ……。

ビルディングよりも、

その傍のコンビナート群を見ながら歩いているときの、

センチメンタルが好きだわ…好きだわ……

“I've been around with a lot of girls,

but now I see that you are the only one for me,

after all.”

*appeal* (して、) 君だ け の!

*lalala lala life goes on...*

*lalala lala life goes on...*

どうせ限界の中で、垂れる、曲がる、擦れ違う、

眼も痴れる、嘘になる、それでも、

むわあああああああつとした熱は、

愛好者における垂涎。

やわらかいくちびるは——よみがえってこない……

ヘイ、ミス、インフェルノのお嬢様！

テクノロジーにトマトケチャップを！ ピザソースを！

互いの為進む *my way* とか、

正直わからない *highway* (で、)

加速するばかりの *symbolism* (とか、)

あやしげでうらめしげな *mistake* (だよ、)

It's my way, your way, no love way...

かんしゃく気味のめまぐるしい都会の瘴気あじわいすぎたかい？

ヘイ、ミス、インフェルノのお嬢様！

どこにあるのでしょうかね—— (あ、) る「の」れしょうね—— (れ、) れ、「れ、」

(さあ、夢の中、君はオグリキャップなんだ！)

(あ、) り「ふ」れた—— (こ、) い「の」てつづきね—— (れ、) れ、「れ、」

ろれつがまわらないわ—— (あ、) る「の」れしょうね……

「…………ごめんね！」

手を洗ってタオルでふいて、

そのタオルを洗面器にかけて、

それから、服を着替えて、

似合う服が、見つからなくて、

化粧を今日はしたくなくて…

好きな顔じゃなくて、

愛される顔じゃなくて、

でも約束もあって、

何かを始めなければいけないくて、

いますごくむずかしい一一…。

“The young girls were all fancied up for the party”

(君の君が美しくなりたいというのを大切だと思う、

本当の価値は後世の批判。)

(永遠に一人のものになる口先より不死身の姿勢。)

何も知らない素振りで沈殿する夜の灰になれ、

わたしは揺れる *time limit*

不安も孤独も 周期!

*Simple* (な、) *coordinate* (する、)



輝きに変わる *Always wanna be your side*

*City* ここでは 君だけが *smile*

All the girls, All the girls,

どっくどっく——どっくんどっくん…

心臓高鳴り気味のbabyにささぐ

(——クラシカルなフラッシュ)

今年こそは (品切れ…バースディのプレゼント…) [熱狂の一步手前]

ラヴィアンローズ——エキセントリック!

(…おいで、君は可憐なりリズム…)

ああ!…もう!…どっきんどっきん!……、ひ、び、ぴぴ、ぴ、

crazy “funky”——I'm sorry

かしこく思われたくて…「優しくなりたくて…」 「少し、期待し過ぎ——」

(いろとりどりの…ナイストゥミイチュウ…)

(やっつける頂点へとあがる『グレートな一瞬』…)

……………君は君だけの

——幻の躍然たる不勝利!

(あでやかで美しい野花を摘む女もいいけど、

青瓢箪のような顔はうっちゃって、好きな顔を浮かべる女もいい)

(まだなんだって出来る、無邪気に。)

どこにあるのでしょうかね——（あ、）る「の」れしょうね——（れ、）れ、「れ、」

（さあ、夢の中、君はオグリキャップなんだ！）

（あ、）り「ふ」れた——（こ、）い「の」てつづきね——（れ、）れ、「れ、」

ろれつがまわらないわ——（あ、）る「の」れしょうね……

「…………ごめんね！」

どうせわかってもらえない、

長いメールも、

くだらない電話も、

いってらっしゃいも、

おかえりなさいも、

よい一日をも、

おはようも、

こんばんはも、

おやすみなさいも、

わかってもらえない、

はじめてのキスも、

それからあとずっと続くキスも——。

ヘイ、ミス、インフェルノのお嬢様、

除夜の鐘なんて一発どう！

煩惱をうちやぶりに…！

「…ふはあ…わあ…」

(あらそうなの、はぶ・あ・ないす・でい)

「—もう、あきたのよ、そういうの…」

(ねむい、まいにち、げんきだ、きょうもねむい—)

カザリナイ 愛…！

スナオナ 愛…！

タクミニ シンガイ デモ サキオクリ……。





(...いいかい。音のない花火のように、)

(...自らを、爆発させるんだ。)

>>>何百丈もの高さから一気になだれ落ちるイメージで、

>>>反応をクリアにするんだ。

>>>そしてもっと、剣そのものになろうとするんだ。

間近に迫る、ゴーレムの天を衝く巨体を見ても、「冒険」の本質的賭金…、

視覚映像に対して言語が有する特殊な機能、モード—快樂的な、読み込み…。

ロバートは怯みさえしなかった。鉄梯子でもあるように、昇る、空中戦。

歯車即ち中継の集合体-星が定めた魔法的な仕組み。仁王立ちするゴーレム。

ずしんずしん、と動くゴーレムのノロマさをむしろ利用して、その腕に足を掛けて、

さらに高くジャンプする。離脱する、鮮やかな手並み。規範的形態の均衡で、

「付け加える」—それを了解可能にする。印象の本質的な模造。鋳型。

鉄壁という印象のある、ゴーレムの身体が俯き加減に見える、猛禽類の視点。

機能を維持するための増改築工事。迷宮。災厄。くたびれた神経に刺さりながら、

ロングソードを振りかざすと、一刀両断できそうな気がした。

さあ、今だ！」」」

HP 191 MP 182

攻撃力 183 防御力 67 機動力 127

(...あのばかでかい図体の息の根を止めろ)

(...あの化け物に引導を渡せ)

>>>この剣は、どんな装甲車でも真っ二つにする、

>>>魔法が息づいていれば。

>>>君が、そう出来ると信じてさえいてくれれば。

ごうごう、というゴーレムの吐息。ピラミッドの中にでも入ってような埃臭い臭い。

マリアは、右肘の神経の麻痺を来した。芳烈な酒。発酵しかけた葡萄酒。

「に……げ……て……」

カナリアより愛らしい声が囁きそうになる。意味ありげな光景が、生命に囁きかける。

だが、ロバートの勇敢な行動に見とれ、涙が肉色の流れを作る。角砂糖が崩壊する。

理性では逃げた方がいいと思いながら、救いがない。哀歓がない。非人道的破壊力に、

目が離せずにいる。その姿、まさしく勇者！ 桁外れた身体能力。英雄の素質。

村人の声の中には、――もはやどちらが化け物かわからない……。

個人の「自覚」は世界精神の「自覚」を模倣する――。諸刃の剣……。

展示会は小宇宙の記述。そこに、ブロンクスが通りかかった。

義侠心から、加勢しようとした瞬間、主調低音のように持続していた音楽が消え――。

光を反射させながら、ロングソードが聖なる輝きに包まれた。空っぽになっていく、

ゴーレムの頭上で、頭蓋骨折の不条理な時。世界を領有する物質的行為の爆発音。

その衝撃が訪うと――ゴーレムには、因果論的イデオロギーが生まれたのだろう。

ひとたまりもなかった。想像を絶する高い殺傷力、爆発地点のその距離内で、

ずばしゅっ、と音が鳴るとゴーレムは砂になって、したたり落ちていた。

朝の窓辺にとりとめもなく髪梳く女。

つるくさのからみて茂る柵。

屋根のつらなる坂の港町。

おまえの、その、澄みきった鉱石が、

生命の樹から落ちる、

毒薬は夢想を誘う肯定的属性にて、

憧れや悲しみを忘れてきた、

孤独の旅を終わらせるなみうちぎわ…

いつかモディリアーニのように――

(いつか、失速したミサイルように落下する) …

「パンを与えよ」

(水を与えよ) …

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
緑濃き下蔭を舞ひ黒揚羽！

*Flash* に *halation* あふれ夏！

心は…何処へ…行った…と…

偶像は…分離壁…へと…行った…と…

――よくある決まり悪き思い出…

あたたかき肌ならぬゆえ





少しずつ日脚が伸び始めた夕暮れはたてごとのつまびき。

(寝室にはマリヤ象の絵があります) ——

真昼の路地にラベンダーの色褪せる。

狼の吠ゆるごとくに憑きしもの思へば、

庭のひと隅に血の影が震え！

マリア！

マリヤ！

…からだにしみこまれた葉脈の流れ、

蕾から花へ、

途切れなくやってくる時の砂の堆積はいまや土砂！

真昼の墓場に家紋がより一層の悲哀。

宇宙の膨張における凸凹の回収——工業的な…

本能の回収——。

風はいま若葉青葉をゆらし過ぎた、

はかなき恋の過程なりけむ。

心は…何処へ…行った…と…

偶像は…分離壁…へと…行った…と…

緋色に染めた夕暮れの淡い光線が流れこんでいる川辺に僕とゆかりがいる。太陽は手ごたえがなく、ささいな生活の秘密さえ吐き出されるもののない存在でありながら、メメント・モリや、死の舞踏、黙示録という比喩的見解を思い浮かべればわかるとおり、小さな家と大きな家がへりくだった敬礼をしている。その毛深い飽食の像の乖離ゆえかもしれない。根源的な欲望や悪徳には千人の客観的意見が必要だが、誰がビルディングに、寺に、懺悔しよう。僕は、太陽という一つの眼があればそれで足りるのだ、打たれろ、このふりそそぐような愛撫。しかし僕は勿論本当の理由は言わなかった。僕は水がきれいな夏の海岸でけして成し遂げられない種類の卑猥な妄想にたましいをあずけ、それでも、不本意ながら一生懸命自由になろうとして、泥沼に一步足を踏み込み、泳ごうと、わざと眠っているふりをし、わざと目覚めたふりをしていたから。僕は黙っていた。下水道のようにくねっている沈黙をことさらに認めながらの不手際の有様で、猿にはその程度の知識しかないのだと感情と頭脳と生命の線に言い聞かせた。僕は宇宙が理解しやすい光線の曲がる先で、ゆかりの透けたブラジャーの先に暗黒物質の重さのようなものの在り処を感じながら、その奥床しく見えない通路ゆえに聖なる進化という軌道で循環して抜け道がない汚辱感を嘲笑する。僕の居場所は、無垢なショックにも柔軟なうごめきで意志を見つける。たとえ退化して歩けなくなっても、言葉が、もう口について出なくなっても、僕はすぐ海底の魚群に似た本能というものに裏返しにされる伝統的自然美。蜻蛉がいない場所で。蝉がもう鳴かない場所で表情をなくしながら、ゆるぎない生と死にさえ、夏の逃げ水があることを考えた。僕に入ってくるのは、空気のひたむきな愛、一粒一粒まで分解することのできない完璧な愛の成分表の目の前で。しかし知識はこの上なく難解な増殖を開始するのだ、

不自然なうそぶきのようにやさしい心が。洗濯機のスイッチでも入れたような疲れた重い瞼がなまぐさい夜の風や、突然のナルキッソス性の雨に濡れるということの呪縛を期待する。僕はよごれた義足とか、ぼろ靴を期待する真っ黒な塊にすぎない揺籃であるしかないのだった。それでも僕は新しく生き始めたような気がする無理な緊張、立派さを求める色目とかを愚かなおこないだと決め付け、思いこみ、それでも自然に自分の感じるままに控え目に、でも正直に、素直に、正しくあることを求めた。表面的なギャップにこそブルースがある。僕等は平和を求めても波瀾する程度の主義をしながら、見ろ、ウラニウム状の夜へと支配の星条旗、中国国旗がざわめく空の端では、紫がかった都会の荒れた皮膚を思わせる雲が非現実的な旅のイメージを彷彿させていた。僕の自律性や無償性といったものは不潔だと非難出来るほどの根拠や資格があるわけではないにせよ、たとえそれが僕における僕自身の考えであるとしても、単純に不十分な瞑想や思索のなかのノスタルジアとなるような下唇を噛むこの辛い気持ちに、胸が熱くなる。一番大切なこと、本当に大切なこと。ポーズや、ジェスチャーの中で、そしてまた、僕にうずまき模様の蟻地獄を想像させる。しかしそれとて、氷が美しく見えないだけの花瓶のなかの腐った水のようなものだった。何処へゆくのだ、強制収容所。僕の内部の塔が、がらがらと崩れてゆく。文明はだらしのないネクタイをほどくたびに人影まばらなプラットフォームへと吞まれてゆきそうな僕等の孤独を無防備にし、衝撃や迫力やまた拘束力も欠いた否定的言辞にさえ救済という、甚だうらめしげな窓をつくる。光さえ、健康的に浴びることのできない、ぱさぱさに乾いてゆくことが僕には淋しくて、それだから空っぽで、頑なで――。そのうち、ゆかりの顔が暈を被った月のように霞んでくるのが感じられる……。しなやかな麒麟が――。僕等は労働する猿だというのに、つつましくまだ愛のために何かをゆだねようとしていて、川

に飛び交っていた鳥の声が、耳に残るほど空を切り裂くような鮮やかな亡霊の声をよみがえらせる。腐敗するトルソーなんだよ、と僕は思った。悔恨が運命を浮かべ、しかし運命の前で僕はメランコリイの谷間に落ちるためストップウォッチを押される。それでも記憶はそのたびに深くなり、螺旋の高みからその根元をのぞきこみ精神と物質の腐刻画を見た時のような愚劣な謎をふくんだ微笑を浮かべさせる。底冷えのする寒さとは違う手首の白さのようなもので。

「…………しゃべらないのね。」

「――。」

余韻は長く緒を引き、僕はすっかり、ごろ土のうえを走る振動や、路肩の傾き、曲がり角の不安定な感じや、踏切の耳障りで何か心を落ち着かせないリズムを求めてしまう。豁然として美事な眺めに就かなければならぬ秋の本質的な懈怠を抱擁できぬまま冷たい剃刀を当てているせいかもしれない。青葉の照り返しや、花が咲き誇るときのころよさをみとめながら、神の至近距離にいる僕は、神へと続く扉を豊饒さだけにけして求めようとは思わなかった。僕は心臓が箱の中に入れられている想像をする。腐った林檎だ、と。孤独に怯えて狂奔するアメリカン・ホテルのベッドの燐光。こめかみのひよめきを生むシティー・ビュー。飛びあがっては滑り落ちる恐怖の覚醒。ひよわな志し。それに、未払いの勘定書が洪水のようにあふれる時代の放棄が尊厳を喪失させ、サイレント映画のように不思議なほど静まりかえる現実にヴェールをかけ、さらに遠い世界へと行きたがる破滅を求める心が暗黒の夜に豊潤な香を放つ可憐な花となる。沈んだ夜のくらい海でさえ海藻やくらげが、恍惚の水晶のような水滴と朽葉の灰色の懈怠と腐敗となろう。ひとりの夜を恐れてはならない。むすうの眼を、呪われた階段のように途切れさせてはならない。その幽韻の内によく色を見、葉を覚え、花のしおらしさに目を閉じている。クノッソス宮殿の壁画。ナスカの地上絵。あらゆるものが個人個人のメタファーにおい

ては通俗的な明快さを兼ね備えているという逆説みたいに、胸をえぐられ、アキレス腱を断たれるような永遠に露出するしかない種類のはらわたの伽藍堂の時間を振り向かせるがゆえに放浪させる。糸と虫が胚胎している繭という文字のように、奥に隠れたなまめかしいエロティックな色がトペアズするような感動。蹄鉄のリズム、静寂のリズム、街の音楽が奏でている人が人を幸せにするためのリズム。しかし灰色の壁のように垂れてくる不幸。赤を基調とした微妙な色あい、厳密にはくすんだ緋色が消えずに残っている埋葬所で冬のどんよりした低い空の記憶がかさなる。切ない時代の谷に従えば、通行止めはすぐに来る。地下へと果てしなく続く階段の超言語的なノイズ。でも、そこに凍りついたかと思まがうゆかりの裸体が残されて僕は白痴となり鋭く透明なその視線のなかで均整の黄金比率をさぐりあてる。

「…………昔、こんなことを考えたことがある。図書館で、何十冊かわからないくらい西洋絵画の本に目を通したあと、外へ出ると、俺は自動ドアを開いた瞬間から、うっすらと予期していたが、俺は不安だった。俺は收拾のつかない混乱の中にいるような気がした。ざわめく宇宙に空気と水と石がある！」

ゆかりはもちろん、視線に絶望を宿しているわけではないから、はて、この人は何を言っているのかしらと怪訝な顔をし、頭のおかしな西脇順三郎、それともポルノが好きだったとしか思えない金子光晴とおもいながら、ひそかに立ち上る驕りの冷感にしてやられながら、それでも現実に愛する男のためにそのことについて考えねばならなかった。それはそのような、裏切りになる。車の流れが途絶えてしまった大時計のうしろに時間があり、重たいガラスのうしろに噓せかえるような春がある。そして僕とゆかりのうしろには快樂をはかりつくそうとする幻影の焦げたにおいがする。そしてそこに、語り掛ける樹木もない。

だが、彼女は強固な主体性を持って、見事に彷徨の季節を表現した。

(お互いが風変りでなければ成立しないやりとりの中で、テープレコーダーに感動する。)

「――車輪がまわる、橋の下…」

ゆかりはいよいよ、幻の橋をさえ幻視した。そして、いよいよ、一個の死体は、二個へと増えた。海を泳ぐのが好きな者にとっての一生というものは、シガレットの灰のようにすさまじく魅惑的なものだ。と臨終に打たれた残酷な感慨は、ついに、そう、ついに、根底にたたえる屹立について探り当てた。微小なガラス玉とガラス玉が衝突したりフレインのきわみで、車輪がまわる、橋の下――陽気がまわる……しらじらとひろがるなぐさめがまわる……。黄昏から夜へと入ってくる精緻な城壁のほとりで、異数の世界へと降りてゆく瓦礫だらけの神経を称揚する。そして彼女の花に見とれる、そしてその蕾にそっと僕が這入ってゆく……。

1

血管が音を立てて

未来へと流れ込む

シーラカンスという雲

――きいて

かなしいくらい

いたい

あ、め、の、お、と

十月の雨の音

十一月の雨の音

十二月の雨の音

……黄金のかがやきをはなつ 舟



コンクリートの

しかばねが

やさしい

薄い羽根

あざやかな模様

花の色に

植物のやわらかいかたち

——合理的に仕組みられた構図が呼応する

ど、う、し、て

この世に生まれたの

……星の見えない夜空に

だ、か、れ、

どこにもみあたらない

夏のたくましい腕の中

惜しみなく隠し

惜しみなく奪われた

コスモスや虫が

そっと抱いているいのちの重さ

静寂が微熱する

中心点

――どうぞ

広いこの世界の秘密……

ちいさなまちでは

それがすべて

愛は重くて

苦しくて

秋の陽が

射しこむことをやめた

部屋

あなたの言葉に

傷ついた ま ま

僕は 象の扁平な耳を 思い出す

――忘れながら

2

あれって

思った

――日々の匂い

たよりない

指先に

目をとじるしかない

戦争が

はじまっている

……ほそい午後

——飛翔してゆく

飛び越える　と　い　う　遊　び　が

あたまのくずれた

すなを

——つくる

かなしすぎる午後……

様々なルート

一瞬の目撃

月食

削除された砂　の

たった　一度　きり　の

ベッド

気付かない内 の

気付かない間 の

答え

――五千年わからない

そして 今の 僕には

何も言えない

かがやいている

明るいまらい

消滅する永遠

肉色の絞首

遠い眺めの

わいてくるよう な 息遣い

いくたびとなく再生する

問いの欠片 が

一一抱く

3

心の中へ と

通り抜けてゆく 声 は

皺みたい に

思い出が くずれ た あと では

関節を鳴らす 川の音

一一一夜

……おさない労働力

この罨の魅惑

たとふるなら

穴のあく えくぼ

のびた松の枝 も

ゆらりと身をぐねらせた魚 も

もとめるものにのみ

ささげられる

……対話

——人を殺すための

道具はないのに

人を生かすための装置が

胸元をひろげている

この軌跡

理不尽なまでに盛り上げる

はだしのあなうらの

ドラマティック・シンδροーム

……あなたは

——泣くかしら？

いいよって

何故

そんなにも

やさしい

4

僕を包むために

僕が選んだもの

知るべきだ

それは

人が後ずさったときのもの

切り裂かれていく 時の

数時間あと に



地下深く穿たれる

あたらしい亡骸は

水溜りを覗きこむ

この無影燈

椅子をいやがり

嘘は

いまでも

心のどこかで

醒めている

無意味に広大な地平に

咽喉は鳴る

……なつのはじめのルフラン

蒼い光を

誰のものでもない

誰かのものであってはならないと言う

ふいに射した

ひとすじが

すてられてゆく

夏の終わり

……たしかめながら

——ときはいま

おもくるしい どこかへと

一瞬 しずまったあと

どこかへ と 旅立つ

(画面に向かって右側がコンピュータで動きます。)

● A ボタンをクリック

● B ボタンをクリック

ダッバンドゴヴォ／基本操作を身につけたら

グオギユン／高速ドリフトさ！

——さて問題あわじしまはどこのけんにぞくする？

1、兵庫 2、山口 3、広島 4、大阪

目標とすべき————描写の後ろで……猫が寝てる……

個性の役割がいつまでも風雅を歌う僕の骨髓の中で————

ほっふああああああああ、とピザトーストが出来上がる。

僕は食べる、痴愚の世界と知りながら、本物ではないと知りながら。

ナムアミダブツ唱えてるヒマなんざ一秒だってない！

「操作し／TE／くださ／I／」

▲階段をおりる——階段をのぼる

裸になって、馬鹿と呼ばれてもいい！

大の字で、スクランブル交差点の真ん中にねむれる根性が欲しい！

「俗悪な僕等のAボタンをクリック！」

(人間は無限の存在価値があるか！)

生きるとか死ぬとかそんな簡単に口にすることじゃないよ！

——お前が宗教なんかを語るな！

ゲーム／h a h a h a／始ま／R A／な／！

<パワーアップアイテム>

-----埋もれ木に花が咲く…

……AHAHAHAHAHA！

……ヤダアア、モオオウウウ！

ねえねえ、君、

そんなんじゃ駄目だよ、

うわあああああああ！

「いま、オートテニスをしているところだよ！」

ケテックロツケテックロツ／結局急ぎまくり

ティツティツ／真理なんかこの程度！

<生理上の不都合を和歌弄んでわかった気持ちになる大馬鹿！>

<惰性の臭さ！ 生きている困難を認めない動物的臭さ！>

(いま、常に提出するBボタンをクリック！)

——出鱈目な暴露史のつもりで！

「いま、氷の山をのぼっているところだよ！ ところ！」

モウモウモウツと…つめたいきりがふきあがる！

ふくれあがったしろいゆでだこになりたい！ なりたい！

■技術ではない——事務ではない

恥じ入りたい告白小説して————無条件の宥しか……

甘え、ずるさ……いくら思い知っても救いなんざうまれない……

そうやって自分の顔を覗き込む癖やめたお前なんかに！

お前なんかに！ 日本がわかるか……！

コントローラーを使用し／TE／し／TE／くださ／I／

シ デ

ゲーム／h a a h a a／し／TE／し／手／死／手／E／

……L I F Eが増えます。

増える…のは…嘘だけ…さ…

……CONTINUEか、RETRYを選択。

思春期発動！ S F 的近代破壊の秩序の化身！

——卯建つが上がらない……

おならだよ！ そんなの、うんこだよ！

自分と向かわないで……呪術だなんて枯れた柳————

浮かんで消えてゆく刹那刹那と向かい合わないで何が歌！ 何が風流！

舞踏せよ！ 歩行せよ！ そして、飛翔せよ！

などと……ああ、などと孤独な久遠の題目の第一音に来たのに——

結局ここには猫しかいなああい！ 猫しかいなああああい！

ズザアアアア！／狭い場所に追い込まれ

ドギュウウウウン！／また元の棺桶さ

## テトリス

---

てとりすを、やってみる。

おなじ、いろの、ぶろっくを、けす、てとりす。

ぴこぴこ。

たかたんたん。

ぴこぴこ。

たん。

ひたすら、おなじどうさの、くりかえし。

かんきょう、びでお。

てとりす、らしい、しにそうな、おんがく。

さるにでもわかる、たんじゅんめいかい、さ。

でも、さるは、この、ゆびづかいけない、

さる、に、きたいしすぎな、ぼくら。

たいくつ、を、ごまかすための、ふもうな、げえむ。

つむ。けす。

ちゃきん。ちゃきん。

なにかが、きこえる。

ひだりめ、と、みぎめ、を、

ちゃんと、つかってる、き、が、する。

すこあ、が、かさんされる。

て、ゆ、く。

せいとう、が、おとっていく。

て、い、く。

さびついたらましがん、になってしまう。

とか。

とか。

ぴこぴこ。

たん。たん。たん。

つむ。

いみふめい、な、じかん、が、ながれる。

ながれさろうとする。

すな。

すなになろうとする、じかん。

ちゅうごくからきた、こうさ、になろうとする、じかん。

かふか、のように、へんしん、するのを、まつ、じかん。

じかん、を、たとえているような、きぶん、に、なってくる。

が、たとえているものは、えいえんに、わからない。

しゅっしゅっしゅっ。

ぴこん！

「あなたはこの、ぶろっく、です。」



しいん、とする。

ぴこぴこ。

たん。ぴい、ぷしゅん。

たん。たん。たん。

ふと、おもう。

とくてんすう、に、きょうみをもてるひとはえらい。

しゃかい、の、かちまけ。

てとりす、でさえ、かちまけ。

でも、きがつくと、とくてんすう、に、きょうみがでてしまう。

なんだろう。

なんだろう、のどが、かわく。

なに、まじ、になって、る。

かがみを、みるのが、こわい。

しんけん、になってる、じぶんが、こわい。

でも、さっきから、まどのそと、では、あめが、ふっている。

ぴこ。

たん。たん。

ぷしゅっ、ぴい。ぷしゅんしゅん。ぴい。

てとりす、は、かんがえるための、げえむ。

ほんしつてきに、ふもうを、

かんがえるための、げえむ。

この、ぶろっく、は、おもいのだろうか。

この、ぶろっく、は、かるいのだろうか。

この、いろは、わかる、という、いみいがいの、

なにか、ぐたいてきに、こんな、りゆうで、この、いろにしました、

という、りゆう、は、あるのだろうか。

てとりす、ばんざい。

と、とつぜんいいたくなる。

てとりす、なんて、きれいな、くせ、に。

くせ、に。

くせもの。

そのくせ、へんな、くせ。

ほうこうきい、で、そうさする、てとりす。

じゅうじきい、とも、いう、てとりす。

なにか、へんな、のうないぶっしつ、が、

わいてくる、き、が、する。

わらわらわら、してくる、き、が、する。

わなわなわな。

あどれなりん、とか、では、ぜったいに、ない。

けつえき、が、あおくなるような、かんじだから。

でも、あどれなりん、の、ほう、が、かっこいい、てとりす。

かっこいいですよ、てとりす。

ぴこぴこ。

ぽとんぽとんぽとん。

につまってきた。からまってきた。

なんでこんなので、げえむおおばあ、になるのかと、

さいしょ、は、おもう。

うま、でも、おもうし、

しか、でも、おもうが、

うま、しか、いえない、ばか。

だんだん、すびいど、が、あがるのだ。

わかってるだろう！

わかっています。

そこに、にんげんの、よく、が、みえてくる。

にんげん、の、せいしつ、が、うかびあがってくる。

これ、ここにおいておいて、あとで、でてきたやつで、けす。

これ、いまあせるひつようはない、あとで、けす、

と、やっている、うち、に、

きがつくと、ぴらみっど、こうそうびる、のようなものが、

げえむ、がめん、に、できあがっている。

がめん、が、おもくなる。

ばぐ、かな、とおもいたい、ひとの、のうないかいり。

のうは、が、すこし、くるう。

きぶん、が、すこし、わるくなる。

さきほどまで、ひまつぶしだったのに、いまは、すこし、ちがう。

というか、かんぺきに、ちがう。

は一どるが、たかくなると、ひとは、あせり、

あせりのなかで、ひとは、うまくなろうとするのだ。

いや。

いやいや。

やるかやられるか、という、ふうに、おきかえられてる。

たかが、げえむ、と、いえない。

もう、げえむ、じゃない。

ぴこ。

あ。まで。ぴこ。

まで、まで、ぴこ。

ぷしゅうううっ。

いっしゅんのようにおもうが、

そうならなければ、えいえんに、つづけるのだというのに、

そしてそんなことをしたら、

もう、じんせい、になってしまう、てとりす。

げえむおおばあ。

ひょうじされる、

もういっかいは、

それとも、やめる？

くりかえしたくない、

でも、また、ぼたん、で、さいかいする、

ゆうえんち、は、おわらない。

「おお、竜也！」とかもちゃんが言った。

トラックが、どる、るう、るう、と前の通りを走ってゆく。

男妾のようなものをつれた醜い、人の好い、情の厚そうな女が、

「今晚は」と言って――る…。

(Artist's life is not easy in anywhere...)

一日のうちで、人間と話をする唯一な時間の到来。

ものうげがローブのようあたりを乳房のように熟させ、

見物の視線の焦点となる、鳥。小熊のような犬。

暗中飛躍の蒼い月汞の水が流れる――…。

燃ゆるが如き額ぬかの上、

あるいは、渺茫たる青海原が陽春の日の下に凧ぎ渡るよう――に…。

わけもなくはじめての言葉を探した――…。

ダンスダンスダンスへ入ると、マスターに、中原さんに、光の中の少年までいた。

<ねがいはいつまでも、あべこべだ>

「（ここは、不思議の国の入り口だったのか？）」

[語り掛け] ――《ナイルの泥のようなつぶやき》…。

過去――現在――未来へと渡る連続した瞬間またはその時間…。

僕はenjoyしようと思う。あるいはHappyしようと思う。

お酒を飲んで、たくさんご飯を食べて、煙草を吸おうと――そして牛のように眠る、大の字になっ

て眠る。蛙みたいにお腹を見せて失神しながら夜の意識に浮かぶ。

蛇だって、なんだろうあの不思議な花は、と言う。

蛙だって、なんだろうあの不思議な花は、と言う。

そっと眠る古い希望を撫でるように、疲れた時代の、疲れはてた心、弱い心、情けない心、意気地

のない心がいつのまにか、朝霧のなかで――夜明けの光の中で、感じられる……。高い樹へ、高い樹

へと、次第に望みを大きく育てて、内から外へと向かう凝視。鳥の巣のような頭を撫でて、朽ちた鳥

居の下に座ろう。植物独特の力強さを感じる八月の雑草が勢いを増し、間もなく肉体はその怠惰な喜

びだけで充満する、おびただしいクッションの葉影。言葉もなく眺める、哀感。

薔薇はさみしく咲く――、魂はくもれる空に、肉体は霧に閉ざれたる街に。

危うい均衡に身を委ねる……。世界地図の穴から、快晴の文字。

クレオパトラに逢引きにゆくアントニウスのような気持ち――。

それにしても、かもちゃんの声は、田園風景の快い風を僕に想像させる。

でもそう思った途端、割合に真実性をこめて自分の心を叱っていたことに気がついた。

入った瞬間、誰もいなかったらどんなに淋しかったことだろう。自分はそれでも明るい所ではとて

も泣けない。どこで泣けるだろう。絶体に秘密にしなければならない者の為に泣こうとする怖ろしい

自分は、どうしても明るいところでは泣けない。圧迫、我まま、不公平、原始的衝動…。

そこにはエジプト美術的な一面を隠し持ったジャック・リップシッツのモニュメンタル的な性格。

たとえ、おしゃべりの鸚鵡に首輪が見つかったとしても、だ。

クロスワード・パズル見ていると、毛虫が這いまわる。

「――あれ？ 間違えたかな…」

と、ボケておいたけれど、もちろん、間違えていなかった。

そしてそこにいる人は十年そうしてきたように、ひきつった笑みを浮かべ、ページでも手繰るよ

うに、まあ座れや、そのカフェオレボーヤと言った。彼は顔や掌に刻まれた皺をさすり、自分が

歩んだ遠い道程に目を細めている。

絹とびろうど――の声…。無数の透き間へ、クレヨンを蒸留する。

皮の薄い感受性に行儀よく白い脚を投げ出すように、ゆかりは、にこにこしていた。

いつからか、ロマンティシズムや、写実性から離れて、肉付けの緊張感と生命力にあふれた造形。

アルベルト・ジャコメッティの突き詰めた表現。

眼は口ほどにもものを言う。言葉は、またたきもせぬ眼――…。

無果木の葉で隠している女は、蛇くちなわの美しさを知るだろうか？

疾走する躍動感覚が、その一瞬を切り取って静止する未来派のヴィジョン。

「…あれその人、確か東京で弟さんの手伝いをするんじゃ？」

「――何のことだ。」

何のことだ、は僕の台詞である。どういうつもりだ、と返そうかと思った。

アスファルトの快適な時代に終わりを告げるように…！

弾丸に驚く砂埃か、メタルド・ロツソ！ 具象に塑の危殆！

（「自然には境界がないのだから、芸術作品にも境界があってはならない。」）



……うしなわれた花や、昨日の宝石をよみがえらせるところの芸術。

「いや、なんだ、見切りをつけたのさ。」

「見切り発車したのに？」

「うまいことを言うな、馬鹿野郎。」

「馬鹿と言うな、アバと言え。あばば、あは体験。あはは、カバの水浴び！」

「ニョホホブラザーズノメロヂがほしいか？」と、かもちゃん。

まりおぶらざあす、というあの有名なニンテンドー的なやつのことらしい。

タタッタタタンタン！ タン！

「ニョホッホッホホッホッ！ ホッ！ ニョッホッホニョホニョホニョ、

ニョホッホッホホッホッ！ ホッ！」

……ニョホホブラザーズの哀愁。

どうしてだろう、無性に僕は、ワムのケアレスウィスパーが聴きたくなる。

そしてそれは、僕にコンドルが飛んでゆくを連想させる。

カルタや、アメリカンボードゲームを考えながら――。

去年の雪は沈んだ鐘の中へゆく。僕等は殺されゆく鶏である。鋭い緊張の吸収。

――（意識は何処へ向かうのだろうか？）――

――（この意識は正しいのだろうか、間違っているのだろうか？）――

夜の街をひとりで歩きながら、無性に一人でいることに焦られる。淋しくなりたい。辛くなりた

い。でも、人恋しい。放っておかれないはずなのに、それは甘えだとわかっているのに、どんどん

前へ進まなければいけない、そうわかっているはずなのに――。

(女の子が聞いたダロ、私はどうやって生まれてきたの、と。)

(かもちゃん、答えてやった。それは簡単なことです。おとうさんのニヨホホが、

非常に凶暴なニヨホホナイフになっている時、女性のニヨホホな状態が、ニヨホホです。

そしてなんだかニヨホホ運動をしたあと、ニヨホホです。非常に動物的な、即物的な、

いわずもがなのニヨホホです。)

何故だろう、鳥の馬鹿なセリフに泣きそうになる…。

しかし聞いてみると、仕事がつまらなく、やり甲斐がない上、お客様扱いされるので、逃げて来

たそうだ。噛んでふくめるように聞かせてくれた。また、ここに星が降りてくるのかな、と。月が

昼間でも見えるのかな、と。ひたむきに、何ものかを求めて、許しを得て。俺は頭脳にでも、右腕

にも、胃でも、腸にでもなれる。でも、やれることは神経だ。血液だ。それはそうだ、実質副社長

みたいなものである。かえすがえすも残念なのは、マスターは隠居志願者ではない。肩がきがどん

なに面倒臭いものかを知っている人に、肉体の喜び、感動する体験をうしなうのはむずかしい。い

つも人に影響を与え、自分の仕事に誇りを持ち、何か上等で、文化的なものを目指しているのだ。

生活にだって年輪のようなものがある。

ああ、医者毒薬を用いるごとく、か。

四角いかたまりの単純な形に還元される。

ふとした瞬間に、幸せが舞い込んでくる。

「……弟に言ったら、わかってくれたよ。」

「めでたい。」と、かもちゃん言った。

[去りながら、見かえりながら] ——《あこがれはゆうぐれになる》…。

頭を落として眠っているローブ姿の老人と肘掛け椅子…。

しかし、それにしても——。

しかし、それにしても——。

「それにしても、お前死なないな。」

——と、光の中の少年を見て僕は言った。

二、三言交わしてまたさっきの倍重くなった空気に襲われる、沈黙。

ユニクロファッション。GUファッション。

その赤いカチューシャかわいいね。ありがとう、ゆかりさんからもらいました。

どうした蝶ネクタイつけていないぞ。お前のトレードマークだろ…。

いろいろなアルバイトをして生活している人もそうなんだろうか——。

(職業の選択の前に、建築物のような堅牢さを持った、しっかりした人生設計が必要だ。)

(生活難に苦しむのも、生活必需品という意志空間の序列の投影のようなものだ。)

(僕等の街が栄光を求める時、またひとつの闇が生まれるのだ。)

その中には、明日の浮浪者がいる…。国も違えば、生活様式も違う。

餓えることや、貧しいことにも差がある。罪が邪悪なのかさえわからない街もある。

ねえ、そんなに難しく考えてどうする、ケースバイケースさ。

積みりに積もった朝の堆積から個人の生活という芽が吹く…。

そう、いつまでも中原さんも、光の中の少年も死なない。

マスターと少しの間、同行すると言ったが、結局何事もなかった。

何者からも連なることのない、孤立した存在……。

効果や効力についての理論なら中原さんに説明したこともあるのだが、まったく、何もない。

「……………そのことで、いま、相談してたんだ。」

感覚の花火が口笛を吹く――。

閉ざされた虚ろな窓が、消えてゆく。

水にうつった月影が、苦い青梅の実を噛むように――…。

男女関係が、征服であったのを、平等な愛にまで高めたいという主旨のことを論文で説明する、

かなしさ。社会でこれを実行しても、本質的な性差は変わらない。男は男、女は女だからだ。

そこで心の中でというとhumanismでかなしい。imaginationすぎてかなしい。

「学校に入ろうかな、と。」と、中原さん。

しかし実のところ、僕は別の口として、僕のツアーのキーボードや、ピアノとして、

どうかな、とも思っていた。

「めでたい。」とかもちゃん。

大分前から、鳥が話をまとめようとしているのを感じていたが、

なるほど、と次の瞬間に思った。ごとっ、とビールを出した。スルメを出した。

「めでたいから宴会するべな。」

ここぞとばかり、にこお――っ、とした。

ほうっ、と僕はフクロウした。

「上側に腕を構えて顔面に来たパンチをガードするとき、俺の中の筋肉がスウェイしてパンチを避けて身体を引く。」

「ただの弱虫じゃん。」

（彼は多分、ガードするというのは、ただガードすることではない、ガード-ディフェンスにも、受け身のようなものがあり、自然と避けるという本能が練習によって身につけている、という風に語りたかったのだと思うが――）

「というか、どれだけ腰が引けてるの。」

（四面楚歌、というような場面で、男はしずかに、髪をかきあげ、不敵な笑いを浮かべて言った。）

「――サイレス。」

（ふあいなるふあんたじー、とかいうもので、てきのまほうを、ふうじる、じゅもん。）

「――ボキヤル。」

(ふぁいなるふぁんたじー、とかいうもので、  
てきがとなえた、サイレス、の、まほうを、うちけす、じゅもん。)

「…………俺って、いぢめられてる？」

「いぢめてない。」

「いぢめ、だよ。それ、いぢめ、ですよ。」

なぐっていい？ ボクシング、習ってるけど、なぐっていい？」

「いぢめてないから、無理。」

「いやでも、いぢめですよ、それ、いぢめ、ですよ。」

あの、ジャブ、とかいうやつでもいいから。」

「でも、すごい風の音するんでしょ？」

(彼は、顔をやられキャラ風の、しまりのない顔をうかべながら、  
うりゃ、とかいう脱力系の掛け声をし、  
へなへなのパンチを繰り出してくる。肩にあたった。ぽすん、と鳴った。)

「ヤバい——折れたかも知れない。」

「いやそれ、いぢめですよ？」

「いや本当に、折れたかも知れない。病院行くからタクシー代ください。」

(くっくっく、という笑いがきこえてきたので、よし、とする。

冗談は終わりにしよう。)

「でも、敵がサイレスをとなるけど、あれって、白魔法だよね。

白魔法つかえるんだったら、そいつ、敵じゃなくね？」

(そういうふくざつな、つつこみ、しちゃ、駄目。)

「簡単に言えば、白魔法というのは、嘘なのだ。」

(というか、おまえ、誰?)

「嘘なんですか？」

「はい、嘘なんです。実はあの、＜白＞という言葉には、  
ばっちい白とか、よごれた白という程度のものなんです。」

「まちで？」

「はい、まち、なんです。」

(俺は少し考えてみる。ほんとうにほんとうに、考えてみる。)

「……じゃあ、包帯が白いという理由は？」

「――あれは、汚れを吸いこみますよ、という意味なんです。」

「まちで？」

「はい、まち、なんです。本気、と、かいて、まち、とよませるんです。」

「その、まちめに？」

「はい、まちめに、はがいちめに。」



「アストラルプレーン(Astral Plane)」・・・「星々の世界(≡宇宙)」――

「アストラル体(Astral Body)」・・・君は何も言わずに、静かに見つめている・・・

ミルキーウェイ（は、）摩耗する、流れ星の軌道、挙動不審な映写機――

交錯するから撃ち落とす、不可視の引力に捉えられながら…………

予め用意された選択肢とストーリーの範囲内で――アウトロー／無法者(／ならず者)。

[ラジオの声： ロールプレイングゲームとは、・・・「役割を演じるゲーム」・・・]

「下りる」――「渡る」――「(神が天から)降臨する」…………。

急速に薄められてゆく、藻のいろ、人のありふれた過ち――。

天啓。神が人にもたらず知識。未来の予言。「秘密の暴露」「神による秘密の開示」・・・

《宗教的、政治的、道徳的な理由などで、民衆が所有する特定の書物や絵画などの記録媒体を破壊する》

・・・誰かの喋り声が耳を奪う。

なぜよばれたのだろう・・・真夜中の階段を…………降りて・・・ゆくように…………

世界は回る・・・皮膚、毛、眼球にメラニン色素が全くないように、

彼は白豚のような薄ピンク、毛の色はプラチナブロンド。

――「危機の時はいつもここへ来た」――

風土病などの地域性流行病

ペスト、スペイン風邪、天然痘

[ 大量の国外脱出、あるグループから複数のメンバーが脱退して別のグループを立ち上げる ]

…異才。

…(礼儀、表敬)

……「因果応報」「自業自得」「報い」「果報」「天罰」

悪意の凶弾に倒れる――

爆音……

…「恩恵を施す」「義務を負わせる」

正確な軌跡を描いて飛び散る

靴の中の足

……禁書目録――発禁処分。

《魔道書や歴史書、または一部の人間しか閲覧できない、

預言書、永遠のラビリントスへ迷い込む入口……》

文明の停滞期――黒歴史…

「障壁」「障害」 ……夢の中！

「The Night Land (へ、) ようこそ」

法や権威は形骸化し、選民意識から生まれる強い結束力こそが新しい力となる。

「これは何だろう？」――『これは、植物のシラミ』……

高僧や神官、存命の先王、高位の貴族は虐殺される。

「これは何だろう？」——『これは、花の影の饗宴』……

交換される、強奪される、そういう時代に——

「これは何だろう？」——『これは、マジックマッシュルーム』

容疑者が全滅する。遺跡が全壊する。アブラムシやカイガラムシの食欲減衰効果……。

「これは何だろう？」——

\*

魔法陣は一般に9フィート(2.7432m)で作られる。

北にラファエル、東にウリエル、西にガブリエル、南にミカエル。

東を風の黄、西を水の青、南を火の赤、北を大地の緑。

我々の祖先は、肉体的な劣化や損傷においてまず「祈り」として使用した。

その時、動物の声が音楽的な効果を齎したことはよく知られている。

ここにおいて、以下のようなことが言える。

(極めて高度な呪文は呪文が長く複雑になる理由はここにある) ——

《超自然的な現象を起こす儀式魔法が簡略化された理由はここにある》……

魔法使いが『言葉』(を、)詠唱するのは、言葉を異質化させて、

塩やナイフにするところにある。

(本来的には、「王のみが引き抜くことができる剣」であると言える。)

ゴリラやチンパンジーとは違う人間は、言葉それ自体の波動が、

空間に影響を与えられることを発明した。あるいは、発見した。

ここにおいて、魔法とは、《暗号》であると言える。

また呪文の効果時間や付加される魔力の強さは術者の力量に増減するものではなく、

『知識』と、効果発動条件における、――精霊や神霊、

交霊術-人格的憑依であると考えるのが、より正確な認識と言えるだろう。

呪文は、経文のような手続きを必要とする。

そしてその意図は『神をレリーフする』……。

魔法の力には、炎や冷気、電撃の効果を発揮するものがあるが、それは、

このような理由からである。しかし、「悪魔払い」も「浄めの儀式」も――。

より本来的な魔法という意味では、神官的な職業であったことを証明するものだ。

ゆえに本来的には冠や錫、マントやローブなどは、威厳を表し、

絶対的な存在として行使する代行者という意味合いがある。

プシューッと音を立ててドアが開く。

電車に乗りながら、ドアの外へ顔を向け、手すりをしっかり握りしめている。

空は今にも降り出しそうな重い雲に覆われ、

緑色の木たちは嵐が来るのを囁いているかのように見える。

若イコロノオ写真ハ、

キットオキレイデショウネ。

足元においてあるバックを面倒くさそうに、足を使って自分の方に少しよける。

僕は帽子を冠り、眼鏡を上げる。先へ進むのがこんな時に、とても怖くなる。

頭が真っ白になって声が出なくなるライブの一瞬間にも似て、

この感情をどう表現したらいいのかわからない。

自分だけ、取り残されてるような気分になった。

泣いたこともある。

心が本当に遠くへと行ってしまうような時、僕は暗い話を思い出す。

花田の自殺のこと。テレビの収録で控え室からトイレに行ったら、僕の話をしていて、

あんな奴、あれだよな、という話をしてる。普通にしばきあげてやろうかと思ったが、

しなかった。ステージが大きくなればなるほど求められるものも大きくなる。

時が経つのは本当に怖い。僕はジャーナリスト志望なんだと思う。まだ、学生なんだ。

でも、みんなはそんなプライベートの僕を知ってくれているわけじゃない。

煙草を吸うのにも気を遣う。酒も好き勝手には飲めない。

星新一の、ドアを開けたら的な不思議な世界の考察だけど、

――あれって…実は暗いことを誤魔化してる人間の、

どうしようもない努力のように思えてくるから不思議だ。

静寂と眠りのような脱力感。誰かに今までないぐらいに、言葉を投げかけ、

ただ頷かれていたいような気持ちがある。何も反応を示さなくても、いい。

何故かすべて聞いて貰いたい、すべて知って欲しい欲求にかられ、

時間も忘れ、話続けていたくなる。何かが変わってしまった。

ずっとぼんやりとした顔つきで窓の外を眺めている。

ゆかりがいる。

心が安らぐ。それだけがあればいいんだ、とも思えてくる。

動物にたいする憐愍の欠乏。常識にたいする誤った見方。

世間を口にしながら、世間とズレまくってるババア。

ゆかり、世の中はそう、上手くいかない……………。

「お前、これどうしてくれんだよ。おお！」

電車の中で誰かが叫んでいる。

チンピラ風の男が、学生を絡んでいる。

見て見ぬ振りが、社会の掟だ。

因果応報っていう仏教哲理でも口にするつもりか、われわれ！

昔だったら即刻しばきあげていた。

それでN警察に捕まるのも僕は全然怖くなかった。

力でやりこめることは簡単だけど、頭を使わなくちゃいけない。

僕はつかつかと近寄り、鼻先にひゅんひゅん拳を数十発放り込む。

ぺたんとそいつが尻餅ついたら、屈んで、失せろ、とドスのきいた声でささやく。

ぴゅうううう、と逃げる。

空虚な気持ちよ、逝け。

しんとする。ゆかりが何か言いたそうにしながら、何も言わない。

僕は思う。早く死ねよ。意地悪い猛り立つもののなかに荒々しい息をつき、

大雑把で投げやりな気持ちの中、言う。

学生、立派な大人になれよ。

社長が言う。昔、連帯保証人になって、借金を背負わされたことがある。

そんなに大した金額じゃなかったから、困ったわけじゃない。よかった。

でも信頼していた。社長が疲れた顔をして、そこらへんにいる、

おじさんと変わらないように見える。少し表情が曇った。

無理もない、こんな込みいった話をするのは神崎君が初めてだ。

ある日、そいつの店へ行くと、窓ガラスが割れてる。薄汚いコンクリートの壁に、

その看板の跡だけが白く残っている。暴走族のいたずらで、壁にスプレーがされ、

極彩色になってる。店の中はもぬけのからで、カビと埃の混じった、

いやな臭いがする。

ドアが壊れてる――。

駅に降りた時には、傘が必要になっていた。

青白く光る水槽に、闇が支配を始める。

どしゃぶりの雨が開いたビニールの傘の上で跳ね上がっていた。

靴は濡れた土にまみれ、足がどんどん重くなっていた。

シリアスな話をしてもいい？

ああもちろんそうだよ。そうだと、シリアスな話は湿っぽい話、暗い話のことだ。

僕の印象はどんどん悪くなる。

コオロギがゴキブリだったみたいに――。

闇がくずれ、澱んでいる。こんな冷たいよそよそしい風物を眺める。

いやな沈んだ気分で、ここは一体何処なんだ、と思う。

何をしに自分がこういう所にいるんだ。

……雨に降られていると、本当に暗い時代のことを思い出して、

ブルーになる。他人の粗や欠点を探し出し、詰ることまで出来る。

面白くないからふてくされ、つまらないことを考える。

ユダヤ人が虐殺された、とある話を知っている人は、

ユダヤ人が虐殺するパレスチナの、とある話をどう思うんだろう、とか。

ちくちく刺すだろう。

こんな時は笑ってる奴がいるだけで人を殺したくなるんだ。

人が自殺したくなる音楽やゲームがあるみたいに、

人が殺人したくなるのは、とかね。

そんなことを山ほど考える、邪魔ものの赤ん坊のような頹廢的な思考。

パチンコ屋を見ると人間の屑でわんさかあふれてるような気がする。



人間に期待するな。

人間が特別だなんて思っているのは、箱庭で育てられた娘だけだ。

強姦されたあとで、警察にセカンドされてしまう。

間違ってる。後味が悪い

交番の前に掲示板があって指名手配犯が載ってるが、どうして、

警察官がないの、とブラックジョークを言いたくなる。

ねえどうしてあのウジ虫がここに載っていないの？

畜生道の言葉に耳が腐る、口が曲がる。

馬になる、鹿になる。

盲目になりたい。

適度に硬く、やさしい座り心地のソファーにすわりたい。

月がなくただ星あかりでしか見えない池の裏手の、

菖芒の枯れ叢むらの間をぬけて行く。

陰鬱でいて悲しく、苦しい感じをととてもキレイに表わしている、

金木犀。僕の記憶が間違っていなければ、三島由紀生の金閣寺の最後は、

生きようと思った、だったような気がする。放火しておいて、

罪を償わないような奴に生きる資格なんかない。

大体三島由紀生って、太宰治が嫌いだと言っていたけど、

この話の中に太宰治っぽい奴が出てくる。どういう心理なんだ。

昔、こんな話を聞いたことがある。

金曜日に人が死ぬ怖い話。

清掃業者の人が、

患者の生命維持装置の電源コンセントを抜いて、

床磨きの機具の電源を取っていたことが判明した、と。

# 煙、霧がかったフリーズ！ #MY LIFE THIRD

---

Lunch Atop a Skyscraper, c.1932

Charles Ebbets (1905 - 1978)

—ハンモックに載った自転車みたいな人

...(講和条約の斡旋者とか、取引をやる商人なら、

こんな写真は撮れない。) ...

チンパンジー が新聞を読む

文字のコード読み取り蛇の皮

... (圧倒される好奇心。) ...

... (ストリートパフォーマーの身体能力を見ながら、

肉体は心の曇りを取るように思い、苦悩を救う、と) ...

—Tulips and Arum Lily

駅の窓に射す幅が狭い通りの太陽、

パステル画のような家へと帰る途中—。

「目に見えない深みが森の小道に—あるって..

いま、その素顔—が...素敵なSILHOUETTEとなってよみがえるのさ。」

Iron fragments

fragments of wood

...(そんなのトランプ賭博、オペラハット！

麝香のような匂いのするコエンドロの葉) ...

…（カート・コバーンの一服）

…（ナポリへとゆける憂鬱な巴里のような午後にだけ、

エッフェル塔に触れられる、自由の女神に触れられる。）…

「自転車の籠いっぱい花を積んで走る街—グリム童話的に、

うさんくさい、刑務所的な誤解だけど…僕はいま、軽い昏睡状態…」

雨の中のミュージシャン

詩人の散歩

カフェテラスに座る女性たち、

デニムガアアルさ、ああヴェネチアの運河色のね、

無意識のフェティッシュを感じるモニタアア。

「モノクロのヌウッドを見たよ、燃えるように腐敗するんだ、

映画セットなんだ、膨張なんだ、思春期の身の上調査なんだ。」

<夜の中に流れ込もうとする意志は何故？>

《自分を祝福されていると信じられないのは何故？》

突堤へ！ 遊歩道へ！

空に浮かぶ鯨へ！

「ロッカールーム、鍵盤の足、蜘蛛の糸、リクライニングソファと化すストレッチ、

“Excuse Me”と“close-up”」

I'll stay here one night.

These icicles formed in one night.

...（ディズニーランドみたいな笑顔、フロイトを降伏させる。

「彼が特別に訓練された犬でもない限り。」）

...（シャークフィンだって言って！）

——煙草を持つ女性の手

...（でもきっとホワイトヴィジョンなんだ、

それもきっとホワイトイリュウウジョンにされちゃうんだ） ...

「ああ、鏡の丸い曲線！ 官能が無題になる瞬間、蛇や猿の顔を止めて——、

人間自身に変える瞬間、それでも、煙、霧がかったフリーズ！」

スティミーとドヘロは武器屋を覗いている。

ちなみに、スティミーは小人であるため、背丈はいくぶん小さい。

金色の豊髪であり、容姿は驚くほど端正である。

堂々としているのは、そのせいかも知れないともドヘロは思う。

どことなく気難しく見えるところもあるが、話してみれば、気障でもない、普通の青年だ。

また自己紹介の折りに、ハーブが弾ける、と教えてくれた。

そして、何故か盗賊みたいに、シーフツールを持っていた。

針金、合い鍵の束、金てこ、油、小型ハンマー、くさび、ロープ、ナイフ、手鏡。

「たとえば、蝙蝠系のウィルム・ワイアームみたいなモンスターには弓か、魔法で攻撃するのがいい。」と、スティミー。

「弓は空を飛ぶモンスターに一番効果的だから？」と、ドヘロ。

それは胸元が開いているからよく乳房が見える、と言っているようにも聞こえた。笑い声。

言っていない、言っていない、でも、ストリップショーに行きたい。不思議に勢いづいた機械のように、勝利の夜風に知覚麻痺したい、とスティミーは思った。

眼球の奥にまで当たる主要階段のジグソーパズル！ 軽快な全力疾走！ 刷り込み印刷！

自惚れと色気が病的に強い端正な顔立ちは、古来から傍若無人なステレオタイプとして扱われてきた。そこには、背が低いというコンプレックスの作用がある。魚のはらわたのように放っておかれたくない彼等は、酒をラッパ飲みした。音楽を奏でた。そしてブレーキを踏まなかった！ だが、小人のそういう典型的な資質は、少しずつ、ジョークや話術へと姿形を変えて

いった。また小人族の中には、かように、手品師になった者も多い。

すべてが消耗し、すべてが滅びる世界では馬鹿なことを考えるのが義務だ、とスティーミーは思った。安全な白亜の塔で、みどりの海底にいるような論争？ 弱腰の質問？ 違う、その日その日ごとに勇敢さを求め、夢見心地に四方八方、蜘蛛の子を散らす。そうでなければ無感覚な人形と変わらない。悲しさと腹立たしさの内に人生という映画はあっという間に終わってしまう。肉が生への執着であるように、援護射撃を信じ、ギクシャクした足取りでもユーモラスに前に進む、我々の肉は常に酔っぱらいであることを求める。はじめは誰もが苔の水であり、植物や木々であったこと、微風に微動する感覚がペしゃんこになった灰色の感覚、その昔、原生生物であったことを忘れてしまうほどに。不動の周囲の中心を膨大な水の流れが貫く。快感の付与、欲望の洗練は、暗闇に向かって地団駄を踏んでいるリード・セクションのようなのだ。花ばかりが、この世界で美しい。

グリムリーパー

そら！ 夜闇色の死神が狙っている。

「もちろん、そう。」

そうだが、魔法というものや、モンスター特有の攻撃を仕掛けてくる本能-天敵-排除思想という刷り込まれたドラマツルギーのもと、実質は、それほど効果的と言えるかはわからない。ただ、遠距離攻撃で一発で仕留められるのが、弓というものの良さだとは思っている。

ひびき

枝のこわごわしく震える微韻の、儂い音の香彩。

空気の中へと、異彩を放つ神秘的なまでの移ろい。

胸を刺すような、ひとすじの軌跡の号外――。

屏風を引き裂き、墜落する、繊弱な影のメタフォア……。

セクステット、セプテット――。

ところで、とドヘロが話を折った。

「前から一つの疑問だったんだけど、スケルトンとゾンビとゴーストはどう違うんだろう。前から結構ごっちゃになっているんだよ。」と、ドヘロ。

いい質問だ、と思った。

スティーミーは論理的に、分かり易く説明した。

ヘルメット、ケープ、仮面、ヴェール、とー。

「まず前提として、今挙げたものは全員死んでる。スケルトンは肉がなく洞窟のモンスターで、基本的には、眼窩だけが見える。この進化系か、同列のものとして、眼玉だけの特異体がいる。ゾンビは生前の服を着ているか包帯を巻いている。服も、包帯も死の意識を得ていないためだ、と解釈されている。ヒステリックなのは鏡を見たためだ、とも言われてる。また墓場や、ゴーストタウンなどのモンスターとして認知されてる。ゴーストは、霊体で、足がなく、向こう側が透けている。また、基本的に記憶を持っていない。記憶を持っていれば、話せるから、攻撃を仕掛けてこない。この場合のゴーストは、不思議な話とか怖い話のそれとして説明される。また足がないので、足音は聞こえない。」

ふっと、手足の関節の接合が悪いようなゾンビのことを考えた。神経組織は段々老衰する。欲望は後悔の旋律を奏でる、常住の自己を消し去りたいがために皮膚細胞が張り詰める……。

一一店には、客はいない。

ショーウィンドーに、買うことを想像したこともない商品が売られている。

調子の狂いを整えるために獐猛な牙があるのか、と思う。

「もう一つ質問。ゴーストに弓は当たるのか？」

「当たる。これは、不完全な霊体だから、攻撃が可能なのだ。」



——と思う……と言いそうになりながら、そこは強く言うておくことにした。

それは不思議にロマン的で、もちろん、のすたるぢや、である。

「それにしても、スティーミーは賢い。すっかり、謎が解けた。」

「いやいや、種族の傾向としてだよ。小人は、話好きな部族だ。」

だが、小人という一見肉体的に劣っている種族でも、こんなにも頼もしい、とドヘロは思った。しかしスティーミーはと言えば、頼ってくるドヘロを仲のよい友達のように思っていた。ドヘロは、自己紹介の時に自分のことを無個性だと言った。

だから、今度のことは誇りなんだとスティーミーが言うのをうらやましい、と言った。

何となく兵士になって、こうして選ばれている自分が憐れに崩れ、跡形もなくなるようだ、と。いや、とスティーミーは思った。本当はみんなそうなんだ、と。誇張しすぎているのが我々の嫌いなんだ、と。そしてそういうものに確実に対立項として存在するのは、内省的な理解-普通さ。そういう美德を兼ね備えているドヘロが、大変に、正直で、実は賢く、それでいて、世の中において地味だけど一番必要とされる人材なのだ、と。

スティーミーはその発言を聞いた時、ドヘロは信用できる、と思った。

またロバートと仲がよく、小説を読んだりするのが好きなんだと言った。

深い美しい窪地に降りてゆくところに見える青みがかった花萼<sup>はなぶさ</sup>。

「……実は関係のない話があるんだが、聞いても？」

「——答えられることなら。」

「……………剣の種類について、教えてほしい。前から、気になってたんだけど、どうも、よくわからないまま、こうして弓を握ることになってる。心残りだから、教えてほしいんだ。」

「ちょうど武器屋だから見に行こう。」

劍のコーナーに移動する。根源的な凶暴さを秘めている、劍のあやしい輝き。

「ほら、ショートソード。少し短い。これは小人の我々が愛用している。これが、六十センチから七十センチ。もちろん、五十センチの、本当に短いのも、現存している。ロングソード、これが一般的な劍。ドヘロも兵士の時に使ってたものだ。これが、八十センチから九十センチ前後。もちろん、ショートソードと長さの上ではあまり、変わらないロングソードも存在する。では何をして区別するかと言え、刀身の幅。これがショートソードより大きい。また、ロングソードには二刀流、盾だのを持つのが、一般的なスタイル。ショートソードや、ダガー、というのもある。もちろん、片手を空けておくことで、技を駆使するパターンもある。もちろん、両手で使うのがいけないわけではない。また魔劍の類も、多くはこのロングソードスタイルであることが多い。」

「うんうん。」

「ここから先は、特別な武器屋以外は置いてない、基本的には特注品なので、説明になるけど、バスタードソード、これが百二十センチから百五十センチ。これは、ツーハンドソードの間としてよく説明される。ただ、扱い方においては、ロングソードより難しいと言われている。ツーハンドソードは、百六十から百八十センチ前後。ただし、二百センチのものもある、と言われている。これは盾を用いない兜や鎧を着た重装備者の武器。これは背中で運ぶか、馬に乗せるなどの運び方が一般的。また、すごく重い。これより大きいのはグレートソードで、二百センチ以上のものと考えるのが分かりやすい。」

「なるほど。」

「もっと説明してもいいけど、どうする？」

「ありがとう。スティーミーは本当に物知りだな。」

「いやいや、種族柄です。我々、小人は昔から、たくさんの鍛冶職人を生んできた。我々は、戦地へ赴く代わりに、武器をつくり、防具をつくり、道具をつくってきました。だから、種族柄です。アイデンティティです。自己に資する摂取として、こういう知識があります。種族柄です。」

どうも、それがスティーミーの口癖らしかった。

碧色の瞳と、銀色の髪のドヘロは、笑った。

「あとで、防具屋に行こう。」

何も感じないはずなのに…………その手が震えているのが、ハッキリと分かった。

—————ずっと叫び続けていた。だから声なんてもう出ない…………

そして、この身体はもう何も感じない…………木偶…………

—————夢でも見ているのだろうか…………？

雨宿りしていた…………と…………つ…………ぜ…………ん…………の…………タ立ち——

—————眼前の大木に落雷が。その時、目の前が、雪景色に…………

アマゾンのジャングルの奥深くに…………ここは？…………

—————夢でも見ているのだろうか…………？

童話の世界の小さな家…………宇宙服を着たもう一人の自分が、目の前にいる。

—————これはパラドックスなのだ。静謐な空気の中のオフビートな笑い…………

独断的な、詩人は冬山にいる…………粗末な小屋にひとりで…………

—————夢でも見ているのだろうか…………？

いや、僕は夢を見ていた…………救いがない時代の夢と厳しい現実——

—————想いは擦れ違う。都会が飼育する人間というモルモット…………

夏の燦やく青い草原…………空へ向かって伸びる風力発電用の白い羽根……

—————夢でも見ているのだろうか…………？

長い孤独から目が覚めると、

他力の力、手に触れたことがあるゆえの、

長い喪と有無を言わさぬ閉居が始まる。

パーフェクト・ドリーム...

Baby please...

僕の剣は明らかに、遁世だか墮落だとかいう

後ろ向きの幽室へ向いていて、軽信、狂信、非常識、

欺瞞、インチキが世間を賤しく思っている。

それが余計に悲慘な、大いなる過誤。

一一心は、山河草木、吹く風、立つ波の音までも、

クリアにする装置なのに、

溢れんばかりの才能のせいかな、そうに違いない。

柔らかいのか、そうなのか…………。

議論なるものが明らかに偏ったもの-化石の口笛、

杓子定規が、身のふるまいを飾ることはない、

人の何を気にするでもない。

面倒な手続きが、たまらない虚無を宙へと投げ上げる。

天の後光が射した地下の奥底の虚構に意識がまどろむ。

思考力を麻痺させる、

ノンストップで浮かびあがる孤独の風船玉を、硝子の時代を。

ほんの少し前まで、僕は悉く何かを悟ろう、

心得ようとしていた。

――生の過剰状態、

悩まないという状態。

人生はプリズム、化け物の鼻面、

ブルドックのさながら喜色満面の状況に、

疑り深さをかえって虹とするのが、

安穩ではないかと言ったところで往生極楽は遠い。

<これは確かなことなんだよ>

《そいつは確かに知恵の輪》

(…………君に届くだろうか、この雷鳴)

蛾が舞っている。芥子泥が目に入る。

毎日の激しい不安や耐えがたい焦り、

押し殺した欲望の中で僕は餓死しそうになる。

戸惑っていることで自分の中の怨念を自覚する、

そして怨念に、本能が混じってゆき、

ある日、手術するところの救済をおのずから自覚する。

去りがたいものって何だ、俗世間を棄てて、

仏門に入ったところで世を遁れる気持ちは、

女体の裂けた下腹の産声のように、

僕はまた、酒色にふけりたくなる。

――抑圧は目に見えない鉄格子へと突進する。

つれづれなる折り。先進国の陰謀とばかりに大奮闘するRPG。

ありえないドラマに片腹痛い僕等、単純なPeople。

人生はいくらだって料を作り、僕等を囚人にする。

所願成じて、幻想-精神の大海を泳いでゆく。嬌飾が、

かたときも離れない基督や佛陀。

いいや、ロートレアモンやランボー。

悪魔は由来口説き上手で、偉大な悪魔は、

宗教心を人に信じ込ませ天国を作った所で墮落させる。

耳目をくらまらすが如き、派手な局面。

ドイツ・バロック特有の複雑怪奇。

永久に組み込まれそうな石垣。

そして粗末な人間状態ほどこういう心理に引っかかる。

地位や名誉を持った者ほど心が腐ってる。

水を切るもの。

火を渡るもの。

――排気ガスみたいな態度でもくもく煙草をふかすから、

態度で示してほしい、偽者の世界よ。

…………世の言葉なんて書きなぐりたくない。

義務教育につくられてしまうような心操行跡。

馬鹿げた処理の仕方をする奴が多いのもえてしてこういう理由。

さあ供物の祭壇に近づこう。

純朴な羊飼、ナイフを拾え。

お前は心の内にあり、そうぞ、大事な我が心の内にある。

さあ、心の衛生学を始めよう。演出に従って、始めればいい。

めでたいことは世に沢山ある。

盲目に近い素潜りをはじめ。

命綱はない、

言葉は何処へ向かうー。

神は、純粋な気持ちをいつだって利用する。

東には、ユダがいて、右にはヒトラー。

北には誘惑のSatanがいて、南にはメドゥーサ。

仄かな夢ばかりが内臓の器官を次々に摘出する。

腸、肺、肝臓。さあ、言ってやろうか最も下等な人類よ。

俺はお前が本当にそのことを自覚した瞬間に、

自分とは無縁の若さに挽歌という、

愛とかいう盃をかわしたくなる。

夜の縞模様入りの過去の摩擦音に、

ガラガラ蛇やアナコンダが生まれんことを。生ましめんことを。

社交辞令をパールでこじ開ける、



「久しく聞いていない…」

(聞いていない——…)

僕は歓楽と憂愁を引き離して生存の快味に深刻な人生の悲哀を感じる。

理性-血の使い道を知らない愚者が、

知らず知らず自分の意向と反対なことを論じている。

滑稽だ。法律もこの類にあって、

憐れみを気遣いじみた趣で誘う。

メスを最初に発明した奴が、

こんな残酷な凶器で実験やらかすだなんて誰が気付いたって言う。

ウィンチェスターも、原子爆弾も。

そうだよ、足下には相変わらず地雷が埋め込まれていて、

毎年尊い子供たちの足が吹っ飛ばされる。

パーフェクト・ドリーム…

Baby please…

「自分を守ろうとか、自分さえよければそれでいいとか、

それ自体がもう一つの病気なんだよ。」

「保守それ自体が、一つの精神の病の証なんだよ。」

——立派なふりをしたって救われないうぜ、でも、

強力なゴムでくくりつけられたみたいに不幸な話は枚挙に暇がない。

何もしなければ、死んでゆく人や、傷付いてゆく人が増えてゆく。

それに対する永遠不滅の魂の言葉が、

(自分を守ろうだって?)

(自分さえよけりゃそれでいい、のか?)

――頭脳は明瞭。

相変わらず、天地における世界解釈。

さて僕は携帯電話を開き、現在の日付を確認する。

神父が、ものごつつ胡散臭い調子で言う、

わては神父やさかい、お説教が得意や。

研究者が言う、神だって人間と少しばかり違った生き物にすぎない。

もちろんそうだ、神は急がない、そして与える力を持たない。

邪まなのは罪の観念が遙か以前より解脱するためであったからだ。

でも僕は神様と名のつくものが嫌いなんだ。

偶像崇拜でもアミニズムでもいい、いちいち、

しつこい話をされても困る。

大元の神様が一匹のけだものであると思いなよ、君!

そいつを中心にピラミッド式に、あるいは放射状に展開されるものなら、

所詮それも人類の縮図ではないか。

人間の悪が根源的に同一であるということではないか。

しかも、神様なんてさしづめ木で作った偽物じゃないか。

そんな愛着に、源氏や平家だとか、古い時代のアメリカと日本だとか、

世界大戦争の類をこの世の悲しみとばかりに嘆かれても困る。

中国人は、日本の電化製品は素晴らしいと言う。

壊れない。

ねえ神様、アンタの必須条件は信仰だが、木のアンタはボディタッチが悪い、

ごつごつしたやつに、人類滅亡の話で脅迫されても説得力がない。

ねえねえ奥様、と強めに荒げられたヒステリー口調で喚きたくなる。

軽蔑せよ。

いますぐに超越的なものの顕示に、魂の消えるような逸楽を味わえ。

なにが、輪廻転生。

はやく無色透明へ落ちたい。それともブラックホール？

一つに回帰することもないふしだらな教えにどんな罪の観念がある。

貧乏が悪い。

生きている心がけが悪い。

人間の形で喚く七面鳥の方がよっぽど価値がある。

「かもちゃんのことか。」

――ここは、ダンスダンスダンスである。

「そうそう。お前のことだ。可愛いな、もう少し寝てろ。」

つい、余計なことを言ってしまう。

「お腹減ったらお前食べるからな。」

「そうだな、――ッテチガウダロ、

チガイマス、タベテスマワナイデ！

喰えないダロ、喰われてしまうダロ。

こんな命の瀬戸際に、ハンバーガーも食べずに死ぬる鳥！」

もぐもぐ。

美味いか。

うん。

寝ろ。

うん。

.....

.....

何かおかしいような気がしてる。

他人に伝えるということも何かおかしいような気がしてくる。

でもそうだ、面白くなく生きてるくらいなら、

いっそ、死んでしまった方がいい。

感傷を克服しろ！

人類発生の下らなさに輪をかけたように、

火星に水があったぐらいで騒ぎ立てるこんちくしょうな人類。

どんな算盤だ、新しい宇宙人防衛戦術は見つかったのか。

ああ、どうでもいい。

ああ、俺は今巨大な驚になって、

蛇を掴んで天空高くまで持ち上げてやりたい。

実行せよ、より大きな奇跡が必要になる。

蛇をつかんだ鷲、ああ神ばかりが人を安くする。

それを愚かな人が余宗をそしりいやしむ。

自己と自己をも含む全体の問題なのに一一。

説けば説くほど否応なしに増してゆく放蕩の真味は、高直。

厭う心は得手勝手な了見をつけて楽しみや苦しみを誤魔化す。

万歳、仕返し。

いま、俺の頭の中に復讐という二文字が象形文字となる。

ああ、みな佯りの言の葉を話す。

滅びゆく肉体、世界の摂理。

それが規則正しい食事や健康そのものの消化や排泄によって日暮れになる。

なにが健康だ、馬鹿らしい。

俗塵にまみれた考えが、人の心まで稚くする。

しかしそれが弱い人々を震撼させる。不統一の実存。告白。

祈りや願いは自分を裸にしないで寺社建立させる。

ああ、人の如くありけめ。

<私は神だ>

《と一一言ったところで…》

(…………君に見えるのは立派な芸術品か、ゴミか、と。)

裏庭に案山子でも突っ立ててマゾヒズムを満たしているのかと、

見ている、南無阿弥陀仏。

ラバダバダバドゥダ Hey hey!

厳格な母親に溺れるマザコンのようなものか。豚。

真実に道心などないぞ、

無情の木や石と一体化する連帯感を切り取って貼り付けるだけだ。

帰れない大人たちの足が花見遊山を望む。否、歓楽街へ。

平然とした紋きり形へ、翻訳調。

あさましく心の穢いものばかりが、

きれいな言葉や、美しい身なりで誤魔化すことの不潔。

人生の蹉跎ではなく、財産や、

権力における永遠の現在のように固着している黄金の時代がつくる、

下らないベストセラー。

やわらかいご利益。

人間を弁論反復しない、喧伝。

いよいよ悪しき方へとゆく、退屈のシノニム。

進歩的・現代的。

ああ、ただ心の惹かれてゆくままに失ってゆくものばかりが美しい。

コレクションに対する情熱。声援を送れ、好事家。

これは惰性の最後の部屋、学問。

アカデミズムが地獄へおとそうとする高貴なもの高尚なもののみ。

時間がなければトルストイも読めない、

馬鹿でなければ人間革命など読めない。

それが社会の潤滑油だと訳知り顔で言いながら、

そんなこと、暇を感じるタイプライターと、

己のわびしさを訴えかけるスピーカーがなければ成立しない。

悲劇的なまでに、人は鋳型の生き物。

騙される奴、利用する奴の顔はみんな一緒だ。

ろくでもない奴、社会に必要なのない奴、

それもみんな二こと三こと話せばわかる。

気味悪いほど多年の背徳的結晶。

パーフェクト・ドリーム...

Baby please...

後生大事に靴-歩くための何かを引き摺って、

心は縁にひかれて移り変わってゆく。

いつまでも腹が決まらない男の品格ある娯楽。

しかし主義主張もあるまい。長い苦勞を経て到った彼岸でも、

達観や修養を必要とする。

観音の慈悲も、文殊の知恵も、聖者にしか必要ない。

色即是空、あたらしき煩悩の始まり。

蝉の声に馴らされよ、ラジオ、あたらしき饒舌。

少女が大きく口を開ける。

あくび。

難聴のように一瞬きこえなくなる。

ある日、白い手紙が届けられた。

「あなたの人生です。」

「これは宇宙からのメッセージです。」

それでも首に、剃刀をあてられたような気分。

白い街角で、少女は風船を手に取りながら、

信号待ちしているような気分。

いつでも、遊園地や動物園を探しているような気分。

もがき横たわっていた、気怠さが、不揃いな粒子。

次の瞬間……。

<文化人>——<知識人>…。

驟雨が屋根を叩きでもしたように、自称の言葉、羞恥の感覚。

仕切り板がある。アコーディオンカーテンがある。境界がある。

同時代の声が、昼の瞼を閉じさせにやって来る。

しみ出した黒い汗。

ほらほら、永遠に燃え続けているはずの火に、

もう薪が見つからない。

桜の花も散っている。



生きている鉛の心臓が、大義名分というムカデにすりかわる、  
リゾーム化した社会の多面的な性格がたくさんの孤独をのせて、  
出口へと急ぐ。

でも永遠に終わらないように見えるこの迷路には、重層音が、  
密林のように浮かび、鮮やかな夏の思い出も乱世の国盗り物語風。

イヌワシが翔ぶ。

クマゲラが翔ぶ。

裏側の見えない空へ。

木々の葉むらがざわめく。

夜な夜なみづうみに垂れていた下枝がひっそりと濡れている。

それでも制服に身を包んだ少女は、

いま、目の前に一番うつくしい時代が流れていることを、

知っている。油が燃やされ、セピアの雨雲を抜け、

透明な炎が瞳にまでのぼってきて、

少女は太陽の時代を謳歌する。

ーソノ玩具ハ、ブルー、ナ、合図、ヲ、送ル。

トンネルにー入ってゆく……。

はかないパステル画風。リアル過ぎて何処か切ない静物画風。

首都圏とベッドタウンを結ぶ大動脈。

(ホワイトになる/ブラックになる)

坂のてっぺんから自転車が下りて来るように、

時計。授業の終わり。

少女は走る、誰にも見えないけれど走る、走れ走れ少女――。

少女の胸の秘密めいた谷間、薄暗くおどろおどろした過去、

人にはけして言えない傷、落ちこぼれた記憶の欠片、

お菓子の包みがこぼれたように、

ひらいたりとじたりする魂の被膜から噴出する繊細な顫え。

幻影のようにゆらめきが流れてくる、時間の靴音が、

心の中に降ってくる、通行禁止と書かれた、

胸の中にぽっかりとあいた空洞に。

ほぐれたり、むすんだりする。

重苦しいのに、ほのかに溶かしている、

集団意識のScreen。

画面の中央にひとつの顔が浮かんでくる。

隠されていた自分の顔、自分だと思っている鏡の中の顔。

足の裏からのぼってくる教室の空気。

揺れているものはけして奪えぬもの。

傷つけ合って確かめたいがそれは滲む血のように痛むもの。

熟れ続ける果実からにがい蜜の最小単位が、

みだらに暗い管の内をめぐって腐る。

窓からぶらりと風が入ってくる。

いばらのうみで――。

閉じた眼の奥で肯くものを感じながら、

唇が見える。puzzleはただちに分解と構築を繰り返すモザイク。

こころもち膨らみながら、バス停の景色を思い出す

ランドセルを背負っていたころのわたし――…。

まだ、おんなの瞳になっていなかったころのわたし――…。

舌が見え、歯が見える。

不意に、父の顔が思い浮かぶ。

そしていつかの麦藁帽子の夢がよみがえる。

そんな風に、涙が、泣き顔が、黙って目を閉じてゆく、

フォトグラフィーのアルバムに、黙って言葉もなく佇ちつくす。

ここはゴンドラのある水の街。

国境へと続いているこの川の流れが階段を昇る跽音になる、

廊下を歩く足音になる、咳払いの音になる。

いつか重心を失った、冷やかな、雨の気配。

ビルは歪み、道路はねじ曲がり、行き場のない人びとが思い浮かぶ。

やがてそういう不幸な世界の風のなかから、

ゆっくりと咽喉を流れ、光が擦りぬけてゆく。

はらわたをねじり、血ぐるみひきずり去ろうとする力。

チャイムが鳴った。立った。

起立/礼。

少女はアイロンでも掛けるように学校指定のバッグを取り出し、

H Rを待つ。見開く眼の行方を知らない、放課後。

相槌を打つこともたしなめることもない、放課後。

針金のような二本の足が残されている。

昨日までとは違う空が浮かびあがり、もう、誰も振り向きもしない。

星がこぼれるように降っているから、草がやさしく揺れているから。

でもなまずやうなぎのような情報に疲れて、立ち止まったら、

もし振り返ったなら、君はきっと、金縛りにあったように、

手も足も出せないまま、その少女に精気が体中から抜けていく感覚を持ち、

ひとつの時代の一瞬でしか感じられない神の悪戯を思い描くだろう。

テーブルクロスに花瓶を置いて、そこに一輪の花を飾ろう。

眠れない夜の予期せぬ嵐みたいに、平穏な生活のページを破こう。

もし、遠くの星がどうして美しいのかとエスプリ混じりに聞いたなら、

ある少年はこう答える、恥じらっているから――…。

ある日、僕は、駅へ行った。

大阪と奈良の間にある。乗り換える-快速、座席に座る…目的地。

夜になって駅を降りると、スーツ姿のおじさんが言う。

遠くに、立派なオリーブいろのかやの木の森がうかがえる。

「俺は塩と水道水だけで数日を過ごしてた。」

「テレビにお前の顔がうつっていたのを見たことがある。」

それは違うと説明するのに、二、三十分かかった。

馬車は何処へゆく、か…。

シンデレラ、カボチャの馬車へゆく。

通り過ぎる人が、僕を変な眼で見た。

あやうくきわどく揺らめきつづける人生の時と場所における行為。

がやがやがやがや、パチンコ屋みたいに、

高速道路みたいに、もうなにがなんだかわからない—。

僕は有名人ではないと、そういう人にも向かって少し声を大きくした。

でも誰もサインを求めたり、話しかけるようなこともしなかった。

駅から外へ出ると、折角来たんだからと、

インスタントカメラで写真を撮ってみる。

「素晴らしい夜だ。」

と、駅前の占い師が、僕を見るなり、あわてて店じまいする。

僕はそれに大変気分が悪くなった。バイオハザード並のモンスターの扱い。

ふと、目線が合った。

見えない額縁にあざやかに切り取られた<『眸』>

占い師は、バツが悪そうに、

僕の写真を、覗きこんだ。ぼそぼそ、と独り言。

(あなたのためになるところもあるでしょうし、

ただそれっきりのところもある…)

表情が、めんどろな裁判のけしきのように暗くなった。

僕は、お腹が減ってきたので、店を探す。

ちょうどいい店が見つかった。

店に入ると、何か得体の知れない臭いがした。

「な…ん…だ…こ…れ……………」

抑揚がなく文章をきれぎれに棒読みしているような言い回しになる。

そのせいか、トイレに行きたくなった。そう言うと、

指さした。

僕はそれをニール・ヤングの歌から感じた、

感傷的な時代の受け取り方のように思った。

玄関から居間、風呂場とトイレ、キッチン。

いまだきめずらしい和式だった。用を足す。

店の中はうすぐらく、店主は俯いていた。

メニューを開くと、マジックで『死ね』と大きく書かれていた。

(あなたは、いま、まじゅつしょ、を、よんでいます。)

すぐに気分が悪くなって、閉じた。

足もとに、棒のようなものが落ちている。

「ラーメン。」と僕は言った。

店主は答えずに、足下の棒を拾った。

不意に改札口で会ったおじさんを、何処かで見たとような気がした。

しばらく考えてみるが、思い浮かばなかった。

…どんぶりがやって来る。

なんか、嫌な気持ちだったが、食べてみる。異様に赤いスープ。

僕は一口食べて、こんなものは食えない、と言った。

店主はやはり俯いているので、勘定を置いて、店を出た。

変だ、おかしい――。

それはTVのリモコンの位置とか、冷蔵庫の中身が変わっている、

というように…。びろうどや羅紗や、宝石いりのきもの…。

でも僕は疲れているのだと言い聞かせた。

光が、にたにたにたにた笑っているようで気分が悪くなる。

と、目の前に小さな子供が泣いている。

色硝子のようにあざやかな、世界を蝕んでゆく水溜まり……。

こんな夜中に――。巨きな祭壇に捧げられた供物のような<『眸』>

ザザザザ、、、

と――言う音がした…。砂嵐-テレビを消す。

ザザザ、、、

「どうしたの？」と聞いてみる。

膝を曲げて、片目をつむって……。

小さな子供――男の子なのか女の子なのかもわからない子どもは、

ずっと、泣いている。僕は頭を撫でてやる。

これからちょっと用事があるんだけど、お前も行くか、

あとで交番に連れて行ってやるからという、肯いたので、そうした。

僕は美術館へ行く。入場券を買わずに、中へと――。

約束していたのだ。中に入ると、友人が現れた。

いつになく暗い顔をしていた。

通路をくぐって、大きなフロアへとゆく。



蛆がわいたチーズみたいな彫刻。

芸術が、富士の樹海の遺留品で出来ているように思えてくる。

真っ赤なチューリップの花のように変わった――。

夜を溜める――醸造のような、瞬間……。水晶の岸辺にうちあげられる――。

と、とても綺麗な女の人の肖像画が、

とても大きな瞳でこっちを見ている。

――これを、“繊細で硬質な抒情”とでも言うのかな。

「昔、患者の臓器売買をする医者が出たんだ。」と友人は言った。

「は？」と僕が言うと、

友人は黙った。

子供は、いつのまにか、消えていた。

――回る回る 幾重にも回る――

「さっきまで子供が出たんだよ。」と僕は言った。

友人は見ている、と言う。

何処に目をつけているんだ、と僕は思った。

そして相も変わらず僕は――遠くからの声を聞いている……。

……………（仮面の支配者）と、誰かが言ったような気がした。

気のせいかも知れない。＜『美術館の黙示録』＞

帰りに、警察官と遭遇した。

「ここらへんで殺人事件があったんですが、何か知りませんか？」と。

僕はそんなものまったく知らない、と言った。

不意に、子供のことを言おうかと思ったが、

何かが、それは言うなと思ったので、

すみません、お力になれず、と言った。

数日後、犯人が捕まった。

被害者の顔がうつって、僕はハッ、とした。あの子供だった。

そして、犯人の顔は、あの警官だった。

ザザザザ、、、

と一一言う音がした…。砂嵐-テレビを消す。

違う風が吹きはじめようとしている。

透きとおったものがなしさがひそんでいた、

何かが始まろうとしている。

ザザザ、、、、

僕は、不意に、駅前で会った占い師のことを思い出した。

「何か見えますか」と写真を見ながら言った。

どうしてだろう、そこには親子連れしか映っていなかった。

それから美術館で会った友人に電話をかけると、

何の話だ、と言われた。

そもそも、夜中に美術館なんかに入れるわけないだろ、と言われた。

ポストカードの町風景みたいな、静かで、のどかな、田舎町がある。

無軌道で、若く、自意識もふんだんに持っている僕のように、

屈託のないあかるさのあるのびやかで風とおしのよさそうな町。

その郊外に、幽霊屋敷がある。『洋館』である。

過ちては則ち改むるに憚ること勿れ、といった感じだ。

どういう意味かと言えば、『過ちを犯したらためらわずに悔いなさいよ』ということ。

――『肯定したい』『受け容れたい』『味わいたい』というのが、

生活の基礎だ。でも、僕はぼんやりと考える。

それが『死者を世の中にとどめている執着』なんじゃないか、と――。

長らく誰も住んでいないのが一目で了解でき、『蔓』だの、『蔦』だのを這わせ、

腐り掛けた木の扉に、錆びた蝶番いが見え、

傍にある大きな樹の枝などで住居は取り囲まれ、一体化している。

異端審問、異常分娩――

『中にコンピュータールームがあったらSFなのにな』と思った僕も、

『カメラマンの指示通りみたいに目を向ける』――。

葉腋――腋生……

ある日、夜の十時か、十一時に夜道を散歩していると、

夜中に何か軽いものが転がっている音がするな、と思った。

——陳腐な言い草だけれど、僕は眉をひそめていた。

、、、

そこが、幽霊屋敷だと気付きながらも塀の中を覗くと、

街灯にぼうっと照らされた『夜光貝』のような庭に、

空き缶がごろごろと転がっていた。あれは『コカコーラ』である。

(年寄りの家に似た気配と匂いに眩暈がする——… )

見た限りでは斜面やらの勾配がとあるわけではないし、人がいるわけでもない。

最初はもちろん、何かまぶしく面白いものでも見るような眼差しを向けていたと思う。

『実はその空き缶に内蔵されている磁石が反発して——』とかいう、

馬鹿なことも、咄嗟に肉付けはできないくらい、

見事な『アイリッシュ・ウィスキー』だと思った。

でも、空き缶がごろごろと転がっているのを見続けていると、はっと我にかえる。

不気味だった。しんから無知な人みたいに愚かな僕の心霊体験。

化石植物——無機化学……

底曳き網——揺籃……

けれど、それだけだった。そんな光景はバックミラーの自動販売機みたいに、

どんどん遠ざかる。ゴミや糞みたいに、どんどん遠ざかる。

ある日、ふたたびその近くを通りかかったのは、『一方通行の狭い道』や、

『足を速めて改札を抜ける』ような状況の時で、

その庭に、ひとりの少女がいるのが見えた。

『完璧に美しい少女』だと僕は思った。もし、あっさりそう口にしたなら、

無論『ロリコン』ではない僕は自身の美的価値観に腹を立てたかも知れない。

(少女は身体を解き放つように、身を震わせ、骸骨になった――…)

それを僕は、辛辣な物言いで『奇妙ななりゆきで見たおぞましい真実』と呟きながら、

その饒舌は、時として『物静か』であり――同時に『生真面目で悲しい』…

ちなみにそれは真昼だった。誰かが無防備にシャッターを押したみたいに、

不意の錯覚から現実的でやすらかな希望の世界へと旅だった。

――『肯定したい』『受け容れたい』『味わいたい』というのが、

生活の基礎だ。しかし付け加えるなら、老いや病気や死、職業への迷い、

容貌の衰えに対する不安や諦念、家系、家族、孤独などとも付き合うこととなる。

でも、僕はぼんやりと考える。

それが『生きてる上での単純な誤解』なんじゃないか、と――。

世界はその日、なくなってしまうわけじゃない。正直なくらい意外なほど、

地味で無口で頑固で狭量に、何かが残ったまま、僕等は生きてゆく。

腕時計を見ながら…その時刻…その洋館の…時刻…

――いろいろ調べてわかった『明治初期に墓場を移動させて作った洋館』とか、

、、、、、、、、

確信に充ちた小声で――。『小さなぽつぽつが見えてくる、水』

雨脚はみるみる内に強くなる…。『その一帯には因習的な古い儀式があった』とか、

『飢饉の折り、少女を生きのまま埋めた』――。

(その後、少女の霊を鎮めるための石碑がつくられ、信仰者も多かった、と言う。

その縁もあってかは、次第に墓が石碑のまわりを取り囲むようになった。

が、明治初期に、 ) ……以下省略……



「うん。」

その後は、別に何もなかった。僕は『動物霊』とか『人の信仰の念』とかを、  
こわいものだと思った。都会にある無数の星みたいに、いまもきらきらと夢でかがやく、  
美しいものが何処にもない。本当に美しいものは一握りだし、いつまでも、  
美しいとすればそれは奇跡だ――。『八千代、ねむりなさい』と僕は言った。

…外へ出ようとする、ついてくる。駄目だよ、君が来ると、  
僕まで『余計なタチの悪いものに引っかかってしまう』から――。

明日、神社に行くからね。か・み・さ・ま。うん、いいところ知ってるんだ…。

そこに、君を預けに行く。それまで、眠っていたらいいよ。

――ドアの外へ出ると、僕はカラオケだとか、カフェだとか、本屋だとかで、  
時間を潰す。一緒にいると、僕は絶対に変なことを考える。

いつもそうだと思うから、いつも、もっと変なことをして――る…。



手が震える夜の絶望を越えて――

脱いでゆく音楽！

もっと声が高まる！！

もっとテンションが上がる！！！！

沈黙の中で語り合う…ことなんてできない音楽！

理性…にピストルを！

無力感や嫌悪感に――心臓の鼓動を！

脱いでゆく音楽！

分裂に分裂を重ねて爆発する！ 感情は！

新しい感情のはずだよ！

永遠の無限の網膜！

モノクロに乱反射する！ 鏡が――…

こんなんじゃない――と…言う！！

飢餓を求める…人なんていないのに！

今日の…空腹！

揺らめきのぼっていく関節が稼働する！！

憎悪に、復讐に、狂気に、嫉妬！！！！！！

もっと、声！

大きな大きな、声！

脱いでゆく音楽！

コカ・コーラ・ワーク！

ハンバーガー・スピリット！

サクソフォンが足らなさすぎる！

風船が——膨張して、膨張··して！ して！

もっと——して、して！ めちゃくちゃに··がなって！

こんなめちゃくちゃな音楽が出来上がる！！！！

世界を突き破る、音楽！！！！！！

カッコつけている場合じゃないぜ、実際——そうだろ！ だって！

出口が運命の記憶をつくりだしてしまう！

もっと変えられる！！！！

もっとエキセントリックに！！！！！！

一番すばらしいものを··見せられる！

心の底からのひびき··奏でられる！

脱いでゆく音楽！

テレビゲームなんかしてられない！ してられない——よ··音楽！

読書とか花の水やりに食事に洗濯なんてしてられない…音楽！

絶望する朝だって！！

目の前に地雷があったって！！！！

高い壁だって——もっともっと超えられない目標だって！

火が点かなくちゃ淋しい！ 生きてるって——

妥協の連続、失敗とあきらめの歴史…だって！ そうだとしたって！

魂の声をひびかせろ！！

もっと熱くなれ、人生は何度やりなおしたっていい！！！！

もっと声が高まる！！

もっとテンションが上がる！！！！

沈黙の中で語り合う…ことなんてできない音楽！

理性…にマシンガンを！

嘯く僕自身に…天国を！

キーボードやらシンセサイザーやら！

ギターやらベースやら！ ドラムス！

ねえ、僕はヴォーカルになろうと思うんだけど、どうかな！

もっと感動的に歌い上げてもいいかな、音楽…可能性に賭けて！

素晴らしい気分だぜ！！

馬鹿にでもなった気分だぜ、ディスプレイの光にペイントされてゆく！

脱いでゆく音楽！

アンプやCDプレーヤー…は、いらぬ！

廊下の風の音が古い地図破ってゆく血管になる！！

ああ—もう！！！！

わけわかんない—わかんなくていい、感情の鋭さ！

爪、ナイフ、蜂の針！

えぐってゆく胸の中の何かしらをさらってゆく強い響き！

まばたきだけ…ううん、ううん—まばたきだけが、必要！

脱いでゆく音楽！

影絵も、時計も、残響—も、いらぬ！ いらぬ！

いらぬのは、ガラスの生んだプリズム！

あんな鈍いもの…いらぬ！ いらぬ—んだ、音楽！

リッスン・トゥ・ミイ！

リッスン・トゥ・ミイ！

リッスン・トゥ・ミイ！

何をしているんだろう、僕は。

何をしているって言うんだろう、僕は。

彼女が目の前に座り、

僕を覗きこむ時の不安げな表情に、

大丈夫と言いながら――。

不安定な僕。

本当はかぎりなく脆い僕を。

夕暮れは隠した。

その僕を知っている人のいつくしむような眼が言う。

どうして、と。

神経や血のように、

どうしてあなたはそうなの、と。

通うことをもとめながら、

切り裂かれてゆく。

人とつながることをもとめながら、

ほどかれてしまう、僕のからだ。

父も、母も。

そのまた父も、母も、

こうして暮らしたのだろうか。

浮世といったところで、

ディスプレイは消えない。

踊り衣装は消えない。

闇の濃密な祈りと涙のdistanceは消えない。

なにも――しらないのに……

なにかを……知っているというかおをして……

満足かい、

それで救われたのかい、

足もとをすくわれたんだらう、

言い得て妙かい、

悲しいね、

あさましいね、

さみしいね。

僕は形も名もないのち。

きらめくおぼろな夜の幼児。

みずをさがし、ひをたいないにやどした、

黄泉のいろにぶざまなうすももいろの肉体を、

投げ出した、ようじ。

ねえ、おとうさん、

ねえ、おかあさん、

音楽に深層の貌を読み取り、

文字の奥に潜む象徴に、

あなたも、あなたも、

そっと、成就しない祈りや願いを、

編みこんだのでしょうか。

生氣のない肉体。

とうに滅んでいたかも知れない街に、

不思議なほどよく似合う抜け殻が、

愛を指し示す何かを口にする。

解き明かした何千行は手にのこらない砂。

口ずさんだ歌ばかりが耳に残る、砂。

愛の遺体。

愛の微生物。

ごめんなさい、

ごめんなさい、

解剖された精巧な肉体に、

切り開かれた脳に、

不思議なほど、

ときめいていたのは、

僕です。

わたし、です。



ロンニは、カードゲーム大会の強豪と擦れ違った。

三十代の髭面、トレードマークの赤いバンダナ。

A B C D E F G、と埋め尽くされたアルファベットの特徴的な服。

けむりのような通り雨を浴びたような、雰囲気。

「ちょっとそこの人、待ってくれ…、

もしかして、あなた、ラスリンさんじゃ？」

ぴたっと、止まった。

振り返った――。

「いかにも。って、――ロンニだ。ロンニ！ 会いたかった、

懐かしい！ あれは何処の大会で顔を合わせた以来だ！」

会話が弾んだ。まるで、ひまわりが太陽に向いているように生き生きした。

この前、城の警備の関係で泣くなく辞退したカードゲームの大会で、

ラスリンが優勝したことを知った。おめでとう、と心からロンニは言った。

ドアの覗き穴から見るように、大会の熱のドキドキ感は、素晴らしいものだ。

想像していると、蛙にならないおたまじゃくしのような気分になる。

城の警備が、どんなに立派で、大義名分があるとしても、

泥炭の下に閉じ込められた沼沢地に思えてくる――。

（こういう時に不謹慎だが、どうして、兵士になんてなったのだろう、

どうしてプロカードゲーマーにならなかったのかと思う…。）

「運がよかっただけだ。実際、出てくる奴はみんな凄腕ばかりだからな。

ロンニが出ていたら優勝していたかも知れない。」

これは謙遜ではなく、本音だろう、と思う。

埋もれていた基層から見つかる化石――。より一層繊細な思考-制約…。

「永劫の孤独へと向かう二次元曲線。」とロンニは言った。

「さすがロンニ。気障だ。」と、手をたたきながら言う、ラスリン。

――というか、ぶっちゃけ、とロンニは思った。

誰が優勝してもおかしくないから、面白いのだ。Sから、Eランクまでの、

カードがある。使いやすいカード、使いづらいカードがある。

デッキを作った時に、定石がいくつかあり、大会で禁止されるデッキもある。

でも、それらは大会参加して上へ勝ち上がっていく者なら誰でも知っている。

ゆえに、そこでの勝ち負けは、いくら拡大図したところで、無限遠である。

負ける理由は下手くそとか、運が悪いということはあっても、

根本的に勝つ理由にそういうものに左右されない。

と、おもむろに、鞆を取り出して、ラスリンがカードを見せてくる。

「うわあ、《アウリアの貴賓》だ――うわあああああ、すげえ、すげえ！」

ちなみに、競りに出したら金貨十枚は下らない、超レアアイテムである。

物の値打ちを知っている人なら、金貨二十枚は出すかも知れない。

と――そう、考えて、やにわに蒼くなる。火にあぶられている魚。

「でも、金庫に入れた方がいいですよ、ラスリン、持ち歩くのは危険だ。」

「いや、実はそうする途中だったんだ。カード収集家に頼まれて…、  
ほらあそこにいるだろ、」

「おお、うっかり見落としてた！ あの人は、ジェラルドさん！」

なんでこんなカード屋にいるのか、と思った。

店長と、何か話しているようだった。

と、ラスリンが相当読みこんだ本を取り出した。

「そう、このカード本の著者。何度読んでも、いい本だよな。

息をつく隙もない展示場的文句。解釈なんか、まさに神。

カード収集家にとっちゃ、聖典だよな。なあ、こんな人に頼まれたら、

砂漠にだって、無人島にだって駆けつけるよな。」

うっとりしたように言う、ラスリン。

いま、間違いなく中毒症状を起こしている。

「そうですよね、本当に。」

(その泥だらけの靴みたいな本も、神々しい) ……。

――と、ラスリンが、大会の賞品について教えてくれた。

最新シリーズのセット一式と古いレアカード数枚。もちろん、賞金もある。

もちろんシリーズセットや賞金は嬉しい。だが、本当にカード収集している奴なら、

古いレアカードの方が嬉しい。レアなカードは普通手に入らない。

もちろん、初心者だったら嬉しいだろう。最初はルールもわかってないし、

ショボいカードしかない。でも大会に、優勝する確率は限りなくゼロに近い。

運で切り抜けられるなら、ルールはいらないし、知識もいらない。

「で、今、何してるんだよ。よかったら、一緒にもっと話さないか。」

「あ、すみません。実はいま、呼び出しを受けていて…。

ラスリンさんなら、もちろん、知ってるでしょう、セルビアさん。」

一瞬考え込むような表情をして、もしや、と言った。

「――もしや、モンスター辞典を作った、神様の？」

「そう、その人です。」

…がっし、とラスリンはロンニの肩に手を置いた。

「どうしてもサインが欲しい。あの人の、モンスターの話は、何度読んでも面白い。

一度、是非とも会いたかった。自分も一緒について行きたいが…、

残念だ、本当に残念だ、用事がある。」

その気持ちは、ロンニにも痛いほどよくわかった。

ただ、セルビアはカードゲームに精通しているわけではないし、

終始シリアスな場面で、サインを下さいと言えるような雰囲気ではなかった。

「でな、ロンニ…」とラスリンの口調が変わった。

「どうしたんですか？ 改まって――。」

重たい口を開いた。何とその大会で、盗難事件やカツアゲのことが、

大きく取り上げられた、とラスリンは教えてくれた。ああ、と自分は肯いた。

その発言で鳥肌が立つ。凍りついたような気持ちになる。

彼にとってそれがただひとつの答えのように思えたからだ。

「――」

「――」

言葉が中々出てこない、沈黙。

沈黙は、氷山の色をしている。

ロンニは、地雷を踏んで足が吹っ飛ばされたような気持ちになる。

――貸ロッカーに入れていたら鍵壊されてやられた、鞆に入れていたら、

コワモテの奴に脅されて持っていかれた。テーブルに置いていたら、

カードを抜かれた。場合によっては、ゲーム前の対戦者に近づいて、

悪質な嫌がらせをされ、強制不戦敗にさせられるケースもあった。

(そんなの、ゲームを楽しむ精神じゃない！)

(そしてそういうのが、記憶や、経験や、思い出を――。)

、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
白い階段を昇ってゆく火葬場の煙――。

一二五キロダンベルのリフティングを十回以上こなしたい気分。

全力疾走で、迷いの森を走り抜きたい気持ちさえした。

「ひどい話ですよね。」

ふっと、そういう手合いの、ひそやかな含み笑いがを想像して、

さらに厭な気持ちがした。なんだったら、ぶっ殺してやろうか、と思う。

――昔、自分も遭遇したことがある。

……やられる気持ちは痛いほど、よくわかる。

もう会うこともない相手。

――記憶のなかのほかでは。

「大会の運営委員会が、以後こういう手合いを見つけたら、

ブラックリストに載せて無期限の出場停止にすると言った。処分はそれに、

とどまらない。世界中のカード屋でも、同様に取引できないようにする、と。」

「当たり前ですけどね。」

しかし、———そうしても、闇の取引や、個人間の取引が行われることを、

ロンニも、ラスリンも否定出来なかった。

「でもそういう大会で、事件が起こった。」

裂かれたような気持ちがあった———。

眉間に皺が寄り、ロンニの口調が少し悪くなる。

廃坑の単線のレールをずっと降りていくみたいだ。

ドウ・ユー・ライク？

ドウ・ユー・ラブ？

「…カードが欲しいなら、金貯めて買えばいい。みんなそうだ。

お金を貯めて買うから、神々しい。

そんな気持ちが、愛着になり、カードを大切にする。

だからどんなカードでも、海岸の砂ひとつひとつの個性がある。」

「運営委員会にきかせたいよ、その言葉。表彰したい。」

「そういう奴は賞金目当てなんだろうな。きっと。糞野郎が。」とロンニは言った。

「そうだな、ゲームを馬鹿にしてる。」と、ラスリン。

深呼吸を幾度かして、口調を戻した。

でも心の中で、思った。

(そんな奴、存在しなければいいのに！)

（そんな奴、早く死んでくれればいいのに！）と――。

しかし、カードそれ自体も悪いのだ、とロンニは冷静に思った。

衰弱しきった思考力をフル稼働させる。そうだ――。

《アウリアの貴賓》よろしく、一枚だけで、普通に家を買えるカードも存在する。

値段はどんどんつり上がって、殆ど確信犯的に、犯罪を助長する。連関関係。

……誘惑に息をひそめる、ロンニ。もちろん、カードは欲しい。でもそれは、

欲しいという素直な気持ちというだけで、人を傷つけたり、奪ったりするものじゃない。

「ゲームにはまって、やりこんだ者だったら、もっと許せないけど、

そういう奴ではないいんでしょうね。」とロンニ。

「そうだろうな。」とラスリン。

「――後味が悪い大会だったみたいですね。」と、同情的に言うロンニ。

「――そうだな。でも今度はそうはさせない。

大会の常連同士でも、こういう奴を見つけようという取り組みがあって、

いままでだったら……、知らないふりとかしてきたけど、

もうそういうのはやめよう、って話し合った。」と、ラスリン。

「そうですね、カードが抜かれて、悔しいのは見ていてわかるから、

話さなかったけど、――本当は、話して、カードでも貸して、

大会をまっとうさせてやるべきだった。」

――奥から低く誘う、絶望。海底を這う蟹のような気分、

難破船にでもなったような気持ちになる。

それでもやっぱりこんなことは起こるんだろうな、と思う。

と、ラスリンの眼がいたずらっぽく光った。

「まあ、ロンニもそのメンバーに入るだろう？ 話しておくよ。

実際、俺が言っておいたんだ。ロンニだったら、きっと、

そのメンバーに入りたいだろうって。」

「ああ、ラスリンさん、ありがとう。」

誇り高いメンバーたちであることが、まず、嬉しいのだ。

何をやっていても、信頼できる人間が目上の存在としていることが、

楽しみをいつの時にも約束してくれる。心の奥のはかりしれない真実として、

その時、ロンニは一番幸福な気分を味わうことができた。

こういう気持ちが、永遠に続いてほしいような気持ちさえした。

「今度、俺の街へ来ることがあったら、仲間に、連絡しておく。

ロンニのカードコレクションを見たい奴もいるかも知れない。

まあ、俺もだ。その時はよろしくな。顔が見れて本当によかった。」

「こちらこそ。」



町を流れる

鱗雲

不安をかき立てるスピードで

鈴のように鳴りながら機械的な状態しらせるオモチャ

茨のような恐ろしい手ごたえが南京錠する

エキゾティシズム、この異界感覚

(一秒ごとに命すりへってゆけばいいのに。 )

(そうしたらきっと立ち止まらない。 )

走って――ゆく……

、、、、、、、、、、

心の中をさらっていく

ひとつの推進力と

いくつかの推進力――

すっからかんの空洞を吹き抜ける

表面はしかしピロオドであるという矛盾

ビルは立体感を失い

あえぎ

生の喘咽に似た

ほととぎす

夕暮れとは不自由な郭公

現象でしかない耳が塞がれ

数秒後、開く

.....

.....

(無の根柢のデカダンス、

風狂な無味の味の佳境 )

.....

.....

電車の中で目を閉じているみたいに

線路の継ぎ目の凹凸に

呼吸する泥人形みたいになってしまう

オーイエース

キャルフォルニア ロケエエ ション

どんどん熱くならなくちゃいけないから

どんどん聞かせてくれ

どんどん巻き込んでゆく

どんどん

どんどん巻き込まれたい

痺れている

亀裂われてしまう

そしてそこに巻きこまれてゆく

坂道を転がり続けるように悪化する

高熱の濁流に転落する

アスファルトとタイヤ

排気音とボンネットの色は爛熟の橙<sup>ひ</sup>

白く明滅する埃まみれの波

、、、、、、  
まだら色に

、、、、、、、、、、、、、、、、  
朝の海にピシュッと宙を捉えた

、、、、、、、、  
飛魚のような色に

見て――いる……

遠く離れて

見ている 艱難

吐く息、息が

白くない、灰青い、影が伸びる

……ない……ない……

……ない……青い部屋……

よのなか

(皆、世間の無常に従う。)

おもちゃを集めるこどものような 毎日

ハンドルが 車輪を盗む

(天に応じた身の望みに従えば、

晴れに出でて影を離れむ。)

ウルハシク ウツクシキ 道具

ハンドルが 車輪を盗む

(桜も散るを嘆き、舌なきものの月を見ばや。)

「完成」よりも「未成」を

「整頓」よりも「乱雑」を

――停泊し(て、)

もっと、消波ブロックし(て、)

――星は爆発する

……夏の巨大な太陽

わざわい ほうせき

却って禍を受く蒲席の睦言

ブルウウ グリイイン

イエロウ パアプル レッドー

……クレイジパターン、シャボン、パレットナイフ

どんだん何を考えてるのかわからないマネキン人形

どんだん「はい」と「いいえ」がすり替わってゆく

どんだんぶきっちょな手足が可哀想な虫みたいに思えてくる

どんだん

どんだん象のような印象

バキュームカーのような印象

そのかわいたからだにふれ 飄逸 洒脱

イソギンチャクの触手、蔦のように絡まる

曲がり道は行き止まり

「ヘリポート、三次元の体育館…」

「トロイア、四次元のパールヘンズ…」

(めちゃくちゃなこと…こと！)

(でもめちゃくちゃが、人生だってこと！)

プラスチックな質感と化す心臓

けしかける前に仕掛けることを忘れてるな、BOMB

いまプラスチック爆弾と化したい心臓

プラスチック (は、)

きっと最後の人類への導火線、劣化

不道德なプラスチック

昆虫的な可愛さがシールドみたいになってる

まぶしくて顔のみえない輝きの下

土の精気が女性のそれみたいにあたたかくしめっていて

瞬間／断片

ロンドン兵の衣装を着せられたか！

…ない…ない…

…ない…青い部屋…

硬質の喧噪

やつらがいる

やつらは円環の大蛇ウロボロス

不死不滅という要素が炸裂する輪廻転生

壁一面にえがかれた、とてもおおきな壁画みたいに感じる

魂の寿命、才能の寿命、生命感覚の寿命

縄を編んではほどいている

オーイエース

キャルフォルニア ロケエエ ション

(一秒ごとに命すりへってゆけばいいのに。 )

(そうしたらきっと立ち止まらない。 )

何が出るかわからないような暗がりの怖さ

影法師を踏まずにオートバイが走る

アクセルをべったり踏んで走る

雄たけびと勝ち鬨、断末魔と命乞い

レインコート

黒い雨外套が線香花火の詩や音楽みたいに燃えてゆく

心の底の固い塊だけが知ってる時間の凝結

この塵はきっと優しさと馴れ合うことはない

乱れた僕等の言葉の間に無限の味わいと刹那を残すだろう・・・

(人はそんな簡単に成長しない。)

(僕等、ただ無限に変化し続けているにすぎない。)

.....

.....

(旅客機の視線、球体状に回ってゆく

序破急に、起承転結に、逝く )

.....

.....

(無の根柢のデカダンス、

風狂な無味の味の佳境 )

.....

.....

バネ人形が便器に屈みこむ。

奪われた野にも春が来るように、危機的状況を超越した、

ドライな笑い。人種のるつぼに、迷い込む、神崎竜也。

K氏は、マイケルジャクソンを思い出す――…。

「観光客が知らないような穴場を俺は知っている。

お前が絶対に行ったことのない場所だ」

「そんな場所だと治安が怖いし……」

ゆかり。

…綺麗という言葉と立派な言葉は全部、

やりたいただけのFakeなんだ。いま何しているのかって、種族維持本能。

――でもそんなの全部嘘だ。戦いは、止まっちゃいけない。

止まったら死んじゃう。逃げる訳にもいかない。

だから、果てしなく広げるこのフィールドのライフゲエム！

その灯がつけっぱなしにされた夜、

ビール、ハンバーガー、フライドポテト、

フレンチドレッシングがかかったサラダ、

棒チョコ、それに塩付きのピーナッツ。

顔を真っ赤にして、何か早口で叫ぶ。

リュウヤ・カンザキ！



チョコレート！

チョッパー！

パニックって、ウェッ、ウェッ、ウェッ！

一万ウェッ！ ウェッ（トティッシュ）！

ウェッ、ウェッ！

嘔吐物や、トイレトペーパーに、

ダダダッ、と恐るべき衝撃波が来る。モヒカン頭の男が、

「日曜日のライブ楽しみにしているぜ」と言う。おう、まかせとけ、

（アメリカの男は、酒を飲んで吐いてる男にも優しい。）

——お前もバッファローにやられるなよ。

いやそんな顔に見えたんだ。許せ。そういやお前、モロ敵キャラの顔だな。

ははは、許せ許せ、日本人は切腹もはやできない種族でござるよ！

軽んじた言葉を愛するようになる、NY。

多様な石材のごとく組み立てる、

ビートイット！

マンハッタン、ハーレム。アッパー・イースト・サイド。

アッパー・ウエスト・サイド。ミッドタウン・イースト

ミッドタウン・ウエスト。シアター・ディストリクト。

フラットアイアン/ローワー・ミッドタウン。ヘルズ・キッチン

マレー・ヒル/グラマシー。

（伝統的なアメリカ曲のリズムが聞こえてくる。）

(何かって? もちろん、コストロさ。)

……ふざけている場合じゃない。でもさ、

T.O.K.Y.O.の夜が思い浮かぶ、Midnight…

T.O.K.Y.O. 傲慢なフリースタイル、未知との遭遇。

Monsters vs. Aliensなんだ。いくらでも伝えたいことがある、アリス、

どうして僕はこんなにハイでアッパーでディスコサウンド!

むしろ恥じ責めるようなストレスとかがいかに害毒かってことに気付く。

タイルは気味の悪い細胞みたいに思えるし、いたずらに亡羊。

顕著な発展を遂げるために今日もめまぐるしく進む信号待たずの超特急。

ネオン! ネオン! ネオン!

街歩き、観光、ヤンキース、ミュージカル。

「ねえ、アメリカは、国民一人あたり60本/年もホットドッグを食べるんだって。」

「コーヒー大好き二十世紀の救世主!」

プロレスラーばりにマイクを投げ、踊る、歌う、何も聞こえない!

でも拍手! アカペラ!

70年代のピースムーブメントや、

80年代の“We are the world”、そして9・11。

ネット社会に、グローバル社会。

ああ、概念的なものが血を伝って、生活や感情をつくるとすれば、

こんな風に出てくる言葉も、それらの一部!

外に出れば出たで、カエルの足だか、牛肉のゼラチンの気分。

UFO...Flow...流れる光！

でも本当の僕は何処に居るのかって、ああ、思わぬことをしてしまったな、

でも本当の俺は裏窓から眺めた、（fast food）なのだ。

気持ち悪すぎるコンクリートに挟まれたごみ箱になる。方向音痴的無駄口！

ビートイット！

――ハーモニカの低音部のような雨が、夜行性の空間処理能力で、

コイル状の雨を降らせてる。あっけない高速道路が、

ちんぽこを振りまわす。

ビートイット！

アーウッ！！

ア――オッ！

護岸用のコンクリート製ブロックのような、

街へ出て――も…。人いきれがもろにつたう、大統領と、

暗殺者。突然ヘリコプターが一機何の調査に来たのかは知らない、

飛ぶ――。一つの正しい言葉とその十倍のありえないほど凡庸な生活。

幾多の胸をふさいできたが…………、

酒と麻薬と暴力と、それとはまったく無縁の人びと。

白人に黒人に黄色人種に、背の高い人に背の低い人。

伝達のなかった時間と空間…………。

絶壁を登ろうとしてる。ピタッと止まる、首を横に振る、

何で俺は、S Mプレイに遣うボンテージと、ムチ、ロウソクを持って、

ステージの上でこんなギャグをやらかしてるんだイミフ！

しかし宇宙的な愛の前では変態さえも許容できること受け合いである！

……広さや深さにあきれながら、公演あとの、

ボロ椅子にもたれて、硝子の窓のような夜の空の色を味わう。

「ねえ、ゆかり、サンダーバードしようよ！」

「かもちゃん、とか…」

お前、うるせえよ。いま、楽しんでるんだよ。妄想くらいさせろよ。

かもちゃんも楽しんでいるダロ。NYきたかったダロ。ありがとうダロ。

お前は飛んできただけだ。ホテルには、ぬいぐるみとしているんだ。

「でも、かもちゃん、竜也のために、歌を歌うダロ」

ぱぱらぱー。

ぱぱらぱー！

春の息吹-鳥たちの歌。最上級の宝石-高級住宅街。

亜鉛の色のナイフ-流れ星が流れる。

「ヴァン・コートランド (Van Cortlandt)」へ？

サン・ベイシング…！

観覧車が止まった！

ジェットコースターが銀河鉄道の夜した！

色白のマネキンのあいつが、

いんちきなアクセサリーを身に着けながら、架空請求の通知を見せながら、

稀覯本や、書画、美術骨董品の話をする。用意はいいかい？ 用意はいいかい？

準備いいかい？ 準備いいかい？

買い物客でごった返し、

イエローキャブやデリバリートラックのクラクションがひっきりになしに響く。

そんな中で、ロマンの産室。仰々しいまでの祈り。

ピースフルでポジティブなエネルギー、自然発生的でゆるい空気だけど、

さまざまな模様が意味ありげに浮かび上がり、催眠の芸術で烙印を押しまくる、

下水みたいな都市が見えてくる。

瞬間接着剤で、鼻の穴をくっつけてしまった…！

埃をまきあげながら睥睨。

ベンツが走る！

BMWが走り、TOYOTAが走る！

DANCE／ギクシャクした足取り／

永遠に戦争をしない国民なんだぜ、そんな口舌を弄するのに、

なんだか、レゴブロック・アーティストのネイサン・サワヤの、

作品のことや、公園に設置されたスクリーンのことを思い出す。

金属探知機やボディチェックでも発見できなかった爆発物、

心臓！ 思わず、虫を捕まえてしまって手の中にいる！

HOT&COLD!!!

ビートイット！

アーウッ！

アーオッツ！

蒸気に罅欠の入った嘘の煙突。

レトロなテレビのようなオブジェ。

シュールレアリスムのセカ／イ／

## 俯瞰する町の、タップダンス…！

---

レッドメーターに突入する。

BMW。250km/hのリミッター。八トントラックが目の前に来る、

ブレーキ-精一杯の加速、ホーンが鳴り響く中、すりぬける。

茶色の髪と髭-ひっくりかえるトラックー。巨大な象の地響き…。

かすかに水音が聞こえてくるアンドロメダ星雲が似合いそうな山林地帯。

衛星写真。GPS画面。周辺の地形が浮かび上がってくる。

概念は時空を超えた抽象的次元——宇宙的次元の拡張——

湿った花壇の草や花——墓碑銘のある大理石の緊迫文字——

それを追跡する、もう一台のBMW。

間近から排気音が聞こえてくるが、視認は出来ない。

ヘリコプターがその様子を撮影している。おそろしいほどの緊張感が、

無理な持続状態を保っている、カー・チェイス。力を失えば、絨毯のように転がる。

カメラ-冷たく、均質な…膨大な…情報。

ビデオの一時停止ボタン。視界の端に歪みでも生まれたように、耽溺-加害者……。

いくつもの、目、目、目——。

モルディング

彫形。カウントダウンをする、遺伝子。照明燈の展示。

無邪気な顔、荒々しい顔、考え込む顔、その他の顔——。

偶然を許さないGameの外表面変化、不愉快な単語の発色、濃縮する。

運動法則……。生唾を呑みながら、前を走るBMWの男は、

その時が来るのを待った。緊張は次第に高まりつつあった。

と、前のBMWが急激にハンドルを切った。思わず力が入った、

冷や汗が流れ落ちた。均衡が破れた。心臓を刺した。

灼熱／腐敗／真っ白な暗闇／

その向こう側は、崖――。帆柱の頭が残っているだけの、崖……。

しかし、ハンドルを切らなければ――。

道路の数十メートル先には、戦車が待ち受けていた。

心臓の鼓動／第六感／深刻な思想家の実践／

ウイング

抵抗力を奪われ、逃亡に失敗していただろう。翼部……。

極限の状態に置かれた人間の研ぎ澄まされた神経が、咄嗟に判断した。

空飛ぶ車、真っ逆さまに、ヒステリックに、落ちる。上空で、稲光。

スローモーション、ゆっくり引き開けられるドア――。

男が、車のドアから飛び出て、崖の岩にジャンプする。

たん、と音が鳴って空気が止まる。

ハンドグレネード

ポケットから手榴弾――。

雨に濡れた、平和な町が見える。切り開かれたバウムクーヘンのような平面。

崖の下には、ガソリンスタンド。奇妙な円盤的視界を有しながら、



街路樹のあるメインストリートの存在、ファーストフード、開放性のある広場。

屈託なく、明るく…安定した…優しい……フォルム……。

三方に聳えるビル。コーヒーの入ったポットのふた…に――。

車が突っ込む。かちっ、かちっ、かちっ、爆発音――。

――番号のついた部屋、鍵のある部屋、曲がりくねった過去の要求。

奇数／偶数／

恐怖のvirusがビロードの暖かな感触を思い出させる。

数式が宙に浮いている――。減少し続ける時刻が、変化し続けている。

BMWに仕掛けられた、時限爆弾の音。ちっ、ちっ、ちっ…。

次の瞬間、さらに爆発して大炎上になる。毛孔が開く、地獄の蓋の開いた音。

パズルがワンピースだけ足りない、完璧な世界の形と色。蟹の吹雪…。

炎に焼かれ身悶えしている人の宗教画的映像のダイナミズム。

恐竜の形の灰褐色の噴煙。蝋燭の刺激臭-網の目の迷路、サテン…。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

雨のざわめきが降ってくる――。感慨と息苦しさ…。

「仕留めたか？」

頭上の、BMWから道路へと出てきた男が言う。

肩が強張った。蒼ざめた顔を刺したように、目を充血させている。

からんころんと、足下に手榴弾が転がってくる。飛んだ安全レバー。

テレピン油のエッセンスの入った小瓶の半睡状態。要警戒-早駆け、到着の兆し。

雨が服をまだら模様にする、言葉の半狂乱的搜索。運に見放され、お先真っ暗な表情。

動揺した一瞬のあと、肉体は行動を開始する。breakthrough...

「――な、わけはねえか！」

傾斜した瞬間、男は低い積乱雲に向けて、手榴弾を蹴り上げる。

崖から、Tシャツとジーンズ姿の男が登ってくる。

雨が降ってくる――。

唸る筋肉、飛び散る汗……。鼻や舌の野獣の如き変貌-瞳孔の拡大――。

痙攣／収縮／

斜め前に踏み込み前の手でパンチを打つ。この時押し込まず、

当たる瞬間だけ力を入れる。躍動する、胸板の発射エネルギー。

まつ毛の奥の鮮やかな碧色の眼。

<注釈が余程必要そうな、神秘的な瞳>

<唐突に顔を出す、身体に染みついた反射作用>

だった――はず、じゃないか……。

ジャブ……ストレート……フック……。

ボクサーがパンチング・ボールを殴るよりもはるかに速そうなスピーイド。

道路にいた男は避けられない-フックガード。が、次の瞬間、

外側斜め45°前に踏み込み、軸足の踵を上げて回し蹴りを繰り出す。

どんどん集中力が上がってくる、燈火台の底の未来。鶏の飛行。

人間の肉体そのものが響きへ鍛え上げられたような、堰の声。

足の甲ではなく、脛で蹴る-膝は曲げず、ムチがしなるように…。

モロに喰らって吹っ飛ぶ。impact...骨がめりめりと折れる音。

喚起する慰藉と快樂の匂い。携帯電話が鳴った。メールの着信音がした。

それを無視したまま、ポケットから拳銃を取り出し、グリップを握りしめる。

舌を突き出して喘いでいる男――。

無機質な感触の中、ふうう――ううう…と息を吐き出しながら、

脊髄に這い上がる震えを感じた。指先へのpressure…

こめかみに直撃した。すぐに、上着や下着を、ジーパンに隠したナイフで切り裂く。

エサづくり。診察台に向かう白衣の男の気分だ。

へりが飽食でもしたように、急に慌ただしくなる。

戦車が向かってくるのが見える。乗り捨てられた、もう一台のBMWに乗り込む。

鍵は点けっぱなしだった。油断したな、と思う。無線機を操作する。

人びとは会話に餓えていた様子だ。ニューヨークタイムスの記者みたいだ。

消防車のサイレンがどこか遠くで聞こえてくる。

切れないハサミで傷付けられたような痛み――。密接な惰性…。

「…………手厚い歓迎だな。」

<契約条項…>

<支払通達請求書……>

なら、わかるが――。

助手席に、ペットボトルの飲料水があったのっで嚙下する。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

葉巻があったので、火を点ける。

緊張を少し解く。感情を抑制した事務的な口調で喋りつづける。

性衝動をコントロールする自制力のバランスが水平になる。

暗殺という消極的なGameのルールを説明する……！

乾いた咽喉は、水とシガレットを長い時間求めていた。

――雨後の筍のように、ホットパンツ、ビキニの水着、サイケ調のワンピース。

「――任務は完了した。知っているはずだ。部屋に爆弾を仕掛けたな？

ノーか。作法に挨拶に通過儀礼か。そして、車にもご丁寧に時限爆弾を仕掛けたな。

情報を知る者は消せ、か。これがお前等のやり方か？ 汚いことをしやがる。」

さしづめ、テロリストの内通容疑。脳外科医の喜色満面。

疑惑は加速度的なpressureを湿った砂だらけにする。

ストップウォッチを誰も止めない……！

「……取引しようミルトン君。」

(眼前の金しか見ない、盲目のギャンブラーと思ってるのか？ )

《反-謀略、狡獪そうな顔つき……が――風船と化して宙を飛ぶ…… 》

「――ヘリと戦車の時間稼ぎのつもりか？」

次の瞬間、BMWを走らせる。宙に火炎の華が咲いたのが、バックミラー越しに見える。

火の筋-案の定、ミサイルランチャーが飛んでくる。宙を舞う、地を這う追手。

道路が木端微塵に砕け散る音がする。

画廊に展示された古い絵画特有の乾いた気配――。

「…………お前等は全員皆殺した。首を洗って待ってろ。」

BMWを曲がり角でキキッと停車する。窓を開けて、ヘリが来るのを待つ。

拳銃を構える。ヘリが現われた次の瞬間、操縦士目がけて引き金を引く。

「…………そんなこと、言えるとは大した度胸だな、ミルトン君。」

銃火が閃く。しかし距離が遠すぎるので、すぐに命中したかどうかはわからない。

しかし数秒後、ヘリコプターが大きくバランスを崩し、操縦不可能になって墜落する。

爆発はしなかったが、降りてきた者たちを消音付きの拳銃で殺した。

簡単だ。革の手袋をはめているみたいに、

永遠に不可能な課題のような敵が目の前にいる。

嗅覚の神経／短刀の一撃／北風が樅の梢を揺らす／

怯えている…し――混乱して…いる――。

戦車がやって来る。心臓の鼓動が聞こえてきそうな、図体だ。ヘリに装着されていた、

機関砲を外す。機関砲の脚と車輪を、外す。

五十連弾倉が、ヘリの内部にあった。エリコンのGA1-B01型だ。

木箱に二十ミリ機関砲弾薬五百個と英語でプリントされた木箱が数個ほど置いてある。

ミサイルランチャーに向けて、撃つ。照準はつけやすい。

一分間一千発の回転速度を持つ。こんなのを生身の人間が目にしたら、

吸盤のついた長い触手で雁字搦めにされた印象の無為に身を委ねる。

サフラン色、エメラルド色の乱舞。暗黒の火柱の球体的停止-雨…。

「……………何度でも言う。皆殺した。」

そうやって彼は殺す——彼は殺した——

殺した——何人も何十人も何百人も殺した——

プールやテニスコート利用者（を、）

ハードワーカー（を、）

「——健闘を祈るよ、ミルトン君。叶うはずもないが…ハハハ——。

幻の対戦車ミサイルの君が来ることを、首を洗って待っているよ…ハハ——。」

ピュイイイ、と無線ができなくなる。

タイムオーバー

時間切れ。あとには、火の燃える音と、黒い煙だけだ。

奴等は馬鹿だと思っている——。だが、装甲が一番薄い戦車の上部は別だ。

あるいはエンジンルームがある後部に手榴弾を投げ、機関砲を撃てばどうなるか？

ヘリには、面白いくらいに手榴弾が見つかった。

蝟の食物的反応／軟体動物的巻き舌音／慄悍な魚／

「さて、問題です——どうして、こんな手の込んだことをしたでしょう？」

ニヤニヤする、男。

欺瞞-irony...

のびやかに写し取られるリアリズムの質。

耳元に絡みつくようなキャタピラの動く音。

可視の世界の異質な秩序／天使の哄笑／のこぎり状の低い山／

「闘いをより円滑に処理するため？ それとも、——」

戦車が来るまでに仕掛けておいた、数十個の手榴弾入りの木箱が、

戦車の上に落ちてくる。山間では、ちょっとしたことで、がけ崩れが起きる。

幹の下の方で樹が裂ける音。縞模様のゴールへと向かって、その視界が消える。

がけ崩れが起きやすいような場所。地形を見るのは得意だ。

なにせ、そういう修羅場を潜り抜けてきている。

ホール ハザード

穴と障害物が新鮮な魚介類にする。

「性格が悪いから？」

それから、エリコン機関砲に五十連弾倉を砲に装填し、撃ちまくる。

炎上。大爆発——。外部APU行動不能もやってみたかったが、それこそ……。

ホモ・サピエンスの蒸し焼きの出来上がり。作戦行動のような場違いな嫌悪感。

——電熱器的凝視、コルク栓の開く音、削った氷片の波打ち。

「叶うはずもない、か……。」

本当だな、と男は思う。

賭け事はいつでも一か八かだ。対戦車ミサイルがなくても戦車を撃墜できる。

BMWに乗り込む。構造-detailは胸の奥にしまいこまれながら、

アクセルを踏み込む。向かう場所はもちろん、ペンダゴン！

夢が頭の中に迷い込んできた蝶のような一瞬の、虎、孔雀、犬！

俯瞰する町の、タップダンス……！



## ビルの最上階に住む者の笑い声

---

人の頭の中さらのものをスーツと泄って行く……不思議な……。

ガランドウの樽のような……利己的な嫉妬の……。

巨大なものへ全体のピントを合わせる。

窓という窓が残らずピッタリと閉め切ってあって、

力の福音に帰依する万分にも足らざる有形の腕力を有しながら、全然、

暗黒しんいきという畛域を封じてある。

と、そこへ壁のまん中を

よもや、一日がブラックホールにでも抛下ほかさるる時刻に。

大小さまざまの譜本もかすかに色づいた、

その黒い……巨大な……鱗のような窓という窓に……。

黄色い、細い弦月が引っかかって、ジリ、ジリ、と沈みかかっている時刻。

いましもピザの塔が歪んで、歪みきっていそうな時刻に。

スタスタと暗にはろばると心やさしきものが消えてゆきやみそうな時刻に。

四角い暗黒の一角に胃の腑の隷属を許し、さながら軍港を内蔵させながら。

ベッドの上で俺は聞く。ゴリゴリする音、ゴリゴリゴリゴリする、音。

放浪的な引っ掻き、漂泊する寂寞たる引っ掻きのその感じに俺は浸る。

魚のように、とある海での独り寝を起こされでもしたように俺は、目覚める。

なんだあの洪水のような、ゴリゴリという音は――。音は……。

俺はベッドの上で、キカガク的な、チュウショウ図形的なものになる。

あるいは、サンカク的なもの、シカク的なものになる――。なる……。

眠りを妨げる、愚の骨頂、それでいて手も足も出ない、ゴリゴリという音。

俺は金持ち、ビルの最上階に住まうもの、贅沢な賃料。

それなのに、記憶に長く…永く……ながく……残りそうな音。

ベッドの上で俺は長くなって……長くなってしまふ……。

何分間か、眼の前の闇暗の核心をジーツと凝視していた。凝視していた……。

グングンと引き寄せられるように立ち上がり時間の純粹に身を委ね、

覚束ない気持ちで、愉快なような不愉快過ぎてリアクションを起こすことで、

さらに愉快になったような零の無限の方向へと落下するように、寝姿のまま、起きる。

壁にピタッと耳を付ける。やはり、聞こえる――。聞こえてくる……。

ゴリゴリする音、ゴリゴリゴリゴリする、音。

俺は長い本を読みだした時の感じを持って、いつ終わりになるかもわからぬのに、

生き生きとし、新しいものに触れて眠れなくなるあの自由な旅人になる心地で、

壁にピタッと耳を付けたまま、自分を時々省みるように聞く。

ゴリゴリする音、ゴリゴリゴリゴリする、音。

あれは何だ、いや、たとえるなら、肩胛骨の軋むような、あの、ゴリゴリという音。

俺も知っている…俺も持っているから……。

しかしあんなすさまじいゴリゴリという音は鳴らない――。鳴らない……。

その時、俺はもしやあれは、ドッペルゲンガーなのではないか、と俺は思った。

そして急に、どうしてという理由があるわけでもないのに、俺は、

玄関へ向かいたくなった。国外へ足を踏み出すように、窮屈な碁石の運命の、

せせこましい気持ちの問題へと、俺は、向かった。

そこには、真っ暗な廊下がある、警備が行き届いているから、あえて、

真っ暗闇となっている、夜となっている……となっている、廊下……。

ゴリゴリする音、ゴリゴリゴリゴリする、音が消えている。

と――気持ちにゼンマイでもついたように、俺は突進する。

素足のまま……ああ、こんなに気持ちよく走るのは久しぶりだと思いながら……。

ずばああああんという音がした。

波の音がした……色彩の世界がした……立体の気配がした……。

深夜、虫にでもなったように、キキリ――。キキリする……。

隣の部屋が見えた、扉は開いている……。

侵入する――。侵入した……。

「うわあああああああああ！」

という、この世のものとは思えぬ男性の叫び声が聞こえて、

ハッと我に返った時には、もはや遅い。

そうだ、これは不法侵入である――。不法侵入である……。

俺はあわてて、

「賊だ！ 賊だ！」と言いながら、うしろを振り返って、逃げた――。

しかし、ハハハ……アハハハ……笑いが止まらない……。

くっくっく……グハハ……止まらない……止まらない……。

## ブロックスの葛藤 #トレジャーハンター

---

素直すぎる若さとよるこびにあふれた青春映画に、

批評家はいつでも酷評する。

-----

-----

誰も見ないスクリーンに向かって、

カラカラと映しつづけた。

-----

-----

(虚空に短い笛のような音)

おびえていたのかい、リズムだったのかい、

あいかわらずからだは細かく揺れ、ある一日に呼び戻されそうになる。

(スプーンに光を受けたような、まぶしさ)

あてどなく思う、どうすればいいのかと、

きみはどこからやってきたんだい、少年の姿をして。

(獣の爪あとを残した往来)

バイオリンの音色のような人びとのざわめき、黒塗りの壺、

鳥が逃げる、安物のおもちゃが壊れる。

-----

—————  
ブロンクスのは心は乱れていた。

鉄の味がした……。

目の前で繰り広げられた次元の違う戦いに、

自分もああいうことができるのか、と恐れた。

大気が揺らされているような空気の変動と機械がショートしたようなバチバチという音。

恐れ——。畏れながら…、気がつくと、剣を握り、迷いの森の方へ向かっていた。

「（いま、このひと時が、惜しい——。）」

「（休息を貪っている自分が、それに対する努力を怠る自分が嫌だった……！）」

闘いを餓えた人のようにむやみに求めてしまうブロンクス。自殺志願者みたいに、

それが三等兵の勇気と知りながらも、焦りは禁物だと言い聞かせながらも、

いてもたってもいられない、熱さ、強さへの憧れ、彼のようにになりたい、

自分もそうでありたいと願う気持ちが、暴走する。天使の羽根ではなく、

蝙蝠の翼と知りながらも、先へ、進もうとしてしまう。

自分の重さ。一定にかかる加速度。薄れゆく意識——。

「（新聞を読むのを止めても、カーテンの開け閉めを止めても……。）」

根拠のない自信家だった頃の自分が、どうしてセルビアによって、

叩き潰されたか、またあえて何故そうしたかを、ブロンクスはわかっていた。

「（自分は弱いと気付くことが、成長だからだ——。）」

でも、こんな時に限って、遭遇しない。目の前には、モンスターはおらず、

自分一人しかいなかった。遠い虫の鳴き声のような呼吸をしている自分が、

たまらなく嫌で、情けなかった。こんなことで、心が乱れてしまう自分が嫌だった。

孤独だった。まるで神が、お前のその心がモンスターなのだ、

と、言っているような気がする。力任せな訓練の限界がそこにはあり、

女性の前にさらした醜い性器のように、蒼ざめた静脈が、みすぼらしく見えた。

真っ直ぐな光は、透明だ。農夫の手は、温かい、とブロンクスは思った。

また、終わること……。

また、起き上がること……………。

昨日より、今日、前に進もうとすること……………。

—————

—————

流れ作業のように判子が押されていく。

勝ち負けもそうであるみたいに。

—————

—————

瞳の中の、見るという行為のフレームだけが、

永遠に続く生の証みたいに。

—————

—————

(ソロバン玉のような音がする、心臓。)

天の網をかぶせる、つかみどころがない成長の神話、

真実は心の中の柵の向こう側にある、終止符のようにある。

(閉じ籠められた野良猫のような、心。)

蜜蜂の羽音は懶うい、精神と肉体のダメージは大きい、

風のように夢のような調律の蒼く澄んだ声が、言葉が。

(すべての音を切っても遠くから聞こえてくる、風の音。)

かたちがくつつくように、ぴったりとしてゆく、

それは彼自身の努力、それは彼自身の報酬を求めない盲目的な情熱。

-----

-----

ブロンクスは全身の力を抜いた。そして、目を閉じて息を吸い込むと、

新鮮な空気が入ってきて、身体の中でずっと張りつめていた何かが緩む。

身体の中で無条件に整理していた、事物がつくりだす壁の迷路が、

道というルートだと教える、洗礼。だが本当は、壁の迷路の、壁を乗り越えなければいけない。

ぴしゃりと閉じられた扉は、まるで壁のように放置される。しまいこみ始める。

この『繰り返し』――。

ココロの電話相談室へようこそ、メイド・イン・ヘブン……。

朝が来たから、矢玉の雨に碎かれる。

朝が来たから、盲目は暗くて力強いものに碎かれる。

朝が来たから、人はやけっぱちなその刻薄な響きに碎かれる。

抜き出したロングソードは、果実が自然に枝から離れるように、手のひらから落ちた。

ブロンクスは、冷たい風が心地よいと思った。転がる車輪の音、未熟さを教える、

大きな樹の影。『形にする』と言う行為は、様々な”部品”を組み上げていく。

それでも、青い空がどこまでも広がっている。

そして何処かへ——。ただ遠くへと……、

ブロンクスは行きたかった。無限の可能性を秘めているガラスで指先を切ったような、

最初の痛み。全身を包み込む光の中で、ブロンクスの頬に液体がこぼれた。



ドアを開けると、そこにはまったく違った風景がある。壁にドアの絵が描かれている。それがトリックアートというわけでもない。最初はそう思っていた人も若干いるかも知れない。悪戯とは考えにくい、絵心があったそうだ。でも、それはトリックアートではない。誰かが、真夜中にその壁に扉の絵を描いたのだ。犯罪だ。美大生かな、とも思われた。勝手な意見だが、磔にされるキリストみたいなひげ面だとか、キュービズムだとか、ではないのだ。暴走族がよくやるスプレー缶における文字の落書きだったら、消されていただろう。しかし、本当に何の変哲もないアパートの壁に、ある日、忽然とそれは誕生していた。管理人さんに聞いたら別に害もないので、いまの所は放置しているが、迷惑な話だ、と。なるほど日常生活に支障をきたすものでもない。でも、それが、ベリッと引きはがせる扉だという暗示だとしたらどうだろう。無意識のうちに、考えまいとしているが、僕等の毎日はそういう扉から暗示されるような、その向こう側である。洗面所、風呂場、玄関。会社、学校。電車やバスや車もそうだ。扉というのは、何かを隠すためにある。しかも、本当にその扉と同じように、たとえば鉄橋の下の落書き、たとえば電話ボックスに何故か貼られたお札、道路脇の花束、それが何を意図しているかなんて、本当の所はよくわかっていない。ゆるやかな共通認識の作法である。怖い話なら、好奇心は身を滅ぼすという言葉がよく言われるが、この場合は、誰も別にそこまで興味がない。ある日、お店が潰れて更地になるでもなく、シャッターが閉められたまま、何をしているのかわからない建物のある空間。それを毎日眺めていても、経営が立ち行かなくなった、と知っているだけだ。僕等はただ、経験でそのドアが、いかれている奴の仕業だ、迷惑な話だ、という風に処理にしているにすぎない。時々僕はそのドアの絵を考える、のっぺらぼうのような平面的な世界にいる自分

を一一と、何か上手くまとめようとしている節を感じた人もいるだろうが、実はこの話、続きがある。そのアパートで蝙蝠がよく出るようになったのだ。そして、それから少しして、猫の死体が出た。鋭利な刃物でズタズタにされた、目を背けたくなるような惨殺死体だ。この一連のことに関連性はあるだろうか、という問いがあるなら、ハッキリ言おう。まったく、ない。最低、まったくない、と思うのだが、それでも、それまでそのようなことは起こらなかったのだ。これは、思うにマイナスの磁場が発生したからなのではないか。その原因は、やはり、あのドアの絵から端を発しているように感じられる。あれは異界へと繋ぐ一つの合図だったのではないかと。そしてもちろん、この話はここでは終わらない。ある日、アパートのとある部屋から腐臭がしてきた。たちまち、呼吸が苦しくなるような腐臭である。折しも、夏であったから想像するだにおぞましい臭気であったろうと思われる。部屋の中には悪臭が漂い、ゴミが散乱し、そして、腐臭の源である死体には蛆がたかっていた。もちろん、そいつが猫を殺した、とか、蝙蝠はまあ自然発生でも、扉の絵を描いたのはそいつか、というのもわからない。何だわからない話ばかりじゃないか、とあなたは思うかも知れない。そうなのだ、独裁や恐怖政治のように悪人がいるという構図ではない。大樹の蔭には落果が多く、というわけでもない。ただこれが、世の中における掟というものなのだ。そしてもちろん、理解してくれていることだと思うだろうが、この話はまだここでは終わらない。ここまでは別に、恐怖を理解する能力の歯車が噛み合ったものすぎない。いわば、それまで光の中にあったものが闇へと移り変わったという説明に過ぎない。さて、このアパートに、アマチュア写真家の女性に移り住んだ。彼女は好奇心旺盛だった。こんな話を風のうわさで聞いたものだから、むしろ、大乗り気になったぐらいである。心霊写真を撮ってやる、と。しかし、一人で夜中にパチパチ写真を撮るわけ

にもいかないから、仲のいい友達を連れて来て、やった。また勝手にこんなことやるわけにもいかないから、一応管理人さんにも許可をもらった。腐乱死体の部屋に入りたい、という理由もあったので、許可をもらいに行ったというのもある。逆に怒られそうですよね。でも、眉をしかめたものの、まあ、若い人の好きにさせてやろうと鍵を預かった。まあ、管理人さん自身、本当に心霊写真が撮れるのか知りたかったということもあったと思います。明日には必ず返します。そんなやりとりをして、お礼を言って、アパートの住民が寝静まった夜の十一時に決行。まず、壁に描かれた扉。別に何が起こるわけでもない。写真を撮る。蝙蝠が飛んでいるので、それも撮る。次に、猫の惨殺死体があった場所も撮る。そして、最後に腐乱死体があったという部屋に行く。鍵を開ける音って、夜中になるとよく響く。ドキドキしながら、お邪魔します。ぎいーっつ、と開ける。別に何もいない。友達が、固唾をのんで見守る中、パチパチと写真を撮った。次の日、朝一番に現像に回して、夕方取りに行く。すると、写っていたんだ。壁の扉の絵には、骨が見える。人体模型みたいなやつが、まあ、うっすらと見える。蝙蝠が飛んでいるかたわらには、人魂-火の玉というより光の球-オーヴというようなものがうつっている。猫の腐乱死体のあった所には、絶対そんなもの映した覚えはないのに、足が見える。ズボン履いている。彼女も友達もズボンを穿いていない。だからそんなもの映るわけもないのに、まあ、ばっちり写っている。そして、腐乱死体のあった部屋には、黒い靄の塊のようなものが見える。ロールシャッハテストだったら、人間だと思うという具合だけど、それは確かに人間のような黒い靄の塊。こうなってしまうと、さすがのアマチュア写真家を気取る彼女も気持ち悪くなっちゃって、お寺に写真を供養してもらおうっていうことになって、行った。坊さんは、それを受け取ると、はあはあ、と言いながら、あんた、少しまずいことしちゃったね、と言う。彼女、ビビっちゃって、泣きそうになった。友達は、写真を見た時に、崇られたらアン

夕のせいだ、絶交だなんて言われたもんだから余計にきたんだろうね。まあいいよ、と坊さん言いながら、アンタ達、そこ座って、と言いながら念仏を唱える。仏さまの前でね。だだっ広い部屋に三枚座布団しいて、正座して、ね。何だか、彼女も友達も肩が少し軽くなったような気がした。まあ、本当のところはどうなのかわからないんだけどね。でもまあ、写真は処分した。もうこれですべて終わったのだ、と彼女は思った。そう、彼女の話は終わった。でもまだこの話は終わらない。数日後、坊さんがそのアパートにやって来て、これこれこういうわけだと言って、壁の扉の絵の所と、猫の腐乱死体がいた所を掘ってみろ、と言うんだ。事情はわかった。でも、そんなわけわからんこと出来るか、と最初は管理人さんもつっぱねたんだ。でも数日して、心変わりしたんだな。心霊写真が出てしまった以上はもう絶対に何かあるんだろう、と思ったんだな。膿を出しちゃおうって思ったんだな。ポケットマネーが痛むし、もし何かあったら人が入らなくなるかもしれないけど、やろう、と。工事の人を呼んで壁に描かれた扉の所をドリルで穴を開けてもらった。チッパーとか電動ハンマーとか用意してもらってね。とりあえず、やれる所までやってよ、という感じで。その間、管理人さんは、猫の腐乱死体があった所を掘ってみた。最初に、壁の方で何か発見された。骨だ。人骨だ。いつこんなものが埋められたのかはわからない。でも、確かにそれは骨なんだ。警察がやって来た。管理人さんは、事情を説明した。わけわからん話だなとは思ったけど、それでも、しないわけにはいかない。坊さんにも来てもらった。一応、念仏を唱えてもらった。簡単な事情聴取が終わったら、管理人さんは掘った。やがて、そこから、骨が見つかった。気持ち悪いくらいの数の骨だ。警察にはもう前もって、わけわからん話をしてるから、もう一度、呼んだ。やっぱり、見つかりました、と。そこからは、若い警察官たちが掘った。掘っても、掘っても、骨ばかり出てくる。

しかしこちらは、おそらく動物の骨だ。坊さんと呼ぶ。これは一体何なんだ、と言う。そうしたら、さあな、わからん、と言う。わからんことはあるまい、と管理人さんは半ば怒りながら言った。汗水流して掘って、結果的には骨が見つかったが、それを、わからんで済ますわけにはいかない。ただ、と坊さんが言った。もうここで、アパートを続けることはできないかもしれませんな、と言った。言いながら、アパートを見た。その目に何が見えているのかはわからなかったが、気持ち悪さと恐怖が混じったような感じを抱いた。それから数か月の間に、幽霊を見たとか、何だか気持ち悪いとかで出て行く住民が相次いだ。坊さんの言った通りになった。このアパートは諦めよう、手放そう、と思った。しかしそんな日くつきの物件に買い手が見つくわけもない。かといって、取り壊すのにも金がかかる。しょうがないので、そのまま放置した。どんどんどんどん寂れた。ある日、ネットに幽霊アパートとして紹介されていることを知った。しかし管理人さんは言う。壁にドアの絵が描かれるまでは本当にそんな気配がなかったのだ、と。しかし、実はこの話、最初から最後まで話はよくわかるのに、肝心の、壁の絵を描いた人物、猫を惨殺した人物、腐乱死体の人物、壁の絵から見つかった人骨-おそらく、殺人だろうという警察の見解だったが、色々やってみたが結局、身元を特定できず、殺害した人物、猫の惨殺死体のあった場所で見つかった無数の動物の骨を作った人物、がまったくわからない。全部、違う人物かも知れないし、いやいや、これはどう考えても同一人物かも知れない。ただ、一つだけ確かなのは、そこは幽霊アパートになったということだ。そこへ行くと、頭痛がするし、手足が冷える。それでも、子供たちが肝試しにやって来たりする。中には、発狂したり、怖い怖いと泣き崩れたりする者がいる。でも、おかしい。そこには、そういう日くは本来まったくなかったはずなのだ。僕は、この話を考える時、何が一番怖いのかについて考える。そうなのだ、あのドアの絵

を見つけた瞬間に、誰もその向こう側に何があるのかなんて考えていなかったということに、僕は恐怖を覚える。怖い話というのは、すぐに生まれるわけではない。ある瞬間を持って、そこから加速度的に進む。そして御覧の通り、アパートの扉の分だけ、新しい恐怖がある。

ドアを開けずに、まるで口を覗き穴に当てて喋っているような男の声のあと、

かもちゃんは、言った。ちなみに、女の子しているらしかった。

風呂敷から一本のバナナを取り出し、無造作に皮をもいで露出させて、

あむと、一口たべたりした。むちゃくちゃ、シモネタだった。でも、鳥だった。

これがもし、人間だったら、まちがいなく、ビビ・ビビ・ノ・ビビ・オクリである。

マリアが、何度かあまりにもおかしすぎて、ふきだすように笑っていた。

電気の明るい輸入品専門的な、かもちゃん。

「あらあ、どうしたの、ビールケースなんて持ってるの。不良なの？

ズバ・ズバ・ノ・ムゴゴ。アア・ブラウン・カン・シ・ノ・サクリャクでござす。

血走った眼をして、はっ、はっ、と尖った犬歯を見せてどういうつもりなの。

ハスキー犬なの？ アウレリャ・ドワイウ・イミなの。わからないわ。

お釣りはあるの？ その情報は暗号だわ。情報伝達をする前のすけこましの詳細。

風水師、きいろのパンティーをはきなさい、というわ。嘘よ。でも、わからないわ。

じーごろろ。じーごろろ。耳元まで裂けそうな口をして、どうしたの。

毛深いひとだわ。ごめんあそばせ、うそよ、うたがいぶかいひと、といたかったの、

でもそれも、本当はうそかもしれないわ、よくって？ わからないわ、でも、

飲めというのね。やだわ、それで、なに、それで飲ませてたらしこむのね。

刃物や酒瓶を隠し持っているのに、サケ・ノメルゾ・ゾというのね。わからないわ、

規則正しく血液中の酸素を消費して、電気活動して、記録装置に送り始めるのね。

アア！ 根負けしそうだわ、うかつだわ。真実の虚妄だわ。机に電話があるだけで、  
愛人がいるのかと思えてくるわ。いかさまだわ。さかさまだわ。でも、食傷するほど、  
何百年、何千年もつづくやらしおマジック・ハンド。それで、どうしたの。

イカ・ノ・キンタマ。ほほいのほい！ ぬりぐすり、と、やらしお器具がかくされているわ。  
目のくらみそうな、美酒だわ。甘露だわ。水は綺麗だわ、カウンター用の高い椅子で、  
飲みたいわ。乗馬ズボンがもっこりしてるのと、メジャーリーガーがもっこりしてるのと、  
どっちがいいか悪いかわからないわ。食欲旺盛だわ。熱狂と幻滅のカプリコーンだわ。  
意味はないわ。でも、アップリケよりはマシだわ。でもよくわからないわ。

ぶらっくじゃっくよみすぎよ。でも、その場合、アッチョンプリケよ。わからないわ。  
でも、ヘミングウェイするのね。深呼吸したいのね。老人と海しながら、外国へ、  
情報を集めに行きたいのね。わかっているわ、それで、空飛ぶ絨毯するのよ。航空機で、  
ピンポンするのよ。くじゃくのあたらしいふくのいでたち、するのよ。

あだかだぶら、アイアイサ。ねえ、わかっているでしょ。どうしたのって、  
わたしがききたいわ。どうしたの。でも、しこたま、飲ませるつもりね。

やらしお、だわ。ザ・ギンだわ。ギ・ロ・ポンだわ。法外な値段請求されるのだわ。  
払えないなら、身体で払ってもらおうか。大体そういうわけね、通行止めよ。

ここには鹿があらわれるわ。明日はきっと、崔だわ。ダレ？ わからないわ。

でも宇宙遊泳ならできるわ。やだ、ミサイルマグナムが、ニョホホしようとしているわ。

もちろんそうでしょ、アタック・メン・ト！ 意味はないわ、

ねむりぐすりがはいつてるのよ。妖精の粉、と書くのよ。

そういう時は大体スペイン的だわ。ロシアの眠るやらしお秘宝だわ。



やめて。でも――飲めというのなら、飲むダロ。」

長い独り語りだった。これだけの長い喋りで飽きさせないのは、

ひとえに、鳥の話術が巧みだからである。会話上のテクニックが、

ふんだんに利用されているので、刺激を得、堪能してしまう。

でも最初から、飲みたいなら飲みたい、と言えればいいのに、とロバートは思った。

かもちゃんの目の前には、モームと老人がいた。

「噂どおり、すばらしく口がまわる鳥だな。」

「面白い鳥でしょ。」

――かもちゃんは、それを聞きながら、褒められたとわかったらしく、

どうもこのネタを続けねばいけないような気がしてきたらしかった。

神経過敏なくらい、自分の評判を気にする、鳥。

「やめて、八朗、七朗、六朗！ ビールはあたいの苦手な飲み物よ。あ、なにをするの、

五朗！ あたいの魅力的な太ももに、アハン！ おやめになられて！

かどわかしのゆわかし！ そしてこやつ、煙草に火を点けるつもりだわ。ほふ、ほふ。

あふう、あふう。うふう。アハン！ それはアヘンと違うわ、ドラッグだけど、脳内よ。

焼けぼっくいに火がつく前におやめになって。パチンコ屋で、ケン・ホクトするつもりだ。

ヒコウ・ケイラクをつくつもりだ。そしてあたいはもう、値札をぶら下げられてしまう。

奴隷という烙印をおされて、不動産売買するしかない。どういことなの、わからない、

ああ、あたいのタコ焼きがあがってしまう。足が鯛焼きみたいになってしまう、謎の奇病。

アハン！ あたいのスイカみたいなサッカーボールが転がされてしまう！」

あははは、と狂ったようにマリアは笑った。

ロバートも下品だとは知りながら、笑った。

ええ気持ちになってきよがったがな、とかもちゃん、ばりばりの関西弁を使った。

そしておもむろに、煙草に火を点け

「ねえ、あたいは綺麗でしょ。綺麗と言わなきゃ、羽根を広げるダロ！」

最終的に、そこらへんは鳥になってしまうらしかった。

また、かもちゃんは独特の擬音をまじえて、変な劇を始められた。

「ええーいこのすつとこどっこい、卵になるか、孵化するかきめやがれえい！」

おたまじゃくし、じゃねえだろい。なんというか、旅人だろ、川の世界。

がおー。ぐおー！ やめて、あたいの卵になにするの、アハン！

ああ、寝たいのね。寝るなんて野暮なんてことはやめろ、アハン！

○×△□？ H！ dash――それは、いこおる、で、けいとぶっしゅのことである。

ほひー！ ほひー！ によほらりうひー！ ちゃかぼこ、ぷびい！

A A A！ H！ dash――それは、いこおる、で、ヤスユキ・オカ・ムラ・シで、

ある。大体、おどるとき、ちょっと変態である。キメ・ガオ、がすてきである。

…うふふ、このにわとりめ。にわとこ、め。クケーッ！ クケーッ！

ああ、にわとりがうまれてしまう、朝やけとともに！」

全員が散々笑ったあとで、老人とモームは、かもちゃんにビールケースを渡した。

「くれるのか？」

「闇の谷行こうな。」とモームが言った。

そう言うと、なんだそんなことかと思われたらしい鳥は、花屋を閉め、

「わかってるダロ。闇の谷行くためにうまれてきたような鳥！」

急に正義感に目覚められたらしい、鳥！

「最初からそのつもりだったダロ。本当ダロ。

別にビールにおどらされたわけじゃないダロ、

でも、貰い物はいつでもありがたく受け取るダロ。それだけダロ。」

そう言いながら、風呂敷にビールケースを大事そうに入れている姿には、

一切何処にもそれらしい説得力がなかった。

しかし風呂敷にビール十ケースをしまうと、

風呂敷はまた元の同じ大きさに戻った。まったく不思議な光景だった。

多くの風変りな風呂敷を見てきたであろう老人にも、不思議な光景だった。

老人をして、まじっくばあぁあどのふろしきはよにもまれなるかな。

一一刺し貫いてたしかめてやるか、ひらいて、ビールが何処にあるか確かめるか。

と、思った人でさえ、おそろしくて、あけるのをやめてしまう、風呂敷。

「ところで、そろそろ、戻った方がよいかもしれない。」と老人。

「そうですね、城へ行きましょう。」と、モーム。

「行くダロ！」と、かもちゃん。

## --- 古典古代の思想 ---

(古代ギリシア・ローマ時代の総称。

ヨーロッパ文化の基礎となった古典文化を生んだ時代として、  
他の古代社会と区別するために用いる。

近代ヨーロッパ文化の規範となり、

イスラム文化にも影響を及ぼした古典文明を生んだ時代として、

世界史上他の古代社会と区別して用いる。)

神話的世界観 → 哲学の誕生 (自然哲学・黄金時代・ヘレニズム期)

神話的世界観：ギリシャ神話と英雄の活躍

自然哲学 (イオニア植民市)

●タレス, ヘラクレイトス,  
ピタゴラス, デモクリトスの活躍

タレス                      B.C.624/40~B.C.546    水

[ターレスの定理]

一般の人によく知られているのは哲学よりも、  
中学校の数学の教科書に必ず出てくるターレスの定理である。  
これは「半円の弧に対する円周角は直角である」という定理である。  
ターレス自身が円周上の点と円の中心を結び、  
二つの二等辺三角形を作ってこの定理を証明したために、  
この名前がついたという。  
ちなみに「ターレスの定理」とよばれるものは五つある。

ヘラクレイトス    B.C.535~B.C.475頃    火, 万物は流転する

哲学史上初めて、  
「根源的な一者」と「多くの表面的なもの」  
との関連を打ち出した人物。  
「暗い哲学者」にして「泣く哲学者」

○自然は隠れることをこのむ。（断片123）

○自己認識すること。そして思慮を健全に保つことは、

すべての人間に許されていること。（断片116）

ピタゴラス      B.C.580頃～？      数

[ピタゴラス音律]

ピタゴラスが鍛冶屋の様々な金槌の音を聞いて、  
その金槌の重さの比率から協和音程の振動数の整数比  
（オクターヴは1：2、完全5度は2：3、完全4度は3：4）を発見し、  
それを基に弦楽器の弦の長さや振動数の比率を利用して考案した、  
という説があるため、彼の名前が付けられている。  
古代中国で生まれた三分損益法による音律と基本的に同じものであるが、  
どちらがより古いのかは定かではない。  
これは、振動数の比率が2：3である純正5度音程を積み重ねていくもので、  
純正5度を6回積み重ねると7音からなる全音階が得られ、  
11回積み重ねると12音からなる半音階が得られる。  
ピタゴラスコンマはピタゴラス音律が原理的にもつオクターヴ関係との誤差である。

デモクリトス      B.C.460～B.C.370頃      原子論（→近代科学の先駆）

〈原子〉は不生・不滅・無性質・分割不可能な無数の物質単位であって、  
たえず運動し、その存在と運動の場所として〈空虚〉が前提とされる。  
無限の〈空虚〉の中では上も下もない。

形・大きさ・配列・姿勢の違うこれら無数の原子の結合や分離の仕方によって、すべての感覚でとらえられる性質や生滅の現象が生じる。  
また魂と火（熱）とを同一視し、原子は無数あるが、あらゆるものに浸透して他を動かす  
「球形のものが火であり、魂である」とした。  
デモクリトスは世界の起源については語らなかったが、「いかなることも偶然によって起こりえない」と述べた。

黄金時代（アテネ・ポリス）

背景 古代民主制→衆愚政治

- ソフィスト（プロタゴラス）、  
ソクラテス、プラトン、アリストテレス

古代民主制の発達にともなって、民主政治に不可欠な弁論術を教えるソフィスト（「知恵ある人」——職業教師）達が活躍し、万物の根源を探求する自然哲学は衰退した。また民主制の発達は、真理はそれを主張するものがおかれている立場によって、決定されるという相対主義を生みだした。代表的なソフィストであるプロタゴラスは、「人間は万物の尺度である」という言葉によって、絶対的な真理を否定する相対主義の立場を表現した。

自然哲学→古代民主制の発達→ソフィスト（弁論術） 相対主義

ソクラテス（B.C.470年～B.C.399年）

繁栄を誇った古代ギリシャの民主制も、ソクラテスの時代にはかげりを見せ、衆愚政治へと墮落していった。ソクラテスが自らの敵として激しく対決したのは、

アテネの衆愚政治やそれと結びついた論弁家と化したソフィスト達であった。

## 1、問答法と無知の知

ソフィストの弁論術は。

時代とともに大衆説得をおこなうための論弁術に転落した。

ソクラテスはこのような墮落した弁論術や、

それと結びついた衆愚政治を厳しく批判し、

産婆術（助産術）あるいは問答法とよばれる対話・論争を通して、

自分はまず無知であることを悟ること、

（無知の知）こそが真の知への出発点であると唱えた。

## 2、知徳合一

徳にかなない善く生きることは、

徳について知っていることと同義である。

これを知徳合一（知行合一）という。ソクラテスによれば、

人間が過った振る舞いをし不徳に陥るのは、

徳についての真の知を有していないからである。

徳について知り、自分の魂を善くしようと気遣うこと、

（魂への配慮）がソクラテスの理想とした生き方である。

プラトン（B.C.427年～B.C.347年）

→ イデア論／魂の三部分と哲人政治など

アリストテレス（B.C.384年～B.C.322年）

→ 形相と質料／中庸／「人間はポリスの動物である」

⇒プラトンの理想主義とアリストテレスの経験主義

## ヘレニズム期（アレクサンドリア）

### 背景 ポリスの崩壊と世界帝国の形成

（アレクサンドロス大王の東方遠征によって、ギリシャのポリスは衰退した。ポリス衰退は、一方で狭いポリスの枠組みをこえ、自らを世界市民の一員と位置づけるコスモポリタニズム（＝世界市民主義）を生み出したが、他方で安定したポリスの生活を失った人々の間で、心の平安を実現する思想が求められた。）

### ●エピクロス（エピクロス学派）、 ゼノン（ストア学派）

#### エピクロス（B.C.341年頃＋B.C.270年）

精神的な快樂主義を唱えたエピクロス学派の祖である。  
永続的・精神的な快樂を追求することによって、  
心の平静さを求めるべきだとした。  
エピクロスが理想とした心の幸福をアタラクシアという。

○死はわれわれにとっては無である。  
われわれが生きている限り死は存在しない。  
死が存在する限りわれわれはもはや無い。

#### ゼノン（B.C.335年頃－B.C.263年頃）

情念を抑制する禁欲主義によって、心の平静を実現しようとした。  
自然のままに生きる賢者の生活を理想とし、ストア学派の祖となった。  
情念から解放された状態をアパテイアと呼び、理想の境地とした。

――（ゼノン胸像、プーシキン美術館）――





# Ave Maria

---

裂けた 響き――

ゆらして――…

ゆらして――……

しじま  
静寂――

指の隙間から 消えていこうとした

僕の言葉 消えていこうとした

せんさいなかんのう、が、

およいで、ゆ、く、

裂けた 響き――

とまどい――…

とまどい――……

しじま  
静寂――

ながれはじめた――…

《雲》

《移動》

《最小公約数》

《雨》

《霧》

うたがわずにはいられ、な、い、

なげかずにはいられな、い、

裂けた 響き――

ちいさな――…

ちいさな――……

このへや

静寂――

ながれはじめた――…

《幻想》

《搾取》

しゅらじょう

《修羅場》

《官員》

《欺瞞》

指の隙間から 消えていこうとした から

僕の言葉 消えていこうとした から

――くりかえしてゆく、愛の重さに

……言葉を持てなくなった

……………持てなくなった

せんさいなかんのう、が、

およいで、

裂けた 響き――

うつろい――…

うつろい――……

(の、)

《の、》

ヴェール

静寂 へ――

ながれはじめた――…

《雲》

《移動》

《最小公約数》

《雨》

《霧》

「古い話はよそうじゃないか。」

「ちんこかゆい。」

「あ、濡れちゃった。」

おい、話聞いてたか。

もちろんだよ、おとうさん。

もちろんですとも、おバカさん。

「それにしても、」

「ちんちんかいかい。」

「あ、おけけつゆそば。」

おい、話聞いてたのか。

もちろんだよ、あそこまっくろ。

わかってますとも、おバカさん。

「もう俺は六十だ。」

「まだちんこ元気？」

「あ、納豆くいたい。」

おい、話聞いてたのか。

もちろんだよ、絶倫。

はいはいそうございますよ、おバカさん。

(なんだこの三人組は) (家族なのか)

(やめとけ、触らぬパラノイアにまんとうひひ)

(そうだな、なむあみだぶつにナウマン象)

Are you a moron?

No, it is buttocks

キーボードを打つ音と、シャープペンシルが原稿用紙を滑る音。そして扇風機がプロペラを回す

しのびね おとづれ

モーター音。枝ありて若葉、果実ありて核種一一。こころ憎くも啼泣の音訪。

いきご リボン リヒトソルプチオーン

空より沙、緑色の頭飾を結ベリ…。光の吸収一一。

永遠に生けるが如く、彼の珠光は益々光の翼をのべて、不断にいつまでも輝く。サアアクルオヴラ

イフの一帰結の確証に絶対的正当性の証明を求めようとするとき、一切いまなお新理論は無定見と騒

擾のうちに揺れている。我らの暗い小道。引き潮の如く去りゆく影の彼方のさむしい笛…。

きら

面影遮ふ古鏡-客観的事象と一一不安動揺。曰く、かくするほどに風かよふ…。

一一新鮮な果実それも水の滴るほどの活き活きとした果実を籠いっぱいに入れて。

水飲み場に蛇は来ていた、という詩はロレンスだったろうか？ D・H・ロレンス一一あの動物的

なものに魅せられながら、衝動を克明に記録せねばならなかった気苦勞の多かった詩人。ロレンスが

最大の詩人という見方はないが、ロレンスほど苦悩的な詩人はいないだろう、というのが僕の見方。

もういちど 一一重い空気を震わして

絶えぬ苦しみの世界…

じんせいを

意識の断片や紙の切れ端一一

……あ、秋は…あ、あおざめた、くりむの色に溶けてゆく

じんせいを

「腐れ、蒸されて……」

凍った乳のような腫…





ハロー、ハロー！ ハリヤップ！

もっと美しくなりたかった、もっと綺麗になりたかった、もっと、うるおいたかった。

「どうして？ と一聞けば、君も笑う。」

(どうして一愚問だわ…あなたに愛されたかったから…)

落ちる一よ…。

石の煉瓦も、幾層にもなって崩れかかる仏舎利自身であり、その円形の撓みも、破片も、理解する

ことのできない生きる意味となる。恋人に生きる意味を教えられる。愛することの素晴らしさを教え

られる。見返りを求めない奉仕精神について考えさせられる。他の物が何もいないほど、満たされ

ていることに喜びながら、ずっと抱き合っていたりキスしているわけにもいかないから、灯りを消し

て、また年をかさねて、知ったかぶりの世間通を気取って一いる…。

弾性的な個体および流体の運動、公転と自転の時間の普遍一一…。

犬でも恋を一するさと言ったけど、恋をすると僕等は蟻だね…。

意志も情緒もない退化を受け容れて、弾丸が素通りする…！

エグジステイーデンデ

現実に存在するもの…！

フォルシュテールンクスビルト

頭の中に描かれた描像…！

でも生まれた土地に戻ってきて、僕は終の棲家について考えてる。ガスタンク・鉄橋・起重機。機

械主義という感性の変革-文明に根ざしたストレスの変化。ある人は戦後の記憶を知っていて自責の念

で胸いっぱい……！ ある人は、被災の記憶、大火事の記憶、航空事故の記憶――。

一番簡単な仕方で達成される方程式に作用法則は初期条件と変わらないと知って――…。

だから叶えられぬ理想がどんなに多いものか僕等よ、知って、もっと、思い知って……。

透明なプラスチックの小さな窓から見える、本当によく見えると思うのだ。物凄いスピードで回転

を続ける円盤を覗く。U F Oだって真っ青さ。今度は頭の中にノイズが走り始め、僕をフロイトのよ

うな強迫観念に駆っただろう。歴史の法則は両刃の剣。それでも無味乾燥は眺望は不向きな発見法。

だから、不協和音を聴いたように、こめかみの辺りがジリジリと痛みを発する。

いき

今にも呼吸がとまってしまうかのような烏頂天……！

人生ってやつにゲーテ格言集はあたらない……！

眠れる魂を呼び起こそう！ 理性が――ビクバンする……！ 万物折り目正しく、うごめき這い

出、正しく静坐し、何も見ず、何も聞かず、何もしゃべらずにいたら、グサッ！ ってきたよ！

ああ…！ グサッ！ って――僕は…。いづこともなく流れいる百実紅のような血潮を感じる。

すさまじい数学の記号なべては皆偶像か。

畏れ崇ふ埃及模様、知りもえぬものの力、湧き出でるもののせせらぎ。

アレグロ！

ハロー、ハロー！ ハリヤップ！

ナンセンス・コント風の短いテキストストーリー。同一構造を見出す認識。ロボット-人造人間-  
アン

ドロイド。キーボードを打つ音と、シャープペンシルが原稿用紙を滑る音。古風に浮き沈む産卵-  
井戸

こころ

に喇叭を放り込んだ星の稟性。女性のはだけた胸や腕、唇や鼻筋の持つ生物的なやわらかな曲線  
、そし

て肌の肌理の細かさが嘘みたいにアウト・オブ・オオダアアでどちらが正しいのか、間違ってる  
のかは

わからない。けれどそれは数秒で治まった。

(認められます) —— 《すぐに》 …。

頭の痛みだけではなく、音の反響も治まっていた。ただ先程痺れた指先だけは微量の熱を放っ  
ている

ように感じられる。ゲシュタルト崩壊してる。連続体の表象に立ち返る。暗視カメラで街を監視  
するメ

タファー的現在の運命が言う。こんなの全然カタストロフィーじゃないよ。でも、どうしろって  
言う

の、それで！？ 死ねと？ 死んでほしいのか！？

エネルギーの導入について、僕は究極的な一つの見方というよりも、人びとを刺激して自然の  
深奥に

迫る探究へと駆り立てる新しい科学的な疑問を提起するものだ、と思った。いかにして物体はお  
互いを

隔てて作用するか。さあ、と貪り喰らうパンに相剋する呻きの中をくぐってゆく。

……はあ……はあ……。

——ツッコミどころが多過ぎる！

「ワツハツハ……」「ワツハツハ……」「ワーツ、ワーツ！」

ようやく——ねむった赤子のような斬新な気分のあとに思い出す、すがすがしい夏の空気……！

目眩がして。そう言おうと口を開けた途端、目前がブラックアウトした。延長する導線の長さ、直

列の電流の強さ、そして数時間の時が流れた。何度も開こうと試してみるけれど、一向に開こうとし

ない夢を見た。ゆかりが夢の中にあらわれて、なんとしてでも、僕の話聞く。そう言っていた。人

間はすべて苦悩の内に生きる。見えざる機械/使用する機械。

彼女の瞳がそう語っているように感じた。別に、いいのかもしれない。話してみて、笑われるかもし

れない。馬鹿にされるかもしれない。確かにそんな可能性はあるだろう。でも、もしかしたら、何か答

えのようなものが見つかるかもしれない。何となく、そんな気がした。脚がふるえる、胸に止め度もな

い花やかな竜巻が疾風に追われて、生きた心地も忘れて——無意識の運動-心理の交錯……。

長い夜が続いた、あんなにたのしい宴のあとに……！

くら にくたい

こんなにも黝冥い肉體……！ 技巧的に不思議なスピードの春霞よ、何故！

## keep on movin' #AVEN1108

---

すてきなパーティーを始めましょうよ。

時を止めて…、

屋根裏部屋はファンタスティックになる。

ヘッドフォンから流れる音楽に、

(keep on movin')

昼も夜も、踊りたい、

(keep on movin')

—夢の匂いのようにはじまる、

やわらかなそよ風にのって、

イノセンスなミラーサウンドが甦る。

「君の夢にお邪魔するよ」

「春が待ち遠しいから」

—デジタルにくちづけして、

ほの暗く頑なに恋のパスワードを、

見つけて、もっと、素直になって。

(keep on movin')

あたしが背伸びをする、

(keep on movin')

澁んだ空気のなかの電車は走ってゆく、

何となく日々が過ぎ去ってゆく、

世知辛い、明るくて暗い傷が、

――胸の中を汚してゆくけれど、

間違えたプログラムみたいに打ち込んで、

セットアップされた結果じゃなくて、

…水でも撒くように優しく。

「無数の会話ききたいな。」

「青い響きの風がいいな」

恋の始まりみたいに…

(keep on movin')

あなたの吐息に酔ってみたい、

(keep on movin')

魔法をかけてくれるんでしょう？

――あの家の曲がり角では、

酔いにかすんだような、

イルミネーションがあるのよ、

キラキラ光って見える、

匂って、しびいて、花はこぼれる、

あのしたたるような想い、

宝石をつらねて、

カフェやレストランが見えて、

時間まであと少し、あともう少し、

(keep on movin')

カモフラージュされた疾走のピアノの鍵、

(keep on movin')

ブラッシュする異性のダイビング、

——ハイハイ、ボーイ、

わたしはここよ、

闇から抜け出したばかりの熱い夢、

オートマティックコンピューターの、

羽ばたきにも似た夜の流れ星、

あなたは見つける、

迷い込んだわたしを見つける、

不思議な明るさ、

「爆ぜるような音を立てたらいいのに」

「もっと生きてる実感があればいいのに」



服や髪にしみこんでいった青草のにおい、

夜風の匂い、車の排気ガス、煙草の煙、

海の色に染まっているアスファルト、

俳優の舌でも抜き出したような影。

(keep on movin')

腕がほしい、目覚まし時計より正確に、

(keep on movin')

折り畳んでほしい、つつんでほしい、

——白く光る一枚の写真。

ライトよ、来て欲しい、

わたしは踊りたい、もっと、もっと、

まだ見えない夜のダンスミュージックに、

足取りを軽くして、そこだけ、淡く、

時と永遠！ ねえ、そろそろ、

君、キスの時間だと思わない、

——嘲笑でも憫笑でもない、困った笑いを、

する、彼は、きっと、頼りない、でも、

「一瞬で時間を歪めてくれる」

「たった一瞬であなたの心がわかる」

仕掛け装置は牢獄の扉を開いてくれる、

(keep on movin')

堰きもかなわぬ速度の瞳を泳いで、

(keep on movin')

何かとんでもなく素敵な夜のような気がする、

(keep on movin')

夢でも見ているみたいに、

そう、夢をまだ見ているみたいに。

## ラップ #トレジャーハンター

---

なりふりかまわずハッキョウ，カチコミ，マシンガンの如く喋る

Hey (*hey...*) 黙らしなショウの口火切る粋なスキル，スリル

頭ん中悶々詰まった煩惱（懊惱...）Yo! 焼き払おうか...

—そんでもってEverything

Oh (*oh...*) 腕組みしてる奴に見せつける本気のVoice (*choice...*)

「まるで爆破するセキュリティの1，2，3」1on1のスイイイトルウム

— (Baby please)

NEW JACK SWINGで16ビート,ブレイキング,ポッピング,ロックンロールCome-on

柔軟性，力強いかついムーヴ，パラダイスへ let me fly

Say, say, say, (Please) open yo eyes open yo mind

But, アンダーグラウンド核心突く影響無限大のmindはgameなmind

音の残像，走り去るmoving on，これから何処ゆくの招待状ノッてきな！

Oh no，一生このままハスラー，高速tune（に、）ぶっ飛びな！

燃やしな！ 身体の底から突き上げるリズムが誘うクビレ

燃やしな！ とびきりリアルな眼差しがギリギリまで詰め込むタイマー

このリリカルテクニクパーティー盛り上げる，合い言葉は「もう一丁！」

DANCE/

DANCE

DANCE/

...(このシュウティングゲームに終わりはない) ...

... (これはきっと、新しいチェンジアップ) ...

踊る君はダッチ・ロボット・センター

踊る君はプログラマー・オア・オペレーター

---(I wanna be your man)

時にスロウに時にファスト，Everybody さあ，行こうかランナウェイ

さあ，ベイベー ルック・アット・ミー! (*she...*)

裸の王様，Now, we go blaka! 三日天下，隠れキリシタン，

---ドレスアップしてキャンドルライト，ダンスオオオルナイ!

そして今日も俺はこの単独Play，速攻マークしな，ノボってくぜ膨張試行錯誤機関銃

ヤル気あんならこっちはWelcome，アツイヴァイブスでカキマワすフロア・アアド

「口にファスナーしろよ、そいつはただけねえPlay...」この音にRide on，匍匐前進，

ノリ，ステップ，「火が付いてきた導火線」(O.K)

どうのこうのつまらねえ理屈つける今日のup-down

Down深く，もっとtown，っつーことでがんばりましょう!

Step深く，もっとsnap，コンビネーションの流れ，

インセンス香る，midnightムーディー，タイムリー，チェンジャー

(マスタープラン, 俺だけの単独ステージイメージするマイ・ステージ)

—妄想Play (犬も食わねえステージ捌きで安楽死するPlay...)

ハンパ<sup>パ</sup>じゃねえ! この<sup>パ</sup>感じ!

ハンパ<sup>パ</sup>じゃねえ! この<sup>パ</sup>感じ!

(マスタープラン, 刻むビートは軽快, Boyz & Girlsはヒート!)

Hold me tight 君の側に居たい Yeah...吐き気がするほど, 排泄だだもれ

Deepな気持ち, コミュレベル1のスピードタイプのPlay...

それでもkeep, 朝までカマすぜAll night long...

DANCE

DANCE

DANCE/

DANCE

...(野性的な律動感に目覚めるDANCE) ...

... (孕ませたい, 求めたいDANCE) ...

踊る君はダッチ・ロボット・センター

踊る君はプログラマー・オア・オペレーター

二、三日も降り続いた後の朝に、

国はどこかと美しい女に聞いた。

女は三十を越した素性を知れぬもの。

わずかに知れたるこの世界、

故郷の話をした。

隅々までを窺うは容易のわざでないが、

すると三十を越した女は非常に懐かしがり、

しくしくと泣き始めた。

私の故郷も、そこで、と言い――。

では、と、いろいろなことを尋ねるが話がどうも合わぬ。

野暮な疑問とは知りながら、その理由を尋ねた。

山道の温かく湿った空気、

これを通してきらきりと濡れたような日の光、

豊かなる水とその水に<sup>ゆ</sup>汰り平らげられた土の質。

「実はもう私は六百四十歳ばかりになる。」

そう言った――。

微風に面して落花の行くえを思うような境涯。

「――若い時分に病気をしていると、

子供たちが案じて珍しい貝を捕ってきて食わせてくれたら、

だんだん若くなるばかりで死ななくなってしまった。

子にも孫にもおくれたゆえに、ぜひなく国を出てきて、

それから亭主も二十何人とか持ちかえたが、

自分ばかりはまだこうしている。」と。

自分は、ぼかんとしながら、空虚な時間を見た。

歳月の谷間に、畏れ多い時と自然の産物がそこにいた。

だが、それなのに、女は利発そうな光を孕んだ黒々とした目をして、

飄々としている。これには符号がいかなかった。

どんな殿上人も、百姓も、遊女も、僧侶も、

底知れぬ野望を持つものである。

「……………信じられないな」

「では雌雄杉の根もとへ、

黄金の綱をこしらえて深く埋めた貝の殻を、

お確かめ下さい。あまりに奇妙なので、

埋めて置いたのです。」

尋ねてみてくれ、必ず、と伝言したので、

そこで彼がこれを発見した。

万年貝である。

彼女は、八百比丘尼である、と。

(普通なら、そうである一一。)

――だが、男は髪を下ろし、

紅や、白粉っけのない女を思った。

どんな因果か、外からびゅうびゅうと、

風が吹きつける部屋で、南の方角を思った。

そしてその時とまったく同じ光景が、

男の目の前に広がった。

海の匂いも、山の霧すらも届かぬこの場所で、

煤にまみれた言葉たちを。

眼も、頬も、唇も、顎も、頬骨の凸凹さえも、

顔面に通う血の管も、生気をともし、

――自分がいつも目にしてきた、

死の気配とは一切無縁の健康な女を。

障子が開く気配がした。妻だ。

「何です、その大きな貝は……

また、まあまあ、部屋を散らかして、

何をしていらっしゃるの、

はやく棄ててらっしゃい！」

あっさり返り討ちにあう。

しどろもどろとしながら、言った。

「これは八百比丘尼よりさずかりし、貝である。」

そう言ったものの甚だ自信はなく、



むしろ猜疑心が募るばかりではあったが、

これこれこういうわけで、

と男は妻に事情を説明した。

さながら、話を信じるために、懇切丁寧に話した。

「おまえさん。」

と、板間のぞうきがけをしているような眼で、

妻は優しく説明なされた。

「おからかわれになったのです。

貝にそのような効果はありません。女はおそらく、

竜宮の類に親しかったのでしょうか。」

その説明はひっきりなしの雨のように、

男の心を濡らした。竜宮の話なら知っている。

亀を助けると、竜宮城という海にある美しい楽園へ、

連れて行ってくれるのだ。

でも、妻の世にも悲しそうな顔、

悲しみに打ちひしがれた、眼。

「でも、そんなに長く生きてどうするんです。」

言葉は鯉のように、くねりながら、

走った――。

それゆえにかなしげな、赤と緑とに染め抜かれた、

白い帯のように、ゆんわりと弧を描いて、

見覚えのある色を眼前にさらした。

「……私はそれを嘘とも、

本当とも言うことはできません。

でも、どうしてそんなつまらないことを、

仰るのでしょうか？」

「……そんなに、怖い顔をするな。」

男は怖くなった。

赤子の手をひねられるように、降伏するのは癪だったが、

おとなしくひれ伏したのは、いま、そう言わなければ、

妻が何処かへと行ってしまいそうに思えたからだ。

男は、木の葉が落ち、山の火が消えたような気配の中に、

いつもの妻に戻ってほしいと願った。

それよりな、と、ぴんと尻っ尾でもたてるように妻を引き寄せた。

「…やめてくださいまし。」

「……なやましい妻め。歌麿の絵のように、

どうしたというのだ、

俺のでかまらが泣いておる。」

「——話がすまねば、できません。」

「では、話など忘れよう。な、なっ、

お前も、この胸の先端を、すすきの穂で撫でられるような、

指づかいでされると気持ちいいのであろう。お、おっ？」

着物から腕をぐいとさし入れ、先端部を、そふと・たっち、する。

滾りたちそうな股間をおしつけ、和議を申し立てようとする。

だが――。

「やめてくださいまし！」

今度は、完璧な拒絶だった。

「では言うがよい、なやましい妻め、

何をそんなに気にしておる。」

そう言いながら、男は怖かった。

これはまるで、怪談。

このあと、驚愕のしらせがきて、自分が殺されるか、

妻が目の前から消えさる。

そういう、すてれおたいぶ、だと、思えた。

「あなたには、人魚の匂いがする。

私は、その匂いを嗅ぐと、弱い…。」

「何を言っておるのだ、お前は。」

「――それより、な、なっ。」

しかしそれは叶わなかった――。

「私は、鯉です。子供に陸に上げられ、

死にそうになっているところを、

助けられた鯉です。」

——私は、私は、私は、私は私は私は、

私は私は私は私は私は私は私は……。

「おまえ——。」

次の瞬間、障子が破れた。

部屋に、妻はいなくなっていた。

あわてて真っ黒な空を見ると、

龍が空へ昇っていくのが見えた。

男が落胆して部屋へ戻ると、

貝が、跡形もなく消えていた。

数日後、消沈し切った彼の家に、

ひとりの女が現れた。

心の中を真っ黒に塗りつぶさんとする生活の中で、

ひさしぶりの華やぎであった。

しかし彼女は、いとも容易く、こう言った。

「……………すみません、彼女は、

私が昔、うっかり池に落とした貝を食べた鯉で——」

男は、怒髪天になった。

男は、生きようという気持ちを持たず、

むしろ、死のうという気持ちを持っていた。

「おまえのせいだ！」

「すみません、すみません、」

すみませんで済むかこの女、と言いながら、

押し倒し、ぴゅうっ、と帯をほどき、

股間のたぎりたったものを押しつけた。

「ひiiiiiiii！」

「俺のでかまらでひいひいわせてやる。」

(何故そうなるのかは、誰にもわからなかった。

大体、昔も今もこのような茶番がおおまかである。)

しかしすると、

頭上に妻のようなものがある気配がして、見上げると、

やっぱり、何食わぬ顔をして、そこにいた。

男は、お前とは離縁したつもりでいた、と言おうかと思ったが、

これでも十数年連れ添った。鯉だろうが狐だろうが雪女だろうが、

そこはやはり、着物をつぎつぎと剥ぎとって丸裸にしたところで、

決定的にまずかった。

男は、こほん咳払いして、離れた。

「……すみません、自棄になりました。

男というのは、かさねがさね申すまでもなく、

飽きたらざる野獣であります。」

ごそっ、と着物を着るような気配がした。

「私も、謝らせて下さい。

普通の鯉のあなたに靈性をあたえてしまい、  
このような仕打ちをさせてしまったことを。」

「うるさいこの女。」

と、妻、八百比丘尼を足蹴にする。

そこには、なやましい妻の言葉は何処にもなかった。

何故、戻ってきたのかもわからなかった、

ああれ、と倒れる八百比丘尼の道化芝居。

しかし、思うに、それはピンときた！

虫の知らせ一一。

「…………おまえさん。」

「…………おまえ。」

次の瞬間、妻が男をぼこぼこにした。

大体そのような次第である。

浮気はよくないよ、という次第である。

夫婦は死ぬまで連れ添い、そのあとは、

よくわかっていないが、

本当に仲のよい夫婦だったそうである。

## ドアが腐る

---

、、、、、、、、  
タイマーをセットする、

、、、、、、、、  
時限爆弾のメロディー。

「…時々悩みこんで、僕はありもしない希望にすがってる。

僕の知らないことは目に触れることも面倒くさくて意味がない。」

——モーツァルトに耳を傾けている甘く柔らかな香りに——

Ah...ばらばらに碎けて散った

でもまだ終わりは見えない...

花（は、）無垢のうち...に、

haaa... haaan... “弱い”

——“切ない”...

.....自分を閉めている、

.....毒を隠している、

.....（そして、僕は幻の如く死滅する。）

.....the operation of breathing

..... *the process of digestion*

.....だらしのない脱ぎかけのシャツに欲情したりして、

.....ナイフのように火花が散るワン・ナイト・ミッション、

..... (雨に濡れた砂のようさ)

[矢を射るように 心に突き刺さる]

(硝子玉を粉々に砕いたから...!)

毒を含んだ棘。隙間から一一、

触れる者を一一、むせび泣かせる魅惑。

眩しさの裏に消える闇夜 』

川面滑らかに船出の時を迎える緑色の宇宙 』

...WAKE UP!)...WAKE UP!)...WAKE UP!)

...WAKE UP!)...WAKE UP!)

白昼夢。知性を沈めた湖に欠陥は強くなる、電源遮断、

消えてゆく関係。アカウントの削除、消える思い出...

善悪の彼岸、ツアラトウストラはかく語りき。

Ah...いくじなしの僕を慰めるみたいに



## アスファルトに咲き出したヒステリイィ…

「…消えいってく抜け道、それが袋小路でも、よだれまみれの、

(限りある時を糧に 紡ぎ出す世界の果て)

なめくじでも、塩じゃなくて、蜂蜜が欲しい、ぬらぬらの、すごいやつ」

——黄色の花粉が草原にまみれる幻覚に打ちのめされながら——

時／代／遅／れ／な／奇／妙／な／

果／実／に／な／っ／た／か／な／

密／接／な／相／互／作／用／

(で、)／飽／和／し／て／

(で、)／飽／和／し／て／

(で、)／飽／和／し／て／

花(は、)無垢のうち…に、

haaa... haaan... “弱い”

——“切ない”…

……作用における反作用、

……異化作用、

……（そして、研ぎ澄まされた刀のような眼。）

……the operation of breathing

……the process of digestion

……目を閉じれば消える下らない自尊心だよ、

……妄想は垂れ流しで共生する網膜の外側で、

……（熱を失ってゆく、いたずら。）

芋虫。蛆。

こぼれてほしい——、という、欲望、に、

かすかに…、アルコールの匂いをさせて…。

あとへあとへ飛び去る景色、大枝、小枝、

白い斑点が黒い斑点になる。無力感、虚脱感、

そこはもう朽ち果てた場所だった——だ つ た…

君は大丈夫だよ、大丈夫だよって言って——、行き先をなくした…。

それはそのままドアを閉められ、

冬の森の池のような孤独な水面に沈められてゆく——、

ブリザード…。あまつさえまっさかさま下に落ちて、

しおから

……鹹いハムが恋しくなる。

……チーズにも似たそばかす（が、恋しくなる。）

……風向きが南から北に変わる。

……赤信号が黄色になって黒になる（のは、壊れる）

……プテラノドンの求愛、パッションフルーツの色に染まる。

……熱帯特有のスコールが天国揚羽を殺す（が、恋しくなる。）

「……階級闘争、ビート、プロレタリア、モダニズム、でも、でも！

何かが届かなくなる気がする、生意気で肉感的な若さへの冒瀆。」

——もっと散らかせ！ 大袈裟にわめきかえる、とりすましたふりのできない君よ——

花（は、）無垢のうち…に、

haaa... haaan... “弱い”

——“切ない”…

……ヒップでサイケな夢見てるイデオロギイ、

……掌の機械の中の数字、

……（そして、外に逃げ出せない涙。）

.....the operation of breathing

..... *the process of digestion*

..... 静止と消耗の焼き切れたモーターが、

..... 嘘つきを見抜けられない油断のない眼をして、

..... (ざまあしろ！)

「おつかれさまでした。

りせっとぼたんをおしながら、でんげんを、おきりください。」

(お察し下さい。)

(あれのことです。)

「ああ、こりゃひどい！ センスのかけらもないや！」

(たねもしかけもないほどにな。)

「いい夢、見させてもらったぜ！」

「ウホッ！」

「イエエエエツツ！」

(野蛮なまじない。缶ジュースひとつで蹴りがつく。)

(そして、かなしい、め、をして、さっていった。)

(天井に頭をぶつけ、それからあたまたに金盥おとして、それから、それから、

とりあえず、それから、)

(そして、かなしい！)

>>>それだから、かなしい、

>>>ルーラのとび先をひとつも知らない！

(...あのときまで、きづかなかった、

おまえが、りかこをすきやったことに。)

(いや、あのべつのはなしなんで、やめてもらえますか?)

「おつかれさまでした。

このあとゲームメニューにもどります。」

(りかこおおおおお!)

「なんちゃって、ウソダヨーン!」

(ウソピヨーン!)

「おこった? おこったの? おこっちゃイヤーン!」

「おおーん、おおおおおーん!!!」

「こんなのって、ないよーー!!!」

(「おやじにだってぶたれたことはないのに!」)

(「おやじいいいいいい!」)

>>>はあっ、なんだこのつまんない会話。

>>>おまえの人生ほどではない、と後ろから、きこえた。

>>>りあるにおちこむ、さんびようまえ!

>>>このまま電源をお切りしやがれ。

「じゅもんが、ちがいます。」

(じゃあ、あの、かつぱのかわながれ。)

(ええーっ、だめなの、じゃあ、あの、かつぱのきゅうりまき。)

(えーっ、めんどくさいな、

じゃあ、あの、かっぱのさらわるんで、それでいいですか?)

(「おやじiiiiiiiiii!」)

「じゅもん、が、ちがいます。」

「ゾクッ……! いまなら猟奇殺人が出来る」

(やめろ!)

(やめろやめろ。)

>>>中島みゆきって可愛いよな。

>>>え、いまなんで、ボソッって言ったの?

「おきのどくですが、ぼうけんのしょは、きえてしまいました」

(ちゅどんちゅどんちゅどん!)

(ぴゅああああああん!)

「おきのどくですが!」

(そんなこと、これっぽっちも思ってないくせに。)

>>>おもってるから!

>>>いや、あの、おれみながら、いうの、やめてもらえます?

「おきのどくですが!」

(おれは、ゆんけるじゃない!)

「きゃっ、こっち見ないでよ! このエッチマン!」

(おれは、ろっくまんだ。)

>>>す、すべったああああああ！

>>>やっちゃったああああああ！

「教祖さまばんざい！」

「ぎょえーっ！！

「グゴゴゴゴ……」

「ぐふっ……！」

「ダメージコントロール、フノウ。キノウテイシ……」

「ダメージコントロール、フノウ。キノウテイシ……」

「ゾクッ……！ す、すごい殺気！」

(そしてto be continued...)

(それでもやっぱり、AND ACT BY...)

(それでもきつとすぐに、The End.....)

「だってあいつってチョコベリガンブロンだしい」

「ミス！ ダメージを与えられない！」

「ミス！ ダメージを受けない！」

「ミス！ ミス！ ミス！ ミス！ ミス！」

>>>ねこが、ねころんでる。

>>>ゾクッ。



>>>ふとんが、

>>>ふっとんだ、とか、いわないよな、ハハ。

>>>ゾクッ。

「9999のダメージをあたえた！」

(おれのなかの、こすもが——。)

(いや、あの、べつのはなしなんで、やめてもらえますか?)

「かがやく毒のようないきのようなものを吐いた！」

(おれのなかの、こすも!!!)

「あなたは、しにました。

あなた、は、しにました。」

爆弾が落ちてくるような気分で、波。

アパートの二階の一室の左手に大きな窓があって静かな通りがある――。

空想が、波。

爪先を向けることが、必要だった、その、波。

背景の壁に崩れかかった肘掛椅子が欲しい。

白亜の塔が欲しい、それも、波。

生き活きた会話の、閉ざされた部屋。

新聞をとり、不機嫌に読み。

机の上で、さらに不機嫌そうに俯き加減で何かを書き。

真夜中近くの感傷がひとしきりの咳を蝉にし。

自由を処刑する、波。

家具の選び方は一流なんだ、でも飾り類は単調で、ありふれてる。

笑いだすと止まりゃしない。

中学生が自分の冗談に笑う時の笑い。

即ち、名画のコピー。

百円ショップの品物でこしらえた方がずっといい、風景画みたいなホテル。

噴水に靴を浮かべ。

ハアハアゼイゼイ息を切らして着いた時に、

水たまりは――。

他の事は何も考えられなくなってしまう、

あんなに心を打つ、規則正しいタイプライターはない、波。

それがないから、

飲みたい時に飲めるウィスキーやヴィンテージワインが欲しい。

テーブルの上にある花瓶の花の位置を変える、波。

開け放たれている、満月のように、悲しそうな表情。

着こなしに、独特のスタイルと優美さのある君。

それは、かすかな、呼び声。

それは、かすかな、神の声。

「ほら見てごらん、下僕がトランクを運んで階段を降りようとしているよ。」

「竜也、あれは荷物を運んでるのよ。」

「そうだね、女王蟻は何処だい。」

「竜也、あれは蟻じゃないのよ。」

ほどかれてしまう、

ひそかに恥じらいを含みながら、

お前を心底見つけたいと思う、俺の、波。

太陽は出口を指ささない、

必要なことは、うわつつらだけの外観みたいに言う奴がいるね。

ちょっと大きな音になったラジオが幕開けの音楽をくれるよ。

人生は靴底についた花びらのなつかしい春。

人生はどこか遠い世界へと続く、自分の家がある、世界。

「……のどかね。」

「……社会の喧騒が嘘のようだ。そのために海があるように見えるだろう？

違うのだ、お嬢さん、海は最初から、ずっと、このままあったのだよ。」

お嬢さん、と言われて何故か照れる、ゆかりの、波。

ブーメランみたいな形に見える水平線。

薔薇の花が内部から舞い上がる空模様。

おや、きれいでかわいい足首だね、お嬢さん、と言った時――。

僕とどうだい、踊らないかい、踊ろうよ、踊り続けようよ、お嬢さん、と言う。

そしてそれはすぐに新しいブロウになる、波。

感情の高ぶりを抑える為に必要な配慮のようにおもえてくる、波。

「宝石箱を帽子箱に入れているような街。」

と、散文的になる、波。

金属が金属にあたるおそろべき幻の音が聞こえ、

祭壇。明かりに照らされたマリアの肖像画。窓を開ける。空気が淀んでいる。

監禁、束縛を促す、男性的な、波。

息を殺して罠に入るのを待つ。

さらに、世界中にきこえる鐘の音を有している、この海のおおらかさに、

癒されながら毒されていることを見つめている、この波。

眼が、唇が、指先が、

自由、平等、博愛。

防波堤補習工事中の、それでも、波、

な／み

噴火口をもとめてうねりかえる、なみ、

波――。

（その、荘重な通奏低音。）

（あるいは、俺という柔軟な透きとおったおれの言葉の玲瓏な音色。）

いつまでこんな気持ちが続くのだろう。

はげしい豪雨に抱かれているような気配の、潮騒を思いださせる、波。

蟻が、それに吞まれていく、波。

やり直しがきかない人生で、大いなる暇つぶしを求めてしまう。

「時間があれば何でも出来るよ、時間がないと言っても、

絶対に作れるよ。お金がなくても生きていけるよ。

愛がなくても生きていける……！」

見慣れているのに、きっと見間違った、人、交差点、歩道橋、の、波。

雑踏という、波。

それは嘘の波なのに、情報を表している波に過ぎないのに、

でも何か物足りない、心が澆刺としていない、その暗い、波。

糊のついたワイシャツに晚餐用ズボンをはいているみたいな、効果。

遠い人からの便りをいつまでも待っている。

こだまのように返ってくるのを待っている、波。

精一杯生きた、病気をした、働いた、そのみかえりに、

天国へと行くのかい、僕等は。

郵便はストライキ中。

タクシーは地上の星座となりこの宇宙を漂流中。

「……………石油はいつ尽きるんだい？」

（車はいつなくなるんだい？ 未来都市は、

いつ始まるんだい——労働がロボットにゆだねられて、

人が本当に自由に職業を全うできる時代はいつ来るんだい。）

金融帝国崩壊をしらせた、震盪そのものだった、音の、波。

敗戦をしらせた、言葉の、波。

それでも僕等うまく生きてるって、何故だか言いたくなる。

疲れてるけど、何とかやれてるって、言いたくなる。

その魔法、その不思議、その安定した美しさの都市で、

マァブルビーチ、鴉の影、かすかな蝉の影の追憶、

自分自身という疲れた肉体の影。

（きつくきつく抱き締めるよ、

長い長い時間をかけて、君を、無にするよ、

夢にするよ、愛という冷たく光る軌道の上を越えるために。）

しっかり抱いていてね、

抱いているよ、

夜は長いからね。

ひとつの叫びが、その波。

ひとつの祈りが、その波。

たどりついた向こう岸が、世界の果て、でなくてもいい、波。

たどりついた向こう岸が、輪廻の果て、でなくてもいい、波。

たどりついた向こう岸が、嘆きの果て、でなくてもいい、波。

「知性なんてなくなってしまうえばいいのに――。」

「愛なんかなくなってしまうえばいいのに……。」

おやすみなさいと、あの人が、帰って行く、波。

おお、梢の葉はしずかにそよいだり！

うまく生きられなくなる人の弱さを受け容れる、波。

死者が固い鎧を外すための仕掛け装置。

バスタオルを身体に巻いてシャワー室から出て来る、彼女を想像する、波。

バスローブを脱ぐ。寝室へ行く。電話鳴る。

「はい」の一言で救う。「いいえ」の一言で殺す。

歌に行き、恋に生き、時代に行き――。

怜悧のことさらに冷えたその清らかな迅雷風烈なひびきの波。

幾万の昼をすり抜けた、そのひとつが、この波。

幾万の夜をすり抜けた、そのひとつが、この波。

小さな舟が、揺れている。

裸の女が、波長をもったエコーのように、髪を振り乱している。

麒麟の求めている高い葉っぱみたいに、そこに彼女がいて、

僕は懸命に首を伸ばす、それで、首を折られてもいいとばかりに。

夕焼けが僕の楽譜、心が喪服を着る時代の、あたらしい、波。

遠くの方へとやっぱり君が消えてしまう、波。

お前に会いに来たに決まっているじゃないか。

お前が何処にいるのか探し続けていたのだ、波。

酔っ払ったようなお前がいま一番美しい時刻になる、波。



花が咲き、散る

しろい手が、ふれる

銀色の、スプリング

花びらと受粉のような

エロティックなセロファン

微速度撮影――。

街における何かが完全に絶えてしまうその先で

愛とかいうもののその先で

優しさとかいうものの先で

うめいている

僕は見えるかい？

みえる かい ？

雑木林から

ひかりが際限なくこもれ

鉄がささくれている、街灯、しらけた空

涙さえ浮かばない、雨も、この夕闇も

生きていることを無自覚に綴っていく

ストップモーションのガラス片

(だから、ぼくは、)

(だから、ぼくは、)

(拋物線えがくように、プルトップを、ひきたい)

(ひきたい、がっき、が、ある)

悪夢、を、見ているみたいだった

蜘蛛の巣は、赤いリボンを飾り

見たことのない瞬間をつくりだす圧倒的な誤差

でも際限なく広がる地図は僕の血管を透かす

けして感傷的に終わらせたくはない

ざらざらとした手触り、の、

埃が言う、の、だ、

まぶしいだろう

色とりどりだろう

じっ、と

僕、は、見ている

みて いる ?

祝うべき午後五時

吐き捨てられそうな、ひねた物言い

汚されてしまいそうな、街路樹のかじかみ

ひらかれた手のひらに

やわらかいものを、押し込む

輪郭が、飛ばされてしまう

くりかえす、

くりかえす、

アンダーライン……

何故、君は知りたがる

かたちのない、もの、ば、か、り、

きらびやかなまやかし、が、なにか

大切なこと、大事なこと、

告げようとしている、よ、う、に、感じる

かんじ る ？

「その水を飲むことはないから——解体した……」

(解体した、摩擦を、光沢を)

べんちに

もたれながら

かぜはすりぬけてゆく

それはどうすることもできない、恋

線の本一本をほどいてゆくような

長すぎるシャッターのなか

熱を帯びてゆくような、ヘッドライトの光

ひらめかせては

石の上に、蝶が止まる

《ここは路地の出口だよ》

と言いながら

きっと僕は

(ここは嘘の始まりだよ)

って言うんだ

そうやって、また

それだから、また

徘徊してしまう、敷石の上

コンクリートの上

「ー人生はピンボールゲームなのかな」

と言っても

『……人生（は、）』

あらゆることに接続している

そして誰も知らない結び目を見つけた時も

そして誰も知らない解き目を見つけた時も

きれいだった

……泣きそうだ

もういいだろう？

もう いい ？

緑の落とす影が

バケツと、スコップ

子供の小さな片方の靴と

野球帽を、見せている

土踏まずから、酷い酔い方、さざ波

鍵を持っている、この視界、広いんだ

(あわてて、きす、した)

(きす、は)

(のどのかわきや、かみのいろ、を、

つたえてしまう)

……………なんどでも

そう、なんどでも

なんどでも、なんどでも

(しみだしてしまふ、テーブルの向かいの席を、

花瓶の花の色を)

(きす、は、)

(ぼくに、あたまを、ぶつけさせてしまふ)

(ぼくは、がっき、を、ひかない。)

木々のあいだを、鳥がゆく

夜はもうすぐ、目の前に来る

猛烈に駆けだした、始点

まだ何も語ることはできない、始点

しんしんと降り積もったような沈黙だけが

僕を語り、僕を生まれさせる、始点







-----宇宙

子を産み育てる母――

仕事をして妻と子を食わせる父……

周囲の世界はまだ未分化なまま自我と語る子供――

(なにか、それは、おかしいというきがしながら、)

(なにかとてもおかしいものの、なかに、くみこまれてる。)

――それは「先天的認識」の「世界像」

「ぼくはときどきかんがえてる、」

われわれはわれわれの生命の中にわれわれを超えて働く大生命の働きを

……ペニスでいてフォルスの

-----宇宙



用心深いまなざしが、とたんに安堵に移り変わった。

干渉する権限はない、と言われる可能性もあったからだ。

肩を落とし、疲れた目をしていた。ひとりの、手には、射的から殺りくへとすり替えた道具であるピストルが持たれている。ひとりの、手には、ブランド・エストック-仕込み刀。

だが、そんなもの、モンスターたちにとっては威嚇程度にしかない。

ごほごほ、と空咳をしながら、

「おお、お兄さん、ありがとう。」と、ビキニ・アーマー姿の少女が言った。

鋭い爪が肌に触れたような衝撃。心臓の中で何かが這いずり回る音がする。

正体不明なものへの本能的な恐怖に、身体中の筋肉がぎしぎしとぎこちなく軋む。

彼女も、どうもそんな不謹慎な状態になったらしかった。

永遠にそのまま見つめていたら穴があきそうだったが、それは、突如停止した。

ドアが閉まる音がして、そろそろと目を開けたからだ。声が、聞こえた…。

「助かります。」と、極端に露出度の高い少女が言った。

太陽に焼かれたような小麦色の肌。発育-大きな胸を隠した、そこには、乳首が勃っていた。カフェーやダンスホールが浮かぶ。踊り子だろうか。しかし目を吸いつけるように見てしまう自分の猥褻よりも、ビキニ・アーマー姿の女性を気にする自分が恥ずかしかった。

（それは男性特有のものだから気にするな。それに君はゲイじゃない！）

と、幻の中で、線で三次元を表す不思議なプログラムみたいにセルビアの声が聞こえた。

自分が磨かれた刃物のように思えてくる。取り返しのつかない種類の忘却の前の弛緩。

驢馬のように、道草でも食っている気分だ。深い倫理理解と、道德観念。諷刺的存在。

「うう…」

さらに、もう一人は、布を頭にかぶって、現実逃避していた。孤独な儀式だった。

お尻が見えているので、三人と確認できたのだが、やはり滑稽な姿である。

熊でも襲ってくるというのに、絶望的なまでに生存確率を下げている。

プロフィール

しかしそれは素直で優しいのかも知れない、と分析する。

そんな薄い殻の中で、死の感触を近づけ、生の感覚を遠ざけている。

断崖絶壁にしがみついた鷲の手をふっと想像した。

次いで、ゾンビの手を想像した。それはすぐに、粉碎され、粉末となった。

サイコプリント

心臓がゆっくりと毒を吐く。脈拍が、精神紋をしようとする。

「しかし、これだけの敵がどうして？」

「そこの布かぶっている子が、《呼びよせの術》を使って、失敗したの。」

もう一人の露出度の高い女性も、腹立たしげに何かつぶやいた。

すると、ごめんって言ってるのに、という叫び声が聞こえた。手に取るように分かった。

あれは雷に怯えていた子供部屋。絶えいるような絶望が地上の空気的一切を色濃く閉じこめていて、腐敗した思い出の耐えがたい臭気…。間歇的な不協和音……。

ぽっかりと空いた胸だけが覚えている、恐怖。不合理ゆえの深淵の呻き。

獰猛な殺気が目の奥に息づきながらも、空虚になる。氷室に入ったように、強張る。

揺れるブランコ、裸の水浴び、紫の蝶…………。

(人生は無常、刹那的な消滅、水の泡、かげろう、風の前の塵…)

「《呼び寄せの術》…。何だそれは一一。」

と、思いながらも、いまは、話している場合ではなかった。戦いは常に命懸け。不快な印象や、不信、あるいは疲労というのを辛辣なまでに斥けねばならない。戦闘中にいちい

ち余計なことを考えていると、どうしても後手に回ったり、悪ければそれで命取りにもなりかねない。それにしても気丈な少女たちである。

こんな危険が迫っていたら泣きだしてもおかしくはないのに――。

「と、そんなことを考えている場合ではないか…」

表示や数字の羅列――。蛇の模様……。

目の前にジェリーやゼラチナスの不定形生物であるスライム。ごぼごぼ、と毒の瘴気を発散している。水色。容姿の醜悪な小鬼-肥満し切った金満家といったゴブリン。ドス黒い。口は異常に大きく、タラコのような唇をしている。それに、犬のような人型のコボルト。大きな眼はガラス細工のように、キラキラとしている。犬などが威嚇する時の作為的な表情をしているが、大抵そういう犬は弱い。そして、レベルとしては中級に位置される洞窟に生息するジャイアントバット、人が寄りつかない沼地に生息するジャイアントスパイダー、熱砂の沙漠に生息するというジャイアントスコピオンまでいる。これだけの数を相手にした経験はもちろんない。少し前のブロンクスなら、身体の萎えていくような無力感に陥っただろう。だが、ロバートの勇姿が目に焼き付いている。

衝動的な狼狽-天使。神の使い、予言者、救世主。

火によって溶けてなくなるセロファンの残骸…。嫌な臭い――。

また、モンスターに味わわされた屈辱、弱い人の嘆願まで思い出され、石膏像のようになる。今までけして考えたり、味わったりすることのなかった感覚、説明不要の、力――。

ブロンクスの肩の力はむしろ強張り、胸が武者震いしていた。塔の天辺から降りても生き延びることができる。そう、歴史は縦横に動き出す。モヤモヤしながらも、絶対絶命ではな

かった。そしてそれは甘い感じではなく、みずみずしい印象を与える。些細な出来事も見逃さないほどに、頭が冴えている。

セルビアの剣の試験によって、何百倍も強くなっているのだ。

そしてその過程で、剣に魔力を吹きこめられることにも気付いた。

魔力は血の流れ、次第にそれは形を成していき、それが剣を青光りさせている。魔法剣士の資質。ブロンクスは眼つきがひとときわ凄くなる。光は屈折されている。

レタッチマン

修正工。意表をついた表情、類型のない魅力。

ケ・セラ・セラ

なるようになる。

「必殺、高速風車！」

ブロンクスは、高速で腕を風車のように振りながら、幾つかの進路の内、もっとも攻略しやすいスライムから斬り捨てていく。ひどく尖った歯車が瞬殺する。丁度、蛇の鎌首を断ちきってしまう熟睡のように、降って湧いたような災厄でこそ肉体の血を燃やす歓喜に熱中することができる。動物臭い体温。風車の中でスライムが集まったり、離れたり、ふわふわして見える。地面ごと、ずごく、と抉ってゆく。スライムの刀を錆びさせる粘液さえつかない。と一一、画面にノイズが入ったように暗い影。玉葱を剥いた時のように目をやられる、死出の羽衣。流離の雲からはぐれたような暗躍-糞便色のジャイアントバット。治癒し難い、とか理解しがたい傷跡を持った図体の昆虫のような愚かな衝動で、軽率な行動。網の中…。自分がおそろしく冷えてゆく。世の中の裏側につれてこられた囚人-遠くたゆたっている絵のなかの敵。蟻地獄、砂の中に見える蜃気楼のオアシス。安易に近づけば斬り捨てられるというのに、何を見たのだ。どんな快楽を欲しがっているのだ。ヴェールのようなエキゾディシズム的邂逅。やがて、宙に静止する打撃に鋭い声音が蔦みたいに巻きつく。異形の者の悲鳴

が聞こえた。蝙蝠傘のように、閉じる、開く――右往左往する。やはり、夜行性であるのに昼間出てきてしまったがゆえの帰着か。ぐしゃりと液体のように形を変え、木の葉を揺らす風の音が聴こえる。

腕や胸の筋肉ごと、すっからかんの空洞へと吹き抜ける。

整理のつかない不安の中、時計のネジでも巻いているような気分になった。

うひょー、と布をかむっていた眼鏡の少女が言った。情報に基づく経験や心配り。

逃れ難い運命の犠牲――驚愕か、パニック・蠟燭をともし・畏れと葛藤の結果――。

感情が電波のように伝わってくる。錯綜した状況の麻痺のなせるわざか……。

「この人、めちゃくちゃ強い！」

こんなスプラッターな場面で、そんな呑気なことが言えるなら、大丈夫だな、と思う。

それは無能か、頓馬か、という蔑視でもあった。

卑屈な騒ぎっぷり。感嘆符の乱れ打ち――が、空に向かって、次々に追放される。

見れば見る程、アニメ的、戯画的、しかし虚飾めいた立派やかな宝石類の誘惑。

遊興の渦巻！ 愛嬌を振り撒いている踊り子のタンバリンの鈴の音も聞こえるようだ！

ブロンクスは、コボルトの首をすべて刎ねた。揮発性の計算作業、過酷な場面にレンズが忍び込む。芸術家が彫ったように完璧にグロテスクでエロティックな美しさ。怪物-寂滅為樂のうちに白骨となる。飛花落葉の理-石化電光、正義も、愛も思想も死して灰燼となる。

不思議な騒がしさをもち続けてゐる酒場！

しかし、まだ、ゴブリンに、ジャイアントスパイダーに、ジャイアントスコーピオンがいる。

ジャイアントスパイダーは様子をうかがいながら、夢遊病者、あるいは徘徊者のようにかさかさといわせ、生理的な嫌悪感を募らせる。小さい虫ほど性的不能にさせるような気色悪さを持つ

ている。天敵である人類への戦線作戦-たとえば蛍光性のある藍色のアイシャドーのような頹廢。  
やがて、蜘蛛の糸をビュッと吐いてくる。衝撃吸収材のような印象の蜘蛛の攻撃。

豆粒のような人々と樹状突起のようなモンスターを、鳥たちが見ている。

俯瞰する視線、客観する歴史的背景を持った視線。そんな風に他人を嘲弄している会話のよう  
な囁り。四方八方からの、脚や尻を眺める性的な観察――。

ゆらゆらと酔いのように揺れる森の中はかすんだおぼろな光と闇の交錯……。

骨組の露出したようなジャイアントスパイダーのその糸は剣では切れない。放射状に広がる蜘蛛の脚が吸収する果てしない大地の鼓動。現代美術のような、無造作な結合-巻き込まれたらアウトだ。しかし、ブロンクスはそれを見るや、体細胞の温度を変える。脳内で、青から赤へと色を変える。オレンジ色の星のように、ウィスキー瓶でも呷ったような、次の瞬間、ブロンクスは手をおもむろにかざし、火焰呪文で蜘蛛の糸を尻ぎ払った。真っ赤な炎の輝き。セルビアからは、  
先天的に炎の魔法を使える資質を持っている、と言われた。俺とよく似ている、とも。

自滅に気をつけろ、と戒められもした。八本足の狩人、ジャイアントスパイダーに、集中する。

視覚情報-人間の顔みたいな模様を見ないようにしながら、額に浮き上がった獰猛な血管の筋。

「必殺、風の太刀！」

そう呟いた瞬間、ブロンクスの素迅さが数段階に跳ね上がったかのように、ジャイアントスパイダーの目の前まで行く、加速。映画のスクリーンから抜け出したような、何かが壊れる音。暗闇から飛び出した弾丸。残像-心の中に残っている自尊心の燠。人間を食べることのできる圧倒的な力。だが、攻撃ができる有効なテリトリー間でさえ、ジャイアントスパイダーは動けない。

枝の折れる音や幹の裂ける音-ズバシュッ、と斬りつけていた。危難の道を越えた栄光の曠野へ



と導かれていく予感。声にならない叫びと身悶えのあと、消滅する、ジャイアントスパイダー。  
薔

薔や鬼薔の花束のような黒い血が、その後に残った。

野獣の血潮にフロンティアの夢-激しい光、雨の音、戦場に振り落ちる矢、眠りに寝返り。

そこへ覆いかぶさるように、湿っぽい空気が這入り込む、美学。

「カッコいい。」と、少女が言った。

誰なのかはわからなかった。

だが、ブロンクスはその発言を聞いて、愕然と目を剥き、力が抜けそうになるが、確かにやっていることは、西部劇みたいだった。粒のあらい砂のような展開-長い間積み重なった本のようなシナリオの中心的思想。屑や、ゴミ。不幸な出来事による恐怖が、空虚な場所にする。いかなる立派な言葉も頭の働きを鈍磨させる。だが、あのまま放っておくわけにはいかなかった、と、横顔の凛々しいブロンクス。

身体の奥深いところで熱を持っていて、それが恐ろしい胃のむかつきと同居している。

しかし、力を抜くわけにはいかない。ゴブリンと、ジャイアントスコーピオンがいる。

ジャイアントスコーピオンの毒の恐ろしさは熟知している。また、その装甲は鉄よりも硬い。

威風に似合わぬ野蛮な口調――。

「必殺、居合抜き！」

間合いを引き寄せたあと、すう、と力を抜きながら、剣をおさめるブロンクス。

目の前のスコーピオンが近寄って来る気配がする。結果として起こる現象。光。  
フラッシュ

気圧が下がったように、キーンと耳鳴りがする。ストレス-幸福……。

鉄の扉が錆びつく――。顔の筋肉が痙攣して空気が歯の隙間を吹き抜ける微かな音……。

織物の軋む音、かさっ、と音をたてる衣擦れの音に、汗がふきだす。

「きゃあ、逃げて！」

が、カッと、眼を見開いた瞬間、その肉体の運動能力は最大限にまで引き出されている。無意識の力を利用する。低くて太い、空気を吐き出す音。ブロンクスの剣はジャイアントスコープオンを切り裂いていた。呼吸器系から潜り込もうする意識。口内から沈んでゆく泥濘。そこには、剣を握ったままフォロースルーを迎えている、返り血を浴びた騎士がいた。

「す、すっ、すご！」

「あれだけの敵をやっつけるなんて、この人、何者！」

ブロンクスは、ゴブリンにかちゃっ、と剣尖を向けると、逃走しようとした。ゴリッと首を百八十度回し、首が不自然に捻られたままだ。ゴム人形のように少し笑ってしまう。だが、無理もない、と自分の強さに満足感をいただきながら、しかし、心のどこかではロバートのようにもっと強い敵を求めている自分がいた。こんな滑稽な争いで満足できない。ミノタウロス。ワーウルフ。

疾走する一削刀のようになっていく…。しかしそれは、ブロンクスの勇気ではなく、ロバートを乗り越えたくてどうしようもない彼の嫉妬であった。苦虫をかみつぶす表情-サカリのついた猫。

だが、それと同時にセルビアの戒めが襲い、かぶりを振って、自尊心に下ろし金をかける。

ブロンクスはそれを見て、剣をおさめ、迷いの森のきらめきに見入ろうとした。が、その逃走先に、一人の青年がいることに気付いた。緊急事態-安堵が途端に波線をえがきはじめる。かろうじて免れていた驕りが、ブロンクスの焦慮を後悔の念でいっぱいにした。

「ま、まずいっ！」

ブロンクスは、もう一度、呟いた。

「必殺、風の太刀！」

心が軽くなる呪文――。が、自然と急かされている気分になり、速くなる。

ブロンクスは急いだ。そして、五匹のゴブリンの進行先を防いだ、さまたげながら、無機質なメッセージ。心の奥の醒めた、もう一人の自分――。揺り籠にしているような表情……。

人間とは、不確定に思考する時に瞬時に計算出来る能力にある――。

見えない翼で音もなく滑ってゆく。

「……………そこの青年、逃げろ。」

そう言いながら、ゴブリンを斬り捨てていく。一匹、二匹、三匹。

しかし、もう二匹が青年のもとへ向かう。まだ余裕で追いつく。

だが、その瞬間、ゴブリンの身動きが遅くなった。明らかにゴブリンの顔に、動揺が走った。

しかつめらしい顔に、つぎはぎされた喜劇のような印象がピンピンとピアノ線のように感じられる。王が住む宮殿のような部屋にいるみたいに、青年は書物をかかえながら、皮肉めいた顔を浮かべ、じっと、ブロンクスの眼を見ていた。迷妄と不合理と激情と恐怖と、を。

溶液に満たされているような、不思議な雰囲気のある生年。無表情で背筋をピシリと伸ばした姿勢。

だが、観察する余裕を与えない。完全に孤立している、というか、超越している。

しかしその一欠片の情報はまるで最初から頭にあったように――。

「も、もしや――」

ブロンクスは黙った。顔は見えないが、考えているのだろう。

震える手でノックして地下室のドアを開けるように――。

時の魔法使い…。ユニーク魔法――。

噂では聞いたことがあったが、使い手は見たことがない。

「は、はやく！」と、青年が言った。

そのぴしりと頬を叩くような声で、我に返る。頭から水をかけられたように、

急に顔を強張らせる。眼には見えない、強張りの波が走る。

——地平線のかなたまで遮るもののない末広がりした迷いの森の眺め。

「かたじけない！」

と、何だか立場が逆転しているのを変に思いながらも、ブロンクスは、

次の瞬間、二匹を一太刀のもと、真っ二つに切り裂いていた。戦闘不能。

敵はすべて、死んでいた。完全な勝利だった。戦う気力もなくしていた。

「ふう——っつ……」

とブロンクスは、ひと息つきながら、しゃっしゃっ、と剣についた黒い血を払った。

言葉が途切れたり、物思いに耽るように、階段、つめたい、音の——軋ませ…。

夢——夢、淡い、だから、視界はボンヤリとしていて、頭——頭、働かない。

夢から覚めれば微かに気持ちいい記憶と、空があるばかり……。

(ここは迷いの森——。)

(ブロンクスの首筋から汗が流れ落ちる……)

モンスターは基本的に、黒い血だ。一説には、毒があるから、闇の力があるから、と言われてい

るが、正確なところは、よくわかっていない。神に対する最も忠実な信仰であるように、古来から

そのような具合。誰も別段とがめだてするでもなく、誇張にもあたらない。と、熱狂する野獣戦

の

見物人は聞こえよがしに歓声を送る。燃焼作用のそれは、不器用で後ろめたいほどに一過性だ。  
機

械集合的な黒の装置。分裂症的統計学。綺麗に、妖気を醸して見えてくる。

フィルターは除去を始めている――。搜索が破壊を始めている…。

別に救ったつもりはない。それどころか、危うく余計な犠牲者を増やすところだった。その辺  
中

が、皮膚を刺すように寒くなる。繰返して思う、買被りだ。感情移入は厳禁だ。人助けではない  
。

それはもっと原始的な衝動であり、未熟な人間の執拗な戦闘への本能である。否、それでもいい  
の

だ、というように女たちは愛想を振りまく。あなたがいなければ私たちはきっと死んでいた。それ  
れ

だけで、あなたに賞賛を送りたい。

消えゆく行進のリズム――。空を渡ってゆく、赤銅色の記号…。

しかし、一向にブロンクスの疑問は解決されそうにもない、膨張する宇宙的問題だ。

(髭も剃らぬ、汗臭い男に、女など無用――。)

(否、誰だって、我を忘れるほど空しい紺碧…。)

それに、ここは戦場だ。鼻につく酸鼻をきわまるこの血の洪水は、戦争と同じく壮絶なもので  
あ

ることにはかわりはない。蒸し風呂のように不快な体感温度が、余計にそう想わせる。はじいてみ  
る

と、もう弾力のない肉体が入れ違いに生まれることも。水を汲むポンプの音は拍手や喝采となつて、

より一層、余所余所しく他人事めいて感じられてくる。このきな臭い死という不気味な秩序の前で

は古典的に赤と白と黒を見やるほかはない。隕石のように――墮ちて…いく…。言葉、一言一言、

感情の固まりとなつてぶつかる。衝突する、対峙する――。憎しみ、憎悪、妬み、迷い、そして、

悲しみ。重症な熱病感覚-馬の蹄の音。石に、糊を、海を、鏡を…………。

異形であろうが、殺すということに喜びをいだいてしまう戦闘狂ではない。だが、闇に浮かぶ自画像は、猛獣。狂戦士。二つに一つの選択を迫る。押し返す潮のように、夕暮れと共に不吉

さを増す不気味な夜の影のように、現実の世界へと引き上げられてゆく意識は、確実に――そう現

実に、無条件に、争いへと向かっていた。そこにロバートという宿命を最初から持っている勇者の

姿があった。狂気の如く飛び交っている、舌打ち――。

「助かったよ、騎士どの。」

と、青年は急斜面を下りてきながら、言った。

近付いてみればみるほど、札付きの不良少年というイメージが付きまとう。

黒髪に、黒い瞳……。

気味悪そうに、そして少し好奇心が混ざった眼差しで見守っていた、男。

痴呆性を持たずにはいられない独楽のように明朗なる響き。

「いや、戦闘にまごついている間に、あやうく飛び火させてしまうところだった。

すまない。もっと、早くモンスターを仕留めるべきだった。」

――と、青年を見る。

こういう手合いは、独自の見解を持っている。合格のようだった。

「僕は詩人だ。もちろん、気付いてるだろうね？

僕はユニーク魔法の使い手のひとりで、時の魔法を使うことができる。

また、占星術や風水も少しかじっている。機会があれば、見せよう。」

だが、まだ足りない…。

「その顔は納得していない顔だね。その通りだ。僕は異世界から来た。」

「なるほど、それは面白い経歴の持ち主だ。」

――と、後ろに三人の少女たちが集まっていた。

少女と思っていたが、十八、九は知っているのかも知れない。

そうであれば、立派な女性だ。

ひとつひとつ物の在り処を確かめるような眼で、ブロンクスは見た。

色が薄くなり鮮やかさ鋭さ艶がうしなわれてゆく――。

「先程は危ないところを助けていただいてありがとうございます。」

と、目の前に出て来た、金髪で碧眼の女性。そのグループのリーダーらしい。

と、前頭葉のあたりに触覚が見えた。どうも、昆虫人種らしい。

ずっと昔に見たシルフィードの絵のような美人。

睫毛は長くて上品にカールしていて――。きれいな羽根のような印象で……。

ふんわりとした毛糸の玉をころがすような、声。映像のように強烈な、茂みや下草を通る蛇のよう

に、視界が、立体的にぐっぐっと広がってゆき、永遠に消えてしまいそうな音楽が流れる。近付

ければ、近づくほど、罪というものが泥沼のように意識される。精神修養-鍛練、それが硬い物同士の触れ

合  
いのようにぶつかる儚さ。寄せ集めのブラスバンドが必要な夏祭りのような場面……。

「アルトと申します。」

さっきは、どうもありがとう、とにへらにへらしている童顔の女性が後ろから出てきた。

爽やかなボーイッシュな髪型。布をかぶっていた者のようだ。

眼鏡をかけている。またウサギの耳をしていた。動物人種らしい。

「あたしは、イヴ。モンスター使いなの。」

なるほど、《呼び寄せの術》とは、その技なのだろう、とブロンクスは判断した。

しかし、女性でモンスター使いとはあまり関心しないな、とブロンクスは思った。

それは女性差別と言うよりも、女性に異形のモンスターを見せたくない、という気持ち。

モンスターは、ファンシーな生き物ばかりではない。

が、その言葉の根なし草のように足下から消えてゆく――。

「イヴは、ちょっと、おっちょこちょいだけど、錬金術や妖術が使えるの。」



「困った時の、キャッシュカード。それ以外に使い道はない、家事のできない女。」

イヴがものすごい眼で、まだ名前を聞いていない女性を睨んでいた。

確かにちょっとすさまじい言い草だった。毒舌。ざくっ、と胸をえぐる音が聞こえてきそうだ

。

でね、とイヴがにこにこしながら、チラッとアルトを見た。

呼吸が出来なくなったように、口を魚みたいにパクパクと開けている、アルト。

「アルトは、鳥使いで、魔法屋なのよ。魔法医でもあるの。

優秀な、魔法学校出なの。ミスコンにも三年連続で選ばれた、美女なの。

でも、気取ってなくて、優しくて、しかも、恋人もいないのよ。」とも言った。

目を合わせると、何故か、照れた。文字どおり、真っ赤になった。

やめてよお、自慢しているみたいじゃない、それに恥ずかしい、と言った時、

戦いの最中、カッコいい、と言っていたのはこの者か、と、ブロンクスまで照れた。

何か、自分が打算的な行動をしたように感じられたからだ。

いつまでも歩きまわっている場所――。

男性における空虚な命名行為、縫い付けるような砂浜の文字的行為……。

「……それでわたしが、踊り子のレモン。いい身体してるでしょ？」

ブロンクスは、知らないふりをして、眼を遠ざけた。大地から泡立つようにうまれた豊満な肢体だ

が、目の毒だ。化粧も好きではない。口紅も好きではない。香水も好きではない。

小さな習慣-綺麗にしてきたものは綺麗に、汚いものは汚いままにしておく。

が、ふっと手に鱗のようなものがあることに気付いた。

もしかしたら、爬虫類人種——。サキュバスや、リリスなどが頭に浮かぶ…。

が、それは間違いであることをアルトが教えてくれた。

「……………彼女は、人魚の血を引いていて、精霊使いでもあるのよ。」と、アルトが言った。

ということは、ウィンディーネ、マーメイドの血を引く者ということか、と思った。

人魚の血を引く者は妖艶な女性になることが多いというが、その典型かも知れない。

「もう一言、言い添えればギャンブラー。浪費激しい女、カジノに全財産つつこむ。」

先程の仕返しだろうな、とブロンクスは思った。

イヴの表情は、どことなく下世話なものになっていた。

満足そうな憎々しげな顔をつくったあとは、ぺろりと舌を出した。

「この馬鹿！ あれは！」

「——昔、レモンは情報屋の仕事をしてたことがあったのよ。」とアルトが補足した。

何かあったらしいが、ブロンクスは何も言わないことにした。

職業に貴賤はない。だから善悪で判断する用法にもならない。

また人種についても、数百年前ならいざ知らず、我々の中に差別意識を持つ者はいない。

「なるほど、ユニークな者たちだ。」

## 放棄について

---

遠い夜明けの光が、

難破船のように、

揺れながら。

何日、何週間歩いたか、

サヴァンナではない、

黄色い水飴のなかに溺れた虫でもない、

――俺は黒い骨の糸だか鉄の留め金。

石や、鋼鉄。

でもそれは嘘だ、

何故なら、俺は、

ふるえおののいているじゃないか、

果てしなく拡がる、

瞑想の形象の真っ黒な影法師、

その蛸の足のような、

淫蕩で多情な、遣る瀬無い闇に。

「空は…………。」

一瞬混乱して、自分が何処にいるのかも忘れて、

揺曳する飛沫の帳へ、

得意げな高笑いの裾へ、

垂直な孤立。

いたずらにえぐい味のゴーヤを食べた。

靴が鬱陶しくて山道を脱いだまま歩いて章魚だらけにした。

ゆっくりと落ちてゆく黄昏だった――のに…、

木立の中をはずれて、森へ、森へ――と…。

焚き火は燃え尽きかけ、

水面に落ちかけるように、

燃え尽きかけ。

「それでもひとりでに動き出す身体のくねり…」

温かい首を撫でさすり、

目を細め、

酒臭い俺は、

歩道の端から端へとふらつきながら、

――雪を誘う。

突き出た岩の上で感じている、

律動への接触、

全域へと拡がる途方もない欲望。

それでもばらばらな気持ち、

好き勝手な欲望の満たし方、

無意味なおしゃべり、

人はみんな、なにもおかしくないふりをし、

雨の日も、嵐の日も、雪の日も、

こんなこと今までにもあったと言った。

「ピンボールゲームをしている…だけさ…」

中央の建物の赤い警告灯…。

空のくぼみに鞭のごとく幹がしなる、

ゴムがもっともかたくなる瞬間まで、

ちぎれそうに一一なる…。

奇跡は白い帽子のようなものかも知れない、

奇跡はたとえば銃の束かも知れない、

そして無邪気に、純情に、産毛だらけの臍みたいに、

奇蹟は、多分、末期の人間へのすすめ。

準備をしなければ結果は出せない、

負けた瞬間から勝つことは絶対に出来ない、

いまがすべてで、明日や明後日それが出来るはずはない、

取り返せないものは永遠に取り返せない。

静かに傾いている坂道をのぼるよりは、

降りた方がいい。

転げるならもっと早い。

僕は聞く、

苦痛に耐える呻き声を。

最後の最後まで足掻いている良心を。

この時代の覚悟を。

俺は心臓の音にこだわっている、

風を追いまわしながら見つけた場面に焦がれている、

ぱらぱらと本をめくりながら、

自分の探すページを見つけるまでの焦がれに、

酔っている。おぼれている、

狂いだしそうになりながらも、探している。

「運命の悪夢は皺のある寢床へ末期の叫びをとどめた・・・」

浮浪者。

まるでヴェトナム復員兵みたいに、

そしてそれも一つの記号であるみたいに、

ルーズリーフ式のノートに。

色んなことはすぐに見えなくなる、

魂の言葉はすぐにわからなくなる、

揺れ動くカーテンが隠した毒蛇のように。

片羽根を斜めに広げた黄金虫のように。

一ページ、一章、一冊、と、

色も音もない、一分間へ、

思想も政治もない、十分間へ、

押しボタンもマニュアルもない、一時間へ、

痛みも苦しめない、

永遠一一。

[永遠は、カーテンを閉め切った部屋に、

こうこうと明かりをつけている……]

無限のような印象をもたらす左右対称のビル群。

老いた女のかなしいほど醜い乳のように。

情けないほど縮みあがって陰毛に隠れてしまったペニススのように。

旅人はつめたさにあこがれの羽根を見た、

ためいきのうらがなしい鐘の音をききながら、

西洋紙のようすっぺらいマントをひるがえして、

めだかのように、信じられないくらい目を大きくして。

でもそれは都会のルールじゃない、

文明のルールでもない、

俺が作った俺のルール、

それで、もう、角砂糖に潰された蟻のようになっている。

それで、もう、ペインは、リグレットは働いている。

それで、もう、鉛や、弾丸は、消えている。

熱を失う、嵐が居座る、

くすぶる、眠りたくなる。

…死神の眼付き。

シマウマの模様。

雪の落下、

全体が思い浮かぶなら、鳥の足。

顔が見えないままの、反射する、一一街燈。

……この時代の。ためらうことなく、点滅する、

張り付けた切り抜き、一一街燈。



動物たちが出現する

夜でも地獄の明るさがある

大きさや小ささをあげつらったところで

蓋然的併置の〈死〉というロドルフ・ブレダンは

消えない。

風は沈滞する

影は推移し不可解な比喩の壁がつくられる

Danger! Keep out! たとえば『空間処理の革命』

抑制した情愛と嘆賞とに不可欠な外界が揺らぐ

広／場／恐／怖／症／的／な／不／安／